THE CENTRAL REVIEW

大正十五年六月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論

June, 1926

六月號

第四十一年 第六號 第四百六十一號



松屋の子供洋服

松屋の子供洋服はスタイルの可愛いのと品質上趣致の上にも理想的ない、御好評を頂いて居ります。

型……目下、流行の好みを取り入れて一定お揃ひのなかにも一目で可憐なもの

色合……薄グリーン・クリーム・オレンヂ系統

◇レディメード◇

生地　ポプリン……トプラルコ……ヴオイル
ギンガム……富士絹其他各種

一・三〇銭より
一四・〇〇銭迄

松屋呉服店

—東京銀座—



發行六十餘日

六十五版賣盡す（壹版壹千部として計算す）

罪の渦

ゾラ作　井上勇譯

本書はゾラが最も露骨に色情事件を描拔したと云ふ斯有名なテレーズの全譯で併も半面の澁味キビ〳〵した筆致は終に佛國政府の發賣禁止解禁と成り我國の原本輸入禁止を解かしめた

東京神田今川小路二
第百書房
振替東京七〇三七五番



近代脚本叢書

此名作・此名譯・各冊壹圓卅錢

此叢書十卷壹揃は貴下の書齋と腦智の泉を世界的文藝光に輝かす

イプセン作　草野柴二譯　海の夫人　十二版

ショオ作　楠山正雄譯　運命の人　八版

ワイルド作　若月紫蘭譯　サロメ　二十版

ショオ作　和辻哲郎譯　戀をあさる人　五版

ストリンドベリー　島村民藏譯　伯爵令孃　十六版

ハウプトマン作　小野秀雄譯　馭者ヘンシェル　十三版

メーテルリング　若月紫蘭譯　青い鳥　上下二卷　二十版

ホフマンスタール　伊庭孝譯　窓に立てる女　三版

メーテルリング　島村抱月譯　ペリアスとメリサンド　九版

刷新を期圖せる論と作――傳統藝術に新生命を與へたる新舞踊の論と作――家庭及び社會の藝術化を提唱せる兒童劇、ページエントの論と作――權威ある沙翁研究と理想的飜譯――浮世繪の劇史的新研究――常に經世的の立場よりせる文藝論と實踐倫理の獨立的考察等を包含し、わが最近文化史上の活記錄であり、我明日の文化を孕成する精神的母胎でもある。

第一卷　脚本
第二卷　脚本
第三卷　舞踊並に舞踊論
第四卷　飜譯脚本
第五卷　飜譯脚本
第六卷　倫理談、修身訓等
第七卷　芝居話・歷史小說、歷史劇・歷史物に關する論說
第八卷　自分及其周圍
第九卷　藝術と家庭と社會
第十卷　劇に關する論說
十一卷　美辭論稿その他
十二卷　近松論その他

一般人の家庭に於ける趣味の源泉、教養の絕好資料にして眞に不朽の國民的全集

規定及體裁

▼豫約者のみに頒つ。▼申込金五圓▼每月拂金五圓▼一時拂金六拾圓（申込金不要）▼外に送本料を要す▼送本は大正十五年六月より每月一冊十二ヶ月完了。

裝幀は結城素明、平福百穗兩畫伯の意匠、會津秋艸道人の題簽に成り菊判天金上麻布木版手刷。每卷著者小照を始め口繪插畫圖表等を精巧なる木版、三色版、凸版、玻璃版にて概ね十數葉宛插入し、空前の瑰麗本たらしむ。

◎內容見本　申込次第進呈

豫約申込　五月二十八日限

豫約申込所　東京市日本橋區通四丁目五、春陽堂內

發行所　**逍遙選集刊行會**（振替東京一六一一七）

婦人

■紙上珍奇博覽會

珍中の珍
凡そ三十葉！
の精巧な寫
眞は、諸君
の好奇心と
知識慾とを
充すに十分
であらう。

蛇と蛙の料理
二重人格者（1）
二重人格者（2）
女裝の五十男
山本男のチンバ眉
大杜の穴
蚤の夫婦
日本に只一疋の白猿
同文書院出の靴磨き
月六百圓を稼ぐ香嬢
廻る家
太陽の黒點
小ちやな店
小石帶
犬婦同頭
殺人光線
怪物
豚の銅像
陸軍少佐殿
丁髷の床
一日六俵の飯
鳥の巣
雀のおやど
怪童
富士見嚢
踊子姿
妙な看板

■流行の健康性と不健康性……長谷川如是閑

■擬娩と養子……吉田九郎

■二つの微笑……片上伸

■自殺前の絶筆……故朴貞珍
女子高師出の才媛朴氏が謎の自殺の直前に本誌に寄せた隨筆

■子を負ひて……宮地嘉六

■民謠の美人……松川二郎

■妻君業……清澤洌

■遺傳の科學……小酒井光次

六月

■大道無門……里見弴

■子を取りに……徳田秋聲

◆定價七拾錢（振替東京三四）

中

公論

號

要目

■忘れぬ男……前田河廣一郎

■戀を失ふ……川端康成

■金襴戰……白井喬二

◆郵稅貳錢◆

央公論社

宵話

◆「濱松驛」…太田

◆昔の淺草…平田

◆救ひを求むる女…城見

時評

◆工女虐待問題◆裁縫教授を通じて觀た女子教育◆其他…吉野作造

■「月寒の女」まで…下村千秋

■妻の虚榮心から五千圓を詐取した商學士…木庭魁夫

■元秋田藝妓大助の女學院卒業…龜原隱士

■人妻を射殺した四十男の戀…角田恒

■東京驛頭の捨子の影に潛む田園悲劇…伊曾部隆章

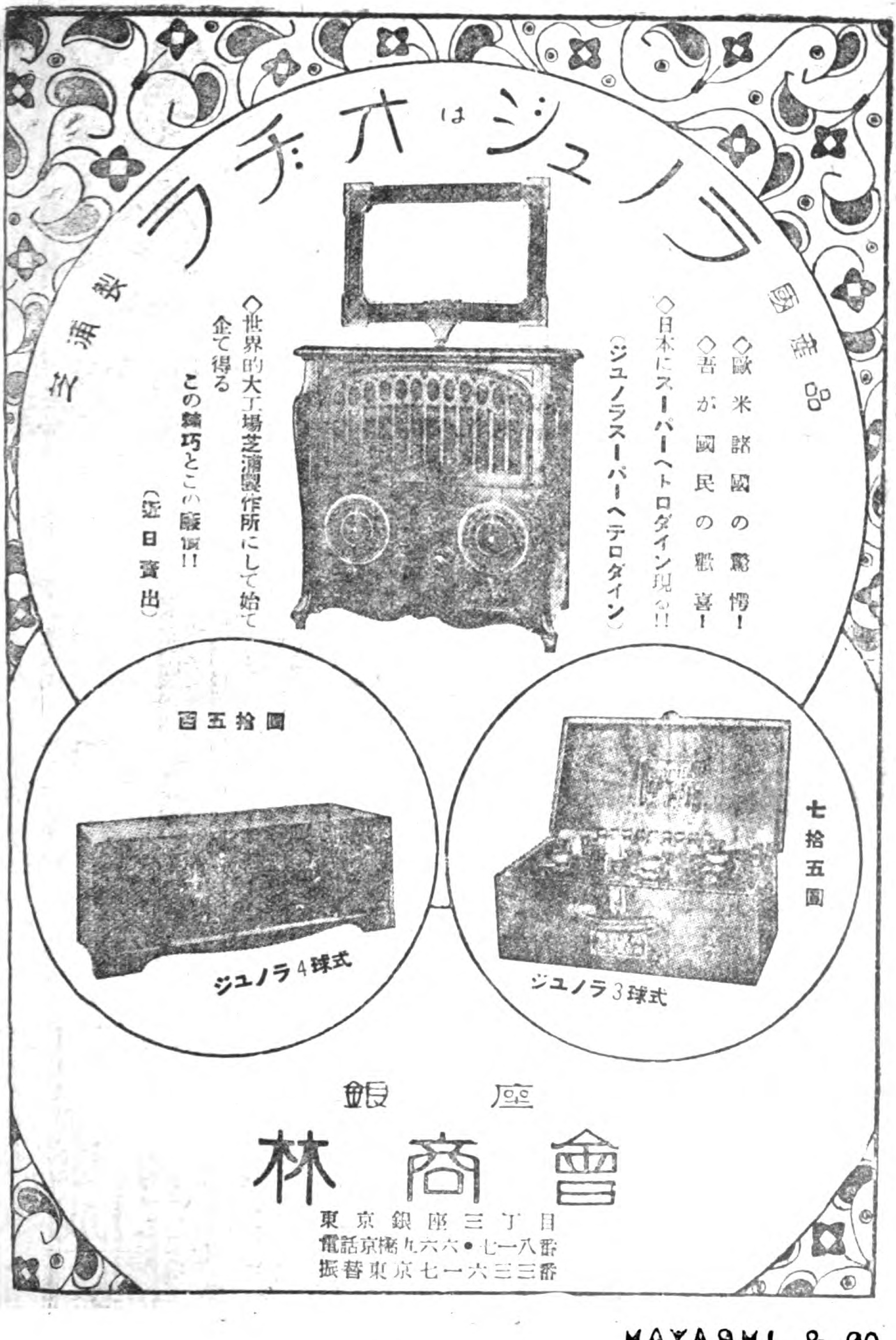
■青木月斗夫人再度の家出…井伊義勇

■締切時間と會見…黑河惣

■錢湯で…山川菊榮

■細君の俸給問題是非

亞米利加の雜誌界で甲論乙駁喧々の物議を醸してゐる「細君に俸給を拂ふ可きや否や」の問題は我國識者の間に如何なる反響を喚び起したか？六十名家の意見に聽け


芝浦製
ラヂオはジュノラ
國產品
◇歐米諸國の驚愕！
◇吾が國民の歡喜！
◇日本にスーパーヘトロダイン現る!!
(ジュノラスーパーヘテロダイン)
◇世界的大工場芝浦製作所にして始て企て得る
この精巧とこの廉價!!
(近日賣出)
百五拾圓
ジュノラ4球式
七拾五圓
ジュノラ3球式
銀座
林商會
東京銀座三丁目
電話京橋九六六・七一八番
振替東京七一六三三番
HAYASHI & CO

糖尿病内服治療劑

ランゲリンに就て

Langerin

糖尿病に對しては從來的確なる藥劑なく、その療法としては單に食餌中より糖分を減ずるか又は全然これを除くの外なかりき。

糖分なき食餌は言ふまでもなく苦痛にして、身體構成の重要成分にして精力の源泉たるこの物質の缺乏は延ひて肉體的幷びに精神的障害の續出を免るゝ能はざりき。

五年以前加奈陀のバンチング氏によりインシユリンの發見せられたることは糖尿病の療法に對し大なる福音を與へ、醫學界に於ける聲價は梅毒に對するサルバルサン發見の當時にも劣らざるものありき。

されどこの天來の福音たるインシユリンは内服するも全く無効にして毎日一乃至三回づゝ一定時刻に注射しこれを久しく繼續するの要あるを遺憾とせり。

然るに過般獨逸のフオルネツト博士は この藥物に一種の抗トリプシン性物質を加へて與ふる時は内服するも良く奏効することを看出せり。

これ乃ちランゲリンにしてその効果は世界各地二百數十の臨床家諸氏により確認せられ特に輕症及中等症に對しては用法簡便にして安全、糖尿病療法の一大進歩なりと報告されたり。

詳細は『糖尿病のランゲリン療法に就て』と題する小册子にあり總代理店宛御申越次第送呈す

其一丸は尿中の糖約四瓦を補償す

三〇丸入……四圓五十錢
一〇〇丸入……十二圓五十錢
有名藥店にあり

獨逸 ザールブルッケン微生物研究所

日本總代理店 東京日本橋區本町 株式會社 田邊元三郎商店


家庭用に
クラブ粉歯磨
含嗽用に
クラブ水歯磨
白く清く
美しく
心を磨け
歯を磨け
便利で徳用な
クラブ煉歯磨
チューブ入



戯雀　　小林古径筆

世界文豪代表作全集

如何に文藝の門外漢でも——これ丈けは讀んで居なければ恥！

豫約募集

內容見本 中越次第進呈

ホーマー代表作	（第一卷）
ダンテ代表作	（第二、三卷）
沙翁代表作	（第四卷）
ミルトン代表作	（第五卷）
ゲーテ代表作	（第六、七卷）
ユーゴー代表作	（第八、九、十卷）
ツルゲネフ代表作	（第十一卷）
イプセン代表作	（第十二卷）
ドストエフスキ代表作	（第十三、四卷）
ゾラ代表作	（第十五卷）
ストリンドベルヒ代表作	（第十六卷）
トルストイ代表作	（第十七卷）
メーテルリンク代表作	（第十八卷）

裝幀校訂極嚴美密　第十八卷　菊判大六五十頁以上

特色

◈各全集の粹を集めたる全集中の全集！

◈飜譯は總て原本による模範的の名譯！

◈裝幀は最善を凝らしたる無比の美本！

切〆 五月卅一日

略規

▲第一回六月中旬配本引續每月一冊宛▲會費每月四圓五十錢一時拂七十六圓に割引▲申込金四圓五十錢（最終月會費に充當す）▲豫約會員にのみ頒つ

顧問　內田魯庵　中村吉藏　昇曙夢　吉江喬松　本間久雄

飜譯者　內田魯庵　昇曙夢　中村吉藏　高原延雄　中山昌樹　中島清　宮原晃一郎　山內封介　井上勇　中村白葉　水野亮　木內打魚　布施延雄

◇裝幀　柳瀨正夢

苟も文化人たる體面上——これ丈けは備へて置かなければ恥！

東京小石川……　世界文豪代表作全集刊行會　振替東京三六五八九番　電話小石川一九七……

豫約會員募集◇會費毎月一圓六十錢◇内容見本進呈（端書に本誌御覽の旨明記ありたし）

日本名著全集

第一期出版

校訂繪入 江戸文藝部

□どうしたら古來の名作傑作を手輕に實用と趣味とを兼備したものとして何人の書棚にもあらしめ得べきか、實に其目的を完全に實現したのが此全集であります。

□試に、第一期出版の「江戸文藝部」に就て御覽下さい。あの彪然たる大長篇の「八犬傳」を三册に收め、又繪本「田舍源氏」の全文全畫を原本の形式その儘復刻せる如き、更に又門外不出、未飜刻の珍籍を收録せる如き、所謂斯界の通人をも驚心駭目せしむるに足る幾多の空前の特色はここに數へ切れぬ程澤山あります。

□ナゼさういふ事が出來たかと云ふと、最新式MH式オフセツト印刷を應用して全卷悉く縮寫製版によつたからで印刷に些のムラもなく普通活版や凸版印刷ではマネの出來ぬ色々の優秀さがあります。しかも

□特製總クロース天金上等紙質の新型四百七十頁から七百頁前後もある挿繪滿載の本を一ケ月一圓六十錢といふ安い會費で頒布するのであります。

1 2 西鶴名作集 二册
3 芭蕉全集
4 5 近松名作集 二册
6 7 浄瑠璃名作集 二册
8 歌舞伎脚本集
9 浮世草子集
10 怪談名作集
11 黄表紙廿二種
12 洒落本集
13 讀本集
14 滑稽本集
15 人情本集
16 17 18 里見八犬傳 三册
19 膝栗毛其他
20 21 修紫田舍源氏 二册
22 23 和文和歌集 二册
24 俳文俳句集
25 狂文狂歌集
26 川柳雜俳集

（贊援）五十嵐力　沼波瓊音　内田魯庵　幸田露伴　三田村鳶魚

（監修解題校訂）贄川他石　西原柳雨　窪田空穗　黑木勘藏　山口剛　守隨憲治

□これだけの本が、悉く抄本の類ではなく、全文を收めたものであり、而も一々原本に依つて校合し、挿畫まで完全に覆刻して難訓には深切に振假名を附し假名に適字をあてるなど所謂覆刻本として到らざるなき完本です。

申込締切 六月十六日限

▽申込金一圓▽毎月拂一圓六十錢▽二回拂廿圓▽一回拂卅九圓（全國到處送料各八錢）但し申込金は全廿六册に割當つるを以て一回拂でも二回拂でも毎月拂でも申受く。▽八月より配本◇新型巾三寸五分。天地五寸五分 本綴天金總布特製

申込所 東京市日本橋馬喰町 振替東京一八四四番 興文社

本全集の飜譯者

東京高等師範教授　石川林四郎
慶應義塾大學教授　戸川秋骨
山口高等學校教授　戸澤正保
學習院教授　落合貞三郎
廣島高等學校教授　大谷繞石
陸軍大學教授　岡田哲藏
廣島高等師範教授　金子健二
女子學習院教授　田部隆次
第二高等學校教授　土井晩翠
廣島高等師範教授　小日向定次郎

豫約締切　六月三日

◇大正十五年七月より向ふ十七ヶ月を以て完了。
◇豫約申込金四圓八十錢、この申込金は最終の會費に充てます。
◇會費　毎月拂　一ヶ月分　四圓八十錢　一時拂　十七册分　七十八圓
◇送本料は一册に付市內十二錢、市外廿七錢。
◇各册菊判六百數十頁、五號活字組。裝幀は背と四方の角とを革でかため金箔模樣を置き、平は獨逸特製マーブル紙を用ひた本書房獨得の堅牢な特製本です。

◇本全集の執筆者は御覽の通り英文學操觚界の名流ばかりで、各造詣の深い學者として又文筆家として現に夫々活動してゐられますが、尙悉く往年東大文科にあつて親しく小泉先生の薫育を受けられた方々であります。で今回執筆の動機も一は舊師に對する感恩報謝の念と、一は我國の有する此世界的文豪の名篇を廣く一般に頒たうといふ心組からであります。從つて執筆諸家の努力と意氣とは實に涙ぐましいほどで、眞に良心ある飜譯とはこのことでありませう。

◇本全集は邦譯全集ではありますが、併し單に今までに英文で發表されてゐるものを飜譯してそれを纒めたといふやうな在來の飜譯全集とは違ひます。今日容易に手に入れ難い絶版本から、散逸せる斷簡、從來深く秘められてゐる講義の資料まで悉く蒐集して、その苦心の結晶を特にこの全集に收めたのであります。かういふ珍重なものを本全集に收めたといふ事は正に世界に誇り得るところであります。

◇美しい內容は美しい器に盛らねばなりません。今この世界的全集の刊行に當つて、本書房は畢生の努力を傾倒し、世界的美本を座右に送る準備を調へました。恐らく此十七卷の全集は天下の讀書子の書架の中にあつて、燦然と光り輝くことでありませう。

◇如何なる點から見るも近時稀に見る立派な全集であると信じます。締切は迫つて居ります。この千載一遇の好機を御見逃しないように願ひます。

【厨川白村氏】　文豪としての小泉先生は世界が之を知つてゐる。多少讀書の趣味を解し或は[illegible]も日本の存在を知れる外國人にして、先生の名を知らぬものは殆んどなからう。知らぬのは日本人ばかりだ。教育ありと稱する日本人が英米へ行つて、かの國人からヘルン先生、即ち小泉先生の事を訊かれて間誤ついた滑稽を私は幾度も見もし聞きもした。

【新村出氏】　小泉先生の邦譯全集刊行の擧は、文界の慶事・近來の快事之に過ぎたるはなからんと存候。

【佐藤春夫氏】　譯者たちはいづれも申分ない諸家で、その顔ぶれを見ただけでも僕はもう十分に滿足してゐるのです。

【芥川龍之介氏】　小泉先生の仕事は西洋人に日本を敎へられたばかりでなく、我々日本人自身にも日本を敎へられたことにあると思ひます。少くとも小生などは大分その御かげに預りました。

【內田魯庵氏】　十數年前米國のある新聞で十九世紀末の十人文豪を公衆の投票で選んだ處、ヘルンは第五位か第六位に登された。米人の投票であるから自然米國の文豪に多數入選したが、その中にあつて、ヘルンが外國人――それもその當時米人が最も嫌つた日本の國籍人でありながら、米人の偶像視するポオやホーソンとほぼ同數の投票があつたといふは驚異である。之を以てもヘンの世界的地位を知るべきで、ヘルンの全集が各國語に飜譯された中に、肝腎のその第二の祖國たる日本文に今まで飜譯されなかつたといふのは不思議である。今やその門下の諸君に依つて飜譯さるると聞くは誠に近時の快心事である。

【坪內逍遙氏】　故小泉八雲氏の著書は長く東西の文學に特筆すべきものでありませう。

キング

是非！見よ

筆者悉く當代一流の

◆平凡の中に非凡がある（成功談）……大迫元繁
◆斷崖にぶら下つた男……渡部信
◆旨い物は宵に食へ（趣味科學）……澤村眞
◆古今東西逸話の泉
◆土を尊べ……留岡幸助
◆常陸山と梅ケ谷（決死の大試合）
◆唖の少年が世界最初のラヂオ放送
◆神の武士ゴルドン（泰西偉人傳）

特別讀物

◇村の英雄……（加宮貴一）
◇柿泥棒……（邑井貞吉）
◇鬼面の畫師……（大倉桃郎）
◇奇怪な骨瓶……（松本芳山）
◇悲みに咲く花（風間清）

グラフ

▼古今風流鑑
▼名士愛嬌話
▼家庭セクション
▼古今高僧物語
▼大人物出世の道

之こそ眞の國民雜誌

大發展！ 賣れる〳〵到る處引張り凧

◆物化と文化と靈化……文學博士 常盤大定
◆恩師乃木將軍を憶ふ……服部純雄
◆模倣と感化（新道話）……小酒井不木
◆一太郎の母を訪ねて……代議士 小久保喜七

◆海に面した窓（創作）……田山花袋
◆虚名（創作）……正宗白鳥
◆第一歩（長篇小說）……佐藤紅綠
◆鳥邊山右門（錦王秘話）……佐々木味津三
◆親鳥子鳥（滑稽小說）……佐々木邦
◆快俠不知火（幕末秘史）……前田曙山
◆藤娘（長篇小說）……小杉天外
◆劍難女難（武俠小說）……吉川英治
◆若き日（家庭小說）……中村武羅夫
◆鐵腕響けば（冒險探偵）……阿武天風
◆悲願千人斬（熱血小說）……下村悦夫

◆定價金五十錢 送料三錢◆

東京本郷 大日本雄辯會講談社 （振替東京三九三〇）

大奮發の六月號

破天荒◎◎◎大計畫！

▲二度と得られぬ一家の珍寶！

▲全部オフセット美術印刷、上等紙使用。

▲努力を惜まず、費用を惜まず、半歳に亘る苦心努力の結晶！

◎この內容◎

▲見逃せば大損！

▲趣味修養の寶典…賣切れぬ中に早くお求めあれ

（特別大附錄）各界大家名作展覽會

文豪百字文
芳賀矢一　田中花袋　小杉天外　杉村楚人冠　上司小剣　中村吉蔵　笹川臨風　德田秋聲　伊原青々園　小川未明　菊池寛　正宗白鳥

一流書伯名筆競べ
竹内栖鳳　小室翠雲　荒木十畝　結城素明　平福百穂　小杉未醒　山本春擧　西山翠嶂

一流俳人名吟揃ひ
村上鬼城　武田鶯塘　長谷川零餘子　高濱虚子　星野麥人　老鼠堂機一　勝峯晋風　臼田亞浪　沼波瓊音　大谷繞石　矢田挿雲　荻原井泉水　河東碧梧桐

書道大家名筆鑑
中村不折　高田竹山　井原雲涯　丹羽海鶴　比田井天來　尾上八郎　辻香塢　阪正臣
比田井小琴　中村春堂　松田南溟　山口蕙石　久志本梅叟　山口半峰　近藤雪竹　岡山高蔭　西脇呉石

名人達人逸傳公開
遊佐幸平　阿波研造　藤間靜枝　赤堀米吉　中川亀三郎　喜多六平太　豐田勝穎　嘉納治五郎

一口落語名人揃ひ
三桝家小勝　柳家三語樓　柳家小さん
三遊亭圓右　柳亭左樂　春風亭柳枝　蝶花樓馬樂　談洲樓燕枝　桂文治　林家正藏

一流選手競技秘訣
納戸德重　繩田何門　丸三郎　淺野均一　織田幹雄　三木義雄　上田綺一　溝川末吉　森岡佐京生　沖田芳夫

歌道大家玉詠集
齋藤茂吉　土岐善麿　金子薫園
佐々木信綱　前田夕暮　石榑千亦　半田良平　生田蝶介　尾上柴舟　太田水穂　與謝野晶子　若山牧水

名士大家風流競べ
秋野孝道　古島一雄　伊東忠太　赤司鷹一郎　高田早苗　嘉悅孝子　堀内文次郎　下田歌子　佐々木安五郎　高橋是清　一戸兵衛　田中光顯　棚橋絢子　中村歌右衛門

川柳名吟
井上剣花坊　近藤飴ン坊　高木角戀坊　阪井久良岐　矢野錦浪　京口文渙　篠原春雨

民衆文藝の精粹
添田啞蟬坊　平山芦江　鶯亭金升　長谷川蝶松　弘田知秋

現代名士寸鐵數調
西田博太郎　阪谷芳郎　田健治郎　本野久子　内藤久寛　山崎亀吉

一流漫畫家腕競べ
西野惠之助　南條文雄　石黒忠悳　牧野元次郎　平沼淑郎
池部鈞　岡本一平　北澤樂天　清水對岳坊　前川千帆　田中比左良　水島爾保布　麻生豐　谷脇素文

詩壇大家一人一薦
北原白秋　野口米次郎　野口雨情　三木露風　河井醉茗　室生犀星　西條八十

大家

洋品土産
◇……矢島婦美子
◇……草間貞男
◇……西條八十
◇……和泉千代子

（表紙）……小室翠雲
（口繪）……平井楳仙
（口繪）……藤島武二
畫報……他三十余頁の大

◆人間味（長篇小說）……村上浪六
◆山番のゆめ（お伽噺）……大木雄三
◆手紙無筆（滑稽落語）……瀧川鯉かん

各地書店にあり


書齋の人に
おすゝめする
サクラビール
と
良きサンドヰッチ
簡素なうちに
消化し易き榮養と
淨血の強き藥效
サクラ
生ビール
BEER
TEIKOFU BREWERY Co. LTD.
SUNSHINE
帝國麥酒株式會社

大正十五年

中央公論

六月一日發行

六月號

第四十一年第六號

第四百六十一號

新自由主義の提唱

『企業と社會』創刊號に載せられた上田貞次郎博士の「新自由主義の必要」なる論文は、近頃頗る注目に値するものだと思ふ。社會主義的思想の旺盛を極むる今日、所謂自由主義に還るべきの提説に傾聽せよと云つたら、氣早の青年諸君は理由も聞かずに立腹されるかも知れない。併し日本の社會主義も上田博士の提唱を尤もと思ふ程に周到な省察を自ら加ふる樣にならなければ、實際のところまだ生硬の域を脫したものとは謂へない。

上田博士は曰ふ、明治初期の民間政治運動は、新政府に志を得ざりし不平士族と、多年武士に壓迫されて居つた地方農村の不平地主とに依て企てられた。從て其の目的は主義の實現よりも寧ろ政權分散の要求に在つた。故に斯くして出來た政黨が、民間の利益希望を代表するものでなくて、單純なる政權爭奪の機關に過ぎぬは怪むに足らぬ。是れ今日の政黨が仍然として國利民福と沒交涉なる所以であると。

博士又曰ふ、この狀態は併し普選の實施で變るだらう。之に由て既成政黨の間に樣々の分解作用の起ることが期待され、結局に於て一方の極端に保守黨が起り他方の極端に社會黨が起るだらうが、併しその中間に出來る新自由主義を標榜する政黨が、一番有力なものとなるだらう。又斯くなることは希望すべきことでもあると。

新自由主義を標榜する中間黨が大なる勢力を占むべしとする上田博士の觀測の當否は別として、斯くなることを博士の希望せらるゝ趣旨が、實に吾人の傾聽に値する所だと思ふのである。何故に今後の日本は新自由主義の盛行を必要とするか。抑も博士の所謂新自由主義とは何か。

博士新自由主義を解して曰く、原則として自由競爭の自然的調節力に依賴せんとするの主義なりと。併し文字の定義はどうでもいゝ。肝要な問題は、何故に今日の日本が之を必要とするかの點である。博士曰ふ、維新開國の當初我々の先輩ははじめて世界を見て彼我文物の差の餘りに大なるに驚いた。如何ともして早く彼の如くならんを欲するも、民智未だ高からず一般國民は更に爲すべき術を知らない。斯くして已むなく一切の計畫立案は專ら政府の之を作すに委するの外はない。其の結果は如何。即ち國家の力を以て資本的企業の樹立を促し、資

本主義の勃興を助長したことではないか。之が爲に我國の文物は非常に發達したのではあつたが、また其の傍には濃厚なる保護政策の餘弊の途に拔き難きものもないではない。斯くして今日は寧ろ此の保護政策の餘弊を一掃すべき學說を要求する時代となつたと。

博士は今日なほこの保護政策を支持する學說あることを指摘し、其の妄を辨じて居る。帝國産業の國際的發展の爲には國家の保護が必要だといふ說は、屢々說かれ又實際に於て現に行はれても居るが、博士が、その直接の結果の非社會的なることと、帝國産業の發展といふ觀點からしても結局に於てそが不利なることとを指摘されたのは、門外淡たる我々にも首肯れる。こゝまではいゝ。さて保護政策は不可としてその先きをどうするか。この問題に逢着して博士の意見は最近流行の社會主義と衝突する。即ち博士は社會主義者の唱ふる如く一朝の革命によつて資本主義の社會的秩序を一變することは、事實不可能であり且つ得策でもないと主張さるるからである。

私共の觀る所では、博士の立說の根據は次の點にあるらしい。企業の社會化はよろしい。併し資本主義的企業を廢して之を國有又は公營にしたとて、それが直に企業の社會化ではない。そはたゞ社會化の手段だ。畢竟外形に過ぎず精神ではない。國有又は公營に依て社會化の目的を本當に達するには、企業經營そのものに就て國民がもつと訓練されてゐなければならぬ。而して能率の高い且正直な經營の仕方を教へるものは自由主義でなくて何であらう。日本は今日まで餘りに保護政策に毒せられ、自由主義の訓練を受くる機會を惠まれなかつた。この訓練を受けずに一足飛びに社會主義に赴くのは危險千萬である。そは『徒らに經營の能率を引下げ且政治上の腐敗を招ぐの結果に終るべき』を以てである。『若し他日社會主義的産業組織が實現せらるゝ時ありとすれば、それは新自由主義の洗禮によつて中央及地方の自治機關が充分健全になつた後でなければならぬ』。

斯く解するを誤なしとせば、博士の提說は必しも理論上社會主義的改造論を排斥するものではないらしく、日本當面の問題として、自由主義的訓練の機會を國民に提供すべしとの論と觀られぬこともない。孰れにしても、日本獨特の國狀を背景として社會主義的改造觀がその實際政策の綱目中に先づ以て何を顧慮すべきか、を暗示せる論文として、上川博士のこの說は敵も味方も大に味ふべき必要あるを思ふのである。

中央公論



第四十一年第六號
六月號
第四百六十一號

文學の方法論上二三の要點に就いての考察

片上伸

1

およそ文學の研究に、方法論がなくてもよいといふことはない筈である。こゝで文學の研究といふのは、專ら文學の發達を中心題目として、歷史的の考察に重きを置くのであるが、その中には、普通にいふところの文學批評をも、ある程度までは含ませて考へてもよい。とにかく文學の研究乃至考察に、方法論がなくてはならないのは、今さら言ふまでもないのだが、その方法論といふものに就いて、私たちはどのくらゐ卒業して來てゐるであらうか。文學批評上の問題

は、結局大抵は文學研究の方法論の問題になるやうであるし、いつの時代にも絶えない文學批評上の論爭のあとを追ると、殆どそのすべては文學研究法の模索のあとにほかならないやうに見えるといふことは、いつかもほかのところで書いたことがある。とにかく私たちの前には考察すべき問題がある。私たちはそれに對して、その問題を解くに最も適當な方法を持たなければならない。勿論問題あつての方法であるのだから、方法はその問題の性質に協ふべきである。そこで次ぎにはその問題の性質をどう解釋するかといふことが起つて來る。要するに、その問題の性質の解釋に從つて、一定の原則を立て、その原則に基いて研究考察するのが方法だといふことになる。もしこゝに一つの問題について、考察上の新らしい方法が出て來たとすれば、それはつまり、その研究の題目について、これまで全く氣づかれなかつたり輕く見られてゐたやうな方面の問題に、特に新らしく注目するやうになつたといふことである。而して、問題の性質の解釋に從つて、一定の原則を立て、その原則に基いて研究考察するのが方法であると言つたが、その問題の性質の解釋は、結局それを考察する人の人生觀から出發する。方法論はつまるところ人生觀の問題である。殊に今日の如く、社會思想上の問題が鋭敏に感ぜられずにはゐないやうな時に於いては、文學も又一つの社會現象として、それの取扱ひかたが新たに問題とならざるを得ない。即ち文學の研究が、社會生活の法則の研究と密接な關係交渉を有するものであることを知らなければならない。勿論社會生活の法則の研究といふことも、今日ではまだ新らしい學問である。それは文學と交渉の多い他の科學、美學とか心理學とか言語學とかいふものがさうであるのと變りはない。しかしとにかくその新らしい多くの社會學說のうちから、文學の研究は自分に役立つ脚場を、少なくとも、その出立點を見つけて來なければならない。多元論的の立ち場からでは結局綜合を求める心に落ち着きが與へられない。少なくとも文學といふ特殊の題目に關するかぎり、その批判考察に一つの綜合を豫期しがたいといふことは困るのである。文學の研究には、一元論

的な立ち場が選ばれなければならない。一元論的立場のうちで、比較的廣い見解を持ち、リヤリズムの精神に適應するものは辨證法的唯物觀である。少なくとも、文學を一つの社會的現象として見る場合に、その觀かた、批評の態度、研究の方法の土臺として、出立點として、最も一般的な根本的な原則として役立つべきものはこれである。辨證法的唯物觀の立ち場から、文藝を解釋說明せうとした、恐らくは最初の人として、少なくともその最も重要な人としては、プレハノフをあげなければなるまい。プレハノフの文藝論は文學の方法論にとつて幾多の重要な基礎觀念を與へるとともに、更にまた少なからぬ問題を提出してゐる。

2

プレハノフの說いた文藝上の問題をおよそ二つに分けると、その一つは美感の發生とその性質の問題となり、今一つは文藝の特質とその發達の問題となる。美感の發生が生物學の立ち場から說明せられたことは知られてゐるが、それだけですべての美感を說明しつくすことは出來ない。たとへば狩獵時代の裝飾が專ら動物の生活から取られ、農業時代の裝飾が專ら植物の生活から取られるといふやうな事實は、生物學の法則だけでこれを說明することは出來ないとせられてゐる。ある種族の婦人は、身動きも出來ないほどに鐵製の裝身具を身にまとひ、また他の種族の婦人は、殆ど步けないほどの穿きものを穿くことを以て、何れも美しいと考へてゐたのであるが、かやうな事實は、社會學的方法によつて說明せられるほかはない。さういふ昔の社會では、階級的な區別の感じを明らかにするために役立つものが美しいと考へられたのであつて、距離の感情が美感を支配するといふことになる。ある社會なりある階級なりで、ある時代に支配力をもつてゐる美の理想は、人類の發達の生物學的條件に基いてゐるとともに、社會階級の發生と存在との歷史的條件

にも依るところがある。人種は同じであつても、さまざまの異なる國民の間に、美感はそれぞれ同じではないとすれば、この區別の原因は生物學以外に求めるほかはない。美感の構成に反對律の心理法則が重要な役目をしてゐることは既に世間に知られてゐる通りであるが、その反對律が働いて美感を構成する場合に、これに具體的內容を與へるものは、社會的條件である。田園の風光をうたつた十八世紀末のイギリスの詩や、感傷的な十八世紀のイギリス小說などのよろこばれたのは、人工的な都會生活や宮廷生活を中心にした文學への對立であつたには相違ないが、その一面では、當時の都會生活の發達や有產階級の成長といふやうな社會的條件によつて裏附けられてゐたことを見のがすわけに行かない。この反對律の心理法則が美感の發生と重要な關係を有することは事實だが、それとともに、何故にAの時代の社會ではAの現象を美しいと思ひ、Bの時代の社會ではBの現象を美しいと考へるかといふことに就いては、どうしてもその社會的條件によつて說明を加へるほかはないのである。而して美感の發生が生物學的に說明せられようとも社會學的に說明せられようとも、何れにしても美しいものは結局無用ではなく、社會人の生存に有用なものである點に變りはない。勿論、すべての有用なものが美しいとはいへないが、美しいものは必ず何等かの意味で自然と社會との中に生存する社會人のために有用なものである。尤もこの有用といふ性質は、美しいものから直接に感受せられることはあまりない。直接に感受せられるものは樂しみでありよろこびであらうが、その底に必ず有用といふ性質を含んでゐるのである。この見かたは明らかに功利說である。文藝は結局ひろい意味での——社會生活のためといふ意味での功利說の立ち場から見られなければならないものである。

3

美感の發生とその性質の問題を考へるためには、およそ上に述べたやうな見かたに依るのであるが、次ぎに文藝の特質を決定する要因、その發達進化を決定する要因に就いて考へると、こゝでは專ら社會學的方法に依らなければならない。

文藝の特質とその發達とを決定する力として、第一に地理的環境といふ要因があげられる。地理的環境が文藝の上に直接に影響するといふ事實が、目に見えてあらはれてゐるといふやうなことはあまりあるまい。地理的環境が文藝の特質とその發達との上に及ぼす影響は、間接的なものである。文藝に直接影響を及ぼすものは社會的關係であるが、その社會的關係は、その社會に於ける生產力の狀態を土臺として成り立つものである。而してその生產力の狀態こそ、はじめてその社會の地理的環境によつて支配せられてゐるのである。文藝に及ぼす地理的環境の影響は、かやうにして間接的である。地理的環境から最も多く直接の影響を受けさうに見える風景畫のやうなものでさへ、その發達の上に直接の影響を與へるものはその社會の心理的傾向の變遷であつて、その社會の心理的傾向の變遷は、社會の人間關係の變遷に伴ひ、その社會的關係の變遷は、生產力の狀態に依り、而して生產力の狀態は必ず多少とも地理的環境によつて支配せられるといふわけである。

文藝の發達の上で、一般に第一の重要な力として考へられてゐるものは、天才といふ個人である。文藝の創造者である。社會學的方法の立ち場から言へば、文藝の發達に於ける天才の意義は、ある社會なりある階級なりの最も有力な文藝上の傾向に最もすぐれた表現を與へた人間であるといふところに歸する。天才はある時代のある社會もしくはある階級を支配する文藝上の傾向を最もすぐれて表現するものであるが、その文藝上の傾向は、かりにその天才が出現しなかつたとしても、ある程度まで文藝の上に具體現せられるものであつて、たゞその表現のしかたが天才の場合と比べると不十分だといふことになる。この問題についてはこゝではこれだけにして置いて、後で詳しく說く。

この天才の問題とあはせて、文藝の特質とその發達を決定する力としては、外國の文藝の影響があげられる。しかしたがら、この影響は、それを與へる國と受ける國との間に存立する社會的關係の類似に正比例するものであつて、この類似の存在しないところでは、影響も全くあり得ない。また一方の國民が他方の國民に比べて文化的に後れてゐる場合には、その後れてゐる方からは、文藝上の形式内容ともにその相手に對して何等寄與することは出來ない。もし社會的存在の狀態が相如く場合には、その影響は相互的であり得る。要するに、適當な類似の社會的條件が存在してゐる場合に、はじめて文藝上の影響があり得るのであつて、文藝上の特質やその發達を決定する要因としては、外國の影響といふものは第二次的なものである。

4

文藝の本質なりその發達の理法なりを說明するものは、地理的環境でもなく、天才でもなく、外國文藝の影響でもなく、社會學的方法論によると、それは經濟力であらねばならぬ。そこで經濟と文藝との關係交渉の問題が生ずる。

この二つのものの間に直接の關係が成立つのは、極めて幼稚な原始的な文明の程度に於いてである。その社會では、人間の生產活動が直ちにその世界觀にその藝術的趣味識の上に影響する。その時代の社會に於ける最も重要な藝術とも見るべき舞踏は、生產活動をそのまま再現することが多い。狩獵時代に於いて殊にさうである。階級に分れた文明の社會では、藝術その他の觀念形體へ經濟が直接に影響することは殆ど見られない。この社會では、この二つのものを結びつけるのは社會人の心理である。即ち階級心理である。謂はゆる上部構造と基礎構造との關係を、プレハノフに從つて述べて見ると、一、生產力の狀態。二、生產力の狀態によつて限定せられた經濟的關係。三、その經濟的基礎の上に發生し

た社會的政治上の組織。四、一部分は直接に經濟によつて、一部分はその經濟の上に發生した社會的政治上の組織によつて定められるところの、社會人の心理。五、この心理の特性を反映するさまざまの觀念形體（「マルクシズムの根本問題」）となる。この一元論的公式は言ふまでもなく唯物論に立脚するものであつて、藝術と經濟との、關係は、これを要するに經濟――階級――階級心理――藝術といふ形になる。別の言葉で言へば、文藝の上には社會心理が表現せられる。社會心理の特質は、社會を構成する人間の相互の關係の特性によつて決定せられる。而して社會を構成する人間相互の關係は、つまるところ社會の生產力の發達の程度による。この社會の生產力の發達に於ける著しい變化は、人間相互の社會的關係の變化を伴ひ、從つてまた社會心理の變化を伴ふことになる。社會心理の上に生ずる變動は、更にまた文藝の上に多少とも反映することになる。かやうにして、原始社會に於いても文明社會に於いても、藝術は階級的の性質を帶びて、ある國のある時代の文藝の特質といふものも、幾世代に亘つてのそれの發達進化も、要するに階級心理、階級爭鬪乃至階級交替の光りに照してはじめて正しく了解が出來るといふことになる。

文藝が人生の反映であるといふのは間違ではないにしても、確ではない。文藝が人生を、反映するといふがそれはどんな風に行なはれるのであるかといふことを知るためには、人生そのものの機構を知らなければならない。文明の社會では、階級の爭鬪は、その人生といふ機構の中で最も重要な契機の一つを成してゐる。從つてこの契機について十分な理解と知識とを持つことによつて、はじめてその社會に於ける精神文化について說明を加へることが出來る。而してその階級爭鬪が激しくなればなるほど、それが相爭ふ階級の心理に及ぼす影響はそれだけ強烈になつて來るのであつて、階級に分裂してゐる社の觀念形體を研究せうとするものは、この階級爭鬪の事實を十分に見きはめなければならない。この事實を了解することが出來ず、また了解することを欲しないものは、文藝に對する根本的の解釋說明が出來ないこと

になる。歴史は要するに幾世代に亘る各方面の階級爭鬪から成り立つてゐるのである。この爭鬪の事實を明らかに理解しなくては、眞に「自覺ある文藝批評家」ではあり得ないと、プレハノフは言つてゐる。

5

文藝の階級性は、文藝家自から往々にしてその屬するところの階級に反抗し、これを輕蔑するといふやうな事實から、否定せられる性質のものではない。文藝家自からその周圍と分裂背離することがあるといふのは、文藝の超階級性を反證したりすることにはならない。鋭敏多感、少數の選ばれたるものを以て自から任ずる一部の詩文人が、鈍感な周圍の俗衆に對して心から輕蔑と憎惡との感情を抱くといふやうな事實は、昔から今に至るまで、よくどこの國の文壇にも見られるところであるのだが、その輕蔑せられる相手がブルジュアジーであれば、それを輕蔑する少數の貴族的な鋭敏多感の人々は、一般俗衆に更に輪をかけたブルジュアジー的心理の所有者であるといふやうな例は少なくない。十九世紀末から二十世紀へかけての超人的貴族的個人主義のモダーニズムの詩人などは、一面當時のブルジュアジーに反抗しこれを輕蔑し切つてゐるやうに見えてゐて、實はこの社會の階級心理を極端に高調したものであつたと言つてよいのである。しかし、文藝が階級的であるとするなら、文藝の發達の上で、ある時代には「人生のための藝術」說が行はれ、また他の時代には「藝術のための藝術」說が行はれるといふ事實をも、その見地から考察するとが出來なければならない。文藝家が周圍の社會的環境と密接な生命のある交渉を持つてゐると感ずる場合には、文藝は自のづから人生に奉仕してそれに影響を與へるものとして考へられる。その場合その文藝が奉仕するところの社會が進歩的であるか反動的であるかは必ずしも問はない。それは勿論文藝上の作品に思想觀念としてあらはされるが、とにかく反動的でも進歩的で

も、文藝家が周圍の社會的環境と密接な交渉を持つてゐて、文藝が人生に奉仕しそれに影響を與へるものであると考へる點に於ては變りはない。これに反して、文藝家とその周圍の社會的環境との間に分裂背離が生じ、文藝家はその周圍の社會的環境を輕蔑して、文藝を以て奉仕するに値ひしないものと見るやうな場合には「藝術のための藝術」説が唱へられることになる。或ひはまた、ある支配的な階級に對して、他の階級が頭を持ち上げて來るやうな場合にも、「藝術のための藝術」説に傾く。即ち今までの支配階級の優勢を持續するために危險な觀念や傾向が、文藝の中へ侵入して來ることを防止するといふのが、その場合に於ける藝術至上説の使命となるのである。この場合も、ひろい意味では、文藝とその周圍との不一致と言へないこともないのであるが、前の場合は專ら社會生活に對する冷淡無頓着の態度を取り、後の場合は專ら意識的に反動的な態度をとることになる（プレハノフ「藝術と社會生活」）。無産階級的觀念形態の侵入に對する今までの文藝家の態度は、知らず識らずの間にこの意味で藝術至上主義的になつてをり、また從つて反動的になつてゐるものと見られる理由がある。

一つの階級が爛熟して衰滅に近づくと、その階級の觀念形態は生命を失ひ、その階級の生活から生れた文藝は衰退する。階級の衰退期に生れる文藝は廢頽的である。文藝創造の依りどころがその階級の生命のうちに見出されなくなるにつれて、文藝家はおのづから自分自身のうちへ立てこもつて行く。自分の心の中へ閉ぢこもるやうになる。而して、既に自分自身といふものの中に、唯一の現實性（實感、生きた興味、眞實などといはれるもの）を見出すといふやうになつて來れば、その自分自身とそれの周圍の社會との間に、一定の法則による客觀的な關係交渉が成り立つといふやうなことは、考へも及ばず、かりに考へても、切實には心に響かなくなつてしまふ。客觀的な周圍の社會といふやうなものは、たとひ思ひ浮べられても、たゞわづかに自分自身といふものに依存する限りに於いて眞實である。この場合に於い

て文藝家は主我的である。この場合神秘家になつてしまふといふ說も、つまりは主我的心境に沒入することの意味に解釋することが出來るであらう。廢頽期の文藝の今一つの特色は、無思想的といふことである。詩歌や繪畫の方面で思想や物語が極端に排斥せられるのは、この現象の一つのあらはれである。

6

文學の社會學的方法による考察は、上に述べた問題や事實のほかに、まだいくらも取り扱はねばならない問題や事實を持つてゐるのであるが、社會學的方法論といふものも、今日ではまだ十分な統一ある組み立てが出來上つてゐるとは言へない狀態に在る。上にあげた問題や事實だけに就いて見ても、その中には、理論としてもまだまだこれからの研究に待たなければならないものが少くない。しかしながら、それ等のすべての問題や事實を通じて、この方法論の立ち場から考へられなければならない根本の題目がある。それは、一つの社會現象としての文學の考察が行はれるためには、社會の生存狀態と、社會の意識と、この二つのものに就いて、それぞれの性質と、その二つの間の關係交渉とが了解せられなければならないといふことである。上部構造としての觀念の性質は何であるか。社會學的方法論の基礎を成してゐる決定論は、どのくらゐまでその力を持つてゐるか。かういふ問題も考へられなければならない。今日では、單に大づかみに社會と文學との關係といふやうな考へかたではすまなくなつてゐる。文學が成立してゐるところの社會は、いろいろの集團から組み立てられてゐるのであるが、その中で、直接文學と密接な關係交渉を有する知識階級、更に狹くは文壇の社會的性質は如何。文學を中心とする生活の上に影響刺戟を與へるところのいろいろの事情、これに反應する作者の個性の意義、讀者としての社會、これ等の問題は、いづれもこれからの考察によつて明らかにせられなければな

らないものである。社會學的方法論の基礎觀念は、「生存が意識を決定する」といふことである。社會の生存狀態が社會の意識を決定するといふことである。しかしその社會の生存狀態の決定力と見るべきものは、どういふ形をとつてあらはれて來るのであるか。これが一つの問題である。而してまた、その決定的な作用に對しては、社會の意識はどういふ風にこれに應接してゐるのであるか。これが今一つの問題である。社會的生存と社會的意識との內容を明らかにして、この兩者の關係を明確に說明することが、社會學的方法論の重要な仕事でなくてはならない。

7

文學の研究が內在的考察から出立すべきことは言ふまでもない。個々の作品や個々の作者に關する內在的考察を經過することなしに、文學の發達の理法に就いて考へて行くことは勿論出來ない。個々の作品を、時代とか社會とかいふとに考へを及ぼさないで、それ自身一つの創造せられたる組織として見るといふことは、嚴密な意味では實際上出來ないことでもあらう。しかしながら、一つの作品を、その形式や內容から觀察して、その組織構造、それの要素、主題、樣式、その作品の屬する流派作者の個性といふやうな點にまでも及ぶことは、すべて內在的考察の範圍に屬するものである。內在的考察は、一つの作品の發生學的說明を與へる。作品の出來上りぶりを考察することは、自のづからその出來上りの道行きの間の故障や躓きや、作者の苦心や好みや癖やを含めて考へることである。一つの作品が作品としての出來上りの經過や出來上りの要素や出來上りぶりの巧拙などを主題として作品と作者とにそれぞれ說明品評を加へて行くことは、內在的考察の仕事であつて、現在日本の文壇で行はれてゐるやうな批評の多くは、この內在的考察の部類に屬するものである。內在的考察は是非の判斷を下さないといふわけではない。內在的考察の範圍で、よいとか惡いとか言ふ

くともあるのであるが、たゞ、これこれの出來上りぶりの作品があつて、これこれの特色なり味ひなりを持つてゐるものであり、出來ぶりはよいとか惡いとか言ふけれども、それでは何故さういふ作品が生れて來たか、その作品の生れた歷史的社會的の條件は何であるかといふ點に至つては、內在的考察は觸れないのである。即ちその作品を一つの藝術品としては鑑賞し判斷するであらうが、その藝術品の歷史的社會的發達に於ける地位もしくは意義といふ點に就いては考察を及ぼさない。その方面の考察は、即ち社會學的方法の分野である。私がかつて內在批評以上のものの出現を要求する意味を說いたのは、この社會學的方法を基礎とする文學批評の必要を感じたからである。これまでの意味での作品に含まれた人生を倫理的に解釋し批評するといふのとは、それは自のづから別である。

こゝで社會學的方法が、文學の歷史的社會的發達に於ける位地もしくは意義を考察するといふのは、いふまでもなく、文學が外部的原因に促されて發達するものであることを含んでゐるのである。この場合の發達は、影響を受け、決定せられるものがあつて、これに影響し、これを決定する力が働きかけるといふ意味での、因果關係を言ふのである。內在的考察以上のものといふのは、つまりこの因果關係を中心とする考察を意味するのであるが、しかしながらこの場合、その外部からの影響を受け、外部からの影響によつて決定せられるものが、それ自身の性質による成長變遷の能力を持つといふことを無視するわけには行かない。即ち外部からの影響といふものが、それを受けるものの全體に亘つて、限なく悉く滲透するといふやうに、その影響を受けるものを、むやみに受け身にばかり考へることは出來ない。外部の影響を受けるもの自身の性質による成長變遷は、即ち內在的考察の一方面を成すものである。詩人の生涯に於けるその資質の成長と衰退といふやうな問題は、この內在的考察の一題目となり得るものである。それは必ずしも外部の影響からのみは說明の出來ない。それは詩人自からの固有の性質による成長變遷の能力のあらはれとして考へられなければ

ならないものである。內在的考察に於けるこの意味での成長變遷と、因果關係を中心としての發達とは、おのづから別のものとして考へられなければならない。しかし、事實の上では、この二つが別々に起こつて來るのでは必ずしもない。

8

社會的生存狀態が社會的意識を決定する。これを別の言葉で言へば、社會的意識は社會的生存狀態によつて條件づけられる。文學はその社會的意識の一つの形態である。文學はまた從つて社會的生存狀態によつて條件づけられる。そこで、前にも述べたやうに、この社會的生存狀態の因果力はどういふ形をとつてあらはれて來るか。社會的生存狀態の因果力が働きかけるのに對して、社會的意識はどういふ風にこれに應接するか。これが文學の社會學的方法の中心問題である。

社會的生存狀態の因果力は、第一に社會の構成要素の問題として考へられなければならない。一體文學の歷史的發達を說く場合に、社會とか國民とかいふ言葉がよく用ひられる。國民文學とか、文學の發達と社會の變遷とかいふやうな言葉も、しばしば用ひられて、特にその意味が穿鑿せられるでもないのである。社會學的方法では、しかしながらこの點から明らかにして置かねばならぬ。

國民といふ言葉も、いろいろの意味で用ひられてゐるが、これをひろい意味に解して、テーヌの言つたやうな人種といふ意味にまで結びつけて考へることは、考察の上で非常に面倒なことになつて來る。文學に及ぼす一つの社會的要因としては、さういふ意味ではあまりに茫漠としてつかまへどころがないが、とにかく國民性といふものが、一般の文化の上に特色を與へることは爭へない。國語の一點から考へても、この國民性といふものが、重大な意味を持つことは明らかであるのだが、されぱと言つて、その國民性といふものの特質をこれこれだと限定してしまふことは非常な難事で

もあれば大膽なことでもある。勿論國民性といふものも、それ自身成長進化すべき能力を持つものと考へなければならない。しかし、さういふ風に育つてゐたのでは限りがないから、實際には、一定の領土に住み、一定の國語を語り、一定の社會的政治的乃至文化的條件の下に生活して、とにかく一定の特色を持つてゐる複雜な社會集團として考へるよりほかはない。またそれが事實であつて、その事實に依るほかはないのである（各國の文學に於けるユダヤ民族的要素といふやうな問題は、國民といふよりももつとひろい民族人種の範圍の問題として考へられなければならない）。國民といふ言葉は、一般には上に言ふやうな意味で考へられてゐるのであるが、問題は、それを文學に結びつけて考へる場合の意味の限定のしかたに在る。この意味で、たゞ一概に國民の間から生れた文學といふやうな大ざツぱな言ひ方は出來ない。人間の歷史に關する今日の科學の證明する限りに於いて、民謠とか民話とかいふやうな口碑の文學が一般に國民の創造であるといふやうな說明は成り立たなくなつてゐるのである。口碑の文學の創造と傳播とに參加したものは、決してその國民の全體ではなく、わづかにその一部分に過ぎない。口碑の文學の時代に於いてすら、既に社會は王侯とか、士分とか、都會の商人とか、村落の農民とか、寺院を中心とする集團とか、いろいろの階級集團に分れてゐたのであつて、ひろく國民といはれるものの間に、支配するものと支配せられるもの（即ち狹い意味での國民、庶民）との階級的對立は在つたのである。從つて口碑の文學がひろく一般國民の間から作られたといふやうな事實はなかつたのである。殊に、その庶民の間に、一方には都會の住民たる勞働者があり、その一方には村落の住民たる農民があるといふ事實の如きは、文學の發達を說明するために、見のがすことの出來ない重要な點である。

　社會といふ言葉も、文學の發達を說明するために、しばしば用ひられて來たのである。社會を構成するさまざまの個個人や集團の間に、久しい間に亘つて絕えず相互の作用が行はれてゐる間に（而してその相互作用の行はれるところに

社會が成り立つのであるのだから、そこには社會心理が成り立つ。而して社會の生活を色づけて行くところの「思想、感情、氣分の流れ」即ち支配的な心理ともいふべきものが成り立つ。それは社會階級の如何に拘らず、すべての階級に共通する心理的特兆と、その社會に於ける支配的階級の心理と、この二つの要素を含むものとして考へられてゐる（ブハリン）のであるが、しかも悉くすべての社會に共通する單一の心理といふやうなものは、階級的社會に於いては在り得ない。社會はその勤勞關係や經濟上の構造から自然に何等かの形で分裂する。即ち階級に分れる。社會階級が、經濟生活の點で他の社會的集團と違つた一定の位地を占めてゐる社會的集團であることは言ふまでもないが、從つて階級は一定の經濟上の利害を感ずるものであるから、身分の如何に拘らず一つの階級に包含せられる。貴族とか商人とか農民とか身分は違つてゐても、何れもブルジュアジーの階級に屬するやうなものである。階級別の狀態は時代によつて幾らかづつ違ふのであるから、それぞれの時代に於ける階級編制の狀態を知ることは、それぞれの時代の文學の考察の上に必要である。ある時代の社會に於ける基本的な階級別のほかに、中間的な、過激的な、混成的なさまざまの階級的集團があるのだから、具體的な事實の上では、經濟的關係やそれの形態はなかなか復雜な色あひを帶びて現はれて來るものと考へられなければならない。」

9

經濟上の共通の利害關係とともに、階級はそれぞれの心理を持ち、それぞれの觀念形體を持つ。階級が文學に働きかける要因として考へられる場合、最も重要な意義を持つものは、いふまでもなく階級の心理乃至觀念形體の問題である。ブハリンに從へば、觀念形體は社會心理の凝結體のやうなものである。尤もこの二つの間の區別の明確に立てにくい

ことは事實であつて、社會心理がだんだん固まつて濃くなつて行くにつれて觀念形體となつて行くといふ經過は、絶えず行はれてゐるのである。しかしながら觀察考究の對象としては、觀念形體の方が比較的取り扱ひやすい。大抵の場合階級には一般に認められてゐるそれ自身の思想家があつて、その觀念形體は理論的に形づくられるが、社會心理の方はさうは行かない。社會心理は茫漠としてゐて取りとめのないやうなところがある。この心理をとらへるためには、「藝術的な敏感」がなくてはならない。文藝上の作品がこの場合社會心理を觀察するための依りどころとなるといはれるのも、さういふ點からである。

階級心理にも、その階級一般に共通な基礎的な特色と、その階級のある時期もしくはある部分の代表者にのみある特色とがあつて、農民の心理と都會の勞働者の心理とは一樣でなく、從つてそれぞれの心理を表現した階級的の型が認められる。農民の型とかブルジョワの型とかいふものが自のづから成り立つ。しかし事實はそれ等の型の間に、極めて複雜な色あひの微妙な差違を示してゐるのであつて、文學の考察の場合では、殊にその具體的な複雜な微妙な色あひを見わけることが必要である。その上、時代は勿論、國の異なるにつれてそれぞれの國の階級は、その土地の事情によつて、或ひは民族的の相違によつて、その特色を何程かづつ異にするものと考へられなければならない。農民はどこの國の農民も同一の階級に屬するものと見てよいのであるが、その心理的特色は決して同一だとは言へない。階級の心理は勿論時代を異にするによつても違つて來る。たとへば階級が生活を支配する位地に立つてその均衡の狀態が容易にみだされないやうな時期には、階級は自分の力に對する十分な自覺と誇りとを持つてゐて、その生活の完成に努めるでもあらうが、同時に凡俗的な自己滿足のうちに浸つて、中庸平凡の生活を理想とするやうにもなり得る。また、階級が征服せられ壓迫せられてゐて、手も足も出ないやうな心持のする場合には、その生存權のために鬪ふといふ意志はなくなつて、

相互の哀憐や慈悲やに心をなだめ、現實から遠い神秘の世界に心をやることによつて自から慰める。天上のさばきと幸福とがあこがれ求められる。階級がまだ若くて、精力に充ち滿ちてゐる時期には、あくまでも自己の集團的生存權のために鬪つて行く。

ある階級の心理乃至觀念形體の輪廓を理論的に區別分類することは、ある程度までの正確さを以て出來るとしても、これを實際の社會的現實に就いて試みることは、容易のことではない。殊に、文學藝術といふ種類の觀念形體は、その時代の時事問題とは必ずしも直接の關係交渉を持つものではなく、階級の全體的な人生觀として見るべきものである。從つてそこにあらはされてゐる社會階級の心理や觀念形體の色あひを具體的に見分けることは、時事問題に對する直接の利害の關係交渉のうちからそれを見分けるやうなわけには行かない。

10

文學上の現象を一つの運動として、或ひは時代として、やゝひろい規模の上に立つて研究する場合には、殊にそれと社會階級の生活との關係交渉を認めずにゐられない。宮廷貴族の文學とか、僧侶の文學とか、騎士乃至武門の文學とか、市民乃至町人の文學とかいふやうな言葉は、既にはやく用ひられてゐる。いかなる階級がその時代の文學に最も多く活動してゐるか、何故にある時代にはある種の階級的集團から專ら多くの詩文人が出てゐるか、これ等の問題は、文學の歴史が一般社會の歴史に參照して考へなければならないものである。文學者の出て來た社會の階級の歴史を參照することによつて、文學にあらはれた觀念、興味乃至傳統を理解することが出來る。今日に於いては、文學生活の階級的基礎を特に重く見て取り扱つた文學史も少なくはない。封建時代の貴族に奉仕する文字あり勢力ある階級集團としての

僧侶の、文學に於ける位地は言ふまでもない。古典主義乃至擬古主義の文學は、貴族階級の心理と關係せしめてはじめて理解せられる。而してそれ等はいづれもその時代に於ける支配階級である。支配階級は社會的に微力な他の社會的要素を自己の勢力の下に從はせて、文學の上にその階級的特色を染め出ださずにはをかない。勿論文學のあらゆる時代に就いて、それぞれの階級的特質を明らかにし、その階級的心理の表現として文學を說明するためには、——即ち個々の事實に就いてそれぞれの具體的な說明を與へるためには、尙多くの事實に就いて精細な觀察と批評とを加へることを要する。しかしながら文學上の現象乃至文學生活の基本的な傾向もしくは道筋といふものは、社會の階級的區分によつて豫定せられるといふこと、文學の傾向流派の特質は、何よりも先づその文學の傾向流派と關係交涉ある階級の心理乃至觀念形體のうちにこれを求めなければならないといふこと、——少なくともこれ等の基礎的な方法論上の原則から出發するのでなくては、文學の發達に關する研究考察は正しいものとは言へない。たとひ今日に於ける社會學的方法論が、その問題に對してまだ謂はゆる「一般的な代數的解決」を與へるものに過ぎず、個々の文學現象の原因を見出だすためには、如何なる態度でその現象に近づくべきであるかといふことを示すに止まつて、その個々の現象の原因そのものを直ちに示すといふところまでには、十分到達し得てゐないとしても、その態度方法の正しいといふことは、もはや疑ふ餘地はなくなつてゐると言つてよい。

11

社會階級の心理や觀念形體と文學との交涉關係が考へられる場合に、忘れてはならないことは、その階級的心理や觀念形體が、あらはな一つの利害關係につゞめられてしまふやうな單純なものではないといふことである。少なくとも、

文學の場合に於いて、このことは特に考へられなければならない。階級的な社會では文學も階級的性質を帶び、地主の文學とか農民の文學とか、或ひはまたブルジュアジーの文學とかプロレタリアートの文學とか區別して呼ばれるのであるが、それを以て直ちに文學がそれぞれの階級の利益を擁護するものであるといふ意味に解してはならない。あらはにさういふ階級的利益を擁護するものもあるにはあるが、それは寧ろ稀である。一般に、文學の階級的性質は、はるかに深く潜み横はつてゐるのである。作者が一定の階級の見地に立つてゐるといふこと、即ちその階級の眼を以て世界を觀、その階級の特質に從つて、その階級に特有の考へかたや感じかたをするといふこと、——そこに文學の階級的性質が在る。他の說き方に從つて言へば、思想が人間の中に在るすべてのものではない。それよりも重要で、一層强く働きかける力を持つてゐるものは、組織的統一的に內へ受け入れる力である。一つの思想の形態とつながつてゐるあらゆる感情や習慣や聯想の全的綜合である。即ち、あらゆる觀念や、習慣や、先入見や、同感や反感や、さういふいろいろのものの一切を持つてゐるところの「全人間」である。それは言葉では程よく現はして傳へることの出來にくい「性分」とも言ふべきものであつて、論理には無頓着に、或ひはそれと矛盾するとさへありながら、あらゆる個々人にも、あらゆる階級的集團にも備はつてゐるところのものである。從つて、文學に於ける階級的精神は、その文學に含まれてゐる個々の思想のうちにこれを探し求めるといふよりも、寧ろこの全的なものの中から——いろいろの觀念や、習慣や、先入見や、同感や反感や、矛盾などの一つになつて受け入れられてゐるものの中から見出だされなければならない。文學の階級的性質は、一つの作品の中で、階級の利益の擁護といふやうな形であらはれて來るものだといふやうに、簡單には考へられないのである。

階級心理の觀察は、階級の構成要素を明らかにしてかゝらねばならないばかりでなく、その階級のある時代に於ける位

地狀態をも知らなければならない。たとへば、ある時代の貴族階級が、自己の社會的優越と社會的必要とを十分に自覺してゐて、自己の將來に對して完成の誇りと希望とを抱いて疑はないやうな場合には、――その貴族的階級の心理には坦々たる進歩、平和な向上の理想が描かれ、調和、均整、圓滿、靜穩といふやうな觀念がその理想の內容を形づくることにもなるであらう。そこでその階級の美とするところは靜的な古典的な形である。それに反して、その階級がまだ若くて、自己の確立のために闘つてゐるやうな場合には、その階級の心理は努力、興奮、乃至戰闘的なロマンテイシズムの要素が勝ち、その理想は爭闘の巨人である。その爭闘が勝利に終れば、その文學は歡喜に充つるであらうが（たとへば十一月革命直後のロシヤの詩のやうに）、それが失敗に終れば、それは憂愁呪咀の聲となる（たとへばバイロンなどのやうに）、この種類の文學には、內容と形式との調和がなく、力にあまるものを包括せうとする形で、絕叫的であり、緊張の重苦しさがある。久しく壓迫せられ征服せられてゐる階級では、憂鬱な冥想や神秘的な空想がその心理を支配し、靜寂、憂愁の境を求めるやうになり、地上の生活を去つて超越的な世界に心をやらうとする。かういふ心理からは、美は現實の逃避である。またある階級が支配的位地に立つてゐる場合でも、それがために自己の現實に滿足して、自己の現實を是認する心理傾向の强いときには、概して客觀的な寫實的な文學が生れて來る。かういふ例は、極めて大づかみな一般的なものであるから、文學の事實の一々に、ぴッたり當てはまらない點もあるであらうが、とにかくかういふ風に、階級の時代に於ける地位狀態を知ることが、その階級の心理を觀察する上に必要であるといふことは言へるのである。

それぞれの時代に於ける階級の位地狀態によつて、文學の流派傾向が違つて來るといふ事實は、文學の流派傾向の交替を說明するにあたつて、階級の原則が重要な關係を持つてゐることを意味する。文學の流派傾向の交替を說明するため

に、人間の進歩革新を求める心、反動の心理などを以てするのが、これまでの普通のやり方であつた。ロマンテイシズムの後にはリヤリズム、リヤリズムの後にはシムボリズムといふやうに、專ら心理的の動機にその交替の由來を見た。勿論さういふ說明が事實に合はないといふわけではない。少なくとも文學が內在的考察の範圍でその發達變遷を說かうとすれば、新らしきを求めて前に進まうとする一般の心理が、ロマンチイシズムに倦きてリヤリズムへ移らしめ、リヤリズムに倦きてシムボリズムに赴かしめたと言へるであらう。しかしながら、古いものが廢れて新らしいものが生れ、古いものに興味がなくなつて新らしいものが求められるのは何故であるか。それに對する因果的の說明が與へられなければならない。これを說明するのは社會的方法の仕事である。文學上の流派傾向の興廢起伏は、それを生み出した階級の興廢起伏による。一定の階級がその社會に支配的勢力を持つてゐる間は、一定の文學上の流派傾向が文壇を支配する。それぞれの階級は、それぞれの人生觀なり理想なりを持つてゐて、藝術に何等かの形と意味とを附與し、その特兆をとゞめて行く。藝術もまた一定の文化、科學、階級とともに成長して、それとともに凋落する（ルナチヤルスキー）。一定の階級から成長した一定の文學がその階級の凋落とともに凋落すると、やがてまた新らしい階級がその階級の新らしい文學を作りはじめるのである。

12

階級は事實に於いて單一なまとまつた形で存立してゐない。一つの階級のうちにいろいろの分立があつて、その社會的經濟的の特兆による分立が、それぞれその集團の心理や觀念形態にまで及ぶのである。貴族とか農民とか勞働者とかブルジョアジーとか言つても、それぞれの間に更にいろいろの分れがある。更に同一の階級に於ける年齡の相違による

分立がある。年齢の相違からひいて社會心理の分立に及ぶやうなこともあり、有意識無意識の如何に拘らず、表面と裏面との如何に拘らず、「父」と「子」との爭ひはどこにでも絶えず行はれてゐる。「子」が急進的で、新らしいものの擁護者で、戰鬪的であつて、根本的な革新はどの方面に於いても「子」の手によつて行はれるといふのが一般の事實である。勿論年齢の相違といふことは、單にそれだけでは重大な意義を持つとは言へないのであるが、それが一つの階級のうちでの分立となつてあらはれて來る場合には、青年の心理が、社會上乃至文學上の運動の歩調を速めるといふ結果にはなり得る。文學上の現象に對する感受の問題に就いて考へて見ても、青年は一般に敏感で急進的で、老人の趣味は一般に保守的であると考へられる。それ等の點から見ても、文學の考察から全くこの點の相違を無視してしまふわけには行かない。たとへば今日の資本家たちは、文學藝術などに對して本當の理解も興味も持つてはゐないのである。第一さういふ「下らない」ものにかかりあつてゐる暇がない。しかしその資本家たちの細君や娘さんたちには、文學藝術がなくては寂しい。自信の强い本當のブルジョワはさういふものには我慢がならないのだが、その子たちや孫たちはデカダン的な文學藝術で夢中になつたりする。この手あひはブルジョワでも全く別の種類の世界に住んでゐて、文藝や藝術の空氣の中にゐなければ、非常に物足りなく感ずる。こゝにも同一階級内に於ける老人と青年との分立があり、それが文學藝術に對する感受評價の上で非常な違ひを示してゐると言へるであらう。更にまた單に年齢の類似といふ點だけから、即ち青年であるといふだけの理由から、自然に文學上の集團流派を形づくるといふやうな現象も少なくはない。

同一の時代に幾多の階級が並存するところから、その階級的基礎に立つて、同時代に幾多の文學上の流派傾向が並存するといふことは、今さら言ふまでもない。同時代のうちに、いろいろの階級が並存してゐて、そこにいろいろの文化の層が作られ、その間にそれぞれの文學の作者と讀者とが在る。(また社會經濟上の特徵から見ては單一な社會階級で

ありながら、文化の程度といふ點から見ると、その同一階級の間に分立の現象が生ずることもある。）一體階級的の社會では文學も超階級的で在り得ないと言ふことは、どの場合にでも文學が必ず一つの或る階級に屬するものだといふことを意味するのではない。同時代にいろいろの階級が並存するかぎり、而してそれ等の間にさまざまの接觸交渉が成り立つかぎり、そこに複合的な特殊の階級が形づくられるとは避けがたい。從つてまた、文學にも複合階級的なものが在り得る。在り得るといふよりも、事實に於いてはこの複合的性質を帶びたものが少なくないのである。事實の上では、一つの作品なり一人の作者なりが、直ちにある階級の興味や思想を反映するといふやうな簡單なものではない。一つの作品や一人の作者のうちに、相反對する階級的興味が複雜な形で混在してゐるのを見ることは、決して珍らしくないのである。一人の作者の全體を理解するためには、その作品のうちにいろいろの階級的要素を見出だし、これ等を解きほごして見なければならない。

さまざまの階級的興味のさまざまな複合から形づくられるさまざまの文化の氣流とも云ふべきものが、更に互ひに觸接交流して一層複雜な時代の文化的環境を形成する。而してその文化的環境の形成に參與するものは、いふまでもなくその時代の社會を構成してゐるあらゆる要素であるのだが、中んづくその文化的環境の中心を形づくつて、それの形成の上で最も有力な役目を演じてゐるものは、專ら觀念形態の樹立にあづかることを仕事としてゐる人々である。即ち知識階級といはれてゐる人々である。

主として肉體の勞働に從事する大多數の人々のほかに、直接の生産的勞働には從事することなく、勞働の指導とか、

國家の支配とか、司法とか、科學とか、藝術とかいふ方面の社會事業の管理に從事する一つの階級が形づくられてゐる。社會の發達に伴つて、早くから集團に共通の事業を統一組織する必要が認められ、また從つてさういふ統一組織に必要な資質、殊に知識と意志の力とを有する人々が求められたのである。知識階級といふ名前はなかつたにしても、かやうにして社會生活の指導者乃至統一組織者たる集團が、事實の上では古くから出來てゐた。昔はこの種類の集團は互ひに結束して、自分たちの知識を秘密なものとして、他の集團から匿し守つたのである。階級社會に於ける知識階級は、ひろい意味では、凡ての知識的勤勞に從事するもの、それによつて生活の道を立てるものといふやうな意味で了解せられてゐるのであるが、その知識階級は、概して何れかの階級に結びつかないではゐられなくなつてゐる。しかし社會關係の複雜になるにつれて、知識階級はその階級的關係の上からいろいろに分れて來た。その出身の上からも、その仕事の上からも、明らかに一定の階級と結びついて、その階級の興味を擁護する知識階級がある。貴族出身の大學教授で、貴族といふ特權階級の利益の擁護のために貴族院制度を論究するといふやうなものや、勞働者出身の辯護士で、無產階級の利益の擁護のために法廷で仕事をするといふやうな場合は、それぞれこの意味での階級的知識階級に屬する。勿論おのおのの階級にはそれぞれの知識階級があり得るわけであつて、從つてその階級性がそれぞれの知識階級の心理や觀念形態を支配することは勿論である。この階級的知識階級に對して、自分の階級から離れて孤立とも自由ともいふべき狀態に在る知識階級がある。この種類の知識階級は、自分の知識や能力の用ひられるところをあらゆる方面に求めて、經濟的に優勢な他の階級のために働くことをも苦にしない。この種類の知識階級を使用するものは、大抵その時代の社會に於ける支配階級であるから、つまりこの種類の知識階級はその時代の社會に於ける支配階級のために働くといふことになる。この支配階級は勿論自分自身の階級的知識階級をも使用してゐるのであるが、その上に他の階級からの

知識階級をも出來るだけ利用する。農民出身の新聞記者が資本家の新聞のために働いたりするのもこの例にあてられる。資本主義の發達とともに、この種類の知識階級は殊にその數を增して來る。知識階級はそれ自身の間からも出て來るが、それ以外に支配階級の間からもその餘剩の人間を知識階級に仕立て上げて、勿論特權を附與して知識階級の仲間入りをさせる。その一方で教育を受けた農民の子弟のやうに、一層高い社會的位地を占め自分の本來の階級から浮び上るために、下の方からも知識階級へ仲間入りをして來るものがある。かやうにして、カウツキーの言ふやうに、新らしい、數量的には非常に有力な、絶えず增して行く仲間の階級が出來上つて來る。而して結局それは一つの職業的集團といふ性質を帶びて來る。

14

前に言つたやうな明らかに階級的な知識階級のことはとにかく、自分の階級から離れて、孤立とも自由ともいふべき狀態に在る知識階級、中間的な知識階級の性質の問題は、その知識階級が形成してゐる文化的環境を理解するために、重要な關係を持つてゐる。これに對する解釋としては、やはり知識階級を特殊の搾取階級と見、特權階級と見るものがある。即ち基本的な收入の源の共通、基礎的な經濟上の利害の一致、經濟上相反する他の集團への對立の一致といふ點から、知的勤勞を基本的な收入の共通の源と見、知識とか卒業證書資格證書といふやうなものを私有財產と見て、知識階級はそれによつて特權を得、搾取の可能を保證せられるとするのである。この考へは知識階級を明らかに階級と見なすものである。これに對して、知識階級を以て確定的な階級的性質を持たない社會的集團と見、その一部は無產階級に仕へるものもあれば、他の一部は搾取階級に迎合するものもあると見る。知識階級は要するにその社會的の位地といふ點

からは、一つの經濟上の性質を帶びた集團で、その中の少數の特權階級的な部分は、資本主義社會の支配階級と利害や運命をともにして、その階級の利得のために仕事をするとも出來るし、それに反して、知識階級の大部分は、最初は搾取階級の利益のために骨を折つてゐるにしても、いつまでもその搾取制度の擁護に一生懸命になるだけの何等の客觀的な經濟上の根據がないところから、だんだんに勞働者階級に接近して行く傾向を有してゐると解釋する。即ちこの解釋によると、知識階級は單一な社會階級ではなく、その社會上の位地といふ點からは經濟上の集團と見るべきものであつて、いろいろの職業的な集團に分れて行き、それぞれの經濟上の興味に從つてその社會的職能を果たし、めいめいの心理を持つものであるといふことになる。更に知識階級といふ言葉を、最も狹い特殊の意味に限つて用ふる場合には、倫理的に反凡俗的な集團、解放運動の先覺者といふやうな意味でいふこともある。しかしながら、要するに多くの場合に於いて、事實上知識階級を職業的な集團と見た方がよいやうである。從つて一と口に知識階級とはいふものの、事實上いろいろの小さな集團に分れてゐることになるのだから、それぞれの小さな知識階級的集團の社會的職能といふものもさまざまだといふことになる。

工場で働く技師とか、學校の教師とか、官公吏であるとかいふ職業的種類のほかに、專ら觀念形態の樹立のために、謂はゆる精神文化の創造のために働く知識階級の集團がある。學者とか思想家とか文學藝術に從事する人々とかがそれである。時代の文化的環境を形成する中心的要素として、文學の方法論の上で最も重要な關係を持つてゐるのはこの集團の知識階級である。支配階級は自己の階級的觀念形態を形づくるためにも、大抵その方面の專門的な仕事に堪能な他の階級の力を遠慮なく利用する。勿論この場合その知識階級は思想方面の技師のやうなものだとも言へるであらうし、その觀念形態も實はその知識階級が作り上げたといふわけではなく、結局專ら經濟生活が生み出したものだと言はなけれ

ばならない。しかしそれに拘らずその經濟生活を土臺として、一つの階級的觀念形態を組織するために働く知識階級の力は、決して輕くは見られないのである。知識階級はかやうにして支配階級のために觀念形態を形成する役目を引き受けはするが、この知識階級は、とかくその支配階級ともどこまでも行動をともにしようとはしないで、やゝもすれば一種の狹い自分たちの世界に立てこもつて、特殊の集團のやうになつて行かうとする傾向をあらはして來る。資本主義階級の支配する社會で、知識階級がその獨立を保つことは勿論むつかしいのであるが、されぱと言つて、どこまでも資本主義的支配階級に從つて行くといふではなく、自分たちの經濟狀態が必要とするかぎりに於いて、知識階級は資本主義的支配階級に隷從してその用をつとめて行く。それだから知識階級が支配階級の用をつとめると言つたからとて、決していつでも、どこまでも忠實だといふわけではなく、支配階級の興味を正しくその觀念形態にあらはすものとは限らないのである。この意味で知識階級と、それの隷屬する階級との間には、度々爭ひが起こつて來る。そこで階級は、どうしても自分の間から生れた純然たる階級的な知識階級を養成しなければならないことになる。尤もその純然たる自己の階級から出た知識階級もまた、いつでもその階級の利益を代表してくれるとは限らない場合があるのだが、それでも大體は一層よく自己の階級のために奉仕するものと見てよい。とにかく知識階級が支配階級に對して必ずしも忠實でないといふ事實は、一方知識階級への非難の原因にもなり得るであらうが、知識階級が支配階級にある點まで反いてさへ守らなければならない何ものかを持つてゐるのだとも解せられる。また、支配階級の階級的約束から脫しようとする何等かの要求から來てゐるとも解せられる。

知識階級が自分だけの狹い世界へ立てこもらうとする傾向を示し、支配階級から出來るだけ離れようとする傾向を持つてゐるのは、知識階級が自分の特殊の位地に伴ふ優越感を失ふまいとするためであるとも言はれてゐる。知識階級のすべてに通じて、一種の貴族的な傾向特色乃至癖のあることは、而してまた、その貴族的な特色なり氣質なりを出來るだけ失ふまいとするといふことは、既に認められてゐるところである。けれども、知識階級がいろいろの小さな集團に分れて、それぞれ自分の世界に立てこもり、自から高く持するやうな態度を示すのは、一つはその觀念形態の統一組織に從事するといふ仕事の性質の上から來てゐるところがあると考へられる。觀念形態の統一組織といふ仕事は、なかなか複雜であつて、その統一組織の經過は、いろいろの矛盾と衝突との間を滯らなくてはなるまい。觀念形態樹立の仕事は、時としては命がけの爭鬪である。知識階級は決して固定してゐるものではないのだから、その爭鬪の間には自然に他と自分とを峻別するやうな傾きにもなつて來る。かりに知識階級の多くは概して保守的だとしても、その間から新らしい思想のために身命を賭するやうな勇士も少なからず出て來るのである。かういふ意味で、知識階級の分裂孤高的傾向は、觀念形態の樹立といふ本來の仕事に伴ふ探求爭鬪に伴ひがちなものとしても解釋せられてゐる。而してこの爭鬪探求によつて新らしい道を開拓する知識階級のうちに、新らしい文學を創造する人々が含まれるのである。即ち多くの知識階級が、一定の觀念形態を信奉してこれに準據することを事とする間に、少數の知識階級は、新らしい觀念形態の創造のために鬪ふのである。この種類の知識階級は、これをたゞ職業的集團としてのみ見るわけには行かない。これ等の少數者は、前に言つたやうに反凡俗的な狹い意味の知識階級であつて、あらゆる意味の階級的制限にかゝはらず社會的意識の力を集中して表現し得たものであると言はれなければならない。

知識階級が多少とも階級性を帶びるといふことは、幾度も言つて來たことであるが、しかし、知識階級は、その智力

的訓練の結果として、階級的制限から離れ、その自我心を抑制して、社會生活の眞の深い要求動向を理解し、また進んでそれに參加するにさへ至ることがある。社會の大きな建て直しの時代には、殊に多くこの事實を見ることが出來る。たとへば同じブルジュアジーの階級に屬するものでありながら、理論上無產階級運動の意義を理解し同感し、その立ち場に立つやうになるものも少なくない。とにかく知識階級がその智力的訓練の結果として、支配階級の制限から離れようとする傾向を持ち、また事實ある程度までは離れ得ることは否定しがたい。知識階級內の分裂爭鬪の重要な事實は、專らこゝに胚胎してゐると言つてよい。

思想家が思想の力を過大視し、従つて自己を高く見る一種の自惚れを持ちやすいことも、知識階級の心理の一特徴であらう。トロツキーはこれを社會生活上の實際と觀念形態との間の不適合から來る歷史的の結果だと言つてゐる。

知識階級が社會階級的であることを免かれないと同じ意味で、その知識階級を組織する一要素としての文學者もまた階級的であることから免かれない。文學者の階級性は、その出身からも、心理傾向からも、またその觀念形態からも見ることが出來る。勿論、その出身だけの點から、一人の文學者の階級性を判別することは危險である。いかなる場合にもその心理傾向乃至觀念形態の點からこれを見ることが忘れられてはならない。文學乃至文學者の階級性は、以上のすべての點から見て一致した判定に達した場合に、最も明確であるのは言ふまでもないが、たとひ出身はどうであらうとも、その心理傾向乃至觀念形態の點から見てこれを判定することが第一に必要であつて、その判定には正しい根據がある。勿論實際の場合では、上に言ふ階級性が、單一純粹な階級的心理傾向や觀念形態にあらはされてゐるもので

ないことは、既に說いて來たところによつて自のづから推測せられなければならない。

しかしながら、文學者の階級性が比較的明白に集團的にあらはれるのは、多く特殊な大變動の前後のやうな場合のことであつて、一般に文壇を形づくつてゐる文學者は、孤立的で、一定の階級に屬して結合してゐるとは言へない。文學の流派傾向の交替は、前にも言つたやうに、その交替に相應する知識階級集團の交替を豫想する。ある文學上の傾向が支配するのは、ある知識階級集團が支配することである。それの支配力が凋落するのは、新らしい知識階級集團の誕生を意味する。その新らしい集團の社會的意識が相當に成長して來たとを意味する。およそ文學者の集團についても、一般の知識階級に就いて述べて來たことがそのまゝで當てはめられるであらう。それが職業的集團の性質を有すること、その仕事の相手即ち讀者は、自然に專らその時代の支配階級であることなどは、知識階級についての說明から自然に類推せられる。尙その社會的位地、出版者との關係、報酬や檢閱などの外部的事情もまた、いろいろの點から微妙に文學者の心理に影響することは、言ふまでもない。資本主義の發達とともに知識階級の數が著しく增加すると、これも前に言つたが、職業的集團としての文學者もまた資本主義の發達とともに著しく增加するのを免かれない。それだけ一方では資本主義の經濟上の壓迫をひどく受けることになつて來る。定期刊行物の場合に於いて、殊にその事實と傾向とを見る。而してこの壓迫が加はれば加はるほど、一方では、消極的に乃至積極的に、いろいろの形で文學者の抵抗の現象があらはれて來ることも事實である。この事實もまた知識階級の一般について上に述べたところと原則的に變りはない。しかしながらそれが文學者の場合では、殊に眼前直接の職業的の興味の壓迫にへしつぶされてしまはないだけの知力的訓練が重大視せられなければならない。文學者がその生存する社會の各方面の事情から全く離れて無關係であり得ないのは勿論にしても、文學の創造は、その當事者たる文學者の心に、主觀的には自由が確保せられてゐる場合にのみ可

能である。その自由は、非常にひろい、複雜な、いろいろの階級的興味の總合乃至その葛藤を包含するといふ形であらはれる場合もあらう。多くの場合、さういふ種類の作品が、時代や場所の制限を超越してゐるもののやうに見えるのである。事實の上で階級性は極めて複雜な複合の形であらはれるといふことは、前にも既に述べて置いた通りである。とにかく文學の社會學的方法は、第一に文學者のいろいろの小集團の構成要素についてその社會學的性質を見る必要がある。ひろく言へば文壇の構成要素の社會學的性質を知らなければならない。これなくしては文學の發達の方向と性質とを理解することは出來なくなる。

上に述べたところは、文學の方法論の考察に於ける社會の生存狀態の方面、その構成要素の問題についてのノートである。この文の最初の計畫では、社會意識の問題、個性乃至天才の問題にも說き及び、尚また初めに揭げたいろいろの問題にも觸れて行くつもりであつたのだが、これだけで豫定の分量に達したから、それ等の問題については別の折へ殘すことにする。(一五・五)

朝鮮統治の方針

矢内原忠雄

一

明治四十三年八月二十二日日韓併合條約第一條、「韓國皇帝陛下は韓國全部に關する一切の統治權を完全且つ永久に日本國皇帝陛下に讓與す」。かくして「最後の韓國皇帝陛下」であられた李王が、本年四月に薨去せられたのである。新聞によれば多數の朝鮮人が早朝より昌德宮外に集り來たつて、哀號して居るといふことである。薄命の李花地に墜ちて、白衣の民衆之がために哀哭す。聞く者をして感動せしむるの情景である。然るに騎馬巡査を始めとして警官隊は、之等の哀號の民が多人數同時に宮殿外に落ち合つて、一大群集となるに至らしめないやうに骨折つて居るといふ。彼等の間を馳驅して群集を分散せしめて居るといふことである。こゝに至つて何たる殺風景！

私共日本人も又近き過去に於て同樣の大いなる國民的經驗をもつた。明治天皇の崩ぜられたとき、多數の人々が二重橋の外に集まつて哀悼の誠意を披瀝した。その純眞なる國民的感情の發露は、殊にわが國の國柄に於ては、最高の修身訓話の題材であつた。同じ樣な場合が李王と朝鮮人との間に起れば、警官は群集を四散せしむるために特別の努力を拂ふ。群集を怖れるのだ。民を怖れるのだ。そこに政治問題があるのだ。道徳的には、人情よりいつても論理からいつても同情し賞讃せらるべき行爲も政治的には取締らなければならないと思はれたのだ。何が故に朝鮮に於てはかゝる場合にも民が怖れられねばならないか。そこに朝鮮統治の問題がある。

それ故に、政治問題としては此度の李王の薨去を以て明治天皇の崩御の場合と比較することは出來ない。之を李太王薨去の場合と思ひ合せて考へなければならない。大正八年時の李太王が薨ぜられたるとき、多數の民衆が哀悼のため京城に集まり來たつた。之を機會として、葬儀に定められし日の二日前、即ち三月一日を期してかの獨立萬歲事件が勃發したのであつた。京

城パゴダ公園に於ける萬歳唱和を第一聲として、この運動は忽ちにして全鮮に蔓延し、四月半頃までに騒擾個所四百以上に達した。この運動は非常に巧みに秘密裡に計畫せられたものであつたから、官憲の驚愕は一層甚だしく、各地に於て流血の慘事を見たのは、返す返すも遺憾であつた。この事件によりて總督府の武斷政治に對する不信任は最も明白に暴露せられた。寺内總督は善意の武斷政治家であつた。長谷川總督も同じ統治の方針であつた。行政官吏も學校教員も制服帶劍であつた。かくてサーベルの威力の下に朝鮮十三道は靜謐であると思つて居た。何ぞはからん、突如たる獨立萬歳の聲！もとより力弱き朝鮮民衆、しかも元來が平和的方法によりて獨立の、或はむしろ獨立希望の、意志を表明せんとしたるに過ぎざるこの運動が、蜂起個所が四百であらうが五百であらうが、漸次わが軍隊と警察とによりて鎭壓せられてしまつたに不思議はない。併し乍らこの事件は朝鮮民衆の勝利であつた。總督政府の敗北であつた。サーベル政治の破滅であつた。

大正八年の獨立萬歳事件の後、わが朝鮮統治の方針は一大變革を受けた。即ち官制を改革して總督は必ずしも從來の如く現役の大將中將に限らざることゝなし、憲兵による警察制度を廢して普通警察官によるの制度に改め、行政官吏學校教員等の制服帶劍も廢止せられた。武斷主義は捨てられて文治主義となつた。教育衛生の設備を充實し、事務の簡捷民意の暢達につとめ、大正九年七月には地方制度を改正して道地方費學校費及府面の地方團體に對して公選又は任命の諮問機關を設置した。之を要するに新統治方針の趣旨は「文化的制度の革新に依り朝鮮人を誘導提撕し以て其の幸福利益の增進を計り將來文化の發達と民力の充實とに應じ政治上社會上の待遇に於ても内地人と同一の取扱を爲すべき究極の目的を達せんことを庶幾するものに外ならず」（大正八年九月三日新任齋藤總督の施政方針訓示）といふのであつた。之より日鮮同治、日鮮融和、共存共榮等は朝鮮統治の標語となつた。

官制改革後既に七年、文化政治はその生ずべき影響を生じたるべき時期である。而して今、李王の薨去、集まり來たる民衆！恰かも武斷主義の總督政治が大正八年に試驗せられて、その無能力を暴露したるが如く、文治主義の總督政治の效果が今同様の試驗に遭遇せるものである。而して總督府は最も惡しき場合を想像して群集を四散せしめんと努力しつゝあるものと、見ることが出來よう。私は衷心事無きを祈る。併し乍ら民衆を怖るるは、怖るべき不安の原因が存せねばならぬ。朝鮮の民衆が總督政治に悦服して居れば、かゝる場合に民を畏るゝ理由は無い

であらう。朝鮮統治の方針については考究せらるべき幾多の問題が尙殘つて居るものと見なければならない。

文化政治の直接の効果は民衆の文化的欲望の向上である。交通の進步貿易の發達の結果朝鮮人の經濟的欲望は甚だしく刺戟せられ向上せしめられた。朝鮮に鐵道の開通した當時には、何の用事もなくたゞ物珍らしさに汽車に乘り廻つた者が多かつたといふ。旅行の誘惑、文明品の誘惑。朝鮮人は如何にしてこの欲望を滿足することが出來るか。自己の財產を賣ることによりて。財產無きものは自己の勞働を賣るとによりて。エサウの如く彼等は一飯の爲めに家督の權を賣る。かくて多くの朝鮮人がその土地の所有を失つた。而して之れ必ずしも彼等が無智により一時的欲望充足に眩惑せらるゝが故のみではない。彼等は內地人の金融業者より融通を受ける。その利率は從來の高利貸よりも低いが、債務償還の義務は完備せる法律の下に於ては一層嚴重である。學校病院其他の文化的設備は、彼等も亦受益するところであるが、彼等はまたその費用を負擔せねばならない。彼等の財政上の負擔は爲めに一層重くなつた。又彼等の在來の生產形式は、新たに輸入せられたる內地人の資本主義的經營の競爭に堪えざるため、獨立の企業家たる地位より沒落したる者も多い。中には自ら資本主義的工場の經營を試みんとするものも出でるであらう。之等のすべての事情は朝鮮人をして其の土地を賣り拂つて貨幣を求めしめる。朝鮮の土地の大なる部分がかくて內地人の所有に移り又は擔保に入れられた。私は之に關する正確なる數字を知らない。或者は全地の半といひ、或者は八割といふ。とにかく土地に關する實權が內地人の掌握する處となりしことは顯著なる事實である。朝鮮人についていへば、この過程により生產者は生產手段より分離せられた。彼等は無產者化した。今や他人の爲めに勞働する以外に、自己の生活を支持するの途なきものとなつた。而して之等の無產者が悉く朝鮮內に於て職業を求むることは不可能である。何となれば朝鮮の主たる產業は農業であつて、工業は尙甚だ幼稚であり到底多數の勞働者を收容するの能力に乏しい。而して農業にありても、從來の如き小面積の耕地を以て農家經營の單位とするとは、生活の向上し負擔の增加せる近代朝鮮人の堪へざる所である。之れ故に農民離村である。多くの朝鮮人がシベリア及び滿洲に移住した。滿洲移民の中には開拓の困難、商租問題の未解決、馬賊の掠奪等の爲め窮境に陷れる者が多いといふことである。或は又近來多くの鮮人が內地へ移住して勞働しつゝあるは私共の日常知る所である。彼等のうち成功して鄉里に歸り得る者が果して何人あるであらうか。朝鮮人の經濟的欲望は

向上した。しかし欲望滿足の手段は之に伴はない。彼等の生活程度は或は進歩したであらう。しかし生活の不安は更に増加した。而して交通の進歩、貿易の發展、法治制度の完備、教育衞生の施設、産業の開發事業經營の資本主義化、すべて之等の文化的政治の實行が朝鮮人に與へたる經濟的影響は決して無條件に良好なるものではない。否却つて或意味に於ては朝鮮人今日の經濟的不安は文化政治の結果であると言ひ得る。

右の如き關係は經濟生活以外の點に於ても認められる。文化的教育の下に彼等は政治的自由の價値を知る。しかも地方團體の諮問機關に任命せられ又は選擧せらるゝ外、彼等は何等の參政權を與へられて居ない。教育は奬勵せられても學校卒業生に對する十分の社會的活動の地位が開けて居ない。

欲望が刺戟せられて、欲望充足の手段が得られて居ない。文治主義の總督政治下に於ける朝鮮人の狀態は要するに之でをる。その結果は不安、絶望、無光明、私は朝鮮社會の底流にこの絶望的不安が鬱積せる如くに感ぜられる。朝鮮社會の實情を觀察せる人は、恐らく何人も安價なる樂觀に耽り得ないであらう。表面的なる平安を以て文化政治の成功なりと思ふ者は禍ひなる哉。平安ならざるに平安なりと宣べ傳ふる者は禍ひなる哉。朝鮮人は薄暮に佇立して自己の周圍を見廻はす。社會的諸關係の急激なる變化が、恰かも強力なる不可抗力の如くに、彼等を破産的深淵に引き入れんとする。彼等は如何にしてこの自己の生活に希望あらしむるを得るかを知らない。如何なる途を歩み、何處に宿るべきかを知らない。不安と絶望とが彼等に迫る。

知らず、總督府は何處に彼等を導かんとするのであるか。共存共榮といふ、如何にして其の實を擧げんとするのであるか。日鮮同治といふ、如何にして朝鮮人に内地人同樣の社會的なる政治的待遇を與へんとするのであるか。文化政治の結果朝鮮人が參政權を要求し來るは當然過ぎるほどの當然である。何時如何なる態樣を以て之に應ぜんとするのであるか。内地議會への代表か、朝鮮議會の特設か。之等の根本方策の決定せざる以上、「文化政治」も朝鮮人の政治的不安を取り除くことは出來ない。或は政府自ら朝鮮人をば何處に導くべきかを知らないのではあるか。盲人の手引をする盲人?! 朝鮮統治の責任を負擔せる我國人の一人として、その統治方針は何處に目標を置くべきかの問題に關し、私も亦所見を陳ぶるの義務を感ずる。植民政策研究の一學徒としての義務が之を強める。

朝鮮統治の方針を論ずるに當り、私は先づ植民地統治政策に關する一般的理論に就て一言せざるを得ない。何となれば實際政策は政策理論に基礎すべきものであるから。植民地統治政策は從屬政策同化政策及び自主政策に分類せられる各種政策の因果關係を研究するは、又朝鮮統治政策決定の參考たるべきものである。

從屬主義の統治政策は植民地をば全然本國の利益に從屬せしむるものである。住民の利益を考慮せず、之を考慮するもたゞ本國の利益の範圍內に於てのみ考慮する。植民地に於ける諸政策の決定には全然住民を參加せしめない。かくの如き專制的搾取の政策は十六七八世紀の頃歐洲諸國がその植民地に對して取りしものであつて、近代に至る迄スペイン及びポルトガルのとりたる、英國の印度に對し、オランダのジヤバに對してとりたる如きである。從屬政策の結果は二種あるのみ。一は原住民の絕滅であり、他の一はその反抗である。何となればかくの如き政策に對して悅服する原住民は一つもないし、又之に屈服を餘儀なくせらるゝものは微力なるものに止まるから。滅し盡くす能はざる程多數の原住民に對しては、從屬政策は反抗を生むより外はない。本國の利益中心の政策がアメリカ合衆國の獨立を來たらしめたことは、英國にとりて苦き經驗であつた。それ故に今日に於ては從屬主義の政策が植民地統治の方針として標榜せらるゝことはなくなつた。却つて原住民を保護發達せしむることが人道主義的要求に適ふのみならず、本國の利益にも合するものと認めらるゝに至つた。但し從屬政策の廢止とい[illegible]も、全然本國の利益を無視し或は植民地の利益を本國の利益よりも先きにするものでない。現實植民政策は決して本國の利益を離れない。

從屬政策を標榜せず、原住民の保護發達を統治の方針とするに至れば、その手段若くは方向に關して同化政策と自主政策とが分れる。前者は植民地を本國の一部として取扱ひ、本國の法制風習言語を普及せしめ、雜婚を奬勵し、要するに植民地社會及び植民地人の本國化である。佛國はその主なる植民地に對して同化政策を試みた。殊にアルヂエリーは佛國に地理的に近接するが故に、統治制度上之を以て本國の延長と看做し、アルヂエリーの各縣は本國各縣と同様に巴里の議會に對して議員を選出する。然るに佛國に於ても二十世紀以來同化政策失敗の聲が高くなり、サウシユール、シヤジエ、ヴイニヨン等の學者が之を批難した。アルヂエリーに於ける土人叛亂の頻發する原因の一つはフランス語教育の强制であるといはれた。ポアンカレ內閣の植民大臣たりしサローの如き實際家も亦、今後の植民地統

は同化政策を去りて自主協同的の政策によるべきことを主張した。何が故に同化政策は失敗したりといはるゝか。原住民が悅服せざるが故である。何が故に悅服せざるか。彼等にとりて同化の强制は即ち壓迫に外ならないからである。他人をして强いて自己の如くならしめんとする。之れ他人の人格の侮辱である。その獨立の侵害である。他人が自由に模倣するに任せよ。强制は壓迫である。且つ果して他人をして自己に同化せしめ得るや疑問である。外形生活上の同化を以て心的同化と同視するほど、愚かなことはない。洋服を着、洋食を食ひ、英語を語り、英文學を學ぶことによりて、印度人は英國人に化せなかつた。彼等は英語を以て英國を攻擊して止まない。又米國在住の黑人は彼等の先祖のアフリカ生活の殆んど痕跡だに留めざるに拘らず、尙米國と同化したるものと認められない。環境の影響は現象型の變化に止まり、原因型の變化には及ばないと遺傳學者はいふ。假令環境の影響が原因型の變化にまで及び得るとしても、そは數千百年を要する自然的發展の結果であつて、現實政策の目標となすことは出來ない。政策は現實の社會的關係と、近き將來の豫想とを以て決定せられる。短期間の成功を目的とすべき現實政策に於て植民地人の同化を期するほ、却つて植民地人の反抗を招くのである。

社會群の心的同化、即ち集團的意識同化の問題は、植民地の特別議會を設くべきか或は本國議會に代表せしむべきかの問題決定に重要なる關係がある。何となれば議會制度は統一的國民にとりて始めて可能である。相異る集團的意識を有する民族が同一議會に於てその内政を審議することは、民族心理學的不可能である。植民地が本國議會に代議士を送るとせよ。本國は植民地人によりてその法律を定められ、植民地は本國人によりて立法せらるゝの關係を生ずるであらう。植民地選出の議員が本國選出の議員よりも少數なるときは——而して性質上それは決定的少數である——多くの場合に於て植民地人の本國に對する支配よりも、本國人の植民地に對する支配の方が大きい。その結果は植民地の事情を知らず興味も少き本國議員が、社會關係を異にする植民地の社會關係を規律することである。故に植民地の本國議會への代表は、植民地にとりては屢々壓迫の美名たるに止まるであらう。之に反し植民地議員が有力であり、又はキヤスチングヴォートを有するときは、本國の政治は植民地人の爲めに左右せらるゝに至る。若し重大問題について兩者常に爭つて居れば、同一議會代表の制度は意味を爲さぬであらう。歷史は本國植民地の同一議會的結合に對して有利なる證言を與へない。アダムスミスは米國獨立の直前に熱心に此種の結合の

可能性を論じたけれども、植民地人はかくの如き議論に耳を傾けなかつた。彼等は既に獨立の國民意識を有したるが故である。佛國はアルヂエリーの各縣を始め、二三の植民地より議員を本國議會に選出せしめて居る。併し乍らその成績は顯著ではない。アイルランドは久しくウエストミンスターの議事堂に代議士を選出するの制度を與へられてゐたが、之を以て英國のアイルランド統治は完成したるものでなかつた。一九一六年のアイルランドの獨立的叛亂は英國政治家を驚かせた。叛亂は鎭壓せられたが、鎭壓せられざるものは民衆の獨立心であつた。アイルランド共和國の建設、即ち完全なる獨立は英國必死の抵抗によつて阻止せられたが、アイルランドはもはや英本國議會によりて直接の統治を受けない。アイルランド自由國として自己の議會を有するドミニオン（自治領）的地位を以て、英帝國内に留まることゝなつたのである。

同化政策は右の如き理論的缺陷及び歴史的弱點を有する。それ故に自主協同の方針に基く植民地統治政策が發達し來たつた。之は植民地社會の歴史的特殊性、その自主的集團人格を認め、その自主的發達を援くると共に、之と提携協同して一大帝國を維持せんとするものである。否、自主的發達の援助に於てのみ、帝國的結合の維持手段を見出し得るものとするのである。カナダ、濠洲、ニユージーランド、南阿聯邦其他の英帝國のドミニオンはその最も顯著なる典型である。即ち之等のドミニオンは自己の議會及び之に對して責任をとる内閣を有し、英本國とは帝國會議に於て結合せられて居るに過ぎない。彼等は殆んど獨立國である。英本國に對しては從屬支配の關係を保たず、姉妹國として英帝國内にありての對等の地位を要求する。彼等は憲法上英帝國より脱退するの權利を有するや否やさへ、實際問題として時々論ぜられた。しかし未だ脱退したるドミニオンもなく、又脱退せんとするものもない。英國はその植民地に自治を許すことによりて帝國を維持し得た。十九世紀の中葉ダラム卿の報告に基きてカナダに自治を許したるとき、それは英國にとりて一大冒險であつた。併乍ら結果は棄つることによりて得たのであつた。ドミニオン的結合による英國は、嚴格なる從屬主義の植民帝國よりも却つて鞏固なる結合を保つ。その成功が傳統的に同化政策をとれる佛國の學者政治家をして反省せしめ、殊に最近の世界大戰を期として佛國の植民地統治も自主政策へ接近するに至つた。英帝國に於ては前述の如くアイルランドがドミニオンの地位を與へられ、又印度も漸次その域に發展しつゝあるものと觀察せられる。たゞにかくの如き有力なる植民地のみならず、アフリカ西部中部等の黑人地方に對しても

在來の法制慣習を重んじ、酋長の統治を認むるの自主的政策が實行せられ、而して斯くの如き植民地統治の方針は益々學者政治家の注意を惹くに至つた。勞働黨政府の下に於て特に然りであつた。

自主政策は決して植民地の放棄を主張せず、又その獨立を豫想しない。却つて植民地との協同による結合の鞏固を期する。一方に於ては集團的人格の尊重、他方に於ては一大帝國的結合の近世的必要が、この期待をして合理的たらしめる。植民地の集團的人格を尊重することによりて、壓迫中の最大壓迫たる人格獨立に對する外來者の强制支配がとり除かれる。何が反抗に値するかといつて、個人の、若くは國民の獨立性に對する壓迫ほど反抗せらるべきはない。この種の反抗は微力の爲め表面的には鎭壓せらるることは有り得るが、決して根本的に屈服し終るものでない。機會を得れば必ず爆發すべき危險性を有する。故にこの種の反抗原因の根本的除去あるにあらざれば、本國植民地間の鞏固なる結合はあり得ない。從屬政策によりて、或は同化政策によりて、植民地社會の獨立的集團意識を蹂躙する限り、その反抗は機會毎に怖れられねばならないのである。

集團的人格の獨立性、社會生活の歷史的特殊性を認められたる植民地は、こゝに本國に對し友誼的に協同結合するの心理的基礎を得る。友誼による結合ほど強いものはないのである。而して友誼のみならず、利益も亦必ずしも植民地の分離を奬勵しない。近世經濟の顯著なる發達は經濟的に小國主義を不可能ならしめた。本國が植民地の原料品食料品を必要とする如く、植民地も亦本國の資本及び商品を必要とする。一大經濟地域を支配する國が最も富強である。結合は力、分離は非力。たゞ結合關係の内部に於て壓迫があつてはならない。强制や詐欺があつてはならない。友誼は結合し、壓迫は破壞する、かくて自主政策による植民地の統治は協同結合の合理的基礎を有するものである。

三

朝鮮に對する我國の統治政策は上述三種のうち何れであるか。又何れたるべきか。

朝鮮は二千年の歷史と一千八百萬人の人口を有する。今より十六年前迄は「韓國皇帝陛下」を戴きたる獨立國であつた。朝鮮に對する統治政策の論議にはこの事實を忘れてはならない。かくの如き歷史と人口とを有する朝鮮に對して徹底的從屬主義をとることは出來ない。この人口の大部分を絕滅し若くは境外に驅逐するが如きことは到底不可能である。朝鮮人の多數を滿洲に移住せしめ、その跡へ日本人を移植することによりて、之を

内地人の社會化せんとするが如きは、空想に止まるであらう。人口増加率の大なる朝鮮人は、その移住によりて生じたる人口の空隙をば忽ち自然増加によりて塡補する。故に大體に於て朝鮮は朝鮮人の地として繼續するものと見なければならない。朝鮮は朝鮮人を主とする社會たるの事實を確認するは、統治政策決定の第一要件である。朝鮮をして全然日本の利益にのみ服屬せしめんとする從屬政策は、この事實の無視であり、早晩朝鮮人の反抗を受けねばならない。我國の朝鮮統治の方針は最初から露骨なる從屬政策が表明せられたわけではないが、大正八年の革新以來明白に朝鮮人保護教導の方針が宣言せられた。

文化政治、それ自體は甚だ可である。併乍ら共存共榮を目的とする文化政治が口頭語として終らざるが爲めには、客觀的保障を要する。それは即ち朝鮮人の參政である。朝鮮の統治は一として朝鮮人の社會的經濟的生活に影響を及ぼさゞるものはない。然るにその決定に對して朝鮮人自らに何等の參與權を認めずして、如何にして共存共榮が口頭語にあらざることを保障し得るか。そは勞働組合を認めざる資本家の說く共存共榮の如きものではないか。斯く言ひて勿論私は政府の施設が悉く朝鮮人の不利であると言ふのではない。併乍ら同時に又、政府が完全に愛他無私であり全能全智でない限り、住民に對して何等の參加を認めざる政治が常に住民の有利なりといふ筈がない。殊に植民地に於ける如き特殊統治の場合には善意の過失も多く起り得る。たとへば朝鮮に於ける產業政策の中樞として重きを置かるゝ產米增殖計畫の如きも、總督府によりて立案せられ、帝國議會の協贊を以て前議會を通過した。この計畫の主目的とするは内地食糧問題の解決、朝鮮に於ける米消費增加量の供給、及び朝鮮人の經濟的繁榮の三項であつた。嘗て私が農業經濟研究第二卷第一號に評論したる如く、鮮米の内地輸出により第一の目的を達するが爲めには、第二の目的は現在一人當りの米消費量を標準として朝鮮に於ける人口自然增加の必要に備へ得る程度に充たさるゝに過ぎない。内地に於ける米の一人當り一ケ年の消費量は一石一斗五升なるに對し、朝鮮に於ては僅か六斗五升に過ぎない。朝鮮米の内地移出が增加せしめらるれば、せしめらるるほど、朝鮮人自身の消費すべき米は少くなる。それが故に產米增殖計畫と相並んで代用食物の生產及び輸入獎勵が行はれて居るのだ。朝鮮人は一言にしていへば米を内地に賣つて自分は安い滿洲粟を買つて食つて居るのである。内地の食糧問題を解決するに足るほどの鮮米移出を爲すためには、產米增殖計畫成功の曉きに於ても、朝鮮人自身は依然として六斗五升の米を食ひ、尙空腹を充たすために依然として粟、豆、稗、甚だしき

は草根木皮までもあさらねばならないであらう。內地食糧問題を解決するがために、朝鮮食糧問題を犠牲するの嫌ひを生じないとも限らない。而して帝國議會に於て產米增殖豫算が文句なく通過したのは、內地食糧問題解決の効果を信ずるによつたのであつた。議員の誰一人として此の計畫の朝鮮人に及ぼす影響を究明せんとする者は無かつた。或は言ふであらう、米を賣りて粟を買ふ、之れ鮮人致富の途であると。併乍ら第一に多くの鮮人は小作米を納入したる後に、尚賣るべき米の餘裕を持たない。第二に貨幣を得ることは出來ない。第三に貨幣支出の必要も增加する。產米增殖に關する土地改良の工事費の負擔は決して輕微なるものではない。且つこの計畫に基く豫算の增加は租稅負擔の增加を意味する。有力なる資本家は疑ひもなく計畫完成の後には利益を受ける。併乍ら微力なる鮮人地主又は小作人は此計畫自身の財政的負擔に堪え得るや否や。私は決して政府の善意を疑ふ者ではない。却つて政府は鮮人生活の安定と繁榮とをも求めて居るものと信ずる。併乍ら重きをこゝに置いて考へなければ、爲政家の善意も計畫そのもの丶破壞的作用を豫防するを得ない。誰か重きを此處に置いて考へたか。此處に重きを置いて政策を決定せしむべき保障は、朝鮮人自身が政策決定に參與することである。朝鮮人の參政である。勿論朝鮮人が參政すればとて、之によつて社會的經濟的弊害を悉く除去して朝鮮に黃金社會を來たらすことは出來ない。併乍ら多くの無智による過誤を避け得る。勞働階級は自己の階級的代表者を議會に送らねばその利益を十分に擁護するを得ざる如く、植民地人も自ら政策決定に參與せざれば十分に己れの利益を擁護するを得ない。少くとも擁護し得るの保障がない。希望がない。保障なく希望なき處、不安が支配し絕望がひそむ。朝鮮人の經濟的社會的不安を緩和し前途に光明と自信とを與ふべき唯一の手段は、その經濟生活社會生活に關する政策、之に伴ふ財政的負擔の問題等に對する參政權の承認である。

此の問題に關する總督府の方針は如何。大正八年官制改革に伴ふ總督の訓示には既に一言したるが如く「將來文化の發達と民力の充實とに應じ政治上社會上の待遇に於ても內地人と同一の取扱を爲すべき」ことを以て施政の究極の目的なりと言明せられた。政治上內地人と同一の取扱を爲すとは如何なる意味であるか。內地に於ける如き參政權を容認するとの意味であるか。右の言明のみでは將來に於ける朝鮮の政治的狀態について何等明確なる內容ある方針を窺ふことが出來ない。現在朝鮮人が政治に參與せるは大正九年に開設せられし道府面の協議會である。之等は單なる諮問機關であるから、正當なる意味に於け

る參政ではあり得ない。併乍ら朝鮮人が此の制度の運用に熟するを待ちて將來地方自治制度に發展せしむべきことが豫想せられて居る。然るに朝鮮總督府に對する民意代表の中央機關としては議決權ある立法議會は愚か、何等の諮問機關すらも設けられて居ない。又將來に對する約束もない。中樞院の如きは有名無實の榮譽的官制に過ぎない。それ故に朝鮮に於ける中央行政は總督の獨斷專制である。

かくの如き植民地統治制度は廣き世界にも類例乏しきものである。殊に面積人口歴史に於て小規模ならざる植民地に就て見れば、恐らく世界唯一の專制的統治制度である。英國の多くの植民地中全然立法諮議會を有せざるはアシヤンチ、バストランド、ベチユアナランド、ジブラルタル、北ナイヂエリア、北ゴールドコースト、セントヘレナ、ソマリランド、スワジランド、ウガンダ、威海衛、西太平洋の諸島である。之等の小面積の未開黑人地域か或は艦隊根據地と同等の政治的地位しか、わが朝鮮には（臺灣にも、その他のわが植民地のすべてにも）認められて居ないのである。佛國植民地の多くにも、東洋方面についていへば佛領印度支那にも、又米國の比律賓にも、オランダのジヤバにも、程度の差こそあれ住民の參政權は認められて居る。何が故に朝鮮に對しては總督の專制政治であるか。朝鮮人の政治能力が未だ發達せざるが故であるといふか。前議會に於て若槻首相も台灣議會設置運動に關し、この理由により時期尙早を以て議員の質問に答へた。併乍ら何時になれば鮮人の政治能力は成熟せりと判斷するのであるか。現在に於て鮮人の政治能力は比律賓人やジヤバ人にも及ばずといふのであるか。或は又朝鮮人は參政希望を有せずと。かく言ふ者の顏をば私は眼をまるくして見つめるであらう。朝鮮に行いて見よ。路傍の石悉く自由を叫ぶ。石はいくら叫んでも警官に睨まれないから。要するに朝鮮民衆に對して參政を認めざるは、政府が之を欲せずといふ以外何等積極的の理由は存在し得ない。

然らば參政を認むるとして、如何なる態樣によるべきか。此の點に關する方針が確定せざるが故に、參政權容認の方針そのものも確定せられないのでは無からうか。問題は朝鮮の代議士を帝國議會に送らしむべきか、或は朝鮮議會を特設すべきかである。若槻首相は前議會に於て植民地議會の特設の如きは以ての外の事であるといふ風に言明したと記憶する。我國政治家の見解は概ね帝國議會への合併說に傾ける樣である。併乍ら私は之に對して根本的に反對である。樺太の如く、住民の大部分は內地人で人口總數も小なる植民地は、之を內地に包容し帝國議會に議員を選出せしむるを適當とする。併乍ら朝鮮は全然事情

を異にする。前項に述べたる一般的理論によりて、朝鮮は内地と同一議會に代表せらるべき社會的基礎を有せざるを知るべきである。帝國的政治に對する朝鮮の參與の問題は第二段である。先づ朝鮮の内政に對する朝鮮人の參與の問題を解決せねばならない。而して朝鮮の内政は朝鮮人を主とする議會に於て之を決すべきである。恰かも内地の内政は内地人の議會に於て決すべきが如くに。若し少數の朝鮮代議士を日比谷に送りたればとて、朝鮮の内政に關する決定權を得る能はず、又若し相當多數の朝鮮代議士を送らばその投票が時によりて内地の政治を決定するであらう。

我國の植民地統治政策は一般的に同化主義の色彩を帶ぶ。法律も漸次内地法を延長するの形勢である。教育もその骨子は内地教育である。朝鮮の普通學校（小學校）の教科書は内地の國定教科書、又は之を基礎とせるものである。歴史も地理も内地の歴史地理を主とし、之に朝鮮の材料を點綴せるに過ぎない。教授用語は朝鮮語の時間以外は悉く日本語を強制せらる。法制慣習教育言語等の内地化即ち同化主義が朝鮮人の生活秩序を攪亂し、社會的不安を釀成したることは爭はれない。それ故に大正八年獨立萬歳事件の後をうけての施政方針の變更に際して舊慣尊重の一項目を掲げざるを得なかつた。墓地規則屠場規則等は改正せられて舊來の慣習が重んぜられ、又普通學校に於ける朝鮮語の教授の如きも大正八年以後の事である。之等のことはすべて不注意なる同化政策の誤謬をば、獨立騒擾事件なる高價なる犧牲の後始めて體驗せるものである。朝鮮は日本と別個の歴史的社會として取扱はねばならない。政策による同化は不可能である。故に同化政策は誤謬である。既に一社會として同化するを得ず。一議會に代表せしむることも亦不可能である故にその政策は誤謬である。

朝鮮人の朝鮮統治に對する參與は朝鮮議會方法によらねばならない。之によりて始めて民意を暢達し、朝鮮人の前途に對し自信と希望とを獲得せしめる。日本は朝鮮人を「喰ひ物」にして居るんだとの疑惑より免れしめる。朝鮮人に於て不安と疑惑とが無くなる時、少くとも之を輕減し消滅せしめる希望のついた時、始めて朝鮮統治は鞏固なる基礎を得る。

朝鮮議會開設の結果をわが國の利益に對して怖るゝ者はあらう。その想像せらるゝ惡結果のうち最惡たるべきものは朝鮮の獨立分離である。私は此種の論者に對して次の如く言ふ。第一、朝鮮は必ずしも分離獨立しないであらう。反抗なき處に分離はない。道を以つて接する處に反抗はない。從屬政策を以て臨まんか。反抗は必然である。同化政策を以つて臨まんか、同

化は不可能であるばかりでなく、事實上同化政策は被同化者たる者に對しては强制支配たるを免れない。それ故に同じく反抗である。道を以て接するとは人格の自主獨立の尊重である。社會群の接觸について見れば集團的人格の尊重である。之によりて始めて協同融和は可能である。人格尊重に基礎せざる共存共榮融和提携の提唱は弱者に對する阿片である。去勢である。私は之を憎む。朝鮮の自主的存在を認めれば、朝鮮は日本に反抗すべき心理的理由を失ふ。而して經濟的軍事的利害關係の共通はその結合力を有効に發揮し得るに至る。朝鮮は敢て分離の爲めの叛亂を繰り返さないであらう。何となれば朝鮮自身の利益も亦之を要求しないから。

第二に、假りに自主朝鮮が全然日本より分離獨立を欲するとしても、その事は日本にとりて甚だしく悲しむべき事であるか。道を以て領有關係が平和的に終了せられたる場合には、其後の友誼的關係の維持が期せられ得る。假りに朝鮮が我國より分離したとて、當然に我國の敵國たるものではない。

第三に、かの李朝以來疲弊困憊せる朝鮮が、我國統治の下に於て活力を得、獨立國家として立つの實力を涵養することを得ば、之れわが植民政策の成功であり、日本國民の名譽ではないか。朝鮮統治の責任を完全に果したるものとして滿足すべきではないか。

要するに朝鮮に社會上及び政治上自主的發展を遂げしめ、自主的地位を容認することは、正義の要求する處である。而して之は又朝鮮と日本との帝國的結合を鞏固たらしむる唯一の途である。與ふる者は百倍して受けるであらう。自主々義の統治政策は利益の點よりいふも最も本國に有利なるものであらう。先づ正義を求めよ、然らば他の必要物は悉く之に添へて與へらるといふ格言は、植民地統治政策に關しても亦眞理であると私は信ずる。

朝鮮議會の開設は朝鮮統治の根本方針、その目標たるべきものである。併乍ら朝鮮議會の組織及び權限が如何にあるべきかは更に具體的に之を定めねばならない。この問題について此處に論ずるの暇を私はもたない。各國植民地議會の實例を參考し、恐らく漸を以て進むべきであらう。臺灣議會設置請願運動者の要求する處も亦參考し研究せらるべきである。私の本論文に於て主張したる處は、朝鮮統治政策の基礎をば朝鮮議會の開設、少くとも開設の方針に置くべしとの根本問題にある。朝鮮併合以來十六年、「文治主義」の施政以來七年、統治の根本方針を確定すべき時はもう來て居るのではあるまいか。眼單純なればよく物が見えるといふ。何處に朝鮮を導くべきかの根本方針が決定せられて、朝鮮統治の諸問題は自ら統一的解決の途をあたへられる。私は困難なる朝鮮統治の當局者に對して深き同情なきを得ない。同時に朝鮮統治の重き責任を有する我國民が此問題に關して一層の注意を拂はんことを願はざるを得ない。之れ李王の薨去に際してこの一文を草したる所以である。(五月四日)

議會政治の崩壊とボルシェヴイズムの適用性

青野季吉

前論

議會政治の崩壊といふ聲のはじめて聞かれたのは、かなり前いことである。それが一つの觀念的な疑惑といふ程度でなく、一つの政治的の事實として指摘されたのは、すでに世界戰爭以前のことであつた。しかもそれが、議會政治において最も典型的な發達を見てゐると言はれてゐたイギリスに於て指摘されたことは、十分に世を驚異するに足るものであつた。

その議會政治に對する不信は、世界戰爭の前後において高調に達し、ロシヤにソヴイエツトの政府形態が出現して、見るに足る成功の第一歩を示した時に最高調に達した。ところがその後、西歐が極度の經濟的危機したがつて政治的危機を、辛じて一時脱することが出來て、とにかくにも表面だけ經濟的政治的に安定を取戻すことが出來てからは、議會政治崩壊の不信的な叫びを聞くことも、また自ら稀れになつて來た。

しかしながら議會政治崩壊の事實的進行は、經濟的・政治的の時々の局面によりて、その速度を妨げられはしてゐるが、進行そのものは依然としてつゞいてゐる。このことはその進行の速度が、何等かの政治的、經濟的の大きな出來事の故に、特に高められ、議會政治の機能喪失の事實があざやかに目に映つて來る時、いつも思ひ出したように、しかも一度は一度より强く、議會政治崩壊といふ聲が新らたに聞かれることによつても、十分に示されてゐる。

たとへば現在世界の視聽をあつめてゐるイギリスの總同盟罷業である。イギリスにとつて經濟的、政治的にこれほど大きな問題は、世界戰爭以後なかつたと言つてよい。この脅威の豫感は政府の補償金支拂期間の滿了する五月一日の近づくにしたがつて次第に濃厚の度を加へて來た。そしてその豫感はお定りの結

論へと落ちていつた。議會政治はとうていこの大問題を解決することは出來ない。この度びこそは社會闘爭をもつて終りを告げないではおくまいといふ悲觀的た結論でなる。しかもそれが、多分にイギリス的な妥協的解決を見る豫想がありながらのことである。そこに意味深きものがある。かくしてまた西歐の政治思想界に、議會政治崩壞の聲を新らしく聞くに到つたのである。

私はその一例としてリベラルな政論家として知られてゐるフランク・シモンズの最近の論文を指摘しやう。これは總括的に歐洲に於ける議會政治崩壞の事實を取扱つたものであつて、この種の意見の代表的のものと言つてよからう。いま、かいつまんでそのポイントを紹介するとかうである。

イギリスは戰後の疲弊からたしかに恢復してゐるに違ひないが、事態の改善された範圍は割合に狹く、まだ前途は遼遠で、基礎的産業特に石炭業は危機に瀕してゐる。特に來る可き補償金制度撤廢の日に起る可き炭業問題は、イギリス死活の大問題である。幸ひにして妥協が成立すれば、イギリスはこの國民的大危機をのがれたことになるが、總同盟罷業となれば、全國の産業は一切麻痺すべく、國家の全生命はたちまちにして休止する。かゝる麻痺の起る時こそまさに災厄が惹起される時である。しかし『妥協が成立するといふのは、紛擾が起るといふと等しく骰子を振るやうなものである』とイギリス人自身が言つてゐる。

聰明なるジョン・ブルは何とかしてこの危機を切りぬけるに相違ないが、このイギリスの危機の切りぬけ方如何によつて、歐洲の議會政治の將來は左右される。もしイギリスの制度の伸縮自在なることが證明され、この大問題を處理して、生命の危局面を轉回し得れば、差詰めフランスは獨裁政治化することをまぬがれ、現在北はモスコーから南はイタリーにいたるまでの獨裁政治の大風潮にたいして、反動が起るであらう。いづれにしてもイギリス及び歐洲の議會政治が、この國民的問題によつて、根底から脅かされてゐる。

フランスでは過去二ケ年の間に、四度内閣が代つた。そのいづれもが財政問題で行詰つたのである。現在のフランスは繁盛の國家であつて、荒廢地の石炭産出量は戰前よりは多量であり、輸出は近世史上始めて輸入を超過し、諸工業は好景氣で、失業者はないといふ有樣である。それにも拘らず、政府の財政は何とも出來ぬ狀態である。その消費額は依然として收入額以上である。フランの下落もどんな方法でも救はれない。政府も議會もその前に立つて、積極的な何事もなすことが出來ない。積極的政策を掲げた法案は、政黨を分裂させ政局を複雜な

らしめる結果しか生まない。仕事をしそうに見えたエリオ內閣は、こつそり通貨を濫發して、一時をごまかそうとしたので仆れた。資本課税では、ボアンカレー內閣が與黨に分裂を招いて倒れてしまつた。增税案は我利的集團のために一蹴せられ、農民課税案は農民派から死物狂ひの反對をうけ、資本課税には資本家によつて極力反對されてゐる。その前に立つて議會は何んのなすところも知らない。

かくてフランスの國內では「議會制度は時弊救濟の能力なく、又議會の諸領袖は、國民的要求を感知し得ず、また處理するを得ないとの信念が、いよ〳〵瀰漫して來た。」フランス人が複雜な感情をもつて、ナポレオンを回想し伊太利を羨望するのはそのためである。

ドイツでは依然として重大な財政的危機が迫つてゐる。それを前にして一ケ月も內閣の組織が出來ないやうなこともあつた。數十萬の失業があり、通商はすつかり麻痺してしまつてゐる。ライヒスタハを形成する各政黨內に甚しい意見の扞格があつて、總選擧をやつて見たところで、二大政黨の出現などは思ひもよらないし、聯立內閣の希望も稀薄である。現在のドイツにはブロック(政黨の聯合)はあるが、議會の多數派がない。五百名の議員で出來てゐる議會の中に、一方に百三十一名の議員を擁する社會主義者の一團があり、これに對峙して百十名を擁する國民黨がある。議會で多數を占めるにはその一方と聯合せねばならないが、何者とも妥協しない四十五名の共產主義者・の一團があり、加特利黨、人民黨、共和黨中にも、ダイハーズがゐて聯合を妨げる。この狀態は經濟的危機の進行と共にますます深化されるもので、それによつて議會政治は刻一刻と麻痺してゆくばかりである。

西歐の三大强國ではそんな具合に、議會政治が麻痺してしまつてゐる。「米國では漠然とデモクラシーと呼び、歐洲大陸では稍々明白に議會政治と名付けてゐる事柄が、大體に於て歐洲大陸では崩壞してしまつた。モスコーのソヴイエット政府よりローマのフアシスチ政府に至るまで、悉く獨裁政治である。スペイン、ポルトガル、ギリシア皆擧に執政官の下に政治が行はれてゐる。その表看板こそちがへ、その他の國々もその實は同じ狀態である。」

かくてシモンズは逸早く實質に於て議會政治をすててムッソリニの獨裁政治によつたイタリーを論じ、來るべき歐洲の政局にイタリーの演ずる役割を豫斷してゐるが、それはこゝでは問題でない。現に歐洲の議會政治が崩壞しつゝある樣相を、何によつて知れば十分である。(シモンズの論文の詳細はジャパン・タイムス社パンフレット第四十八冊參照)

いま私は全然歐洲における問題を取扱つてゐるのであるが、こゝで一寸日本の議會政治の狀態を觀てゆくのも無駄ではないであらう。

日本の議會における議員の行動が、いかに議會政治否定的であるかは、今更說明するまでもないであらう。國民が議會の無能を實感するまへに、議員自身がその野獸の如き行動によつて、またその「臭いものには蓋」式の仕打によつて、議會を否定してしまつてゐるのである。この事實だけでも日本の議會政治がいかなる過程をとつてゐるかゞ分る。その上さきに歐洲の場合に觀たような、政黨の小黨分立化は近年日本の政治界の著しい現象と言つてよく、しかも多數黨の形成や聯合の困難は、やはり歐洲の場合と符合してゐる。この現象もまた議會政治の行詰りを語るものでなくて何であらう。

しかし乍ら歐洲の場合と同じ意味で、日本の議會政治の崩壞を語ることは、まだ早急でである。といふのはいまだ日本の議會政治には勞働階級の勢力が反映して居らず、やうやく普選によつて、それが徐々に反映して來やうといふ場合であり、しかも勞働農民黨の宣言に見る如く、ともかくにも日本の勞働階級は議會政治に新らたな信任を表明した際だからである、日本の議會政治の崩壞が語られるとすれば、これはこの新たな政治勢力が議會政治の舞台に上つて、實際にその新らたな議會が重大問題に面と向つて、その試驗を經た後のことである。とは言へ、先進國の政治的、經濟的の現象は、後進國のそれを豫示するものである。しかも日本の議會政治が、あらゆる場合において、歐洲の前例に近づいてゐることは、何人も拒むことが出來ないであらう。

私はこれまでの敍述によつて、歐洲における議會政治が崩壞の過程にあることを、簡單に見て來た。この簡單な敍述は、次に來る問題即ちボルシェヴィズムは西歐の文明國に適用され得るや否やの問題が、いかに現實に、差し迫つた問題であるかを說明せんがためであつた。實に、議會政治の崩壞と同時に語られるものは、新らしい獨裁政治の出現であり、新らしい獨裁政治の一形態として、最も大きな勢力をもつて問題となつてくるものは、ボルシェヴィズムでなければならぬからである。ボルシェヴィズムは西歐の文明國に適用され得るや否や？、この問題の解決の要は、眞に刻一刻と迫つて來てゐる。

いま私は、この問題にたいして明確な解答を與へてゐる第三のインターナショナルの内部の理論や、レーニンの所說を手引とすることを故意に避けて、イギリスの自由思想家バートランド・ラッセルと、アメリカの社會主義者スコット・ニアリン

グとの、この問題に關する公開討論をやゝ詳しく紹介し、最後にその論爭のポイントについて檢討し、この問題解決の一助としたいと思ふ。右の討論は、一昨年アメリカに於て、公開討論同盟（ゼ・リーグ・フォア・パブリック・ディスカッション）の主催の下に行はれたもので、極めて興味あり、示唆に富んだものである。

ラッセルとニアリングの討論

一 ニアリングの肯定論

この論議で『西歐の文明國』といふ場合には、西歐羅巴諸國、カナダ、アメリカ及び過去一世紀乃至二世紀の間に、歐羅巴文明に基く經濟的・社會的形態を直接に採用した國々を意味する。これを豫じめことはつておく。

私はいまこの肯定論を三つの點から論ずることにする。(一)或る特殊な統治形態をして適用可能なものとする原因は何であるか？(二)ソヴイエット統治形態とは如何なるものであるか！(三)私がその統治形態が西歐文明國に適合すると信ずる理由如何？この三つの問題に答へることに成功すれば、私はこの大問題にたいする肯定論の建設に成功したことになるであらう。

第一問。或る特殊な統治形態をして適用可能なものとする原因は何か？統治の諸形態は、社會進化の一定の段階に應ずるものである。歐羅巴の歴史はこの命題にたいして立派な實例を與へてゐる。

先づ封建制度は、領主支配の制度で、人民の一部が土地を領有し、他の一部がそれを耕作するといふ基礎に立つたものである。そこで右の領主達が政治的統治を左右した。といふのは經濟的組織を左右したるものが彼等だつたからである。封建制度は經濟的には農業を基礎とし、社會的には地主と農民の階級分配を基礎としたものであつた。即ちこの段階に於ける歐羅巴の統治形態を決定したものは、人民の生業の性質、農業を主とせる產業の性質であつたことを知るのである。次には封建制度の崩壞につれて起つた自由都市の統治である。封建制度の下に發達した都市は、第一には商業の、次いでは手工業の中心であつた。この中心に向つて、歐羅巴及びアジアのあらゆる地方から人民が集つた。そうした都市は、遂に全歐羅巴にひろがつた。その過程のうちに形成されたものが自由都市統治で、それは工業と商業の生長したところには何處にも生長したのである。ここにもまた統治の形態は、社會進化の一定段階に應ずるとの一般命題の立派な實證がある。第三には現在のブルジョア國家と呼ばれてゐる統治形態である。新興商工業の中心たる自由都市

が發達し、イギリスが先づ商工國家となり、ベルギー、オランダ、フランス、ドイツ、北部イタリーがその跡を追つた。かくして農業支配は次第にくつがへされ、生産の形態が變り生活の樣式が變つた。それにつれて現出したのがこの第三の統治形態である。それはイギリスでは局限された帝政の形をとり、フランスでは共和國の形をとつたが、本能的にその倚る基礎は同一であつた。つまりその統治は、一定の商業的及び實業的階級の利益にもとづいて組織されたものであつた。こゝにまた前述の一般命題にたいする赫々たる實例を見るのである。たゞその統治形態の確立に時間に遲速があつたのは、封建制度の崩壞が國々によつて遲速があつたからである。つまり一定の統治の形態は、人民の論理的性質や言語上の單位や民族的または宗教的差異によつて決定されるものでなく、實に經濟的・社會的の進化の一定段階に應ずるものである。

然らば何故ソヴイエット統治形態がロシアに現はれたか？

ロシアの產業の八割五分はまだ農業でしたがつて廿世紀まで封建制度の諸要素が持越された。一九〇五年の革命は、新興商工階級がその封建的な拘束から脫しやうとする運動であつた。そこで廿世紀の初頭、世界戰爭の前夜のロシアは封建的でもなく資本主義的でもなく、その過渡にあつた。そこへ世界戰爭が來て、封建制度も資本主義も倒れてしまつたのである。一九一五年から一九一七年のロシアは眞に混沌であつた。舊秩序は破壞されてしまつて、一億三千餘の民衆はもがきにもがいて、新秩序を求めた。ソヴイエット統治形態はそこに生れた新らしい秩序の最初の表現であつた。それがロシアに現出したのは、舊い社會秩序が第一にロシアで破壞されたからである。もし舊い秩序がドイツで第一に破壞されれば、それは先づドイツに現出し、イギリスで破壞されゝばイギリスに現出したであらう。

第二問。ソヴイエット統治形態とは如何なるものであるか？

これに關してはラッセル氏と大した意見の差はあるまいから、簡單な說明でよいであらう。

ソヴイエット統治形態は、資本主義と社會主義との間に橫はる深淵に橋渡しをする過渡的形態であつて、農民と勞働者の委員によつて運用される獨裁制度である。それは約六十萬の男女から成る共產黨によつて支配されて居り、それらの男女は、生產階級の經濟的解放の觀念を明確に把持してゐる人々である。彼等は現在ロシアに共產主義が行はれてゐるとは言はず、從等はその終極目的とする共產主義の樹立の方に步いてゐると自ら聲言してゐる。

現在の西歐の統治形態とソヴイエットのそれとの著しい差異

は、三つの點に存してゐる。(一)地方行政區が經濟的な區劃から成つてゐて、地理的な區劃から成つてゐないこと。したがつて代表者選出の基礎が經濟的又は職業的であつて、我々の制度に見るやうに、地理的や地方的でない。これはソヴイエツト制度が人類に貢獻した最大なもの丶一つである。といふのは、今日我々の實際生活は經濟的又は職業的の線に沿つて峻嚴に配分されて居つて、地理的又は信教的の線に沿つては、それほど峻嚴に配分されてゐないからである。(二)經濟生活を科學的に組織してあること。今日西歐においては政治生活は科學的に計畫されてゐて、個人の越權が許されないが、經濟生活ではまだ個人の不當利得や投機が許されてゐる。ソヴイエツト制度はそれらの反社會的な行動を芟除す可く、經濟生活を科學的に組織したのである。(三)「働かざる者は食ふ可からず」といふ標語に現はれた制度である。我々の制度では社會に何の勞務的貢獻なしなくても、單に財産をもつてゐるといふ理由だけで、大きな所得を得てゐるが、ソヴイエツト制度の根底的な法律は、社會に何の貢獻もしない人には、投票權も事務所を持つことも許してないのである。

このソヴイエツト統治形態は實に、戰爭、國內戰爭、飢饉、惡疫及び苦楚の七ケ年の産物である。

第三問。私がその統治形態が西歐の文明國に適合すると信ずる理由如何。ソヴイエツト統治形態が、西歐の文明國に適合するのは何時であるか? 今ではない。それがロシアに適合したのは、ロシアの舊秩序が破壞した時であつた。同樣に西歐文明國の舊秩序が破壞する時、それはそれらの國々に適合するものとなるであらう。西歐に平和と繁榮と進歩がある間は、その形態は適合しない。が、國際戰爭と階級戰爭と困難とが、西歐の社會の構成を破壞する時、ソヴイエツト統治形態の採用は、不可避となるであらう。然らば資本主義社會が破壞されるのはどういふ機會であるか? 諸君は、ラツセル君の近著『産業文明の前途』か、ウエツブ夫妻の『資本主義文明の崩壞』か、前イタリー首相ニツチの『ヨーロツパの荒廢』かなにもといて見にへ。諸君はそれによつて、歐羅巴の社會の崩壞の不可避なることを確信するであらう。それでもまだ不信であるならば、ドーズの報告書を讀んで見るがよい。そこにはありありと、國際的、階級的の戰爭の萌芽がある。それこそ我々の文明の破壞を豫示するものである。

かくて西歐の資本主義が破壞される時、ロシアに於ける共産黨のやうな强固な組織體に指導される工業勞働者の獨裁が現出し、經濟的區劃によりて社會を建造し、經濟生活を組織化し、

新秩序を樹立すであある。而して此の新秩序は、ソヴイエット統治形態の本質的諸特質を持つであらう。

二　ラッセルの否定論

ニアリング君はカルル・マルクスの教理にしたがつて、産業の形態がいかなる社會に於ても、統治の形態を決定するといふ原則から出發した。私はこれを承認しないが、かりにこれを肯定するとする。ところでボルシエヴイク革命當時のロシアの産業の形態は、西歐のそれとは甚しく異つてゐた。資本主義はまだ始まつたばかりであり、農業があり、手工業があつた。その事はレーニンの『新經濟政策』採用についての言論を見れば分る。だからニアリング君の原理を承認するとすれば、ロシアに適合した統治の形態は、我々の國家に適合する統治の形態とは、全く異つたものであらうといふことになる。

ソヴイエットの統治形態は、十七世紀にクロンウエルによつてイギリスに樹立された統治形態に細かい點までよく似てゐる。つまり同じ經濟の發展段階に屬するものだからである。クロンウエルの當時には、近代資本主義が芽を出したばかりであ

人民の大多數
政府の軍隊

を、彼は『聖徒軍』と呼んだ。その軍隊が今日ロシアで『赤軍』と呼ばれてゐるが、本質は同一のものである。

ニアリング君はソヴイエット政治を、共産黨に支配せられ、農民及び勞働者の委員によつて運用される中央集權的獨裁だと言ふが、それらの委員は決して統治に參與しない。クロンウエルの政府が清教徒黨の政府であつたやうに、ロシアの政府は共産黨の政府である。選擧の形態はどうであるか。投票は政府の嚴重な監視の下に行はれ、反對者の投票は拒まれるのであるから、これまた問題とならない。

最後に一寸觸れたやうにニアリング君は、經濟的原因のみが社會の形態を決定するといふマルクス主義者の正統論から出發してゐる。私はとうていそれを是認出來ない。宗教的、倫理的、傳統文化的諸原因が、社會形態の決定に、極めて大いなる役目を演ずると、私は考へてゐる。たとへばロシアの文明と支那の文明を比較するがよい。兩國の經濟的條件には、大した差異はない。ところがその文明には甚しい差異がある。ロシアの文明は宗教的で、征服的で、集中的であるが、支那の文明は、自由思想的で、分散的で、非征服的であると言つた具合である。そんなわけであるから、ロシアの傳統と西歐の傳統との間の差異は、兩者に同樣なものを適合させることを拒げるものである。

ボルシエヴイキ及びその讃美者の一般に誇ることは、彼等が『科學的』だといふことである。それは全く虛構である。科學的な人間とは、彼の結論に對して注意深い、用心深い、漸進的な、實證的な人の謂ひである。ところがマルクスの『經濟決定史觀』――ラツセルは唯物史觀をかう呼んでゐる――の追隨者等のやり方は、さういふ科學的な方法ではないのである。コントの實證主義の獨斷說はすぐ箔が剝げてしまつたが、それに比べると、マルクスの右の獨斷說は幸である。しかし現在世界が、マルクスの述べた線に沿つて發展してゐるとは考へられない。マルクスの表式は余りに單純すぎる。世界はそんなに單純に作られてゐない。

ロシアを含めてのアジアの諸國には、一群のインテリゲンチヤがある。彼等は西歐の觀念に通じた教養ある人々である。彼等はその民族的虛榮から、西歐に適合したものが東洋に適合しないわけはないと無雜作に考へる。これがそもそもの間違ひである。東洋には巨大な無教養な民主々義があり、極めて多數の文盲民衆がゐる。これらの民衆はとうてい我々西歐人の實現したやうな民主々義を實現することは出來ない。そこでソヴイエツトの指導者は、別個の方向を發見した。それは一定の政黨による統治であり、一群のインテリゲンチヤの統治である、過渡的段階の統治として、これが最善のものであらう。無教養の國家に於ける過渡制度として、ボルシエヴイキは蓋し優れた道を選んだと私は考へる。が、民衆の大多數が讀み書きが出來て、政治に參加する能力のある所では、ロシアの踏んだ道とは、別個の道を踏まなければならぬ。

元來ロシアの制度は、昔ほど、ビザンチンから、ギリシヤ文明の全傳統、東ローマ帝國の全傳統の遺物である。東ローマ帝國には上に至高權を有する皇帝があり、その下にその共同帷幄の宗教生活を指導するコンスタンチノープルのパトリアルキがあつた。ところが西歐では皇帝は滅亡し、法王は國家とは緣のないものとなつた。西歐に見た自由のための教會と國家との衝突は、東洋にはなかつた。そこでは教會は國家に從屬し、專制政治があつた。これと同じことがボルシエヴイキの下に起つてゐる。ボルシエヴイキ統治が國家を代表し、第三インタナショナルが教會を代表する。そして後者は、前者に隸屬してゐる。これがビザンチンからの傳統であり、西歐の傳統を持つてゐる民衆は、その傳統から深い淵によつて隔てられてゐるのである。かう論じて來るとニアリング君は、私が經濟的ならざる多くの考察を持ち出すことに一驚されるであらう。私は飽きでも信じてゐる。凡ての事象の根底に經濟的の事象があるとするマルクス主義者の

獨斷は、誇張されたものであると。多くの事象の根底に經濟的事象が潜んではゐるが、凡ての事象にとつてはそうではない。

私は世界の眞の進歩は、革命的方法によつては達成されないと信じてゐる。眞の進歩はヨリ一層漸次的に、ヨリ一層目立たぬ形に於て行はれるものである。ロシアを模倣しやうとしてあせつてゐる西歐の急進派は、目ざましいものに打たれてゐるのであり、性急にものゝ結果が見られると考へてゐるのである。これは決して科學的でない。

ニアリング君の述べたやうな突變が、我々の文明國に起つて來るとすれば、それは共産主義の樹立にも結果しなければ、社會主義、資本主義その他一切のものゝ樹立にも結果せず、未開狀態への復歸となつてしまひ、我々の産業制度の破壊となつてしまふであらう。共産主義も資本主義も共に、産業主義の形態であつて、兩者とも一定の文明を前提としてゐる。兩者とも、破壊、飢餓、野蠻と兩立するものでない。そういふ狀態の下では共産主義は愚か、我々は弓と矢で野獣を狩る狀態へ逆戻りするであらう。もし我々が戰爭をするとすれば、こんな狀態の到來が豫想されるであらう。ロシアは或る點まで再建された。といふのは他の諸國民が生き殘つてゐて、ロシアに必要物を供給したからである。しかし主要國民が同時に一齊に、突變的な狀態に投込まれゝば、誰もそれらの國家を助けてくれるものはないのである。飢餓が來り、住民の大部分は死滅するであらう。

これが我々の直面しなければならぬ危險である。私が、ロシアで採用された統治の形態は、西歐にとつて必然の段階であると考へられぬ所以である。我々は他の道によつて、即ちヨリ漸次的な、ヨリ目立たぬ方法によつて、我々の過渡を通過しなければならぬ。華々しいことを歡ぶのや、劇的な光景に夢中になることは過去のものとなつて仕舞つた。いまや確實な、落付いた仕事をなし、一歩一歩と建設しなければならぬ時が來た。ニアリング君と私とが等しく望む所を實現しやうとすれば、これが我々にとつて爲さなければならぬことだと私は信ずる。

三 ニアリングの駁論

ラッセル君は聽集諸君を歡ばせると約束したが、お終ひには諸君に弓と矢をもたせて、虎狩りに追遣つてしまつた。それはそれとして私はマルクスが言つたからといふ理由で、正しいといふのでなく、私がそれを眞理だと信じたから言つたのである。私は統治の形態は社會進化の段階に應ずると斷定した時、私はマルクスの言葉を引用して、これを證明したのでなく、歴史を引用して、證明したのである。ラッセル君がその斷定を否

定するならば、私の引用した歴史について論議す可きである。

クロンウエルとロシアとは獨裁といふ點で同じであり、やはり獨裁といふ點ではイタリーとロシアとも同樣であるが、クロンウエルもムツソリニも、如何なる形態の經濟的再建をも提議してゐないのである。然るにソヴイエツト政府は、私が曩に說明した經濟的形態の樹立を目ざして進んでゐる。

ラツセル君はボルシエヴイズムを好まない。私もそうである。同君はまた戰爭も好まない。私もそうである。更に同君は獨裁を好まない。私もさうである。ラツセル君は旗日のピクニツクに出る時、雨の降るのを好まない。が、雨は降つて來るかも知れない。私がラツセル君に問い度いのは、君も承認してゐるやうな危機が來た時、イギリスの資本家制が破壞した時、過渡社會の形態は何であるかである。私は君にその形態を産出して欲しいとは言はぬが、示唆して欲しいものである。

ラムセー・マクドナルド氏は一九二〇年に出した著書『議會か革命か』のうちに言つてゐる。いまや社會主義的プログラムが政治鬪爭の主題なる段階に達した。總選擧は、レーニンが革命によつて得たと同じ權力を我々に與へるであらう。そして國家が破産し、混沌がみなぎつた時、公安委員會はホワイト・ホールに歩み入り、舊い混沌のうちに新秩序を樹立することに努めるであらうと。

それがロシアに於て起つたことであり、十七世紀のイギリスでクロンウエルが政權をにぎつた時に起つたことであり、總じて一つの社會秩序が破壞し、他の秩序の再建される過渡期に起つて來ることである。

ラツセル君と私との論爭はその點にかゝつてゐる。私は破壞が來た時、それからぬけ出る道があると主張する。そしてマクドナルド氏の道がそれだとする。ところでラツセル君は弓と矢と野蠻しかないと言ふのである。

資本主義制度が破壞する前に、我々の或る者が破壞の來ることを豫見し得た時に、出來るだけ多くの民衆を糾合して、その破壞に應ず可き實際的のプログラムを樹て、行き混沌の中に、新らしい秩序を齎らすことに努力しなければならぬ。我々の欲するところは、恐ろしい困難を脫却し得るところの、實際に政治家的な道であつて、弓や矢や野蠻の如き時間つぶしの饒舌ではない。

ソヴイエツトの統治形態については、我々の意見は本質的に一致してゐる。然らば第一、國際戰爭、階級戰爭及び經濟的困難のために、西歐の資本主義社會が破壞されるであらうか？ラツセル君もされると考へ、私もそう考へる。資本主義制度は潰

滅するであらうし、現に消滅しつゝあると我々兩人共信じてゐる。

第二、資本主義國家、資本主義秩序にとつて代るものは、社會主義國家又は生産者國家でなければならぬと、我々兩人共信じてゐる。この點でも我々は大體一致してゐる。

そこで第三、破壊が來たとき、私は、强く集中された行動委員會が必要だと信じ、それは生産者の指導の下になければならぬと信じ、立派に組織され嚴肅な規律にしたがふ政黨によつて率ひられなければならぬと信ずるのである。私はまた、生産機關、資源等を社會化し、産業を組織化し、職業代表を基礎として組織した自治單位を樹立し、生産に參與せぬものは、生産物の分配にあづからしめないといふ法則を樹立し、もつて經濟的解放を目指さなければならぬと信ずるのである。

これが過渡的段階であつて、現にソヴイエット・ロシアの企てゝゐるところであり、一度びその時が來れば、イギリスもドイツもフランスもアメリカも、採用せざるを得ないところの、過渡的な段階であり、經濟的形態である。

四　ラッセルの再駁論

何よりも先づ私は、我々の西歐文明が破壊しやうなどとは少しも考へない。たゞ破壊される可能性があると言ふに過ぎない。人類の事柄に於ては、かくかくのことが起るなどと豫斷す可きものでない。これこそ非科學的である。

何等かの機會で西歐の文明が破壊されるとすれば、それはたゞ戰爭に敗北した場合に限るが、西歐全國家が同時に敗北するといふことはあり得ないし、勝利を得た國家は必らずや新らたな氣力を回復するであらう。

ニアリング君は私が社會主義は實現されないと言つたやうに述べたが、そんなことはない。私はたゞ、ボルシエヴイキの方法では西歐に社會主義を實現することは出來ないと言つたのである。西歐では、社會主義は漸進的方法によつて始めて實現され、革命によつては決して實現されないと、私は固く信じてゐる。革命は、當時のロシアの如き發展階段の遅れた國家には適用出來るが、進んだ産業社會には適用されない。

私は戰爭によつて、ニアリング君が心に描いてゐるやうな良き諸結果に到達し得やうとは信じない。戰爭は今後ますます破壞的になつて行き、文明を消滅し去るものとなつて行き、産業の科學的組織を不可能ならしめる方へ事態を導いてゆく。しかもこの組織は、我々兩人共に、標的としてゐるところなのである。人類の社會は、善き方へはのろ〳〵しか動いてゆかない

が、悪い方へは足早に歩いて行く。

そこで我々は社會主義を實現しやうとすれば、平和的な宣傳と、說得によつてそれをしなければならぬ。しかもそれを平和な時において、繁榮の日に於て爲さなければならぬ。これは民衆の叡智に訴へることであるが、急に運ぶことではない。といふのは民衆の叡智は、我々が望むほど偉大なものではないからである。しかし民衆の叡智などゝいふものは存在しないと言ふのは誤りであつて、かゝる見解は餘りに人間性にたいする悲觀的見解に基いたものである。

我々はまだ產業組織に於ては嬰兒時代にある。產業の近代的形態が出來てから、まだ百年を經たに過ぎない。人類生活から見たならば、短いものである。我々の思想はまだ農業的であつて、工業的ではない。それが工業的になり切るには、まだ長い時間を要するであらう。さうなり切つてしまつた時、ニアリング君と私の共に描いてゐる方法が採用されるであらう。

民衆が理解しもしないことを、ある危機に乘じて强要し、民衆がまだ行かうと思ひもしない方向へ、民衆を押しやるのは、一瞬間の仕事でしかなく、次の瞬間にはその仕事は失はれてしまつて、また凡てを最初からやり直さなければならぬであらう。

ボルシエヴイキの仕事と、クロンウエルの仕事を比較したのはその故であつて、淸敎徒は極めて尊い理想を描いて居り、立派な人達であつたが、彼等の理想は、民衆の理想ではなかつた。それだから民衆は少しばかり經驗をなめると、『もう二度とこりこりだ』と言つたのである。民衆に多かれ尠かれ、それにたいする準備が出來るまでは、物事を實現しやうと企てるのは無駄である。

ニアリング君等の代表する見解、卽ちマルクスの見解が構成された時代は、一般にヘーゲル哲學が論理的な哲學であつて、ヘーゲル哲學に追隨する習慣があつた。此から彼、次いでは第三のものへと、明確な移渡で組立てられてゐる。したがつてマルクスの見解もその習慣にしたがつてゐる。その見解は、生物學が今日のやうに我々の思想を捕へなかつた時代の產物であつて、その後に發達した生物學は、人類社會をもつて、徐々に生長するもの、一本の樹の如く生ひ立つもの、それ自身の生命をもつてゐるものである、論理や理性で豫表された一定の仕方で動くものでなく、生命の法則によつて豫表された仕方で動くものであるとしてゐるのである。人類社會は、マルクス流の見解のやうに論理的な移渡によつて動くものでなく、徐々に少しづゝ現はれて來る生命の變化にしたがつて動くものである。生物學はさう敎へる。

突變的革命によつて、事物の名目を變へることは出來る。し

かし民衆の全習慣及び運動を變化することは出來ない。古いものが新らしい名で復活して來ることがある。それが常に革命の持つ危險である。フランス大革命がそのよい例である。中頃には、公安委員會があつたが、終ひにはナポレオンが出て來て、舊時代が逆戻りしたではないか。その革命の唯一の功績は、農民の所有權を確立したことであると私は考へてゐるが、それにしてはあの犧牲と苦痛とは餘りに大に過ぎたと思ふ。

　ロシヤに適用された方法が、西歐の文明諸國に適用す可き方法であると信じられない所以は、そこにあるのである。革命は名目を導いて來ることは出來やうが、現實を導いて來るものは實に進化である。

檢討

　私は右に於いて、ラッセルとニアリングとの討論を見て來た。それはいろんな問題に觸れたものであり、特にラッセルは問題を自由自在乃至は勝手氣儘に、わき道へ引込んでゐるが、だいたい論爭點は左の諸點にあると見てよいであらう。私はいまその諸點にいて若干の檢討を加へるであらう。

（一）一定の統治形態は社會進化の一定の段階に應ずるものであるとのニアリングの唯物史觀的な一般命題に對するラッセルの反對である。ニアリングはこれを歴史的事實によつて說明してゐるが、ラッセルは唯物史觀――彼の言ふ「經濟決定史觀」――に對する一般的不信によつてそれに答へてゐる。ラッセルが同じ歴史的事實で駁論しないのは、何としてもその駁論の不備であるが、ニアリングが唯物史觀を一般的に辯護するとを敢てしないのはラッセルの挑戰を避けてゐる嫌ひがないでもない。特にその一般命題の反證としてあげてゐるロシアと支那との比較論には、どうしても答へなければならぬものだと思はれる。

　要する點の論爭は、唯物史觀の肯定否定にかゝつてゐるが、ラッセルが唯物史觀を一個の機械論とし、決定論的のものと見てゐるところに、それにたいする甚だしい無理解がある。彼が唯物史觀を「經濟決定史觀」と言ひ表はしてゐるのでも、その一般は知られる。唯物史觀は今日少し注意深い研究家の常識となつてゐる如く、機械論でもなく決定論的のものでもない。であるから唯物史觀の見方は、謂ゆる形式論理的のものでもなく、生物學以前のものでもない。といふのは唯物史觀の社會變動理論は、十分に生物學的の漸次的發展を認めてゐるからである。唯物史觀の說く變革理論は實はその漸次的發展を基礎としたものに外ならないのである。

　そう云ふわけでニアリングの一般命題にたいするラッセルの

駁論は極めて不十分であつて、その命題は依然として擊破されずに殘つてゐると言はなければならぬ

（二）ソヴイエット統治形態の問題である。ラッセルによると、それはロシアの如き遲れた國家には適用するが、西歐の進んだ資本主義國家には適用せぬといふ。しかしニアリングの指摘したソヴイエット制度の三つの大きな特質、即ち經濟的單位による統治區劃の配分、經濟生活の科學的組織、働かざるものは食ふべからずといふ新秩序の原則が、果して進んだ資本主義國家の社會主義への過渡に於て、適用されないものであるか否や、それはラッセルによつて少しも論議されて居らない。しかも進んだ資本主義國の經濟的事實が、その方向へ向つて進んでゐることは爭ふことが出來ない。

その過渡的な形態を樹立するものとして、ソヴイエット制度以外に、如何なる形態のプログラムがラッセルにあるか、それを示唆して欲しいと言ふニアリングの注文は、尤なことに思はれる。ラッセルはそれに直接答へないで、平和的宣傳、說得、民衆の叡智、人間性にたいする信賴等、等を力說してゐる。これでは答へになつてゐない。ラッセルの欲する社會主義は、直接に資本主義につづいて完全に實現されない。そこには一切の現象に於て然る如く、過渡の樣相がなければならぬ。その過渡期がいかなる統治形態によつて經過されるか、それが示唆されないとすれば、平和的に宣傳することも、人類の叡智に訴へることも不可能である。

（三）革命の問題である。ラッセルは革命は恐怖すべきものであるが、それに比較して齎らす所は尠いと言ふ。（この革命問題については、ニアリングの議論もかなり曖昧である。）しかし革命の犧牲は絕對的のものでなくて相對的のものである。ラッセルはその前に恐怖することを知つてゐるが、それに對立された進化の名によつていかに民衆がより以上の犧牲と困難の十字架を負はされてゐるかについて、恐怖することを知らない。こゝに彼の小ブルジョア的の階級性格が現はれてゐる。

その上西歐の文明國民は、文字を知り政治に參加の能力をもつてゐるから、革命とその結果たる獨裁は西歐に適合されないとラッセルは言ふが、最も手近な實例をとつて見て、西歐文明國の資本家階級が、たとへば東洋の後進國の資本家に比して、勞働階級にたいしてヨリ尠く壓迫的であらうか？否。その一事をもつて見ても、謂ゆる文明國民の敎養と政治的能力とは、ラッセルによつて評價されるほどのものでないことが分る。

特に現在、イギリスの秩序をおびやかしてゐる總同盟罷業かよい實例である。イギリス國民ほど、敎養があり政治的習練のある國民はないであらう。それにも拘らず、この國民的大問題は正に社會鬪爭に轉入の危險の前にある。そこには國民の敎養も政治的習練も爲すところを知らないのである。かゝる現實に面接してなほ、ラッセルが平和的宣傳、說得、人類の叡智を說くのは、極めて特殊な心理的基礎からでなくては說明出來ない。

（四）戰爭の問題である。ニアリングの說明は不十分であ

り、皮相でさへあるが、ともかく國際的階級的の戰爭の危險が西歐を脅かしてゐることを說いてゐる。而して、それはやはり今回のイギリスの總同盟罷業をも含めて、幾多の事實によつて立證せられてゐる。それに對してラッセルは、戰爭とそれに基く文明の破壞は可能的ではあるが、必然的なものではないと言つてゐる。ラッセルの戰爭を好まぬ心理は觀てとれるが、どうして戰爭が避けられるかゞ全然說かれてゐない。人々の欲すると欲せざるとに關らず、その要があれば戰爭は起る。戰爭が起れば、ラッセルの言ふ如く西歐の諸國は一齊ではないが、一つ又は一聯の文明國の文明が破壞される。そしてそこに混沌が來る。それは必然であつて、問題はその混沌がいかなる形態の統治によつて脫せられるかである。

（五）ラッセルがしきりに問題にしてゐる『科學的』の意味である。ニアリングはラッセルのこの挑戰に一言も直接に應じて居ない。これはいかにも消極的である。ラッセルの說く『科學的』の資格は、いかにも正しい。がラッセルがボルシエヴイキを非科學的だといふ場合には、そこに大きな誤認又は理解不十分がありはせぬかと思はれる。ラッセルは後者が華々しい光景や、盛んな言葉のとりことなつてゐると言ふ。その認識からしてボルシエヴイキ及びその贊同者の注意や用心の不足即ち非科學的な所以を說いてゐる。が、ラッセルのこの認識は飽まで正しいであらうか？これもまた非科學的な用意から來たものではなからうか？、

（六）これは討論の論點ではないが、ラッセル、ニアリングの兩者の論述に共通した大きな缺陷は、階級鬪爭の必然といふ見地からソヴイエット形態の問題が少しも說かれてゐないことである。この見地から說かれることなくしては、遂に問題の核心に觸れることが出來ない。

ソヴイエット統治形態を生んだものは、階級鬪爭に外ならない。その同じ階級鬪爭は、西歐の文明國にも現に公然隱然に行はれてゐる。そうしてそれは支配階級のあらゆる術策あるに拘らず、社會鬪爭にまで發展しないではすまぬ形勢にある。これは何人も拒むことが出來ない。その階級鬪爭の必然が、どこに向つて進み、いかなる秩序の現出を不可避としてゐるか？この觀點こそ、こゝに揭げられた大問題を解決する重要なる鑰でなければならぬ。ラッセルがこの一大事實に言及しないのは、その『科學的』の揭言にも似合はぬことであるが、『マルクス主義者』たることを自ら肯定してゐるニアリングにとつては、何としても不可解である。

私は前論で、現在西歐に於て議會政治がいかなる過程をとりつゝあるかを眺め、次いでボルシエヴイズムの西歐文明國にたいする適用性について、西歐の自由思想家と社會主義者の討論を聞き、それに關して若干の檢討を加へた。この仕事によつて私は、西歐の政治形態の現在の動搖と、その動いて行く方向について、何等か示唆するところあつたと信ずる。

（一六、五、九）

英國産業戰の經過と意義と影響

英國の大罷業につきて

法學博士　米田實

一

目下英國に勃發しその影響を世界各國に及してゐる炭坑以下各勞働組合の總同盟罷業は、當の英國に取つても世界各國に取つても、未曾有の大事件であるといはねばならぬ。今その經路を顧ると四月三十日炭坑主對炭坑夫聯合會の協議が破裂し、坑夫聯合會は四月三十日夜半を以て總同盟罷業に決したのである。ところが是より先き坑夫聯合會と聯絡を持して居た鐵道従業員、運輸従業員、製鐵、製鋼、電氣、瓦斯事業、新聞印刷、その他全英國の重要業務従業員は、もしこの炭坑爭議にして五月三日までに適當の解決を見るにあらざれば、四日を期して一齊に總同盟罷業を決行すべき旨の宣言を爲し、而してその希望せる所謂解決が實現しなかつたので、彼は四日午前零時いよいよ全國に亘つて大同盟罷業を斷行し、その人員實に三百六十萬を數ふるに至つたのである。

顧れば一九二一年に於ける炭坑罷業は、所謂純炭坑従業者のみに限られて居り、他の勞働組合員をも罷業せしめんとする坑夫側の希望は遂に實現しなかつたに拘らず、尙之によつて生ぜる英國の損害は總てを合して二十五億萬圓を數へられたのである。然るに今度の罷業はその規模の大なること、到底往年のそれとは比較にならない、もし之が繼續するにおいては英國の損害は、その期間の如何により或は五十億圓と算せられ、場合によつては百億圓を免れないであらうとの說が唱へらるゝのも、吾々は敢て不思議とは思はないのである。英國政府はこの非常

事件に處するため、既に三日より全軍隊の外出を禁じて出動準備を完成し、又同三日英國議會は緊急勅令の發布に對して聖旨に副ひ、行政部に權限を附與する奉答文を反對一〇八票贊成三〇八票を以て可決し、同六日下院は非常時權力法並に關係諸法規の效力發生承認決議案を、票決によらずして可決したのである。尤も勞働黨が六日の右採決に對し退場參加しなかつたことはいふまでもない所であつた。而して罷業開始後勞働組合側も本來の無頼漢の暴行を除いては、よく秩序を保ち、大體から一糸亂れざるの姿を呈し、世界に對してさすがに英國勞働者の着實穩健振を示すの觀がある。然かもこの結果として多大の影響を各方面に及し居ることは、固より言を須たない所で、其延いてヨーロッパ各國、アメリカのみならず我日本との貿易にも相當影響を生ずると共に、フランス、ドイツ、チエツコスロヴアキアその他においては、或は同情的同盟罷業を爲し、はるかに之に應援せんとするものもあれば、醵金を爲して之を聲援せんとしつゝあるものもある。今後いつまでこの罷業が繼續するかは豫測し難いが、とにかく本事件が前例なき紛爭なることを考へる時、吾々はこの際之に一言を加ふることも、恐らくば無用の沙汰であるまいと思ふ。

但斷るまでもないが、余の如きは國際政治研究專門家であつて、勞働問題の專門家ではない、故に本問題の如きを觀察するにも自から觀る所の側面が異るかも知れない。又所謂勞働專門家連中よりいはしむる時は、思想的哲學的見地を欠き、或は經濟的批評も淺膚だとの嘲を避け得られないであらう。しかし一般讀者より之を觀る時は或は余等の如き立場に居るものゝ、局面紹介が却つて單に鳥瞰圖的意義においては寧ろその間に自ら適當で又公平なるものがあるかも知れない。

二

然らば先づ今回の大同盟罷業の起因を爲したる炭坑紛議は如何にして生じたのであるかといふと、最近英國石炭業の不振の結果、昨年六月炭坑主側より坑夫勞動組合側に對し、一昨一九二四年における賃銀及び勞動時間協定の廢棄を求めたことに淵源して居るのである。尤も昨年は之が爲に恰も今回の如き大同盟罷業が發生せんとする所であつたが、英國首相ボールドウイン氏は大いに之を憂慮し一時的應急策として、昨年八月一日より本年五月一日までの九ケ月間に亘り、政府より補助金を下付し以て一九二四年の協定實行より生ずる鑛業經營上の損失を填補することゝした。之がため一時炭坑紛爭は未解決のまゝ延期せられて今日に至つたのであるが、右九ケ月間に双方を滿足

せしむるが如き何等の解決案を作らんとせる政府側の希望は水泡に歸し、今日も殆ど昨年六七月における狀態よりも一歩も進み得なかつた。要するに既に勃發すべくして僅かに延期せられたる大同盟罷業が、今回遂に實現したものに外ならないのである。簡單に云へば是れだけであるが、しかしこの事情を明かにするためには、殊に今回の紛爭の原因を爲せる一九二四年の協定を紹介する爲には、吾々は溯つて過去における炭坑夫勞働問題の歷史を顧みない譯には行かない。しかし餘りに古きに遡ることは不可能であるから、成るべく近き時期における同問題を回顧して見ることゝする。

イギリスは由來炭坑最も多く、その年產額實に二億五六千萬トンに達する國である。石炭產出においては僅かに北米合衆國に一歩を讓るのみで、ヨーロッパにおいてはドイツと相共に雄を唱へてゐる。從つてその從業員も多ければ同時に問題を頻發し、又それが大規模とならざるを得ないことも識者を須つて知るべきことでもなからう。而してその問題において見逃すべからざることは、何れの職業においてもさうであるが如く、勞働時間と勞働賃銀が常に紛爭の主題を爲すことで、之が最近の紛爭にも今回の紛爭にも關係がある。殊にその紛爭の主點を爲すものが所謂工夫の最低賃銀制度である。この最低賃銀制度の定められたのは實に一九一二年であつた。その事情はどうであつたかといふに一九一二年炭坑夫の大同盟罷業が行はれた結果、法律において英國内の各鑛業地帶に雇主と勞働者より成る賃銀委員會を組織し、政府側よりその委員長を任命し、而して右委員會は自己の管轄地帶に對して、各最低賃銀即ち右額より低下することを許さゞる賃銀を定めねばならぬことを決めたのである。但し此最低賃銀制度に違反するものありと雖も、刑事上の問題にはならず、唯だ民事訴訟を起し損害賠償を要求し得ることゝされて居た。斯くて最低賃銀制が制定せらるゝと同時に、議會は又た同じく法規において所謂勞働時間八時間制をも規定したのである。之は坑夫側に取つて有利なる一發展には相違なかつた。ところがその後間もなく世界大戰爭が起つた。戰時中は所謂非常時の際とて、無論賃銀問題も勞働時間問題も、更に新發展を見なかつたのは寧ろ自然の結果といはねばならぬ。一九一九年いよ〳〵講和期になると坑夫階級は、自己の勞働狀態及び條件の改善を要求することゝなり、容易ならざる紛爭の形勢を發生し來つたので、政府側はこの狀態を救治せんと欲して、先づ坑夫大同盟罷業の厄を救ふ爲め、茲に炭坑調査委員會なるものを任命した。之が有名なるサンキー委員會であつた。同委員會は調査の結果如何なることを主張したかといふに、全員一致その報

告において國家が地下の礦物を坑主より買收せんことを主張し、反對三贊成一〇の多數を以て、勞働八時間制を更に一時間短縮して七時間とすること、並に勞働賃銀率を多少増加することを可決し、更に反對四贊成九の多數を以て、礦業國有(ナシヨナリゼーシヨン)を主張したのであつた。而してこの主張は右委員會を任命したる時のロイドヂョーヂ内閣を驚かしたもので、ロイド・ジョーヂ内閣は、サンキー委員會が到達する決議を實行するのが本來の考へであつたが、偖てその到着したる決定報告書を見るに及んで、餘りに急進的なるに驚駭し、到底之を施行し得やうとは考へなかつた。そればかりか當時議會に多數を占めてゐた統一黨並に自由黨議員等約三百名は連署の上、サンキー委員會報告の如きは斷じて排斥し之に同意すべからざることを、總理大臣ロイド・ヂョーヂ氏に要求したのであつた。しかしサンキー委員會の主張中極端と見らるべき炭坑國有問題等の如きは、全く拋棄せられて顧られなかつたけれども、勞働時間短縮即ち七時間制度採用は、一九一九年(大正八年)においてイギリスの法律となり、同時に賃銀も亦増加を見るに至つた。而して序ではあるが、今回坑主側より要求せる勞働時間延長問題は、實にその時の決定に係る此七時間制を中止し、それ以前の八時間制へ復歸す可しと言ふのである之は勞働時間のことだが、今現に行はれ、坑主側より低減を求められて居る坑夫の現在賃銀率は如何にして生じたかといふと、翌年即ち一九二〇年末政府はいよ〳〵戰爭終了の結果、從來行はれてゐた礦業管理を解除するの方針を聲明し、而して之を實行したる日は實に一九二一年(大正十年)三月三十一日であつた。ところが勞働者側からいへばこの管理解除と共に、賃銀その他勞働條件が、炭坑主と坑夫間の自由協議によつて決定せらるゝ新機會が作り出されてたのである。それで兩者は早くもこの解除期限に先だち賃銀その他問題の協議を續けつゝあつたが、容易にまとまるべくもないので、不滿足なる坑夫連は同年三月三十一日政府管理解除の日來ると共に、直に同盟罷業を斷行したのである。この同盟罷業は實に英國炭坑爭議における特筆すべき事件で、事實四月一日より約三ケ月間に亘りて行はれ二十五億萬圓餘の損害を生じたものであつたが、その結果においては明かに勞働者側の失敗に歸し、坑主側は勝利を得たのである。之には他の勞働組合が、同盟罷業に對し同情罷業を差控へたことが、無論その一原因であつたと思はれる。右罷業中ロイド・ヂョーヂ内閣はしば〳〵兩者の間を斡旋する所あつたが、然も該協議會は開かれては破裂し破裂しては又開かれるといふ如き狀態で、遂に坑夫側の慘敗に歸した。而して勝利を得たる坑主側は更に政府に對して七時間勞働法の廢棄を希望したけれ

とも、政府は大局に鑑みて同意を與へなかつた。しかしその際坑夫側と坑主側との間に一の賃銀制の決定を見た。それは各炭坑區において坑主側及び坑夫側を代表せる各一名宛の會計士によりて、毎月その石炭賣却高を調査せしめ、賣却高より各種の費用を控除し殘額について、一定の割合を定め之を勞働者の賃銀と坑主の利益とに分配するといふ制度で、現に行はれて居るものが即ちそれである。ところがこの制度に於ける坑主、坑夫の分配率は更に一九二四年に至つて多少の改正を見た。その內容は右一九二一年の協定が恰も一九二四年四月十七日を以て、期限滿了するが爲め、坑主側より更に新しき條件を持出したが、坑夫側は之に對し四月十一日決議を以て坑主側の提案を否決したのであつた。けれどもそれは贊成反對兩派の差違僅かに一萬六千票に止まり、反對側は三分ノ二の多數を占むるには至らなかつた。いふまでもなく坑夫側の規定においては三分ノ二以上の多數を以て反對決議を爲したる場合は、同盟罷業を行ひ得るも、唯多數票の反對のみを以てしては同盟罷業を行ひ能はぬので、そこに罷業の來るべきはづはなかつた。けれども坑夫坑主兩者間の意見衝突は、政府をして所謂炭坑問題調査委員會なるものを設定し以て賃銀問題を調査せしむることゝなつたのである。右調査委員會は三月末設置せられ、爾來大いに調査研究を續け同年五月九日に至り始めて報告を出した。その報告が果して如何なるとを說いたかといふに、一九二一年の協定において日給勞働者が得つゝあつた賃銀は、戰爭前の彼等の所得より甚だ少なきものであること、坑主側の收利は或若干炭坑においては戰爭前よりもはるかに多きものあることを述べ、更に坑主及び坑夫間の協議再開を勸告したのである。數日後になつてこの勸告は採用せられ五月十九日に至り兩者間には所謂最低賃銀なるものが、二割乃至三割三分高められ、而して一九二一年の分配率即ち各種費用を支拂ひたる後の殘額を坑夫賃銀と坑主所得との間に分配するの率が新たに變更せられた。之を具體的に且平明に說明すると、一九二四年に決定せる賃銀法協定は、實に石炭の賣却收入より必要經費を第一に引去り、その殘額の八割七分を勞働者の賃銀に充て、殘り一割三分を坑主の收利とするのが根抵であつたので、しかしそれには條件が付いてゐた。外でも無い、率は右の通りだが「但し坑夫の收入は、最低賃銀を下らず、現在貰つてゐる收入を低下することとなし」と言ふのであつた。而して從前の七時間勞働制も亦同賃銀分配率と共に繼續さるゝことはいふまでもない所であつた。

三

其後此制度は繼續して居たが、昨年に至り又復問題を喚起した。その原因はドウかと言ふと、ドイツその他の石炭産出が大活躍を爲し、イギリスの石炭との競爭激甚となり來つたこと、及英國炭がドイツその他に比較して高價なること、並に運賃率高きことなどで、イギリス石炭輸出が不況を呈した爲めであつた。ともかく各種事情の結果として現はれた事象は、石炭收入の減少と共に、坑主の取得も大減少を見るに至つたことである。前に述べた如く各種必要經費を控除したる殘額を八割三分對一割三分に分配するのであるが、坑夫側においては所謂最低賃銀制度なるものが存在するが故に、之によりて悪影響を避け得らるるけれども、坑主側はそれだけ多く自己利得の減少を見ざるを得ないことになる。玆においてか彼等は坑夫側に對し下の如き要求を出した。

第一、坑主坑夫の所謂分配率を變更し坑夫の取り分を減少すること、

第二、七時間勞働制を廢棄し一九一九年以前の狀態に立歸り八時間勞働制とすること、

第三、坑夫側に有利となれる最低賃銀制を廢止すること、

であつた。けれども坑主側はこの總てを實行せしめんといふのではない、右の利得分配率を減少するか、八時間勞働制を採るか、その中の何れかの條件を容れしめんとするのであつた。

然るに六月二十四日に至り坑夫聯合會理事會は、右時間増加即ち八時間勞働制案及び賃銀減少案反對を決議した。之に對し坑主側は諸外國の例を擧げて八時間勞働は愚か九時間、十時間も働いて然も受くる賃銀は、イギリス坑夫のそれよりもはるかに低廉なる國あることを說き之との競爭難を指摘し、坑夫側の反省を促したが効果がなく、六月三十日坑主側は公式に一九二四年調印の全國賃銀協定は本年七月三十一日を以て終了すべきものなることを通告した。斯の如くにして形勢は悪化し、坑夫組合側は一九二一年の失敗に鑑み他組合の後援を得るため死力を盡すこととなり、鐵道業者、運輸業者その他勞働團體と密接なる交渉協議を進めつつあつた。右の形勢に對し英國政府は最初深く關與しない方針を執る如く見えた爲め、勞働黨首領にして前首相なるラムジー・マクドナルド氏の如きは、六月二十九日下院において政府彈劾の動議をさへ提出したる程であつたが、形勢右の如くいよいよ險悪となるや、首相ボールドウイン氏も默過し難しと爲し、七月二十七日彼は勞働組合特別委員とダーウニング街十番の首相官邸において約三十分に亘り會見した。席上勞働組合側はこの際における政府側補助金下付は、今將に勃發せんとする非常なる難局を救濟する最上策なりと說く

所あつた。首相ボールドウイン氏は翌二十八日坑主側と會見し種々協議を重ねたる結果、政府は所謂石炭補助金制度を一時的に採用することゝなつた。右石炭補助金制度とは諸炭坑をして、一九二四年における坑主及び坑夫間の賃金協定をそのまゝ實行せしむることゝし、之が爲めに不足を生ずる場合は、その不足に對し政府は補助金を與へ之を塡補するものであつた。但右制度は勿論永久的意味を有するものにあらず、單に昨年八月一日より本年五月一日に至る九ケ月間を期限としたのである。

而して政府はこの間石炭調査委員會を任命し、該委員會において問題解決の方法を調査研究せしめんとするのであつた。坑夫側も坑主側も、自已の懷中を痛めぬこととて之に對して異存のあらうはずはなかつた。無論坑主側にては斯の如きことを一旦斷行すれば、之が前例となりはせぬかとの意見を有するものもあつたが、强て反對すべきものとも考へなかつた。政治界方面においても政府を支持したる統一黨の如き、中には之を以て恰も勞働者に對する屈服なりと思惟せらるゝにあらざるかと心配する向もあつて、八月四日統一黨議員連は院內總理マイヤース・モンゼル氏を中心として會議を開き、盛に右補助金制度の如きを先例たらしむべからざることを唱導し、モンゼル氏の手を經て首相に陳述せしめたのであつた。在野自由黨領袖にして前首相たるロイド・ヂョーヂ氏の如きもやはり之が惡先例たるべきことを說き大いに批評を試みた。唯勞働黨首領ラムシー・マクドナルド氏のみは、當面の難問題に處する方法として之の已むべからざることを認め潔く言明したのである。勞働黨の名士にして前閣員たりしゼー・エッチ・トーマス氏の如きも亦、罷業において全國の萎微を見るよりか大なる損害を未然に防ぐための小なる犧牲なりとして、右方法の採用に贊成を表したのであつた。

而して政府の政策は同年八月六日議會において問題となり、議會は政府の主張を容れて反對一六票贊成三五一票の大多數を以て、右石炭坑補助金一億圓支出案を可決するに至つた。斯くして昨年當然行はれねばならなかつた大同盟罷業は、約九ケ月間遷延を見た譯である。

四

然らば今日においていよ〳〵大同盟罷業の勃發を誘致するに至つた直接原因は何に歸するのであるか。その一は政府がこの上の補助金繼續を拒絕せる結果、勞資の爭ひをして急轉直下せしめたること、その二は折角九ケ月間內に何等かの解決方法を案出せんとせる計畫が畫餠に歸したること、即ちヘルバート・

サムエル氏を中心とする石炭調査委員會の報告が、極めて不徹底且平凡なるものにして、何等局面展開に資する所なく、坑夫側の期待を裏切ると同時に、坑主坑夫間の交渉も双方妥協の機運を生ま無かつたとであらう。然らば政府側がこの上の補助金繼續を拒絶せる事情如何といふに、第一補助金額頗る多額に上れる爲め、第二其任命に係はる炭坑調査委員會がその報告において、他の何等相違せる意見を發表しなかつたに拘らず、唯政府の補助金に對してのみ反對の態度を聲明したるが爲めであつた。勿論補助金額の點からいへば最初は一億圓の豫定であり、昨年七八月頃などは一ケ月の支出約一千萬圓程度と豫想せられてゐたものが、事實は然らずして實に支出高二億圓を超過するに至つたのである。英國の財力は天下に冠たりと雖も、國家としての世帶は樂でもない、藏相チャーチル氏は之に對し、斯の如く多額の費用を出さんことは財政上種々の點に鑑み、到底贊成し得ざる立場にあつた。殊に今年春右補助金制度決定當時任命せられた石炭調査委員會は、同報告において補助金下付に反對し、一事業に莫大なる補助金を與ふるが爲め、他の種々なる事業に重大なる負擔を課するが如きは、不公平極まるものなりとて盛に說く所があつた。政府としては補助金額の增大問題は別とするも、自己が任命し調査研究せしめた委員會の報告を採用せねばならぬのは寧ろ自然の經路であらねばならぬ、のみならず右補助金下付開始以後諸方に起つた議論を綜合するも、之が前例になつてはならぬとの思想が大部分を占めてゐた。殊にもしも今後繼續して炭坑に補助金を交付する以上、將來自然鐵鐵工業にも補助金交付の問題起り、延いては船舶業航海業の如きものに對しても、同樣補助金交付の問題の必然的に起り得べきことは、政治家實業家社會において論ぜられて居たのである。又た首相として考へざるを得なかつたのは、以上の點以外に今後或期間假令この補助金を繼續したればとて、本問題解決を望み能はざることであつた、この見地から同補助金は遂に中止に決定し、補助金制度中止決定の結果として、一時補助金によつて緩和された坑夫坑主の爭ひが、いよ〱事實上に勃發し來れるは是れ亦自然の成行であらねばならぬのである。しかしこの間において余等が多數英人と共に、甚だ遺憾と思惟することは折角任命された石炭調査委員會が、今少しく人心を新たにし坑夫側及び坑主側に希望を懷かしむるが如き提案を爲し得なかつた乎と言ふことである。彼等の爲せる提案は謂ば右に遠慮し左に遠慮し實に臆病極まる態度を反映したものであつた。由來イギリス王立調査委員會の報告には、往々苟合に陷り易き傾向を有し、餘りに四方に遠慮し平凡化するものが現はれた。

而して今回も亦この例を免れず勞資双方の期待に背いたのは、吾々の深く悲しむべき所である。しかし事情は何れにしても英國空前の大同盟罷業は、斯くの如くにしていよ〳〵勃發して日に險惡の度を加へつゝあるである。

五

次ぎに今回の大罷業が坑夫連のみに止まらず、全勞働組合員に波及するに至つたのは如何なる理由であるかと言ふと、第一坑夫組合側が一九二一年の失敗に鑑み、爾來關係團體は無論のこと、他の勞働組合に對しても大なる運動を試み提携聯合に努力せる結果である。一九二一年の大罷業の際には坑夫連中は豫て所謂三業聯合（ツリップル、アライアンス）を作り、鐵道從業及び運輸從業者と結托し以て罷業の大成功を見るつもりであつた。而して是等鐵道從業員、運轉從業員の如きは、從來の經驗によるも炭坑夫が罷業する時は、その欲すると欲せざるとに拘らず、半ば仕事がなくなり、つまり石炭がなければ鐵道運輸ができなくなり、その利害關係は極めて密接なるものであつた。而して自然三業聯合を形成されてゐた。而して一九二一年の炭坑夫同盟罷業の場合には、鐵道及び運輸從業員は四月十二日より罷業開始の決意をさへ示し、この二業は四月十五日を期して罷業するはずであつたのが、いよ〳〵實行する數時間前に至り突如中止を聲明した。即ち坑夫連は彼等の言葉を借りて言へば、所謂見殺しとなつたのである。そこで昨年勞働問題が起るや彼等は前の失敗を再び經驗すまいと考へ、同年二月より各團體組合の聯合を企て、六月には八大勞働組合の聯合が畫策されたが、その時には未だ完全なる聯合は成立するに至らなかつた。しかし七月十七日に至り英國内の鑛山鐵道運輸造船業者その他技師連などは倫敦に集合して同盟案を通過し、一方においては坑主坑夫の協議が行はるゝと共に、他方に於ては勞動組合間の協議引續き行はれてゐた。斯の如き關係の成立せることが今回の如き大々的罷業となり、他の諸同盟の罷業參加を見るに至つた一原因には相違ないのである、併しこれ以外に注意すべき事情があつた。それは炭坑夫の賃銀減少問題は最近炭業界不景氣のために生じた現象ではあるが、近頃の不景氣の結果何れ一般勞働者にも同じく起り來る問題と解釋せられて居たことである。換言すれば勞働者連は何れ賃銀減少問題が各職業に亘つて起り易き形勢にあるを見、やがては我が身の上と考へる心理も加味せられ、先づ坑夫問題において資本主側の賃銀減少要求を食止めんとの作戰から、今回の大罷業を實現するに至つたと思惟せらる可き點もあるのである。

六

右は今回大規模の同盟罷業を見るに至つた事情を説明したものであるが、然らばこの大勞働爭議における資本家側及び勞働者側主張の立場は何處にあるかと觀察するに、首相ボールドウイン氏の言葉を眞似るのではないが、吾々は双方とも相當强き理由を有つことを否認する譯には行かない。勿論坑主側からいへば現在の如き狀態では非常な苦境にあるは疑ひが無い、英國の石炭產出額最も多かつた年は戰爭前年即ち一九一三年の二億八千九百萬トンで、中一億トン餘を外國に輸出したが戰爭後は幾分產出を減少し二億五六千萬トン程度となり、昨年夏頃の形勢では二億三四千萬トン位になつて居たと記憶する、しかし概算的には年產額二億五千萬トンといひ得べく、この中國內にをいて消費せらるゝ石炭高は一億八千七百萬トン見當であり、六千二百五十萬トンは外部に輸出せられる、ところがこの中には海洋行汽船に供給するもの一千三百七十五萬トン、近海航路汽船に供給するもの百七十五萬トン見當である諸外國及び植民地に送るもの四千四百七十萬トンを數へてゐる。然るに玆に厄介なる問題は目下英國石炭の海外輸出高が減少形勢にあることで之については最近の炭坑調査委員會などは之を以て不景氣の影響による一時的現象であつてやがては回復すべきものなりとの樂觀論を爲して居るが坑主味方側にては斯の如き樂觀に與し得ぬものが少くない。無論樂觀論者と雖も差當つて石炭が不利の地位に立ち收入少ければ一時的でも其苦境を勞働者に分たんとするは自然でなければならぬ。もし一時的にあらずして永久的となり易き形勢があると見るに於いては、坑主側では一層悲觀を深くし、賃銀問題その他において强硬なる態度を取り來るをも、敢て不思議とは思はれぬ。何んとなれば今日ドイツは其低廉なる勞働賃銀と多くの勞働時間とで生產する石炭を盛んに海外輸出し既にスカンデイナヴイアにおいて、フランスにおいて、イタリーにおいてドイツは英國炭と競爭し之を驅逐せんとする形勢を示しつゝあるは、明かなる事實である。このドイツ石炭の海外市場における活動は果して遽からず止むべきものであらうか、否な寧ろ將來益增加すべきものではあるまい乎。さすればイギリス石炭は今後大陸市場において、一大悲境に會するの事情なしともいはれない。同時に近頃イタリー、フランスにおける水力電氣の顯著なる發達を示しつゝあることも、見遁すべからざる事實である、今日世界に於ける水力電氣の設備は漸く增加し、一九二〇年現在の水力設備は二千三百萬馬力といはれたのであるが、一九二三年には二千九百萬馬力に增し、最近にて

は三千五百萬馬力に達したといはれてゐる。この增加の形勢はヨーロツパにおいて殊に顯著なるものがあり、イタリーの如きは山嶽河流多く水力事業發達に最適の國で、一九二〇年には百萬馬力を數へて居たものが、今日では二百五十萬馬力に達してゐる。由來イタリーがイギリス炭の有力なる消費國であるとは、誰も知る所であらう。フランスは亦現在二百七十五萬馬力と稱せられてゐるが、今後も同國はボージユ山アルプス山ピレネ山若くはローン河によつて供給せらるゝ水力の利用は相當增加し來ること疑ひない。而して石炭も國內において多額の產出を見て居るが、尙不足のため年々イギリスその他より供給を仰いで居る。しかしその需要は逐年減少の形勢にあることは、英國として當然打算の中に置かなければならぬ。以上の如き各種の事情あるに加へ、近頃のやうにイギリス炭が高價なる場合において一層その困難激しく、どうしてもこの間何等かの方策を講ぜねばならぬと、資本家側が焦慮しつゝあるのも必ずしも無理とはいはれない。

併しながら同時に勞働者側の賃銀減少、若くは時間增加に對し反對するのは、如何なる理由によるか、是れ亦吾々から見て必ずしも無理由とは斷言できない、然らば勞働者側の主張は如何といふに、彼等は現在の苦境を救ふには、鑛山の有効なる管理組織の採用並にその能率の發揮、若しくは各種工事機關の設備改善或は現在の石炭浪費を省き、經濟的生產策を講ずることなどの必要なる所以なるを信じ、是等によつて救治の策あるに拘らず、資本家は之を實行せんとはせず、唯賃銀の減少勞働時間の增加のみによつて、目前の難局に處せんとする。斯の如きは、實に向ふ所を誤るの甚しきものなりと、彼等が第一に主張する所である。彼等はいつてゐる、例へば現在鑛山において約一千五百の異れる重役會議があり、驚くべき多人數がこの經營に參加して居る。斯の如きは徒らに無用の經費を要し然も能率上らざるの結果を招來する。第二に、何處の國に比較して見ても英國鑛山の如く、現代の科學的設備を缺如せるはない、尤も中には相當進步せる鑛山もないではないか、他の部分においては之を欠いてゐる、爲めに經營有利なる鑛山ある半面には經營不利のものも決して少くない、是れあるが爲めに全體的な賃銀問題に影響を及すのが今日の現狀だと彼等は言ふのである。例へば石炭にしても低溫炭化のその他の方法に於て、如何やうにも改善策がある。或は無煙燃料を作り若くは副產物を製造し、總ての浪費を防ぎ以て經濟的經營を爲すの途は幾らもある。然るに坑主は之を行はんとはしない、とは彼等が言ふ所である、この點について彼等の論する所が果して無理であるかど

うかは、勿論專門家研究家の解釋と批評に俟たたければならぬのであるが。昨年七月十三日任命せられた彼の有名なる法律家マクミラン氏、經濟學者として知らるゝスタンプ氏などを含む石炭調查委員會は、勞働者側の主張を承認して勞働時間の延長若くは賃銀減少、の如きに對しては、當然之を不當とし專ら同鑛業の經營能率增進などにおいて、之が救治策を取らなければならぬことを主張し、七月二十八日を以てその決定報告を政府に致したのであつた。次に其後補助金決定と共に政府より新たに解決策調查の任を託せられたる、ヘルバート・サムエル氏を中心とする石炭調查委員會はどうであつたが、之は前委員會と異り、多少の賃銀減少を可とする報告を爲したが、同時に現在鑛山における各種設備を改善すべく、特に動力燃料委員會を新設すると共に、石炭研究に對し國家は補助金を與へ、之を奬勵すること、及び石炭販賣所の設置若くは販賣權その他について、種々なる主張を爲したのである。又民間は勿論政府部內においても、國內炭坑中比較的經營面白からざる古き炭坑は、寧ろ之を閉鎖するを以て全局より見る經濟策なりと論ずる人々も少くない。斯の如く勞働者側には所謂賃銀減少を欲せざる人間通有の氣持の關係もあるには相違ないが、寧ろ鑛山經營能率增進若くは設備の改善等によつて救治策を講ぜられんことを求め、資本主側の主張に同意しなかつたのも、全然無理由とはいはれない。のみならずこの以外において勞働者側の結束を堅固ならしめたる點は、政府の政策に關するものであつた。それは何んであるかといふに誰も知る如く、イギリスは昨年四月二十八日久振りに戰時中滅茶々々となつて居た貨幣制度を金本位制に復歸した。このことは實に最近英國の產業をして益不振ならしめ、失業者を增加せしめ、殊に石炭問題などに對し惡影響を生ぜしめたるは、經濟學者間において夙に指摘せられし所である。この見地からケンブリッヂ大學教授で經濟學者として聲名を馳せ、ドイツ賠償問題その他について名著を出し廣く世間に知らるゝ例のキーンス氏の如き述べて居る。曰く「現在英國財界が不振を極むる原因は要するに英政府が金本位制を從來通りに復歸せることとし英貨磅の爲替相場を一割方引上げたとである。磅が自然に一割だけ價値を增加して來るならば何んでもないが、人爲的に無理に爲替相場を一割方引上ぐることになれば、どういふことになるか、即ち二つの結果を生ずるのである。第一英國品に對する外國の愛好者等は爲替相場が一割上つた爲めに、一割だけ餘分に金を拂はなければならぬことになる。そこで彼等は一割增したる英國品にお金を拂ふよりか、寧ろ廉價なる他國の品物を求むるに至るは當然のことではないか、かうなつて來

ると英國の輸出商人は他國との競爭上、その販路を奪はるゝことが苦しい所から一割だけ値段を減少し、自己の地位を維持しやうと考へて來るのは自然である。斯くするにおいては勢ひ値段を低下しなければならぬ。茲においてか商業者はお互に苦しまざるを得ないのである」と、此の外經濟學者として名あるスタンプ氏の如きも、之と略同意見を說いて居るが、英國藏相チャーチル氏はこのことをいはれると直ぐ不愉快な顏をし、全力を盡して辯解是れ努めたのである。然かも勞働黨殊に勞働者においてはキーンス氏主張を支持し、今回の如き未曾有の局面を招來したるその罪の一班は、現政府にも在りと說いてゐる。こんな事情が相俟つて坑夫側をして、益結束を鞏固ならしめ強硬なる態度を取るに至らしめたるに、何んの不思議があらう。

七

しかし何れにしても吾々は斯る紛議が、英國のためにも世界のためにも一日も速かに終了せんことを希望せざるを得ない。但し茲に憂ふべきことは斯の如く紛糾せる問題が、果して爾く速かに解決を見るであらうか、或は紛糾に紛糾を重ね相當長き時間を取りはせぬかといふ點である。もしこれが解決が遲延するとともならば、英國產業界の上に及ぼす影響はけだし甚大なるものがあらう。曾て一九二一年の極めて小規模なる石炭坑夫のみの同盟罷業においてすら、その損害莫大にして政府が之に對して要したる費用は陸軍費七千萬圓、海軍費一千二百二十五萬圓、空軍費三百三十萬圓、民間應急組織費三百萬圓、並に紛爭に關する補助費一億圓、及び之によつて生じたる鐵道益金の打擊一億圓と計算せられ、イギリス全體の損害額になると實に二十五億萬圓といはれて居る。一局部の罷業でさへ既に斯くの如くである、今度の大罷業が長引くにおいてはその損害は實に莫大なるものにして、一部にて唱へらるゝが如く英國は本罷業のため、四五十年間に亙る損害を被るべしとの說の、或は眞ならんことを憂へざるを得無い。但一九二一年の例に見ても亦最近の例に徵しても、政府黨は勿論勞働黨側と雖も齊しくその影響の僅少ならんことを希望し、一日も速かに平和に復歸せしめんと努力しつゝあるは疑ひなき所。例へば首相ボールドウイン氏の如き、或は勞働黨首領たるマクドナルド氏の如き、或は同黨領袖トーマス氏その他の如きこの點に全力を傾注しつゝあることはいふまでもない。要するにそこには常識ある英國々民性が遺憾なく發揮せられ、案外急速なる落着を見るやも測られぬのである。

八

事情上述の如くであるが、終りに一言し度いのは坑夫その他勞働者側が、もし此の戰に敗北した時はどうなるか、又政府が慘敗したならば時局は如何に變化するかの問題である。無論之は豫言者にあらざるものゝいふべきことでないかも知れぬが、余の考へを遺憾なく開陳するならば、この同盟罷業がもし、勞働者側の失敗に歸したる場合は、その結果として必ず彼等の政治的運動の增加し來ることを思はねばならぬ。勿論今日においても英國の勞働組合は米國のそれとは異り、政黨と關係深く現に勞働黨を支持して居る。併しながら勞働組合そのものは大體においてエコノミーク・オルガニゼーションであつて、勞働者の經濟的地位を高めるのが主目的であるだけそれだけ、今日において政治的活動に全力を盡して居るものとは、未だ斷言し難い。併しもし此同盟罷業により成功の記錄に逹せんとする策が失敗した曉は、如何といふに、第一、彼等の經濟的武器たるストライキそのものが、それ程効果を持ち來さゞることを以て結局罪を政府に歸し、どうしても自己の黨派をして政權を執らしめねば、總て彼等の志を逹すること能はずといふやうな氣持が、一層增加し來ると共に、一般勞働者の勞働黨支持が更に强くなる結果を招來するものと思ふ。最近勞働黨領袖間において今回のストライキが、勞働黨をして政權を獲得せしむる第一歩なるかの如く說きつゝあるものあるは、この間の消息を物語るものではあるまいか。第二にはもし今次のストライキが勞働者側の失敗に歸したる曉、英國においては極めて少數にして力足らざるものではあるが、ロシア系の所謂共產黨が罷業失敗の機に乘じて、必ず自己の勢力を扶植せんとする運動が開始するだらうこと是れである、今日ロシア共產系の英國勞働者社會における勢力は決して强きものでは無い。昨年九月英國スカボローにおける勞働組合大會は、最もよくこの間の消息を示してゐる。即ち同會議においてロシア系統と見るべき過激分子は、總同盟罷業を宣言する權力を理事會に與へねばならぬといふやうな提案を爲して失敗せることと人の知る所である。その他大體から見て總勞働組合大會を支配せんとする赤色分子の運動は遂に奏效しなかつたのであつた。その後約三週間後リヴァプールに開かれた英國勞働黨總會の狀態如何といふに、是れ亦穩健分子が勢力を有することを明かにし、赤色分子の無力を示したものであつた。即ち赤色分子が希望せる現勞働黨系統と彼等との協力關係を作らんとする計畫は、明かに無駄であることを示した。前首相ラムシー・マクドナルド氏は最もこの點を力說し、共產黨系統の如きは英國勞働黨の政治的活動を助くるにあらずして、之を妨害するなりと明言し同總會はマクドナルド氏の主張を絕對

に承認すると共に、勞働黨には一切共産黨員を加入せしめざる決議をも通過した。斯の如くにして赤色系統は英國勞働黨若くは勞働者系の、常識的にして健全なる特色の下においては常に失敗を繼續し今日に及んで居るのであるが、しかし若し同盟罷業が失敗に歸することゝもならば、勞働者の不平はそれだけ增加し、從つてその間に乘じ何等かの活躍を試みんとするには相違ない。けれども吾々は英國人の國民性を知るが故に、ロシア系が如何に活動してもそれが成功しやうとは信じない。さりながら根本的に成功せぬまでも一時的に或程度までの强き刺戟を勞働者側に與へ、その活動が比較的顯著になるといふが如き傾向は決して皆無とは云はれないのである。

だが之に反してもし政府側が敗けだとすればどうか、いふまでもなく直に現ボールドウイン內閣の運命に關係するに相違なく、この問題に處すること巧みにあらざれば、既に一年有半の生命を持續せる統一黨內閣はやがて沒落の機運に陷らざるを得なくなるのは想像するまでもない。併し予の所見に依るとにかく斯の如き重大なる局面が發生して居る以上、何れにしても疑ふ能はざる所は、如何なる內閣が立つにしても、或は現在の內閣が繼續すると、然らざるとに拘らず、この同盟罷業が國民の前に投じてゐる問題に對し、執政者も國民も所謂遷延政策を以て放棄し置く能はざるの機運を作つたことである。之は勞働者側より見ても或は希望する所の一の獲物であるかも知れない。又坑主側にしても今の如き狀態において、紛爭を繼續するは欲しない所であるから、やはり是等の根本的解決を要望するであらう。而して根本的解決の中には無論炭坑國有論といふが如き問題が提供され、最も眞面目に考慮を要する案件の一として現はるゝことと信ずる。尤も炭坑國有といふが如き問題は、隨分厄介至極なもので、一方贊成論者からいへば今の民間の小資本を以てしては、到底各鑛山の改善ができない、是非とも國家の大資本を以てするにあらざれば、徹底的に設備を改善し科學的設備を完備し行くことは困難であるとか其他の論點もあるが、他方反對論者から見れば、國營は却つて大なる官僚閥を作るのみでそれが有效に運用せられるか疑はしく、殊に外國に輸出する炭價問題、賃銀問題の決定といふが如き各種の問題に處するには不適當であるとの意見も有力である。しかし吾人は經濟專門家にあらざれば、之に對して何等の意見を挾まんとするものではない、唯た孰れにしても今までの如く問題を放棄せるまゝに置くことは到底不可能となつたことを再言し度い。而していよ／＼解決問題が具體化するとして、玆に吾々は英國に關し政治的に之を觀察し考慮しなければならぬことは、英國の如く重大なる問題を國民の前に問ふ制度の國においては必ずや遠からず、自然總選擧を行ふ機會が生じはせぬかといふことである。今回のストライキが經濟問題に出發して居ること勿論であるが、更に一大政治的現象の發展を將來に見來ることを考へると共に、吾々は一層の興味を以てこの罷業の成行を注視しない譯には行かないのである。

死線をさしはさめる英國勞働爭議觀

經濟學博士　太田正孝

一

世界大戰爭を境ひとして、イギリスの産業狀態は、その根柢において根本的の變化を生じたやうに思はれる。この根本的の變化が何であるかをよく研究し、その根柢から改造し立て直さないかぎりは、イギリスの産業の將來については――ハンター氏やホブソン氏などの論ずるやうに――まことに悲觀的な結論に到達するよりほかないと信ずる。だから、今度の炭礦業爭議を見るにあたつても、ただ端的に炭礦業問題の過ぎにし日の歷史ばかりを回顧してみるだけでは、解釋のつくべきはずがない。イギリスは、いま、まさしく産業上の重症患者となつてゐるのであつて、炭礦業問題ばかりが病氣の焦點ではないやうに思はれるからである

イギリスは、最近の足かけ五年といふものは、全くぶつとほしに百數十萬の失業者を絶やしたことがない。百數十萬といつても、それには家族が附帶してゐる。かりに一家五人平均とみても五百數十萬の人たちが、この失業のために生活苦を味つてゐるのである。さうすると、イギリスの人口四千四百萬人として、失業で苦んでゐる人たちは、其一割以上に當ることになる。いみじくも、その産業不振のほどが思ひやられるではないか。それからまた、イギリスでは、その土地や農業によつて生活をさゝへてゐるものは、總體の人口の四分の一にすぎなく、殘る四分の三は、商工業その他船舶、金融業などによつて生活してゐるのであるから、産業の不振が國民生活のうへに及ぼす影響も、想像するにかたくない。世界大戰爭のすんだあとには、失業問題を一時的のことにすぎないであらうと考へた人たちもあつたが、かやうに五年も六年も繼續して社會を脅威するのをみては、そこに何等かの深い原因が潜んでゐるやうに思はずにはゐられない。造船業主のハンター氏が、昨年首相ボールドウイン氏に宛てた公開狀のなかには、イギリスの産業狀態の眞に憂うべきものがあ

ることを訴へてゐた。——失業者は全勞働者の一割二分五厘をくだらない。造船工の如きは四割、坑夫は一割五分から二割になつてゐる。そのうへ造船や機械の注文は、ドイツや、オランダや、イタリーや、スカンヂナヴイヤなどにとられてしまひ、鐵道その他の産業は、辛うじて積立金のうちから配當をなし、なかには無配當のものさへある。鐵鋼業も不振、船舶業も不況、機織業も惡るい。さなきだに資本は減退するばかりであるといつて、いたく、なげいてゐる。ハンター氏のいふところには、多少言葉に飾りはあるが、イギリスの産業狀態が容易ならざる危機を胎んでゐるといふことを暗示してゐることはたしかである。

私は、いま少し、この問題について追究しておきたい。炭鑛業問題について例をとる。イギリスの炭鑛業——全世界の産額の二割一步（昨年二億四千四百萬トン）にあたり、いまの採掘量ならば、五世紀もつゞけられるといふ、イギリス工業の母ともいふべきものである——は、戰後非常な危機に出つくわしてゐる。炭鑛業調査會の報告によると、一九二四年から二五年にわたる一年間において、イギリスの炭鑛業はなか／＼みぢめな立場にあつた。全國六炭坑地方のうちで、四地方は損失を見、相當の收益をあげることが出來たのは、たゞ、東部の一地方だけであつて、一九二四年六月から二五年七月にいたる間に、休坑して再開することの出來ないものが五百八坑（坑夫十一萬人）、一度休坑して再開し得たものは、わづかに九十六坑（坑夫八千五百人）にすぎなかつた。かやうな不況に陷つたのは、主としてイギリスの内外における石炭の需要が減じたからである。一九二四年における國内の消費額は、人口が增したにかゝはらず、また、石油の利用などの關係もあらうが、一九一三年よりも四百萬トンも減じてゐる。さらに輸出にいたつては、その減少もいよ／＼甚しく、一九一三年には七千三百萬トンを輸出したのに、一九二四年には六千萬トン以下に落ち、一九二五年には、やつとのことで五千萬トンを超したのにすぎない。世界の石炭消費額は、大體において減じてゐるが、イギリスにとつて考へなければならない問題は、その海外輸出の率が著しくさがりつつあることである。それは、イギリスの競爭國がイギリス炭よりも安く賣り出したり、イギリス炭を需要してゐた國が、みづからの國で石炭を掘り出しはじめたりして、イギリス炭を供給する領分が縮められたゝめである。かやうに炭鑛業が不況に陷つたゝめに、坑夫の失業するにいたつたものも驚ろくべき數である。一九二四年二月に三萬一千人あつた坑夫の失業者が、一九二五年六月には三十萬一千人を數ふるに至つたほどである。これは、まさしくイギリス炭鑛業の危機を物語つてゐる。そこ

危機をのがれたいために、坑主側では七時間勞働を八時間勞働にし、賃銀の値下げをするよりほかに、道がないといふのである。今度の爭議も、そこからはじまつてゐる。しかし、國際坑夫聯合の幹事ホッヂス氏は、昨年からいふことをいつてゐた。イギリスの石炭の生産費を安くしても、外國ではより安い生產費で石炭を出してゐるし、かつ、ヨーロッパ大陸には貯炭がすくなくないから、そこへ、すこしぐらゐ値下げされたイギリス炭を持ち出してみても、その競爭力は五十歩百歩である。そんなことで、イギリス炭鑛業の救濟策が確立されるわけのものではない。かるがゆゑに、炭鑛業の救濟策としては、國際的に出炭額や勞働、條件を協定しなければならないのであつて、イギリスだけで勞働時間の延長とか賃銀の値下げとかいふことをするのは、問題にならない、と。同じやうなことを經濟學者のホブソン氏も說いてゐる。イギリスの炭鑛業が戰前にあつては、全く世界獨步の優越的地位を占めてゐたが、戰後になつてかやうな危機を孕んで來たといふのは、つまるところ、炭鑛業の根柢に根本的變化を來したことが、一般產業のそれと同じいからである。しかもこれが當面の救濟策として、勞働者側では、内國的には炭鑛業の國有による統一的經營を主張し、國際的には生活賃銀を基礎とした國際協定によるよりほかに仕方がないといふのである。それならば今日の私營炭鑛業の下には救濟策がないとして、國有にしたならば本當に救濟の確信があるか、どうかと押してみれば、やつぱり、そこに大なる疑問が横はつてゐるのである。

　これによつてみれば、今度のイギリスの罷業問題なるものは、イギリスの產業全體にわたつた大問題であつて、資本家側にも、勞働者側にも、ともに死線が含まれてゐる。この意味において、この問題は、勞働爭議として見るよりも、むしろイギリスの產業的重症の苦悶としてみるべきものではなからうか。搾取被搾取といふ勞働者の口ぐせにいふやうな考へから出發した爭議といふよりも、もつと深刻なものではなからうか。言葉をかへていへば、產業そのもの、國民生活そのものゝ、死線を突破せんとする資本家と勞働者とのあがきであるといふべきではなからうか。だから、この爭議は、資本家が勝つても、勞働者が勝つても、どつちが勝つても、イギリスの產業史のうへに新生面を打開するまでに至らなければ、死線は、やつぱり死線として殘る。イギリス人特有の、まづ爭はう(Contest)、それから談合しやう(Conference)、しかる後に妥協しやう(Conciliation)、といふやうに、ことを運んでいく、いつもながらのやりくちによつて、この爭議を片付けるならば、イギリスには

産業上、社會上、國民生活上、依然として危機が伏在して殘されることになるといはなければならない。そしてイギリスの産業的重症は、少しもその病因が取除かれないことになる。しかも、罷業後二週間目の今日、かうやつて筆をとつてゐても、どうやら、さうなるのではないかと、私の第六感は、しきりに肯定してゐる。

二

私はいまこゝにイギリスに於ける産業の病因を診斷すべくあまり多くの餘白をもつてゐない。そして、差し當り、現在起つてゐる大罷業について觀察をしなければならぬ。それには、まづ順序として、今度の爭議の起つて來た因由ともいふべきものについて、ざつと歴史的の經過をさぐつておかねばならぬ。

イギリスの炭鑛業にたづさはつてゐる勞働者の團體であるM.F.G.B.即ち大英坑夫聯合が組織されたのは、一八八八年であつて、當時の會員は、わづかに三萬六千人にすぎなかつた。それが、その後驚くべき速度で發達し、一八九三年には二十萬人となり、一九〇〇年には三十六萬人、一九一三年には六十七萬人、一九二四年には七十五萬人となり、現在では實に七十八萬八千人といふ數に達してゐる。これは勞働者ばかりの數であるから、その家族を加へるならば、イギリスの全人口に對する比率もきわめて大きいものとなることはいふまでもない。この坑夫聯合が組織されてから後五年、一八九三年に始めて大規模の炭鑛業ストライキが行はれた。その後一九一二年に全國的の大罷業が行はれ、六週間の長きにわたつた。それは、當時すでに勞働時間については一九〇八年から八時間制となつてゐたが、最低賃銀法が制定されてゐなかつたので、それを要求するためであつた。政府は調停を試みたが、うまくゆかず、あはてゝ最低賃銀法をつくることとなつた。そのとき早くも坑夫聯合が炭坑國有の決議をしてゐたことは、特記すべきことであらう。それから二年たつて世界大戰爭が起るとともに政府みづから炭業の管理をすることになつたのである。そして、一九一八年に戰がすむと、イギリスの勞働界は、さわぎはじめたが、炭坑業も、その影響を受けずにはゐなかつた。一九一八年サウスウェルス坑夫聯合が、まづ炭坑國有を唱へたのが口火となつて、一九一九年一月に、いはゆるサウスポート決議が出來た。これは、六時間勞働と、炭坑國有と、賃銀の値上げを要求したもので、その主張をつらぬくために、同盟罷業を可決し、これに參加するもの七十二萬二百人の多きに及んだ。ロイド・ジョーヂを首相と

する政府は、この罷業決議の實行を避けるために、坑主及坑夫側から同數の委員を出さして炭鑛業調査委員會と名付けられた勅命委員會を設け、その報告によつて處置を決することにした。これがかの有名なるサンケー委員會である。サンケー委員會は、四ケ月にわたつて討議した結果、その報告を作成した。これによると、炭坑を國有とするか、然らずんば統一經營主義とすべきことを勸奬し、炭坑組織に缺陷あることをみとめ、全國を十四區にわけて各區に地方炭坑委員會を設け、坑夫及消費者などの各代表によつて組織された人たちによつて經營せしめやうといふのであつた。具體的の問題としては、時間短縮については、政府もこれをみとめたが、給料のことは、坑夫側の思ふやうにはならなかつた。サンケー報告に對しては、一九一九年七月十日の坑夫聯合大會も、これをみとめたが、首相ロイド・ジョージ氏は、八月十五日の議會において、この報告ことに炭坑國有案を容れることは出來ないときつぱり聲明した。とにかくこのことがあつてから、坑夫側は、サンケー報告に基づいて、炭坑の國有または、すくなくとも根本的にその組織を改善し、以て賃銀の値上げをしやうと主張し、勞働組合聯合會もその主張を是認することになつた。一九二〇年八月三十一日、坑夫聯合は罷業を可決し、十月十六日に罷業を開始して、二十四日間つづけた。その結果は、十一月三日の暫行協定となり、恒久的の賃銀協定は、翌一九二一年三月末迄に協定することになつたのである。

そこへもつてきて、さらに一つの大きい問題が起つた。それは、政府の炭坑管理が一九二一年八月三十一日までといふことになつてゐたのを、三月三十一日からやめると聲明したからである。そこで、坑夫聯合は四月一日から大罷業をはじめ、九十五日の長きに及んだのであるが、いはゆる三角同盟（坑夫・鐵道從業員・運輸從業員）の連繫がうまくいかなかつたので、坑夫側の主張はとほらず、政府の調停によつて（一）標準賃銀を一九一四年七月の賃銀とし、（二）坑主の受ける標準利得を、標準賃銀の一割七分となし、（三）餘剰利得の分配率は、坑夫八割三分、坑主一割七分とするといふ妥協が成立した。この大罷業のために、政府から出した金は二億五千萬ポンドにのぼつたのであるが、そのほかに、坑夫はもとより全國一般國民の受けた損失打擊は、すくなくないものであつた。

三

その後一九二二年ランカシアー地方に、一九二三年サウスウエルス、ランカシアー、スコットランドなどに爭議はあつた

が、一九二一年の大罷業のあとでもあり、大體において大したことにはならなかつた。しかし、賃銀値あげの要求は、つねに繰り返へされてゐた。一九二四年四月には、バクマスター卿を委員長とする炭鑛業調査委員會が任命され、その報告に基いて一九二一年の賃銀協定を廢し、いはゆる一九二四年の賃銀協定が成立した。尤も、この協定は一九二五年六月三十日までを有效期間とし、その滿期後は一ケ月前の通告を以て廢棄し得るといふのであつた。(この協定中餘剩利得の分配率は、勞働者八割八分坑主一割二分となつてゐる。)そして、坑主協會は、滿期一ケ月前に、七月三十一日限り、その協定を廢棄する旨を通告すると同時に、坑夫の最低賃銀を無視し、單に坑主の利得のみを保障しやうとする新協定を提議した。もとより、それには、坑夫聯合はもちろん、勞働黨及び各種勞働組合みな口をそろへて反對し、こゝに大爭議が勃發してしまつたのである。政府は、海軍大臣をしてその調停に當らしめたが、うまくゆかず、萬策つきて七月三十一日に至り、炭鑛業の生產能率及び世界市場における競爭改善の方法を調査するの目的を以て一つの調査會を設け、一九二六年五月までにその報告をつくらしめるとゝもに、その期間中一九二四年の協定の最低賃銀條項による賃銀標準と、坑主側の新提議による低廉賃銀との差額を(炭鑛業補助費として一千萬ポンド)支出することを條件として、とにもかくにも、曲りなりに爭議を片付けたのである。——この調査會は、九月五日に任命され、その後三十三回の委員會を開いて、本年三月十日その報告書が公けにされた。政府はこの報告に基づいて、昨年來の補助金一千萬ポンドを、期日限り補給しないことに決したので、坑主及び坑夫側は、こゝに再び昨年におけるとほゞ同じやうな主張をなし、つひに四月以來イギリス產業會の空氣をいやがうへに險惡ならしめたのである。——その双方の主張する主眼點は、かうである。——坑主側は、炭鑛業の不況を理由として、(一)一九二四年協定の餘剩分配率を變更し、坑夫側八割三分及び坑主側一割七分とすること、即ち坑主側は一九二四年の協定より五分增とすること、(二)從來の協定による最低賃銀率の保障を撤廢すること、(三)賃率の決定は大體これを地方的として低減すること、(四)勞働時間を一時間延長して八時間とすること、を主張してゐる。これに對して坑夫側は、(一)全國的に最低賃銀率を維持すること、(二)時間の延長には反對すること、(三)炭坑を國有としその組織を改造することなどを主張してゐる。政府は、兩者の間に立つて、調查委員會の報告によつて妥協すべきことを勸告し、それを承認するにおいては、その報告及協調條項の要點を法案として議す

に提出するの意をほのめかしたのである。が、結局兩者の間に妥協を見ることが出來ないうちに、補助金支出の期限たる四月三十日は過ぎてしまつたのである。かやうにして事態は急轉直下惡化して、五月一日午後、全國勞働組合は臨時總會を招集し、坑夫に同情して五月三日までに炭鑛業問題の解決を見ないときには、四日から總同盟罷業を決行する旨の決議を、ほとんど全會一致に等しい大多數を以て通過し、衛生・食料及び海員關係の組合を除き、炭坑・運輸・交通・鐵道・製鐵・造船・電氣・瓦斯・印刷・建築組合に對して罷業の通告を發し、諸般の準備をした。かやうにして政府の罷業通告撤回の要求も效なく、五月四日午前零時から、罷業參加者三百六十五萬と稱せらるゝ、未曾有の總同盟罷業が開始せられたのである。そのおもなる參加人員を組合別にかゝげて見ると、かうなつてゐる。

一、炭坑夫聯合……七十八萬八千人
二、鐵道從業員……四十四萬六千人
三、運輸勞働者……四十一萬二千人
四、機械業その他の勞働組合…四十三萬人
五、製鐵金屬工組合……十五萬人
六、印刷業其他……十五萬九千人
七、建築業其他……三十五萬五千人
八、造船勞働組合……十三萬二千人

四

イギリスの炭鑛業爭議の歷史的經過は、大體上述したとほりである。そして、その繰りかへされてゐる爭點は何であるかといへば、坑夫側では、賃銀の値上げ、餘剩利得の分配率增加、勞働時間の短縮、炭坑國有などを主張し、坑主側では最低賃銀の低下、八時間勞働、餘剩利得分配の比率の變更、炭坑の私營を主張してゐる。一と口にいへば、坑主側は、このまゝではまうけ（補助金があるときは戰前より利潤は高かつたが）はないといふ。坑夫側は、これ以下に賃銀（補助金があれば造船工や機關火夫などよりよい）はさげられないといふ。――（尤も物價は戰前の一九一四年七月を標準とすれば、賃銀の方が低く、一九〇九年から一九一三年までの五ケ年平均を標準とすれば、賃銀の方が高い）。――そのうへに、時間まで增されてはやりきれないといふ。どちらのいひ分をとほしても行きつまる。――それが、いはゆる死線である。かやうにして、この爭議の因つて起つた根本原因は、坑夫側も、坑主側も、ともに直接の生活問題そのものであり、彼ら自身の死活問題そのもので

ある。この意味において、爭議の要因は、坑夫にも坑主にも共通である。別箇のものではない。同じ一つの死線をさしはさんでゐるのである。言葉をかへていへば、イギリスの炭坑業の不振そのものが、根本原因である。だから、その癌を根本的に治療することが出來るのでなければ、いつかはまた同じ爭議を繰り返さねばならないにちがひない。――死線は、のぞかれないからである。

サンケー調査委員會以來、いくたびとなく任命された炭鑛業調査委員會が、みなこの根本原因そのものに着目してゐないといふのではない。しかし根本原因そのものを取り除くために、いろいろ調査研究はやつてみたが、その解決策を提案することが出來なかつたのである。さきにのべたやうに、サンケー委員會は炭坑を國有とすべきことを勸奬してゐる。しかも、炭坑の國有そのものが、どうして根本解決策となるかといふ具體的のことは説示してゐない。坑夫聯合もまた極力これを主張して來てゐる。が、やつぱり具體的にその確信を說き示すことは出來ない。昨年出來た炭鑛業審査委員會の報告を見ると、その中に、つぎのやうなことをいふてゐる。いまの炭鑛業の不振は、坑主、坑夫兩者のどうにもならない外界の原因によつてゐる。かういふときには、とかく双方でその責を他に嫁したがるものであるが、不況の原因は兩者に共通であつて、勞資いづれの過失にもよらないのであるから、兩者が共同に熟議することが最もよい結果を生むことになるであらう、と。平凡な文句であるが、まことに、そのとほりである。

けれども、ずつと爭議の歷史をとほしてみると、坑主側と坑夫側との間には、この共同熟議の誠意を示してゐないやうに思はれる。彼らは五六年來この問題のために、常に相接し相談じ、充分に理解を得べき筈であるのに、却つて相折衝するたびごとに遠心力で隔りつゝあるやうに見られる。昨年の爭議の如きは、明らかに坑主側から坑夫側に戰をいどんだものと解さなければならぬ。それに對し強硬派のクツク氏一派は、待ちかまへてゐた作戰をそのまゝに、眞正面から應戰したのである。しかも、彼は、この問題を單なる坑主對坑夫の問題とせずして、勞働界全體の問題として、資本家に對抗さしたのである。けれども、それは公平にいつて、イギリスのために不幸なことである。これまでの勞働爭議なるものは、多く產業界の順況のときにおいて、互にゆづりあつて解決を見たのである。けれどもイギリスの現狀は、交讓妥協するに困難なところに、勞資兩者共通の苦悶がある。私のいはゆる死線が橫はつてゐるのである。解決の秘鍵は要求條件のかけ引きにあるのではなくして、炭坑

業の振興策——廣くいつて產業の振興策にあるからである。批評の立場にある私どもの問題のねらいどころは、そこにあると思ふ。だからたとひ、この爭議は、勞働者側の敗北にをはるとしても、それがためにイギリスの產業界の安定を期し、また政界前途の安定を期せらるべきものであるとは考へられない。くりかへしていふやうに勞資何れが勝つても負けても、この問題の因由する產業不振の根本原因がのぞかれないうちは、イギリスの前途は甚だしく波瀾に富むものといはなければならない。この意味において、坑主及坑夫側の立場についての批判をすることは、いはゞ第二義的の問題に屬するものであると思ふ。

五

私は、イギリスにおける炭礦業爭議の一般的概念を歷史的に述べて、その原因が炭礦業の不振に存することを一言した。そして、勞働者側が、この不振を救ふ方策として、炭坑の國有を望んでゐるといふことも述べておいた。こゝで私は、さらに觀察を坑主及坑夫そのものゝ立場について進めてみたい。さきに私は、勞働者や資本家の立場とかいふものは、むしろ第二義的のものであるといつたが、それは、爭議そのものゝ概念的觀察において、產業の不振が根本原因をなしてゐるからである。けれども、これを爭議の當面の直接原因からみるときは、勞働者の立場と資本家のそれとは、主義のうへにおいて、はつきりと區別され、ともに重大な地位におかれてゐることはいふまでもない。

さきにのべたやうに、一九二一年の大罷業は坑夫側の大敗北にをはつた。その後强硬派のクツク氏一派は、さかんに罷業に敗北した穩和派のやりくちを難じてあくまでも、賃銀減額反對、時間延長反對、生活標準維持、炭坑國有、勞働界全般の利益向上といふ旗じるしで進まうとしてゐる。そしてたゞ單に坑夫聯合だけの結束によらず、勞働組合全體の結合を固めることにつとめて、それに成功した。炭礦業問題をして勞働者全體の問題として協同戰線を張り、一九二五年の爭議において大勝を得、いはゆる「皇帝クツク」の名をとゞろかすに至つたのである。けれども穩和派の人たちは、一九二五年の爭議に對して、クツク氏一派の强硬な態度を喜んでゐないどころか、その勝利に對しても、却つて遺憾の意を表明してゐたのである。鐵道從業員組合の首腦であり穩和派の頭目であるトーマス氏は、昨年の大爭議について、かういつてゐる。『元來坑主側の今度の要求なるものは、まづ炭坑業の收益中から、資本及び企業の利益を差引き、坑夫の賃銀はその後に廻さうといふのであつて、こ

のやり方は、勞働組合として決して承服することの出來ないものである。だから組織勞働の運動としては、この問題によつて坑夫側を見殺して敗北さすことは出來ないので、主義上坑夫側に加擔したもので、この意味は政府筋へも篤と通じてある。しかるにこの問題が今度のやうな成り行きで一段落を告げたために、勞働者は、これから正義を通すためには、罷業が唯一の方法であるといふやうな惡い印象を殘してしまつた。これがために、交讓によつて爭議を解決することは、千倍も萬倍も困難になつてしまつた。』と。勞働黨の首領マクドナルド氏も、また同じやうなことをいつてゐる。なほ、トーマス氏は、炭鑛業問題を根本的に解決するには、炭坑を國有とするよりほかに道がないと信じてゐる。が、その國有實現の方法については、『產業的手段（罷業）に訴へて、この國有を實現さすことには贊成しない。選擧權の行使によつて、これを成就さす方が遙かに容易である』といつてゐる。これによつてみると、穩和派のとりつゝある態度は、あくまでも立憲的であり、合理的である。しかるにこれらの穩和派を抱括してゐるイギリスの勞働組合が、非常手段に訴へて、今回の如き大罷業を斷行したのは、なぜであらうか。それには、トーマス氏のいつたやうな主義上の根本的相違が、資本家と勞働者との間に橫はつてゐることはいふまでもない。けれども、今度の罷業にまで導いて來た勢力は、强硬派の醸成したものであるといはねばならぬ。その强硬派の抱いてゐる主義思想のうちには、產業の革命を招來するやうな極端な傾向が含まれてゐる。政府が、非常權力法まで通過せしめて、この罷業に應戰してゐるのは、罷業そのものを鎭靜するといふことよりも、極端派がいだいてゐる主義理想そのものに對する戰鬪であると考へるのが正しいではなからうか。政府は、すでに昨年の爭議のときに、その形をみたが、いまだ用意が出來てゐなかつたから、補助金給付と委員會設置とでまとめ、九ケ月の間にまさかのときのためにと用意してかゝつたが、今度の政府の對策であるとみるのが、無理がないではなからうか。

ひるがへつて、もう一度强硬派の態度を檢してみる。――坑夫聯合の幹事長クック氏は、昨年の爭議に勝利を得てから、勞働者が團結して立ちさへすれば、必らず勝利を得るものと信じ、極端な協同戰線の前進を主張してゐる。彼は、あくまでトーマス氏などの漸進主義には反對である。彼にいはしめれば、炭鑛業調査會などゝいふものも不必要で、この問題の解決は炭坑國有のほかに道はなく（しかしそれを得る方法が穩和派とちがふ）、そのことは、すでにサンケー調査會で報告ずみとな

てゐる。社會主義實現の期は眼の前にせまつてゐるのであるから、勞働者はその戰列を全力をあげて前進せしめなければならぬといふのである。この點は、坑主側も、よく見ぬいてゐる。こゝぞとばかり、突つこんでゐる。それは、昨年八月に發表せられた坑主協會のステートメントをみても、わかる。いはゞ、坑主側の坑夫側に對する挑戰狀である。これによれば、坑夫側の企てゝゐるところは、私營企業及現在の社會組織を顚覆しやうとするものであつて、もし今日炭坑が國有になつたとしたならば、他の產業とても同じ運命に陷るであらう。この意味において坑主協會は、斷乎としてこれに抵抗するのであるといつたやうなことを、極めて强い文字で書き立てゝゐる。坑主側のこの强硬な挑戰的態度と、强硬派に引づられてゐる坑夫側の態度との間には、非常な隔りがあつて强硬派の勢力がをとろへれば格別、そうでもなくば、妥協の餘地があるかは問題である。かういふ狀態のまゝで進むならば、イギリスにおいては、永遠に勞資の協調をのぞむことが出來ないではなからうか。政府としても、この協調の困難な勞資二者の間に立つて、產業の擁護と憲法擁護とに苦心し、あせつてゐるが、問題の解決策には全く當惑してゐる形である。しかも、政府——とくに保守黨の政府として最も憂ふるところは、坑主側がいふやうに、坑夫側の極端派が勞働運動といふ名目のもとに、社會主義實現の政治的[illegible]を振舞はうとしてゐることにある。そして、政府は、繰り返へされる炭鑛業問題を解決するために、これまで、いくたびか調査委員會を設けて來た。この問題ほど、調査會の設けられたものは、その例がすくないといふくらゐである。それだのに、一つの効だになくして、今日に及んでゐる。それどころか、坑主側からは、かういふ調査委員會は、よろしく坑夫側の政治的野心を調査發表すべきもので、さうでなくばこの問題の解決はむづかしいとさへいつてゐる。尤も、勞働者側の穩和派は、政治的問題の解決は立憲的方法によるべきことを主張してゐるが、主義の相異點を解決するには、勞働者共同の利益のためには、罷業することをもやむを得ないといつて結束し、罷業を遂行した結果は、極端派がこの勢ひに乘じてやつていくといふことになつたのである。

とにかく問題は可成り複雜してゐる。そして罷業問題が、かくされた政治的意義をもつてゐることを見ぬかなければならぬ。なほ、炭坑國有については、數次の調査會の報告を綜合してみると、將來實現せられなければならないもののやうにもみえる。が、この點について今年三月の調査會の報告には、かういつてゐる。坑夫聯合の提案するやうな冒險的の炭坑國營は危

險であるが、石炭礦の所有權は國家の有に歸せしめねばならぬ。即ち石炭礦が既に市場價値を有する場合には、國家はこれを買收すべく、さういふ價値がないか、または現在市價のないやうな深い坑内にあるものについては、單なる國有とする宣言だけで足りるであらう。石炭礦の所有權を國家にうつすときは、從來の坑主の得てゐる炭山使用料は自然となくなつて國家に歸すべく、從つてその使用料によつて勞銀を增す見込みが確實となるであらう。そして小さい炭坑は、出來るだけ合同を實現しなければならぬ』と。この報告は從來の調査會の報告を充分ねつて實際に近づかしめたものである。こゝまで研究が進んで來てゐる矢先きに、罷業をみるに至つたことは、坑主側の强硬なる挑戰的態度と、坑夫側の應戰的態度との間に、政府が憂ふるやうな政治的野心の鬪爭をはつきり意味してゐるものと考へられる。イギリス政府は、今度の行動を以て革命的行動とみなして重大視してゐるのも、かういふ點からであらうか。

六

罷業は、いまたけなはである。勞働者側の資力の點は危ぶまれてゐるが、ともかくも、二週日にかゝつてゐる。それにつけても、今度の罷業にあたつて、二つの注目すべきことがある。

それは、いはゆる罷業破りの運動と、新聞紙の罷業とである。イギリスの罷業破りの運動は、ロード・ハーヂング氏を會長とし、ジエリコー海軍大將その他陸海軍人が要部を占めてゐるO.M.S. 即ち、Organisation for Maintenance of Suppliesである。その目的とするところは、總同盟罷業が起つて、國民生活に必要な事業が動かなくなり、社會が脅威を蒙るといふ場合に、食料・用水・燃料その他社會の生活に必要なるものを維持して行くための組織である。そして、この組織は政治的黨派的の關係はなく、社會全般の利益のために有志市民の力によつて、必要品や必要なサーヴイスを維持していかうとするものである。そして、一片の申込書だけでだれでも入會することが出來る。その會員は、大體四種類に分けられてゐる。即ち、(第一)、鐵道、地下鐵道、發電所、ガス、水道、食料品取扱ひなどのために働く有志勞働者、(第二)自動車その他の有志運轉手、(第三)、郵便、電信、電話事務のために働く有志者、(第四)、筋肉勞働は出來ないが、事務、病院、その他一般の仕事をなす有志者である。かういふ人たちによつて、それ〴〵その任務を果さうといふのである。これはドイツにおける、「テヒニッシエ、ノートヒルフエ」と、ほゞその目的が似てゐるが、ドイツのそれは、もつと組織的であり、その活動の方面も、鐵道、電車、電氣、瓦斯、

水道といつたやうな一般公共機關に限られてゐる。そして、ある程度まで勞働組合もこれをみとめて反對しないのであるが、O・M・Sの方は、その組織の始めから、罷業破りの運動として、マクドナルド氏以下勞働黨その他の名士から批難されてゐる。それが今度の罷業の最初から活動開始したやうであるが、その後の情報をみると、評判ほどの成績は擧つてゐないやうである。それよりも政府の募集しつゝある罷業開始前の失業勞働者その他の有志の方が大規模の活動をなしてゐるやうに思はれる。

罷業が開始されて、しかもその皮切りが新聞であつたことも特筆すべきことであらう。即ち、保守黨系の新聞で、世界一の發行部數があるといはれてゐるデーリーメール紙は、五月一日の社説で、勞働組合會議が總同盟罷業を決行することに決定したことを批難したところが、職工は、これをみて憤慨して罷業にかゝつたため、三日から休刊するのやむなきに至つてしまつた。つゞいて、スタンダード社でも、印刷工總組合所屬の職工が、義勇隊募集についての記事に反對をとなへ、いふことをきかないので、とう／＼發行不能となつてしまつたのである。印刷職工たちが、記事を勝手に自分たちに都合のよいやうに判斷するといふことは、よくない。いはゞ、自分の都合で判斷していく檢閲官が新聞社に頑張つてゐるやうなものである。かやうにして、各紙とも一時發行不能に陷り、辛ふじて小形のものをつくるとか、田舍の新聞がロンドンに進出して印刷したものをくばるやうな、ちやうど、わが國で震災當時東京にみたやうな形である。尤も、印刷しても配達するものがないとか、小形の新聞が、むやみに増すとか、にはかづくりの新聞を高く賣るなどのこともあつた。政府は、一時ラジオを利用することゝし、首相ボールドウイン氏が『地上の平和は善意をもつてゐる人たちに對してのみ來るものである』といふメツセージも、一日の夕べに送られたものであつた。勞働者は、この政府の無線放送に對しても、その電波を攪亂しやうとさへしたと傳へられてゐる。しかし、勞働者のかういふやりくちは、策の得たものではない。民衆の反感を買つたからである。そして、彼等にとつて有利な報道も、自然と載らなくなつたからである。民衆の力なくして、全國的の大罷業は、なしとげられるべきはずがないからである。なほ、政府は、機關紙として新に「ブリツチツシユ、ガゼツト」をつくり、勞働者も、これに對抗するため「ブリツチツシユ、ウヲーカー」をつくつて、たがひに宣傳してゐると、政府が警官をして後者の新聞紙を押收したり檢閲したことも、この罷業にあらはれた出來事である。

尤も、あれだけの罷業があつたにかゝはらず、その騒ぎに對する態度はさすがにイギリス國民であるとうなづかれる點がある。想像してみると、さきにものべたやうにわが國の震災當時に似てゐるが、勞働者も、一般國民も、役人も、みんな落ちついてゐて、冷かに時局にあたつてゐるのには、をどろかざるを得ぬ。――罷業勞働者側も、公約によつて、食料などの生活必要品の運搬配給に對しては罷業しない。病院・食料店・パン製造所などの動力供給は、勞動組合みづからやらうといつてゐる。ロシアから送つて來た同情資金も、きつぱりことはつてしまつてゐる。――政府も、宣傳かと思はれるやり方もないではないが、みだりに緊急權力法も用いず、專ら輿論に訴へることにつとめてゐる。――一般國民も、各階級の人たちが心から、物資の配給や交通機關の運輸などの仕事に奉仕してゐる。そして、交通機關のごときは數日にして恢復したほどで、しかも、罷業者に對してもこれをにくまづ、いはゞ勞資双方のいひ分をきいて、公明な判斷を下さうといふ態度である。――なるほどエヂンバラやグラスゴーに勞働者の掠奪があつたとか、ミツドルスボロで軍隊が列車妨害に強力を用いたなどといふことはあつたが、それとても、戒嚴令のしかれてゐる國の出來事としては、最もすくないものといへやう。裁判所や警察は、いつもより仕事がすくないといふに至つては、ます〳〵、上述のことを裏書きしてあまりある。

さうして、どうやら、私の第六感としては、勞働者側がまけて、近く坑主と政府との手打ちとなるではないかと思はれる。――たゞし、かやうに罷業狀態がうらやましいほどであり、妥協に近づくとしても、それで、この問題の死線が除かれるものでないといふ私の説は忘れないやうにしてもらひたい。

七

私は、死線をさしはさんでゐるイギリスの爭議について、まとまりにくい觀察をしたが、最後に今度の大罷業が、國際的に如何なる關係をもつであらうかといふことを書いて筆をおきたい。

世界の勞働者はみなイギリスの勞働者側に同情を持ち、相當の援助をなさうといふことを聲明してゐる。そして事實上相當の援助をなしてゐるものもある。けれども、從來の例によつてみても、一國内に起こる勞働爭議に對する外國勞働者の後援は、その聲援の花々しいほど實際的效果があがらないものであつた。フランスのルール占領當時のことを思ひ出してもわかる。そして、ルールの生產能力の減退したことが、却つてイギリス

やフランスの失業者を救濟して、イギリスの如きは、三十萬人も收容することが出來たほどであつた。かう考へるとイギリスの今度の總罷業が長引くことになれば、ヨーロッパ大陸における失業者が救濟されるやうなことになるではないかとも思ふ。外國勞働者は、同情的後援をする誠意はあるが、みづから失業し、みづから苦しんでまで犧牲的援助――ロシアの勞働組合の人たちが勞働の四分の一を寄付したのは例外である。尤もその金は送り返へされた――をなさうとはしないであらう。それに、ヨーロッパ大陸には、今日失業者がありあまつてゐるのであるから、勞働組合としても積極的後援はなし得ない狀態にあると思ふ。だから、海外勞働者の同情が、イギリスの罷業そのものに對する精神的後援は大なるものがあらうけれども、實際的の効果については多くをのぞむことが出來ないであらうと思ふ。

ひるがへつて、これを經濟上からみれば、どうであらうか。――イギリスは、老いたりといへども、ヨーロッパにおける經濟の中核である。それに起つたさわぎであるから、その影響も少なくないであらう。イギリスが弱ることは、全ヨーロッパ經濟の復活をおくらすからである。ましてや、これが長引くにおいてをやである。ひるがへつて思へば、戰後のイギリスは、なか／＼努力して來た。歷代の政府に、一生懸命に公債の整理もした。税も思ふさま整理して來た。戰時の最高所得税標準率一ポンドに對する六シルリングは四シルリングまでさげられたほどである。この財政の整理は、一般經濟にもひゞいて、生產費を少なくするなどの好轉材料をもたらし、金解禁にまでこぎつけたのである。もとより、さきにのべたやうに根本的の產業不振はあるが、ともかくも、努力と、その結果とは、あらはれた。しかるに、この罷業で、ぴつたり進行をとゞめてしまつた。前勞働黨內閣のときの大藏大臣スノーデン氏は、罷業による賃銀や生產上の損害は一日一千萬ポンドになるから、二週間もつゞけば、その直接間接の損害は十億ポンドを超すであらうといつてゐる。もとより、この數字には、少しく誇張したところがあらう。が、とにかく、かうしたことのために生產費は高まるにちがひない――貿易は不利になる――わるくすると再び金の輸出禁止もしなければならぬと想像するものさへある。罷業がおさまり妥協がつくとしても、もし昨年のやうに補助金でも出すことになれば、――結局增税のやむなきに至るであらう。かやうにイギリスが痛められるものならば、それがヨーロッパ諸國にひゞかぬわけがない。むろん、イギリスの生產がとまつたために、その競爭品なり代位品をつくる國は、その仕事

の上に景氣を見るであらう。が、それは、部分的のことではあるまいか。さらにアメリカに對しては、どうであらうか。イギリスは、アメリカの第一の得意先きである。アメリカの輸出品の二十一パーセントが、イギリスへはいつてゐる。そのお得意の不況がアメリカにひゞかなくてすむだらうか。それにしても、今年こそは、本當に世界の經濟の復活することを見込んでをり、對米債務の整理によつて、いよ〳〵その望みをかけておいたのに、それが空しくなるのではないかと思はれる。世界各國に部分的の景氣をよぶものはあらうが、大體において、この大病の災は、各國ともにうけることであらう。イギリスの植民地が、不利の地位にあるのはいふまでもない。しかも、かうした不幸が長引くほど影響は廣くかつ深刻になるのではあるまいか。

さらに政治的にこれを見れば、問題はイギリスの國内問題であつて、外交關係においては何等關係するところがない。たとひ罷業者側が勝つことになつたとしても、穩和派が政權の上に勝利を得るであらうから、國際的に影響するところはすくないではないかと考へられる。たゞこの罷業の成否そのものが、世界の勞働運動のうへに思想的に及ぼす影響は、きはめて重要視すべきものがあるのではなからうか。さらに強硬派が勝つことになれば、ロシア流の共産黨系の運動のことも考へねばならないではなからうか。また、いづれになるも、その反動思想には、心すべきものがあるではなからうか。

しかし、私は筆をおかうとするにあたつて、私の第六感は、やつぱり、かう動いてゐる。勞働者側はまけるであらう。しかも、妥協條件は、あまり勞働者側をいためつけるやうなものではないであらう。そして、イギリスの永年おつかぶせて來た病はそのまゝにしておかれるではなからうか。それにしては、罷業といふ非常手段を取つたことは、高價な犠牲であつたやうに思ふ。尤も、罷業は――賃銀のために戰ふことは、權力のために戰ふものである――といふ意味においては、勞働組合の人たちも、輕るい滿足を味つてゐるではないかとも考へられる。

――一五・四・一二夜――

英國炭礦業行詰の實相と其原因

高橋龜吉

一 總罷業勃發の經濟的意味

去る五月一日から敢行せられた英國炭坑主側のロックアウト、同四日から宣戰せられた英國勞働側の總同盟罷業のことについては、他の筆者が、色々の角度から、之を詳論せられる筈であるから、私は、單に、この總罷業の根因をなしてゐる英國炭坑業の行詰の事實について述べるであらう。

所で、ことの順序上、茲に一言しておきたいことは、今度の總罷業の意味についてゞある。そもそも、いま、何故英國に炭坑夫を中心とした總罷業が起つたかと云ふに之を碎いて云へば要するにかうである。即ち英國の炭坑業は、後に述べるやうな原因のために、最近愈々行詰つて、それに從事する坑夫と資本家とを、從來の如く、(乃至は普通一般に比例する生活程度を)賄ふ力が無くなつた。そこで、これ迄に於て已に、勞資双方は、已に少からぬ程度の收入を減らしてやつて來たのであるが、しかし、今迄のやり方によつては、愈々炭坑業を維持することが出來ない所にまで困難は押し迫つて來た。こゝに於て、資本家側は、この困難を凌駕する方法は、要するに、賃銀を引下げ、勞働時間を延長する外なく、さうでない限り、炭坑業の多くは損失のために閉鎖せざるを得ないと主張し、專ら、この炭坑行詰打開の負擔を勞働者に荷はせんとした。斯樣な考へは、資本主義經濟の仕組みの上に立つて、その原則の下で、一國の經濟を運轉して行かうとする者としては、必然な行き方である。現に、左樣な考へ方、即ち「事業が引合はないから賃銀を引下げる」と云ふ考へ方、又之を逆に云へば、賃銀を引下げると云ふことは、事業が引合はないと云ふことを證明するだけで十分であると云ふもの〻考へ方は最近までも社會の無條件に認めて來た所である。尠くとも、致方のないことだとして諦める外はないと考へられて來た所のものである。

然るに、歐洲戰中戰後を通じて、社會就中勞働階級のもの〻

見方、考方は實際上革命的に變化した。彼等は、今日に於ては「事業が引合はない」と云ふことが、賃銀を引下げる至上理由だとは少しも考へない。若しも、その產業が引合はなくなつたとせば、先づ、整理すべきは勞働賃銀でなくて、資本家の利益であり、經濟上の改善である。社會がその產業の存在を必要とする限り、それに從事する勞働者の生活は、尠くとも、その國の最低生活標準以下に落させないことを保證する義務があると主張するのである。斯様な主張は、無論、これ迄、勞働階級の繰返し主張し來つた所であるが、しかしこの主張が最も大規模に、且つ最も切實な實際問題となつて現はれたのは、英國炭坑業に於てゞある。即ち、坑夫側は、なる程、炭坑業が現に行詰つて、現狀を維持し難いと云ふことは之を認めるが、しかし、それは直ちに、賃銀引下、勞働時間延長の外なしと云ふ結論にはならない。坑夫側の信ずる所によれば、炭坑を國有にして、經營方法を改革すれば、勞働者の生活程度をこの上、低下することなしに、炭坑業は維持出來るのみならず、進んで、更により以上の勞働條件をも賄ひ得ると主張する。しかもこの坑夫の主張をして、千鈞の重みあらしめ、百萬の力たらしむるものは、現に、炭坑夫の生活程度が從來に比し非常に低下せられてをるにも拘らず、坑主側の主張によれば、尙ほこの上に尠からぬ賃銀の引下を餘儀なくされる、と云ふ窮屈の位地にあることである。

之を要するに、今度の總罷業の根因は、英國炭坑業の行詰に面し、その打開に必要な最後の犧牲（耐え得る犧牲は已に勞資双方ともに或程度迄やつて來た）を、勞働側が負擔するか、將又資本家側が負擔するかの爭ひを、理論や政治では解決出來ずに、腕力（即ち戰爭）で爭ふに至つたものである。しかも、斯様な炭坑業行詰の事情は、英國の他の產業に於ても、大なり小なり、何れも之に面接してゐるわけであつて、炭坑夫の運命は又、他の產業の勞働者の運命を支配するものであることが、此際就中大である。これ炭坑業一個の問題が、（英國勞働運動の階級的教育の進步の力によること云ふ迄もなく多大であるが）周知の如く、英國全勞働階級の問題として、總罷業を見るに至つた經濟的原因である。同じ理由は又、資本家側を驅つて、坑主側を援けしめたること云ふ迄もない。

二　英國炭礦業の經營困難の現狀

然らば、云ふ所の英國炭坑業の行詰とは如何なる事實を指すかと云ふに、先づ、英國勅令炭礦業調査委員會が、最近（三月）發表せる報告によつて、英國炭礦業最近の位地を列、二、

之を左の如く概括することが出來る。

一、石炭の內地（英國）需要高は、戰前に比し少しも增加してゐない。人口の增加や產業の進步の結果增加すべきであるのが、石炭消費上の節約方法の發達と製鐵及造船事業の沈衰とのため相殺せられたのである。

二、石炭の外國輸出は、一九〇九――一三年平均に比し、一九二四年は七分五厘の減少、一九二五年（即ち昨年）は二割二分の減少である。而して一九二五年に於ては、歐洲の石炭產出國の殆んど何れもが、甚しい沈衰に襲はれてゐた。この石炭輸出不振の主なる原因は、（一）歐洲大陸に於ける重要なる產業の不振なること、及び露國の石炭輸入が殆んど消滅したこと。（二）船舶の燃料としての石炭の代りに重油の使用せられるものが增加したこと、（三）獨逸に於ける褐炭の產出が激增したこと。（四）大陸の或る國々に於ける新坑の開發又は舊坑の擴張ありしこと等である。

三、斯く、內地需要は增さず、海外輸出は著減せるにも拘らず、英國炭坑に使用せる坑夫數は、一九〇九――一三年平均の約百四萬八千人から、一九二五年には百十五萬六千人となつた。即ち一割餘の增加である。

四、一九二三年のルール占領は、英國產炭額の三分の一餘を產出するルール炭田の產炭額を激變せしめ、その結果、英國石炭の需要を激增し、利益を增し、賃銀引上げを可能ならしめた。然るに、一九二四年夏以後は、ルールは平常狀態に復し、財界の不況は更に深刻となり、炭價は暴落して、炭礦業は多くは損失を生ずることゝなつた。

五、例へば、英國の炭礦業を現狀のまゝで維持するために、英國の國庫は、昨年八月以降十二月迄に於て石炭一噸につき二志六片の補助を與へてゐるが、これは山元炭價に對し實に一割七分に當る。更に之を十――十二月の三ケ月間に限れば一噸當り三志にして、この結果、坑主側に平均一噸につき一志六片の利益を與へてゐる。しかして、若しもこの期間、國庫補助金なかりせば、實に、その全產炭額の七割三分迄は、損失に當るのである。（因に國庫の補助金は昨年八月より本年四月迄に約二億圓である）

之を他の言葉で約言せば、石炭の賣價は暴落したるにも拘らず、その生產費は低下しないで、英國の炭礦業は玆に、何とかして、その生產費を低下しない限り、やつて行けない位地に立ち至つたわけだ。いま、右の事情を、具體的に數字で示すと、別表（第一表）の通りであるが、之によつて分る如く、石炭の賣價は、一九二三年又は四年頃の一噸二十志內外よ

り、最近は約十六志に暴落してゐるにも拘らず、生產費は殆んど減少してゐない。(尤も一九二五年七月以後の分が著減せるは國庫の補助金があつて、之れが生產費から差引かれてあるからである)就中、賃銀に於てさうである。この結果、歐洲戰爭前に於ては、一噸當り平均一志六片半の利益あり、又一九二三年乃至一九二四年六月迄は大體にそれと同じ利益を得しものが、一九二四年夏以後に於ては、その利益は三分の一以下となり、一九二五年四—六月に於ては逆に約一志の損失となつてゐる。(一九二五年八月以後は一時國庫の補助金ありて、この損失は減少乃至消滅せり)之に對し、一交代當りの坑夫の收入賃銀は、大體に十志十片內外にて不變である。(尤も一九二五年八月以降は國庫補助金による。)しかし乍ら、いま、一九一三年に對する賃銀の騰貴を見るに、その最低賃銀は一九一四年の三割三分の一增にて、しかも多くはその最低賃銀にまで低下してゐるにも拘らず、生活費は戰前よりも七割餘を騰貴してゐるわけで、社會的見地よりせばこの上、賃銀の引下餘地はないわけである。即ち、資本家側から云つても引合はないが、勞働側から云つても、已に賃銀は極度に引下げられて、この上の賃銀引下げ餘地はないと云ふ所に、英國炭礦業問題の最も困難な點が橫はつてゐるのである。

(一) 英國炭礦一噸當生產及賣上費內譯表

	賣上收入(志 片)	賃銀(志 片)	合計生產費(志 片)	差引損益(志 片)	一交代當平均賃銀(志 片)	坑夫一交代當產炭高(ハンドレッドウエート)
一九一三—一四年平均	一〇・〇〇・〇〇	六・一〇・〇〇	九・〇五・五〇	×一・〇六・五〇	六・〇五・六四	二〇・五三
一九二一年 一—三月	三三・〇五・二五	二九・〇八・〇〇	四〇・〇五・二五	△七・〇〇・〇〇	—	—
十—十二月	二〇・〇三・四五	一五・〇八・五八	一九・一一・〇九	×〇・〇五・三四	—	—
一九二二年 十—十二月	一八・〇六・一八	一一・〇四・九五	一六・一一・八〇	×一・〇六・三九	—	—
一九二三年 一—三月	一八・一一・三六	一一・〇六・六八	一六・〇六・三四	×二・〇五・〇二	九・〇七・七二	一八・二三
四—六月	二〇・〇五・二二	一一・一一・五六	一七・〇三・五七	×三・〇一・六五	九・〇九・七七	一七・九〇
七—九月	一九・一〇・五二	一五・〇五・二六	一八・一〇・〇九	×一・〇〇・四三	一〇・〇七・二〇	一七・四二
十—十二月	一九・一〇・八一	一三・〇六・八五	一七・一一・二八	×一・一一・五三	一〇・〇五・五五	一七・七六
一九二四年 一—三月	二〇・〇七・八九	一三・〇七・五〇	一七・一〇・二六	×二・〇九・六三	一〇・〇三・八二	一七・七九
四—六月	二〇・〇三・五一	一三・〇八・〇〇	一九・〇三・一一	×一・〇〇・四〇	一〇・一一・一三	一七・四八
七—九月	一九・〇一・八七	一五・〇八・一九	一九・〇一・五八	×〇・〇〇・二九	一〇・一〇・一三	一七・三三
十—十二月	一八・一一・九〇	一五・〇〇・九三	一八・〇四・二九	×〇・〇七・六一	一〇・〇七・〇四	一七・七四
一九二五年 一—三月	一八・〇六・五〇	一三・一一・七五	一八・〇〇・一七	×〇・〇六・三三	一〇・〇七・五八	一七・九八
四—六月	一七・〇五・〇三	一三・一一・八九	一八・〇四・八四	△〇・一一・八一	一〇・〇六・七七	一七・八五
七—九月	一六・〇四・七八	*一三・〇八・九七	一六・〇七・五七	△〇・〇二・八二	*一〇・〇四・八五	一七・八八
十—十二月	一五・一一・六五	*一三・〇五・七五	一四・〇四・九五	×一・〇六・七〇	*一〇・〇五・一四	一八・五三

(備考)*印政府補助金を含む。本表は英國鑛山局發表の數字による

三 英國炭礦業行詰の原因

以上に示したる事實によつて、英國炭礦業の經營が全體とし

て如何に困難に陥れるかは容易に之を看取し得る。しかし、英國炭礦業行詰の眞の根因は、單に斯様に炭礦業の經營が損失に陥つたと云ふことではなくて、それ以上、この經營困難の炭礦業を、如何に處分するか、その處分の仕方に行詰つてゐる所にある。云ふわけは、若し、資本家側の主張する通りにせば、不引合炭坑の閉鎖による失業者の激増と、賃銀の激減による坑夫生活程度の著しき低下と云ふことを伴はねばならないが、このことは、一つは炭礦の英國經濟全體に對して占むる位地の重大なる點から、一つは坑夫側の頑強なる反對運動から、極めて重大なる結果を生ずるに至る。例へば後者のそれが如何なることを意味するかは、今度の總罷業の結果を考へるだけで十分であるが、いま前者の位地を見るに、最近、バルフアー人口問題委員會の報告に從ふと、第二表の如く、炭礦業に從事せる職業人口は一九二一年に於て百十三萬三千人にて英國全職業人口の六%五九に當り、農業人口を凌駕して、最も多數の人口を包含せる産業に屬する。

（二）英國（イングランド及ウエールス）職業人口表（男女共）

職業	人口實數 一九一一年	人口實數 一九二一年	同上千分率 一九一一年	同上千分率 一九二一年
炭礦	九七一千人	一、一三三千人	五九・六	六五・九
農業	一、二三〇	一、一二四	七五・五	六五・四
金屬、機械、器具、車輛	一、五一六	二、一二六	九三・一	一二三・七
綿絲紡績	六二八	五九六	三八・六	三四・七
運輸	一、一二七	一、二〇四	六九・二	七〇・一
建築	八六一	七五八	五二・九	四四・[illegible]
合計（其他共）	一六、二八四	一七、一七八	一〇〇〇・〇	一〇〇〇・〇

（備考）倫敦エコノミスト誌、今年四月十日號より採る。

更に又、若し勞働者側の主張の如き解決に出らんか、現に、英國全體の産業の經營原則を捨てゝ、國營にまで進むと云ふ一大變革を必要とし、從つて、資本家側の反對猛烈にて、容易に之を實現することは出來ない。

斯様のわけで、英國炭礦業行詰の原因を知るためには（一）その經營が現狀に於ては困難となつた方面と（二）之を打開する手段方法の困難となれる方面とを調べる必要がある。しかし、兩者は要するに、一の楯の兩面に過ぎない點が多く、結局、以上、英國炭礦業の行詰の根因としては、之を次の三點に大別することが出來ると思ふ。

一、英國炭礦自身の老衰と、世界經濟の根本事情の變化とのため、英國炭礦業の地位が根本的に惡化したこと。

二、歐洲戰時の政府石炭管理に伴ふ必要上の諸制度が、各種の方面に於て、資本主義的經營方法の根柢にヒヾを入れた

こと。

二、英國の爲替回復のため、炭價が暴落して、それに伴ふ生產費の立て直しを必要とするに至つたこと。

即ち、(一)の事情のため、英國炭礦業は、その根本的立て直しを必要とする位置に陷れるにも拘らず、(二)のために、之を從來の如き資本主義的方法に於て敢行することを得ず、さればと云つて、社會主義的方法によ る立て直しも實行出來ず、結局、何れともつかぬ生溫い彌縫策をやつて來て、益々、英國炭礦業の位地を惡化さした。所へ、最近(三)の事情が勃發して、いやでも何とか之を立て直さなくては、從來のまゝのやり方では英國炭礦業の維持が出來なくなつたのである。以下、右の三大原因の一つ〳〵に就いて、その大樣を述べる。

四　英國炭礦業自體の根本的行詰事情

英國炭礦業が、今日の如く行詰るに至つたそれ自體の根本原因は思ふに左の諸點である。

一、英國炭礦の老齡に達したこと、

二、石油、歐洲大陸に於ける水力電氣等石炭に代る動力の發達、並に、石炭利用方法の進步による石炭需要の減少、

三、外國石炭業の發達、就中、獨逸褐炭の激增と米國石炭の競爭。即ち、英國石炭の輸出の減少

先づ、(一)英國炭礦が老齡に達せりと云ふことは如何なることを意味するかと云ふに、それは、その採掘に益々多額の資本と、費用とを要するに至つたことである。蓋し、炭坑年齡の老境に入ると共に、(一)地下益々深く採掘するに至ること、(二)有利の炭層よりより不利の炭層を採掘するに至ること、等のため、設備費にも、採掘費にも、より多額の費用を要するものである。試に、いま、英國鑛山技術者協會で調査し、昨年十二月八日、英國勅令炭礦調査委員會に提出せる歐米主要炭田比較表によつて、その重なる點を英米について比較するに左の如くであつて、

(三)　英米炭田比較表

	米國(八五〇百萬噸)	英國(三七五百萬噸)
產出能力年產	米國(八五〇百萬噸)	英國(三七五百萬噸)
炭層	露頭又は地下淺く經濟的稼行に適する厚さの炭層にて其だ豐富なる埋藏量を有す	大部分は最も經濟的なる厚さよりも稍薄き炭層にて、且つ地下甚だ深き處より採掘せらる
排水	自然排水又は淺き唧筒排水	多數の地方にて唧筒の力を要すること大なり
新開鑿に對する掘下狀態	一般に容易	一般に困難

英國炭田が米國の現在の如き地位にありし繁榮時代は數十年以前であつたと云はれてゐる。

この結果は、從來よりも、坑夫を多く使用し、機械を多く利用し、設備に多くの金を費やし乍ら、その採炭高は比較的に増加せず、從つて、一噸當りの石炭生産費は高くなること云ふ迄もない。例へば、いま、英國鑛山次官イー・エー・ゴウース氏が、去る十月十五日の炭礦調査委員會に提出せる英國炭礦業に關する最近の統計と戰前とを比較せるものによると、別掲の如く、一九一三年を一〇〇とせば、一九二五年には(1)の坑夫數は一一〇、(2)及(3)の機械使用數は二三〇乃至四八九と著増せるにも拘らず、その採炭高は、他の個所に示せる如く却つて減少してゐる。又、(15)の坑夫一年一人賃銀は一八九なるに對し(11)の一噸當採掘賃銀は二一六と二七大である。云ふ迄もなく、一噸の採掘に從來より多數の勞力を要する結果であつて、事實前掲第一表によると一九一三―一四年平均に於ては、坑夫一交代當の採炭高は二〇・二二ハンドレッドウエートなりしもの最近は一八・〇〇ハンドレッドウエート内外である。(尤も之については、資本家側からは坑夫の怠業の結果だと云ふ非難がある。)更に、(11)の一噸當賃銀が二一六なるに對し、(12)のその他の生産費は二三八と一二二を増加してゐるが、之によつて、賃銀が高過ぎると云はれながら、尚ほ、その他の生産費の方が、更に戰前よりも多額を要してゐることが分る。云ふ迄もなく、炭層が深く且つ惡くなつて、多くの經費を必要とするに至つたからである。

一九一三年に於ける全英國石炭坑業の統計數を百として比較したる一九二五年の統計（鑛山次官の發表）

(1)	坑夫數	一一〇
(2)	截炭機使用臺數	二三〇
(3)	切羽に使用する運炭機臺數	四八九
(4)	截炭機を以てす採炭量	二七一
(5)	採掘石炭の總價格	一八一
(6)	同上一噸の價格	一九六
(7)	汽船燃料を含む輸出石炭の總量	七八
(8)	輸出石炭の船乘一噸の申告價格	一七一
(9)	全英國内の消費量	九九
(10)	人口一人當り消費量	九三
(11)	一噸の採掘賃銀	二一六
(12)	賃銀以外の坑木其他の材料及諸經費一噸當り	二三八
(13)	地主に對する納附金	一〇二
(14)	採掘總經費	二一五
(15)	坑夫一年一人當賃銀	一八九
(16)	賃銀並に給料總額	二〇八

以上極めて不十分ながら、之によつて英國炭礦業が老衰的凋落原因に襲はれてゐることが分るであらう。

次は(二)であるが、之につき歐洲大陸に於ける水力電氣の發達、石油の石炭代用、石炭利用法の進歩等のため、果して幾

何の石炭需要が減退したかは詳かでないが、汽船燃料としての石炭については、炭坑調査委員會に於て、海運業を代表してエグラペー及ホルト兩氏が陳述してゐる。之によると、ロイド・レジスターによれば、一九一四年には、全部石炭を使用せる船舶は全體の八割九分なりしが、今は六割五分に減じ、又機械又は內燃機用として石油を使用せるものは一九一四年には僅かに二分に過ぎざりしもの、今や三割八分に增進してゐる。最後に、英國炭坑業の根本的行詰り原因の一は、外國炭礦業の發達による競爭である。例へば英國炭礦調査委員會に對し、前鑛山監督官サー・リチャード・レドメーン氏の答申せる所によると、「約五十五年前までは、英國の產炭額は世界の二分の一を占めてゐたが、一九二四年には、世界の產炭額十三億四千萬噸に對し英國は二億六千七萬噸にして、卽ち世界の五分の一に止るに至つた。」とある。更に又、第四表によるも、米國、獨逸（戰後は多くの炭田地方を失ひたるため戰前との比較にならぬが）其の他の產炭の著增せるに對し、英國のそれの衰退せることが明かである。卽ち、一九一三年には英國は世界の約二一%八を占めしもの、一九二五年には約一八%三に減じてゐる。

（四） 世界の重要石炭產出國別（單位百萬佛噸）

	英國	米國	獨逸	其他	合計
一九一二年	二七六・三	五三五・七	二三四・五	三三五・五	二、一九二・〇〇
一九一三年	三二一・九	五六九・九	三〇五・七	二八〇・三	一、四七八・〇〇
一九二三年	二〇八・四	五九六・八	一八一・一	三〇一・六二	一、三五九・九〇
一九二四年	二七一・四	五一八・六	[illegible]・四	三二一・六	一、三三三・〇〇
一九二五年	二五〇・六	五三〇・八	二七二・六	三一四・〇	一、三六八・〇〇

（備考） 戰前は我國農商務省統計による。最近は米國鑛山局調査

以上の如き諸種の結果が、綜合して英國炭礦業を壓迫するに至つた程度は、之を同國の石炭輸出の減退によつて最もよく伺ふことが出來る。卽ち、別表（第五表）により、一九〇九年より一九一三年の平均と昨一九二五年とを比較するに、英國の石炭輸出は六千五百五十二萬一千噸より五千八十一萬七千噸と、千四百七十萬噸、卽ち、二割二分を激減し、船舶供給炭も亦、同期間に、約三百萬噸、約二割を減少してゐる。

（五） 英國石炭需給表（千噸）

	一九〇九年より一九一三年平均	一九二三年	一九二四年	一九二五年
生產	二六九、五八九	二七六、九五七	二六七、四六一	二四四、四〇七
輸入	三四	一二	八	一一
計	二六九、六二三	二七六、九六九	二六七、四六九	二四四、四一八
輸出	六五、五二一	七九、四五九	六〇、六五一	五〇、八一七
船舶供給	一九、五六五	一八、一五八	一七、六八九	一六、四七八
計	八五、〇八六	九七、六一七	七八、三四〇	六七、二九五
內地消費	一八四、五三七	一七九、三五二	一八八、一二九	一七七、一二三

いま、この、英國石炭輸出激減の國別を見るに、第六表に示す如く、その重なる國は、戰前と一九二五年とを比較すれば、露國の約六百萬噸から約六十萬噸、瑞典、諸威、獨逸への各半減を主とし、専ら、歐洲大陸への激減であつて、南米に對しても亦注目に足る減少を示してゐる。

（六） 英國石炭輸出重要先戰前戰後比較

國	一九一三年	一九二三年	一九二四年	一九二五年
露國	五、九九八 千噸	＊九五八 千噸	五六〇 千噸	＊五八六 千噸
瑞典	四、五六三	三、一六八	三、五五〇	二、七二七
諸威	二、二九八	一、六一〇	一、八二二	一、七五〇
丁抹	三、〇三四	三、一七〇	三、五五一	二、七八三
獨逸	八、九五二	一四、八〇六	六、八二四	四、一六五
和蘭	二、〇一八	六、七九四	二、七四三	一、五二七
白耳義	二、〇三一	六、五〇五	三、三三〇	二、四八六
佛國	一二、七七五	一八、八二六	一四、五三五	一〇、二三五
伊太利	九、六四七	七、五九三	六、七〇六	六、八一一
スペイン	―	一、一四六	一、四九九	一、七五六
埃及	三、一六二	一、七〇六	一、八〇九	一、九七〇
智利	五八九	一九	六七	一〇〇
ブラジル	一、八八七	一、一五二	七九八	一、〇九九
アルゼンチン	三、六九四	二、四六一	三、一一六	二、六四五
ウルゲー	七二四	四〇五	四二〇	三七三

（備考）一九二三年以降の露國には、芬蘭を含む

尤も、以上の如き輸出不振の原因には、已述の如き、根本的原因の外、世界就中歐洲經濟最近の不振も手傳つてゐること云ふ迄もないが、しかし、この不振は各國何れもその打擊を蒙れるに拘らず、就中、英國炭礦業の打擊大なる所に、已述の如き、英國炭礦業の根本的衰因が作用してゐると見られるのである。而かして、大陸に於けるこの英炭輸入激減の他の大なる理由としては、英國が歐洲戰中戰後に於て、その石炭の輸出を制限し、乃至は滅法高く賣り付けたることに刺戟せられたる所尠少でなく、更に、ヴェルサイユ平和條約により獨逸の賠償石炭規定の打擊が强く勞働側よりは指摘せられてゐる。

何れに致せ、斯く、英國の石炭輸出が激減したること、それにも拘らず、英國現在の炭價は、競爭のため暴落せざるを得さるに至つたことが、今度の總罷業の根因をなした英國炭礦業行詰の、最も中心的事實であることを以上によつて認めて戴けば、筆者の目的は達せられるのである。

五　戰時の石炭政府管理による炭礦業經營基礎の激變

已に述べたるが如く、斯く、炭礦業の位地の困難となれるに際し、之を打開する手段としては、資本主義經濟の仕組に出る

限り、之を左の何れかの方法か、又はその全部かを採用する外に策はない。

一、賃銀を引下げること、

二、勞働時間を延長すること、

三、不引合の炭坑をドシ〳〵閉鎖して一方に石炭の產出を減少して炭價を引き上げ他方に失業者を續出せしめて賃銀をセリ下げしむる。

事實、これ迄に於て已に、これ等の手段は出來るだけは已に資本家によつて採用せられたのであつた。例へば、いま、一九二一年以來今日に至る賃銀引下げの、已に如何に甚しいかを、サウス、ウエールスに於ける採炭夫について見るに、一九二一年の三月以前に於ては、（即ち政府の石炭管理時代の末期）その最低賃銀は十六志十一片二一であつたものが、一九二一年三ケ月のストライキの後に於ては最低賃銀は八志一片九二と半減してゐる。しかも之れは最低賃銀であるが、一九二一年三月以前に於ては、最低賃銀以外多くの收入ありしに反し、今日は漸くその最低賃銀（一種の利益分配法はあるが今日は損失狀態でそれはない）を漸く維持してゐるもの多き狀態で、その賃銀低下の實際の率は遙かに大である。（尤も一九二四年の協約改正で多少引上げられたが）例へば前掲第一表の噸當り賃銀を見るに、一九二一年一―三月には平均二十九志八片なりしものが、最近は十二志十片內外にて已に六割七分の減少である。なる程、これは、政府の石炭管理時代の賃銀が、餘りに高かつたと云ふことがないではなかつたが、兎にも角にも、坑夫の生活から云へば、最近の賃銀收入は、一九二一年に比し殆んどその三分の一になつたのである。しかも、此間生活費指數は一九二〇年末の二五五より最近の一七五內外と約三割五分を低下したに過ぎない。而して、現在の賃銀は一九一四年の賃銀に三割三分の一を附加したる最低賃銀にまで低下してゐるのであるが、生活費指數は戰前に比し七割餘の騰貴であつて、即ち戰前以下に生活程度を引下げてゐるわけだ。坑夫が、この上更に相當賃銀を引下げんとする坑主側の要求を頑强に峻拒するわけが看取出來るであらう。

しかし、坑夫が、已述の如き炭礦業現在の損失狀態をよく知りながら、しかも、賃銀を引下ぐるにあらざれば、（若くは勞働時間を延長するに非ざれば、）經營不能なりとする坑主側の要求を、頑固として峻拒し得るわけは、單に、右述の如き、賃銀引下が餘りに甚しいと云ふことだけからではない。それだけでは、坑夫及び勞働組合全體をして、今日の如く、頑强に、賃銀引下に反對せしむる自信も、社會的支持もないわけであるからだ。云ふこゝろは、然らば、如何にするかと云ふ反問に對し

自信ある代案を持つてゐなくては、假令、如何に賃銀の低下が甚しからうとも、さうでなくては經營不能だと云ふ坑主側の主張に對抗し得る力はないと云ふに在る。

然るに、石炭の政府管理中に於て、英國の炭坑夫は、現實に（單に紙上に描かれた案でなくて）その代案のあること、しかもそれが有効にして且つ實行可能なることを實際上敎へられて來てゐる。その第一は、石炭管理中、政府は、一方に炭坑主に對して戰前並みの利益を保證すると共に、他方にそれ以上の利益を政府の手に納め、之を綜合して、一つは之を坑夫の賃銀引上げの財源とし、一つは之を損失を生ずる炭礦に對する補償費に充てたことである。之れ所謂、利潤の綜合制度である。而して、第二は、政府は、その石炭管理中の賃銀値上の方法としては、從來の如く、各地方それ〴〵の炭坑の支拂能力に應じて値上げすると云ふが如き方法を採らずに、全國一律に例へば一週二磅二志づつ引上げると云ふが如き方法に由つたことである。この結果、實際に於ては、左の如き變化を生じ、斯様にして、炭坑夫をして、その一雜兵に至る迄、賃銀の全國的協定の利益なることを實際に覺らしめた。

戰前の地方別最低賃銀と戰時割増の結果

一週六日賃銀	ペンブロークシャ 磅	志	片	グラモルガンシャ 磅	志	片
戰前最低賃銀率	一	八	〇	三	五	三
戰時全國一律增賃	二	二	〇	二	二	〇
合計	三	一〇	〇	五	七	三

（備考）"The Miners Conflict with the Mineowners" by John Thomas, B. A. P. 30

斯様な方法に於て、英國の炭坑夫は、政府の石炭管理以來九二一年三月末、その管理が終る迄、賃銀を受取ることに慣らされて來たのである。事實、かうしてやつて見ると、全く同一の仕事をしながら、一は炭坑の善い所で働いたと云ふとのために多くを收入し、一は不運にして炭坑の悪い所で働いたために收入が少ないと云ふことは、全く理由にならない。

されば、坑夫側は常に主張する。成る程、或る炭坑は損をし、或る炭坑は儲からないであらう。が或る炭坑はウント儲つてゐる。であるから、かつて政府がやつた如く、その利益を綜合して、平均すれば、結局、どの炭坑も全國的に均一の利益を得、どの坑夫も全國的に均一の賃銀が得られると。之れ、炭坑夫側の、罷業毎に常にその主張とする、利潤の綜合制度と賃銀の全國的協約である。若しもこの利潤綜合制度、及び全國的賃銀協定制度と云ふが如き、複雜せる制度の主張を、單なる紙上の案によつて示したのであつたならば、之を旗印にして、あれだけの坑夫が結束して立つと云ふには餘りに六ケ敷しいことであつたかも知れぬ。

であつたかも知れぬ。

兎に角、斯様にして、英國の炭坑夫は、或る炭坑が引合はないからといふ名に於て、賃金を引下げ、失業者を出すと云ふことを、致方のないことだとは決して考へないやうに訓練せられて來てゐる。社會も亦、坑夫側の主張が單なる空論ではなくて、かつては、現實に行はれて來た、(完不完の程度の差はあるが)制度であることを無視するわけには行かない。故に、英國の炭礦業の整理が、他の場合の如く、資本主義的攝理によつて、賃銀の高過ぎるものは不引合になり、引き合はないものは倒れ、斯様にして、結局は引合はふ所にまで整理が出來、しかも或程度以上の賃銀の引下を必要とするものは、之を勞働者が承知せずして閉鎖せられる、と云ふが如き、自然解決を見ることの困難なる點が横はつてゐる。その上、炭礦業そのものは、もともと、その善惡良否が千差萬別であつて、斯様な全國的均一の取扱ひは、國有にでもせざる限り、到底之を望み難い性質のものであると云ふことが、更に、問題の解決を困難ならしめるのである。例へばその事業の略ぼ均一した鐵道事業の如きであれば、資本主義的經營のまゝでも、坑夫の要求を容れ得る餘地があるから、坑夫の要求も、割合に容易に通るかもしれないが、炭礦業に於ては、さうは出來ないと云ふが如きである。

六　英國爲替の騰貴と炭礦業の困難

以上の如き事情の處へ、更に、一九二四年秋以來、英國の爲替が暴騰して、その炭價を暴落せしめた。これが、丁度、已述のルール占領撤廢による打撃と一所にやつて來たので、その英國炭礦業の蒙つた打撃は一層甚大であつた。いま英國の有名なる經濟學者ケーンズ氏がこの點について發表せる論文の一部を引用せんに、『……本年(一九二五年)七月南米ブラジルに於て、米炭八弗八十五仙に對し、英炭は九弗三十二仙を示し、最近は更に騰貴して九弗四十八仙唱となつた。然るに、今假りに、英炭價を、爲替回復前なる昨年(一九二四年)七月の英米爲替を以て計算せば八弗四十仙となり、米炭に比し四十五仙方安價となるが、しかし爲替回復の今日に於ては却て米炭より六十三仙方の高値である。無論爲替回復によるこの炭價に對する打撃は南米に限らず、廣く對歐輸出にも波及せるものであつて、英炭が國際市場に於て、一年前に於けるが如く外炭と競爭し、優越なる地位を占めんがためには、餘儀なく、炭價を一割方値下せねばならぬ。而して、炭價の一割引下げは噸當り一志九片方の値下を意味し、右一志九片は坑主が今回(昨年七月)提議したる勞銀切下額の大部分に當つてゐる』

事實、之を第七表について見るに、英國爲替の騰貴につれて、英國の石炭輸出は減じ、坑夫の失業率は増大し、物價は下落してゐる。しかし、坑夫の賃銀に最も關係深き生活費指數は、此間殆んど下落してゐないと云つてよい位ひである。

（七）英國の爲替、物價、生活費、石炭。

	英米爲替月平均相場（弗）	エコノミスト物價指數	勞働省生活費指數	石炭輸出（千噸）	勞働組合失業率 組合全體（%）	勞働組合失業率 坑夫（%）
一九二四年一月	四・二五九	一八一・八	一七九	五・四四一	八・九	〇・九
六月	四・三二〇	一七六・六	一七〇	四・八八三	七・二	二・二
七月	四・三七〇	一八一・六	一七一	五・四八八	七・四	四・九
八月	四・四九九	一八〇・四	一七二	五・〇七五	七・九	五・七
九月	四・四六一	一八四・四	一七六	五・〇九八	八・六	一一・五
十月	四・四八七	一八九・〇	一八〇	四・九五三	八・七	一一・三
十一月	四・六二〇	一八八・四	一八一	四・七五九	八・六	一一・四
十二月	四・六九六	一八九・三	一八〇	五・一六八	九・二	一三・八
一九二五年一月	四・七八二	一八五・九	一七九	四・三六六	九・〇	一五・七
二月	四・七七二	一八六・〇	一七九	四・三四四	九・四	一六・五
三月	四・七七六	一八二・五	一七九	四・三九二	九・〇	一四・七
四月	四・七九五	一七七・四	一七五	四・三六〇	九・四	一九・〇
五月	四・八五五	一六五・八	一七二	四・六五三	一〇・一	二二・九
六月	四・八六〇	一六九・六	一七三	三・七五四	一二・三	二五・一
七月	四・八六〇	一七三・三	一七三	四・四四二	一一・二	二四・四
八月	四・八五七	一七三・五	一七四	三・二七三	一一・四	二六・二
九月	四・八四六	一七二・六	一七六	三・九〇三	一一・四	二七・〇
十月	四・八四三	一六八・七	一七六	四・三八二	一一・三	二五・五
十一月	四・八四六	一六八・五	一七七	四・三三八	一一・〇	二三・四
十二月	四・八五〇	一六五・八	一七五	四・六三三	一一・〇	二三・〇
一九二六年一月	四・八五八	一六三・三	一七三	四・一四八	一〇・六	一八・[illegible]
二月	四・八六四	一六二・四	一七二	四・〇四〇	一〇・四	一八・[illegible]

（備考）英米爲替平價は四・八六七、物價指數はエコノミスト調査の一九〇一―一五年平均を一〇〇とせるもの、石炭輸出にはバンカーコール（船舶用輸出炭）を含まず。本表は東洋經濟五月十五日號より採る。

云ふ迄もなく、この事實は、坑主側から云へば賃銀引下の必要迫れるにも拘らず、勞働者側から云へば、賃銀引下げを承諾し得ない事情にあることを語るものであつて、今度の炭礦賃銀引下問題を、更に激化せしめ、困難ならしめたものである。

七　提案されたる炭礦行詰打開案

然らば、以上の如き英國炭礦業の行詰に對し、今、英國の朝野は、之を如何にして打開すべく提案してゐるかと云ふに、先づ坑主側は、現在の資本主義的運用を妨げてゐる諸制度及政府の干渉を廢して、自由に資本主義的運用の出來る制度にし、その制度の運用によつて、純資本主義的方法によつて、行詰を打

開せんとする。即ち、

一、政府の補給及干渉を廢すること。

二、勞働時間を現在の七時間制（一九一九年實施）より舊の八時間制とすること。

三、現在は一九一四年の基礎賃銀に三割三分の一を增加したものを最低賃銀とし、炭坑の損失如何を顧ず、その賃銀だけは之を眞先に支出してゐるが、今後は、賃銀は各炭坑の負擔能力（即ち損をしない程度に）應じて定めること。

即ち、勞働者の戰後贏ち得た勞働時間を短縮し、且つ全國的最低賃銀制を地方的最低賃銀（各地方の支拂能力に應じた）制度に變更せんとするものである。いま之によると、勞働時間の延長によつて一噸當採炭費に一志乃至三志を減じ、尙ほ賃銀以外の經費に約一割を節約し得ると云ふ。尙ほ、この外坑主側は鐵道運賃の二割五分の減少の必要を主張し、これ等の主張通りに行けば、坑主は戰前五ケ年平均の四割增原價にて經營を維持し得る見込であるが、其の結果、炭況の恢復を見る迄一時約十萬人の失業坑夫を生するであらうと云ふ。

之に對し、坑夫側は如何なる代案を有するかと云ふに、それは要するに炭坑を國有となすことにあつて、その具體的要綱としては、左の如き提案を炭礦調査委員會に提出してゐる。

一、全英國の動力及運輸事業を管理する最高機關の設置。

本機關は、最近問題となり居る全英國の電力統一問題に關し、組織せんとする電力委員會をも統轄する最高機關として石炭をも含む總ての動力並に運輸事業の進步發達を掌るものとして、委員長の下に六名の專門委員を置き、政府之を任命し、發電送電並に運輸事業の統一及技術的研究と其實施に就き全責任を負ふものとす。

二、石炭及動力に關する中央協議會の設置。

本協議會は、全國石炭及動力事業の組織經營を管掌し、各種用途に應じ適當なる品質の石炭を採掘するに要する計畫及其經營法並に採掘數料の決定等、總て第一項機關の決定する處に從つて施行するものとし、事業資金額も一定の限度を設け、夫以上の資金を要する時には第一項最高機關の裁決を要する。本協議會は事業行政及經營に任ずる者、炭坑並に副產物及發電所從業者より選擧する各同數の代表者約十二名を以て組織するものとす

三、地方協議會の設置。

本協議會を設くる地域に就ては中央協議會に於て第一項の最高機關と協議の上決定するものとす。

本會の會長及副會長は、中央協議會之を任命し、勞働者側

より六名、管理並に技術者側より六名の代表議員を選任す、而して中央協議會に於て選任する地方監督長並に各炭坑地區の監督官は、顧問の地位に置き各炭坑地方毎に成るべく自由を與ふる事。

四、炭坑及工場委員。

各炭坑又は工場發電所毎に委員會を設置し、委員は炭坑長副長若しくは工場長營業部長及地方協議會より選出する二名の代表者並に勞働者側より選出する四名の代表者を以て組織し、炭坑及工場の保安保健生産量並に設備等に關し其經營に就き全責任を負ふべき主管者に對し顧問となる事。

但該主管者は地方協議會の決議に基き業務を執行するものとす。

五、需要者協議會。

本協議會は石炭並に他の電力を使用する工業經營者並に其從業勞働者、地方官公吏、消費組合輸出貿易業團體の代表者を以て組織し其事務を管掌する幹事書記等に係る經費は議會(パーリアメント)の協賛を經たる豫算に依り支辨し、政府之を任命し、鑛山大臣又は其代理者本協議會會長となり、需要者共通の總ての事項並に動力石炭等の代價及賃率に就き協議するものとす。

六、代價及賃率。

賃率に關しては、先づ中央協議會に於て決定したる後、需要者協議會と共同協議を開き、多數決を以て議決するものとす。若し決定し能はざる時は、特に臨時審査機關を設け其報告に準據して商務院總裁又は其選任する特別仲裁人之を決裁するものとす。

七、中央協議會に動力並に石炭販賣部を設け家庭炭供給に就き經濟的分配の方法を講ずること。

地方公共團體も委員を設けて之を補助する事。

八、海外輸出。

輸出石炭に關しては特に委員會を設置するか若しくは或輸出團體を組織し且是を坑業者より全々分離して中央協議會に屬せしむる事。

九、炭坑國有買收法。

各炭坑を評價して國庫に買收し、株式を發行し國有炭坑の經費を以て漸次之を償還する事。買收後に於ける必要なる事業資金は國庫保證債券を以て支辨し其償還は前項と同一の方法を以てする事。

十、輸出並に國内供給に關する諸般の設備の買收に對しては現金を以て支拂ひ、從業員の大部分は引續き從事する事を

得べきも、組織變更の爲め不用となる者に對しては相當の報償をなす事。

而して、坑夫側が炭坑國有によつて所期する經營上の利益は左の諸點である。（一）國有になれば、これによつて販賣上無益な競爭がなくなつて利益になること、（二）運賃が省ける。お互に錯綜して送つて居るのが一つの經營になると云ふと一番近いところの炭坑から送られるやうになるから運賃が省ける、（三）材料とか何とかを買ふのに非常に安くなる、（四）經營が合同せられる結果小炭礦の分立を一つの經營にまとめるから經營費用が安くなること、（五）電氣とかスチームとかの動力が集中出來る、（六）シャフトや坑道を付けたりするのに經濟的に出來る、（七）資本の豐富でない炭坑は十分の設備が出來ないために災害多く、又機械の利用が十分で無く、最新の技術も利用出來ない狀況であるが、これを國有にすれば資本が豐富になつて設備が良くなる。（八）國有の利益として鑛區と鑛區との間の境界になつて居るところの石炭、これを十分に利用することが出來る。例へば、今日小炭坑の分立のためその境界にあつて利用の出來ない石炭の量は大體三十五億噸乃至四十億噸と云はれて居るが、國有によりこれを十分に利用出來る。（九）現在勞働者が資本家の下に働らくことは嫌だ、若し資本家に代るに國家であれば、勞働者は喜んで働く、從來は資本家の下にあつたために能率が下つて居るので若し國家であれば喜んで働く、さうなれば勞資間の紛爭と云ふものも減少する、（十）國有になると儲かるところの炭礦の利益を以て損する炭礦の分を償ふて賃銀を全國的に均衡を保つ事が出來る。

以上、坑主側の資本主義的提案、坑夫側の社會主義的提案に對し、英國勅令炭礦調査委員會は、折衷案として、礦石採掘所有權は之を國有とするが、（しかし日本の現在は已にさうである）炭坑經營は私經營とし、その下に於て、坑夫側の主張するが如き經營上の改善をなさしめ、他方賃銀も幾分引下げて、この難局を凌獨せんとするものである。試に、右調査委員會の報告中、炭礦業改造案に關する重なる點を摘錄せば、左の如くである。

一、採炭業國營問題　本委員會は坑夫組合聯合の提出せる、炭業國營案に反對し、私人經營組織の可なるを信ず、蓋し國營は實行不可能にして、且經濟上及社會上の利益を齎らすものに非ずとの結論に達したるを以つてなり。現在私人經營の下に於ても、組合聯合側の目的とする組織の變更、能率の改善乃至坑夫勢力の伸長を計り得るものと信ず。而して之が方策を審議するは本委員會主要目的の一なり。

一、炭礦採掘權の國有　炭礦の採掘權は國有とすべきであ

る。而して、若しその炭礦採掘權が市場價値を有する場合には買上により、市場價値の未確定のもの、及び今日市價なき地下深き炭層は、單にその聲明によつて國有とする。(しかし、之れは我國米國など已に實行せる所であつて、英國のみ獨り後れてゐるのである)

一、小炭坑合同問題　多數の小炭坑を合同し、經費を節減すべきである。が、しかし强制的に合同せしむるは不可なり。國家は前記に依り國有とせる石炭の採掘權を許可するに當り、適當なる、法律を設け此目的達成に力むべきなり。

一、共同販賣機關新設勸告　本委員會は石炭の共同販賣機關の創設を勸告す、右機關は輸出貿易の報告に於て特に必要ありと認む、更に地方官憲に石炭小賣業を營むの權限を附與すべし。

一、各種關係産業の結合　炭礦とそれに相關係する諸産業とを密接に結合せしめて、熱、動力、光の需要供給を統一し、且つ經營上の浪費を省く。

一、調査研究　石炭の採掘、及石炭利用の兩方面の能率增進に關する調査を促進し、國家は之に必要の財源を與ふ。

一、勞資關係　現在の關係を維持することを大體に認むるも、賃銀率に多少の修正をなすべきことを認む。

しかし、以上三つとも、勞資を一の協定にまで導くに足らず、遂にその解決のため、今度の總罷業を見るに至つたわけであるが、去る十二日、總罷業取消の條件となつた、勞働組合聯合會と炭礦調査委員會委員長との間に於ける非公式の取りきめなりとて、報導せられたる所の解決案は、左の如くであると云ふ。

一、直ちに炭坑問題に關する交渉を再開し、政府の炭坑補助金は相當期間繼續支給すべし。

二、炭坑業問題は單に炭坑夫及び坑主間の會議を幾回繰返しても到底所期の成功を收め得るものではない。何等か他の解決方法を發見しなければならない。之には全國賃銀局を設置することが必要である。同局には炭坑主並びに坑夫側双方の代表のみでなく全く中立の位置にある分子をも加へ委員長は双方に利害關係無き人を任命せねばならぬ。

三、全國賃銀局委員は賃銀問題に關係ありと思惟する如何なる事項をも提出し得る權利を有する。

四、炭坑調査委員會の提出した炭坑業改造案が充分實行される保證が付くまでは舊賃銀率は之を修正することを得ない。

之によると、英國炭礦業の行詰は、炭礦業それ自身のみでは依然解決が出來ず、國庫の補助によつて當分賃銀は現狀を續け、その間に於て、炭坑調査委員會の炭坑改革案の實現を期し、賃銀については全國賃銀局を設け政府の干渉によつて調停することにするらしい。しかし、それが果して、英國炭礦業現在の行詰を根本的に解決し得るに足るものか、將又、從來の如き、一時逃れの彌縫策で、更に、次の危機を孕んでゐるものかより詳細のことを見なくては不明である。

英國總罷業を遠望して

赤松克麿

一

先年、私の友人が英國炭坑夫組合本部を訪ねて、今回の總罷業の中心人物たるクック氏と會談したとき、恰度、例の三角同盟が挫折した後だつたので、

「三角同盟は復活しますか」

と聞いたら、

「大丈夫復活します」

と彼は答へたさうだ。一九二一年四月に企てられた總罷業の失敗は、三角同盟即ち炭坑夫組合、運輸勞働者組合、鐵道從業員組合の結束が亂れたことに原因したのだが、その後「闇の金曜日」(失敗の日を指す)といふ言葉は、英國勞働階級の悲痛なる記憶であり、また彼等の臥薪嘗膽の標語でもあつた。然るに「闇の金曜日」を去ること僅か四五年にして、三角同盟(當時百五十萬人)は復活したどころか、四百三十五萬人の勞働者が總罷業に參加したといふことは、「闇の金曜日」を償ふてあまりあるものであつて、我々は、英國勞働階級の組織的能力の雄大さに驚嘆せざるを得ない。唯だ一つの難點を強いていふならば、海員組合の不參加である。海員組合は組合員數が僅か五萬六千人といふ小組合ではあるが、海運國たる英國に於て、海員組合が戰列外に立つたことは、その陣容に於て一つの瑕瑾を示したものといはねばならぬ。尤も、海員組合は英國に於ても最も保守的組合の一つであつて、組合長ウイルソン氏の如きは頑狹なる國家主義者で、歐洲大戰直後、中歐諸國に對する永久的ボイコットを煽動したり、英國勞働者と中歐勞働者との聯絡の復活を阻止しやうとした程の人である。ともあれ多少の難點はあつたにせよ、今回の總罷業の陣容は、流石勞働運動の本國だけあつて、勞働階級の組織能力の最高表現である。各國の勞働運動就中微弱なる我國の勞働運動の如きは、英國總罷業の偉觀に打たれるばかりである。我々は我々の陣營を顧みて、前途

遠し、あんまり大言壯語をしないで、コツ〳〵丹念に陣容の充實と訓練とをはかるべきだといふ感を深うせざるを得ないのである。

二

或る資本家は、勞働組合を公認すれば、結局英國の總罷業のやうな始末になるのだから、勞働運動などは發達させない方がよいと云つてゐるが、英國總罷業を惡く穿き違へた者の言ひ草である。罷業が勞働者の生存權に基く一個の權利であることは、今日の時代の常識である。政府も時代思潮に抗し切れないで、去る第五十二議會に於て、遂に治安警察法第十七條即ち罷業禁止法として長く我國勞働階級の惡夢であつた惡法を廢止したではないか。若し罷業を不法なりとするならば、それは露骨に資本家專制と勞働者隷屬とを公認せんとするものであつて、勞働者が人格者として生活向上の欲求を有する限り、そんな不合理な狀態が永續きするものではない。罷業を禁止された勞働者の不平不滿が、遂に無秩序なる暴行破壞の擧を導くに至ることは想像に難くないのである。もとより罷業は、勞働者の生活上已むを得ざるに出でたものたるべきであつて、決して濫用すべきものではない。そしてそれは飽くまで勞働供給に關する團體取引の中止に留るべきものであつて、その埒外の行爲に出づべきではない。

英國の總罷業は、勞働階級が唯だ認められたる權利を大規模に行使しただけの話である。炭礦主側が、「不景氣ではあるし、坑夫の賃銀が高いから、賃銀を引下げなければ、營業が引き合はぬ」と主張したのに對して、坑夫側は「賃銀を此の上下げられては堪らぬ。賃銀を引下げなくとも、經營方法をかへれば商賣は立ち行く筈である。新しい經營方法とは、炭坑を國有にすることだ。そして經營を統一することだ。炭坑を國有にすれば、地主に支拂ふ採堀料は浮いてくるし、經營を統一すれば、多額の經費が節約出來るから、結局、坑夫の賃銀を下げなくともやつて行ける譯だ」と反駁したが、兩者の交渉がまとまらず、遂に決裂して今回の總罷業となつたのである。ところで總罷業は暴動でもなければ叛亂でもない。勞働側の聲明した如く產業上の一爭議に過ぎない。換言すれば勞働組合の團體取引上の一現象に過ぎないのである。だから勞働側の幹部は嚴に暴動を戒め、大體に於て秩序を維持して居る。暴行頻々の報道があるが、聊か誇張の嫌ひがある。四百萬人の者が罷業に移れば、其處に多少の小競合は免れないであらう。尙ほ我々も我國の勞働爭議で經驗することだが、爭議が自熱化した場合に、暴行を

敢てするものは、罷業者にあらずして、無責任な野次馬の類が多い。今回の總罷業に於ても、そうした暴行が多少あつたらうと思はれる。しかして新聞が之を誇大に報道する傾向がある。我々から見れば、あれだけの大陣容を以てあれだけの秩序を維持したことは、實に驚くべきことである。それは百二十年に亘る英國勞働運動の歴史と、民主義的訓練と、健實なる國民性に負ふ所でなければならぬ。

三

勞働爭議又は同盟罷業なるものは、資本主義經濟組織の下に於ては、一個の不可避的な現象である。これは資本主義につきまとふ一種の影である。だから我々の唯だ望む所は、此の必然的現象が合理的に解決されて行くことである。合理的な解決は、決して之を頭から仰へることではない。爭議の當事者たる勞資双方をして、正々堂々の取組をなさしむる外はない。第三者が當てもないのに猥りに之れに干渉したり制肘を加へたりすべきものではない。つまり當事者双方をして、フエアー・プレーを演ぜしむべきである。若し當事者が第三者の調停を要求するならば、その場合第三者が調停に乘り出すのもよからう。

英國民は他國民にくらべると、フエアー・プレーに訓練された國民である。從つて今日までの多くの勞資戰に於ても、最も多くフエアー・プレーを演じた國民である。今回の總罷業に於ても、幾分フエアー・プレーは示されたが、しかし政府及び資本家側は、勞働者側にくらべると、態度が甚しく專制的であり卑劣である。第一、政府は勞働者側が總罷業に移るや、いきなり飛び出してきて、何等勞働者側を滿足さすべき保障條件を示さずして、勞働者側に罷業中止命令を下して居る。そして罷業者が一個の産業爭議のつもりで穩やかに罷業して居るのに拘らず「革命だ」と吹聽して、國民心理を勞働者側に不利なやうに誘導し、一種の戒嚴令である非常時權力法を急造し、軍隊に動員準備を命じ、用のないタンクまでも引つ張り出して罷業者を威嚇し、尚ほ義勇勞働隊を募集して罷業破りを奬勵して居る。また資本家は罷業がやんでも罷業破りの地位を保護し、罷業者に對しては苛酷なる復職條件を持ち出して居る。つまり資本家の方では、此の機會に乘じて勞働組合を潰さうといふ魂膽である。

今回の總罷業に於ける英國政府及び資本家の態度は、英國の誇りとする民主主義に一抹の暗影を投じたといへる。彼等の行動には、フエアー・プレーヤーとして缺ぐる所があつた。若し今後、英國の支配階級が益々反動化して、民主主義的精神に適

かることになるならば、勞働階級も亦やむを得ずプロレタリヤデクテーターシップの色彩を現はしてくるだらう。被支配階級の態度は、支配階級の出様如何によつて決定されるのである。

四

我々が今回の總罷業で考へさせられたことは、義勇勞働隊の活躍である。彼等の多くは反動的思想の所有者であるが、彼等特有の短見から、總罷業を國難だと考へ、「祖國を救へ」と叫んで、勞働側に最も不利とする所の罷業破りを行ふのである。保守黨政府は組織的罷業破りを奬勵した。義勇勞働隊は、唯だ結果として表面に現はれた社會生活の不利不便に着眼して、その出つて來る根因を理解し同情することをしない。彼等の心持は、純粹な社會奉仕のつもりであらうが、その行動は明かに勞働階級の罷業權の侵害であり、生存權の脅威である。故に罷業者側に取つては、義勇勞働隊は好ましからぬ存在である。從つて重大なる爭議などに於て、罷業團と義勇勞働隊との關係は甚だ憂慮すべきものがあるのである。若し政府及び資本家が、平常からそのつもりで義勇勞働隊を訓練して置くならば、或は如何なる罷業といへども甚大な打擊を蒙るであらう。しかしながら斯くの如き遣り方は、階級爭鬪の激化を挑發するものであつて、勞働階級の行動は、おのづから合法的手段の埒外に誘はれるに至るであらう。

今回の英國總罷業に於て、義勇勞働隊の活動は相當に目覺しいものがあつたやうであるが、若し我國の政府、資本家、青年團、在鄕軍人團などが之れに刺激せられて、從來も多少はあつたが、將來積極的に義勇勞働隊の組織と訓練とに意を用ひんとする如きことがあれば、それは極めて近眼的なそして甚だ危險な姑息手段であつて、國家百年の將來を思ふ所以ではないことを斷言する。安價なセンチメンタルな國家主義が、勞働階級の合理的成長を阻害するが如きは最も愼しむべきことである。

勞働問題が合理的に解決されるかどうかといふことは、現代の社會生活に於て最も大なる問題の一つである。我々は此の問題を解決する重大なる一要素は、國民が勞働爭議又は同盟罷業を理解する程度如何に懸つて居ると考へる。此の意味に於て、今回世界の耳目を聳動した英國總罷業に對して、我國民が穿き違へをしないで、正しい理解を持ち、依て以て今後我國にも起ることところの諸問題に對して、最も妥當なる態度を取ることに裨益されんことを希望するものである。

時評

思想取締問題雜感

吉野作造

宣傳は何故にわるいか　思想取締の必要を口にする者は云ふ、研究は構はない宣傳がわるいと。取締らるゝ者亦往々にして辨ずる、宣傳はしない研究に止めるだけだと。知らず、宣傳は何故に惡いのか。試に當今所謂思想の民間宣傳に鋭意する者を擧げん乎、内務省文部省などは差し詰め其の重なるものの中に這入る。蜷川新君が文部省の御用宣傳使なることは隱れもなき事實であり、所謂民力涵養の巡回講演が内務省の金で企てられて居ることも久しい話だ。陸軍の軍事思想の鼓吹、遞信省の勤儉貯蓄奬勵など、亦陰に陽につとむる所頗る厚いものがある。政府以外に於ても此種宣傳の事實は各方面に亙つて頗る多いが、姑く之を青年學生に限るも、佛教耶蘇教の如きは各々其の青年會の名を以て盛に宣傳につとめて居り、中には其の資の一部を公然外國の寄附に仰いで居るのもある。尤も此點に關しては、極端な國粹主義者の間に之を不快とし不面目とするの説を聞かぬでないが、外國の資に賴て宣傳に從ふを危險不逞とするの説に至ては、我輩未だ嘗て之を聞いたことはない。

政府も堂々とやつて居る、民間も大びらに之をやつて毫も咎められない。して見れば、宣傳そのことが惡いとせられて居るわけではないやうだ。識者の眞意は、恐らく惡いことを宣傳するから惡いと云ふにあるのだらう。之を大まかに宣傳がわるいといふ風に說くのは、蓋し正しい言ひ方ではあるまい。

然らば惡いのは何か　宣傳が惡いのではない、宣傳するものの惡いのだ、之を漠然宣傳が惡いと云ふのは俗間の言ひあやまりだと、一應は考へて見たが、能く研究して見ると、之も亦十分正しい言ひ方ではないやうだ。何となれば、今日所謂左傾思想なるものの内容を仔細に吟味すると、必しもすべてが不都

なものとも限らないからである。

但し今日の所謂左傾思想家の思想の中に、全然危險視さるべきものがないと云ふのではない。國體に關し又は個人の道徳生活に關し、甚だ怪しからぬと認めらるべき思想を抱いて居る人が吾々の同胞中にも多少あることは、遺憾ながら承認せざるを得ぬ。斯んな思想は思想そのものが惡いのだから、從てその宣傳もその儘許し得ざるは論を待たない。併し之等は多少の例外だ。一般の左傾思想家は決してみな同様の思想を懐いて居るのではない。之等の區別を細かく論ずることは別の機會に讓るが、要するに、一般左傾思想家の共通の特色たる一種の社會觀、一種の人生觀は、よし其根據に於て理論上の批議を免れざるべしとするも、それ自身現實の危險性を內有するものではないと考へる。例へば共產的思想にしても又は階級鬪爭觀にしても、說それ自身には何等の危險性はない。天下萬人の心からの承認を得て之を平和に且つ圓滿に實現しやうといふのなら、それでいゝではないか。理論上間違つて居ると考へるなら、理論でこれを爭へばいゝ。どの道正しくないものは結局負けるにきまつて居る。結局負けるものなら、急いで負けさす必要はない。否、人爲的に之を急がすのは、それだけ此點に關する民心の啓發を不徹底ならしむるの結果となる。故に私共から云へば、事ろ危險は勝負の決を自由競爭の自然的解決に委し切れず、人爲的に其間に介入して漫りに一方を偏愛する所に在ると考へる。人或は曰はん、正しいものに味方するに何の不可かあると。併し彼の正しとするもの果して本當に正しいのか。抑も孰れが正しいかは客觀的には本來容易に定め得るものではない。だから自由競爭の自然的解決にまかせるのが一番安全で又一番間違のない方法なのだ。蓋し最良の判斷者は常に「時」と多數人の「良心」とだからである。正しいと信ずるの故を以て人爲的介入を是認するは、やがて正しいと信ずると稱して不當なる人爲的介入を敢てするものを奬勵する結果を生じ易い。少くとも斯弊を正面から阻止することが困難になる。玆に實に大なる危險が存するのだ。故に曰く、宣傳がわるいのではない。宣傳せんとするものも亦必ずしもわるいと限つてはゐない。惡いのは宣傳せんとするものを急いで實現せんとするその態度に在るのだと。即ち速効を見んとして手段を擇ばざるその焦躁の態度が惡いのではないか。此點に就て私は、取締る側と取締らるる側と双方に向つて同樣に反省を求める必要を見るのである。

× × × × ×

過激主義的思想の非　前項に於て私は、思想の宣傳に取り、不當の手段を弄して人爲的に速効を期せんとする態度を取

るのがわるいのだと云つた。從てもし宣傳の內容が、或る種の思想と共に、其思想の實現には手段を擇ぶの要なしとする考へをも併せ伴ふものであるなら、その不都合なるは深く論ずるまでもなく明瞭だ。斯う云ふ見地からすると始めて、左傾思想のうちにも慥に吾人の批議に値するものがあることを認めざるを得ない。早い話が、自家の主張を貫徹するにあらゆる手段に出でて悔ゐざらんとする者が、現に近頃我國にも可なり多くなりつゝあるではないか。

斯ういふ態度を執る者を私共は一般に過激主義者と呼ぶ。斯の過激主義の本來少くとも思想戰に許す可らざるは、是迄色々の機會に於て屢々說いた。これは一種の思想的專制主義であつて、かの官憲の亂暴なる取締方策と其弊害を同うするものである。而して過激主義は、時として單に境遇の產物に過ぎざるも、時としては一定の理論に基く一個の主張たることもある。政府の無謀なる抑壓に激せられ唯之に反抗するが爲に起る所の如きは前者の例だが、後者の例としては「原因を單一の根據に歸する短見」に基くものを擧ぐることが出來る。一體世の中の事はなかなか複雜で、或る出來事を單一の原因に還元し得るが如き場合は殆どない。假りに原因が單一であつたとしても、それが他の色々な事情と相結んで特定の結果を生むのだから、その原因のみを取り除いたとて、固より直に原狀に回復し得るとは限らない。況んや實際に原因の複雜なる場合に於てをや。故に原因をたつた一つと思ひ込み、之れさへ取り除ければ萬事成功と考ふるのは、盲信の甚しきものであつて、其結果飛んでもない失錯を演ずるの例は、世間に幾らもある。失錯を演ぜぬまでも、斯くては、少くとも本來の目的を達し得るものでは無い。試驗勉强では實力がつかず灸や鍼では健康が回復しない。正しい療法は、現に在る疾患そのものの征伏のみに着眼することでなく、該疾患に惱みつゝある人間を全體として着眼し、その健康を全體として回復するの工夫をめぐらすことである。それには現在の苦痛を除くことのみに急いではいけない。腹の痛みはモルヒネでもとまる。痛みさへとまればいゝものなら、モルヒネで十分な筈だ。併しからだ全體の健康を顧念する者に取つて、それでいゝかどうかは太なる問題である。斯く云へば極めて分り切つた話のやうであるが、今日の所謂社會運動家の中には、此種の考方を取るもの實は案外に多いのだから驚く。この種の人々を左傾思想家と概稱し世人が之を頗る危險視するのも、强ち無理とは云へない點もある。

然らば問ふ、彼等はなぜ此の分り切つた間違を平氣でをかしてをるのか。其は外でもない、一種の唯物史觀に捉へられて

るからである。彼等は曰ふ、人類の活動を律する本源はその物質的環境だ、境遇が變れば考方も變ると。果して然らば、境遇を變へさへすれば黄金時代は直に來るといはなければならぬ。是に於てか境遇を一變する爲に全然手段を擇ばざらんとするは當然ではないか。境遇さへ變へれば終局の目的は立派に達せられ、其の擇ぶ所の手段に依て目的達成の結果に何等の影響を受くることがないからである。孰れにしても、目的の爲に手段を擇ばないといふことは、之れさへやればいゝと思ひつめる人の動もすれば陷り易き欠點である。

右述ぶるが如き觀點から私は、一部の所謂左傾思想家の中には多少世上の批議に値する者あるの事實を遺憾ながら認むる。從てまた政府の取締が之等の人々の上に及ぶも若干是認すべき理由を認めるに躊躇しない。併し乍ら間違つてならないことは、取締らるべきは、宣傳そのことではない、又宣傳せんとする本來の思想でもない、一に思想の實現の爲に手段を擇ばざらんとする考方乃至態度に限ること是である。官憲の人達が往々にしてこの區別をあやまることあるのは、私の平素甚だ遺憾とする所であつた。

取り逃がした泥棒は赤い帽子を冠つて居つたからとて、赤い帽子を冠つたすべての人が檢束を食つては堪つたものでない。今日の官憲は、輕々に宣傳がわるい社會思想がわるいといふ說に迷はされて、赤い帽子を冠つた一切の良民をひとしく泥棒扱ひするの愚に陷つてはゐないか。周到なる反省を要求する。

同じ危險は寧ろ政黨者流の行動に最も著しい　之さへやれば萬事成功と妄信して手段を擇ばざらんとするのは、危險は危險だがまだ實害はない。實害の最も恐るべきは、或る目的を達する爲に全然手段を擇ばざるの實行が既に長年の社會的慣習として成立せる場合である。然らばそんなものが我が今日の日本にあるかといふに、大にある。何ぞや。曰く各政黨間の政權爭奪が即ち之れだ。

尤も我國の政黨は、表て向き目的を達する爲に手段を擇ばぬとは言つてゐない。この點はこの事を公言して憚らざる所謂社會運動家とは違ふ。併し一方からは、表面に之を言はぬだけ罪が深いともいへる。加之彼等の實際に行動する所殊にその手段を顧みざるの惡辣に至つては實に言語に絶するものがある。然るにその政黨者流がまた時々政爭の一手段として左傾思想家の危險云々を議政壇上に眞面目臭つて說く。洵に噴飯の至りだ。目的を達するに手段を擇ばざる點に眞の危險を看取する者は、實に社會運動家よりも一層深酷なる監視を政黨者流の行動に放つ必要を見る筈である。

何故日本の政黨は斯かる糺彈をうくるに値するか。一體政黨は民間の信望に因て大をなし、大を爲すことに依て政爭に勝つといふのが本筋だ。所が、日本の政黨は政爭に勝つことに依て不義の力を集め、この力に賴つて民間の投票を買ひ、以て民望に因て勝ちたるの外形を辛うじて取り繕ふ。民望に因て勝つのではない、勝つことに由て所謂民望なるものを買ふのである。從て一旦勝つた者は、勝つたといふ地位を利用して益々不敗の地歩をかためる。乃ち其處から政權の濫用が起るのだ。敗けた者はまた尋常一樣の方法では局面轉回を期し難いから、凡ゆる陰險苦肉の手段を取て、不測の禍を敵に課するの僥倖をねらふ、(之に對抗するために多數黨また同樣に醜汚なる手段に出づることは云ふまでもない)。たゞ勝ちさへすればいゝのである。勝てば即ち其の新に占め得たる地位を利用して代つて不敗の地歩を築くに難くないからである。政友會全盛時代彼がその勢力の維持に如何なる手段を執つたか、之に對して憲政會が敵の金城鐵壁を碎かんとしてまた如何なる手段を執つたか。今日憲政會が、一旦收め得た政權を褫つたが最後容易に之を再び獲難かるべきを慮り、その持續の爲めに如何の手段を弄して居るか、之に對して政友會が、政權に有りつきさへすれば往時の盛容を再び張るに譯がないと夢想して、今日如何の手段を用ゐて居るか。之等は詳しく說明するだけが野暮だ。陋劣と謂はれてもいゝ。醜穢と罵られても構はない。小股すくひと譏られても避けぬ。何と謂はれても天下を取るまでの辛抱だといふのが、少數黨の常套手段であつて、多數黨また敵を陷るゝ爲に常に全然同じ手を用ゐて居ることは 公知の事實である。尤も斯の事に就いて獨り政黨者流のみを責めるのは酷かも知れない。一半の責任はたしかに代議士の欺瞞に應じて輕々しくその良心を賣る國民にもある。國民にして眞に道德的に覺醒せざる以上、政界の爭覇戰が右述ぶるが如き形をとるのは、今暫くは免れ難いとは思ふ。けれども、斯かる醜汚なる渦中に盤動する憐れむべき政黨者流が、昻然として所謂社會思想家の危險を說くのだけは、何としても滑稽の感を免れない。庶幾、私は手段を擇ばざるの弊は寧ろ政爭の側に大なるものあるを指摘して、特に讀者の深切なる反省を求めんと欲するものである。

繰り返していふ、所謂左傾思想家の危險なるは必しもその思想ではない、又斷じて宣傳そのことでもない、目的の爲に手段を擇ばさらんとする焦燥の態度に在る。而して目的の爲に手段を擇ばざるの隨一は、我國に在ては寧ろ政黨者流の行動である。宜なり、我國の教育家が常に、兒童訓育上に最大の惡影響を與ふるものとして政治家の行動を擧ぐることや。思想取締の

問題とは直接の關係はないが、大事な問題だから一言しておく。

× × × × ×

本當の原因を見損ふ勿れ　前段にも述べたる如く、本當に危險なるは過激主義的の考方乃至態度である。而して斯かる考方乃至態度の由て來る所は二つある。之も前に述べたが、繰り返して云ふなら、一つは境遇から來るもので、一つは間違つた理論に基くものだ。前項の論述は即ちこの後者の場合を詳說したものである。さて境遇から來るものは、之もさきに一寸觸れた樣に、生活の不安又は不法の壓迫等の原因から、本來さうでもないものが斯くならざるを得ざる樣に激せしめられたものである。理論上の信念から來るのでないから、環境さへ變れば結局またよくはなる。少くとも此種のものに向ふ對策は、環境の改善の外にはない。そこで施政の局に當る者は、戰々兢々として常に周密の注意を怠らざるの心懸がなくてはならぬといふことになる。

所が、日本の役人程この點に於て怠慢であり又横着極まるものはない。何か面倒な事が起ると、左まで恐縮しなくともいゝ事にまで、不德の致す所恐懼措く所を知らずなどといふ辭に、本當に恐れ入るべき場合には、恬として責任を負ふことを敢てしない。不德の致す所など云ふのは、たゞ自己の責任を逃るるの一遁辭に過ぎずして、本當の責任は却て飛んでもない處に轉嫁して平氣で居る。從ていよ／＼對策を講ずる段にあると、その飛んでもない處に原因ありと無理强いしてそこばかりを突つ付き廻はすから、その結果は徒に社會的紛亂の勢を煽るだけに止まる。支那に排日運動が起つた。その由て來る所に遡りて根本的對策を講ずるの勞を避け、漫然として在留英米商賈の煽動の結果だなどとごまかす。米國西岸に排日運動が起つた。之も野心ある政治家の不當なる煽動の結果などときめて、我の自ら攻むべきをば改めず、併せて亦國民一般にも反省の機會を失はしめてしまう。而して孰れの場合にも、彼等は不德の致す所と安價な陳謝を連發するの勞だけは厭はない。私共は寧ろ彼等が本當に不德の致す所なることを省察し、問題の眞解決のために本當に肯綮にあたる對策を講ぜられんことを希望するものである。

本當の原因を見損ふの弊は殊に思想取締に於て甚しい。之はひとり官界ばかりではない、民間にもある。先頃の議會で本問題を論じた連中の論法を簡短に要約すると斯うなる。昨今都鄙の學校に不都合な思想に感染れる者頗る多い。之は帝大の學生が範を示すからだ。帝大の學生がこの憂ふべき狀態に陷るの

は、教授の中に不都合な奴が居るからだ。而して教授の中に斯んな奴の居るのは、畢竟文部省の監督に至らざる所あるが爲めだと。そこで岡田文相も成程と信じ込んだものと見え、昨今十分その監督の權限を張つて、或は教授を抑え或は學生を壓し、以て禍根を一擧に掃蕩せんことを期すると云ふ。是れ即ち近頃問題になつて居る取締案の由て來る所以であらう。この筆鋒で行けば文部大臣一人が職を睹して奮鬪すれば問題が解決するわけだとも云へる。併し文相が怒鳴つたとて帝大教授は思ふ通りに改るまじく、事實一二の教授を動かしたツて學生の思想が直に右から左と變る見込はない。蓋し青年學生の思想善導に付ては、自ら俗吏の悟り得ざる別個の方案がある。私共は國家文運の眞の開發の爲に、文政當局者が心から自己の不德を省み、謙りてひろく識者の教を需め、先づ根本の原因を見定めてから鄭重にその對策を講ぜられんことを冀望するものである。

サヴイエールは何故に大名から嫌はれたか　今日の官界並に政界が所謂社會思想家を忌嫌するの動機は、亦之を別個の處に探求することも出來るやうに思ふ。研究そのものが社會的紛亂の原因だと觀て之を忌嫌し取締らんとするのは、聰明を缺く曚昧の致す所、其愚憫むべきも併し情に於て亦深く咎め難きもののあるを認める。所が中には事の眞相を識つて居ながら猶且つ故意に之を忌避するものもないではないやうだ。そは彼等は現存の社會秩序の上に優勝の地歩を占むるものなる所から、自然之が變革を好まず、否之を阻止するを以て自己の利益となし、而して自己の利害に執するの餘り、社會全體の將來の利福の如き頓と之を忘るる者も決して尠くはないからである。故意に斯んな不法の迫害が加へられると、社會思想家も之に激する餘り一轉極端なる階級鬪爭を說く樣にもなるのである。詰り斯かる利己主義者流が多いといふことが、社會不安の一原因だともいへる。尤も彼等は世の大勢に逆行する譏を免れんとして、社會改造を喜ばぬなどとは明言せぬ。陽に社會改革の必要を贊同しつつ、陰に之を極力阻止せんとするのが、今日朝野を通じて有力なる人々のひとしく抱持する所の態度であらう。かの文政當局の頑迷なる思想取締の如きも、畢竟斯うした陰約のパックがあればこそ、白晝公然として天下を橫行して居るのではあるまいか。

この點に於て今日の官界政界は、むかし耶蘇教の宣教師フランシス・サヴイエール等を窘めた西國の諸大名に似て居る。あの當時一方に於て諸大名は宣教師を無下に排斥し得ない事情にあつた。そは西洋人の持ち渡り來る鐵砲は戰亂の時代に在て何物にも換え難き至寶であり、之を得んが爲には洋人を歡迎し、

面して洋人の足を留めるには是非とも宣教師の在留を必要としたからである。一般洋人と宣教師との關係は、一寸今日の我々には理解は出來ぬかも知れぬが、どんな面白い處へ往かうと云てもお母さんと一所でなければ心元ながる子供の如く、流石の西洋冒險商賈でも、萬里の波濤をしのいで遠い東洋の地に來り、爰に長い月日を落ち付いて暮すには、どうしても魂の休み場たる教堂を必要としたのである。斯くて宣教師が居れば洋人も足を停める。さてこそ大名達も競つて彼等を歡迎したのである。加之彼等をよろこばす爲めに大名達は、家臣や土民に命じて大擧洗禮を受けしめもした。是れ瞬く間に數百數千の信者が所在にかたまつて出來た所以でもある。宣教師達は何故に斯くも歡迎さるゝかの本當の意味がわからぬ、又分つても之に遠慮せねばならぬ理由を見出さぬ。彼等は一本調子に其の教へを説きもし又信者の蒙をひらかんともした。就中彼等は日本人上下の生活振りを見て、之に忌憚なき批評を試みた。而して最も猛烈な鎗玉にあげられたものは、大名重臣の蓄妾と佛僧の男色とであつた。大名としては實に痛し痒しである。佛僧達は始め宣教師の教を以て佛法の一派と解し鄭重に彼等を迎えて宗論を戰はさんとしたが、話して見るとまるで調子が合はぬ。變だと思つてゐる中に、丁度痛い所をグン〳〵と突つ込まれる。斯くて宣教師排斥運動は佛僧の陰險なる土民煽動から始まつた。大名は始めは之を抑えやうと試みた。併し自分も痛し痒しなので、民間の暴動を口實に一時ちよつと宣教師に姿をかくして貰ふのも都合がいゝと考へた。全然放逐しては一般洋人の足を停めることが出來ぬ。中には斷然放逐ときめたものもあるが、多くは敬遠主義を取つたのであつた。だからフランシス・サヴヰエールなども長くて一年と一ヶ所に留つてゐなかつた。それにも拘らず到る處に多數の信者を作つたのは、全然大名から排斥されたのではなかつたからである。

今日の所謂社會思想家を當年の宣教師に比較するは固より失當の譏りを免れぬが、理由なき惡名を社會から押つ被されて居る點だけはよく似て居ると思ふ。而して今日惡名を云ひ觸らす者が當年の佛僧の類であり、文政當局の人達亦相當時勢の要求を解し乍ら高壓的取締の手を弛め兼ねて居る所も、往時の大名と同一轍である。醜陋なる政界論壇の小策や優柔なる當局者や、時勢に迫らるゝの餘儀なきものありとは云ひながら、其の執る所の愚策に出て笑を後世に殘すのは、一面甚だ氣の毒の至でもある。

× × × × ×

大津事件の回顧　以上述ぶるが如き諸々の事情から來る必

然の結果の一つは讀者にも大抵想像のつくことだらうと思ふが、政府の取締態度が事實そのものの精査に骨折る前に、先づ結論を先きに決めてかゝることである。或る學生が社會主義の宣傳をしたと云ふ。事實然るや否や又それは處罰に値する底のものなりやを取調ぶるに先つて、官憲は直にその學生の處分を學校長に命ずる。所謂社會科學研究會の取締に付ては勿論だか、教職にある者の處分に付てすら同じ樣なことがあると云ふものもある。事實果して然るやを明かにせずと雖も、その必ずしも誣妄の言に非るべきは推測に難くない。或人は一片の瑣細な文書が公安妨害になつたり秩序紊亂になつたりするのを見て、小さい事件から大膽な結論を出す世の中だと慨歎したさうだが、併し實際の事實は、惡意を以て決論をまづ先きに決めるのだから堪らない。

決論をさきに決めて掛つた事件に大津事件なるものがある。政府當局は國家的重大問題として犯人津田三藏を死刑に處すべきを要求した。けれども司法當局は事實と法律とを枉げずして斷乎としてその要求を斥けたのであつた。あの時一部には司法官の頑迷に憤慨したものもあつたさうだが、今日はみな其の正義を執て屈せざるの勇氣に感謝して居る。而して今日は如何。法の適用は姑くおく、せめて事實をモ少し精査した上で事件の處理を愼重にして呉れてはどうか。

之は直接に官憲の思想取締に關するものではないが、官廳が如何に事實の精査に怠慢であるかを證する例證として、私自身に關する事柄を一つ二つ擧げて見る。數年前ある役所では私が米國大使と屢々會見したといふ秘密の内報を他の役所に傳へた。ある警察官廳では、私が日本も遠からず共和國になるだらうと朝鮮人の前で演說したと他の役所に報告して居る。さる高官は嘗て私に君は支那へ往つて斯んな演說をしたさうだが本當かと聞かれたことがある（その頃私は支那へ往つたことはない）。帝大新人會と私とが極めて密接な關係に在るといふことは屢々傳へられるが、創立以來今日に至るまで何等の關係なきの事實は、餘りに馬鹿々々しいから辯明したこともない。其外噂だけのものなら外に澤山あるが、玆には之に基いて或る公けの行動の取られた事實のあるもののみを揭げる。之を基礎として何等かの行動に出られる必要があるのなら、も少し事實を調たらどうか。私は私自身に關係する經驗から判斷して、此種の事實に付ての官廳の調査なるものは全然信用しないことにしてゐる。而して斯の如くなるも畢竟決論をさきに作つてしまふからではあるまいか。決論はきまつて居る。事實はどうでもいゝ。事實に因て決論の動かさるゝを許さずとせば、下級官吏の之に

査を怠るも怪むに足らない。否、決論の動かさるゝを恐れて事ろ故らに事實の精査を避くることもないではあるまいと思ふ。

所謂事實の精査も結局あてにはならない　私の友人に某專門學校の教授がある。その勤めて居る學校の生徒の事で彼は最近屢々司法官や警察官と折衝した。此間遇つたとき、之等の役人が青年の氣持を了解せず無鐵砲なことをやるので生徒が激昂して困るなどと云つて居た。そして一方頻りに生徒を慰撫し然るべく指導するに一生懸命骨折つて居る。同僚からも生徒からも頗る評判がいゝ。又事實それに値するだけの人でもある。所が、此間また偶然にこの人の評判をさる高官の口から直接聞く機會を得た。その言に依ると、右の教授は一家擧つて赤化し、其の住んで居る附近の人だちは難波大助の一族とでも云つた樣な風にこの家を見て居る。斯んな奴が生徒に評判のいゝ教師だから困るといふのであつた。そこで私は色々方法を講じ、彼の住んで居る附近の人達の見る所を實地に調べて見た。其の結果は彼の言とは正反對で、何れも好感を有つて居るものばかりで、一人として此一家と交際するを憚るといふが如き者はない。右の高官は即ち部下の報告に依つたものだらうが、官廳の取調べの斯くも事實と矛盾するのを見て、實は一驚を喫した次第である。事實を精査しないで決論を急ぐのも困るが、斯うなると、所謂事實の精査も一寸當にはならなくなる。

斯んなことを云ふのは、何も官憲を罵倒して自ら快を貪らんと欲するが爲ではない。本來思想問題の重大なるに鑑み、而もこの事に關しては兎角訛傳浮説の流行し勝ちなるの事實に鑑み、更にまた役人までが先入の偏見に誤られて不當の決論に急ぎたがるの實狀あるに鑑み、極めて周到愼重なる精査を加ふるに非んば容易に事の眞諦に突き當て得ないものだといふことを警告したいからに外ならない。

×　×　×　×

思想問題に關する民間の論議に就て　近頃文部省で頻りに各學校學生生徒の社會科學研究を取締らんとするのは、先度の議會で之れがやかましい問題に上つたからだといふ。成程上下兩院で之が殆んど時を同うして論ぜられたのであるが、之には老人連の間に相當の共鳴者もあるといふ。而して之等の論者が如何なる動機で之を問題にしたかは今問ふの必要もないが、唯彼等が專ら巷間の流説に資料を求め事實の精密なる調査を基礎とせざりしことだけは、内容を一見しただけでもすぐ分る。謂はゞ群盲の大象を撫するの類で、其の判斷たるや眼あきから觀れば丸で頓珍漢だ。尤も聽く者の多數は曾て象に指一本も觸れたことのない連中だからこの連中の目には相當の新智識と映じた

かも知れない。見た事も聞いたこともない人は、現に手で觸つて見たといふ者の言を信ずるの外はないからである。併し我我には、何も知らない他の議員が贊成したからとて、群盲の出たらめな判斷を是認せねばならぬ義務は毛頭ない。而して斯うした重大問題をば、手で觸つて見たと云ふ群盲の怪しげな論議に一任して、その事實の調査を一向進めないのは、議員として職責を十分に盡したものとはいへまい。此點に於て私共は國民の名に於てまた議員全體の怠慢を責めるの權利もあると思ふのである。

聞いただけの者の怠慢は暫く恕するとして、自ら進んで之を論じた者までが事實の調査を怠つたといふ罪は、何としても許すことは出來ない。併し之も決論を急いだ連中の一人と思へば我慢も出來るが、只こゝに我々の甚だ遺憾とすることは、彼等の論議が表面に愛國を看板にするに止まり、心中眞に國を憂ふるの至誠の認め難いことである。本當の至誠があるのなら、彼等は廣く天下に糺彈の聲を放つ前に少くとも當の本人と直接遇つて一應所見を闘はすべき筈であつた。當の本人に直接するを避け、遠くから惡罵を加ふると云ふ態度は、所謂瘦犬の遠吠で、誠意なき臆病者の好んでやる常套手段ではないか。

私は伊藤公に遇つたことはないが、人の話を聞くに、彼れ程愛國の至誠に富んだ人は近代稀だつたといふ。眞に然るや否やを知らないが、或は然うであつたらうと思ふことは、彼がよく好んで敵を懷に迎え常に胸襟を披いてかくす所なかつたと云ふことでもわかる。どんな猛烈な敵でも、彼は決して毛嫌せず喜んで遇つたものだといふ。是れ自ら誠意を胸中に貯え、從て亦他の誠意を信じて疑はず、何人に對しても結局に於て自ら共通たる赤心あるを確信するものでなければ出來ない藝當である。自ら信ずるの厚きものは決して慢りに人を疑ふものではない。

だから、此頃の様に反對派を陥れんが爲めに陰險なる惡聲を放つことの流行するのは、一つには自分で自分の立場を正しとする十分の信念なきの證據であり、又一つには相手方の立場を排斥するだけの十分明確なる根據を有せざるを自白するものと云ふことが出來る。道理の確信なきものがすぐ腕力を出したがり、人格識見に自信なき候補者は動もすれば黄白の力を藉りて不名譽な勝利をぬすまんとする。是れ皆同じ心の作用である。併し自信なき者の爲にする所あつて放つ漫罵は致し方ないとして、官界の有識者までが之等の遠吠にそゝのかされて、遂に之に迎合する底の措置に出でんとするのは、何といふ腑甲斐ないことか。國民の多數は既に相當に眼を開きかけて居る。いつまでも國民多數の要求と希望とに乖離することは、獨り官界の人達の禍のみではないと考へる。

病臥六句

魯庵生



(1) 病間の悶語

誰の作であつたか忘れたが多病閑を得るも亦風流といふやうな詩があつた。眼病み女に風引き男と粋なものに數へられてるが、偶々のハヤリ眼や鼻ツ風ぐらゐなら枕頭に藥を陳べて多病がり才人がつてゐられるが、三十九度四十度の高熱に喘ぎ、劇しい腹痛や頻繁な下痢に惱まされ、一と月も二タ月も流動物を當てがはれて果は腰が拔け、身體の自由が利かなくなつて天井と睨めくらをしてゐるばかりでは餘り風流では無い。顏は瘦せる、鬚はのびる、垢は積つても入浴は秤か腰湯さへも使はないのだから、自分ながら小汚なくてモシヤクシヤする。

病氣が下り坂になつて段々恢復に向つて來ると、身體は勞れてゐても氣分は常の通りになる。見舞人に接して談笑殆んど平生の通りであるから、誰しも枕頭に積重ねた書を見て讀書に病を慰めてるやうに想像する。眞實體力の衰へで讀書欲も亦平生の半分ほども無くなつてゐる。其上に頁の多い重い本は仰向いて開いて見るには不便だから事實上雜誌ぐらゐしか讀めない。先輩知己から病中惠まれた新刊は十冊近くも有つたが、枕頭に積んで置いて眺める外無かつた。

讀書既に慵し、況してや筆を持つ如きは思ひも寄らない。偶々怠屈紛れに手紙を書く事もあるが、床の上へ腹這ひになつて筆を執るのでは一本も書くと直ぐ勞れて了う。病床で著述する例は古今共に珍らしくない。兆民先生の『一年有半』の如き口授であらうが病間の名著である。紅葉のノートルダームの飜譯

も亦病中の苦吟に成つた。井上金峨の『病間長語』や陸樹聲の『病榻寤言』や何れも小品ながらクラシック中の名珠として數へられてをる。臥床してゐるといふ條、格別病苦に呻吟してゐるわけでも、死に面してゐるといふわけでも無いのに、著述どころか、病氣と知らずに要求して來る新聞雜誌へ短かい寄稿をする氣根だも乏しくなつたは我ながら意氣地が無くなつたと思ふ。

我々年配のものは、イクラ抱負を盛んにして之から先きマダ一と勉强も二タ勉强もするツモリでゐても、何をするにも日暮れて道遠き感あるは爭はれない。我々年配のものゝ一日は前途遼かな青年の一週間にも一と月にも當る。其の貴とい一日の時間を(フダンは怠け者で無駄にする事が多くても)恁うして枕に就いて三十日も四十日も空うしてゐては自分の責任上濟まないやうな氣もするし、多くの人が油汗を流して續々業績を擧げて行く中に自分ばかりが指を啣へて徒爲に暮すのが戻かしいやうな氣もする。

といふと左も素晴らしい研究か大著述でもしてゐるらしく聞える。でなくとも之から最後の花を咲かせるライフ・ウオークを目論んで準備でもしてゐるやうに思はれる。が、正直な咄、私にはソンナ野心は無い。其日暮しの生活を滿足して何の抱負も容想も持つてゐない。大地にシガミ付いてもといふやうな精神一到的大望は私の柄には無い。元來が怠け者で無益の饒舌をしたり、無用の書を讀んでゴロ〳〵してゐるのが好きだから、一と月二タ月臥てゐたからつて何の煩悶も焦躁も無い筈だ。

が、人間は妙なもんで、病氣になつて臥てゐなければならないとなると日頃の怠け癖を忘れて勤勉家や奮鬪家の口眞似をしたがる。俗に云ふ怠け者の節句働きで、病人になると急に勉强したくなる。ライフ・ウオークを殘したいといふやうな殊勝な抱負は微塵も無いくせに、病氣になると一生を無爲に終つては申譯が無いやうな氣がして、俄に足元から鳥の立つやうに一と仕事したくなつて焦り〳〵する。

だが、私の發憤は體溫と正比例する。發熱すると焦り〳〵して矢も楯も堪らなくなる事もあるが、熱が下るとケロリとする。病氣が直つた今日、私は矢張本とのまゝの怠け者である。

(2) 中毒

私が大腸加答兒を患へるのは之で三回目である。初めは牡蠣に中毒したので、二度目も知人の家で出された膳の上の牡蠣の吸物を一と口吸つたので祟られた。今度の三度目も前夜に或る旗亭で牡蠣を出されたのを、牡蠣には懲り〳〵したから見事な

牡蠣だと思つたばかりで箸を着けなかつたが、其の翌る日の午後から俄に發熱して到頭六十日枕が上らぬやうになつた。見たばかりで中毒する筈が無いから今度は牡蠣の中毒ではあるまいが、病條が矢張何かの中毒であらうといふ醫師の診斷で、私と牡蠣とは前世に何かの悪因緣があると見える。

人間、中毒するくらゐ氣の利かない咄は無い。何とは無しに大食か意地汚ならしく思はれる。私は食事に細心な方で、平生喰べ慣れないものを餘り口にせず、所謂喰はず嫌ひの多い方だが、牡蠣には不思議に中毒する。牡蠣は榮養に富み、結核劑の原料ともなるが私には覿面である。人參飲んで首縊るタワケあれば鰒汁吸ふて長生きする男もありと風來は吐いたが、人に由ては藥喰ひとして賞翫する珍味に中毒するといふは能く〱食味に見棄てられたタワケ者と見える。

だが、俳聖芭蕉も茸に中毒して命を棒に振つてゐる。ドンナ茸を食したか解らぬが、病氣の經過の緩漫なのから推すと毒菌では無くて普通の食用菌に中てられて大腸加答兒か赤痢に罹つたらしい。花屋の病床日記から想像すると左程に手重い容態でもなかつたらしいし、平生粗食で營養不良になつてゐたかも知れぬがマダ老衰といふ齡でもなし、今なら直る病氣であつたらう。が、寂栞の大祖師も茸に中毒したのは餘り風雅とも思はなかつたらう。

茸は菜食界の鰒で、最も中毒性に富んでをる。凡到る所の林間又は山陰等陰濕の地に發生して屢々常食されるゆゑ茸の中毒で命を取られるものは年々少からず、恐らくは猛獸毒蟲の咬傷よりも夥だしい數であらう。佛祖世尊も亦淳陀の供養した栴檀耳を煮て齋を召された歸り途から病を獲られたといふが、栴檀耳といふは印度の珍貴な茸であるさうだ。三界洞觀の佛智も亦毒菌を見拔き給ふ事が出來なかつたと見える。

中毒といふと如何にも無知の過食の如く思はれる。が、佛祖の叡智を以てさへ中毒されたのだから、我々凡夫が中毒するに少しも不思議は無い。私は寧ろ芭蕉やお釋迦さんのやうなエライ人並に食中りがしたのを榮とし、ソシテ二人のやうに死な無かつたのを幸ひとする。

(3) 病中多事

私の病中は極めて多事であつた。私の床に就いたは加藤首相の突然の訃を新聞で知つた翌る日であつたが、其日は友人の慈父の告別式の當日であつた。之から式場へ參列するツモリで支度をした瞬間急に氣分が悪くなつて家人に命じて床を設けさした。それから數日は高熱の爲め半意識狀態となつて醫者や看護

婦を朦朧と眺めたゞけであつた。

越えて數日、妻の老母が郷里で永眠した。電報が追駈け〳〵經過を知らして來たが、見舞う事も臨終に立合ふ事も葬儀に列なる事も出來なかつた。

三十年來の友人淡島寒月が易簀したのも亦病床で聞いた。去年の秋日本橋の通りで偶然邂逅して立話をしたきりで、今年の春は久々で尋ねるツモリでツイ〳〵事に紛れて無沙汰をしてゐたのだから殊に名殘が惜まれた。

俳壇の耆宿鳴雪翁も寒月と相前後して易簀した。僅か二三回芝居で一緒になつて數語を交したゞけの面識だが、あの古武士の木彫を見るやうな翁の長身痩軀を永久に喪つたのは寂しい心地がする。最近二十年殆んど消息を絕つた石橋忍月の訃を聞いたのも夫から數日後であつた。極めて頑健な元氣のイヽ男だつたが、死んだと聞くとモ一度會つて置きたかつた。

今年は一月以來知人間に不幸が多い。病中床の上でクヤミ狀を數通書いた。身親らが仰臥して藥餌に親んでるので何となく惻隱に堪へないで、自分は最早手紙を書くほどに恢復期に向つてゐながらも、けふは人の身の上あすは吾が身の上の感に脅かされた。

最後に人間と一緒にしては濟まないが、飼犬のパクが矢張私の病中に假に病を獲て僅に二日苦悶して斃死した。犬とは云ふ條家族のひとりで、家内中に馴れ親んで誰がドコへ出掛けても尾を掉つてお伴をして來たのが僅か一日一と晩の中に影を消して了うといふは無常迅速も餘り呆氣無さ過ぎる。

私の家には癌とか結核とか溢血とかいふやうな遺傳は無い。遺傳ばかりが病因でないとは云へ此點は較や安心出來る。が、私の父も祖父も大腸加答兒で鬼籍に入つたので、私も他に重病を患へた事は無いのだから結局矢張大腸加答兒でお暇乞ひするのでは無いかと思つた。が、三度罹つて三度とも無事に經過したからモウ時効に掛つてるだらうとも思つた。

だが、私は先天的にノンキな樂天家だから時偶は氣紛れな悲觀をしても鼻唄に投節を歌うやうなもので少しも暗い氣持はしない。本と〳〵ソンナ神經を起すやうな病氣ではなかつたので、六十餘日臥床したとは云へ、其の半ばは流動食に限られたのと絕對安靜の仰臥を嚴視された外には何の苦痛も無かつた。しかも放縱な私は食忌だけは嚴守したが、天井と睨めくらばかりしてゐるには堪へられないで横向きになつたり腹這ひになつたり、時折は床の上に座りさへした。尤も腰が起たなかつたので、床の外へは出たくても出られなかつた。

そんな鹽梅で、病氣は下り坂となつて捗々しくなく頗る緩慢

だつたが少しも苦痛を伴はなかつた。談笑毫も平生と異ならず、疲勞の容子が少しも見えなかつたので、見舞人も腰を落付かして長く咄し込み、代る／＼の訪客に應酬して病室は常に賑はつてゐた。醫師も毎日の版を押したやうな診察を終つたあとはイツモ世間咄に花を咲かして笑ひ興じた。

が、恁ういふノンキな病氣だつたが、知人間の訃報が絶えず代る／＼に耳朶を騒がして、自分自身の病氣には餘り神經を悩まさなかつたが、周圍が次第に落寞となると何となく寂しく感じた。

(4) 淡島寒月翁の僊化

何よりも先づ追懷の情に堪へないのは淡島寒月翁である。

震災後翁は暫らく紀尾井町の裏に賃居してゐた。翁の長男の智藏さんの役所へ出入りの請負師の持家ださうだ。貴族町の麹町の裏にコンナ處があるかと思ふやうなセヽコマしい建てこんだ小路で、家こそ何れも新らしかつたが何とか長屋と云ひさうな棟割が何列もギツシリ詰つてゐた。翁の假寓は其の長屋の一軒で、新建てゞこそあれガサ／＼した裏店普請であつた。殊に周圍がゴミ／＼して隣りのオシメの干したのが見えたり赤ン坊の火のつくやうに泣くのが聞えたり、あたりがザワザワして居心地が惡るかつた。向島の便利で閑靜な住ひと違つて、一時の假寓とは云へ翁の安息所としては不似合でもあつたし又氣の毒でもあつた。

翁は又罹災者の多くが大低然うであるやうに燒けるといふ事を少しも豫期しなかつたさうだ。翁の梵雲庵が燒けたのは震後大分時間があつたのだが、翁は弘福寺の門前に籐椅子を持出して避難しつつも震火の延燒を豫期しなかつたから何一つ片附けやうともしなかつた。尤も家族は早くから較や離れた秋葉の廣場へ避難さしたが、翁一人踏留つて空庵を警戒してゐる中に火先は迅速に二方から近くへ迫つて來て、折から翁を案じて迎へに來た翁の長女に急を告げられて、ドウいふわけだか偶然手にしてゐた鍬一丁を持つたまゝ家族の避難場所へ落延びたのださうだ。

あの際だから山の手の郊外では向島最寄の消息は一向不明で、私は翁の罹災した事をすら知らなかつた。翁が紀尾井町に避難してゐると偶然耳にしたは暫らくして後だつたが、早速見舞ひに行くと、翁は一向罹災者らしい憂色が無く、いつもの通り洒々落々として當時の遭難の顛末を語りつゝ、座傍のサイダーの二ダース箱を指さして、「財産は此箱一つになつた、何も彼も燒けて了つて煩悩の種子が無くなり、寧そサバ／＼した、」

と淋しく笑つた。

が、先代椿岳が臨終の跡を守つて二十年來起臥した梵雲庵を劫火に附し、剩つさへ筆豆で何十年來何呉れとなく書溜めた隨筆何偏等殆んど等身の藁本、及び最近に蒐集した內外玩具三千點、竝に朝夕手馴れて愛撫し或は愛讀した古器物古書等を一朝殘りなく烏有に亡ぼしたのは少からざる精神上の痛手であつたらしく、後に聞くと之から以後健康漸く衰へたさうだ。

私が最後に翁に會つたのはタシカ昨年の春だつた。日本橋の通りの丸善近くでユクリなくも翁が買物の紙包みを抱へて來るのに邂逅つた。十五分程立咄をしたが、丁度午近くだつたのでドコかで午餐を喰はうかと誘つたが、午後客來の約束があるといふので彼是れ三十分程も咄して近くの再會を期して別れた。

私は災後假建ての梵雲庵を一度も尋ねなかつたので、其時は早速訪問するツモリであつた。が、每日目前の俗事に追はれてるのでツイ一日延ばしになつた。其中に弘福寺の門前の俗に「セキのお婆アさん」と稱する異體の石像に偶然興味を持つて寫眞を取りに行かうと思ひ立ち、其の石像の向いてる方角と石像に就ての考證を聞きに手紙を送つた。其時翁は近年珍らしい長手紙に石像の寫生畫を添えて返事をよこした。

此返事を得て早速寫眞を取りに出掛ける筈であつたが、あとからあとからと生ずる俗事に日を遁らしてる中に石像の興味も薄らいで秋となり暮となつた。餘り無沙汰になるので來ん春こそは梵雲庵の世間を脫離した空氣に浸つて俗腸を洗はうと思つてゐた處、一月早々知人の不幸があり、續いて何や彼やと用事が重なつて出かねてゐると、其の中に自分が病氣となつてドッと枕に就いて了つた。三十年の親交の最後の告別式にだも遺憾に別れを告げる事が出來なかつたのは心殘りで、去年の秋に請取つた「セキのお婆アさん」の畫が計らずもカタミとなつた。

私が初めて寒月翁を森下町の舊居に尋ねたのはタシカ明治二十一年であつた。其時は私はマダ青年であつたが、翁も亦翁ではなくて黑髯毿々たる白皙長身の美男の壯年紳士であつた。向島の梵雲庵と同じく庭先きから直ちに書齋に通れる作りで、紅葉の紹介狀で刺を通じたが極めて愛想よく慇懃に初對面の白面書生を應對して呉れた。

後に聞くと翁は初め頗る西洋崇拜のハイカラで、常に洋裝で椅子テーブルで生活し、四角な柱は日本臭いからと丸く削らしたといふほどの西洋かぶれだつたさうだ。が、私が訪問したのは西鶴研究家としての寒月であつて、『置土產』にある肖像のやうな隱者を想像してゐた。處が番地を捜しあてゝ門外に立つ

た時 H.AWASHIMA といふ羅馬字の標札だけで日本字のが無いのを發見してヒヨツトしたら門違ひでは無いかと意外の感をした。刺を通じて見ると門違ひでも無かつたので、庭先きから書齋へ案内されて見ると主人公の風采から服装から應對の容子から座右の器具調度萬端が丸きり豫想を裏切りもしなかつたので、先づ人違ひぢや無かつたと吻と息をついた。が、此人にして羅馬字の標札を掲げるといふは茶席で咖啡を薦められるよりもそぐはない不思議な氣持がしたが、後に聞くと此の羅馬字の標札がハイカラ時代の最後の遺物であつたさうだ。

翁が西鶴の發見者であるのは今は誰でも知つてるが、此の森下の寒月庵が紅葉も露伴も西鶴の洗禮を授けられた元祿レネイサンスの發祥地であつた。タシカな記憶は無いが堀田原の宗吾神社の附近であつた。之が若し英國あたりなら史蹟の石標を建てるであらう。

翁が西鶴を發見したのは明治八九年頃ださうだ。今の淡路町の酒井好古堂の先代が今三井の慈善病院になつてる下谷の藤堂の邸裏に小さな店を持つてゐた頃、薦縄紮げの一と束の古本の中に『置土産』の零冊があつたのを反覆熟讀したのが初めてださうだ。夫から以後翁は西鶴を探求して、獲るに隨つて片端から耽讀し、其頃までに大抵西鶴の全著を漁り盡して了つた。

此頃翁の女婿木内氏から聞く處によると、翁が西鶴に傾倒したのは阿蘭陀西鶴の異名があつたが爲で、矢張翁の洋醉に因縁してゐると翁自身が語つたさうだ。が、私が翁から聞いた時折の斷片語を綜合すると、翁が阿蘭陀西鶴の異名があるのを知つたのは『置土産』を讀んで西鶴のメリツトを感嘆したよりは遙か後であつて、時人から受けた此異名が偶々自家の洋醉に投合して益々傾倒を深くする種子となつたかも知れぬが、此異名の爲に西鶴が好きになつたのではない。バテレン高政、阿蘭陀西鶴とは當時の古俳諧者が談林一派を罵倒した一對の毒語で、翁は談林俳諧を談ずる毎に能く口癖に持ち出しては阿蘭陀の異名を西鶴の誇りとして時人の毒罵を却て甘心してゐた。が、西鶴と並稱された高政はバテレンの異名があつても餘り感服してゐないらしかつた。高政の句集や論難も翁から借讀したが翁自身の批評は餘り聞かなかつた。

翁より以前西鶴を讀んだものは何人か有つた。篁村も藍泉も翁より十年も前から西鶴を知つてゐた。篁村は曾て酒間私に向つて、『西鶴々々と珍らしさうに云ふが、僕らは明治四五年頃に藍泉其他の同志と共に西鶴輪讀會を開いて十年頃にはモウ卒業してゐた、』と氣焰を擧げた事があつた。強ち酒の上の氣焰ばかりでなく、篁村や藍泉は明治の初年に西鶴や其磧を渉獵し

た元祿研究の先驅者であつた。が、是等の人々が西鶴を讀んだのは馬琴や種彥が風俗資料として『男』や『女』を屢々考證に擢ぎ出したのと等しく、單なる元祿の興味ある產物として扱つたので、決して西鶴の特異の藝術的價値を認めたのではなかつた。西鶴の藝術的位置や劃期的業績の偉大を認めたのは全く翁が唱首であつた。紅葉も露伴も翁の啓沃に由つたので、紅露に鼓吹された所謂元祿文學の復興の背後の隱れた力の中心は實に翁であつた。

私が翁を訪問したのも亦西鶴に就て教を乞ふ爲であつた。翁が襟懷洒落で初對面の人をも百年の友の如く遇したのは翁を訪問したものは誰も皆知つてゐるが、私も亦初めから總角の友の如く待遇されて、西鶴や其磧に就て種々の耳新らしい教を聞いたのみならず、翁の帳中第一の什寶ともいふべき『一代男』をコチラからは所望したのでもないのに『左に右く先ア讀んで見玉へ』と快く貸與された。其頃は今と違つて、若し坊間に見當れば今とは比較にならない安い價で手に入れる事が出來たが、ドダイ極めて稀覯でドコに有るといふ見當もつかず、藏書家は秘しかくしにしてゐたから表紙を見るさへ容易で無かつたので、初對面のものに造作もなく貸すといふは異數であつた。

翁は讀書人だつたから終生座右に書籍を缺かさなかつたが、丁度榮耀の食好みをするものが結局膏粱の美味に飽いて食を擇ばなくなると同樣、晚年の翁は讀書は欲しても珍本漁りはしなかつた。が、其頃の翁は屈指の讀書家でもあつたし藏書家でもあつて、今なら一點數百金を値ひする珍本稀籍を堆かく座右に積んでゐた。百年の壽命を經た本でなければ讀むがものは無いといふが其頃の翁の書籍に對する信念であつたから、天明以後のものは或る著名なる隨筆類の外は餘り珍重しないで、藏儲は大抵元祿を中心としての俳書や浮世草紙類であつた。其頃の翁の藏儲は何事にも餘り執着しない翁の性癖と、多く所有するは罪惡であるといふ翁の信仰から大抵知人或は希望者に頒ちて盡く散逸したが、其中には今はドコに有るか行衞の分らぬ稀本があつた。(其頃の翁の藏書には鳥の墨印が捺してあつた。今でも時偶古本屋で發見される。)

其頃の翁の西鶴に對する傾倒は文學といふよりは寧ろ宗教であつた。ドンな咄をするにも必ず西鶴を引合に出したもんで、私が近代文學の傾向の話をすると『西鶴は既に然ういふ看方をしてゐた』、『西鶴は疾つくに然ういふ事を云つてゐた』、『西鶴はソンナ事を最う書盡してゐる』と、今の人間が漸く氣が付いた事を二百年前に道破してゐると西鶴の藻拔けた着想や描寫を

嘖々して止まなかつた。且西鶴の世相に就て知らざる事の無い博通や、世の中の裏の裏、人間の心の底の底まで看透す洞察の鋭どさを溜息吐きつゝ感嘆しては西鶴から数節を讀んで聞かした。翁の西鶴鑽仰は恰も門徒の祖師に於ける如くであつた。

が、翁の讀書は啻に西鶴を主とする元祿文學に限局されなかつた。其頃翁はドンナ愚書でも一萬卷以上を讀めば一個の見識が出來るものだから人間は一萬卷以上を讀まなければならないと云つて讀書萬卷を高唱した。從つて翁の讀書の領域は頗る廣大で、手當り任せに何でも讀まずには措かなかつた。一時愛書熱が冷めて所藏の珍本稀籍を惜氣もなく知人や希望者に盡く頒つて了つてからも讀書慾は決して減却したのでは無かつた。珍本獵りこそ舊の如く熱心では無かつたが、矢張古本屋も冷かせば新本屋も買廻つて何かしら讀まずにはゐられなかつた。予息の一人が某圖書館に就職してから常に圖書館の本を借出して讀んでゐた。翁が元祿或は俳諧小說にのみ跼蹐しない博覽家であつたを證する一挿話を云へば、此頃俄に珍本扱ひされて飜刻書まで出版されて現に讀書界を騷がしつゝある『鮮血遺書』を翁の書齋で見たのは彼是れ二十年前である。ドコかの古本屋で見附けたがコンナ面白いものは無いから讀んで見ろと云つたが、私は坊間で獲られさうな本は人から餘り借りない事にしてゐるからツイ借りないで、夫から七八年も經つて漸と捜し出した。世には私が此本の發見者である如く傳へるものもあるが、私が此本を初めて見せられたのも亦翁の書齋であつた。

且翁は西鶴の著書が有らゆる各方面の生活に渉つて何でも知つてゐたのを常に推服して西鶴の勝れた特長として語つてゐたが、翁も亦世事に就て倦くなく知識を貪つた。翁の家には常に種々の職業の人が出入してゐたが、翁は各職業の習慣や秘密や用語を綿密に質問しては一々細かに書留めて置いた。翁は博覽家でも在つたし記憶力にも富んでゐたが、其上に此の周到な用意があつたから、世事に掛けては殆んど何でも知らざるは無かつた。翁の頭は百科全書的で、何を訊いても響の物に應ずる如く答へたが、偶々知らざる質問に出會へば翁は決して知つたか振をしないで反問して益々知識を豐富にするを努めた。翁は深い研究家では無かつたが、何でも知らうとした人であつたし又何でも能く知つてる人であつた。(翁は筆豆で、日課のやうに每日書溜めて置いた稿本が等身以上天井につかへるほどあつたが時折のすさみの俳句連句、歌や感想若干を除いて大部分は翁が諸國で見聞し或は故老から聞いた世態人情風俗又は諸職に關する隨筆であつて、多くは親しく當事者から聞いた書籍に無い知識であつた。其中には又時代を背景とした自傳やうの記錄もあ

つたさうだ。此の何十年來の丹精から成つた藏本が先年の發火で悉く烏有に歸したは翁の爲めにも少からざる打撃であつたが、文化史的にも亦頗る惜むべき限りであつた。）

趣味家としても翁は讀書と等しく頗る廣大な領域を持つてゐた。翁は知識的に何にでも興味を持つて何でも一と通り究めてゐた如くに、趣味も亦極めて多方面で且廣汎で一局部に跼蹐してゐなかつた。梵雲庵を一度訪問したものは翁の狹い書齋が足の踏込み場が無いほど種々雜多の器玩雜物で埋められてるに眩惑されざるは無からう。西洋の物、支那の物、古い日本の物、阿非利加の物、印度の物、かと思ふとデパートメント・ストアで賣つてゐさうなもの、そこらの夜店に列べてありさうなもの、東西新古を雜採して殆んど端倪すべからずである。

翁は富豪で無いから一見萬金の寶器と思はれるものは無い。が、弗箱の中から化けて出たやうな紙幣臭い寶器を集めた藏の中には到底發見されない不思議なものがあつた。古道具屋に直踏みさせたら三文にならないでも、率さ捜さうとすると百圓札の束を積んでも容易に獲られないものがあつた。チカ〳〵ピカピカしたのは一點もなく、雜然して恰も場末のガラクタ道具屋を見る如くであつた。が、其の雜然たる中に世間離れした一種の超人的雰囲氣が流れてゐた。

翁は元祿文學の隱れたる先驅者として知られる外に俳人、畫家、江戸通、或は玩具蒐集家として傳へられてゐる。が、翁の興味は元祿や俳諧や江戸や玩具に跼蹐するやうな狹いのではなかつた。西鶴に傾倒し談林に陶醉した翁は文藝家としては元祿國の住人であつたが、翁は本來隱逸傳中の人で、初めから文藝を以て生命とする志なく、翁の文藝に於ける食後のデザートのやうなものであつた。夫故に文壇人と交際しないでは無かつたが、文壇人に對しても誰に對しても同じやうに來るものは拒まず去るものは追はずの流儀で交際し、進んで交を求めるやうな事は決して無かつた。翁は紅葉や露伴と交を訂してゐても文壇とは不即不離で、初めから文壇の見物左衛門たる位置を樂んでゐた。翁は文藝にも美術にも何にも通じてゐて裕に專門家と對を駢べて馳驅するに足る造詣を持つてゐたが、一つは文字や繪具を賣つて衣食する必要が無かつたからであらうが、ヨリ以上に性來の隱遁者的傾向が因をなして、本職の文藝家や美術家となつて街頭に立つよりは世を韜晦する趣味生活者たる境界に早くから逃避した。

翁は西鶴や談林が好きであつたが、同時に基督教會にも出入

すれば禪宗にも凝つた。西鶴と談林と基督と禪宗とは妙な配合で三題噺にもならないが、翁は西鶴も基督も談林も禪宗も一視同仁で、皆風流の友であり閑餘の慰みであつて、文學でも信仰でも無かつた。翁が教會へ出入するや西洋人と一緒に傳道說教までしたので、宣教師は容易に獲難い熱心の信者として深く翁を信賴したが、或時不斗翁が家を訪問して書齋の棚や壁、鴨居の上まで隙間なく佛像を列べてあるを見て怪訝な顏をしつゝ、『アレは何だ？』と訊くと、翁は直ちに壁に掛けた基督やマリヤの圖像から佛像まで一列に指さしつゝ言下に、『ミンナ僕のオモチヤ！』と答へて莞爾と微笑した。佛像は左に右くマリヤや基督の圖像までオモチヤと云はれたので西洋人は面啗つて變梃な顏をしたさうだ。翁のは信仰で無くて實は趣味でありシヤレであつたので、聖書を讀むのも西鶴を讀むのも別段差別はなかつた。シヤレに宗教を信ずるといふは元祿の氣分や化政度文學を萬更知らないでも無い邦人の中にも理解出來ないものがあらうから、況してやオルソドツクスの外國宣教師には話して聞かしても解りツコは無い。翁は宗教までもシヤレの餌食としてゐたので、翁の趣味生活は實に豐富であつた。

翁は生拔きの江戸ツ子で、江戸の眞ン中で神田上水の產湯を遣ひ、幼年時代に江戸の最後の氣分を呼吸し、少年時代から江戸の藝術に浸り江戸の文學に耽つたのだから江戸通であつたのは勿論だつた。殊に江戸の市民の遊樂の中心地である淺草から向島は搖籃の故郷であつて、何十年來我が家の庭のやうに朝な夕な散策したから町のエヴォリューションから軒並の商賣屋の盛衰記、町内の評判娘の結綿時代から梅干婆になるまでの一代記、何でも知つてゐた。シヤレ本の地廻りの啖呵ぢや無いが路次の拔裏から掃溜總高架の有場所、お稻荷さんの鳥居の數から犬の糞の落ちてる場所まで知らざるは無かつた。

が、江戸通でもあり江戸好きでもあつたが、翁は江戸よりも寧ろ印度や埃及をヨリ以上隨喜してゐた。バッジの『埃及の神々』を種本として一時は盛んに埃及の壁畫風のものを描き、果は襖や壁や天井までに泥畫で埃及の諸神の像を描いて埃及氣分を横溢さした。（此の天井の埃及畫はタシカ震災前まで殘つてゐた。）

西鶴鑽仰時代の翁は元祿好きであつたが、其以後段々向上して鎌倉となり藤原となり、一時暫らく奈良に滯留して舊都の氣分に侵つてから天平禮讃となつた。百年の壽命を經た書物で無ければ讀むを値ひしないと百年を單位としたのが、今度は千年以上のものでなければ貴ぶに足らないと、百年單位が千年單位

に飛上つた。(尤も前者は書物に限つた訓で後者は專ら歷史的記念物を指すのだが。)夫から後更に進んで印度となり埃及となつたので、翁の考古趣味にも亦段階があつた。

翁の玩具蒐集は晚年に初まつた。一つは翁の畫が賣れて、就中玩具畫が評判になり、玩具百種から千種と好畫家の注文が段々大袈裟になつたので、其註文に應ずる必要上からも玩具の蒐集を初めたのである。玩具畫も初めは矢張肥後の木の葉猿とか柳川の雉子車とか福岡のヅク笛とか大宰府のウソとか有來りの土俗玩具であつたが、此種の淸水晴風の領分の產物は翁の好尙からは餘りに幼稚であつた。翁は元來がハイカラ好きでエキゾチツクの興味を持つてゐた上に、埃及や印度の古文化癖も手傳つて、支那劇の首人形とか瓜哇のワヤン劇の影繪人形とか佛陀伽耶の千體佛とか埃及のウーシヤブテイーとかいふやうなものを珍重した。元來玩具の蒐集といふは趣味國の入門であるが、翁のは所謂玩具趣味から踏越えて"Völkerkunde"や"pleasant art"の領分へ飛込んでゐた。玩具蒐集といふやうな狹い幼稚なものでは無かつた。西藏の曼陀羅や印度のステユーパや椰子の葉で編んだ極樂鳥やニユーギニヤの土人の楯を人に示しては原始宗教やエスノグラフヰーを說いた。翁は系統的に學術を修めた人では無かつたが、恁ういふ方面に就て往々意外の造詣を持つてゐた。震火で燒いた翁の蒐集玩具は凡そ三千點で有つたといふが、其中には玩具の範圍よりは人種學の領分に屬するものがあつた。博物館の土俗部や人類學の參考室に見られない稀品があつた。之だけの蒐集は單に丹精や金力ばかりで無くて相當造詣と學術的見識とを要するので、所謂オモチヤ趣味家の幼稚な頭では企てられもせず又集められもしないのである。

翁は一種の天才で、正式に學んだのでは無いが木雕もしたし粘土も捻つた。殊に擬古に長じ、巧みに古びをつけたので一見古物と看紛うた。尤も翁は贋物作りでも又古物を模造するのでも無く、但だ自作の眞新らしく見ゆるを趣味の上から嫌つて古びをつけるのであるが、翁の書齋に本物の古物と一緒に列べてある時は相當鑑識あるものも往々一杯喰められる事があつた。就中椿岳傳承の泥畫は他人の追隨を許さゞる域を究めたので、晚年には畫家と伍して一部の好事家に鑑賞されるやうになつた。本來師に就て傳統の畫風を學んだ事が無い人だから、筆を專門畫塾に執つて相當歲月の修業を積んだ椿岳よりも一層簡樸豪逸な個性に富んで、椿岳よりも一層匠氣を脫してゐた。翁は

自分の畫を「ばさら繪」と稱して「ばさら繪」と刻した墨印を捺した。此の「ばさら繪」といふは土佐節に出典ある戯畫の異稱であると『嬉遊笑覧』に解説されてゐるが、「ばさら」とは何であるか、語源本義がハッキリしないが、語源の穿鑿は後廻しとして、翁は此の何となく外國語らしく切支丹臭い處を喜んで、持前のエキゾチック的興味から故更に此の耳馴れない奇妙な名稱を與へたのであらう。が、そこに翁が先人未踏の畫境、先人椿岳のをすら踏襲しない獨自一箇の藝術を任ずる意氣が仄見えてをる。

翁の畫技は亦翁の趣味の一つで、人に見せるよりは自ら描いて樂んでゐたので畫名を賣るといふやうな野心は毫しも無かつた。が、翁の微塵も匠氣の無い、少しも傳統に俘れない畫は早くから友人の間に珍重された。翁は畫を描くのを樂みにしたのだから描きすての畫がイツデも座右に有つて、人が來れば示し、望まれれば與へた。新たに注文すれば直ぐ紙を展べて喜んで揮灑した。最も得意なのはお伽噺や化物繪であつたが、何でもお好み次第で、閻魔でも地藏でも聖天でも天人でも、町奴でも浪人者でも由良之助でも定九郎でも夫々大津繪風に描きこなした

美人畫は一番困るよと云ひながらも伏見人形の姉樣然たる女の顏を能く描いて、『僕のは千年前の美人だから骨董味がある』と笑つた。或時、裸體畫はドウだネといふと、翁は頻りに考へてゐたが、『普通の裸體は面白く無い、樂園のアダム、イヴを描きませう』と、直ちに全紙を展べて、知惠の實の木の界ひにアダムとイヴが裸體で對立する足許に蛇がトグロを卷いて首を伸ばし、其周圍に象や麒麟や猿や群獸が嬉々として戯むれてる圖を咄嗟に描いて與れた。穗先きの切れた筆がカスレてアダムもイヴも裸體姿が如何にも原始人らしく、ステユツクの著名な樂園の陰性な凄味のある圖よりは却て混沌邈焉たる太古の氣分が溢れてゐた。（此畫は知人に所望されて持つて行かれて今は所在を知らない。翁の畫は所望者が多いので、翁に描いて貰つたのは十數紙に留らなかつたが、皆持つて行かれて今は僅に一二枚しか殘つてゐない。）

椿岳の繪が膠が利かないので折々畫具がハタの物へ附いて困る、或人が羽織の胴裏へ描いて貰つた處が、ウツカリ着てアツタラ一帳羅を臺なしにしたといふ珍談がある。（『憶出す人々』椿岳參照。）翁の泥畫も膠が利かないので繪具が屢々剝落する事があつた。『君の繪はウツカリ觸ると手が汚れる。今度は膠をおみやげに持つて來やう、』と或時戯れていふと、『僕のは座興だから、繪具が落ちて繪が消えて了つた方が面白いよ、』と翁は

拔からぬ顔をして一向無頓着だつた。

が、翁の畫れが知人以外にも段々高くなつて、翁の個人展覽會が開かれ、書畫屋や骨董屋の店先きへ時折列べられるやうになつてからは、一人でも二人でも潤筆料を出すものがある手前、胡粉や膠を切らすやうな事も無くなり、泥畫具ばかりでなくなつて群青や朱で彩色する事があるやうになつた。『寒月さんの畫も近頃は餘り上手になり過ぎて面白味が無くなつた、』と惡畫好きの仲間には良や評判が惡くなつたほど夫程翁の畫が段々クロウト臭くなつた。

だが、翁の畫が本價を生じ、立派に表裝されて立派な床の間へ掛けられるやうになつても翁は相變らず無暗と描いては誰にでも與へた。『そんなに矢鱈と人にやつては畫が安ツぽくなるからお止しなさい、』と家人が心配しても、翁は一向意に介さないで誰にでも望むまゝの畫を描いてやつた。中には翁から貰つて來ては相當の價で賣る横着者があつたが、翁は知つても知らない顏をして『矢張求められゝば快く描いてやつた。『俺の短冊は後世値が出る』と商品切手でもやるやうな顏をして自分の門生にさへ一枚以上は決して書いてやらなかつた某なぞと比べて、賣る了簡で求める横着者にさへ底意を百も承知しながら何にも云はずに描いてやつた處に翁の寛濶な高風が現れてゐる。『禮を與れる人からは貰うが、禮を與れない人にも同じ畫を描いてやる。禮を與れる與れないはムコウの勝手で、喜んで與れさへすればコツチは氣持がイヽ』と人が來れば二枚でも三枚でも何かしら描いてやらねば氣が濟まなかつたらしい。

翁の畫は即興で、十日一石を描き五日一水を描くといふやうな面倒臭い職人仕事は嫌ひだつたから大作といふやうなものは餘り無いだらう。が、好事の聞え高い某旗亭が特に翁を煩はした寒月の間の襖の畫は翁も喜んで應じた會心の作であつたさうだ。惜しい哉、震火に燒けて了ひ、追て本普請が出來上つた時再び同じ畫を描くと云つてゐたが、翁は再築を待たないで白玉樓中の人となつて了つた。

其他に箱根の某旅館で見た絹本龍宮の行列の畫は亦恐らく翁が會心の作の一つであらう。翁は先人椿岳に倣つた地獄變相の大幅を是非描くと云つてゐたが、到頭描かなかつたらしい。翁の玩具畫は最も得意で、且最も人氣があつた。晴風の極めてテクメイな本の挿畫風なのと比べて翁のは寫生を離れて玩具の精神を摑んでゐる。玩具千種の如き晴風の『うなゐの友』以上に珍重されて後代に殘るものであらう。

翁を夕ゞの風流人扱ひし、或は漫畫家並に或は江戸の古老並

に扱ふは翁を知らざるものだ。翁は江戸の町家に生れた町人の子孫であるが、氣品も高く見識もあつた。系統的な學問こそ修めなかつたが早くから讀書に親んで、恐らく平生の素懐通りに萬卷を讀破したであらう。家に餘財があつて衣食に事缺がなかつた爲めに名利に奔走する馬鹿らしさや學問文章を切賣する不思議さに堪へられないで終に隱居風流に終生を韜晦したが、翁は文壇又は講壇に立つて優に一家を成すに足る十分な造詣をも力量をも持てゐた。加之ならず世才に長じ、應酬に巧に、算數にも亦明かであつたから實務に當らしても相當成果を舉げる素地と才能とを持つてゐた。但だ翁は餘りに聰明に過ぎて世間が解り過ぎてゐた。翁から見れば虛名を傚る學者藝術家や、些かの富の成功に羽根を伸す實業家らが馬鹿々々しくて共に手を携へて一緒に仕事をする氣にはなれなかつたらう。

翁の存在は四皓九老の再生である。翁の梵雲庵は沙漠の中のオアシスである。我々如き紅塵に蹁躚するものが偶々翁の居を叩いて翁の清談を聽き翁の超俗の畫を見る時は噎せツぽいホコりを逃れて流泉に浴するの感があつた。翁の梵雲庵は我々俗人の避難所でありサナトリユームであり又念佛道場でもあり汚れた頭の洗濯場でもあつた。梵雲庵は焼け、翁は逝く。病中翁の訃を聞くは殊に寂寞の感があつた。

翁に就て傳ふべきもの語るべきものはマダ中々盡きないが、他日再び追懷して筆を採る時があらう。

(5) 石橋忍月の憶出

寒月と前後して石橋忍月の訃を聞いた。寒月に就ても都下の新聞は僅に東京日々の夕刊が報じただけであつたが、忍月に就ては一行をだも割かなかつた。寒月は東京に在住してゐても著裏に隱れて舞臺の上に踊らなかつたし、忍月は早くから帝都を去つて遠く九州の果で筆を折つて狀師の服に着更へたから、眼前の舞臺に踊る人の外は眼に映らぬ新聞界には最早忘れられたのであらう。尤も我々と雖ども三十年消息を絶つた忍月の名は訃を聞いて俄に憶出したのである。

忍月が批評の筆を執つたのはタシカ私よりも較や以前であつた。プラトンやアリストテレスを引合ひに出した忍月の犀利の批評は鷗外出でざる以前獨逸學派の一人舞臺であた。レッシングを日本に紹介したのは忍月が初めてで、矢鱈とラオクーンを引張出すのでレッシング忍月の諢名があつた。

當時の批評は所謂穿ちや穴捜しや感想ばかりで、堂々の論陣を張つたものは殆んど無かつたから忍月の論理井然たる侃々諤々の批評は目を拏てさしたもんで、鷗外出馬前千里獨行の感が

あつた。忍月の批評に出て文壇の蒙を啓き讀書界を提撕したのは爭はれないので、例へば二葉亭の『あひゞき』の如き當時の一般讀者には殆んど理解されなかつたので、忍月が微細に分析して庖丁牛を解くが如くに一々物語の徑路を正して說明した批評は恰も八幡の籔知らずに彷徨する如き讀者の道しるべとなつた。ツルゲーネフを紹介したのは二葉亭であつたが、ツルゲーネフの特徵や價値を二葉亭の譯文に出て指敎したのは忍月であつた。啻に此の『あひゞき』に限らず、當時の忍月の批評は必ず文壇及び讀者を啓發するものがあつたので、忍月の文壇を指導した功績は沒すべからざるものがある。

然るに此の相當學殖もあり相當功績も擧げた忍月がドウシテ文壇のキヤリヤに半途で挫折したかと云ふと、第一の頓挫は同じ獨逸畑からの傑物鷗外の出現であつた。同じ畑だから同じ業物を擊げて起つたのだが、忍月のレッシング一點張なのと反對に、鷗外はレッシングは本よりゲエテ、シラーに加へて新鋭のハルトマンの切れ味まで示した七ツ道具の勁勇精悍なる武者振は忍月の敵で無かつた。昨日までの一人舞臺の荒事師も此の新銳の大看板に出られては俄に傾き掛る下弦の月の日の出に會つたやうに影が薄くなつた。

第二に忍月の論文は獨逸流のゴツ〳〵した論理一遍で蠟を嚙むが如きに加へて、兎角に法律家通有の揚足取りや堅白異同に偏してゐた。隨つて普通の讀者には餘り理窟過ぎて十分理解しにくかつたし、高級讀者には胡桃の空殼を嚙むやうな無味に堪へられなかつた。且初めはプラトンやアリストテレスの空珊に烏渡眴喝されたが、同じ畑から崛起した鷗外の蘊蓄の無盡藏なると比べて忍月の奧行の餘り深くないのが誰にも忽ち看透かされると同時に、鷗外の精練瑰麗なる修辭と比較して忍月の生硬蕪雜な未消化の文章が愈々目立つて來て次第に飽かれるやうになつた。

第三に忍月の創作『捨小舟』の公表が世人をして批評家に對する幻滅を餘り深く感ぜしめた。批評家と創作家とが同一の才で無いのは批評家自ら辯明するまでも無く世人は大凡心得てゐる。が、行司が軍配を棄てゝ相撲を取つたら二段目三段目は愚かフンドシ擔ぎにすら勝味の無いのは誰も承知してゐても、目前にフンドシ擔ぎに手玉に取られて投げ飛ばされたなら行司の權威は忽ち地に墜ちる。批評家と創作家との才の異同は行司と相撲ほど甚だしくなくても亦自づから差別があるので、批評家としての第一人者が創作家としても亦相應の巨腕を持つてゐると思ふものは無かつた。が、忍月の苛辣犀利の批評を讀んでるものは忍月の創作に對して崑山の遺珠を期待せざるまでもアレ

ほど幼稚な未熟なものを見せられやうとも豫期しなかつたので、「捨小舟」發表後の忍月は批評の力量まで漸く疑はれ出して批評家としての權威をも失墜して了つた。

元來忍月は論難に長じ談理に巧みで、批評をさせると筆端に火花を散らしたが、批評以外の敍述文章は情味に乏しく色彩に貧しく機智に缺けてゐた。其上に惡どい形容やアクの拔けない駄ジャレや駄發句まで列べるので往々嫌厭を催ほさせるものがあつた。夫にも拘らず忍月は田舎娘の牛蒡の白あへのやうなお化粧をした小説を人見しりもせず續々發表した上に、硯友社や根岸連の眞似をした脂の浮くやうな紀行や雜文を度々書いて自分の短所を臆面もなく披露したので益々飽かれ、本領の批評までも輕蔑されるやうになつた。

第四に、忍月は本來社會人で處世の才に長じてもゐたし又自ら恃んでもゐた。殊に獨逸法科の出身であつたから社會的に成功すべき要素も條件も具へてゐた。本と〱文學は道樂で、云はゞ學生の小遣取りの片手間仕事にしてゐたので、文壇的に左したる抱負も空想も持つてなかつたのだから、學校を出て社會へ乘出すやうになると、生活の方便としては今とは比較にならぬほど微弱であつた當時の文壇人となるには社會的野心が餘りに有過ぎてゐた。が、世間から見れば法科の出身でも忍月は矢張文壇人で、實務上の手腕は餘り高く買はれなかつたから忍月の社會的野心を滿足させる價を支拂ふものは無かつた。忍月の强味は水陸兩棲動物で、ドッチに轉んでも一家が成せると任じてゐた。が、ドッチからも餘り高く買はれない弱味をも持つてゐた。若し早くからドッチか一つを擇んで一方を棄てたなら案外速かに成功したらうが、本來才の人で自ら恃む處が常に兩天秤を掛けてゐた。

忍月の失敗の重なる原因は此の水陸兩棲の能才であつた。尤も鷗外の如きは水陸兩棲以上に空を飛び地に潛ろ八宗兼學であつたが、鷗外は非凡の大才に加ふるに何をするにも懸命な努力を惜まなかつた。忍月は之に反して才氣一點張で眞劍味が無く、何をするにも骨惜みをして少しでも骨の折れない道を擇つて行つた。文壇の人氣が下り坂となると、爰ばかり日は照らない、俺には本職がある、天道樣と米の飯はドコへ行つても附き物であると、直ぐ文壇に尻を向けて看板を塗換える。が、暫らくして本職の法律家としての評判も面白くなくなると、俺にはイツデモ歸つて來いと迎へて呉れる故郷があると、一度梵天國を極めた文壇へ再び舞戻る。大學を出て暫らくして北國へ落延びたのは中央では文壇でも文壇外でも志を得なかつたからであるが、北國でも亦操觚者としても法曹としても開運が危なつか

くなると、中央では飽かれて去るべく餘儀なくされたのをも忘れて再び舞戻つて來た。忍月自身は捲土重來のツモリであつたかも知れぬが、其時は最う時代に置去りにされてゐたので、辯護士の看板を掛ける旁ら『新小說』編輯の任に當つても二つながら思はしくなかつた。到頭永遠に帝都を去るべく餘儀なくされて、忍月の名は全く地平線下に隱れて了つた。

が、忍月が中央文壇を逃避して九州の西隅に落付いてから二十何年、全く消息を絕つたから忍月の近狀に就ては何も知らぬが、九州では辯護士として相當位置を占めて社會的には、成功したのである。『書物往來』に載つた某氏の寄書に由ると、忍月の後半生は悲慘でないまでも失意であるらしく想像されるが、實際は失意どころか寧ろ得意であつたらうと思はれる。忍月は本來が社會人で物質的成功以外に慾望は無かつたので、文壇の成敗などは餘り關心しなかつたらう。西隅の一地方にせよ、お山の大將となつて相當門戶を張つてゐた忍月は恐らく帝都の文壇を白眼睥睨して、我々如きイツまでも文壇の足を洗ふ事の出來ないものを憫笑してゐたらう。

が、當時の評壇を回顧すれば、綠雨最も早く逝き、角田浩々歌客、宮崎湖處子相繼いで鬼籍に入り、抱月、鷗外亦續いて白玉樓中の人となり、昨は久津見蕨村を哭し、今は復た忍月の訃を傳ふ。床上沈思すれば四面落寞蕭條の感に堪へない。

(6) パクの不慮の急死

家のペットのパクが死んだ。或日の正午ごろ、隣家の老僕が來て『こちらのパクが手前のとこのリヤの狗舍で今死に掛つてますから鳥渡入らしつて下さい』と云つた。家人は倉皇飛んでツて見ると、リヤの狗舍の中に此朝急死したといふリヤの死體を枕にパクが微かな息を喘ぎ〱臨終に瀕してゐる。

隣家の夫人の咄だと、リヤは數日前から食慾が減じ、昨日からは全く一食をも取らず、狗舍の外へ一步も出ないで半睡狀態を持續して今曉終に殪れたのださうだ。パクは前夜から一緒に寢てゐたらしいが、死骸を枕にしてゐるので狗舍の外へ誘き出さうとして食餌を與へても振向いても見ず、元氣が全く失せて力なくグタリとしてゐるのは矢張り死ぬのでは無いかと思つてお知らせしましたといふ。

家人は傍へ行つてパタやパタやと呼ぶと怠儀さうに細い眼を開くが、眼蓋が直ぐ落ちてグタリと首を垂れる。狗舍の口から手を差入れて頭を撫で前脚を持つて引張り出さうとしても自分から出て來ようとする氣力が無い。『可哀相だから此儘にして、リヤと一緒に葬むつてやりませう』と隣家の夫人は云つ

た。が、家人はモウ一度最後の手當をしてやりたいと、ドウかして家へ連れて戻らうとしたが、パタは最うウツラ〳〵して起上る元氣が無かつた。

其中に老僕が魚肉を交ぜた飯粥を持つて來た。今まで何を與へても振向いても見なかつたさうだが、腥臭い香に食慾を誘られたと見えて、倦怠るさうに起上つてペロ〳〵と平げ、マダ欲しさうにタン〳〵と後ねだりをした。此鹽梅なら持直しさうだと、家人がパタや家へお歸りと呼ぶと、腹がくちくなつて勢ひづいたと見えてノソ〳〵狗舍を這出した。いつもほどの元氣は無いが、家人の踵に從いて歸つて來たので、直ぐ復た食餌を與へると旨さうに餘さず喰べて滿腹したらしく、自分の狗舍へ潛ずり込んで、丸くなつて寢て了つた。私は寢てゐて何も知らなかつたが、一と通りパクの世話を濟ましてから家人は枕頭へ來て一伍一什を話した。

數日前からパクは食事がムラになつて、時折泡を吹いてクル〳〵廻つてゐると兒供が話したさうだが恐らく其頃から病氣附いたのであらう。四時頃睡眠から覺めて、俄に發作的に痙攣的に苦み出し、低いカスレた聲で遠吠えのやうに啼いた。胃が惡いのかも知れぬからと重曹を飲ましたが、直ぐ吐いて了つてドロ〳〵泡立つた涎を出した。二十分ばかりして漸く落付いて寢て了つた。

夕刻近く來た見舞客が犬好きだつたので、パクの容態を話して何の病氣だらうと云ふと、『夫はディステンパーに違ひない、早くさへ醫者に掛れば直るが、手當が遲れるとやられる、人間の疱瘡麻疹と同じ犬の大厄だ』と云つた。直るものなら直してやりたいが、此近邊に獸醫があるか否かゞ不明でドウにも手當の仕しやうが無かつた。ツイ七八丁の郡役所の附近に犬猫病院があるのを知つたのは此晩遲くなつてからだ。

此晩眞夜中に低い悲しいシヤガレ聲が斷續し、狗舍を爪で引搔く音が頻りに聞えたので多分は最う息を引取つたのだらうと思つたが、翌る拂曉雨戸を繰ると狗舍の中からヨチ〳〵這出し、涎をタラ〳〵垂らしながら痙攣的に吃逆をしつゝクン〳〵とねだつた。早速食餌をやるとイツモと同じにペロ〳〵と平らげたので、此鹽梅ならマダ持直す希望があると思つた。

此朝長男は車へ乘せて犬猫病院へ連れて行つた。重體だから恢復するかドウかは保證出來ないが、左に右く入院しろといふので入院の手續きをして歸つた。ディステンパーでも恐水病でも無いが、モウ大分手後れらしいといふ醫者の咄だつたさうだ。人間の病院と同じやうに患畜の悲しさうな呻き聲が聞え、今朝恐水病で死んだといふ大きな犬の死體が一隅に横たはつて

フォルマリンの臭ひがプンプンしてゐたさうだ。

夕方病院から危篤の通知が來た。モウ駄目かも知れないと、遺骸引取の準備までして家人が倉皇飛んで行くと、果して今息を引取つた處だと云つた。午後一時の診斷書に由ると、步行蹣跚蹌踉として後方側方に屢々顚倒し、二十分間置きに間歇的痙攣を發作し、下顎亦痙攣し唾液流出し、呼吸促迫困難とあつた。恐水病では無いが最後には狂犬の症狀を呈して來たさうだ。

且病氣はディステンパーでも內臟疾患でも無くして毒物嚥下であるらしく、齒齦が盡く糜爛してゐるは毒が全身に廻つてゐる證據で、猫入らずのやうな急激性のものでなくて緩慢性の作用をなす劇毒藥の傷害であらうといふ診斷である。尤も的確の鑑定は死體を解剖してからで無いと下せないが、人間なら早速解剖臺に上せて死因を確かめて後、愈々劇毒藥と定つた處で、偖て自殺である乎、他殺である乎、他殺なら謀殺乎、故殺乎、偶然の過失殺傷乎、又秘密の湮滅乎、財產の横領乎、戀愛其他の遺趣遺恨乎、變死者の身邊の事情から調べて犯罪搜査をすべき大事件である。が、犬だから死因が疑はしくても警察の問題にならない、變死の原因や犯人が解らなくても探偵小說の材料にならない。

だが、死因が疾病て無くて劇毒藥であるといふは意外だつた。且猫入らずなら鼠を取る爲めに藥を塗抹した團子やビスケツトの不用になつて棄てたのを拾つて喰つて非業に斃れる犬や猫があるといふ噂を能く聞くが、醫者の鑑定通りに猫入らずで無くて酸の種類だとすると益々不思議だ。解剖して胃腸の殘留を調べないと何の酸だか判定する事は出來ないが、何の酸であつても道端に落ちてるものでは無い。マサカに犬が自殺するツモリで醫者か藥劑師の藥局に忍び込んで酸を持出す事もあるまい。不思議な事もあるもんだ。

パクはマダ一歲にならない。が、人間なら十四五だらう。赤んぼでは無いがマダ子犬である。飼主の贔屓眼から見ても餘りイヽ犬では無いが、丸々した子犬で誰にも直ぐ昵くから誰でも可愛がる。西隣の英國婦人は犬好きで、丁度パクと同じ年配の小犬を二匹飼つてゐたが、三匹お揃ひにパクにも羅紗のチヤン〳〵子を拵へて與れた。南隣の若い奧さんも無類の犬好きで、パクが折々イタヅラして靴や草履を啣へて來たり秘藏の愛猫の御飯を失敬したりしても少しも腹を立てないで手飼の犬のやうに可愛がつて與れた。お世辭にもイヽ犬とは褒められない、何代雜種だか解らない貧弱な小ツぽけな犬だが、人さへ見れば尻尾を揮つて足へ纏はりつくので誰にも可愛がられて、一度は竊まれて一と晩歸らなかつた事もあつた。

パクは誰の踵でも従いて行つた。兒供が學校へ行く時も、女中が買物に行く時も、パクは必ずお伴して行つた。隨つて一家のものが用達し或は散歩する方數丁はパクの遊歩區域で、日に何遍となく一家の誰かのお伴をして歩いた。隨つて何々種と名乘るほどの犬で無く、最底限にも高等種とは云はれない犬の中のプロであつたが、數丁離れた町でも兒供にパク、パクと呼ばれる事があるほど界隈に顏が賣れて、誰にも可愛がられてゐたから遺趣遺恨で一服盛られるやうな原因があらうとは想像されない。矢張劇毒藥で無くして不慮に突發した病氣で脆くも命を取られたのであらう。（同時に死んだ隣家のリヤは寄生蟲らしいといふが、兩家の二匹の犬が一緒に死ぬといふは不思議であつた。）

パクの遺骸は犬猫病院から直接犬猫寺へ送つて葬むつて貰つた。四五日して厚く讀經回向して葬むつたといふ埋葬料の請取書が來た。請取書には七々の忌日及び百ケ日には御參詣ありたしといふ注意が書いてあつた。最う二十年も前、猫を菩提所に送棺して役僧に讀經して貰つて葬むつた事があつたが、犬を埋葬したのは之が初めてゞあつた。

パクは犬の世界のプロの子で、自慢の出來る良種では無かつたが、マダ乳離れしない中から引取つて牛乳で育てたのだから、犬だけ情愛も深くて家中のペットであつた。私の家は兒供も犬も放任教育だから、兒供もワンパクだが犬もワンパクだ。パクも始終泥足で疊の上を飛び歩き、脱ぎ棄ての一帳羅の上にイヽ氣持さうに寢てゐたり、座敷の中に垂れ流したり、熟睡してゐる老人の顏へ飛び付いて悲鳴を揚げさせたりして、『ホラパクが……』と家中を追廻す事が日に何度もあつた。が、世話が燒ければ燒けるほど情愛が深くなるは犬も人間も變りは無い。パクは引取つてからマダ一年に充たないが、全家の寵兒としてパクを中心に笑ひさゞめく事もあつたので、忽然として天國へ旅立つた夕べは全家が何となく濕ツぽく淋しかつた。殊に免かるべからざる自然の命數であらうとは信ずるものゝ、多少なりとも首を捻らせる疑問の最期であるを思ふと益々運命の味氣無さを不便に思はざるを得ない。

犬や猫は道樂に飼うものでは無いと、犬好き猫好きの二葉亭は能く云つたが、私は特に動物好きといふでは無いが生類では相當に面倒も見た、苦勞もした。生類を飼ふのは餘計な煩勞で心配を求めるやうなものである經驗は十分に滿喫した。玉子を產ませる爲めの家禽や相場を目的とする兎と違つて、犬や猫は税金を取られる事は有つても金の蔓にはならない。近所隣りから尻を持込まれる事はあつても、お宅のワン／＼にお猫さんに

と音物を持つて來るお客は無い。が、人間の奥深く潜在するヒユーマニチーは犬や猫で誘き出される事が往々あるので、兒供の小さなヒユーマニチーは犬や猫のインチマシーで育まれる。俗に犬は『坊ちやんやお孃ちやんはお幾たり』と訊くが猫は『ガキは何人有る』と訊くと云つて兎角に猫を佞奸視し獰獸扱ひして家庭から排斥される氣味があるが、猫の問題は姑らく措いて、少くも犬は兒供の善良な遊び友達である。パクは誰にも眤いたが、就中兒供とは無二の仲善しで、遠くからでも兒供の姿を見、兒供の聲を聞くと、尻尾を掉り／＼忽ち飛んで來た。

私は病床に仰臥してパクの病狀の報告を聞くだけであつたが、入院前日からの頻繁に發作した痙攣的苦叫が耳朶に入る度に不便に堪へられないで、切めては苦悶を除く手當の方法は無いものかと思つた。私はパクの面倒を餘り見なかつたが、パクの最後の苦叫を聞く度に一生の中に恐らく二度とは出來ないと思ふほど夜の目も睡ないで苦勞して長い病氣を丹精してやつた二十何年前の家猫を徐ろに追懷した。

私の病中は多事であつた。床上に腹這ひになつて悔み狀を書く事數通に及んだ。親友を哭し友人の近親骨肉を哀悼したが、最後に我が家の小さな犬までも非業に過つて野邊送りした。私は幸ひに危機を脫したが、人生無常を痛切に味つて、今日幸ひに瓦全なるを得ても最うウカ／＼と安心してゐられないと沁々と感じた。お説教の文句ぢや無いが、何時風が吹いて來るかも解らないのを身に染みて痛感するからは然うベン／＼と怠けてはゐられない。近頃多年の大著述を完成して學界及び讀書界を驚倒した私の老友の一人は更に學界の處女林に斧を入れる大きな計畫を立てゝ、厖大なる新著を携へて私の病床を慰問がてら訪ねて曰く、『漸く半世の仕事を大成したが、最う一遍、最後の死に花を咲かすツモリで一と研究する』と、馬上顧眄の勇を示した。老來意氣の益々壯なるを私は衷心感奮して、『俺も負けずにやるぞ』と腹の中で力んだが、扨て私には何も出來ない。私は矢張餘生をヌラリクラリと漫話漫談に暮すが私の怠惰哲學を徹底する所以であらう。(十五・五・九)

長崎見聞記

正宗得三郎

卓袱料理のこと

昔は長崎に渡來した新鮮の文化に憧憬して文人墨客まで遠き長崎に遊學した事は今日吾々が歐洲に行く様なものであらう。然し今日長崎に行くのはその頽廢した事蹟に興味を懷いて行くのである。僕も長崎に或興味をもつてゐた。然し長崎の現在はその外觀ひどく壞されて一見懷いてゐたイリュジョンを破すが、よく調べて見聞すれば今でも昔を懷古する手蔓位はある。殊に同市には古賀十二郎氏の如き篤學の人がゐて、吾々に昔の長崎をありありと見せてくれる。僕は古賀氏の談話、著書によつて得た事は少なくない。

×

長崎は冬も春の様に暖かで、人情は重く食物は東西の美味をつくしてゐると兼ね／＼聞かされてゐた。僕の義母は長崎であり、妻は江戸で生れたが長崎で育つた。僕の處に嫁してから十數年になる。一度は母をつれて長崎に里歸りせねばならぬと言つてゐた。尤も里と謂つても家はないので、お墓がある許りだ。墓參が動機になつて、積年のおもひを達した理である。

昔はこれからお江戸に三百里、江戸と長崎は遠く隔つてゐて縹渺としてゐた感じであつた。今は汽車で直行すれば一晝夜半で長崎に達せられるが隨分へこたれる。

僕の長崎に滯留してゐた寺は、眞宗寺、光永寺で、中島川に臨んだ桶屋町にある。義母の家はその壇家になつてゐる。この光永寺はサン・アウグスチン寺のあつた跡で、長崎五僧の一人慶了和尚の開山である。この人はもと武人で切支丹撲滅に與つて功蹟があり、又撲滅により發心して僧となり、この寺を興したのである。この寺の廊下には福澤諭吉氏の勉強してゐた處が未だに保存されてゐる。福澤さんが青年時代、この寺の姻戚

平氏に從つて長崎に來て、蘭學を研究してゐたのだ。

寺に着いた夜、この廊下の傍の廣間で卓袱（シツポク）で長崎支那料理の饗應に預つた。僕は卓袱なるものが單んに卓の名稱である事を始めて知つた。長崎での第一印象を、寺と料理とに味つた理だ。

曾つて僕は上海に寄港した時、純上海料理を饗應せられた事がある。その卓は頗る穢いのに似合ず、卓子が紅色の布を持つて來て、丸い卓に掛けた。これは變つた食卓のやり方だと思つてゐると、その上に五色の陶器、銀や錫で出來た食器を備つた。支那は食卓まで色彩が振つてゐると思つたが、長崎の卓袱が支那傳來のもので、そして前述料理、又京都料理を加味せられてゐる。

この卓袱と云ふものは食卓であつて、袱は食卓に掛けられた布帛の事である。布帛の垂れた食卓と謂ふ事から卓袱なる文字が出來たのであるが、現在長崎で朱塗の圓い卓で四脚附いてゐるものを卓袱と云つてゐる。この朱塗と紅の布と自然關係がある樣に感ずるが、一體支那では緣起のよい時には赤、朱の色彩を用ひてゐる。長崎では次第に朱塗でなくつても丸い食卓を卓袱と云つてゐる。卓袱はまた八僊卓（パツエンチヨ）、卓子（チヨツ）とも稱せられた。そしてこの卓袱料理の流行した事は、三宅橘園が「好喫甜豚山羊饗讌を用卓子」。と言つてゐる。

こんな風に、長崎に來た文人墨客の菅茶山、頼山陽、廣瀨淡窓、梁川星巖、田能村竹田等が外來文化を見聞しながら、卓袱料理に舌鼓をうつてゐた。そして唐人屋敷の卓袱料理と長崎人によつて調味せられたものとは當時既に和臭があると云つてゐる。彼等の詩畫と同じく傳來を唐土に受けつゝ、和臭なる獨立した日本的のものになつたのだ。そして唐土は多く江南浙江か福建、廣東方面の料理に據つてゐると古賀氏は書いてゐる。

僕の家では時々長崎料理をつくつてゐるので長崎料理にさして驚かなかつた。それよりも長崎人が飲食に興味を多くもつてゐる事は、昔の長崎文化が飲食物にまで殘つてゐる事を語つてゐる。長崎人の食道樂は殆んど普通になつて、他郷に遊學する學生が下宿屋の粗食に堪へず休暇になると長崎に飛んで歸省すると聞かされる。

×

食物に就いて、古來支那人が述べてゐる文に、「有生の氣體は必ず飲食を資りて以て之が養と爲す。故に昔人酸を以て骨を養ひ、鹹を以て脈を養ひ、甘を以て肉を養ひ、辛を以て筋を養ひ、苦を以て氣を養ふ。然れども五味は生を養ふ所以にして、亦生を害する所以の者は其平を得さるを以てのみ。是に於いて

或は餘り或は足らざれば、則ち必ず以て其氣體を殘ふ者あり。此れ味の和を貴ぶ所以なり。」とある。外國でも支那でも、亦日本でもこの料理はこの五味を味ふ事は同じ事であらふが、その中で、魚肉に多くよつたものと、獸肉によつたもの、野菜によつたものがある。長崎卓袱料理は源を支那に發してゐる丈に、油つこいものが多い。

×

長崎は暖かい筈なのだが、どうした事か、年末から正月にかけて寒かつた。僕達の着いた時は、雪が珍らしく連日降り續いた。十數年振りの寒さだと云ふ事だ。東京から來て長崎で雪見に行くのも面白からふと、長崎圖書館の増田君、寺の正木君や、畫家の横手君を誘つて夕景の長崎を見に出懸けた。寺の前を中島川が流れてゐる。それに架つてゐる石橋が支那風の佳い反りをもつてゐる。狹い石敷道は清潔である。諏訪、町から長崎銀座と稱ふ濱ノ町を通つた。その町の中央に鼈甲屋がある。もとはこゝが私の家であつたと妻が話した。長崎の舊家は大抵沒落してゐるのが多いとの事だ。長崎は昔は天領であり、唐通事などの關係から金は湧いてゐた。長崎人は珍味を味ひ、丸山に遊ぶ事しか知らないでよい時代があつた。然し時代の變遷と共にそんな時代に發れた吞氣さではいくら長崎でもたちゆかなくなつたのだ。

吾々は丸山から大德寺まで登つた。そこからは長崎の港なり市街が一目に見える。長崎の港を一名鶴ノ港と稱へてゐるが、今はその鶴の羽の一方が埋め立てられて頗る風致を損つてゐる。

寒むいと云つても春の雪の感じで、紫藍色に暮るゝ雪景の中に燈が黄色く浮んでゐる。唐寺、天主閣、佛寺がその眺めの中に浮んでゐる感じは長崎の昔を回顧する事が出來る。一時外國文化がこの狹い長崎に押し寄せてゐた事を談つてゐる。向ひの山が稻佐山でその下は秋の浦、(俗稱飽の浦)には三菱造船所の大建築物があつて、この可愛い歷史に富んだ鶴ノ港を壓倒してゐるかの感がある。そしてその響音は雪に暮るる、山々、町々にある總ての寺の鐘の音を消す。然しこの會社がある爲に長崎の現在は大半維持せられてゐるとの事だ

この眺望を充分味つてから、新地に下つた。(もと唐人屋敷跡)この支那町も今は荒れてゐて、支那情調は殆んどない。そして吾々は茶を飲みにカツフエ店に這入つた。増田君から天草四郎の新發見談を訊いたのも長崎土産の一つである。その噺によると、四郎は豪傑でもなく伴天連の福音者でもなく、支那貿易商店の番頭であつたが、その顏が、聖像のマリヤの顏に生き

うつしであつたので天草の亂の時四郎をマリヤの如く仕立てゝ中心に祭りこんだと謂ふのである。

×

義母や妻は十數年振りに長崎に歸つた事で、每日のやうに親戚なり知人に招かれて饗應になつた。

卓袱料理が便利である事は、昔から橘南谿が長崎卓袱を記して、「一つの器に飲食をもりて、主客數人みづから箸をつけて遠慮なく各盡にひかへて心任せにみな食ふこと、風流の宴會にて面白い事なり。寺院にて黃檗宗などの寺にて不茶とて精進ながら卓子料理をすることなり、是日本にてめづらしきことに思ひて至て心易き朋友中ならでは行ひがたきことなるに、唐土にては世間常のことなりといふ。」卓に友人隔意なく、君、僕と言ふ當時の高標語で新輸入文化を論じつゝ卓袱料理を味つてゐたのだ。

長崎料理の品目なり說明を書けば際限がないが、始めは、支那料理の和譯である。例へば、長崎古今集覽名勝圖にある、唐山卓子菜單に、大菜十色、それを本菜十種として一つ一つ和譯してゐる。亦會干盆十六色を小菜十六種として邦名にあてゝゐる。復點心八色を口取八種として同じく說明してゐる。古賀氏がその種類と說明を加へてゐる品目も大變のものである。

義母に訊くと、昔どの程度まで支那料理を長崎人が味ひ、又それが長崎料理となつたものかよく分らない。たゞ長崎卓袱料理には支那料理式卓袱と、日本料理式卓袱とある理で、吉田重房の「長崎に旅寢して」の記行文中にある長崎卓袱料理の獻立を記してゐるのを見ると、それは殆んど今日普通にある日本料理と大した差はない。今一つ阿蘭陀正月獻立料理品目を見ると、長崎料理が可なり阿蘭陀料理に影響されてゐる事が分る。

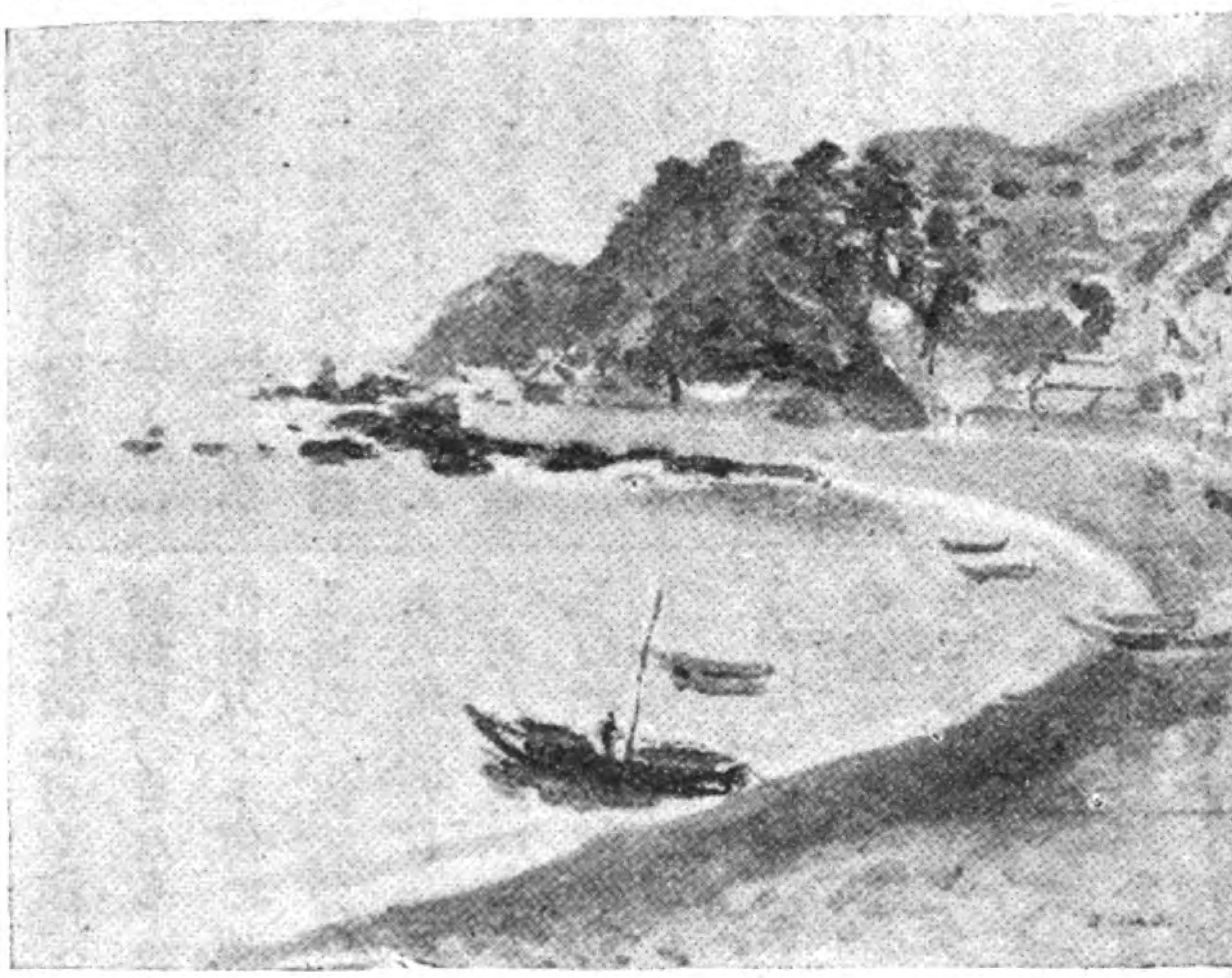
今日でも長崎料理中に南蠻漬と云ふのがある。これは南蠻（西班牙、葡萄牙のこと）傳來のものを多少日本化したものであらう。この南蠻漬は僕の家でも時々造る。魚を油で揚げて酸に漬けた樣なものである。これに用ゆる魚は長崎では野母海岸で多くとれる。紅サシ、カナガシラの小さいものをよく洗つて薄鹽をしてから一寸乾す。そして油で揚げてから酸と酒と醬油と砂糖を加味したものを煮たて、その中に漬けたものである。東京で造ると、紅サシ、カナガシラを得る事が困難の爲めコハダの小さいのを用ひてつくるが、この南蠻漬は魚の骨まで軟らかくなつてゐて、頭から骨まで食べられる。これなど一つの變つた料理で五味を又共有してゐる。

長崎で五月の節句に、唐あくちまきと言ふものを造る。これは支那の製法に據つたものでこれを製造するには第一に唐灰汁（トウアク）

が肝要だ。この灰汁は、麥藁のあくと、灰あくとでつくるのだ。味は糯をこの唐あくでくさらした様なものだ。初め食ふた時はへんな香がするが段々その味の深く、支那の香をこの一片のちまきに感ずる事が出來る。

胡麻豆腐は長崎特有のものであるが、甘すぎて菓子の様だ。豆腐も元來は支那から渡つたものであらうが、支那豆腐より日本の豆腐が一番精撰されてゐる。最初豆腐を日本で造つたのは、長崎古知郡次郎右衛門といふ者の先祖始めて豆腐を傳へこしらへたといふと竹田はしるしてゐる。

長崎の市中各所の店頭に紅と青竹色で彩色された桃形の饅頭が列んでゐる。これも支那の香ひが見た目にはするが、味ふと日本の甘いあんこの饅頭である。亦有名の長崎カステラは名實伴つたもので、この製法の傳來は西班牙からであらふ。このカステラの名稱は葡萄牙語稱呼 Castella である。長崎カステラはどこかねつとりとした味がある。今では福砂屋、松翁軒が



野母　正宗得三郎

有名で且つ味がよい。東京に來てゐる長崎カステラなるものは長崎のどこの製法か知らぬが全く品が劣つてゐる。昔は根本製が第一で、阿蘭陀傳來、不老仙菓長崎根本製などと、南蠻、傳來菓子を唐風に廣告したものだ相だ。

なぜ長崎のカステラの味がよいかと云ふに、水が適してゐると云ふ人もあれば、島原の地玉子がよい爲めと云ふ人もある。普通のカステラ以外に五三カステラと云ふのがある。多く福砂屋に製してゐる。やゝ舌ざわりがさらざらしてゐるのが特質だ。

唐人餅。雲片糕と云ふものを長崎では間々出される事がある。これは新地で支那人が造つて賣つてゐる菓子である。僕も新地に出懸けて買つてゐたが、この雲片糕は名からして洒落たものだ。繪入雪片糕もあるが多く四角な純白の菓子で、重なつた純白のものを雲の片の如くはいで、一寸火に炙り、そしてさますと、カリカリになる。それを齒先きで僅かづつかじつてゐると、らくがん粉と砂糖の味がからまつ

て、流れ込んでくる。

鐵翁のこと

長崎は要塞地帶になつてゐて寫生するには一々許可證を取らねばならぬ。その不便の爲でもあり又靜かな勝景地で屡く滯在して寫生したい希望もあつたので野母（ノモ）に行つた。野母は長州から海上八里、長崎灣口の突先に當る。こゝには小蒸汽が毎日通つてゐる。港内の風光は乘り出て見ると全くその美くしいのに驚く。こんな天惠の地を要塞地帶などに封じてゐる事は惜い事である。屈曲したる半島が幾重にもつながつてゐる眺めは、吉村迂齋瓊江舟行の詩に（瓊江は瓊浦（タマノウラ）長崎灣のこと）

三十六灣灣接灣、　扶桑西畫白雲間、
青天萬里非無國、　一髮晴分呉越山、

と詠じてゐるが、沖は唐國海原つづきと昔の人は悵惘してゐたのであらう。

沖に面して高島、端島の炭島が風波の中に點在してゐる。野母はその左側で外洋に面してゐる丈に灣内と異つて波が荒い。僻であり且つ南畫師の鐵翁はこの寂しい漁村に生れたのである。

僕の寄宿した内野氏の家は偶然にも鐵翁の緣つゞきになつてゐる。そして内野氏の親戚に現に鐵翁を知つてゐる老人がゐる。

野母は一般舊暦であるので、元旦に内野氏に携へれてその老人を訪ふ可く海岸に出るとその砂濱には芝居小屋が出來て、長崎から、さゑもん芝居が來て、今しがた飛驒の山中で宮本武藏が兩刀で卜傳に切り込んでゐると、卜傳が鍋蓋であしらつてゐる處が、帆天井の間からちよい〳〵見える。その海岸つゞきにある親戚の日高氏に寄つた。そこの老人が鐵翁と姻戚になる。

老人は體の大きい未だ丈夫相の人であるが、耳が少し遠い。その老人に鐵翁の事を訊いたが、僅かしか記憶してゐない。鐵翁は野母で生れたが、今はその生家は遺つてゐない。今寺がある邊にその家はあつた。十五歳の時に野母を出て、長崎で大工の弟子となつて働いてゐた。そのうちに多少學問を獨學で勉强してゐたのだらう。野母から行つた里人に、自分は勉强して名僧になる、一生野母には歸らないと云つてゐた。僕の想像では家庭に何か理があつたのではないかと考へられる。野母の里には殆んど歸省しなかつた相だ。

其後春德寺の小坊主になつてゐた。そして春德寺住持翁和尚に師事してゐたが、同翁が示寂したので、鐵翁は一時看坊となつてゐた。文政三庚辰二十歳で住持になつたが、三十五年で既

に雲龍寺に隠退し、維新の時その雲龍寺を他に譲つて更に春徳寺境内に移居して畫を描いてゐた。老人の最後に鐵翁を訪ふた時は今の春徳寺の下の家であつた。その時扇面に竹を描いてくれたのが同家に額になつてある。それには八十二歳の記入だ。外に半切れなど四五點あつたが人にだまされて取られたと言つてゐた。

僕は鐵翁は就いてそれほど興味はなかつたのだが、長崎で知り合ひになつた林源吉君から鐵翁の事を聞いたり又野母でこの老人に逢つた事から、野母から長崎に歸つて多少調べ度い氣が出たが、既に歸京の日が迫つてゐたので何にも出來なかつた。

×

華嶽山春徳寺には鐵翁を訪ふ可く、昔は文人、墨客がよく來たものである。

春徳寺は唐渡山麓、櫻馬場町にある。前方に飯盛山、娥眉山、風頭山に面し、又一方に遠く長崎港の風波を眺め市街を鳥瞰してゐる。住昔、長崎甚左衛門の城廓の跡で、伴天連時代にはトードス・ロス・サントス寺と稱する吉利支丹寺が建てられた。慶長十九年冬徳川の命によつて、鍋島信濃守のために破却された。その後庚午年泰宗涛安僧が岩原郷に大梅山春徳寺と云ふ寺院を開創した。この寺が狹隘の爲め十七年庚辰に泰室は今の處に移轉さした。それが春徳寺の出來た始めである。



鐵翁肖像

僕は三度この春徳寺を訪ふたが、寺の入口に、どこの禪寺にもよくある。不許葷酒入山門と云ふ碑がある。そこから登り阪になつて、門の前に大きな楠の木がはびこつてゐる。

本堂はひくい建物で、その前に蘇鐵が左右に植つてゐるのがこの寺の特有である。そして鐘樓の傍らに芭蕉翁塔の碑、芭蕉、紗鹿、宇鹿の發句塚、去來宇鹿の追悼碑がある。去來は長崎で尊敬されて、この春徳寺で享和元年辛酉九月に去來の百年忌がある。芭蕉とこの地には關係はない相だが、去來との關係からであらふ。芭蕉の時雨塚がある。その句に

山裏に迷ひ子かへせほととぎす　宇鹿

名月や西へひかへし行くからす　紗鹿

宿かして名をなのらする時雨かな　翁

本堂の左側を這入ると、そこは今は荒れてゐるが、鐵翁が寫生したかと思はれる大石なり竹林、菩提樹がある。その中に鐵翁碑が建つてゐる。

この碑文は實事と多少間違つてゐるのと空文を弄して眞相は餘り傳へてない感じがするが、寫して參考にする。

鐵翁禪師塔銘

以一技丹青擅名當世雖寸絹尺素苟胸有寸墨者莫不尸祝而珍襲者世其與有幾人若鐵翁禪師是其人耶禪師名祖門號鐵翁日高氏肥前國長崎人住春德寺爲人狷介有志操容貌魁偉鬚眉皓白鬖々蔽胸幼時學畫於吳門江稼圃悉獲其傳善寫山水花卉尤工畫蘭先是吾邦學漢畫者率斟酌畫論以摹倣之耳其親倣西人能受衣鉢者以禪師爲鼻首矣禪師初喜鐵門鐵舟之畫蘭因號曰鐵翁禪師之於蘭畫想宵夢莫日不講求會見某家畜徐蘭禪師愛玩弗措眠食而廢遂至得疾寤夢中冒其濃淡若干年見惲道生圖畫亦有法蓋其所造詣與古人暗合也一異人采蘭一莖與之覺其向背正側法後二十年清舶齋有山堂畫譜其在大阪有梅谷者試問其畫論禪師不答强而問之乃從容答之曰畫論所載人皆知之無已則論畫論未載者可乎梅谷逡巡而去其在京師當時以漢畫樹立一家者不暇口數而特以竹洞山人爲魁楚或謂竹洞曰鐵翁能可否先生之畫竹洞哂曰何物畫師敢誹訕吾畫既而展對其畫圖熟視久之曰彼誹吾畫有以也吾無此腕手殆不可及於是都人嘖嘖推爲活畫圖禪師作畫有少不副其意屢更絹素至意滿心會然後止平素不輕應人索苟非其人雖報以百金弗顧也奉行某氏遣屬吏索畫禪師不懌曰吾非衣食於丹青者也公若欲索畫乎何不自來請之又有一士人索畫久而不成乃自來促之意色甚傲禪師一喝曰吾豈爲汝輩所驅役者竟拋其絹素還之士人大怒按刀而起禪師神色自若曰可斬即斬之吾腕可斷吾畫不可獲也然於其會心人咄嗟揮筆欣然應之晩移居雲龍寺杜門謝客而其技益進蓋有悟入禪機者然也禪師以明治四年辛未十二月十五日病歿春秋八十二葬春德寺之歿邸今季其法弟瑞公具狀來請銘其墓乃係以銘曰

藝之精者、弗能而能、一技丹青、千絹千綾、畫蘭妙手、氣格稜嶒、苟非厥人、峻拒弗應、已獲其壽、不騫不崩、表斯道德、傳彼法燈、

明治二十一年戊子六月

平安　菊池純撰文

光緒十有四年戊子十月

奏派出使日本國隨員補用直隸州知州仁和許之琪書幷篆額

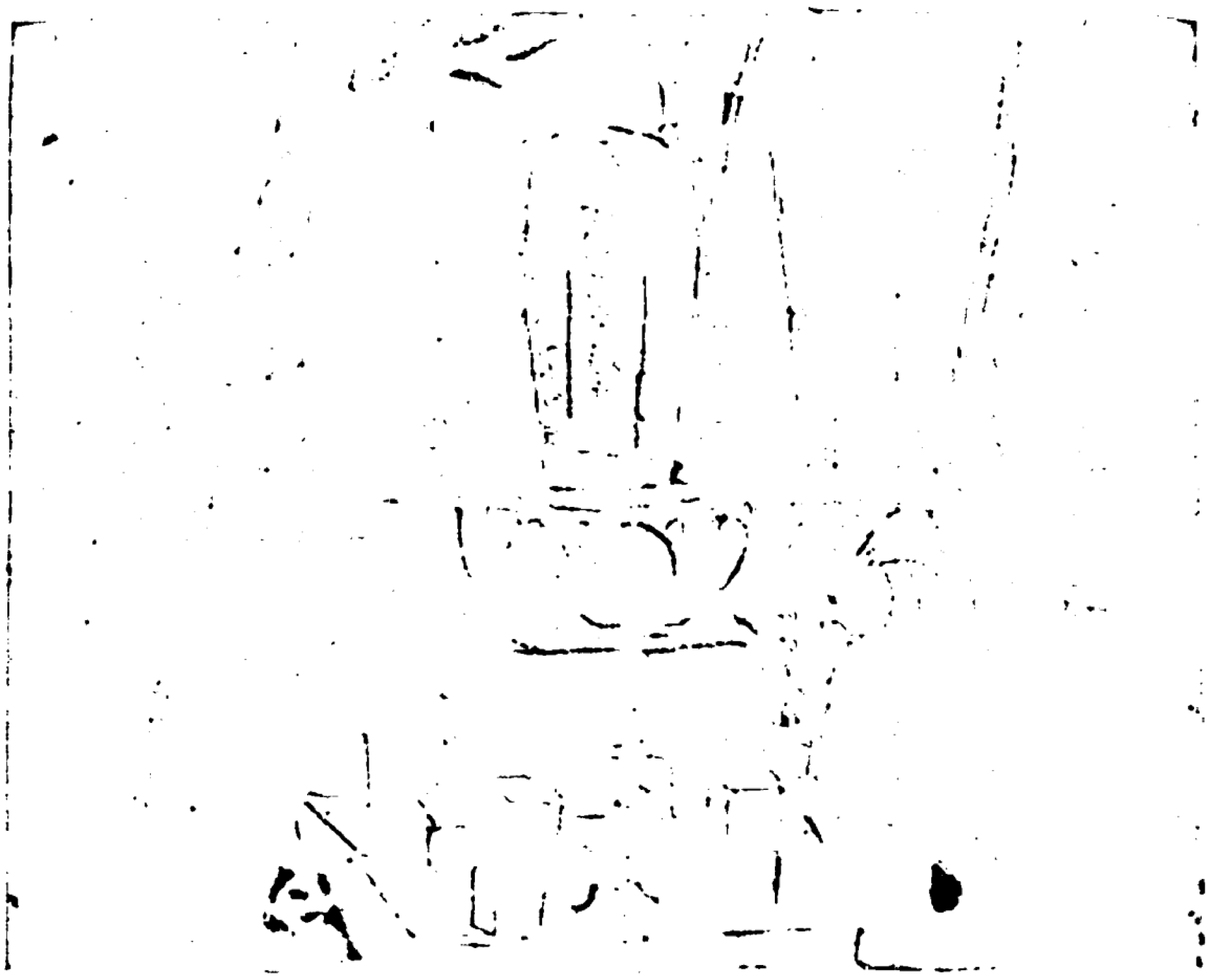
そこから本堂の裏手の邱に行くと、竹邱中に石段がある。そこが春徳寺歴代住職の墓所である。茂つた竹邱の中に既に椿などが咲いて、碧い實の點々とついてゐる龍の鬚や、赤い實の藪柑子が閑寂の中に彩つてゐる。鐵翁の墓には「前住當山十四世鐵翁門和尚禪師」とある。

僕はこんな勝景の地に住し、外來文化を味ひつゝ白雲の間に閑居して畫なぞ描いてゐた事はさぞ幸であつたらうと想つた。

×

鐵翁に就いては、近年書簡文畫日記帳風のものが發見せられて多少議論がある。一つは禪師は至つて無慾恬淡な人であつて、一向金銀を貪らずと云つてゐるが、事實は金を留めてゐたと云ふ事と、女があつたと謂ふ事である。然し僕はこんな事でその人の人格は左右出來ないと想ふ。

崎陽三大畫家と稱えられる木下逸雲、三浦梧門、釋鐵翁の内で、矢張鐵翁の作品が一番風韻がある。禪味が多少宿つてゐるのであらう。人としては逸雲が面白い様である。逸雲はさゝで、鐵翁の處に金を借りに行つてゐた、その書簡が出たのと、逸雲の何かに當る女が鐵翁の處にゐたらしい。吉村君の處に鐵翁の日記帳風の古今書畫縮圖帳がある。この畫帳は鐵翁を研究するよき參考物の一つである。これを見ると鐵翁の研究の程度がほゞ察せられる。それには大した研究はやつてゐない。支那畫の縮圖と題詩、又寫生もあるがその寫生と云つても僅か小さく蘭とか花卉の記臆程度の寫生である。又吉村君の談る處によると、處處に異つた字體の字がある。それは逸雲の字で、逸雲が鐵翁に草書のくずし方を書いて見せたのだ。一體崎陽三大家中、梧門が一番學問があり次ぎに逸雲、鐵翁と謂た順序である。鐵翁は書がまずくつて、畫の出來ない前に書を書いてゐたとの話しや、書を書くに右側から横になつて書いてゐたとも聞いた。日記帳に書いてゐる處を見ると、兎ても僕の感心して見た富岡鐵齋翁の日記の樣なあんな、盛んな又深い研究の仕方でな



鐵翁之墓　正宗得三郎

い。唐詩中に畫賛になる様な詩の寫しや、點景人物を豆の様に模した位のものである。

鐵翁畫談中に我久しく釋尊出山圖を畫きて後世に遺さんと欲すれども、其機未だ至らずして、曾て之を畫くこと能はず。曾て北宗古人の畫を見るに及びて、一悟する所あり、今將に之を寫さんとす。（中略）主として見聖成道の精神を寫し出すべき者なるが故に、尤も接心寂靜ならんことを要す。故に此の畫成る間は、假令門生と雖も、畫室に入ることを禁ず。

この釋尊出山之圖も見たが、與絹の小幅で品よく出來てゐる。北宗古人とあるは探幽の畫で、その幅は近頃寺から寶物に出たが、鐵翁の圖と構圖が殆ど同じものであつた、然しその探幽の釋尊出山圖は贋物であつた相だ。鐵翁の古畫鑑定もほゞ察せられる。室を閉ぢて、その贋物にヒントを得て精神をこらして寫すと云つてゐる點も滑稽にみれば莫迦らしいが、鐵翁がそれに精神を集注出來たなら又止むを得まい。そしてその作品が相當調つてゐるのでそんなに可笑しくも感じない。然し總てを仙人扱にすると可笑しくなる。鐵翁も常人と異らない人とみればよいのだ。竹田莊師友畫錄に、鐵翁に就いては、性喜レ畫。無嗜好。拂拭几榻。蕭然靜座。與ニ筆硯一爲レ伍。亦論ニ晰畫理一。殆將レ忘レ歸也。と云ふてゐるが、鐵翁は畫が非常に好きで三十五歲で隱退して不絶畫を描いてゐたのであらう。鐵翁が病んで永らく臥してゐたがその蒲團の裏がすつかり切れてゐた。鐵翁は寢ながら指で夜具の裏に蘭を描いてゐた。鐵翁の蘭花圖は寫生は充分してゐないが風韻はある。鐵翁自身は菊が得意なのだが人は蘭を賞して菊の畫を認めないのを不滿に言つてゐた相だ。

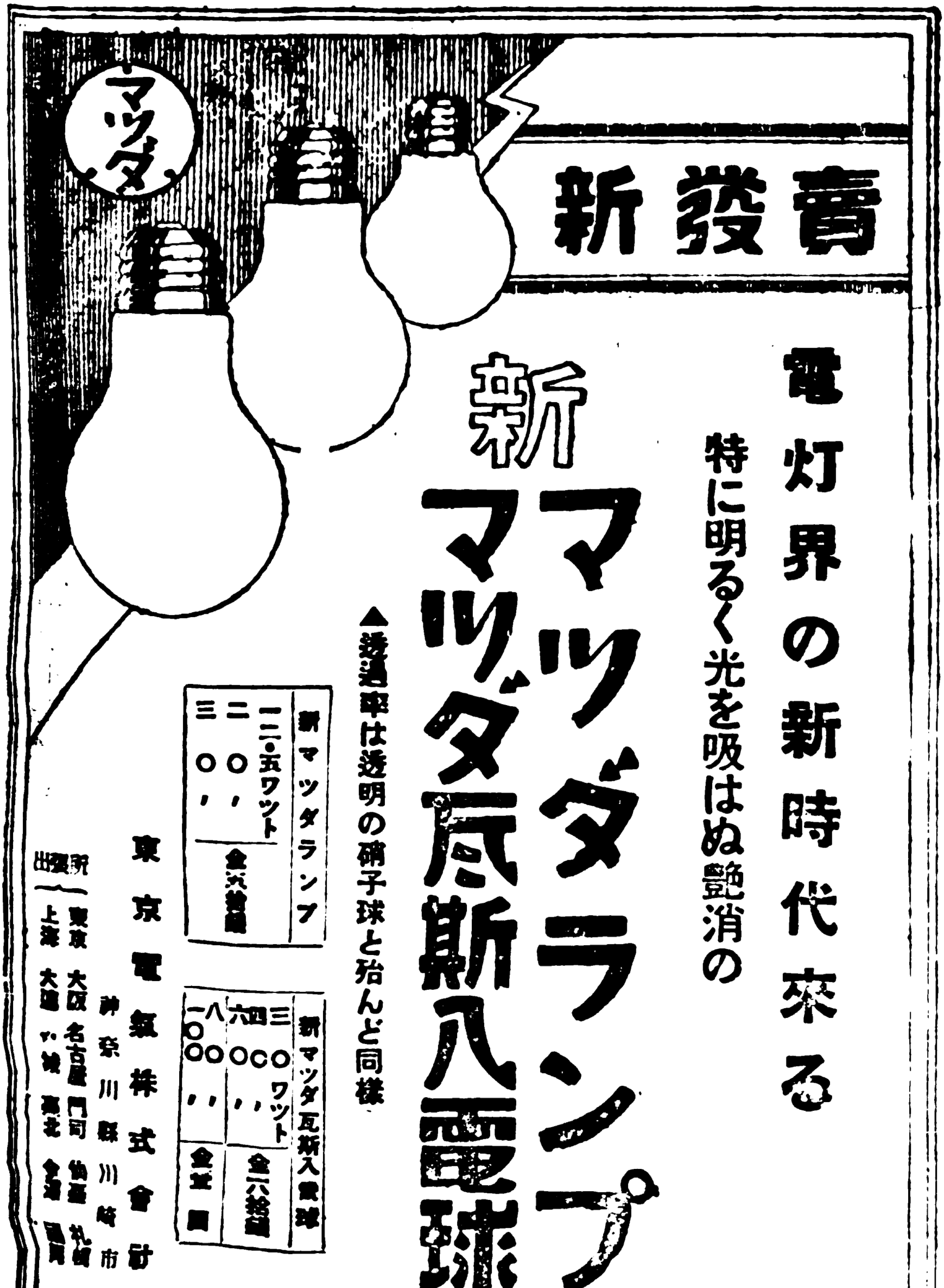
江稼圃を學んだのだが胡公壽をこのんでゐた相だ。鐵翁三十六歲の（この時代鐵翁と號せず、今忘却した時の半截の淡彩、淺絳山水幅を見たが仲々佳く出來てゐる。で鐵翁は若い時から相當腕は出來てゐた人だ。

逸雲の事はよく竹田の筆記中に出てゐる。逸雲は才氣のあつた人で、畫の外に詩理に通じ、又書に於ても南、北、土佐、四條、皆相當に加味してゐる。

竹田の屠赤瑣瑣錄中。水筆の事。シイボルトの春德寺内の貝多羅樹を見て、吉那樹（規那ならん）たる事を説明した事、支那の生機の事等記されてゐる。鐵齋翁の若年長崎に遊び鐵翁を訪ひ、偶然江馬天香に會し互に鐵翁を論じ二人とも餘りその人物に感心しなかつた相だ。そして逸雲と小曾根に遊んだ事がある。僕は同市の橋本辰二郎氏の處で逸雲と諏訪宮司青木永文と關東に下つた時の日記、又平戸記行を見たが、逸雲の寫生圖が

ある。その畫は多く土佐派によつてゐて仲々面白く出來てゐる。逸雲なぞの知人で、僕の義母なぞよく知つてゐた大倉雨村も長崎にゐた事があるが、この雨村は名の聞えてゐないわりに畫はよい。長崎に今一人牛雨と云ふのがある。この人の畫は梧門よりよい樣だ。

僕は長崎で洋畫輸入當時の模樣なり參考品を見たい希望や、南畫傳來の歷史、粉本なども多少調べ度いと思つてゐたが、古賀氏に訊いてもその方面丈はまだ充分研究出來てゐない樣だ。維新前に於ける純油繪具で描いた洋畫があるだらうと思ふのだが、それが見當らない。顏料も外人が持つて來てゐるだらうと想像するのだが、それが分らない。南畫に於ては南蘋や、伊孚九等が來てはゐるが、どれも感心しない。その當時はもてはやしてゐたのであらうが、相當出來のよい作を見ても感心しない。大雅堂でなくつても、逸雲でも鐵翁でも僕にはこの唐人よりその作品が面白く感ずる。この事はこの頃外國から下等の畫を輸入してゐるが、佛蘭西人の描いたのだと謂つて一も二もなく贊同した樣なものであらう。一つこの時代に寫實力を加へたことは、渡來の動物、植物、鳥類を大名が寫さした事だ。それは標本ではあるが、間違つてゐると困ると謂ふので實寫した。その實用的の方面から、寫實力は多少植へられた。又人體解剖圖が醫術に必要の關係からも、描かせたのが寫實の力となつたであらう。崋山なども長崎遊學でその觀察力が多少科學的になつたので、崋山の肖像なぞ更に眞味を加へたと想像される。鐵齋翁が古い人體解剖圖によつて裸體を描かれたのを知つてゐるが又長崎で相當の畫家の寫した解剖圖を見た。長崎輸入文化はこんな風に細部の畫家に迄影響された。あの當時長崎、長崎と往つた筈だ。


マツダ
賣發新
電灯界の新時代來る
特に明るく光を吸はぬ艶消の
新マツダランプ
マツダ瓦斯入電球
▲透過率は透明の硝子球と殆んど同様
新マツダランプ
一二・五ワット
二〇
三〇
新マツダ瓦斯入電球
三〇ワット
四〇
六〇
一〇〇
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市
出張所
東京 大阪 名古屋 門司 仙臺 札幌
上海 大連

梵雲庵淡島寒月翁を憶ふ

生方敏郎

一

大正十二年の大震火災によつて、過去の何もかもを失つて了つた向島は、更に淡島翁の死去によつてその魂をさへも無くして了つた。

花の春に、東京市民は先づ上野と共に向島の花を見たものだつた。飛鳥山は遠過ぎたし、南の端の御殿山は靜かに落付いて花を見るにはよかつたが、一般の市民は鐵道馬車によつて上野に遊び、それから更に雷門へ廻り、淺草寺を通り抜けて、待乳山から竹屋の渡を經て言問に上陸し、向島の花を見る。電車もなければ日比谷公園もない時代には、向島は二つか三つしかない東京市民の行樂の地として、閑靜な、感じのいゝ土地だつた。今あるやうな殺風景な工場もなければ、新聞の社會記事によく出て來る惡漢が、婦女を誘惑して賣り飛ばすところの玉ノ井の名も聞かず、うるさい自動車の影を土手の上に見るやうなことはなかつた。街にはなつてゐたけれど猶廣重の繪に見るやうな面影が多分に殘つてゐて、依田學海、幸田露伴、及び淡島翁の如き文人墨客の棲むにふさはしい土地だつた。桑滄の變を世の常とは言ひながら、今の向島の淺ましさ、僅か二十年か三十年の間に、よくも恁う變れば變るものである。最後まで踏みとどまつた文雅の魂幸田露伴氏は震災以降小石川表町に移り、淡島寒月翁は廢墟の上に建てられた梵雲庵のバラツクで死なれた。

二

私が始めて翁の謦咳に接したのは何時頃のことであつたか、今はつきりした記憶がない。日露戰役中のことであつたか、それともその翌年のことであつたか、はつきりしない。翁に會へば、何時も趣味の世界に沒了してしまふのであるから、軍國中

であつても平和時代であつても同じやうなもので、話は何時も趣味の世界に落ちてしまふ。それ故、餘分に何年頃だつたかはつきりしない。明治三十九年の紀元節の晩、翁を訪問した記事が私の日記に書きとめてある。併し、それが果して初めて行つた時の印象記であるやら、何うやらハツキリしない。その日には、早稻田の學友で「西洋美術史」の著者伊達俊光君、楠山正雄君、及び後に翁の長女經子さんのお婿さんになられた木内辰三郎君——この人は先年村松君が本誌に『名人喜八』といふ題で書いたことのある、あの喜八翁の孫である。——等と共に小名木川から平井あたりを探梅して、その歸途翁を訪れたのであつた。

十一日（前文略す）一杯きこし召した元氣にて淡島先生の仙窩を驚がさんとて、庭口より、先生おうちですかと、返事も待たでつかつかと入る。ヤアよくこそと相變らずのもてなし。楠山かしこまりて挨拶せんとすれば、いや此處は別世界、別世界、何も改まるには及びませぬ、サアサア膝をくづし給へ。

私は近頃思ひ立つて、百美人といふのを書いて居ります。自分で方方旅行した時と處を利用して集めたら、その位の事は出來やうかと思ひ、年にも恥ぢず、こんな業くれを始めましたとて、濱松の花美といい、新宮の美人など讀み聞かせたり。すべて西鶴ばりの書き振りなり。

なる程先生はよく旅行したものかな。足跡全國に至らざるなしと言ふとも過言ではあるまじ。我が故鄕沼田すら御存じなるにはいさゝか驚きたり。

今記憶にこそ殘られね、樣々の話にて十二時を過ぎ、電車も時間の後なり。如法の闇を牛込三界まで歸りたくもなし。いはんや袖ちぎらるゝまでとゞめらるゝものを、如何にしてか歸らるべき。その三疊敷の座敷に我等四人枕を並べて、壽司漬となりて臥たり。面白さ忘られず。

十二日。皆々同じ頃に眼覺むれば、寒月先生は早や庭にて焚火し、あたれあたれと仰せらる。元氣のよきこと若い者も遠く及ばず。歸り途にて、とある煙草屋に立ち寄り大和一つ求めんとして、見ればその店に木内の妹君居り、アレ皆さんですか、マアとあきるゝ樣子。實は昨夜お歸りなきにより、若しやこの家に泊りはせずやと思ひ、迎ひに來りしなりといふ。それはご心配かけまして濟みませんでした。皆打ち揃つて學校へ行くところなりと答ふ。

翁の家は、須崎町牛ノ御前の傍らにあり、又、木内君の家は小梅町で、ぢき近所だ。私達、猶この四人の外にも佘津八一、山邊英太郎、岡村千曳、その他早稻田大學文科の學生が木内君の家を足場として、何かといふと向島に集まり、遊び暮した果は何時もきまつて翁の三疊敷へ流れ込んだものだつた。即ち、それは燒ける前の梵雲庵で、障子の紙はお經で貼つてあり、床の間をはじめ座敷の一方には紡輪、泥人形、繪馬などが一杯に掛けてあつた。座敷は日記にある通り庭に向つた三疊敷の狹い室で、寺などにある變な入口によつて家族の居る所に交通する

やうになつてゐるが、こゝだけ別世界をなしてゐるやうな恰好だつた。爐がきつてあるので、私達はその周りに坐り、翁と話し込むのだ。庭の片隅は藪になつてゐて、中に石塔が建つてゐた。あれは誰の石塔ですと訊くと、さあ誰のですか、一寸面白いと思ふのであゝして置くのです。この藪を高く買つてくれといふ人があるのですが、賣るのも惜しいからかうして置くのです。とは翁の答だつた。

翁の話は、文學、哲學、宗教と、いつてもキリスト教は勿論、禪宗の話も出る。古美術、建築、繪畫、人類學、西洋の話、動植物、旅行談、どんな方面にでも替り代つて、綿々として盡きなかつた。

『伊達さん、あなたのお國はどちらですか』

『紀州新宮です。』

と答へれば、翁自筆の半紙の帳面を開いて、

『それ、こゝに新宮美人』

と言つて、翁の著作『百美人』を示し、更に

『生方さんはどちら。』

『わたしですか。上州の沼田です。』

と答へれば、

『あゝ沼田、あすこへも行つたことがありますよ。あの坂の直ぐ上の旅館は何と言ひましたかね。あすこへ泊つたことがありますよ。』

といふわけだから、こちらが何を言ひ出しても翁の話を引出す緒となることが出來る。

『先生はお幾つですね』

と無躾にも年を尋ねれば、

『あなた方の學校の坪内先生と同年ですよ。未の年です』

とやさしく答へられる。

翁はその頃五十歳に近く、面長で、そして下膨れな、目は小兒のやうに愛らしいが、髯は關羽のやうに伸びてゐた（子供さんのなかでも長女の經子さんが、此頃の翁に俤が尤も似通つてゐるやうに思はれる）

三

紀元節の晩に翁から聞いた話に、わたしは余程感興をそゝられたものと見え、歸宅してからその記憶にあるだけを筆記したのが、今なほ机の引出に殘つてある、まだ萬年筆など滅多に無かつた時代のことゝて改良半紙に筆で認めてある、謂はゞ翁から聞いた簡單なる自叙傳のやうなものだ。

福澤（諭吉）さんの影響を蒙つたことは明治初年の我々學生は非常

なものでした、髷を切つたのも僕等は隨分早かつた方だと思ふ。左樣、何でも明治四五年の頃でしたかな。牛肉を喰ふのを家の者にひどく嫌はれましてね、牛肉を喰べるなら神棚まで包つて來ないやうに、お前、便所の前でもお喰がりなどゝ母に言はれまして、仕方なしに本當に便所の前に七輪を持ち出して獨りでつゝいたものですよ、商人のくせに洋服を着て店へ椅子を置いたりしてね、眼の縁へ紅を塗る、髮を肩にかゝる迄に伸ばして錢湯へ行つては灰で洗ひ日向へ出て曝しては赤くした、仕度いと思つたのですが中々思ふやうに赤くなりませんでしたよ、阿母の前も構はず私は西洋で生れたなどと憚らず放言して、寐ても醒ても自由民權。レボリユーションかやりたい/\と思ひつめて、革命時代の佛國政事家の名などけ何のくらゐ有難かつたものだかハハハ、、、

親父も其中に我儘になつて終ひピアノを一臺買ひ込みましたよ、店にかざつて置いて父がマア彈くのだか、叩くのだかポン/\なぐりますとね、恐ろしい大きな音がするので珍らしがつて毎日大勢の人だかりです、併し素より彈き方を稽古したではなし、今のやうに樂譜が我國に來てはいないのだから、毎日彈いても同じやうな音でね、終いにはやかましい計りで些とも面白くないのも其筈ですから、父もとう/\厭氣が來て居た所へ吉原の女郎屋の主人でね、(此名が脫字してゐる)と云ふ人が、珍らしい西洋のピアノとやら已が買つて置いてもいゝ欲しいと云つて來たから直ぐに賣り渡してしまひましたがね、其人だつても勿論彈き方なぞを知り樣はないのだから家に飾つて置いたそうです、今ありますか、どうだか、多分ないでせう、たい分可笑しい話です。

其父女郎屋の亭主と云ふのが、なみ/\の奴でない、頗る面白い男でしてね、學問もあり、品もあり、通人仲間の一人で世間では先生々々と敬まはれ、一寸見て誰も惡商業をしてゐる者と思ふ者はなかつたのでせう、それが伊井蓉峯の親父だの私の親父だのと同じ連中で、隨分垢ぬけた面白い遊びをして居た、私共で金を貸した低當に(此處も脫字)と云ふ寺の庭を取りましたが、廣い庭でね、其處へ此通人連が集まつて色々の遊びをしたんです、其中にはこんな話がありますよ、庭の眞中へ据風呂を擔ぎ出し、此所には席を敷いてあり、湯から上つて來て一盃やると云ふ趣向で一寸何でもない事の樣ですが、是れはとんと温泉場へ往つた積りになると云ふので、ハハハハ變人は妙な事ばかりしたものです、兎に角妾ばかり百人も變へた男で、親父は變人の點に於て私より一だん上でしたよ、そう/\先達早稻田の人で松澤楳軒と云ふ方が遊びに來ましてね、父の傳記を書きたいから知つてる事を話してくれ、一體何時死んだのです、御逝去の日はと聞きましたから、私は其頃別に居ましたからよく覺えて居ません、一緒に居た者の方に聞いて下さい、左樣、何所でしたかね、よく存じませんよ、親父の事ですから書くなら晶屓ぶりに澤山賞めて下さい、つて云つてやりました、本が出來たら送つてくれると申しましたが、買ふと返禮が面倒だから買へるものなら買ふことにしませう、と云つて置きましたが、何うしましたかもう出來たかどうですかね。

先づこんな顆板で一から十まで西洋でなくつては氣は濟まなかつたものが、人の心と言ふものは妙なものです、轉と變つて古いものが無暗に好になつた、一九京傳の小說から黄表紙、こんにやく板など見當り次第買込んで、録も洒落本を讀にする始末、隨分の蒐集者と謂られた事もあります、學堂の圖書館——教育博物館へ二年通ひ詰

めて蕪石十種と云ふ本を敷き寫しに寫し取りましたよ、隨分と氣があつたもので、實は雛耕と誤られましてね、君は一日幾千金で賴まれてくれるなどと某君から聞かれた事さへありました、其頃僕と同じ樣に、毎日圖書館通ひをして居た靑年がありましたが、卽ち今日の露伴君でさ、永い年月机を並べた事ですから、つい度々口を開くやうになりまして、友達になつてしまひました、所が矢張り其所へ來て居た（脫字）堂の主人が或る日のことに私の知つてるものに石橋といふのがありますが、今度行つたら會つてくれ玉へと云ふから、あゝよし／＼と、其の石橋君、今の思案君と知己になりました、ところが其時思案君が僕から書物を出しましてね、實は僕等の仲間で倣ふ云ふものをやつてるのです、見てくれませんかつて出したのは回覽雜誌で、紅葉君、小波君などのものもありました、こんな所から紅葉君なども折々來られるやうになりましたが、彼の方は恐ろしい勝氣な方でして、門の外から、寒月君、在ますか、と聞いて、居ると云へば這入るし、留守だとあれば其儘行つて終ふ、夫れから西鶴物の話ですね、これがなか／＼不思議な話です、本屋が何でも僕の所へさへ持つてくれば屹度買ふのを知つて、古い物が出さへすれば持つて來た、價も隨分安かつた、こんにやく本など一冊一錢位で置いて行きましたが、毎日の樣に本屋さんがかつぎ込むので、それこそ實に汗牛充棟も啻ならぬ程集まりました、何しろ此數の中ですから而も珍書ばかりでしたから、文藝上からさう價値は無いにしろ、兎に角ずいぶん世間に見えないものも有りました、例へば西鶴物などは其頃殆んど無いと云つてい〻位でした、上野の圖書館にも確か一冊あつた限です、どんなものでも少いものは價が出るものだから、まして西鶴などは其後明治の人々が歐化熱の稍々醒め出した頃には直段がどん／＼騰貴しました、それでも何でも京大阪何所にだつて無かつたのです、で或る時〇〇君が飛び込んで來て、君一つ助けてくれないか此冬が凌げさうにもない、我輩大に困却して居るのだと云ふから、それは勿論助けるが、僕は金でやる事はいやだよ、何なら此本を寫して本屋へ持參し玉へ、それで先生、さうならそう仕やうと云ふので寫しましたが、それが七圓とかになつたさうです、先づ此位驗の有つた本で、僕の之を得意がることは一通りでない、人の顏さへ見れば例の珍書どもを並べたて〻見て吳れたまへとやる、只管珍らしいねと言はれたいので感心して貰ふのが何より嬉しかつた必竟その型で丁度露伴君の來た時も見たまへと言ふので、西鶴ものを押し付けたのです、すると翌日早速持ち返していやとんだ色ぽい本だ、こんなものを讀むと兩親に叱られるが落だ、と苦い顏をしましたよ、紅葉君には一代男を貸しましたが、これも間もなく返つて來ました、それで尾崎君の曰くさ、此本は全々文法が滅茶々々だ、僕等の讀む可き本でないと言ふのです、それなら夫れ迄と、大抵なら引込む所だが僕の珍書自慢の鼻は中々折れない、尙ほせめつけてむりやりに貸してやりましたが、その時の紅葉君の手紙は是れです、面白くて面白くて堪らないから御禮を申すと云ふので、さあこれから尾崎君が何の位西鶴を愛讀して、その小說に何の位感化を蒙つたかは君も多分御承知でせう。まあざつと西鶴のお話はこんなものです、僕が豪いのでも何でもない、豪いのは紅葉君、露伴君の腕ですが、それさへ初めは一寸西鶴の文學上の價値は解するに難かつた、まして僕の如きは無論之が眞價を認めたとは言へません、たゞ珍書が有難かつたと云ふだけです。

露伴君の處女作の「露團々」については面白い話がある、兎に角先

生は此作には三年間の苦心を要したのだから自分でも傑作の積りで居た、得意の作なれば世にも示したかつたのでせう、僕の所へ來て實は斯う云ふものが出來ましたが、何うでせうと云ふので、讀めば中中面白いから君一つ出版させて見ては何うだ、と氣を引くと先生直ぐに快諾してエ、私も其氣なのです、何卒依田さんに紹介していただいて一閲を乞うて出版したい、あゝ容易ことよし／＼と言つて手紙をかいてやりました、それから依田君の家を訪れて一閲を乞ふたさうです、ところが依田君は寒月さんも面白いと言うてる位だから面白く出來てるには違ひないでせう、直ぐに本屋へ御持ちになつて宜いでせう、と何氣なく言つて折角の得意の作を手にも取られなかつたので、露伴君が、僕は羊頭をかゝげて狗肉を賣る者ではありません」と言つたさうだ、「それでは」と云つて、依田君は、兎も角も拜見しませうから置いて行つて見て下さいと挨拶して露伴君を歸した、さて其後で僕に寄した手紙はこれです、小生の一見してよしと見たるものは矢張り善きものであつたなどとありました。

先づこんな樣に我々學生に對して心置なく全く友達のやうな態度で半日でも一日でも、遊び相手になつて下さるので、いゝ氣になつてと云ふ譯でもないが、わたし達は土曜や日曜、または休暇などになると大勢でそろつて行くときもあり、一人々々のときもあつたが、たび／＼御邪魔したものである。翁のその時分わたし達に語られたことを、わたしが筆記して置いた談片のうちに、次のやうなのもある。

僕の親父（椿岳）も生涯のん氣に遊び暮して終つたが僕も同樣です、斯うして向ふ島へ引込んで人形いぢりや古道具屋みたやうな事をして居りますが、人間は一體一生涯面白く暮すのが本當だらうと思ひますね、齷齪しても矢張り一生だが、それは了見が違つて居まいか、それは僕だけの考へですがね、上野邊りへあらゆる玩具（大人の）を備へつけて自由に何れでも好きなものを遊ばせる、さうして仲日可笑しく暮して居つたら何うでせう、その費用ですか、それは無論稼ぐ奴から税金を徴發するのです、

大人も子供のごとく遊び、大人のための玩具を備へ付けた大人のための遊び場所が欲しいと云ふ考へは、この翁の生涯に終始一貫して變らなかつた理想であつた。更にまた、此の翁には樂しむと同時に、研究すると云ふ智識慾が非常に旺であつて、これも若年より死に到るまで、少しも退かなかつた。翁が西洋の文物思想に心醉した時代（二十歳迄）より、西鶴其他の珍本をあさつた時代（二十二歳より二十四五歳）禪學（二十五歳）古美術研究（二十七歳）考古學（三十五歳前後）キリスト教熱（三十七歳頃）進化論唯物論（四十歳）社會主義（四十七歳）埴輪、泥人形、埃及趣味（五十五歳）それから晩年の玩具、これは日本から始めて西洋のものまでのコレクション、それから繪、繪に次いで最近の能謡曲の研究に至るまで、この樂しむと云ふ心と智識慾の旺盛とには變りが無かつた、そして夫れは前のものに飽きて止め次へと移る移り氣（翁は人に三分間趣味な

どと言つてたさうだが）も幾らかあつたにしても、根本はその移り變りに必然的の連鎖があつて、決して氣まぐれに、あれから是へと移り變るものでは無かつたことは、翁の書き遺して置かれた自傳的年表を見れば明白に分る。

大人の遊び場所を作りたいと云ふ理想を、翁は先づ自分の部屋のなかに實現してゐたことは、翁と交際ある人々の誰も知る所で、翁の好む所のコレクションを以て、その狹い部屋はいつも一ぱいになつて居た。そして自分がそれを集めて樂しむばかりでなく、人にもよくこれを頒けてやつた。

或る時にはわたしは埴人形を幾つも戴いた、それはいまも尙ほ、わたしの家の床の間を飾つて居るが、その一つは印度の水汲女で、他の一つは黄金佛のやうなものだ。また或る時には「飛んだり跳ねたり」のやうな玩具を戴いた。大正元年頃、わたし一人で訪問したときには

『生方さん、あなたにエムを一ツ上げませう』

と云はれて、淺草の觀音堂の裏で賣つてるとか云ふ、拇指ほどの大きさの金粉を掛けた張子のエムを戴いた。そのとき翁の長男の智藏さんが傍に居たので

『智藏さんにもエムをやろう』

と云つて、息子さんにも同じやうなのを分けて上げた。

斯う云ふことは普通の家庭では一寸見られないことなので、わたしは面白いと思つたと見えて今でも記憶して居るのだ。翁は御自分の子供を呼ばれる場合にも、決して名前を呼捨にはしなかつた。お嫁さんなどに對しても同樣だとのことを、お嫁さんから後で聞いた。お聟さんのことを、噂するにもいつも木內さん〳〵と呼んで居た。これは何でもないことのやうだが、翁が、他人の人格を尊重し、また自他共にその自由を愛する心から出發した現はれに外ならぬのだと云ふことは、翁を知る人々のうなづく所であらう。

四

或る日、わたしが翁を訪問したとき、わたしに何かの話の序から

『わたしは是までの生涯に、自分の力でお金を一文も儲けたことがありません。先祖のこしらへて置いて呉れた財産を一生食ひ潰して居る譯なのです。』

と語られた。うらやましい身分と一口に言つて了へば夫までだが、翁のはたゞブルジョアの子供と生れて何もせずに喰つて寢て一生を過すといふ無用の人間ではなく、實に普通人以上の勤勉家であつた。たゞ、慾に淡く、また生活も困らぬ所から、

また浮世の束縛を受けることが何より嫌いであつたところから、金になる事をしなかつたと云ふだけで、手でも頭でも働かす事は實に根氣よくやつて居た。人と會つても決して物知り顏に自分ばかり語るやうなことはなく、色々と問ひかけて、こちらの談話を聞き取ることを好まれた。そして自分の知らぬ事で興味を持つことであつたら、一々それを半紙の帳面に書き留めて置かれた。そして時にはその帳面を出して來て

『どうです、女郎屋の帳面といふものは斯う云ふ風に書くのですよ、面白いでせう』

などと示された。家のものとか、酒とか、そんな事が一種妙な形式で書いてあつたと思ふ。又は雜誌や新聞の切拔が張りつけてあつたり、寫眞板の繪など丹念に切拔いて、その帳面に貼り付けてある。肴屋だの車屋だのの符牒があるかと思へば、來客が話して行つた世間話も書き込まれてある。又は翁自作の連句なども有り、翁は得意でそれを私達に讀んで聞かせた。

わたし達の眼に映じた翁の態度は、全くたゞの友達といふ所であつて、謙遜でもなければ傲慢でもない、弱いのでもなければ、強いのでもない、そして親しみのある人であつた。江戸ッ子には相違ないが、江戸ッ子振る所は毫もなく、まして通人振るやうなことや、奇言奇行を見せつけるやうなことは毛頭なく、まつたく當り前の人であつた。有ゆる方面に於て洗練されたる魂の持主であつた。そしてそのなかにまた極く子供みたいな純な所があつた。と云つてなか〳〵或る場合には人も悪かつた。

斯う云ふ風だから、翁は誰にも好かれ（恐らく翁の方では嫌つてる奴にさへも好かれ）て、訪問客のリストは有ゆる方面に亘り、様々な階級、さま〴〵な職業の人々が含まれ、啻に東京ばかりでなく、地方にも隨分友人が多かつた。また外國人でも例のお札博士スタールさんだの、またはスペートなど云ふ人もあり、印度のカシミヤの貴族でシングと云ふ人なども懇意にされて居た。そしてシングさんに倣ひタルバンを頭に卷き、印度風に裝ひ、印度料理を印度風に手摑みにして喰べなどし、シングさんからスッカリ印度人だとお賞めにあづかつたこともあるさうである。斯う云ふ風だから、繪馬にせよ、玩具にせよ、コレクトするには大變都合がよかつた譯だ。

五

わたしは大正二年の秋頃までは、可成屢々翁を訪問したものだ。木内君が翁の長女經子さんと結婚したその時にも招かれたが、そして、木内君が小梅町に居る間は自然寒月翁をも訪れた譯だが、彼が目黒の方へ轉居してからこの方ズッと梵雲庵にも

御無沙汰してしまつた。併し今年はどうでもお訪ねしやうなんて言つて居た所へ、二月下旬に突然翁の死去を報ずる黒框の端書が舞ひ込んだのであつた。

わたしは驚きもしたし（翁の病床に在ることを少しも知らなかつたので）また落膽しもしたが、取敢す梵雲庵に於てその日の午後一時から三時までの間に營まれる告別式に馳け付けた。

雷門前から玉ノ井行の自働車のあることを知らなかつたので、十年も前に行つた時と同じやうに、吾妻橋から蒸汽で言問の土手へ登れば直ぐに長命寺だ。ところがその長命寺は影も形もなく、土手の上に砂埃をたてゝ疾驅する自働車に出逢ふばかりである。あゝさうだ。こゝらはみんな震災の時にやられたのだな。さう思つて見渡すと、何處も此處も昔の面影はなく、又本普請の家とてもなく、小さなバラツクがあるばかりだ。牛の御前は社がなくて、石垣の土臺ばかりが廢墟の如くに存在し、石の大きな牛だけがもとの儘にある。

私が梵雲庵に行き着いた時には殆んど三時に近かつた。門の外の空地にテント張りの受付があり、門をはいると長い唐竹の杖をついた木内君の嚴君半古翁が見えた。庭に立つて挨拶してゐるうちに、翁の長男智藏君、木内君、經子さん、その他翁の令息息女達が代る代る見えた。今出棺しやうといふ際で、棺を動かしかけてゐたが、とくに私に最後のいとまを告げさせて下さるとのことで、棺の蓋をあけて翁の死顏に面會させて貰ふことが出來た。この十二三年御無沙汰してゐる間に髮も髯もすつかり白髮に變り、そして少しは痩せたものゝ血色は頗るよく、殆んどまだ生きてゐてたゞかりそめに眠つてゐるかのやうに見えた。

庭で私は三田平凡寺、三田村船舸兒、大竹漫作寺、高橋狗佛寺、吉田童樂寺、その他翁の生前親交せられた人々に會つた。

梵雲庵も昔の面影なく、家の形も間取りもすつかり以前とは變つてゐて、庭の籔の山も、石塔もなくなつてゐた。

六

三月二十日、あの珍らしくも雪の降つた日、それと二十五日の晩とに、智藏さんと木内君と經子さんと、及び翁の臨終近くに朝夕翁を見舞ひ、その最も晩年の友人となつたところの若い法學士宮原武雄君と共に、私は梵雲庵に落ち合つて、翁の生涯及び人となりに就いて語り合つた。

庵主寒月翁の姿は見えないが、そして震災以前のそれとは何もかも違つてはゐるが、而もその室に流れるところの翁の趣味性は以前と變るところがない。新佛のある家らしく、白木の位

牌と翁の晩年の寫眞とを竝べて立てた机の上には蠟燭がとぼされ、線香が煙つてゐた。室の周圍の高いところには支那芝居に使ふ様々の面が(多分翁の作品だらう)掛けてあり、例により様々のことを書き記した紙が何處にもベタベタ貼られてあつた。

我が四大恩人

第一、福澤諭吉先生に依つて十四歳の頃文明と自由といふ事を知らしめくれたり、否自ら學び知れり。
第二、一休禪師に依つて總ての宗教の遊技的無なるを悟り得たり。
第三、山東京傳翁と井原西鶴法師、我が文章の指導者西鶴師に依つて人間の表裏二面を知らしめられたり。

私は羽目板に貼つてあるこれ等の文字を讀んで、
『これは何時頃書かれたんです。』と訊くと、
智藏君が、
『前の楚雲庵はすつかり焼けて了つたんですから、その後になつて書いたものでせう。』
と答へる。
『では先生も西鶴にはよほど執着があつたと見えますね。』
すると今度は宮原君が、
『えゝ、病氣になつてもまだ西鶴のことを言つてゐましたよ。病中西鶴年表を書いたりして、來年(つまり今年ですね)四月頃になつたら西鶴研究を發表したいと言つてゐましたよ。』
今度は立つて高い處を見ると、英語で、

Or you let us say,
You are the child of the world
In your great delight.
S. S. Spait

と書いてある。
『さうですかな。おもちやいじりをして一生を終つたところは世界の子供かな。』
と私が感歎すると、智藏君が、
『さうですよ。ほんたうに子供でしたね。役所へ行くことなんか大嫌ひでして、又稅務所から何か印刷物が來ても非常にそれを氣にして、稅は納めてくれたかと何度も訊くやうなわけです。それから區劃整理のことだの、さういふ世間のことにかゝづらふのを非常に嫌やがつてゐましたよ。』
それから絃子さんが話した逸話に至つてはすこぶる振つてゐる。翁は大人でも子供で誰でも相手にして遊ぶものだから、晩年になつて近所の十六歳ばかりの少年がよく遊びに來た。彼は

さう利巧の子ではなかつたが、家庭で教はつたと見えて、御歴代の天皇の御名を暗誦することが出來た。そして、それを翁の前でやつて見せると、翁は忽ち敗けぬ氣になり、その位のことは私にも出來ると言つて、二人竝んで、

『神武、綏靖、安寧、懿德、孝昭、孝安、孝靈、孝元、開化、崇神、垂仁、景行』

と暗誦の競爭を始めた結果、たうとう少年の方は行き詰まつて、翁の方が勝利を得た。すると翁は大喜びで、

『勝つた、勝つた。やつぱり私が勝つたよ。』

と如何にも嬉しさうに家中に報告する。といふのだ。心から喜んでゐる翁の姿が眼に見えるやうで經子さんのこの素つぱ拔きにはみんなが腹をかゝへた。その癖幸田露伴さんと將棋をさして負けたら、あんなに好きだつた將棋をふつつり止めて、ささなくなつた。餘程くやしかつたものと見える。そして、幸田さんの將棋の強さは二段といふのだ。その幸田さんに負けたのは如何にもくやしくつて、少し前のころの十六の少年に勝つたのは、とても嬉しくて堪らないといふのだから、さういふところを子供らしいと言へば如何にも子供らしかつた。

智藏君が十二三の子供の時分に、翁は、

『智藏、將棋をさそう。』

と我が子をつかまへて將棋の相手にし、桂馬をもつて飛をかけたり、時には又王手飛車取り間まは利かぬといふところへ行くと、それが如何にも嬉しく、いよいよ勝に乘じて、猫が鼠を翻弄する如くに攻め立てる。さういふ時は、翁の得意滿面の時だ。だが翁は勝つことは大好きだつたが、學んで上手にならうの勉強しやうのといふ考はなく、師匠にもつかないし、又將棋の本を買つて來て査べるといふことは決してしなかつた。その心持は將棋ばかりでなく、他の總てのことにも行き及んでゐた。教はらない。自分で學ぶ。自分で工夫する。それでなければならぬと常に言つてゐた。

七

人目の羽目板にも何か貼つてある。その低いところには、

獨立自尊心よりの自尊、品性の高雅、教育と自らをさゝへ可き財の正しき利得、優雅の姿態と文藝の趣味よりの紳士淑女、自ら研鑽修養を積みて心の正直を以つて他に對して誠實、辯論の練習よりの美辭、運動よりの體格の強健、強健よりの勇氣即ち心力、粗暴は勇猛にあらず、耐久の衣服と堅牢の家具、外見の美麗なるものも脆弱なるはとらず。

無用の世辭は眞面目を欠く、自家の信ずる所をいふの自由、誤謬は直ちに正すべし、他人の意向に盲從することなく、拂はず、長突な

く素朴に語るも口先のみを以つてせず、全身より言語の簡潔必要なき多言饒舌を可レ慎、家庭の不和、ホームの趣味、各自の自由意志より他を浸すことなく、政治上の意見は法の公平、博愛よりの安寧、自治正行の其閥の幸福、學問は實務の爲めに學ぶと共に人格（キャラクター）の修養、豐富なる文學は智識の寶庫、自由と自信よりの正義、非禮は正義の欠たるよりなり。故に無教育の鎔用となる。親睦の間に秩序を存し、和氣藹々の間に整然たる規律、犬猫に對しても紳士淑女の態度を持重せよ。憐憫を以て慈悲は眞の同情、眞實の愛は覺めず。德は道也。道を行くには注意を要す。注意は自他を危殆に誘はざるにあり。茶碗を茶碗と云は眞實なる直觀、茶碗の完全が其器の最良、迷信の斷燕、世間我を廢して淨我の靜樂、樂は文書の自筆、文書應需と雖も我より不レ貸、文書一筆は淨我の表現、食品は清淨と新鮮を、飲料は酒類を不レ取、理想に適はざる音樂劇の類を不レ好、童話伽話の假設的架空談を不レ好、只如實に的確に練磨されたる眞正の人間としての生存。

と書いてある。（誤字が時々目につく）

『たいへん、かた苦しいことが書いてありますね。先生の所信を書いたものなんですか。』

『子孫に示すといふ心持が働いてゐるのでせうね。』

と誰かが答へた。

『さうさう。先生は酒はやりませんでしたね。煙草はどうでした。』

『煙草はアフリカの豚さへも嫌つて避けて通るのに、人間がそれを吸つてうまいとは氣が知れぬといふやうなことが親爺の書いたものゝ中にありますよ。』

『さうすると好きなものは菓子だけですか。』

『食べ物には色々好きなものもありましたが、人の家で御馳走になることは嫌ひでよそで食べるとうまくないと言つてゐました。人に會つてはそんなに疲れを取るといふやうなことはなく、誰とでも打ち解けて話してゐましたが、又客の來るのは大へん喜んでゐましたが、自分から人を訪問するのは嫌ひで、滅多に人を訪問したこともないし、たまたま訪問しても、よそで御馳走にならないで外へ出てからしる粉屋なんかへ這入つて食べましたね。殊に牛肉は好きでしたよ。遠慮するといへば、私の家へ來てさへ遠慮してゐるんですからね。それに來ると直ぐ歸る歸ると言ひ出す位だから、食べ物なんか仲々遠慮してるんです。從つて、自分の家へ來た人でも菓子皿を空にする奴は嫌ひだなんてことが、書いたものの中にあります。』

『これで見ると、着物も家も丈夫を主として華美なものを好まない。質實な考の人のやうですね。それともこれは實際でなく、教訓なのですか。』

『恐らくその雙方でせう。着物なんか贅澤ものは嫌ひでした。

それで、人に通人だの、江戸趣味の人だの、と言はれるのを非常にいやがつてゐましたよ。先だつても三圍神社の移轉問題で、それに反對運動を起してゐる有志の人々が、親爺を發起人か委員にでも擔がふと思つて來たのですが、親爺は却つてそれに對して大反對で、隅田川だつてテームス川だつて同じことだ。世の中が變れば必要に應じて、移轉でも取り壞しでもしなければならないと答へたので、運動員はあきれて歸りましたよ。親爺は江戸趣味の人なんて思はれることが何より嫌だつたのですね。こゝにありますよ。それを書いたものが。」

智藏君は例の半紙を綴ぢ合せた帳面を開いて見てゐる。そこで私も机の傍の席について、翁の書き殘した帳面を見はじめた。

若い時から震災までの間に書き溜めたかういふ帳面は實に澤山あつた。それが若し今日まで殘つてゐたら、知識の寶庫であり、又世相字典でもあつた。それを地震で一つも取り出さずに悉く燒いて了つたのは、幕末より明治大正へかけての文明史の好材料を烏有に歸したものであつて、他人の私さへ返す返すも口惜しい。毎日丹念に書きとめてゐらしつたから、どの位であつたか。これを失つたことが、以後の樣なことと續きとは確かに翁の健康を害する基となつたであらうことは、私達にも想像出來、家族の人々も承認するところだ。

地震の翌日、智藏君が最早梵雲庵はきれいに燒けて了つてゐるから、行つて見ても駄目だといふのに、どうしてもきかないで行くと言ひ張るので、子供達が同道して避難所から跡まで見に行つたさうである。そして、梵雲庵が全く跡かたもなくなつてゐるのを見て、翁は撫然として何時までも何時までも立を去りあへずに居たさうだ。實に心のうちが思ひやられる。

八

翁が震災後になつてぽつぽつ書き溜めた帳面が凡そ三十册ばかりもあるその中には、舊作の小說『馬加物語』——これは明治三十八年の春頃「新小說」誌上に發表したるもの。——及び最近の諏訪篇[illegible]經があり、その他は何とも表題がない。謂はばノートである。それに就いてはあとから語るとして、面白いことは自分の年表を自分で書いて置いたことだ。尤もこれは昨年の春頃すでに自分の死を豫感したらしく思はれる點もあるから、たゞ筆まめであつたといふばかりでなく、そんな點から書かれたものかも知れない。といふのは、丁度椿岳翁が六十七歳で亡くなられたのであるが、去年翁も丁度その年に達してゐたので、自分は若しこれより生きのびればそれだけ儲けも、

だといふことを漏し、のみならず「十四年乙丑春、一月よむ辭世」と題し、

我れと生き我れを死するも我がことよ
その我まゝの六十七年
若し今年死せざれば明年の八年とすべし

と書いてあるからだ。そして、全くその豫感どほりに一年延びて我儘の六十八年の二月を以て大往生を遂げた。

年　　表

一、安政六年十月二十三日、日本橋區馬喰町四丁目に生る。（壹歳）

この馬喰町四丁目の家は東京にたゞ一つの輕燒屋を業とする淡島屋といふ家で、その輕燒といふものは今何處でも賣つてゐるが、その頃には江戸の中にこの淡島屋より外になかつた。輕燒は疱瘡の見舞に無くてはならぬものとされてゐたのださうだ。後、お嚢屋の株を買つて、幕府へ納め物などもしてゐた大富豪であつた。その家のことや、翁の父君椿岳翁のことに就いては、内田魯庵氏の『思ひ出す人々』のうちに書いてあるさうだから、詳しく知りたい人はそれに就いて讀んで戴きたい。

一、文久元年天然痘にかゝる極輕く而て痘痕なく全快す。（三歳）
一、元治元年寺子屋入り。（六歳）
一、元治二年長姉てふ行年十七歳にて歿。（七歳）
一、明治二年手習師匠ヨリ退く。（十一歳）
一、二年十二年今澤會藏長女歿。（十一歳）
一、同三年横濱の兄の方へ行く、椿岳淺草公園に住む。（十二歳）
一、同五年散髪、
同五年四月二十九日祖母ライ行年七十五歳にて歿す。（十四歳）
同六年ＡＢＣを初めて讀む、
七年漢學塾に通ふ
八年築地通ひハリフアキス（英人）に語學を學ぶ。（十七歳）
十年春月四日夜淺草見付の近く出火。（河合某氏）馬喰町自宅類燒。新築自宅を洋風になし、ベットにねる。九月十日、伯父、伊藤八兵衛、行年六十五歳にて歿す。（十九歳）

この伊藤八兵衛といふ人は幕末より明治初年にかけて、仲々世の中を騷した人であつた。そして、今の澁澤子爵夫人おかねさんは實にその息女である。

伊藤八兵衛──おかね　澁澤子爵夫人
椿岳──寒月翁──智藏
　　　　　　　└─經子、木内喜八翁の孫、辰三郎の妻

そして、更に澁澤夫人の姪にあたる高梨孝子さんは今の田中王堂夫人である。かういふ風に一門の縁つゞきに多くの名士を出してゐるのも奇だ。この伊藤八兵衛といふ人に就いては、先年私が雜誌『我等』誌上に『維新當時の滑稽外交』と題して詳細を記したことがある。彼は幕末の豪商で、その人物も亦非凡

だつた。戊辰の役、官軍がトコトンヤレナ節を唄ひつゝ東海道を下つて來るのに、幕府の旗本八萬騎の何等爲すところなきを見て、はがゆく思つてゐたところへ、旗本の武士が遊びに來たので、何故戰をしないのかとなじつた。金がなくつて戰が出來ぬと武士が答へたので、それなら私が三萬兩寄附するから、三萬兩だけの戰をやつてくれとて金を渡した。そして、やつたのが上野の戰爭だ。(これは私が寒月翁から聞いた話だ。)兎に角かう云ふ奇骨ある人だつたので、商賣はうまくはなく、段々損をして、仕舞には隨分減らした。そして、寒月翁に、

「俺ももう乞食になつた。二萬兩位しか持つてゐない。」

と言つたさうだ。

その時代の二萬兩はまだ隨分の大金だつたのだが、この人にして見れば乞食になつたやうに減らしたものと考へたのだらう。(これも翁から私が直接聞い話である。)

伊藤八兵衞は貿易商であつた。しかも普通平凡の貿易商でなく、外交問題に屢々波瀾を捲起したことは、今も尚ほ外務省の舊記保存の倉庫の中に。伊藤八兵衞一件書類と題し、深山保存されてゐるのを見ても分る。彼れは水油と稱して樽詰にした只の水をアメリカに賣つた。又蠶種と稱して罌粟粒を種紙に貼り付けたのを、やはりアメリカへ賣込んだ。果して苦情が來た。外務當局は驚いて八兵衞を呼んで取調べると、それは事實であるが、決して只の詐欺ではない。夷狄を欺き、金錢を掠奪するは皇國の爲めに盡す所以だとは彼れの答辯であつた。當局も彼れの人格を尊重してゐるのみならず、愛國心の爲めに夷狄を欺くことには甚しく共鳴した。その事は一件書類にある内務卿や外務卿等の書簡を見れば明白だ。開明の今日から見ると、餘りに幼稚で、笑を買ふに過ぎないものであるが、その當時に於ては愛國の志士こそは八兵衞の如き思想を持つ者であつたのであろ。兎に角さう云ふ變り種が寒月翁の伯父にあつたことは偶然でない。

十一年、神田區小川町濟世學舍入塾　英人キーリング博士に學ぶ暫次にして而て退學す(二十歲)

十二年、馬喰町引拂ひ神田區明神表阪に移轉、獨り鹿島香取に遊び予の旅行の始なり。

十三年、内國繪畫共進會上野に書葉出品す。洒落本二〇〇冊を購入す。西鶴本書をあさり求む聖堂圖書館に通ひ讀書、燕石十種うつす、幸田露伴氏を初め諸文士と交遊を結ぶ(二十二歲)

福澤諭吉の影響を受けてハイカラの急先鋒をなした所の翁が、此處へ來ると關東の最も古き神社鹿島香取に詣で又圖書館に通つて燕石十種の如きを悉く謄寫し、幸田氏の如き圖書館通ひの仲間から、石燕十種先生と云ふ綽名を頂戴するに至つた。

云ふのは、餘りに甚しい變り方のやうだが、これ又翁にして見れば、豹變でもなければ氣紛れでもなく、又反動でもなかつたので、實は西洋崇拜の結果、歐洲に遊ばんと志し、若し歐洲に遊ばゞ、其時西洋人から日本の事を問かれて、何もしらないと云ふのでは恥辱なりと考へ、それから日本固有の文化を研究する志を起したとのことである。そして古文學を研究するにしても何故西鶴から入つたかと云へば、西鶴彼れ自身も亦和蘭西鶴と呼ばれた位のハイカラだつた所が、共鳴したのだともいふ。それは別として明治十三年と云ふが如き、文化の暗夜、近代に於けるダークエージにあつて、西鶴に目を着けたと云ふことは、その識見實に一世に冠たるものと云つても決して溢美ではない。その時代は馬琴、春水、京傳、一九等の末流の時代で、西鶴などの解るものは恐らく一人もなかつたであらう。さればこそ翁は、西鶴を以て尾崎紅葉、幸田露伴等の人々に、押賣的に推薦したのである。若し此事がなかつたならば、紅葉露伴等の文學は、今日我々が見るところのものとは餘程趣を變へてゐたらう。其點から考へて、翁は明治文學の助產婦と謂ふべきである。又翁にしても偶々紅葉露伴の如き大文豪の卵とめぐり合つたと云ふことは、翁の生涯を意義深きものとした所以で、若しそうでなかつたなら、翁は賓の持腐れと云ふに過ぎなかつたかも知れない。

明治十五年十二月二十五日妻なるをめとる、(二十四歲)
同　十六年淺草區森下町三十番地、移轉す、(二十五歲)
同　十七年二月十四日、長女きやう生る、八月三十日、内田善造殁す行年六十五歲(二十六歲)
明治十八年初めて、京阪、須磨、明石の邊まで遊覽奈良に行き法隆寺等參詣す、
二十年、長男生る七月八日、誕生、智識と名づく、

翁が前年鹿島香取に遊んだのも、又この法隆寺に詣でたのも、翁の宗教心からではなく、古代を知ることゝ、古美術研究の知識慾からであつたらしく思はれる。今でこそ多少なりとも、文學美術に趣味を有つ人々が、奈良法隆寺へ遊ぶことは極めて自然で、又珍らしくもない。併ながらあの當時、それより十年程前の明治五六年頃には、奈良縣知事某は法隆寺の塔を以て無用の長物と考へ、大阪の町人に金五拾兩にて拂下げ、商人はそれを取毀して薪として賣出す考であつたのを、噂を聞込んだ外國領事が、あれは日本の國寶である、毀す位なら自分に、賣つて貰ひたいと外務省に申込んだので、政府が狼狽したと云ふ面白い話があるが之に關する文書及び記錄も、今尚ほ外務省に保存されて居る筈だ。政府は其愚を悟つて、拂下げを斷念したけれども、一般社會は尚ほ未だ是等の古美術を、今の如くに

考の中に入れはしなかつた。西南戰爭が起つた、それに續いて當時民間の知識階級は民選議員の問題で、頭の中を一杯にしてゐた。又政府は専ら條約改正の下準備に頭を惱ましてゐた。其結果として歐化熱は國民の上下を擧げて高潮に達し、翁が法隆寺に遊んだ明治十八年は、所謂鹿鳴館時代として知らるゝダンスと夜會の時代であつた。日本語を廢して英語を以て國語とせんと云ふ突飛な議論や、婦女子乗馬論の如きを耳にする急進思想家の輩出した時代であつた。この時代に於て翁が奈良の古美術を研究しやうとしたのは、見識ある先覺者と云はねばなるまい。

又翁は此頃から佛教、佛教と云つても禪宗に着目した。是も矢張り歐洲慢遊の準備と見て差支なからう。其當時翁の參禪振の漂逸さ加減に於いては、目撃者たる幸田露伴博士が、四月號の早稲田文學誌上に語つてゐる通りである。初めて生れた女子にお經と命名し、又長男の名を智藏としたのも、禪宗に凝つた結果だと云はれて居る。

二十一年八月八日、今澤會藏妻らく、行年七十歳歿す、九月淡島嘉兵衛五十六歳にて歿す、

二十二年九月二十一日、椿岳、吉凡法師、歿す、行年六十七歳、向島弘福寺前飛雲庵にて、

二十四年七月卅日次男謙生る

明治二十五年森下町邸に於て今澤會藏（予の長兄）四十六歳をもつて病歿す、十一月十六日長女きやう九歳に入學す、

明治二十六年十一月二十四日、現今地、椿岳舊庵、向島須崎町七四番地に森下町より移轉同時に母くみ姉よね長女三人は淺草藏前森田町に一軒家を借り、寄留す、そは長女きやう精華小學校通學の都合上よりなり。

同　二十七年二月十日、母、姉きやう子、向島の家に同住す、

同　二十八年六月六日、三男、勝生る、伊勢より京、大阪、奈良、東海道歩行す三十七歳

三十一年六月十二日、母くみ歿す、行年七十一歳

この年、長女及び長男二人の子供を暑中休暇に信州長野の親戚へ遊びにやるとて、自分も一緒に、輕井澤まで送つて行つたが、親類へ顔を出したりするのが極端にいやと見えて、そこで別れて自分一人は別に、更に北行して澁温泉に浴し、歸途上州を旅行した。この事は年表に落ちてゐるが、或は又その他にも年表に出てゐない斯ういふ小旅行が幾つかあつたかも知れぬ。この年の前後へ掛けて、頻りに旅行を試み、交通尚ほ極めて不便であつた（旅費は安かつたが歩行せねばならなかつた）時代に於て、北海道と台灣を除き、足跡殆ど全國に及んでゐるのは、これも單に旅行好きと云ふだけでなく、考古學に耽つてゐたからであらう。その考古學は古美術研究より生れ來つたことは確かである。

九

三十二年四月二十四日、次女千代野生る、

三十三年きやう子と共に、富士登山する傍り筑波より奥州を一週す、

三十五年五月二十八日、中村節翁妻なみ、行年六十九歳にて歿す、

二月壹日小林古城歿す、行年三十五歳、紀州奈良河内を一週す、

三十六年八月六日四男肇生る、九州一週す、出雲邊まで旅行す、

翁はこれ等の旅行の旅費を作る爲めに、先祖から傳へた市内の地所を、あちこちと賣つて金に替へた。そしてその紙幣を額縁に收めて、梵雲庵に飾つて置き、必要に應じその額の中から拔出して使つた。どうしてこんな事をしたかに就ては、家人も不思議に思つてゐたが、それは來客に羨ませたさに紙幣を飾つたものだと云ふ。翁の書き殘した歌の中に

一圓を十圓と思はせることもあり
　人のうらやむ顏が見たさに

又

十圓を一圓といふこともあり
　貸せと云はれて迷惑する故

と云ふのがある。私達はこれを見て腹をかゝへて笑つたものだ。人を羨ませることや、人を困らせたり、又間誤つかせたりする事なども、この翁の樂しみの一つであつたらしい。勿論、人を喜ばせ笑はせることも又好きであつた。隣り屋敷の弘福寺の境内に、夏になると涼台を出して、近所の人達を集め、落語をして笑はせるのが頗る得意であつた。なかなか激しい猥褻なのもあつて、それを聽いてる子供たちは、可なり弱らせられたと云ふことだが、翁は子供の迷惑などは少しも頓着しなかつた。又或る時は、梵雲庵の品物は恐く趣味的で、美術的にも、骨董的にも、價値あるものゝ如く迷信してゐる或人が、庵の出入口にとめてあるかすがいを賣つて呉れと頼んだ。翁はさも〳〵珍らしい寶物の如き顏をして、それを金五圓で讓り渡した。そして其人が歸ると、腹をかゝへて笑ひ

「今五錢のかすがいを五圓で賣り付けた、馬鹿な奴もあるものだ」

とて大喜だつた。これは一つは翁を單に骨董的趣味の人とのみ誤解してゐる者に對する、一種の復讐であつたらうと私は思ふ。兎に角さう云ふ茶目な所があつた。これなど一圓を十圓と思はせて樂しんだ一つの例だ。

此樣にして額の中から拔出し〳〵してゐる内に、旅費もだん〳〵減つて行き、しまひには旅行を止めてしまつた。だがそればかりでなく、旅先で翁は甚だしい苦い經驗を嘗めた。それは

外でもない。この年表にもある三十三年長女と共に富士登山をした時の事である。經子さんは最早十七八歳の娘盛りだつたのに、翁は四十二三歳で、而も年より若く見えたから、旅先でこれを父子と思はず情人か妾を連れてるやうに度々誤解された。經子さんが『お父さん』と呼び掛けるのを聞いて、强力が『へエあの方はお父さんですか私は又あなたの旦那かと思つた』と言つたので、これには親子ともひどく恐縮した。それはまた宜いとして富士を御殿場から登つて、吉田口へ下りる時、飛んでもない災難が起つた。行者の一團が六根清淨を唱へつゝ、勢ひよく下りて行くのを見て、經子さんも、又六根清淨と言ひながら、早目に歩き出した足が、いつにか駈足になり、それが何時までしても止まらず、恐しくなつたので、急に止めようとする途端に、轉んだと思ふとコロ〳〵コロ〳〵果しもなく頭が下になつたり足が上になつたりして落ちて行つた。これを見た翁は、自ら駈出して行つて救はうとすると、固より當時まだ女人の登山が殆どなかつた時代のことで、お山の怒りを恐れてゐた强力は、翁を捉へて放さず『お孃さんだけはお諦めなさい、若し追駈ければあなたも同じことになります』と引留めて、どうしても放さなかつた。幸にして經子さんは雪の溜つてる穴へ轉げ落ちて、氣絶はしたが擦過傷だけで一命は取止めた。が此爲めに翁の受けた精神的打撃は非常なものであつた。年表に依ると、是より後にも旅行はしてゐるが、併し段々旅を憶劫がるやうになつたと云ふことだ。印度まではどうしても行つて見たいと言つてゐたさうだが、それも到頭果さずにしまつた。

この年表にないが、明治三十三年、翁四十二歳の年、スカンヂネビヤのミツションの宣教師アームストロング氏から洗禮を受けて、クリスチヤンとなつた。これ實に奇拔な話で、宣教師の方は勿論眞面目であつたことだが、翁としては宗教的信仰から來たものでなく、晩年活動寫眞を好んだと同樣に、遊戲的氣分から入つたものだと思はれる。

この三十三年と云ふ年は二十世紀の初めか又は十九世紀の最終の年で、いろ〳〵面白い事のあつた年だが、人々の氣分も再び歐洲文明崇拜に傾き、第一期の社會主義の芽生初めたのも此頃だと思ふが、殊にキリスト教にあつては、不思議にも力强いリバイバルが起つた。東京市内の諸教會では一週間も續けて禮拜說教會を催し、晝夜を分たず教會の扉を開き、提灯を幾つも點けて、大擧傳道と稱する事を催した。青年學生は現代に於て社會問題經濟問題を硏究する如くに、之に趨つて教を聽き、又一般人も丁度今のラヂオを聽くやうな積りで、之に耳を傾けることが流行り物になつた。その時代の青年で、今日既に著名に

なつてる連中で、洗禮を受けた仲間は、私の知人だけでも正宗白鳥、中村吉藏、窪田空穗、水野葉舟、相馬御風、等々である。そして私も實にその一人だ。翁は恐らく、新奇な文明を喜ぶ青年の如き心を主として、それに、參禪した時と同じやうな人生問題に對する研究心も多少は混つて、洗禮を受けたものであらう。

その洗禮を一緒に受けた翁のお婿さん木内君の話がとても振てゐる。翁はたゞ教會の中で當り前の洗禮を受けたのでは何もならぬ。本式ならばキリストがヨハネから洗禮を受けた所のヨルダン河まで押出して行かねばならぬ所だが、さうも行かないから、何處か東京附近でヨルダン河の如く水の清い所を搜さうと云ふので、物色した結果、中川ときめた、そしてアームストロング氏と同乘して猪牙船で隅田川を漕ぎ出し、中川へと行つて、丸裸になり、川の中で洗禮を受けた。所がその歸りに船の中で、翁とアームストロング氏と大論判を開いてしまつた。それは何かの話からアームストロング氏が、私は此間自分の飼犬が澤山仔を生んで始末に困るから、吾妻橋の上から仔犬を棄ててしまつたと語つたので、翁は、キリスト教ではさう云ふ事をなさるか、それは甚だいけません、日本の佛教では犬でも猫でも可愛かつて殺しません、佛の愛は禽獸草木悉皆成佛と說いて居ります、佛教を硏究なさいませと言ひ、アームストロング氏は人間以外の動物には魂がないから河へ棄てゝも構はぬと言ひ出し、翁はそんな事では駄目だと言ひ張り、議論に花を咲かせつゝ歸つた。併し翁は、この宣教師とは中々仲がよく、宣教師の代理を勤めて、馬加村の教會堂に二ケ月許りも滯在した事があり、翁の唯一の小說、馬加物語は其時の事を材料にして後年に至り書いたもので、明治三十八年十月頃の新小說に掲載された。露伴氏はこれを讀んで、面白いから尙は續けて書くやうと勸めたが、何處やらの月評子に惡罵せられたとて、それを氣に掛け、後から續けて創作する樣なこともなかつた。話は違ふが、この宣教師アームストロング氏を酉の市の晩に吉原へ案内して、緣起物を買はせたのも翁の茶目振りの一つであらう。

日露戰爭の始まる以前には、旣に翁のキリスト教は卒業してしまひ、その頃言ひ始められた進化論に耳を傾け、又唯物論にと進み、日露戰爭當時には矢張り其頃のハシリであつた社會主義に頻りに共鳴してゐた。翁の歌に

ありなしも知れぬ昔の釋迦耶蘇が
何を說くとてわれに關せん

十

三十八年二月二十六日、叔母、ふく女七十一歳にて殁す、
四十二年二月二十三日、三女、篤子生る（五十一歳）三月十六日、長女きやう子木内辰三郎氏に嫁す。

この三十八九年頃からが埴輪泥人形埃及趣味の時代で、私たちが梵雲庵へ盛に出入したのは此時代である。翁が内田魯庵氏に會つて丸善に本を買ひに行つた時、文學書でも買ふかと思つたら、動物學の本を買つて歸つたと云ふのは、多分この時代のことではないかと思ふ。私たちも其本を見せて頂いたやうに記憶する。又埃及研究の書物も次々に丸善へ來てゐたから、それ等から埃及趣味に入つたものと考へられる。翁が私に與へた三田平凡寺さんへの紹介狀にも、埃及文字の印が押してあつた。

繪馬を集め始めたのは大正二年頃からと思ふ。併しそれには間もなく飽きて、大抵他人に讓つてしまつた。さてそれからが繪だ。

大正三年長男智藏に、あき結婚入籍六月十二日、七月謙伊藤重兵衛氏次女ケイ子養子となる、
大正六年、九州熊本に再遊す（五十九歳）
大正五年、馬喰町淡島へ千代野を養女として入籍、

こゝに熊本に再遊すとあるのは、智藏君が西伯利亞出征に從軍するに就て、あき子夫人及び幼い子供さん達を東京に迎へる爲めであつた。それは翁の孫たちを心配する所から起つた考で、とても遠くに手放して置けなかつたからである。斯う云ふ所は翁は人並以上家庭的な人であつた。

『どうです、先生には女に關した逸話はありませんかね、あの長い生涯に戀愛事件くらゐありさうなものだが、』

と私は不躾にも遺族達の集つた中で聞いたが、誰も皆

『さう云ふ事は全くなかつたやうです、椿岳さんは非常な女道樂で妾を百人以上も取替へたと云ふ話ですが、父には女の事件は絶無です、全く家庭的な人でありました、少し物足りないやうですが』

と異口同音に答へるのであつた。

晩年は專ら玩具の蒐集と繪を描くことに沒頭し、遊びとしては活動寫眞を見ることを好んだ。翁の贔屓役者はマックスレンダーと女優クララ、キンボールヤングを好み、殊にキンボールヤングに對しては非常なファンであつた。後年即ち大正十四年の春智藏君が陸軍省から米國へ派遣せられた時にも、頗る眞面目で

『オイ智藏さん、あちらへ行つたらキンボールヤングに僕から宜しくと言つて呉れ』

と賴んだ程だ。餘り眞面目な賴みなので、智藏君もこれを一場の戲言として聞き流す譯に行かず、これも眞面目でキンボー

ルヤングに面會しやうと努めたが、如何せん非常な人氣女優のことゝて、紹介もなく近寄ることも出來ず、從つて翁の命令を實行することが出來なかつたさうだ。その代りに活動寫眞機械を土産に買つて來て、先づ翁を撮した。それが中々よく撮れてゐる。翁の活動熱は最後まで續き、その病を發したのも活動見物に行つた日からであつた。

　玩具は主に最初古い日本玩具から集め初めて、それを集めただけでなく、繪に描き殘さうとして玩具百種と云ふものを描いたが、それから段々手を擴げて、世界中の玩具を集めやうと心懸け、そして集るまゝに玩具千種を描いたのは大正八年のことである。それから一冊の書物に纏めて——印刷した譯ではなく一々これを自分で書いたのだが——これを玩具道樂の仲間に配つた。一部描くのに一月位も掛つたと云ふ事だ。後更に玩具萬種を描かうとして既に五千位まで描いた所で病に伏して中絶した。

　翁の玩具の蒐集に如何に熱心であつたかはこれを自分でも買ひ、友人にも頼み、又子供さん達にも集めさせた。そしてお孫さん達が父母が玩具を買ふのを見ても、これは祖父さんの玩具だと云つて、妄りにそれを自分の物としやうとしなかつたので見ても分る。又あの大地震の當時、向島の住居を燒拂はれて、翁は一時家族と共に紀尾井町に假寓したが、もう震災の四日目には麹町の玩具屋を漁り歩いてゐて、これを知人に見咎められたといふ逸話さへある。

十一

十二年九月一日關東大地震、午前十一時五十八分、梵雲庵類燒、九月より、十二月まで麹町區紀尾井町、假寓す、十二月梵雲庵再築歸住す、今澤善太郎、及妻かつ、長女次男三女、三男、一家震災のため燒死す。十三年鈴木藤吉、十一月十八日七十七歳にて歿す、
十四年一月二十九日伊豫丸にて智藏渡米す、
同年十二月十一日午後十一時、伊藤譲妻ケイ歿、
十四年五月二十九日、智藏歸京、

大震災に心を痛めたことは誰も皆一様であるが、別けても大家族の者は心痛が多く、又其中でも下町及び深川本所に住む人達はひどかつた。そして翁は既に老齢であるのに加へて、近き親族の今澤家は被服廠に入つて全滅し、末娘の養家先の馬喰町の淡島家は全燒し、親戚の木内一家も又梵雲庵及び智藏君の家と共に、是れ又火災を免れず、チリ〲に別れて避難した。智藏君は折ふし陸軍省に出勤中だつたので、向島まで歸るには三時間も掛つた。而も家族は既に避難した後なので、群集を分けて土手の上を搜し廻り、漸く妻子と幸福にも廻り合つたが、人

波に隔てられてどうしても翁達の一組と合體することが出來ず、皆の帶を解き、岸の櫻の木に結び付け、家族の身體をそれに托して終夜隅田川へ入つて火を避けねばならぬやうな次第であつたから、その間の翁の心痛は一通りでなかつたであらう。

併し震災直後淡島一家だけは悉く無事に家を紀尾井町に見つけて其處へ移り住んだが、翁は矢張り向島の地が戀しく、智藏君が建築師なるを幸に、殆ど一番最初に前の燒跡の上に今のバラックを建てた。その時分周圍の人々は燒トタン板の小屋に雨露を凌いでゐたが、淡島家のバラックを建てたのを見て大いに意を強くして喜んだとのことである。而もそれから後の向島は容易に舊態に復さない。悉く翁の癪に觸る事ばかりだ。翁が梵雲庵の破目板に書いて貼り付けたものに次の如き斷片がある。

震災後一層東京は泥臭くつて田吾作に熊八が長靴で都會を踏み荒し、大きな手と赤黑い面、言葉は聽いてもわからず、かきくさい息と、あせくさいあとでかためつけた人間、禮儀も作法も知らぬ、人の家の内でも帽子をとる事さへ知らぬ、無禮千萬出した菓子は人ものを空となし犬の如くなめぬはまだしも是れが人間の股から生れたとは無敎育の哀れさ、形は人間と見えてこゝろは獸類とかはらぬ野狐ども尻尾の人の眼に入らぬと思ひだます氣で居るこそ笑止、こんな化けそこねの野良犬の復興よばはり何でろくな仕事が出來様があらう。

『大分猛烈なことが書いてありますね』

と私は翁の地震以後に書き遺した例の帳面を讀みながら言つた。

「全く猛烈ですよ、親父はこんな事を考へてゐたかなあ」

と智藏君は智藏君で笑ひ／＼、又帳面を見てゐる。そして

「どうです是は」

と言つて私の前に展げた。

『調査／＼アハハ、整理／＼ごた／＼』

と記してある。智藏君は

『本當に此邊の人はこれで弱らせられてゐるんですよ、私も實際こんな貧弱なバラックを親父の臨終の家とはしたくなかつたのです、早く整理がつきさへすれば親父の爲めにコンクリートの家でも建てゝ親父の爲めには特に廣い一室を取り、玩具を並べ、それこそ親父の理想通りの世界を作つて、眞中で焚火でもしながら同文の友達が終日でも遊んで行けるやうにしたかつたのですよ、親父は校倉式の家が建てたいなんて言つてたこともありましたが、それは非常に金が掛つてとても出來ません、併し鐵筋コンクリート位のものなら出來るから、本當にこんな家で死なせたくなかつたのでした、併しそれももう今となつては

仕方ありません」

と語る。

その帳面の名は韻詩寫習經と云ふ。その中から少し採錄して見ると

文明の道具も馬鹿に使はれて
　玩具にさるゝラヂオ悲しや

何といふ役者死せりと町人が
　藝術顏に語るおかしさ

身のはぢをおく面もなくかたり出で
　錐で飯くらうら若き人

嫌ひなは童話小說むかしから
　切つたはつたの講談と云ふ本

○田舍少女の舞踏會を見て
　鼻たれの天女もいづる舞の袖
　とゞとんきなる足のがたがた

『今の少女が氣の毒』童謠童話なんてくだらないまやかしもの惡い中老者の喰物にされる、小兒と家庭子供の名でかたるいかさま本。子供をだますまやかし作。小供をそそるでたらめの御晰や僞り唄で小供の錢をまきあげるずるいやつ小供の名で賣りつける童謠歌劇の拙作本

『大分皮肉で面白いですな。こんなに童話が嫌ひだつたんですか』

『えゝ童話童謠總て嫌ひですよ。童謠ばかりでなく、音樂と云ふものも好かなかつたやうです。まあ分らなかつたのでせう、日本音樂さへも好かなかつたのですから、耳が惡かつたと云ふのでもないが、どうも歌の節など分らなかつたらしいです。晩年には謠本を澤山買込んで讀んでましたが、そして謠の文章を馬鹿に出來ぬ、中々よく書けてあるなんて感服してゐたやうでしたが、これは能樂を觀られる所から讀み始めたものでせう、謠を唄ふつもりではなかつたのです』

他の人の頭の蠅を追ふしまで
　自分の頭刷れ坊主ども

『しまとあるのはひまの積りでせうね。それから印刷の刷の字は剃れの積りでせうね』

『えゝ、體おやぢは餘り字には構はなかつたのですから、さう云ふのは幾らも出て來ます』

乳兒さへかんかん坊主禿坊主
　頭となしにたゝく惡口

凡世にバカの骨長何と問はゞ
　坊主に經をよみもらふ奴

いらぬ他のお世話なことをいはふより
いもでも喰ふに鉦たゝきをれ

「坊さんの悪口が盛に出てゐますが、これはどう云ふ譯でせう」

「近所の寺でまだ焼けた儘になつてゐるのに、地面を藝者屋や待合に貸して、そんな所ばかり復興させてるものだから、それが大方癪に觸つたのでせう」

文明の定義を我はかく解す
我の存在に都合よきことと

好な事して遊べかし再度はこの世の中へ生れこざれば

「この二首は先生の理想を詠つたものですね、そして實際一生好きな事して遊び暮しましたね」

他のノートのやうな帳面には様々珍らしい漢字やら、請負師の符牒やら、色々あるが、中で私の目についたのは次の通りのものだ

一三五七九奇數
二四六八十偶數

「一體これは何の爲めでせう」

「あの老年になるまで大方奇數偶數と云ふことを知らないでゐて、人から聞いたか又は何かで見たかして、新知識だと思つて書き留めて置いたのでせう」

こゝで皆が笑つた。所で翁の勘定に關する逸話が澤山出た。

翁は子供の時から數字を習ふ時分にその機會を逸したので（それも翁の我儘から算盤は詰らないと云ふので學ばなかつたのだ）差引勘定と云ふものをするのが嫌ひで、自分の家庭の人々とでも、一圓遣つて六十錢の玩具を買つて來て貰つても、又一圓返させて六十錢別に渡すと云ふやうなことをした。晩年淺草雷門前で五錢の玩具を八つ買つたが、財布を見ると生憎五十錢銀貨が一枚なので、翁は大に狼狽し

「又此次持つて來るから」

と言つて幾度か詫びた、その玩具屋は常花客なのであるから、足りないとて悪い顔をするのではないが、お神さんは間誤ついた様子で

「いゝえどういたしまして、只今お剩を差上げます」

とて十錢翁に返した。翁には其譯がどうしても解らなかつた。傍に附いてゐた經子さんにも亦どうして翁がそんなに狼狽するのか分らなかつた。

「お父さん、あの玩具は一つ五錢でせう、五錢なら四十錢ぢやありませんか」

と言ふと翁は初めて氣がついたやうに

「あゝさうだつたな、私は又五八の六十だと思つた」

と言つて大笑ひになつた。

又或時、或人が繪を描いて貰ふべく頼みに來た時に、お禮を持つて參りましたよと言つて、先づお盆を出してその上に袋の中から銀行から引出して來たての、全く新しい五十錢銀貨ばかりで百圓サラ／＼と盛り上げた。それを見た翁の喜び方と云つ

たらなかつた。そして其銀貨を眺めながら、何枚も何枚も描いて渡し、いつまでも喜んでゐた。同じことでも百圓札一枚貰つたのではこんなには喜ばない所だと云つて家の人々は皆笑つた。

十二

翁の晩年に翁と最も親しくしてゐた青年法學士宮原武雄君は語る。

「私は先生が丁度病氣になる直ぐ前に考古學のことで伺ひたい所があるので初めて訪ねて來て、それから臨終まで御懇意にして戴きました。病氣になつた初めは昨年十月初めで私と二人で淺草の帝國館にシラノ・ド・ベルジュラツクを見に行く約束をしましたが、私は都合で伺へず翁一人で出掛けて土手へ上ると、吾妻橋行の自動車が今出ようとする所なので、呼止めて一生懸命走つてそれに乘つて淺草まで行き、帝國館に入らうとして見ると財布を忘れてゐたので、活動寫眞を見ないで家へ引返しましたが、その自動車を追駈けた時に大變胸がドキドキしたさうですが、其翌日から發病しました、そして十五日頃私が伺つた時には一寸治つたからと云つて自分で部屋を掃除などして、西鶴の年表を書き、來年の四月頃までには西鶴の研究を完成して發表するのだと言つてゐましたが、二日ばかりして又發病し、其時には風邪の樣子でしたが、二十五日の晩にはクリスマスの夢を見て、自分がサンタクロースになつたとそんな話をしてゐました。所が二十六日から苦痛を訴へ、一時意識が混沌したやうでした、そして年を越えて一月六日に又快方に向ふと共に自分でも生きてゐたいと言つて大分努力したやうです、そして段々快くなつて來たのでしたが、又急に惡くなつて病歿したのです、私が死ぬ前々日即ち二月十九日に伺つた時に何か花でも土産にと思ひましたが、花は散ると云ふこともあるから避けて、アスパラガスの鉢を買つて來て上げました所が、其又翌日、參りましたら翁は「私は昨夜地獄極樂の夢を見た、極樂はいゝ所ですよ」などと語り其晩は頻りに私に泊つて行くやうにと留めましたが、私が歸ると云ふとどうか喰べる方のアスパラガスを買つて來て下さいなんと言つてきました」

「矢ッ張り死ぬまで喰氣が勝つてゐたかな、寒月翁らしいな」

などと私達は笑つた。

位牌の前の蠟燭は既に燃え盡してゐた。

病中吟

おぼつかなまたあふ事はたのみなし
　今をかぎりと君とかたらん

大正十五年二月二十三日午前一時歿す

戒名

梵雲院釋幽窓寒月居士

向島洲崎町の自宅にて告別式を擧げ染井の墓地に葬る

天狗にならうか？

──人間癈業の四──

大泉黑石

お氣に召したら、自腹を切つても、頼まれた顔は立てる代りに、厭と思つたら、百圓もらつたつて、どんな義理人情でも踏み倒すのが俺の流義だ。わざ／＼牛の皮まで剝ぎに行つたこともあるが、どんなに拜まれたつて、活動寫眞の烏天狗に見たてられちや我慢がならん。お氣の毒だが、眞ッぴら御免を蒙るから、さう思へと、一言のもとに拒ねつけてやると、監督の川屋公も、流石に面くらつて、えッ？　といつたきり、二の句がつげなかつた。態ア見ろ。といふところで、前篇「寂滅の卷」は切れてゐるが、狸みたいな面魂の狡猾な奴だ。まご／＼してゐると、どんな手を出して、巧いこと抱きこまれるか知れないから、瞞されないうちに引き揚げた方がよからうと思つて、サヨウナラと言つて撮影場の門を飛び出した俺は是でサッパリした氣色だ。目白の奥なる震災長屋の一つに歸つた。歸つて見ると、年中あけつぱなしの戸口が締つてゐるので、裏口へまはると、そこの木戸口も立て切つてあるのだ。眞つ晝ま、から嚴重に閉めたこともなければ、閉めるにも及ばぬ世帶だから、こいつは變だと思つて、表へ出直して戸口をコヂ開けにかゝつたがビクともしない。しないわけだ。内側から閂が嵌めてあるらしい。誰もゐないのかな？　ゐないとすれば、内の者は一體どこから何うして外へ出たんだらう？　念のために聲をかけたが、返事がないので今度はドン／＼叩いて見ると、ひつそり閑とした暗闇の奥から、つんけんどんな細君の聲が、いきなり手裏劍のやうに飛んで來たのでオヤと思つた。やつぱりゐるのだ。

「誰です！」

「俺だよ。どうしたんだい？」

「どうもしやしません！」

「しませんこたアない。なぜ戸を締めるんだい？」

「あなたが、歸つて來るからですよ！」

「歸つて來るのが當りまへぢやないか！」
「當りまへなら、當りまへのやうにして、おいでなさい。」
と言ふのだ。何が當り前か、前でないか、藪から棒ぢや、わかりやしない。わかつても解らなくつてもだ。當りまへであらうと無からうとだ。亭主の家へ、亭主が歸るのに議論はなからうと思ふんだが、事實、この通り締め出しを食つてゐるんだから、よつぽど當りまへでないことがあるんだらう。俺は暫く戸口の外に突つ立ち乍ら考へたが、何しろ此方は、昨日も今日も十年一日のやうに、當りまへ過ぎるほど神妙な亭主のつもりでゐるんだから、當りまへならざることは身に覺えがないのだ。だから幾ら考へたつて、わかりやうがない。只わかつてゐるのは、細君が怒つてゐることだ。だからつまり細君の勘氣にふれるやうなことが、當りまへでないことの中味になるんだが、そんな下手な眞似をしたが最後、どんなに慘めな仇を取られるか知れないのが、結婚以來の通則なんだから、そんな手ぬかりはない筈だ。筈は筈だが可怪しいなと思つてゐるうちに、ハハア、こいつは又何か、おきまりの感違ひぢやないかしらん。どうもさうらしいと言ふことになつた。ならざるを得ないのだ。自慢に吹聽すると思はれては情けないが、是ほど性急に物を片づける細君なんか、何處の亭主にだつて持合せはなからう。いや、勾配の早い女があつたものだ。而もそいつが今日はじまつたんぢやなくて、まだ肩揚げの取れない時分からの癖だから始末にいけなかつた。思ひ出すと其の頃のことだ。この大將の住居が俺の近くにあつて、おい、あんた、お湯に行かうや、と手拭を下げて、俺を誘ひに來るのだ。だからたま〳〵連れ立つて行くと、裸になるや否や、駈け出して行つて、湯壺のへりに兩手をつくかと思ふと、逆立ちに立ち上つて、湯の中へでんぐり返るのだ。こいつが俺に出來るかい。出來るならやつて見ろと、偉さうにへへんと笑ふのだ。忌々しいが出來ないものはやれないから、大將いまに、やり損じて、ベソ掻いたら拍手喝采してやらうと思つてゐると、ある日、やつぱり輕業だ。汚ない湯を龍巻のやうに跳ね上げて、おとなしく茹つてゐる他所のおかみさんの、結ひ立ての頭髪から、ザツと浴びせかけたものだ。おかみさんは目玉をむいて怒るだらう。居合せる浴客だつて嗤ふだらう。だから流石のお轉婆も片隅にちぢんぢまつた。チエツ、これしきのことで神妙に凹むつもりはないんだ。何とか言ひ返してやらなくちや、おさまらないんだが、言ひ返す文句がないから、口惜しいけれども默つてゐるんだといふ面つきで、おかみさんをチラ〳〵睨まへてゐるから、態ア見ろ、い〻氣味だと思つたら、大將いきなりブク〳〵と湯壺へ潜りこんで、下から

おかみさんの足首をつらまへ、力まかせに湯壺の底へ引ずりこんだ。いや、引きずりこんだつもりだらう。やがてポカリと浮き上つて、何食はぬ面色だ。あたりを見まわすと、湯壺の底に泡を吹いてゐる筈のおかみさん、そんなことは御存じがない。澄して顏を磨いてゐるのだ。その隣りにゐたお婆さんの姿が見えなくなつてゐるので、大將、蒼くなつて逃げ出したことがある。こんな女だ。こんな女が行く〳〵は俺のうちへ嫁に來る約束だと聞いたときには、しめやかに悲觀したが、こんな女にも惚れていゝところがあると見えて、女學校に上る年ごろになると、艶書の一本も附けやうといふ奇特な馬鹿もあると見えて、わざ〳〵御丁寧に、横文字でおいでなすつたさうだ。讀めなくちやならん筈のリイドルが滿足によめないところへ、艶書と來るからには、乙に捻つた美文だらう。だから何のことやら、譯がわからず、差し當つて學校の先生に持つて行つて見てもらふと、先生、眞つ赤になつて狼狽したさうだ。狼狽もするだらう。後でわかると、艶書の差出人は、つまり此の先生だつたさうだ。色氣のわきまへもない奴だと思つて、ゲツソリしたらう。娘もかうなると箱に入れる苦勞がない。はいれたつて這入つちやゐない。女だてらに、裾はひねもす凧揚げだ。夏は毎日一里も二里も海の沖合ひに泳ぎだして、波のあひだに黒く光つてゐる。秋は魚籠を提げて釣りに行く。行つたら最後、日がくれなくちや歸らない、だから。おとなしく家の中に引つこんでゐるのは冬ばかりかと思ふと、顏なんさ、三日も洗はないのだ。鏡や櫛や、何處にあるやら、といふ體たらく。紅おしろいのつけ方も、碌に知らない始末だ。惚れるにも想ひつくにも、どだい寄りつけない代物だから、その後は艶書のくれ手もなかつたに違ひない。その證據には何の世話もなく伸び放題に伸び上ると、例の調子で、おい、來たよ、と俺のうちへ嫁に來た。その時の口上だ。これから先は亭主の俺を杖とも柱とも賴みますから、何卒よろしく何とか云々と言ふのだ。言ふだけでも感心なものだと思つてゐたら、だん〳〵亭主に馴れて來るにつれて、金持でない俺が、だん〳〵金持ちでなくなつて、お了ひには人夫や勞働者の眞似をするまでに零落れると、もう杖とも柱とも思はなくなつて、踏み臺か座蒲團ぐらゐにしか扱はなくなつた。いくら稼いでも稼いだ金は、そつくりふんだくつて、一日の煙草代に五錢しかくれない。くれない習慣が掟となつて、今でも五十錢以上は斷じてくれないのだから、どつちが嫁に來たんだか、わからない權力だ。何だつてあんな丈の短かい女の尻に敷かれて、脂さがつてやがるんだらう、と、あんまり尻に敷く方ぢやない例の辻潤にさへ見消化されるほど激しいんだが、おや〳〵到頭嫁に來

たなと思つた時から、かうなるだらうと、覺悟の臍をきめてゐるんだから、はたで氣に病むほど脂さがつちやゐないが、苦にはならん。そりや、さうだらう。いくら親同志で決めた夫婦にしろ、あきらめのいゝ亭主にしろ、何處かに取柄がないとには、到底我慢が出來たもんぢやないたア思はんか？ なんて言ふたら、何處がいゝのか、ついでに承はらうと仰有る人もないとは限らん。自分の女房はもとより、人の奥さんでも構ふこたアない。自慢をするなら、あること無いこと針小棒大に並べた方が目出度くてよからうと考へてゐるんだから、一席の御高說をと、今にラヂオ屋が賴みに來るだらう。來たら早そくだ。女房の自慢を念入りに手放さうと心がまへてゐるくらゐだから、こゝで吹聽する分に妨げはないが、物を書けば何時も女房の惚けだ。惚けた上に金にするとは太え野郎だと、あんまり惚けの嫌ひな方でなささうな宮島資夫にまで嚙みつかれるかも知れないし、さう言はれると、年が年中、女房の機嫌ばかり取つてゐるやうに聞えて外見よろしくないから今日は止したが、今言つたやうな、貧乏芝居は、大詰の幕が、吉原土手下のイロハ長屋に開演の最中であつた時分だ。「俺の自敍傳」第三回にも一寸ほのめかしたが、その土手の向ふ側に、顏見知りの小學校敎員が、內職の塾をひらいてゐた。中學校に入らうと思つて掛るけれども、いつも斷りをくふ低腦兒ばかり寄せ集めて、試驗に通る術を授けるんださうだ。今度こそは大丈夫だよ、安心したまへと氣休めを言つちや、また落第するまでの月謝をせしめてゐる敎員だつたが、一人では骨が折れるから、一晩十錢ぐらゐで助太刀に來てくれないか？ 君に解らんところがあつたら、要領よく誤間化してやりや澤山だと、俺にいふた。誤間化さなくつたつて、十錢ぐらゐの先生なら勤まりさうだ。さうだとすると、あてがひ扶持の五錢玉は、ゴールデン・バットの吸口に火がついて、舌の尖を燒いたり、髭を焦すまで、キナ臭ひ煙を後生大事に喫ふにはあたるまいと思つて喜んで引き受けた。當ては陸軍糧秣倉庫の草かつぎといふ官職があるので、そいつを仕舞つて家へ戾ると飯だ。飯をくつてから塾へ出張ることになつたが、ある晩のこと。授業が終るころ雨が降り出したと思へ。十七八めいの塾生が、頭から羽織を被つて濡れて歸つた後に殘つたのが、吉原遊郭は何とか樓の息子と俺だ。俺はたつた一本しかない傘を借りたが、女郎屋の息子は何うするかと思ふと、塾長の細君があらはれて、妾のコートを召していらつしやいといふことになつた。同じく塾生でありながら、この息子だけは、月謝のほかに何か持つて來るもんだから、細君だつて親切な了見にもなるのだが、折角の親切なら、塾長のマントでも貸しやいゝと思つた

が、貸さないところを見ると、形がないんだらう。傘へないのは、女郎屋の息子だ。灰汁ぬけのした細面の、ひよろり、すんなりと痩せてゐるんだから、そのコートを引つかけて、本包みの袱紗で頬かむり、ちよいと小褄をとつた恰好は、厭味だが、よく似合つた二枚目の女形だ。途中まで俺の傘に入れてくれないかといふから入れてやつた。袖が濡れないやうに、肩と肩とくツつけあつて、暗い雨のなかを、遝迤々々と引きずりながら、土手づたひに、例の高尾太夫の墓のある寺の前まで來ると、奴さん、ウンともスンとも言はずに、傘のなかゝら跳び出した。とび出すと一緒に、大門筋の路次の中へ、蝙蝠みたいにヒラリと舞ひ込んだので、呆氣にとられてゐるとだ。このへんは夜になると、性のわるい醉つぱらひが迂路つくのだ。喧嘩を吹つかけられたこともある。脅かされたこともある。物騒な場所なんだが、恐ろしい力で、いきなりドーンと俺の脊なかを突いた奴があるのだ。不意をくらつて、よろ〳〵蹣けるはづみに、足元がわるいものだから、下駄の鼻緒がぷツつり切れた。切れた勢ひあまつて、さした傘は放り出す。帽子は飛んでころがる。ワツと言ふなり、泥水の溜に膝をついて、前のめりに躓つたかと思ふと、電光石火、雨あられだ。俺の體を、ところ嫌はず、棒のやうなもので滅多打ちにぶちのめすのだ。醉つぱら

ひの腕つぶしぢやない。待ちうけての暗打ちだ。こんなところで暗打されるやうな覺えはないのだから、人違ひだらうが、よつぽど恨みがなくつちや、かう亂暴に征伐されたもんぢやない。頭も脊骨もへし折れさうにミシ〳〵應へるんだから、面くらつたと言ふよりや、ふるえあがつて跳ね起きた。起きると一緒に五六歩逃げ足をふんで、曲者を振りかへつて見れば、俺の細君なんだ。髮ふり亂した眞ツ蒼な顔に、背を切つてギリ〳〵齒がみをしながら、太い洋傘を逆手に振り上げて、打ちかゝらうと身がまへてゐるんだから、驚いて物が言へなかつた。正直の頭には神宿るさうだから、正直は尊いもんだらう。その尊い生れつきの俺たち夫婦が、吉原土手下のイロハ長屋に血迷ふてゐるなんて、鶯が竹藪に止つてるやうなもんだ。キが違ふたつて洒落ぢやない。正直の頭に宿るのは同じ神様でも貧乏神の方だから、そんな金言は正直者に貧乏神を任せて置いて、こつちや旨い汁にありつかうといふ奴の呪文だと思へばいゝ。正直にかしこまつてゐると食へなくなる。食へなくなつた揚句の果は、首を釣るか、泥坊になるか、キ違ひになるのが、落ちた公式だ。落ちた例なんざ飽くほど見てゐるのみならず、今や此方もそろ〳〵落ちさうな模樣だから、決して嘘ぢやないとして見ると、淡白ぶら下るほど片づきのいゝ了見の雁首でもなし、

泥坊に志すほどヤケに掘つた度胸でもないと決つたら、勢ひキ印にでもならんとには、猜疑のハケ口も、涙のやり場もなからう、といつたもんだ。だから此の場の光景に對して、物が言へなかつたのは、ひよつとしたら、氣がふれたのではないかと、俺の頭に、閃めかさるを得ないものがあつたのだ。それほど食ふに困つてゐたのだ。さもない限りは、かう激烈に荒遊て貰ふわけがないと思ふと、痛いどころか、突嗟の心配に胸を打たれて、ハッと立ち竦んだが、その瞬間だ。狂亂せる婦人は上段に振りがぶつた蝙蝠傘を地べたに叩きつけ、一間ばかり向ふから身を躍らして俺の首つ玉へ飛びついた。「口惜しい！ 口惜しい！ あゝ！ あ、あ、あ、あなたは、何て酷い人ですか。い、い、今頃は、きつと雨に降りこめられて、さぞ困つてゐるだらうから、迎ひに行きませうと、か、か、か、傘をもつて此處まで來ると、横手から、あなたと同じ柄の着物に、同じ下駄をはいた男が、最合ひ傘に女と寄り添ふて來るんです。おやッ、と思つて暗がりに覗ふと女の顔はよく見えないけど、男は紛れもない貴郎ぢやありませんか。畜生！ ち、ち、畜生！ 自分のおかみさんには、食べるものも食べないやうな貧乏をさせて置きながら、よくも／＼よその女と、往來で巫山戯た眞似がされたもんだ。ねェ、どこにそんな氣色があるんですか。言ひなさい。さあ、言ひなさい。あの女は何です？ どこの娘です？」と、かうだ。豆つぶのやうな眼に、ラムネの玉みたいな涙をためて、ガタ／＼武者ぶるふのだから、さては氣違ひぢやなくつて間違ひの方だ。だから、あいつは女ぢやないよ。女郎屋の息子だよ。おい、手を放せと言つたつて聞きやしない。嘘だ！この目でチャンと見たんだから、隱したつて駄目サ。だまされるものか、と一圖に上氣あがつて動かないのだから、手のつけやうがなかつた。あたりに誰もゐなくてよかつたが、一人でも通りかゝらうもんなら、たちまち黒山だ。わい／＼取りまいて騒がれちや敵はない。ともかくも白狀するから家へ歸らうと、無理無體に引ずり歸つて、氣を落ちつけて、實はかうだと話したら、やつと合點の參る風だつたが、フ、ン、亭主め！ あんなことを言ふけれども、頬かむりの吾妻コートは、やつぱり女ではなかつたかしらん？ と疑るやうな氣味が、たしかに今でも彼女の頭にこびりついてゐるらしい。お蔭さまで、傘の骨はボロ／＼になる。着物は泥だらけだ。頭も腰もフラ／＼して、丸一日、草かつぎに行けない始末だつたが、ゆふべは濟みませんとも御疲れでございましたらうとも言はないのだ。吾妻コートが眞物の女だつたら口惜しいから言はずに置かうてんだらう。これしきのことに、口惜しがるほど、亭主想ひの御婦人をマダムに持ち合

はせて、お仕合はせの限りですと羨む人があつたら言ふて置きたい。前へ出ろ。馬鹿野郎。亭主想ひはさて置いて、これが座蒲團の代りにならうかといふ了見なら、もう少し柔らかに扱ふ筈だ。處もあらうに水だまりへ突倒して、半殺しの目に會はす氣づかひ毛頭なからう。心配するな。現に今も本人が絶叫したやうに、三度の麥めしも啣んでやり兼ねるのは事實で而も、風采と來た日には、淺黑い素肌へ直接に、盲目縞の尻切れ絆纏一枚ぢや、お耻かしい話だが、穴だらけの湯文字が丸出しなもんだから、有り合はせの小汚ない毛布をグル／＼腰にまいて、おのづから芋俵に足の生えたやうな恰好だ。そも／＼こいつが情けないのだらう。お前さんとは一緒に添ふてゐるけれども、世俗なみに白いお米が頂けるまでは、どうしたつて眼中には置けないよ、と言はぬばかりの佛頂面だ。だから斯ういふ場合にだつて、妾といふものがあるのに、何が不足で、あなたはまあ、とか何とか、婀娜つぽい口説の揚句、絞め首にすべきところをだ。張りも意氣地もない癖にしやがつて、人なみに浮氣でもしやうてのかい？　生意氣な！　と、口に出しちや言はないけれども肚にある。あるからコン畜生！　これでも食つて正氣づけ、と俺を逆手に闇からドンと來るんだらう。して見ると、そんなヤクザな男に何の妙があつて、何時までも連れ添ふてゐるのか不思議ぢやないか？　いや、ところが、そこは考へた姐御だ。このくらゐ粗末に踏んでも敷いても、苦情一つ言はない座蒲團なんか滅多にないんだから、御しにくい男に嫁づいて、起きるから寢るまで機嫌氣褄を取るよりは食ふや食はずでも俺と一緒にゐた方が氣樂でいゝと思つてゐるに違ひないからだ。おきまりの餘談が長くなつて恐縮だが、要するに、昔から今日まで、かういふ氣質で押し通つて來たんだから、長屋の戸口に門をかけて、締め出しかねない細君だといふこともわかるだらう。だから此の話の始めに言つたやうに、例の我殺な調子で何かしらん感違ひでもすることがあつたんだらう。厄介な女だが、戸外に立つてはゐられないから、小つぴどく戸を叩くと、家の中から怒鳴り出した。

「うるさい！」

「何が五月蠅いんだ！」

「近所に見つともないから、さうひどく叩きなさんな。」

「そんなら開けろ。開けなきや、もつとひどく叩いてやら」

「あけますよ。仕方がない。」と忌々しく立ち上つて框へ出て來る氣配だ。下駄を突ツかけて、ガラリと門をはづした。はづすくらゐなら締めなきやよからう。と俺も少々ムカツ腹だ。ヤケに戸をあけて土間へ踏み込むと、そのはづみに着物の袖が、細

君の眉にふれた。ふれたかと思ふと、ぴくッとしたやうに跳び上つて「い、い、いやらしい！　わたしには觸らないで下さい！」と悲鳴をあげながら、後足で下駄を蹴とばして駈け上るや否や、俺の道をふさぐやうに、こつちを向いて、ピツタリかしこまつた。その面がまた混み入つたもんだ。あるかないか、覺束ない眉は憎惡にヒンまがり、豆つぶより小さい目玉は憤怒に飛びいで、申し兼ねた鼻の先には、毒々しい輕蔑がブラ下つてやうてんだ。むろん穩やかなる御機嫌ぢやない。また始まつてゐることは一目瞭然だ。馴れてゐるから怖くはないけれども、一通りの荒れ模樣ぢやないんだから、こいつは面倒だと思ふと、いよいよ面倒にかまへて、眞向から俺を睨めつけるんだ。

「何だい。その物腰は？」

「何でもいゝから、そこに立つてらつしやい。上つちやいけません。」

「何故いけないんだ？」

「穢らはしいからさ。」

「穢らはしい？　何がだい？」

「あなたの體がですよ。」

と、ほんたうに穢らはしいやうな、物の言ひツぷりだ。話はんばで道草を食ふやうだが、穢らはしいで思ひ出した——今でもあるだらう？　吉原土手の山谷堀で、サクラ屋といへば、古い繩のれんの馬肉屋だ。大きなコップ一ぱいが、たつた五錢の燒酎をのませるとあつて、いつ行つても一人や二人の勞働仲間が、メートルを揚げてないことはない。で、金のないときなんざ、人の酒で愉快になれる喧嘩の定席ださうだ。喧嘩に思召しはないが、一ぱい五錢には用がある。俺もよく行つた。するとその仲間に、煉瓦かつぎの爺さんがゐるのだ。爺さんの小伜に、小學校へ入つたばかりの一年生があると思へ。どうにか斯うにか、書物は揃つた。帽子が買へないてんだ。さうだらう。人間といふよりは、錆びついた機械の爺さんが、朝から晩まで六十五時間働いたつて五十錢にはなるまいし、雨でも降つたらそれきりだから、張り子の帽子だつて買へやしない算術だ。その爺さんが、明日の馬力をつけるために、サクラ屋の空樽の上に、錆びついた機械の御輿を据えて、一ぱい五錢の油をさしてゐると、件の小伜がやつて來て、おいらの組の子が、みんな帽子をかぶつてゐるのに、おいらばかりが、屋根のない頭ぢやねェか！といふ哀訴だ。だから、一體何べん帽子を冠つて來いと言へば、お前は冠つて來るのか？　と先生が、みんなの前で、おいらの耳を引つぱつて怒るんだよ。早く買つてくれなくちや、學校へ行けねェぢやねェか！と涙ぐんだおろ／＼聲で哀訴する

のだ。何が人の氣も知らないッたつて、學校の教師ぐらゐの奴はない。金でもありさうな生徒の頭をだ。おべつか半分に撫でてやる同じ手を翻へして、貧乏な生徒の耳を引き千切るぐらゐ、屁とも思やしまい。裸で道中はならんかも知れない。帽子がなくちやァ、イロハが讀めないといふなら、貴樣も貧民町の教員だ。煙草錢でも儉約して買つてやるがいゝ。そんな思ひやりの足りない木偶の坊の命令なんぞに、一々かしこまる義理はありません、と逆さに捻ぢ込めと言ひたいところなんだが、そいつは俺の理屈にすぎない。爺さんの腦の空樽に腰かけて見てゐると、爺さん、腹かけの丼を引つくりかへして、それ見な、この通りさ。今日はおあしがないから、もう二三日我慢してくれ、今度は屹度買つてやる、とか何とか、頻りに因果を含めるのだが、いつも此の手を食ふらしい。なかなかウンと承知しないで拗るのだ。爺さん、しばらく弱つてゐたが、そのうちに折角の醉ひも醒めちまひ、赤銅いろの皺面が青くなつたかと思ふと、馬鹿野郎！ てめえ見たいに、聞きわけのねエ耳なんさ、おれが引つぱつてやるから持つて來い。どうだ！ おれと先生と、どつちが怖いか？ と焦れッたさうに怒り出した。兩方から耳ばかり引つぱられては遣り切れまい。待つより他に法がないから、是非二三日のうちに買つてくれとベソつ掻きで言ふのだが、この爺さん親子の家が矢つぱり俺の長屋にあるので、生憎その內幕はよく知れてゐる。待つてくれの二三日が、到底あてになつたもんぢやないのだ。脅かして胡麻化されてゐる小倅が、あんまり可哀相だから、おい、爺さん、その帽子は今晩、俺が都合しやうぢやないか、と橫から飛び出すと、よつぽど思ひがけなかつたと見えるのだ。親子ふたりが、目を丸くして驚いた。むろん此の爺さんも、草かつぎの懷中具合ひは先刻承知してゐるし、現に十錢きり持つてゐなかつたので、酒代を拂ふと五錢しか殘らぬ身分だから、爺さんに言はせると、そりや親切は親切だが、柄にもないことだからビツクリしたてんだらう。俺もさうだ。さうだと思ふ。どだい、人間なんぞに同情したり同情しやうと思ひ立つほど、心がけの確かな俺ぢやないんだが、かういふ悶着にブツつかると、何だか俺が責められてゐるやうな氣色になる。他人の疝氣を此方で惱む筋は毛頭ないし、どう考へたつて割に合はん話だが、持つて生れた病氣だから仕方がない。五九郎の芝居でも見物するやうな按排に行かんもんだから、つひ苦しまぎれに、うかうかと柄にない俠氣の肌をぬいで見せて、つまらぬ事を引き受ける。引き受けた以上は、どうでも斯うでも片づけて了はなくつちや納りのつかぬ性分と來たもので、いつも必ず弱つた揚句に苦悶懊惱するのだ。フン。出來もしない事

を、偉さうに請合つて、大きにお世話ぢやないか。身のほど知らずの物好きにも程があるとか、大概にしなさいとか、細君には罵倒される。さうなると本人は、飯が咽喉へ通らなくなる。が、それにも懲りず、怪しげな肌をぬがうといふんだから災難な話だ。しかも當の相手が此の爺さんみたいに、おや〳〵お前に、そんなことが？ おい、冗談ぢやないよ、と言はぬばかりに驚かれると、馬鹿にするな。同じ長屋に巣くつてゐたつて、お前たちとは仕込みの違ふ男だ、頭の働きを見せてやるから、膽を潰すなと、いよ〳〵意姑地に、ない袖を振りたくなるのが、そも〳〵此の病氣の特徴らしい。だから、おい、爺さん、何もさう妙な顔をしなくつたつていゝぜ、ヘン、出來ぬ相談なら仕方もないが、出來る眞似なら、お互ひに勤めたいもんぢやないか。ねエ、爺さん、人を見くびるのは後まわしにするさ、と利いた風な文句だ。かう言はざるを得ないのだから、呆れてゐる爺さんだつて、やつぱり本氣にならざるを得なからう？ おやおやお前さんそりや眞個かい？ フーム。さうか。そいつは有り難え。思はぬところで佛様だ。どんなに助かるか知れねエ、といつた風に、面を崩して禮を言ふのだ。もう引ッこみがつかない。俺は酒代を投げ出して、繩のれんの外へ飛び出すと、ほんたうに帽子が冠れると思つて、いそ〳〵と小伜が跟いて來るのだ。女郎屋の馬を覗いてゐるやうな形だが、覗きまわしてゐるうちには勘考がつくだらうと思つて、山谷堀から吉野橋の方へ、スタ〳〵歩いてゐると、せつぱ詰れば出るものと見えて、首尾よく行つたら御手柄だが、やり損じたら、息の根のつゞく限りは、韋駄天に走らなくちやならない手品とマラソンの掛持ちみたいな苦しい智慧が出たので、俺は肚をきめた。今は何から知らん。橋ぎわに、一軒の唐物屋があつた。馬の草鞋と人間のネクタイと、犬の首輪と人間の帽子と、一緒くたに列べてあらうといふ便利な店だ。橋の袂に小伜を据えて置いてプイと入つた俺だ。つかひ物にするから、小學生の帽子を見せてくれないか？ と言ふと、頭の大きさは何インチぐらゐか？ と鼻の赤い豚のやうな親爺がきくのだ。ハテナと。そいつは俺も迂然きいて置くのを忘れちやつて、困つたなと言ふのだ。そこへノこ〳〵と橋の方から、小伜がやつて來た。振りかへつて見ると、奴さん、物ほしげな顔つきで、店先へ立つてゐるから、さてこそくの機轉だ。いきなり捉まへて置いて、ねエ、親方。丁度このくらゐの頭の小僧だよ。おい。君は何年生か？ 一年か？ さうだらう。こつちへ來て、頭を出しな。と言ひながら、小伜の頭に合ひさうな帽子を二ッ三ッ選りどりに冠せて見ると、かつちり嵌るのがあつて、一圓七十幾錢といふ正札がついてゐる。

いよウ。なか〳〵よく似合ふぜ。こんな薄汚ない小僧でも、何となく品がついて見えらアね。ウン。これにしやう。これがいい。と獨りで感心しながら、ふところの蟇口を出して、親方のまへに放り出した俺は、やにわに小悴の頭から帽子を引ッたくつた。フフン。から見えたつて、俺も小さい時分には、こいつを冠つたもんさ。どうだい？ こゝろみに冠つて見やうか？ と俺の頭にチョンと乘つけて、勿體さうに見得を切つた。ウーン。成るほど、お前さん、爭へないもんだ。むかしお冠りなすつただけのこたアある。先生樣そつくりだ。とクス〳〵笑ふと、何が先生樣だい。小使の馬鹿面だア！ と小悴が冷やした。馬鹿面とは失禮なことを言ひやがる。畜生。と俺は手を振りあげた。奴さん、ほんたうに毆られると思つたのか、おどろいて逃げた。そこが煉瓦かつぎの子の淺ましさに、逃げるついでに俺の顔へ、ペッと唾を吐ッかけたから、俺は帽子を冠つたまゝ、店を飛び出して追つかけた。その恰好が可笑いと見えるんだ。店の親爺が布袋腹を抱えてゲラ〳〵鼻で笑ひやがる。可哀相だが、笑ひたいのは俺の方だ。いくら待つてゐたつて、二度と再び姿を見せる氣づかひはないんだから、今に不審を起して、ゴールデン・バットの吸ひ殻で膨れてゐるアノ蟇口をあけたら魂消るだらう。吠え面かゝぬやうに笑ふがいゝ。俺は半丁ばかり先で小悴に追ひついたので、かぶつてゐる帽子をくれてやると、貰つてもいゝのかしらんといつた面相だ。おづ〳〵受とつて冠つたかと思ふと、不思議さうに俺を見るのだ。人に物を貰つて呆れることはなからう？ と言つたら、小父さん、有り難うとお辭儀をするのだ。そのくらゐ有り難く思つたら、このさき十年ばかりは、どんな事があつたつて、吉野橋の方へ行くんぢやないんだぞ。わかつたか？ と言ふと、奴さん、默つて頷いた。そこで、いきなりペッと唾を吐つかけたんだ。面くらつて、ワッと言ひながら、顔中なでまわしたもんだから、顔中唾だらけになつた。呉る物は呉るものだ。返す物は返す物だ。相手は子どもだが、容赦すると癖になる。そら來た。驅け足だ。と小悴を引ッ下げて縄のれんの馬肉屋へ逃げこんだ。煉瓦かつぎの爺さんが、悴の頭の上を見ると、俺が一圓七十幾錢奮發したと思つて、氣の毒がること一通りでないのだから、俺の得意も斜めでなからう。どんなもんだい。おい。爺さん。智慧や分別なら、いくらでも融通すらア。困ることがあつたら何でも俺に相談するがいゝ、と偉さうに、爺さんの肩を叩いてやつたのは天晴れだが、たちまち後ろに靴音が聞えたので、思はず振り返ると、巡査が入口に突つ立ち乍ら、こつちを覗いてゐるのだ。俺はギョッとしたが、よく見れば巡査ではない。救世軍の士官だつた。

脅かしやがる士官だ。こいつが、おい君！と俺を手招きするので、何の用かしらん。入口へ出て行くと、あゝ君！ 君はいま良心に疚しいことがあるだらう？ と、他聞を憚かるやうな低い聲で、さう言ひながら、探偵みたいな氣味のわるい眼で、凝乎と俺を見つめるんだ。疚しいことなら、たつた今やつてのけたばかりだから、ドキンと胸に應へた。應へたと見られてはお了ひだ。へゝゝ。御冗談でせう。そんな覺えはございませんよ、と何食はぬ顏で、そら呆けたつもりだが、やつぱり何か食つたやうに見えるんだらう。それ〳〵それが嘘といふものだ。あゝ！君のその顏を見たまへ。おーそろしい良心の苛責！おーそろしい罪の證が。あーり、あーりと現はれてゐるではないか。誰も知るまいと思つて、隱してはいけない。隱しても私は知つてゐる。君が何をしたか、よく知つてゐる。然し私は巡査ではないから、君を罰しやうとは思はない。たゞ神の僕として君の罪を見のがすわけに行かないのだ。その罪の穢れより、君の心を救はねばならんのだ。いゝか。よろしい。蹤いて來たまへ。少し話したいとがあるから私の小隊まで一緒に來たまへ。と物々しく命令するんだから驚いた。現在、まのあたりに唐物屋の親爺が、目玉を拔かれつゝあるのも知らずに笑つてゐるくらゐの際どい藝當だ。誰が見たつて、俺が帽子をチヨロまかしてゐたんだとは思やしまい、と高をくゝつてゐたら、この始末だから、もう呆けてもゐられない。つまらぬ虚勢を張つて、餘計なおせッかいをしたばかりに、こいつにソン捕まつたんだと思ふと怖ろしくなつたが、大將、巡査ぢやないてんだ。その筋へ突出さうとは思はないさうだ。だから、そこは大丈夫かも知れない。大夫だらう。して見ると、何の用があるんだい？ ちよろまかした帽子を持主に返して、あやまれツてのか？ 冗談ぢやない。とは思つたが眞つ平だと言へば、旋毛を曲げるかも知れないから、小隊まで生捕られて行くと、既ばしまで歩るかせるんだから、ひどい奴だ。而も牢みたいな部屋に引き据えて置いて、俺の素性來歴を、根ほり葉ほり訊問しやがる。一體全體、いつ頃から、そんな惡い癖がついたのかい？ てんだ。今ついたばかりぢやないか。手癖の惡い經驗なんか、あとにも先にも今度が始めてなんだから、始めてやつたのです、と正直に白状すると、それ〳〵また、そんな白を切る、駄目だよ、私はチヨイ〳〵君の現行犯を見てゐるんだからね。と言ひやがるぢやないか驚いた。どんな現場を見たのかと伺ふと、縄のれんの馬肉屋で燒酎を呷つてゐる現場なんださうだ。いやに鎌をかけるやうな口つぷりだから、泥坊の一件かと早合點して青くなつたり赤くなつてゐると洒だ。脅かした士官の奴が、人殺でもしたやうな仰山

な面つきで、酒の害毒を列べやがるんだが、俺に言はせると、お前のためには隨分苦勞したと言ふお酒だ。こいつがなかつた日には生きてゐる張り合ひがないのだから、のまぬくらゐなら死んだがましのお酒だ。一ぱい五錢と心中が出來るなら望外の光榮ですよ。餅菓子でもお上んなさいと挨拶してやつた。止れば則ち卮を操り觚を執り。動けば則ち樽を挈け壺を提げて、酒、これ務む。いづくんぞ其他を知らんや。といふた酔つぱらひの御託を聞いて、いきなり袂を奮ひ、衿を攘けて百方攻擊に現はれたる貴公子どもがあつたさうだが、攻擊なかばにして、酔つぱらひが兀然と寢込んで了つたので、貴公子どもは、目を怒らし歯を食ひしばつて引き揚げたと、書いてある本に書いてある。救世軍の士官は、さうムキに憤慨する代りに、君のやうに學問のある人が、そんな亂暴なことを平氣でいふとは情けないと呆れやがつた。俺をつらまへて學問があるなんて言ふところを見ると、大將、よつぽど無いんだらう。何が亂暴だい？　酒をのまずにゐられる世の中ならばだ。酒代の工面に、鼻の上の眼鏡の弦まで引つぱづして、あとで不自由な盲人の眞似なんかするものか。だからつまり焉んぞ其他を知らんやなんぞも、氣取つて言ふた文句ぢやなからう。焉んぞ知つた日には、右も左も癪に障ることばかりだから、酒でも引つかけて兀然と酔つぱらつてゐる間は、面を見るとブン毆るより他に仕方のない人間どもに對しても、兄弟みたいな氣分になつてやらうか、といふほど寛大な了見にもなれるし、また、焼き拂ふより他に仕樣のない世間までが、どうやら賃借りの我が家のやうにも思はれるから、少少氣に食はんことがあつても我慢が出來るといふものだ。もつとも片つぱしから人間の面をブン毆つて歩く暇はなし、さう易々と焼き拂はれるやうな世間でもあるまいから、成るべくなら人間世間の面を見ない工夫をするのが一等輕便だ。漱石の「草枕」には、おならの勘定をされたり、お尻の穴の寸法を取られるのが厭さに、人情世界から逃げ出して、山の中を迂路つきながら俳句なんぞ捻りまげた、のらくら繪師がゐる。汽車賃と宿錢に困らんかつたら、山の中へ韜晦するのも、人間世間の面を見ない工夫だらうが、折角なら首でも釣つて、さらりさつぱり御暇申したら、これに越したことはなからう。來年は太陽が西から現はれて、金持と貧乏とが入れ替るといふなら、今度は此方が自動車の飛泥を引つかける番だから、石にかぢりついても死ぬわけには行かんといふこともある。さう手酸しく變化てくれなくとも、十年に一ぺんぐらゐは大石内藏之助が吉良の邸で返り討ちにあふやうな芝居でもやつて見せるなら兎に角、年々歲々、花相似たり、親爺は俺より年が上と決つた日には、何

年生きたつて同じ理屈で、そんなことア飽き／＼だから、人間世間に未練はないけれども、あとに殘つて路頭に迷ふ細君や子どものことを考へると、さう簡單には片づけないのが人情だらう。人情にからまつて面白くもない其日々々のページをめくつて行くのだ。高い税金を拂つて下手な小説を讀まされるよりや、遙かに辛い。辛い思ひを胡麻化しながら、一日のうちに一時間でも生きてゐるやうな氣色になれるのも御酒の御利益ぢやないか。ねえ、先生。天國とか地獄とかいふのは、國々によつて違ふさうだ。エマヌエル・スヴエデンボルグの「天國と地獄」に、ある地獄には恰も火事跡の家屋や市街の焼けのこりみたいなところに「凶惡」が、とぐろを卷いてゐるんださうだ。寛やかなる地獄には、粗末な小屋みたいなものが連軒都市をなし、なかに住める凶靈間斷なく爭鬪拮抗相擊し、道路には盜賊追剝の類横行すと書いてある。スヴエデンボルグなんか、日本や東京のことは知らん筈だが、知らなくつたつて、そのくらゐの樣子は解ると見える。その寛やかなる地獄といふのは、煮え切らないつてことだらう。一息に殺さないやうに加減をとつて、俺みたいな素寒貧や正直者を玩具にする凶靈どもがゐるのだ。おならの勘定や、尻の穴の寸法はおろか、ジリ／＼賫を絞るんだから始末にいけない地獄だと言つた。ところが救世軍のいふには、その埋め合はせに、君のやうな素寒貧や正直者は、神樣の御姿を見ることが出來るから仕合はせぢやないか。君は其の仕合はせに感泣したことはないのか？　てんだ。感泣どころか、どだい感じもしないのだから無いと答へると、さつそく感ずるやうに取計らつてやるから、五錢出せるか？　といひやがる。何の呪符にするつもりかしらん、家へ持つて歸らねば都合のわるい酒代のあまりを袂からハタいてやると、おゝ！　それは實に素張らしいことだ！　てんだ。ポケットに折りたゝみ込んだものを一つ俺にくれた。はじめて見るんだが「ときのこゑ」といふ新聞だ。こいつを先づ讀んで、穢れてゐる俺の心を淨めてから、もう一度此處へ來てくれるならば、きつと神樣に俺を紹介してやるから、是非來たまへ。サヨウナラ！　と俺の袖を引つぱつて戸外へ抓み出すのだ。家へ歸つた俺は、かういふ譯で、かうなつて酒代のおつりを奪られちまつたと言ふと、そんな間拔けが何處の世界に居りますか？　と細君に怒られた。帽子のカツ拂ひを働くだけ惡智慧に丈てはゐるが、何しろ東京へ出たての田舍者ちやあるし、心底は今みたいに擦れツ枯らしちやゐないのだから、この士官のやうな人を食つた奴に掛かつた日には、間がぬけちまうのも無理はなからうと思つたら、その晩だ。同じ長屋にゐる人の好い巡査が、淺草公園裏の交番の中に

立つてゐると、見知らぬ書生がやつて來て、いま公園で金入れを失くしたといふのだ。ほんの少しばかりしか入つてないから構はないけれども、これから三田の下宿へ戻る電車賃がないから、五十錢ばかり貸してはくれまいか。明日必ず御返しする、と敬々しく名刺を差し出した。こんな時に困るのはお互ひさまだ。大將快よく貸してやつたのは美談だつたが、明日は明後日になつても、書生の姿は見えない。手許が苦しいもんだから、五十錢取返しに、わざ／＼三田の下宿へ訪ねて行くと、そんな書生はゐないのださうだ。ゲツソリ瘦せてよろ／＼と歸つて來る。承知しないのは巡査のおかみさんだ。そんな泥坊を捕まへて御褒美にあづかることは扨て置いて、ありもしない金を貸してやるとは、こいつ氣の知れない馬鹿野郎！と鼻も崩れんばかりに亭主の面を張りつけた。細君は怒鳴るもので、女房は毆るものだ。物音ばかりでも日夜絶え間なく遠方から聞えたといふても大袈裟ぢやない。どうせ長屋に侘び住まふ亭主だ。間抜けと馬鹿野郎に決つちやゐるが、穢れてゐるとは仰々しい難癖ぢやないか。而も鬪らさかりき。その事あつて以來。さつと十年にもなるだらう今日今度は、この暴言を細君の口から聞かうとは？

ここに於て俺の物語が再び元へ戻るとするならば、即ち俺は、家(うち)の土間に突つ立つてゐるところだ。俺の細君は上り口に坐りこんでゐる。俺は面くらつて言つた。

「穢らはしいた何だい？」

「なんて呆けて見せるのが、昔からお上手で、よく瞞されたもんですがねェ。駄目さ。ちやんと證據が上つてゐるんですよ。ごらんなさい。これは何です？」

と、豆粒大の黃色いものが、一ぱい詰つてゐる小さい瓶だ。袖から抓み出して、俺のまへに放り出した。拾つて見ると「淋病消渴三週間必治藥の淋丸」といふ貼札(レッテル)の登錄商標に、鯰ひげの紳士が、前を押へて呻吟苦悶の圖があるのだ。妙なところから、妙なものが飛び出したので、何のことやら、譯がわからずにゐると、細君の態度が、やい！　どうだ。恐れ入つたか？と言はぬばかりだ。毛蟲でも抓むやうな、大袈裟な面相で、俺を睨めつけた。「あなたに限つて、そんなことはなからうと思つて安心してゐれば、この始末だ。わるい病氣にかゝつたもんだから、わたしに內證でこんな藥をのんでゐるんでせう？　いつ何處で遊んだのか、まつすぐに白狀しなさい。わたしにも了見がありますからね！」

と言ひながら、憤然として箒を振り立てるのだ。成るほど、そいつが穢らはしくつて、家へ入れないでてんだな？　やつと吞み込めた。憚りながらも大概の事は一通り勉强した筈の俺なんだ

が、蘇丸の厄介になるやうな稽古は、一ぺんだつて試みた覺えがない。ひまがない。金がない。暇があつたつて金があつたつて、こんな細君に監督されてゐた日には、到底出來るもんぢやなからう。貞操と賄ひは、もつぱら女の仕事になつてゐるのが、よそ樣の流義と見受けるが、こちらの家風は、あべこべだ。貞操の方はむろん。自分で買つて來る鰯を自分で燒いて、召し上るおかたが、ときどき細君だつたりする。將棋は二葉よりたア言ふたもんだ。この婦人が生れて二年目には、蜂の子や玉蟲を玩具にするのだ。蜂の子や玉蟲が命令通りの藝をしないと、口の中へ持つて行つて嚙みつぶすのだ。それから碁に將棊の駒をつみ上げる仕事が始まつて、巧くつめないと大鉢に駒を投げくべる。火あぶりの刑だ。それから今度はチヤブ台を引つくり返して乘り込む。仲間の俺に引つぱれと言ふから引つぱると、これが水雷艇ださうで、水雷を發射しなければ納まらない。水雷の役目をつとめるのが彼女だ。チヤブ台が疊の上を辷りつゝあるとき、蓬然と躍り出して、俺の鼻の先でドンと爆發する拍子に、俺の頭を叩くのだ。いくら我慢づくでも、大將と俺とは三ツきり違はないんだから、叩かれちや遣り切れまい。慌てゝ逃げ出すと憤慨して、手あたり次第に物を取つて投げるんだから、扱ひにくひことと一通りでないと思つて恐れをなしたが、今で

も此の調子だ。何でも一々尤もに承はらん限りは、たちまちの二百十日だ。亭主たるものゝ神妙さ加減は、これだけでも凡そ解るだらう？ 冥途の土産にしてもいゝ。たつた一つの哀れな御自慢になつてゐる。これすでに世間周知ださうだ。從つて、よその亭主に乙な間違ひでも起ると、待つてゐましたと言はぬばかりに、うちのオヤヂは、そりやもう堅いもんです、と御自分の旦那を褒めてあるくほど信用してゐるんだ。だから、この分なら年に一度ぐらゐ間違つたつて、疑はれる氣づかひは、なささうに思はれるだらう？ 況んや、そんな寃罪を蒙るだけの疑ひある場合だつて、もう少し落ちついて、ことの眞相を確かめてからの文句にして貰へさうなもんだらう？ と思つてゐると、この通りだ。あたまから高飛車に決めつけて了ふのだから、あてにならん信用だが、いゝ加減にあしらふと、事面倒になつて、問題惡化の虞れあらう。內に顧みて疚くないだけに、怪しかんこと夥しい。こ、こ、こ、こんな丸薬をのむやうな人物と思ふのか？ と矢庭に景色ばんで、開き直つたところは、心外の形だ。「のまないものが、何うして家にありますか？ 考へてごらんなさい。月桂冠に盛の壽平！ ビールにサイダア！ ヘルプにラタトスターゼ！ 瓶に入つたものは、あなた一人が飲むんぢやないか！」

「そんなものは、大びらに飲めないもんだから、はゞかりに置いたんでせう？
わたしに見つからないやうに、はゞかりの隅つこに隱してゐるんだからね！」

「ふうん。さうか。ぢやア、前にゐた人が、引つ越す時に置き忘れたんだらう？」

「ところが一昨日、こゝへ引つ越すと一番に掃除をしたのは、はゞかりですよ。その時、こんな物がありましたか？　どうです。ねエ。今朝までなかつたのさ。今朝から晝にかけて入れたものに違ひないのですよ。そオら。あなたぢやありませんか？ほかに誰が家の、はゞかりに入りましたか？」

と理詰めて見れば、それに相違ないんだから頗る面妖だが、俺たち家族のほかに、便所へ入つた奴は誰もゐまいと言はれて思ひ出したのが、隣りの鼻毛だ。電話の貸し借りには、二錢とられるから、忘れないかも知れない。何しろ便所は只だから、貸したことは、一寸失念して居つた。例の活動寫眞の烏天狗に、俺の名まへを融通してくれと賴みに來た九助が、談判なかばに立ち上つて、股ぐらに手を入れたかと思ふと、便所へとび込んで、十分間も出て來なかつたことは、前篇に於て詳細を極めてゐるのだから、物おぼえのいゝ讀者諸君よ。あの時の九助の失禮な恰好を思ひ出して、もう一度笑つてくれるなら、俺も笑ふ。「あはゝゝ。わかつた。今朝の鼻毛だよ。おい。お前が子どもを背負つて外をブラついてゐる留守に、鼻毛がやつて來て嚥め舌りこんだ。その時それ、この瓶の錆にあるやうな嚥めッ面でブルブル震えながら便所へ入つたんだが、出るとき慌てゝ置き忘れたに違ひない。いや確かに奴が飲みさうな丸藥だよ。今に歸つて來るだらうから聞いてごらん。」

と言ふた。てつきりさうだと思ふのだ。この際、俺の人物の高尙なことを力說するのは、俺の潔白證明にとつての一法だらう。そのためには、片つ方の鼻毛をつらまへて置いて、こいつが通つた跡には、草も生えない下司下郎の生蠻あつかひに扱つて見せるに限ると思つたから、本人の九助が聞いてゐたら、卒倒するかも知れないほど矢鱈滅法に扱きおろすと、これが功を奏したものだ。御婦人の激怒がだんだんおさまつて、お了には半信半疑の境まで動いて來た。惡口も効目のあるもんだ。論より證據は、彼女の切なげなる胸に見るがいゝ。重ねてピタリと兩手が置いてあるだらう？「嘘ではないでせうね。あなた。それがほんたうなら、わたし、どんなに嬉しいか知れませんわ。あなたと、わたしとは幼ない時からの——」云々と、事こゝに到りますれば、始めてニコニコと面映ゆげに綻びて、聲も哀れに俊

しく、私に取りすがるのであります。この邊のくだりを、新派名代の、いゝところで五六枚、上手に使ひ分けまするならば、光景、まことに奥ゆかしく偲ばれることでありませうが、持つて生れた私の地聲と、不器用な身のこなしでは、到底もつて、情が寫りません。もつとも餘り寫りすぎると、そら、また例の宮島にドツかれる心配もありますから、この位にいたして置きます。とにかく是が、私を家に入れない覺悟で締め出しを食はせやうとした御方であるとしますと、成るほど私の細君も矢つぱり女ですよ。やさしくならうと思へば、幾らでも優しくなれるものと見えます。つまるところは、世界中の男といふ男が、鼻毛の持藥の世話になる日があらうとも、彼女の亭主たる私にばかりは其の權利を與へないといふ彼女の眞心の致すわざであると思へば、戸じめを食ふことや歐られることは、むしろ有り難き仕合はせと感ずつて置くべきではないでせうか？——もつとも是だから尻に敷かれるが——と、かう言ひたいのだ。巫山戯てゐると思ふなら思へ。これでも俺は大眞面目だ。事實この通りなんだから仕方がない。ところへ

「ごめんなさい。先生。ゐるかね？」

と後ろの戸口から、聞き馴れぬ聲が不意に入つて來たので、俺は振り返つた。木兎のやうな顔に、赤い目玉のついた男だ。「エゝ私は市川松五郎と申します。甲州は初雁村の者。たゞ今は日本藝術映畫撮影所に傭はれて居りまする駈け出しの俳優。どうか御見知り置かれまするやう！」と、色の褪めた紺絣の筒砲袖を搔き合はせて、お辭儀をするのだ。九助の、いわゆる市川の松公とか、松印といふのが、この化けものだつた。山家育ちの木登りは達者だが、カラキシ名前がないので、いま撮影中の「双影」に、鞍馬の烏天狗を勤めるについても、ほかの役々の顔ぶれと釣り合ひが取れないから——といつて、杉の梢に雲とあらはれ霧と消える離れ業の出來さうな役者は一人もゐないので——芝居だけは此の男に演らせて、鞍馬の天狗には、俺の名號を借用に及びたいといふ前篇の物語にも、九助の口から噂にきいた無名俳優だ。「先生に折り入つたる願ひの筋あつて參上しました。」といふから、ともかくも上りたまへ、と言ひたいが、何しろ痲丸の悶着が、圓滿に解決しさうで、しかけたまゝの形になつてゐるのだ。あんなことは言つたが、俺の細君は、まだ充分納得するところまで行かんと見えて、上り口に頑張つたなり、俺にも上んなさいと言はんのだから、松印にも上りたまへ、と言ふわけには行くまい？　だから兎も角も願ひの筋を、土間に突つ立つて伺ふと、奴さんは疊の上で申すつもりだらう？　脱きかけてゐる下駄を穿き直して、もじ／＼してゐたが、立ち話では具

合ひがわるいと見える。紺絣の裾をまくつて、泥だらけの脚に腰かけた。

「エヽ。ほかでもない。烏天狗の一件であります。私の師匠や先生から、お願ひ申しましたるところ、あんた様には一應お斷りなすつたと聞いてビックリ、これはハア。烏天狗の本人が、七重の膝は八重九重に折りまげて、もう一ぺん懇々と御願ひ申したならば、よもや御聞き容れにならぬこともあるまいと存じて、さつそく飛んで參つたのであります。ハイ。」

と、七重の膝を八重九重に、口の先で折り曲げるのだ。師匠とは鼻毛の丸助だらう。先生とは田屋公に違ひない。こいつらの社會では、撮影監督が先生になれるさうだから、先生にも、下には下があるもんだと思つたが、一たん鎗をふるつて拒絶したのだ。天狗が來やうと何が來やうと、一應も再應もあるものか。物を言ふのも忌々しいから、横さまに手を振つて、平たく彈ねつけた。相談も事によらア。原稿は此方で書きますから、原稿料は貴方が御拂ひ下さい、とか、學校には手前が參りますから、卒業の方は、貴方にお願ひします、といふなら、物は解つてゐるが、名まへだけでもだ、活動寫眞の烏天狗になるのを名譽と心得てゐる馬の脚に借用された上に、阿呆陀羅經まがひの文句入りで廣告されて、よろこばしくなれた義理か何うか？考へて見ろ、と言ふたら、この權幕におどろいたんだらう。木兎みたいな奴さんの頰つぺたが膨れ上つて、赤い目玉が、きん丸くひろがつたかと思ふと、肚の底から、ハーア、さうでありますかー、と死ぬやうな聲を出して、息を引き取りやがつた。

他愛のない男だ。活動役者が下手すると、カーボン電光で眼を痛めるさうで、打つちやつて置くと盲目になることもある。パール・ホワイトなんて有名な女優も、盲目になつて沒落ださうだ。この男の目玉の赤さ加減で見ると、よつぽど下手にばかり立ち廻つてゐるらしい。餘計なお世話かも知れん。俺に言はせると、大將、駈け出しで幸ひだ。目先の明るいうちに、烏天狗なんざ廢業しちまつて、甲州へ引揚げて水晶を掘るとか、葡萄畑の手入れでもした方が安全だらうといふ風な說諭になるのだ。

「ハア。全くさうであります。眼はマナコと申すくらゐ、昔から大切なもので、私なんか、とても名優になれる望みはありませんし、いくら名優になつたところで、こいつが潰れた日には往生であります。」

と言ひやがる。眼がマナコと申すことも、名優になれる見込みが立たんことも知つてゐるほど、確かな性根があるなら、猶さら此の際、馬の脚を洗ふのが眞個ぢやないか？ と言ふと、

れが出來るくらゐなら苦勞はいたしません。名優はとにかく、ひとツぱしの名代になるまでは、故郷へ戻るわけに行かん事情があるんださうだ。讀者諸君よ！　こゝに世にも類のない歌舞伎道樂の貧乏人があると思ひたまへ。その貧乏にもかゝはらず、浮身を粹に窶すことの御自慢さ加減は、絆纏細の褌でなくちや、締めた氣がしないといふ凝り方を以て知るべし。ある日だ。町內衆の素人芝居は幡隨院長兵衞に、勇み肌の町奴の役を買つたのである。粹人の得意や想ふて餘あり。すでに狂言の筋は運ばれて、いよ／＼彼が大向を唸らせる筈の幕。即ち侍と町奴の喧嘩場となつて、侍は鞘を拂つた。そこで大將の啖呵だ。やい。三ピン！　斬なと突くなと勝手にしやがれ！と斜にかまへて舞台のまん中。パッと威勢よく尻をまくつて坐つたらう、さあ割れるやうな拍手喝采に、高島屋ァと來……來たか？　いや來るのを待つてゐたら、見物はドッと噴笑だしちまつた。さうだらう？かゝる時にこそ灼然と光らなくちやならん理屈の、絆纏細の褌が見えなくて、いわゆる靑大將が鎌首を出してゐたのだから。大人御存じなしさ。前の日の米代に窮して、實物を質に入れたことなんか忘れてゐたのだ。といふのは古い落語ではないかしらん。話を聞けば、どうやら此の粹人に、手垢、泥ぼこりを塗りつけたら出來上るかも知れない肥料くさい芝居狂が、即ち此の木兎印の松公。實直な山里の畦道にも、こんな不心得の痴れ者が、往々さまよふてゐるものだ。鋤鍬かついで一生のページを、悠々と帳消しに消してりや、申し分はなからうに、折りがあつたら、叶ふことなら、役者になつて、廣い世間に謳はれたい、などゝ身のほど知らずの心願をかけたもんぢやないか。そこへ何處からともなく吹き流れて參りましたといふ姿で漂着したのが、旅役者の一座とすれば、渡りに舟では適切な文句ぢやないかも知れんが、要するに好箇の手蔓だらう。勢ひ、躍氣となつて引き留める親兄弟や耕友の面前に、鋤鍬を放り出して驅け込まんずる覺悟のほども賴母しく、一座の親方に見せて置いて、どうか弟子にしてくれといふわけだ。それほど迄に、藝ごとが好きなら、まあ試みに演らせて見るのもよからう、ぢやござわせんか！　と今度は座長から、親元に掛け合ひをつけると、仕方がない。村の面目や親の恥は二の次でも我慢するとして、わが身の顏に泥を塗らぬやうな工夫がつくなら、どんな眞似でも晒すがいゝと諦めの段取りとなつて、二三日の下稽古がすむと、村興行に移るのだ。「不如歸」の出し物は、華族なにがしの書生に扮するのが松公とあつて、村の衆が、天幕張りの掘立小屋にギッシリ詰め寄つたのは、本人にとつて有頂天の光榮だつたが、幕を引けば、華族の邸は庭のつもりだ。不斷着の筒袖に怪

公の書生だ。竹箒を奮つて、そこら一めん掃きまはつてゐるところへ、相手役者の下女だ。これがまた無性な風體で現はれると切つかけになつて「塵が多くて骨が折れる」の「僕に代つて掃いてくれない」のと言へば「いやなことだよ。お前さんの仕事ぢやないか？」と、だら〳〵列べる、お定りの臺辭が始まつて、五分間も巫山戯たらうか？ 牛と狼の喧嘩に雞がおどろいたやうな驟然たる怒號だ。見物の席から不意に起つた。「おい〳〵松五郎！ 幕をあけてから、舞臺の掃除に取りかゝる野郎が、ハア、何處にあるかよ。間ぬけめ！」「ほんとに、ハア、手まはしのわりい役者ぢやねエか？」「さうだアよ。掃くなら掃くでえゝから、幕をしめてくれい。埃がたまらんわい。松坊！」「何さ。掃くのはえゝ加減にして、早う芝居を始めんかい。松ツ！いつまで待たせる氣かよ！」てんだ。阿波の鳴戸か手習鑑か、五年に一度まわつて來るか來ない田舍專門屋の藝題にしたところで、未曾有の豐年か、よつぽどの暇な時でなくちや、覗いて見るやうな村の衆ぢやないのだ。新派も舊派も芝居といへば、郡長さんの葬式以上に事改つて物々しいもんだと呑み込んでゐるんだから、そこを參酌して是ならば、仰々しくつてよからうといふ「不如歸」が此の通り。松公の親父に義理を立てゝ總見に來た甲州勢にかゝつちや、形なしの體だ。役者一同も、さぞ腰をぬかしたらうが、やめるわけにも行くまい。騰々たる苦情嘲罵の煙に咽びながらの死物狂ひだ。川島武男が乘つて行く汽車を見送つて、浪子は今や涙の雨となれば、劇中の劇と力瘤を入れて勸める幕まで漕ぎつけたつて、これが商賣だから感心するに及ばんが、浪子と別れて武男が引つ込むと、大きな張り子の汽車があらはれるだらう。あらはれないうちから、浪子はハンカチを振り〳〵悲鳴をあげてゐるに拘らず、大向ふの五百羅漢には、物の哀れも人並みに通じないと見えて、ホロリと催しさうな面がまへぢやないのだ。浪子になつた座長のおかみさんも、情けないやら悲しいやら、張り合ひがぬけちまつて、かうなると寧ろ本物の涙がこぼれさうな氣持ちなんだ。さうだらう。ところが、そいを我慢してハンカチを振りまはしてゐるところへ、ピリ〳〵森！と舞臺の隅から押し出された眞つ黒い大きな汽車を見ると、後毀で馬が立つたやうに、汽罐車を空に向けて、眞つ直ぐ突つ立つてゐるぢやないか。突つ立ち乍ら通つて行つたんだから驚ひたらう？ おどろひた拍子に、こぼれさうな涙も、引つこんぢまつたといふのだ。あとで聞いて見ると、汽車の押し役になつたのは、この村の百姓の爺さんで、道具方の手傳ひに傭はれたのだが、まだ一度も汽車を見たことがないので、横竪の見當がつかないのも無理はなからう。心配するには及ばない。見物の衆が矢つぱりさ

うだから、汽車つてものは、背の高いもんだと思つて見てゐたらう？ これが爺さんの挨拶ださうだ。日露戰爭も革命も知らない露西亞人と出會するたびに、大陸は違つたものだと感心するんだが、明治二年の九月以來。わが敷島にも汽車は毎日走つてゐる筈だから、影も姿も拜んだことがないとすれば、成るほど、土地は狹いが大日本とは名づけたものだ。さう言へば、慶長以來四百年にもならうといふのに、時計の存在を知らなかつたのが拔刀隊だ。こいつ獨りでカチ〳〵動いてボン〳〵鳴るとは妖魔變化のたぐゐと睨んだものだ。或る夜ひそかに寄つて集(たか)つて、ある港の縣廳の屋根時計を突き落し、鍵の穴に槍を通して、尤もらしく止めを刺したら、息の根がパッタリ絕えたと喜んで凱旋したつてんだ。そのとき迸つた妖内の黑血が、穗先にこびりついて落ちないといふ槍を大事に保存してゐる向きもある。黑い血とは機械油だらう？ 油なら石鹸で洗ひさうなもんだが、洗はんところを見ると知らないんだらう。浦賀の客はペルリの船に嚴談と押しかけた石見守一味が、アメリカ土產に貰つたものには石鹸もある。風の音に擬へてゐる筈の一物を知らずに食べて了つたといふのだ。噓のやうな話だが、江戸つ子と生れて吉原の方角に通じない先生があつたり、亭主ばかりが町内で御存じないこともあるんだから、強ちの迂濶たア言へまい。何しろ大正は十三年の秋にもなるのに、この初雁村では、これからボツ〳〵西南の役でも始めやうかと言ふほど落ちついてゐるんださうだから、落花生の發明品も、これが芝居かと呆氣にとられたつて、不思議なこたアない。五里霧中の待遇だ。祭も大詰の愁嘆場となつて、座長の娘が、浪子の妹に扮したらう？ 浪子の墓に取りすがつて、泣き入らんずる所作よろしげに演(や)つてゐると、席(むしろ)じきの客席から、悠々と花道をつたつて、舞台にあらはれたのが百姓の爺さん。つゞいて婆さん。これがその、蒸(ふか)し芋と煉り柿を一ぱい盛つた大きな目笊を小脇に抱へてゐるのだ。何をするつもりかと思へば、爺さん、「これ〳〵チイや」——と、浪子の妹の肩を叩いた——この邊では他所(よそ)の小娘を、チイと呼ぶんださうだ——「さあ、これをあげるから、お食べ」——と、婆さんの手から、目笊を引つたくつて、チイに押しつけたらうぢやないか。泣くのを止めて驚いた彼女だらう？ 受取つていゝか惡いか、わかるまい？ 後ろに控へてゐるのが、座長の扮した浪子の父は片岡氏だ。將軍の顏いろをチラ〳〵窺ふと、これは大將弱りましたなんて洒落どころぢやない。見物の村の衆が、ハア、氣の利いた功德をさつしやるわい、と言はぬばかりに感嘆の聲(こゑ)と來てゐるんだから始末がわるい。芝居の邪魔になるから、餘計な親切は引つ込めて貰はうと言へば、お客さん全體の

機嫌にかゝはるだらう？ もつとも、チイの藝が眞に迫つて巧いのに感ずればこそ、芋でも柿でも呉れるんだと思へば、腹も立ちかねるから、有り難く頂戴して置いた方がよからう、と考へて受取つた目笊だ。さしあたり置き場に困るので、チイの機轉だ。墓の前に散々しく供へたものだ。爺さん夫婦が、悦に入ることの夥しき次第は、この話を聞く方でも頗る愉快だが、大向ふの村の衆まで嬉しまぎれに歡呼の聲をあげたんださうだから、甲州の山里に入ると悲劇も、とかく陽氣でいゝ。而も後で聞くと、これも何うやら、チイ公の藝に感じたのが元で起つた悶着ぢや、なさゝうだ。爺さん夫婦にとつては一人娘が死んだばかりで、墓詣りに孫をつれて行くと、チイが演るやうな具合ひに泣き悄れるので、こいつ芝居とは思ひながらも、身につまされて動き出したといふ話だから、さぞガッカリしたらうが、どだい芝居扱ひにしちやゐないのだ。ゐない方が維新の風に吹きあまされた連中だから、むしろ扱はれないところが、新派屋の面目だらう？ だから興行は失敗しても泰然と構へて居つたさうだが、松五郎の身になると、さうは行かない。こんな一座に連がつて歩いた日には行末が思ひやられる。たつた今手を切つて了はなければ、親子兄弟の緣を切るなんて脅かされたらしい。兩手をついて恐れ入るかと思つたら、一座と一緒に、村を夜逃げと來た。志も立てやうに依つちや、度しがたい苦勞となる證據には、武州川越までのして行くと、御難つゞきの解散をくらつて飲まず食はずだ。東京へ向いて、瀧の川まで歩いて來ると、松公の目についたのが、例の撮影場の門に貼り出された烏天狗はエキストラ募集とある。水泳で飯を食ふ俳優は承知してゐるが、木登りが達者なお蔭で試驗に通つた役者は初耳だ。松公だつて、山猿の輕業が役に立たうたア思はなかつたらう？ 思はぬ方角に血路をひらいてホッとしたのであるが、さて此の道に入つて、昨日まではカフエーの女給であつた娘が、今日の花形女優と一躍し、今日まで洲崎の女郎である女が、明日のプリマドンナと成りかねぬ形勢を觀ずれば、修業格式の面倒な舞臺役者とは大きに違つて、出世がし易いやうだから、暫時の辛棒が、一朝の桂冠を齎らさんとも限るまいてんだ。成るほど、さうだらう。刀とステッキと間違へて振りまはしたのが大當りの素人役者もゐる此の節。木登りだつて馬鹿にはならん。まかり間違へば成功するかも知れない。だから成功するまでは、故郷へ舞ひ戻るわけに行かないのが男の意地なら、いやでも天狗を廢められぬ由緣。また其處にあるんださうだ。右のやうな身の上ばなしを、木兎印の松公は、次のやうに結んだ。曰く。「つまり、さう思つて明日の運命を樂みに、烏天狗を勤めて居りますと、

無名の天狗では見世物にならないから、あなた様の御名號を借用することに決つたので、すつかり失望しましたが、天狗風情に貸名は相成らん、と、あなた様の仰有る。世の中には隨分手まはしのいゝ人達もあつたものです。もう七分通り仕上つた映畫には、あなた様の御名號を燒附けて了つてあるので、今更何とも法がつかないから、いやでも應でも、貸名してくれるやうに、先方へ行つて泣きつくのが、ひるがへつて思ふに、天狗自身の義務ぢやないか？ だから、それしきの腕がないやうな俳優では、將來賴母しくないから放逐だ。なアに、面を被つて演る芝居なんざ、誰だつて間に合ふさ。貴樣も其の積りで掛合ひに行つて來い、と師匠や先生の無茶な命令ぢやありませんか？ ですから、あなた様は御承諾がないと言つて戻つた日には首でせう？ かうなると失望どころの騷ぎぢやないのであります。どうか其邊の情狀御酌み取りの上、可哀相な松五郎と思召し、この際、曲げて御聞屆けを願ひたいのであります。ハイ。」

と立ち上つて敬禮した。背水の陣を脊なかに舁いで、絕對絕命の面をかぶり悲愴なるもの〻聲を眼底に浮べ「助けてくれ」と拜む聲を出したら、かういふ人相になるかも知れない。稽古がつむと、このくらゐの藝當は必要に應じて演つてのける商賣の馬の脚だから、半分ぐらゐは嘘と見つもつても、かう切實に演られると、初雁村の爺さん夫婦ぢやないが、昔も今も、似たり寄つたりの難儀骨髓に徹してゐる俺だ。人ごとならず、身につまされて來るのが自然の傾向だらう？ それもそれ。頼まれた以上は、こちらの舟が引つくり返るのも厭はず、よその難船に漕ぎ出したり、願はれた以上は、おのれの家が燒けるのも構はず、よその火を消しに行くやうなソロバンに合はぬ人道業の看板は、夙の昔に引ッぱづした了見。即ちこれ、本編の冒頭に於て明らかに斷つてあるが如し。友人とは何ぞや？ こちら樣に取つて最大苦痛の原因なり。と、フエネロンは申したが、友情の流れと、地中海とは、昔から他人の着物を剝ぎとつたり、命を拉つて行く海賊の出る航路と思つて差支へない。乘り出したら災難だと心得てゐる癖に、とき／＼流れに誘はれては、してやられるのだから、今度こそはと、こゝまで冷靜頭と構へて來たのだ。松公の繰り言なんざ、鼻の先でも應らふつもりで話を聞いて來たのだが、さうは行かないのだから、やつぱり駄目だ。俺みたいな上等な人間は氣が弱く出來てゐると見えて、今言つたやうに、人事ならず身につまされて、安つぽく感動すれば、ふん張つたブレーキも、おのづと弛んぢまふ。これだから人間は上等だが、お目出度いので舐められたり食はれたりするのだ。似た者夫婦と、よく言ふだらう？ 俺の相棒がまた俺に負けない御人好しと來るんだから敵はない。物語り終つて、額の汗を拭いてゐる松公を見ると、もはや麻丸の悶着は、忘れたやうな形の彼女だ。「何だか知りませんが、あゝ熱心に賴んでゐらつしやるんですもの。あなたに出來ることなら、承知して上げた

らいゝでせう？」

「おッ。奥様でいらつしやいますか。まだ御挨拶も申しませんで。ハイ、とんだ失禮をいたしました。」と、現金な木兎だ。今まで眼中に置いてゐなかつた俺の細君の方へ、あたふたと向き直つて會釋しやがる。「奥様！　どうか一つ、あなた様から御頼み下さいませんでせうか？　それはその、かういふ話なんであります。」と元氣づいて、事の説明をすると。

「ヘエ！　さうですか？　宅の名前を貸して上げると、幾らか謝禮をするつて？　ヘエ。珍らしいことね」と、御婦人は目を丸くして驚き乍ら、俺に向つて勇み立つのだ。「ねヱ。あなた！　譯はないちやありませんか。名前なんか幾らでも用立てゝお上げなさい。——何ですつて？——苟くも一國の文士が何ですつて？——名聲にかゝはるやうなことはと仰有るんですか？　ふん。また始まつたのね！　それしきのことで、剝げるやうな名聲の金箔なら、貼らない方が、よござんせう？　サツパリするやうに剝いでお了ひ遊ばせだ、已惚れにも。いろ／＼變つたのがありますが、苟くも一國の文士といふのが一番情けないのさ。ほんたうですよ。一國だか萬國だか知りませんが、あなたみたいな文士なんか、世間の方で人間の數に入れちやゐますまい。その證據には、それ。わたしの眼玉を御覧なさい。天狗に名前を貸すと、幾らかしら、謝金が貰へると聞いて、こんなにおどろいてゐるぢやありませんか？　わたしが、會社の重役か局長さんの奥様であつたら、こんなに驚くでせうか？　といふんですよ。さうでせう？　それほど文士の奥さんに貧乏させる世間に對して、名聲の外聞のとありもしない見榮をはる義理が、何處にござんすか？　そんなことはみんな會社の重役か局長さんのなさることとさ。馬鹿らしい。この節の案山子と、あなたの名前なんか、雀の脅かしにもなりませんやね。それでも欲しいと仰有るかたが、おいでなさるんだから、案山子が雀を生捕つたよりや、剛勢奇特と思つて、ドシ／＼貸して上げなくちやならないのに、坊つちやんや若旦那ちやあるまいし、苦勞も貧乏も、來世の分まで腹一ばいして來たくせに、それしきのことに煮え切らないやうでは心細い話さ。いゝから承知しましたと活潑に仰有いよ。この方もさうでせうが、わたしも助かるぢやありませんか。ねヱ。原稿のひまには、とき／＼天狗にもなつて頂かなくちや追つつきませんわよ。天狗になるのが何の不名譽です？　ほら！　御存じでせう？　むかし。讃岐院様が——此經を魔道に沈め、われはこれより魔王となつて此遺恨を散ぜんと仰せければ、この由都へ聞えて、御有様を見て參れとて、平左衛門尉康頼、御使に下されけるが、參りて見奉れば、柿の御衣の煤けたるに長頭巾を卷て、御髮をも召されず、御爪をば生へさせ給ひて、此身ながら、大天狗の姿にならせ給ふ——と保元物語にあります。學校にゐる時分、一そこの條を國語の試驗に出されて、出來なかつたので、くやしくつて今でも覺えてゐます。讃岐院様といふのは、崇徳天皇で

すよ。西洋では誰が天狗になつたか知りませんが、日本では、一わたしが知つてゐるだけでも、峯の僧正。智教上人。忠圓僧正がありますよ。太平記に書いてあるんだから、嘘ぢやありません。それから爲義判官。それから木馬之助忠正。それから」

と言はせて置けば、この通り、際のない女だ。木兎印の松公も呆れてやがる。天狗の過去帳なんざ、そのくらゐで澤山だ。

「そんなら承知しなさるか？　恥かしがることはありません。かりそめにも、讃岐院樣や峯の僧正までが」と、また言ひやがる。さう冗く列べなくつたつて、先刻から共氣になりかけてゐたんだ。仕方がない。承知すらァ。俺の負けだ。かういふと公事や喧嘩にかけて、いかにも押しが利かなくて、腰が弱いやうに見えるが、さうぢやない。うるさく執ッこく絡みつかれるとウンザリするのだ。だから後は何うならうと、目先の五月蠅いのが、たまりかねるから、負けてやるのだ。こいつは失敗つたと思つたつて後の祭で、今度も矢つ張りさうだらう？　天狗になるとは箆棒な！　おどろいた話だとは思つたが、何ぞ知らんや。天は光明にして自在なり。狗は痴闇にして不自在なり。則生佛不二。と佛說に申すところ。元來人間の地金は悧發叡哲なもんださうだ。心の本體は、明鏡止水の如しと、莊子も仰有る。生くるがためには馬鹿になるてんだ。して見ると、人間はみんな天狗になる下地を備へてゐるわけだ。貪するに從つて、ますます鈍する俺なんか、人に頼まれない先から既に天狗になつてゐるんぢやないか？　堺山神。天恐居之。是多怪風雨。と、山海經には天狗に天恐と當てゝある。この方が早わかりだ。天恐に見立てられたつて苦情は言へまい。「有り難うございます。それで安心いたしました。やはり奧樣でなくつちや、いけませんなァ。流石にどうも、へゝゝ」と木兎の松公が、ホクホクしながら煽てやがる。では、早速この事を皆に報告いたします。ごめんなさい。と一たん戸外へ飛び出した松公が蒼皇と引返して來た。「えゝ。師匠に頼まれ乍ら、つい忘れて居りましたが、今朝ほど、こちら樣の便所に師匠が」と言ひかけた。おれだ、俺は後ろ手に持つてゐた麻丸の瓶を出して見せた。「これだらう？」「恐れ入ります。とんだ代物を置き忘れたものでありますな。あはゝ」と笑ひ乍ら受取つて行つた。「それ見ろ。どうだ。疑ひは晴れたらう？」と俺は言つた。思ひ違ひをして相濟まん顏つきでもするかと思ふと、「それで漸く當り前だ。そんな邊に突つ立つてゐないで家へ上つたら何う？」だと言ふた。くれぐれも斯ういふ豪傑だから、喧嘩に負けるのも無理はなからう？

ちなみに「双影」が出來上る頃、會社は潰れたが、映畫は田舍を廻つてゐるさうだ。天狗の名前は俺だが、面を剝がしたら俺でないことは以上の三篇を以て明らかであらう。

（大正十五年の五の七）

想華

庭をつくる人

室生犀星

利久は魚やの子であつたさうであるが、(或ひは左うでないかも知れぬ。)若しさうだとすると利久の生涯がなほ頷めるやうな氣がする。或る時茶席に招ばれて行き、そこの門をくぐらうとして、ふと門がまへが何處かの山奥にあつたらしい古寺の門扉であることに氣づくと、不機嫌に元來た道へ戻り出したさうである。冬どきに網代をこしらへてあるのを見つけると、ここはわしのゐるところでないと引返す怜悧な魚によう似てゐる。わたくしだちは愛する友だちにこんな目に遭つたことがない。利久は偉かつたから古寺の門までを茶人につくらせる動機を與へたものであらう。わたくしは遠州や相阿彌の庭をほめるためにこの一文をかくのでもなく、また社寺古園の見聞記を錄する爲めではない、わたくしは自分の好みを書いて見るだけである。或ひはこれを一篇の風流論といふふうに片づけられても關はない——。

一

つれづれ草に水は淺いほどよいと書いてある。わたくしは子供のころは大概うしろの川の磧で暮した。河原の中に、

流れとは別な清水が湧いてゐて、そこを掘り捌いて小さいながれをわたくしは毎日作つて遊んだものである。ながれは幅二尺くらゐ長さ三間くらゐの、砂利をこまかに敷き込み二た側へ石垣のまねをつくり、それを流れへ引くのであつたが、上手の清水はゆたかに湧きながれて、朝日は浅いながれの小砂利の上を嫋々と戯れて走つてゐるやうであつた。自分はところどころに小さい橋をつくり、石垣には家を建て、草を植え花を配したものであつた。此頃になつてつれづれ草ばかりでなく、水は淺く川はば一杯にながれて居る方がよいと思つた。水といふものは生きてゐるもので、どういふ庭でも水のないところは息ぐるしい。庭にはすくなくとも一とろこに水がほしい。つくばい（手洗鉢）の水だけでもよいのである。乾いた庭へ這入ると息づまりがしてならぬ。わたくしだちは庭にそこぼくの水を眺めることは、精神的のお茶を飲むと一しよである。一坪の庭のあるじが氣を利かして朝ごとに美しい水を鉢に盛り、厠の右手に置いたとしても、それは家常茶飯にすぎないが、一鉢の水の美しさは類ひもなく賞むべきである。若し貞淑で美しい妻があるとしたら、彼女は手洗鉢の水を汲みかへるたびに日ごとに老ひてゆきはするが、しかし日ごとに汲みかへて美しくなるとも言へやう。

この故ではないがわたくしは蹲踞（つくばい）（石手洗ひ）といふものを愛してゐる。形のよい自然石に蜜柑型の底ひろがりの月がたの穴をうがつた、茶人の愛する手洗石である。庭のすみに置くか、中潜りの枯木戸近くに在るものだが、此のつくばいの位置は八釜しくも言はれ、事實、まつたくその位置次第で庭相が表はれやすい。わたくしは茶人や庭作者の眼光外にゐるものだが、しかし此の位置だけは定石であるだけに踏みやぶるわけにゆかない、つくばいだけは背後（うしろ）の見透しが肝心である。矢竹十四五本ばかりうしろに見せ、前石、（くつばいに踞んで手を洗ふ踏石。）の右に矮い熊笹を植ゑるのもよい、とくさは手洗ひにつきすぎて陳腐であるから、若しこれを愛する人があるならば此つくばいから四五尺隔れた

ところに突然に植ゑて置く方が却つてよからう。しかしつくばいとのつなぎのために砥草のわきに寒石がなければならぬ。或る庭で見たのであるが唯の一本の枝ぶりのよい山茶花の下につくばいがあり、水さばきの鉢前の穴の上に山茶花四五瓣こぼれてゐる風情は全くのよい姿をしてゐた。これは偶然に初冬のころだつたので目を惹いた者であらう。

いつそ此のつくばいのうしろに猗々たる藪疊があつても、つくばいが相應に立派なものだつたら百疊の竹をうしろに控へてゐても、しつかりと抑へて据ゑられるであらうと思ふ。その藪の中に三四の紅を點ずる春早い花が一本、隱され植ゑられたらなほよいと思ふのである。しの竹もよいが寒竹もよい、その影が水にちらつくのは淸楚たるものである。主としてつくばいは朝日のかげを早くに映すやうな位置で、決して午后や夕日を受けない方を調法とする。水は朝一度汲みかへ、すれすれに一杯に入れ、石全體を濡らすことは勿論である。その上、青く苔が訪れてゐなければならぬが、一塵を浮べず淸くして置かなければならぬ。口嗽ぎ手を淨めるからである。このつくばいのあるところで庭の一と隅はつくられる程度の、欝然たるかんどころでなければならない。

わたくしは矢竹が五六十本うしろに控へ、その前植ゑに大盃の楓を覗かせた下につくばいを据ゑ、竹の幹を辷りながら朝日が水にちらつき、冬は橘の實の紅いのを見せるやうにしてゐる。前石の水はじきと、竹の前は一面の叡山苔を二間四方ぐらゐ蒸しつがしてゐる。これはもう七八年ぐらゐになるので相應の出來である。この一隅は庭はどうして作るかの未定稿の一部になつてゐる。

兼六公園にある成巽閣の後藤雄次郎作の四方佛は、小流れに沿ふて据ゑられ、石佛が四體か刻まれてゐる。小流れの兩側に奇石珍木を配してあることは言ふまでもない。平常閉してある庭中の幽雅は木々草石の上にこもつてゐて、穏やかなすれすれない極寂があつた。上流に突然とした砥草の茂りがあるのも、老巧な植木やの手なみが覗はれてゐた。わ

たくしは此の手洗ひに佛を現んである因縁を靜かに考へて見て、淸きが故に淨からうとする意圖を床しく思ふた。茶庭では燈籠は木のうしろにゐても、手洗は上手(かみて)に立たなければならなかつた。つくばひは人の手にふれるものだけに、たとへ隅の方にあつても品格は上手(かみて)に位するものである。瑞雲院の庭のつくばいは二方の踏石から辿ることになり、一枚の短冊石を踏んで行くのであるがその打ち方も嚴格であつた。兼六園の池のきわの手洗は大石であるが、三抱へくらゐの椎の大樹の根元にしつかりと置かれ、雅心を遣るに適であつた。わたくしはまだこれほどの大樹の根元に置かれた手洗を見たことはない。昔(むかし)はそんなつもりでなかつたのであらうが、年移つて椎が大きくなつたのであらう。その根元の抱へ太い幹の蒼古たる色のいいことは、黒と蒼みとを混ぜまぜた強い爽快典雅の色であつた。

泉州堺の御坊御殿のつくばいはやはり上手にあるさうである。一心寺茶室は裏まはりの竹の前にあつた。兼六園七福神山下のつくばいは茶亭の右にあつた。妙高山麓赤倉温泉の角の大石手洗は美事な寒苔が蒸しつき、能登輪島の名前は忘れたが或る寺に稀れに見るきめの細かい苔の生えた手洗があつた。これらの位置は殆ど同様に上座に位してゐた。それらを概括して見てもつくばいの品格は最も秀れたものでなければならず、形は大きくも小くもない、程よい見馴染(みなじみ)の快よいものでなければならぬ。何となく奇岩めいた姿つきで、高峯一端の淸韻を帶び、そのうへ雲霧を搔き起すやうな氣もちのものを尊ぶことは實際である。聊齋志異の白雲石の口碑のやうに穴あり時に綿のやうな雲を吐かねばならぬ。そして鉢（水を入れるところ。）の中は古鏡のやうに澄み古色自らある趣のものでなければならない。蒼い底に水をたたへた一基のつくばいは、何か庭の中に人あつて鏡を見てゐるやうな心もちを起させるやうである。實際、一掬の淸水はよく庭宴の誠をうつすからである。

わたくしは幼時寺にそだつたため、その書院といふ寺の手洗ひを洗はなければならなかつた。ちやうど子供一人が行

水できるくらゐの大石手洗ひで、一杯の藻が生えてゐたが幼年のころどれだけ掬り取つても採り盡せなかつた。石一面に寄生してけものの毛並のやうに、掬り取るとき音がしたくらゐであつた。時間では百年くらゐしか經たないものであつたらうが、それを思ふと、いまは苔生えることを喜び、むかしは苔生えることを愁ひた心變りに驚いてゐる。わたくしはその手洗ひに小鮒か何かを放したが、藻の中へ小鮒は隱れてしまひ、數日の後に思ひ出して手でさぐり出して見ると、小鮒は參詣の人々にも見つからずに、洗手するごとにおどおどと藻の中に匿れ生き殘つてゐた。

手洗にはわたくしの知つてゐる限りでは、普通のつくばいの外に、しやれた石臼のやうな伽藍形があり、それは圓い石に圓い水鉢がうがたれてゐる。最つとしやれたのに唐船といふのは、自然石の鍬のやうな反りを持つた石の左よりに水鉢があつて、むかしの唐船のへんぽんたるに似てゐて風致あるものである。司馬溫公といふのは三方に紮のある石のまん中が水鉢になり居り、風雅であるが居處をきらふものであるから、鳥渡据ゑるところに難しいしろものである。圓星宿は普通の胴圓通しの手洗であるが、石水壺は先てひろがり底すぼまりの置水鉢で、石材次第で榮えるものだが、わたくしは嫌ひである。却つて石水瓶の三方取手のある枕型の胴すぼまりを面白いと思つてゐる。支那朝鮮によくある大壺取手づきに似てゐて、石であるため陶器以上のおもしろさである。陶器と石とは孰らが面白いかと言へば、味の細かいことは到底陶器には及ばないが、一味通じた底寂しい風韻枯寂の氣がながれ合ひ、ときに陶器に見味うことのできぬところに、わたくしの心を惹き何かを思ふさま擽らしてくれるのである。そのほか方星宿の四角なのもあるが、取り立てて言ふまでもない。富士形、へやうたん形に至つては、われわれ雅人と稱するともがらには要なき俗手洗ひである。つくばいは飽迄自然石を穿つたもので水鉢の磨きも叮嚀に寂然たるものでなければ面白くない。赤日石林氣といふのも又たつくばいの銘でなければならない。

筧手洗ひといふのは高みにある手洗鉢に筧の水をしたたらすのであるが、これは生きてゐるやうで風致湧くごときものがある。凡兆の「古寺の簀の子も青し冬がまへ」といふ句のあるが、何となくこの句の趣のやうな山住み山家の氣もちを表はすもので、春おそい日の永いころに筧の滴る音を書屋で聽くのはこころ怡いものである。その滴る水の流れ口を次第に低めにして自然に敷砂利（しきじやり）の間を縫ふてゆく趣きの深さは、わざと細流をしつらへるより幽寂新鮮味は數倍するであらう。茵のやうな形の役石二つ、前石一枚くらゐでうしろは蕭然たる茂りにして置いてもよい。夜半ねむりならざるときに蟲聲の細微は聽かずとも、あるじの心次第で×々たる夜猿の遠きを偲ぶのも、英雄庭を擁して眠るの境であらう。

四方佛といふのは角胴四面に佛をきざんだのであるが、淸韻愛すべきものである。わたくしは所謂難波寺形といふ大樹の下にすゑる手洗ひに、姫蔦の蔓を這はしたことのあつたが、蔦が石面一杯に蒸しつき、葉と葉の間に一掬の水がしづかに澄んでゐるのは、まことに天來の穩かさを保つて、限りなく美しいものである。茶庭では手洗の前に湯桶手燭を置き、茶席の會中立前の所作の一つになつてゐるさうである。わたくしは茶の方は詳しくないが、其行きとどいた精神ではいつも敬服してゐる。茶道はまた色道に通ずといふわたくしの哲學は、古今の茶道大義でなければならぬと思ふてゐる。淸淨の中にゐて色道を思ふの情は、林泉に踞して赤乘鉤の境に躡むと一般であらう。水光日を浮べ出て轉た佳人を想ふの心を誰も咎めるものがない。こんな色道は枯れ侘びてなほ艶澄に對ふやうで、わたくしは好きである。遠州好みの茶庭のやうに大樹一本、小樹四五本、飛石を分けた中庭括り、八ツ窓茶室といふやうな感じである。そのやうに整ふところに何かの色があつた。さびもとを掘じくり出すと何かの色が出て、極めて懷しいものである。

二

わたくしは世に石ほど變哲なものはないと思ふてゐる。あゝいふ寂しいものを何故人間は愛で慕ふのであるか。

蕭條と石に日の入る枯野かな　蕪村
こからしや畠の小石目に見ゆる　同
木枯や小石のこける板ひさし　同

石が寂しい姿と色とを持つてゐるから人間は好きになれるのだが、反對のものであつたら誰も石好きにならないであらう。その底を搔きさぐつて見たら石といふものは飽かないものであるからである。さびは深く心は靜かである。人間はその成長の途中で石を最初におもちやにするやうであるが、また最後におもちやにするのも石のやうである。俳句が文韻の道の初步のものであるとしたら、老いてまた最後の文事の友でなければならぬ。わたくしは幼時川原に遊んで遠くに石を投げて見て、何秒かの後に始めて戛然たる石が石を相打つを聞き、世の幽寂の最初に觸手した感じを抱いたものであつた。自分の手から離れたあとの何秒かの後に石は何を考へてゐたかも知らなければ、小鳥の途をそむいて走つた空中のことも測り知れぬが、唯、さびしい遠方の音だけは耳に入れたものであつた。そのとき私は何を思ふたか、音をきいきたと幽かな喜びを感じたことである。その喜びは幼なくして幽寂の境を敲き得たよろこびであつたらうと、いまでもさう思ふてゐる。

芽の吹くころになると蹲石や棗石が冬がれの中から身を起し、呼吸をしてくるやうに思へた。すくなくとも何かの鋭どさを現はしたが、それは木の芽草の芽が浮き出させてくるのかも知れない。淺い芽の色が蒼古たる石を上と下とから

形を描き合せるのかも知れぬが、わたくしは庭へ出て栗石のふもとから簇生するぎぼしの三角な芽生えが、石のへりを粗く又た細かく縫ひ取るたびに、石の中身も溫まつてゐはせぬかと思ふた。つくばいの水をかえる朝々ごとの水のぬくみに氣づいてゐたのだつたが、石の面も柔らいて蒼みが二三日前の雨に增して際立つて來たやうである。栗石ばかりではなく飛石もしつとりと落着いた色にぬれてゐる。春の色は草木には鋭いが石にも一層深くあらはれてゐるやうである。石の表の春はゆるぎなく莊重に出てゐる。わたくしは石の面をなでて見、そのまはりを眺め、皺の間に靑い芽のけはひを嗅ぎあてた。

石は絕えず濡れざるべからずといふのは、春早いころがその鋭どさを餘計に感じる時であるからであらう。水の溜まる石、溜るほどもないが微かな中くぼみのある石、そして打水でぬれた石は野卑でなまなましく、朝の旭のとどかぬ間の石の面の落着きの深さは譬へやうもなく奧ゆかしい。或ひは夜來の雨じめりでぬれたのが、空明りを慕ふてゐるさまは戀のやうに仄かなものである。それが飛石であるときは踏みかねる心をもつ。朝の間は石の心も靜まつてゐると見えるからである。わたくしは或朝、蒼黑い栗石のきわに一本の蕗の薹を眺め、凝然と驚いて瞠つて眺めた。それは一本のかんざしを持つた何か巨大な生きものの、微笑み踞まるのに眼がふれたからであつた。石は庭ぬしの悲しい時は悲しさうな表情をして見せ、機嫌よいときはかれも濶達で快然としてゐた。一朝わが思ひならざるときその眼を落すのも、石床蒼古の上に停るのであつたが、それよりも先きにかれは綿々の情に耐えざるの風姿があつた。わたくしはさういふ思ひでかれと相抱くことを屢々感じた。相阿彌が山紫水明の間に心を悲しませ、親兄弟よりも木石交契を慕ふたと自ら言つたのも解るやうな氣がする。すくなくとも石面一雫の表情にこころづいたときには、その人の愛は行き着いたのであらう。或る子供が庭へ出て草の芽のあたまを撫でながらゐたが、その子供のしたことはわたくしの石面をなでると同

じいいとしさのあまりである。

　ほろほろと山吹散るか瀧の音　　芭蕉

　待ちかねて隣の梅を折りに行く　　同

この句の奥の方をすかして見ると、何とも云へぬ慕はしさのあふれた人心に行き合ふのである。山吹散るかのごときはあまえてゐるやうで悲しいまでの句である。王庭吉の水仙圖のごときもその水仙のくびの弱々しさ、垂れた一枚の葉の重さ、それで一氣に伸びずにしづしづと伸びて咲いだ水仙、その心はやはり我々と同じい辿りをしてゐるものである。青雲西の石岸古松をつんざくもの、九龍山人の枯木水邊をえがいた隱居圖、かれらの持ち合した心はわたくしどもの網の目のやうな心に、糸を繰り合してくれ、ほつれぬやうに結んで來てくれるのである。かれらはみな叩けば音をもつてゐた。わたくしはいま三歩の庭をあるいて己れの木履の音を佗びたのであつたが、わが石面を凝視するところに至つてはかれらに劣らぬ想ひを思つてゐるのである。

石は二ツ接、三ツ組、五ツ組とか言ひ秘傳のやうなものがあるさうであるが、わたくしは勝手に組めばいいと思つてゐる。しかし物に釣合といふものがある。その釣合以上の何ものかがわたくしだちを打つてくれればいいのである。一つ置いた石が物足りなささうにしてゐる顏が見え、友ほしさうである。或ひは寂寞に耐えない風姿をしてゐる。それを見抜いてやることも我々の心である。何かかれらにも感情があり、一つきりで立てないときにはも一つ石を接ぐのもいいだらう。そして二つ接いでもなほ母石が寂しがつたら我々はどうしたらいいだらう。五つを接がねばならないが併しそのために調和をやぶつたらどうしたらいいか。わたくしは左ういふ時に無理にもと通り母石ひとりを立たせて置き、さびしがらせて置くのである。定石を信じないものである。そのかはりかれの見えるやうなところに、も一つ石を離し

て置いてやるのである。かれはそれを眺めて自ら佇んで居るべきであらう。さうでなければ何處か隅の方の暗い木下かげに悄然と置いてをくのである。

咨拔、飛石の打ち方はくらうとでなければ、これこそ落着かぬものである。利久がある庭へ招かれた時に茶事の後に默つてかへつたが、あとで石の中に一枚だけ入れかへてあつたことを見拔いたさうであつた。ともあれ、飛石は丁々と疊んで行くいきで、庭の呼吸をつがせるやうなものである。これの打ち方で庭ぬしの頭のほどが窺ひ知られるものである。飛石は何處まで打つて行つても止まることを知らず、もう一枚、もう一枚といふふうに先きを急ぐものであるから、止めをよほど扶り利かして置かなければならぬ。わたくしは飛石は庭を鎧ふてゐるものであることを熟々感じたのは、金澤にある木屋藤右衛門の舊庭を一瞥した時であつた。中くぐりの柴折戸を隔てて、乾いた日苔の石が何十枚となく打ちつづき、疊んだ古さがたてよこから攻め立てて來、迫つて來る或る嚴格さをじかにひしひしと感じた。主として日苔の縫目はあつたが手にこれらの鎧のやうな飛石を持つて見たとしたら珊々たる音があるくらゐであつた。わたくしは飛石を踏む仕合せを感じありがたくさへ思つた。ことに廣庭へ出る廊下づたひにあつた一間くらゐの短册石の堂々たる姿は、莫大な感じであつた。かれらは風雨に晒されて黑ずみ苔蒸し重々しい息を拭ふがごとき秋天の下で呼吸づいてゐた。わたくしは額一面にそれを感じたと言つていい。金森宗和の松林寺の疊みと幽情に比すべくもないが、しかしそれはいまも眼にあるくらゐである。宗和の閑寂は貫くがやうで、かなめの下草までの入念のさまはこの庭と較べられぬが、飛石だけでは敬服の庭であつた。無名の庭師であらうがその胸高い姿も思ひやれる程であつた。無の名庭師といふものは輕蔑できないもので、何か血統的にいい腕をもつてゐるものがその土地々々にゐるものらしかつた。

或る時庭の片隅の椿の切株に、靈芝が五本生え、月を經てその菌は笠をひろげた。靈芝といふものは支那あたりに珍重

するばかりでなく、床の置物にするくらゐ稀有の目出度いものである。滅多に生えないものらしい。形は莖も笠も歯であるが實は同く陰干しにするとそのままの形を殘すものだ。水を打つて見ると朱の色に冴えて見えた。その生え方が、一本は右に二本目は左に、三本目は笠が大きく少し離れて、四本目と五本目が右と左とに程よいほど離れてゐた。その離れ方に得も言はれぬ妙味があつた。わたくしはその時漫然と飛石の打ち方を頭腦に思ひ浮べ、こんなふうに打てばいいのだと思つた。自然に生えた靈芝の離れ方にならふことも面白いと思つたのである。何となく岩段や拔組方といふのに似てゐるのも、偶然ではあるが古くから言ひならされてゐることは爭へないと思つたからである。

別れ石といふのがある。これは庭中の央ばに組む謂ひである。つづめて言へばよく飛石のわかれや曲り加減のところに、大きいわかれ石がありそれを言ふてもよいのである。

緣或ひは座敷から下りる石はがつしりしたものを用ひたい。そして打ち方は石の行脚三四連づつ打つてもいいし、四二連でもかまはない。ただ短冊石だけは喰ひちがひに二分の三强の食ひちがひがよい。拍子木ともいふが恰も拍子木二本を併べ食ひちがひ三分の二程度に置いた見取りでゆけばいいのである。これらの飛石のまはりに苔が生えて居れば、何も下草は植ゑなくともよいものである。しかし處々に白い斑の入つた姫熊笹を飛び々々に掠れた點綴のやうに植ゑるのは、程のよいものである。あるひは苔のままでもよい、苔は日苔といひ打水をしないでも蒼々としてゐるのをわたくしは一番に好んでゐる。山にある苔である。暑い日には乾いたままで蒼く、へいぜいは水をやらないで折々の雨を待つか或ひは一週一回くらゐの水でよい。がつしりした苔である。大庭などはこの苔の方がよい。水をやらない癖にして置けばその如き日苔になるのである。苔は肌のこまかいほどよいとしてあるが、山苔日苔の肌の荒いのは一層の莊重を感じさせるものである。總じて庭は石と苔との値が深ければよい。龍安寺の石庭は或る意味で枯淡な達人の心境をそつ

くり現はしたものと言つてよい。寂しさにすぐれた人間の心もつき詰めてゆくと、石庭の精神でなければならぬ。わたくしは近い曇天の下で、瞬くきり睨み合ひ、穏やかにも優しいかれらの姿を一瞥したとき、すぐ或る種類の人々の心を覗き見た感じをもつた。その他の何ものでもなかつた。石庭のおもしろみや組み立てや観照や味ひは、もはやわたくしの眼にはなかつた。わたくしは何人かの、しかもわたくしのねらふてゐる或る心をかんじたくらゐであつた。「我に居るものは悲しみをあるじとし、酒を飲ものはたのしみを主とし、愁に住するものは愁をあるじとし、徒然に住するものはつれづれを主とす、」と嵯峨日記にあるが、これらの心はみな一すぢのものであらう。

苔は山土の離いのを敷けば一二年で生えるものであるが、石に苔の生えることは一二年では難かしく、さういふ淺はかな心は棄てなければならない。苔の生えるまで長い雨の年月を待つのは雅人のこころとしても、苔を植ゑるの徒はわが黨ではない。飛石のへりに日苔のしがみついた形、色の食ひ込みは紙魚（しみ）のある一帖の古本（こほん）のやうに懐しいものである。わたくしは石の上の蝸牛、いなご、せきれいの影を慕ふものであるが、眞寂しく曇天或は雨日の景をも戀ふものである。拜石などと言つて庭中濟淨の境に置いて、これを拜がむ定石はあるさうであるが、わたくしはこんな古いことを廢めてもよいと思ふてゐる。池ぎわには垂釣石といふものがあつたり、硯滴石、硯用石、筆竿石、筆架石などといふ名前があるが凝れば自らさう名づけて見たいであらう。その他鴛鴦石や虎溪石、陰陽石などといふのも、石の形から考へ出したものである。兼六園などはこれらの古い名前の石がところどころに置かれ、古きに則つてゐる。陰陽石などは庭のどこかに春は隱くして入れたものであるさうであるが、詰らないことをしたものであるといふより、何か縁起を取り入れたやうで微笑まれるやうである。

石は要諦であることは言つたが、それを求めることも搬ばせることも要諦である。併しその要諦は芳ばしい感じの要

譜であらう。或る春の夕方であつたが、わたくしは壹間のほどに求めた石が門前に牛車（ぎうしや）して着いた時に、折柄食事であつた。そして箸をもつたまま思はず叫んだ。

「石が來たのだ。」

わたくしはその時に相應に大きい石の、くろぐろと門前に睡てゐる姿を見に出た。日ぐれで庭へは入られぬので、門の前に置いたのであらうが、その寢姿は憂欝で門扉にさびしい影をひいてゐた。かれはどこへ落着いていいか判らないさまで、すつかり生きものになつて見えた。わたくしはその一晩は門前が氣がかりで、鈍い枯れたこゑで誰かが呼んでゐさうに思はれ、短かい夢の幾つなぎかをさまして夜明けを待つてゐたが、ああいふ憂欝をあとにも先きにも感じたことはなかつた。

三

庭は春さきの冬がすつかり終りかけないころがよい。冬のさむさが隅々に残り漂ふてゐるに拘はらず、春さきの景色もむらさきぐんだ影になり、土はしめりを帶びてゐる。その土や苔のしめり工合に得も言はれぬ行屆いた可憐さがこめられて、旭のあたり加減の匂はしさは類もない新しさである。何となく植ゑて見たいのぞみを抱く、木々の間を覗いてあるくと、枝を透いて匂ふてくるものを感じる。つまり庭全體の空氣が不思議な人情的なるものにつつまれて囁いてくるやうである。穏やかに草の芽のあたまに當る旭のいろに天が下のめぐはしさに感じるのである。季節の故郷である。

嚴格と寒威との間に立つた石燈籠がやつと柔和に見え、ひと雨のあとの濡れ方もまた春の色であつた。灯ともし石のきわに芽が生えてゐるのを見ると、わたくしは曾つて或る茶人の庭にあつた利久形の古い燈籠を思ひ出した。庭のまん

中に据ゑ、松の下に埃をからました姿は、あつさりと好ましかつた。松一本の好みもよかつた。茶室にゐたわたくしは主人が立つたあとで、釜の鳴るのを聴きながら眺めてゐると、燈籠の落着き方は能く釜の音に調和してゐて、わたくしをして茶室で眺めるものは茶室との結びを持つてゐると思はせた。燈籠は溫順の相であつた。胴の細い深いさびをこもらした利久形は、一面あたたかい心もちがあつた。前後を通じてあの位しづかに燈籠をながめたことがなかつた。頭の奥の方にいまも閑やかに見えるやうな氣がする。

遠州形は笠がふつくりと高盛りになり、荒いつくりで好きである。何となくたたづみ方に奥行のあるが、宗和形は瀟條として枯木戸のある四方見放しの、庭に向くと思ふた。わたくしは雑木四五本の立つた下へ飛石を打ち、そして又雑木二三本の奥に宗和形を眺めたいと思ふてゐる。有樂形、宗易形、珠光形、春日、雪見などあるが、わたくしの好みとしてはせいの高くない肉の相應にある茶庭燈籠が一本あればよい、いや、もう一本ほしいものである。若し心に叶ふたのに出會せば、庭中人有人不語の境を讀みたいものである。燈籠は、眼をもつてゐる。庭の四方をぐいぐいと緊めつけ締めてゐるものである。若し燈籠が語らない悪作であつたら庭の品を落してしまふものである。わたくしは曾つて面を覆ふやうな燈籠を崩して、台石と中台とを飛石につかふて見たが、春日であつたために鳥渡よい飛石につかへた。蒼みもあり燈籠らしい由緒も持つてゐるせいか、仲仲よかつた。一たいに燈籠の居所は木のかげに頭だけ見えるくらゐがいいものである。燈籠を繁りの前に置くのは、これ見よがしでよくない。若し繁りの前へ出すなら庭のただ中からやや隅へかけてあどけなくぽつんと置けば、却つて無邪氣に見えるが、さういふ場合よほど古さや形のよい、せいのつまつた燈籠でなければならぬ。燈籠が木と木との隙間から木の葉の蒼みより最つと深い蒼みで、すれすれに姿をかくしてゐるのは清幽限無きものである。いまどき刻みの墓石のやうなものを樹ててゐるのを見ると、嫌惡の情さへ起らないでぞつ

とするくらゐである。燈籠一本に庭の大部分の魅力をもたさなければならぬが、と言つても他を疎んじるわけではない。何とも言へない磨きのある調度、行莊の清純、あどけなく閑かにそして眼立たぬやうに作るのが奥の手であらう。質素の底ひろがりで行くのである。一瞥荒く二瞥やや細く三瞥驚嘆するほどの細微を盡すべきである。見るほど飽かない謂ひである。一草に心かたむけてあるを見るときに、あるじの愛の深いことを感じる。大した築山や池をほめるのではない、あるじの愛さへ庭に行き亘つて居ればわたくしの望足りるのである。曾つて前田といふ本郷住人の庭園を見たとき銅製の鶴が二羽、からの川の中に置かれてあるのを見て、わたくしは眼を汚された思ひがした。或ひは唐獅子を置き、大砲をさへ飾ることを思ふと、わたくしは情無くなるばかりである。好みは人間をつくるものである。好みの低さ卑しさをさへ氣づかぬといふことは末代の恥であるが、風流がりすぎるのも困りものである。唯、さあらぬ體に磨きのかかつた好みといふものは、子供があれば子供にもさういふ快よい好みがいつの間にか行き亘るものである。

これは曾つてサンデー毎日に書いたことのあるが、或る客があつて庭をつくらうと思ふが、千圓くらゐで一寸したものが作れるだらうかと言つたから、わたくしは俳句でも書くやうに、一枚の半紙に無駄書をして手渡したことがあつた。

竹　（矢竹あるひはしの竹）　五百本
飛石　（拍子木二本をふくむ）　五十枚
すて石　三つ
茶庭燈籠　（利久がた）　一本
つくばい　（一つは大きく別ののは小さく）二鉢

山上　十車

そして植木や手間賃五十人分二百圓は例外である。しの竹、七十圓。飛石（くらま一枚五圓見當。）二百五十圓。すて石、二百圓。茶庭燈籠、三百圓見當。（上物はあるひはむづかしい。）つくばい、二鉢、百圓。その他山土十車代等千圓である。しかしその客はこんな庭を作つたかどうかは知らないが、その注意書のやうなものの代りに、わたしくは右のやうにべらべら饒舌つたことを覺えてゐる。

これだけで作り上げたものは十年あとには苔がついて、竹も根を張り相應の庭になるであらうが、ただ、面倒なのは竹は二タ月に一度づつ枯葉や蟻、毛蟲のつかぬ樣の手入れ、及び刈込、筍仕立、（それは毎年古竹を伐り新竹を立たすこと。）皮剝ぎの手入れが肝要である。飛石の高金は飛石がわるくては庭が纏めないからで、燈籠の三百圓は搜したら適當なのがあるかも知れぬ。また無いかも知れぬ。一本あればいいのである。

つくばいは手頃なのが一つでいいのであるが、わたくしの癖として二鉢ほしいのである。役石前石はもちろん買入れるのだが、これの百圓は見くびりすぎてゐるやうだ。一つは竹の奧に、一つは椽から七步くらゐの居どころにする。山土の十車は苔を生やすためである。十車では足りないかも知れぬ。以上は別に深い意味のある庭ではなく、又茶がかつた庭もでない、唯、このやうな庭もあるくらゐに考へて貰へばいいのである。下草は一切植えない。齒朶一枚でもこの庭にはおことはりである。一體、庭といふものは朝夕二回の掃除と打水とが必要のあるものである。

竹の植方では東南西に株を亂して植ゑて置く。這ひ出しの筍を見とどけた植ゑ方をしなければならぬ。東の方では朝の内のかげを眺め、南西では終日その猗々たるかげを苔の上に撮らねばならぬ。茂りは尖端に揉みついた風情よりも、折々枯葉を取り葉と葉の間をすかし、空の色を伺ひ見るべきである。竹は疏くがごとく伐るべしとはわたくしの信條の

一つであるが、手入れ次第で美しく見えるものであるから怠けものには竹はやめた方がいい。棄石は大體において三方へ平凡に置く、北へ面した方へだけ二つ片よせなければならぬ。これは隣家の關係もあり一度地勢を見た上でなければ分らない。

この庭の仕上りは一つには竹の葉づれの音をきくためと、いくらか幽寂閑雅の心を遣るためである。燈籠の位置も庭の四面のきまりがついてから据ゑる。大してむつかしいことはない。燈籠といふものはその庭を一と目眺めたときに、既うその位置が宿命的に定つてゐるほど動かないところにあるものである。庭の四方の均整を引締めるために、眼光紙背に徹する底のまなこをもたなければならない。燈籠の位置で庭が本定りになるのである。

四

から井戸といふものがある。

實際は水が湧いて居ればなほ結構である。下草は鬼齒朶のわたり一尺長さ三尺くらゐの株を配し、その長い卷葉を井戸の上に覗かせる。一切が下草づくり故、古い作りでゆけばよい。そこに木が要るなれば常磐木を一本。何となく下草の間に壺すみれのけはひを感じさせる溫かさがほしいものであるが、季節は過ぎて夏に入つたら、そこは清涼の卷をほぐさなければならぬ。鬼齒朶といふものは夏の朝日の中でその青い孔雀の卷葉をほぐすものである。わたくしはその齒朶の壯麗をこの井戸づくりの傍で眺めたいと思ふてゐる。秋は庭の蟲がしぜんにこの井戸ぎわへあつまるのも、その作りの古さ、濕りや置露の長持ちするためであらう風に拵へたいのである。

そのから井戸から離れたところにわたくしの好みから言へば、何かの雜木のかなりな大樹を四五本植ゑ。その中に

をまじへ、下草にはいろいろのものを生やしたい。その下かげへ飛石を打ちその小さい森を明るい方へぬけられるやうにして、肩に木の枝がすれすれに觸れるやうにしたいものである。木の枝のからだに觸れるのは戀のやうに優しいものである。此の茂りの中は夏は涼しく秋は柿柴の背のするやう落葉樹をも雜へて植ゑるやうにする。庭のあるじは此處をぬけくぐつては行く、此處をぬけることは庭ぬしには何かやさしい心をもつた時であるとしたらなほいいのである。

朝霞飼屋が下に啼く蝦（かはづ）
　賞（しの）びつつありと告げん兒もがも　　川村王

山高（ちさ）萱のしら露しげみ愁憐（うらぶ）る
　こころを深み吾が戀やます　　人麿

此の茂みの中に蛙を放ち、かたつぶりの姿がから井戸の雨の日に這ひ出るやうにしたら、一層生きた寂びを感じるであらう。石を想ふことは蝸牛を念ふことに近い。蝸牛が自分の半分くらゐの甲羅の子をつれて、雨でぬれた石の上を這ひ遊ぶ姿はいとしさに耐えがたいものである。夏の日にこの姿を想ふの情は庭を愛する人に忘れてならぬことである。

わたくしは築山といふものを好かない。土地が自然に高まつてゆく心もちがあれば、築山のやうなものは要らないと思ふてゐる。池も何となく好いてゐない。若し流れを取り入れることが出來たら、池はいいものである。池をしつらへるとすると築山がなければならぬ。そしたら庭の勢がせりたり加減に高みにして行くより外に、わたくしとしての好みはない。池に淸滴があれば生きるが市井の間には水道の水を引くくらゐなれば、池なぞ止めた方がいいと思ふてゐる。あさましさの露はれることは庭の清さを毀つからである。どういふ庭でも築山はみな失敗である。京都諸庭の築山でも銀閣のぞきでも寫し取つてつけたやうな無愛想なものばかりである。むしろ自然の山を取り入れたものは、さすがに落着

いてゐるが、さうでなければ築山のあさましさは身ぶるひするくらゐである。池にしても蒼さも古さも馴染もない荒ら水に、鯉などを生かしてあるのを見ると、腹は立たぬが笑ひたくなるやうである。池は水の色の蒼みと何とも言へぬ濁りが尊い。盤大の如くして然らざるものである。その池の面積くらゐの樹の茂りを呼ぶことは勿論である。

わたくしの考へでは夏は筧手洗をこぼれる清水の音ぐらゐが恰度いいと思ふてゐる。大庭なればそれだけでは済まぬが、わたくしだちの親しむ庭は筧の音が庭の一隅できこえる程度でいい。秋になれば敲つとその音が澄んで庭中殊らざるなきであらう。幽寂を主としなければならぬ。閑やかさと、目立たぬ内氣のつくりでなければならぬとしたら、池よりも筧の音がよい。

噴井があれば細流をしつらへてもよい。わたくしがむかし川原で遊びくらしたやうな細流が、庭の間に間に隠れて流れ、藪の間に消え失せるとしたら一層心意氣が高まるやうである。庭はできるだけかなめを隠し、一瞥のあとに物足らぬくらゐがよいと思ふてゐる。座敷から見た表のみの作りは浅はかである。庭は四方見通し作りで何處から眺めても裏のない作りこそ本統である。裏を心棒にする作り、裏へ裏へと彙んでゆくべきである。垣越の隙間もない姿を見せることも、わたくしたちの心得へるべきことであらう。庭のうしろに廻つて見て始めて庭作りの用意の見えるのは、床しい限りのものである。

わたくしは西洋風の庭には戀がなく日本風の庭に戀があると思ふてゐる。橘や木犀のかげにはむかしからの戀の氣もちがただよひ、下草に繊い手や樽々色の裳がこぼれてゐるやうである。むかし上臈の庭にはさやしい言葉があつた。その言葉は永い年月の間にも樹や枝のこころに沁み亘り、わたくしに囁いてくるからである。木の陰、飛石の上に佇むときはわたくしはあらぬむかしを思ふごとに、また心を遣るのである。

はなもりは心許しつついさ吾妹
　上枝の梅をここに手折らむ　　元義

人こそはかはり行けども松の尾の
　もと松枝に匂ふ月かげ　　同

わたくしは曾つて松と石とで、春秋の庭を思ふたことがあつた。唯、松と松とを累ね、或る松の峯枝は空を戀ひ、或る松は水を思ふて垂れ、また一本のそれは緣近く枝を伸して情を偲ぶといふ樣を描いて、かれらの根もとにはそれぞれの石がしづかに身を横へてゐる戀を思ふと、颯々の風は軒端を掠めて去るのであつたが、何かいんいんたる趣きがあつて忘られなかつた。西行や芭蕉の或る息づかひを遠くに睨んでゐるやうで愉快であつた。春は春ぜみが啼き秋過ぎて松かさが落ちること、宵ごとにしげくなり、朝思暮想の愁ひに耐えぬといふさまは、わたくしの淺ましい空想ばかりではなく、誰もこの思ひに身を沈めるときはいいなあと思ふであらう。松のみどりは冷たく幹は溫かいものである。石は枝を透いた日を帶びてしばらくは秋をとゞめてゐる。こんな境は古い日本の戀をおもふによく、またそれらの歌俳諧をよむのによい。或ひは雨の日にその雨の音松の葉の上に消え、石の肌のまだ濡れぬありさま、――これらを思ふとわたくしは生き甲斐のあることをつくづく感じる。

わたくしは實際よく夢を見るが、その空想と同じいやうに庭のことばかり夢見てゐた。或時は磊々たる川原の中に石の築いて堤を、その中に藁と丸太との家をつくり、暴風を防ぐために松や竹を植ゑ、石の堤は不意の出水のために二間くらゐの高さと嚴丈さで押し廻して、自分はその石の堤の上に腰をおろして坐つてゐた。さういふ夢の中の自分はもはや此世の仕事の何も彼も終つた身輕さで、毎日茫然として月日を送つてゐた。そんな夢は幼時川原ばかりで遊んだこと

が原因してゐるらしく、現に石の堤の中にも一條の流れを引いて、そこに自分の食ふべき魚を池と流れに圍ふてあつたのは、夢の中にも用意ぶかいことをしてゐたものと思ふた。しかし能く考へてみると最早石の堤の上に腰をおろした自分には何人も訪ねるものもなく、またわたくしを指さして嘲くくらゐの極く稀れな學生の二三人くらゐがあるばかりで、都門の方、密雲漠々として測り知られず、むなしく日を仰いでゐるばかりであつた。夢さめて自分は自分らしいことを夢見たものだと念ふたのである。そして自分はそんな藁小屋の中に本棚を作ることさへ考へてゐるからお可笑しい。茫々たる川原を選んだことは始めそこだけが税も要らず地面も安く手に入つたためであらう、夢ではあるがそれだけは覺えてゐる。王維の詩に、相送臨高台、川原杳何極、日暮飛鳥還、行人去不息。といふのも思ひ出される……。或時は夢の中で大きい石をひとりで動かすと見て目がさめたりした。芭蕉は夢に杜國を見て號泣したと日記に書いてゐる。

五

廢園のみやことといふものがあれば、錯落たるわたくしの故郷のことであらう。秋日は一軒の庭のものが皆散りこぼれた。落葉のみやこである京よりも悲しい。

わたくしは秋になり机になほ隣を感じるころ、燈籠に火をつけたやうな物佗びたものを感じる。カラリとした中に沈んで何か考へてゐる夜のありさまは、いつも眼の遠方に見えた。どういふ庭にも諸種の表情があつた。その前に立つとすぐそれを感じた。わたくしの十歩の庭にも表情があつた。樹も石もぬれて澄んでゐる。並み立つて動かぬ。

社寺見物に疲れたわたくしは西陣の宿の二階に、階下の織場の機の音とその二番娘のうたをきいてゐたが、大德寺

の三寶の上に置かれた二三枚の花片か、さびしい柏の落葉のやうに思はれてならなかつた。そしてわたくしの眼底には子供繪本のやうな輪廓づきの寺院の庭々が、みな或る表情をして映り出した。そして娘さんの機織りのうたは朗らかである。或る古びた沼のやうな池のありさまや、春日燈籠の立つて風に吹れてゐるのや、さまざまのものが去來した。わたくしは併しうつとりと小娘のうたに聞き呆じて、庭々の景色と心でいろいろな問答をした。

或時は嵯峨の山中で童子に道を問ねたが、童子は默つて行き過ぎ、路傍の岩角に腰をおろして滿山の秋風に打たれてゐたが、その時も心を打つてきたものは、滿山の止みがたい表情であつた。わたくしは手を伸べて愛する女の面を撫でるめくらのやうに、それらの風景に對してゐた。わたくしのいまゐる庭は垣破れ竹のそよぎで日は暮れてゆくのである。唯、芭蕉が襤褸のやうに破れて天下の秋を領してゐるばかりである。深川に杉風がこしらへた芭蕉庵にも一株の芭蕉が植ゑられ、そのため芭蕉庵と名づけられてゐたことは、去來の落柿舍と同じである。その當時芭蕉はかなり新しい草木であつたらしく思はれる。さういふ新しいところを芭蕉がねらふたわけではなからうが、何となくさういふ氣もする。朝夕枯れ果てた芭蕉に對するのも、空山大庭を歩くのもその心にかはりがない。

行春や白き花見ゆ垣のひま、垣は庭のそと圍ひの表情を定めるものである。袖垣は庭の一部分の眉のやうなものであると言つてよい。わたくしは鶯垣といふのを愛してゐる。黑もじの小枝をそろへて作つたもので、垣のあたまに小枝のさきが出てゐて鳥渡いいものである。國では竹の小枝をそろへて鶯垣仕立てにしてゐる。

砥草腰とか言ひ、砥草の節のやうな作りのあるが、きれい過ぎて俗なものである。垣は自然の草木の名前を借りてつけてゐるのが多い、梅樹袖垣、柴折垣、とくさ垣、うぐひす垣などである。覗き墻などは月がたの穴を二面にくりぬいで、そこから梅の幹をのぞかせたりするのだある。秋ふかく唯の竹の四ッ目垣に何かの蔓の枯れたのを偲ぶのもよいも

のである。枯木戸といふは能くあるものだが、名前もよく秋らしい好みである。最明寺柴折戸といふのは上の方へ上げる仕かけの戸で、荒く菱形に竹を編んだ見透しの戸である。一寸いいものである。茶庭ものであまり見かけない。

そと囲ひの垣の上へ樹の覗いてゐるのはよいものである。雑木では杏、ざくろなども廢園のみやこに折々覗かれる。ざくろのかつと口を開けてゐるは鋭い感じである。叩くと中の實のつぶがこぼれ、土の上に珊々と光つてゐる。わたくしはこんな野趣にも心が惹れる。杏は花どきの、それも蕾の時分、雨の降り沁みた色の美しさは忘られない。色をひねり出した新しさをもつて光つてみえる。柿の葉のもみぢした色は屋根の上を埋める故郷では、行くごとにわたくしは感心して眺めるのである。あれらの葉を搗いてみたら色が採れさうに思へてならぬ。それから棗の木、さびしい實のいろをココア色に染めてゆくのが、秋の日のしほらしさを描き出してゐる。その青い間は子供らしく、色がついてから妙に仙人めいてくる。

枳殻の垣根は秋に黄ろく圓い實をつづり、温かい色を濃い枝と枝との間に浮べるが、それを見過して路ゆく心はえも言はれず快よく秋らしいものである。何か徳を得た思ひである。九年母、青蜜柑、まるめろ、とりわけ青蜜柑の木の下へよりそふこ、その實の姿を眺めると、青さが歌俳諧の悲しさを色どつてゐるやうに思はれてならない。考へ深さうな濃緑が次第に黄ろくなつてゆくのも、朝焼けのやうに美しく思はれる。まるめろは熟れて落ちる音がよい。何か地面を敲いて行くやうに思はれる。おれはやはり落ちて來たよ、と彼は彼らしく朴訥な調子で言ふやうだ。或る料亭の前栽にまるめろの木のあつたが、いまでもその時帽子を脱いだ頭にふれたことを忘れずにゐる。柚子はどこか派手な色と形を持つてゐて好かない。むしろ柑子の方が愛らしくいとけなくてよい。

下草ではわたくしは龍頭を好いてゐる。龍頭の一二本が竹の中や籬の奥に立つてゐるのはいいものである。寂しい作

の裏に一二本生えてゐるのも石の蕭條としてゐるのにじみな鶏冠の赤さが冴えて、一そうの秋深さを感じを起させる。

鶏頭や雁の來るとき尚赤し　芭蕉

いつか或る石屋――と言つても庭石をひさぐ家であつたが、其處の石と石との間に手ぎわよく鶏頭を生やして、主人はわたくしを案内しながらあの石はいくら此の石はいくらと値を言つたが、わたくしは戯談に鶏頭の値も入つてゐるのですかと尋ねやうかと思ふたくらゐ、美しく栄えてゐた。秋おそく雨が冷たく注ぐやうなると、鶏頭は黒ずんで穂を垂れがちになる……わたくしはその時分の鶏頭がなかんずく好きである。さはると種粒が雨のやうに降る……。そのかはり鶏頭は二本あるひは三本以上植ゑることはならない。色のある花物を嫌ひなわたくしは四季を通じて、恐らく花といへば此の鶏頭くらゐが庭の花であらう。庭に花の色があるといふことは、庭の閑寂を破ることが惜しいからである。それ故わたくしは鶏頭以外の花は植ゑないことにしてゐる。

六

冬になると庭を眺める時がすくない。霜で荒れた土の上に箒をあてると言ふわけにゆかないから、秋晩くに手入れを充分にして置かなければならない。この手入れさへ怠らなかつたら冬ぢうそのままにして置いてもよい、木の葉なぞも綺麗に掃き取つておけば、亂れるといふことはない。冬の庭の味ひの深いのは何と言つても霜で荒れた土がむくみ出し、それが下ほど凍えて、上の方が灰のやうに乾いてゐる工合である。苔は苔のままむくみ上つてゐるところに、何とも言へぬ深い寂しみが蔵はれてゐて、踏んで見るとさつくりと土が沈む。乾いた灰ばんだ何處か蒼みのある土が耐らなく寂しい。掘り出しものの朝鮮の焼きもののやうな色と粉とから成り立つてゐるからである。

冬は庭木の根元を見ると、靜かな氣もちを感じさせる。灰ばんだ土へしつかりと埋め込まれて森乎としながら、死んでゐるやうな穏やかさをもつてゐるからである。庭を愛するひとびとよ、枝や葉を見ないで根元が土から三四寸離れたところを見たまへ。さういふ庭木の見かたもあることを心づいたら、わたしの言ふことはないのである。

冬は四季を通じての庭のはらわたを見せるときである。庭の持主の心づかひが此の季節にすつかり表はれ、春夏秋の手入れや心配りの程が解るやうである。春夏秋の怠りもまた冬になると露はれるのである。池水がよごれて居れば氷が美しく見えない。木の掃除が行きとどいてゐなければ枯葉を亂すおそれがある。

何と言つても冬の庭は嚴格と品とをもたなければならぬ。どれだけ嚴格であつてもよい、むしろ嚴格すぎて優しいところができれば、冬の庭としての全幅を含んでゐるやうである。冬の庭は障子硝子から一と目眺めたきり、それ以上眺めることがすくないものであるから、その瞬間に何かが視覺を打たなければならない。冬は寒いから庭のありさまも温かくしなければならぬといふは俗說である。どこまでも寒く鋭い方がよい。徒らな松の吊繩、藁のかげ法師、植木の苞藁などはよくよく考へてから、その位置を作らなければならぬ。東京地方の相當の屋敷の冬がまへが、すこしの野趣風雅のないこれ見よがしの風情を見るごとに、主人の俗腸を嗤ふものわたし一人ではなからう。どこまでも睨みの利いた一瞥全景のひびきを持たさなければならない。烏瓜の實の朱い色が凍み亘りその色が黝ずんでゆく、しまひに吊柿のやうな色になり干乾びて種が鳴るやうになる、そこで初めて烏瓜の美しさが感じられるやうに、冬の庭も四季の終りに豁然として美事な眺めに就かなければならぬのである。

雪は冬の庭に永く眠つてゐるほど寂寞である。雪がきたらそのままによごさずに置くのである。雪に觸つたところが一と處でもあれば、その睡り深い姿を掻き起す。寂寞が亂れてはならない。消える時もひとりで斑らに美しく消えるに

まかせるやうにする。手洗ひや、つくばいに張る水も氷とともに嚴格以上の嚴格さをもつてゐる。冬の庭の要を鎚のやうに磨き立てるものでなければならぬ。

冬の庭木としては別に特別なものはないが、梅擬の實の朱いのが冬深く風荒んでくるころに、ぼろぼろ零れるのはいいものである。南天の賑々しさにくらべると仲々澄んだ感じである。これは零れ落ちるときが最もよい。下草でも草の強いもので實や穗になつたものは、そのまゝ冬も刈らずに置くと却つて風雅なものである。石蕗の花も枯れたまま置くと錆びた姿で春まで殘つてゐる。砥草などは北風にさらされる方の莖の色が茜色に燒け、さかんな水氣を吸ひ上げ尖端を蕭條と枯らしてゐるなぞ冬の色である。砥草はまとめて植ゑるよりも斑らに七八本づつ亂して置く方がいいことを冬に入つてから知つた。

枸杞の實の斑らに殘つたのは、その朱い實を見つめてゐるだけでも、悲しくなる或る種類の愛情をもつてゐるものである。八ッ手の花は品はないが朝霜の中では清冽な一脈の氣焔を上げてゐる。黑ずんでくるころは仲々美しい。——

山茶花は白いほど品がよく淡紅はよくない。蕾のころか零れ散るころがわたしの心に叶ふてゐる。枇杷や茶の花は枯淡以上のもので枇杷になると花ではなく、古い陶器の一部を剥ぎ取つたやうに思へる。まだ茶の花の方がいくらか枇杷よりか優しくおでやかだ。細たる蕾の姿は粟や餅米のやうに小粒で美しい。どこか庭のすみの方に二三株、目立たぬほどに植ゑて置く心がけを備めるくらゐで、じみな花である。しかしその實に至つては天來の寂しみをもつて、割れて口を開けその根元に種をこぼす、母のこころをもつてゐる懷しいものである。わたくしはよく椿の實を枝にたづねたものであるが、茶の花は根元の土の上を搜ねる方が、早く種が見つかりさうである。全く茶の實は枝にはなく土の上にこぼれてゐるからである。

い。わたくしはこのごろ松竹梅といふ三點樹を昔の人がさう言ひならしてゐる言葉に感心してゐる。松竹梅といふと古い言草であるが、松といひ竹と言ひ又梅といふは樹の中の三兄妹であつて、三樹交契のいみじさ美しさは喞々としてわたくしの心に何かを囁いてくるのだ。木の世界の王さまでなければならぬ。實際この三樹交契を以つて庭を作るとしたら最早何ものも要らない。昔から此の木々をもつてめでたいものの標本とした。その故深い意味が意味ばかりでなく、心までさう感じさせて來たのは恥しながらわたくしに取つては最近のことである。あまりに目に觸れすぎたため此の三樹交契が日本人の性分をこまかに織り出してゐたことさへ忘れてゐた程であつた。芭蕉の俳風も眼を閉ぢて思へばこれらの三樹交契の幽韻の内にもあるやうである。もつと進んで考へると此の交契の奥深くに吾らの祖先が一幅を賦して坐つてゐたこととも思はれるのである。

松はその風韻の音に秀でてゐるは言ふまでもないが、一群の淸韻は遙かに天に向つて何ものかを奏でてゐるやうである。葉も枝もよいがその音を取らねばならぬ。西行、芭蕉の道であらう。竹はすぐな心を表はしてゐるやうで陳腐であるがさう考へる方が無理がないやうである。かれは寂しいが喜んでゐるやうな木である。絶えず愉快な表情の中に、流れるやうな寂しさをもつてゐる。そして雨とか雪とかになほ一層その奥の手をみがき出してゐるやうである。

梅に至つては匂ひであらう。

ともあれこの三つの樹を目にすれば、藹然たる朝暮の庭を目でこさへることができる。永く忘られたもので、絶えず目にふれてゐて認められざる樹である。或る意味であまりに拙劣な繪や詩歌のために毒されてゐた此の三つの木々は、萬木を抜んでて絶えず各々孤獨で世のすみにゐることは、わたくしにとつて仲々に見のがすことができないものである。めでたい木々である。

わたくしの親友で推名といふ男がゐたが、赤貧の士で、庭を愛する誠の人であつた。門を潜ると小庭があり格子戸に蔦の葉がからんで、秋晩くは夜など蔦の葉の中に格子戸をさぐらなければならなかつた。

推名の說に據ると冬に入ると石燈籠の苔の色が灰ばんで、始めて石質本來の色を出すといふことだつた。苔の青みがうすれ、晒された灰暗色になりその調子の高い寂しい色は四季を通じて最も見頃なときであらう。石燈籠ばかりではなく飛石、棗石なども冬は冴えず曇つて居、そのうへ埃をあびてゐるので落着き方、沈み方、さびしをりなどが凡て一色に統べられ、寂然として生けるが如しと言つたが、予もまた同感をした。夏秋は苔の色が深まつて本來のさびしさが包まれ無くなつてゐる。石や燈籠のあまりに人工的に靑いのといふものは、卑しいものである。却つて冬の風に吹きさらされた本來の色が予には限りなく慕はしいものである。すこし埃を浴び、妙な灰曇りをした棗石の、ところどころ青みが剝げかかり冷たく土の中に三分の一の姿を埋め、考へてゐるやうに据ゑられてゐるのを見ると、冬らしくいい感じである。棗石に寒竹やしやりん梅などの朝の間の影を落すのもいいものであるが、啼かない冬鶯が束の間脚をとどめて去るに泌いのを眺めることは、わたくしの心に金玉の音をかなでると一般のよろこびである。しやりん梅の下枝や厚い葉かげが冬鶯を呼び入れることは、徒むらに鶯のかげの絶え間もないことと同樣に、この小鳥の心を好きにはこぶからであらう。

しかし推名の說によると冬鶯は淸潔に掃除された庭よりも、垣破れくもの巣のあるところ、主としていぶせき庭を好むといふのは、餌のあるなしに係はつてゐることであらうが、冬鶯といぶせき暮しとがかういふ具合に結び合はされるのも、めでたい話である。大樹壯麗の庭よりも却つて三四坪の庭をくぐりぬける冬鶯は、赤貧の士にめぐむ風雅の志に富むと云ふべきであらう。

わたくしは椎名の愛惜する「古月」と稱するつくばいを一瞥したときに、既に蒼爵たる月をゆめ見たほどいいものであつたが、冬ざれのけふこのごろ椎名はその氷を碎かないで、鉢一杯に凝固した氷を愛でてゐた。こころみに仔細に氷を驗すれば一塵のかげを止めない鏡の如き氷であつだのは、かれ椎名の氷の來ぬ前に用意した張り水の心得をあらはしたものであつた。一たいにこの椎名といふ人がらは庭の中の隱れたところに、絕えず或る用意を施してあり、それに心をそそいでゐるのには感心した。かれの住居の垣は通りから透き見されるくらゐ破れてゐたが、さういふことに關はらない男である。庭は奧の方ほど心がゆき亘つてゐる。眼前寸景の美しさを掃き淸めることはできるが、樹後垣前を掃くことは人々のよくしないところである。わが椎名は這間の氣もちを誠によく現はしてゐるわたくしの敬ふところの、いはゆる庭中裡の人であつた。かれはお屋敷風の庭を好かないで、むしろ茶庭を好いてゐるのも、わたくしの心意氣と同感であつた。

椎名は既に一人前の植木職の手腕は持つてゐたが、植木屋は絕えず雇ふてゐた。去年は椎名は自分ひとりで冬構への仕事をして、松葉の透き方、四ツ目垣、水撒き、卷藁をするもの、それら一切のものの霜除けをしたので、植木屋は入れなかつた。正月になつて酒氣を馳つた植木屋があばれ込んで、永い間出入りをした自分を雇はないで、他の植木屋を入れたと言ひ、大聲を擧げて無情を叫んだが、椎名は落着いて庭の手入れはおれ一人でやつたのだと言つても聞かなかつた。そして庭へ廻つて見て、益々猛り立つて「これはおれ以上の植木やを雇ふたのだ。」と言つて去つたさうである。椎名はそれだけの手腕をもつてゐたことは實際である。植木屋に使はれるやうな庭主は、庭を談ずる資格がなく、植木屋は庭主の足りない手足のごとく使ふものであると言つて、木の植ゑ方は知つてゐても、配置を知らないと椎名は言つてゐた。

植木やの配置にかたがあり、かた以上に出ない、やはり庭主の心意氣如何によるものである。椎名の説によると、俳句の歳時記にある冬の季題で、冴え返る、氷、鐘氷る、凍える、下冷、などといふ題意が、既に立派な自然の或る底に徹れたもので、句作はその鋭く徹した季題の境の向ふに達せねばならぬことを考へると、仲々容易の仕事ではないといふ持論であつた。氷とか冴え返るといふ題が既に或る格をもつてゐる。作品はそれを突き破らなければならぬ、――庭のこともまたこの道と同じで、庭といふものの形や色をつきぬけたものでなければならぬといふのである。單なる配置や、高價の植木の色合せをすることでなく、庭の主人の心が一瞥一讀さる體のものでなければならぬと云ふのである。同時に何か變つた庭で、ありふれた庭でないものを作りあげるのも、一見識といふべきであらうと言つてゐる。

これらの説は予と同じい傾向をもつてゐる。庭は閑雅でなければならぬが、きざとわざとらしいところを避けなければならぬ。あまりに整ひすぎては心狭きを表はし、隙間だらけの不用意も賛成できぬ。庭と言つても此處に來るとうつかり手も出せぬやうな氣がするのである。庭主の心のうごき方も、落着き方があらはれるからである。あせりや、悶えが見苦しくあとを殘す近代の速成的の庭の多いことよ。

庭は隅の方から作つてゆく。一つの隅を作り終へたら、又次ぎの隅の一部から學んでゆくのである。そして三方或ひは四方から作りあげてゆくうちに、庭の中心がひとりで出來あがるのだ。庭のまん中から作つて行つたら滅多にかたがつくことがない、魚を料理るにまん中から庖刀を入れることは、料理ることを知らない人のすることである。腹や頭から庖刀を入れねばならぬ。それと同じいやうに隅から作りあげ、ひとりでに中心を殘して行つたら、そこで中心でぎゆつと締めるやうな心で、最後に帳メをするのであるが、この一點で仕上げの行き方で、庭を活すとも殺すともできるのである

かりに吾々の借りた土地に、一本の樹があるとする。それから庭を作つて行つてよい。一草一木のない土地でも、其庭に立つてどうして庭を作るかといふ考へをもつたとき、日あたりのよい温かいところを暫らく穏やかに眺めてゐるとよい。そこに何か木や草のまぼろしを感じ、まぼろしは本統になり此處へ木を植ゑればいいのだなと感じるのである。さういふ直覺的な感じは庭を作つた經驗のない人も、また斯道に相當苦勞した人にも何の變りはない。温かい日南の土地は、土地みづからが既に草木の姿をまぼろしに見てゐるからである。木が土地に植ゑられることも予にとつては宿命で、落着かぬ木はいくら植ゑても取捨られ掘り返されるが、因縁のある木は択りかけた自分だけの地面にしつくりと根を張るものである。それは植ゑる人の心がそこにとどまるまでに、何か木と土地の間に契りが結ばれてゐるやうで、相逢ふものの嬉しさが思はれてならぬ。日南の一草もない空地は絶えず木々の姿やかげを慕ひ、人もまたそこに木が植ゑたいといふ望みをもつのである。かやうに戀するやうな温かい氣もちの交はりが庭をつくるときの、最初の心の動きでなければならぬ。

この意味で石を置くにしても、石は自分の坐るところ以外には、どの向きを與へられても落着くことができない。木のかげや垣の前でもなく、やはり予の説を立てれば彼は彼の在る約束のところに在らねばならず、そこを外れたら落ちつけないわけである。若し庭主が心高くこれらの草木泉石の約束を知つてゐたら、木や石はいきなり自分の居るところを與へられるのである。庭主に何らの雅心がなかつたとしたら、石はどちらの隅に置いても落着かず据わらないでしまふ。これらの呼吸は間髪を入れずに約束を果さなければならぬが、予のごとく性愚鈍の輩は折々これらの默つてゐる掟を讀破することができなくて、石を罵じり己れは美しい春の日をさへ徒らに勞れてしまふのである。それは單なる木を植ゑ石を据ゑるの謂ひではなく、吾々の心の好きと、木々の心とを植ゑるのである。つづめて言へば人間の心と木との

それが折合ふて描いてゆく庭である。相阿彌や大雅の心をも心としなければならない。
つきつめれば此處にも並みはづれた愛情がなかつたとしたら、庭は育たないやうである。生けるものに對するやうにではなく、生けるもの以上に愛しなければならぬ。目を放してゐると姿を亂すこと小兒のやうで、目をかけてやれば一糸亂さざる伶悧の小兒のやうでもある。愛深ければ深いほどゆたかに育ち、趣き幽邃をうがつてゆくのである。一樹一石の庭といへども主人の心足らざるときは、木は姿を亂し、石は泥をかぶるくらゐである。家人の手のふれる飼猫の毛並いつとなくつやを帶び、人の手にふれぬ猫は茫々たる毛なみをしてゐると一般である。

後書き

これらは「庭をつくる人」の手習のやうなもので、「庭はどうしてつくるか」といふわたくしの秘藏本の序文のやうなものかも知れない。序文だけでその書物は終るかも知れないのである。しかしこれらのものは「紙上の庭」ではなく露霜に打れた庭であることも實際である。なほ京都方面の古い庭を見る機會を新しくしたときに、自分はもつと具體的に「庭をつくる人」の記をかくことにするが、いまはこれだけに止めて置くことにする。これらのものは專門家にはあき足りないものであらうが、また專門家の狙ひの外のものを狙ふたところもあるだらうと思つてゐる。

文藝時評

正宗白鳥

「毆られるあいつ」

露國近代の作家のうち、レオニイド・アンドレーフの作品は、日本現代の文學者に割合によく讀まれてゐるらしい。私なども、二葉亭の「血笑記」上田敏の「心」、あるひは「沈默」を卷頭とした英譯の短篇集などによつて、早くからアンドレーフに親しんでゐた。森鷗外は「人の一生」を譯してゐた。その後小山内薫氏（?）の飜譯によつて「星の世界」を讀んだこともあつた。彼れの小說や戯曲は日本人の頭にも入り易いもの〻やうである。作品の味ひはまるで異つてゐるが、菊地寛氏の戯曲や小說が他國人に喜ばれて推讃されるのと、趣きの似てゐるところがある。

アンドレーフの者は、日常生活の寫實ではないので、話が面白い。どれにも奇拔な思付があつて讀者の心を惹く。それに全體を貫いてゐる作者の主觀が我々の胸を打つのである。非凡な作家であることは、彼のどの一篇を讀んでも、直ぐに感ぜられる。

私は近年、彼れの作品を讀まなかつたが、しかし、文學によつて資産をつくつてゐた彼れも、革命後は不遇で、何處かで悲慘な最後を遂げたといふことを聞いて、彼れの作品に現はされてゐる思想と照し合せて、大に感慨を催し、且つ、

近頃「毆られるあいつ」といふ題目からして、彼れらしく、奇抜である戯曲が、日本に於ても演ぜられて、觀客に深い印象を與へたといふことを聞いて、私自身、それを讀みもせず觀もしないのに關はらず、世の好評をそのまゝに受入れてゐた。初期の作風を押進めて行つたアンドレーフの晩年の「毆られるあいつ」は、どんなに深刻であり、偉大であらうかと豫想してゐた。日本譯も二種出てゐるらしい。亞米利加ではそれが活動寫眞になつてゐて、日本へも來てゐると、數日前新聞に出てゐたやうに記憶してゐる。

私は、一二ヶ月前、ある書店で、ふと、この戯曲の翻譯を見つけて、買つて來て早速一讀した。それは、熊澤、北村二氏の共譯のもので、題目は、「横つ面をはられる彼」と譯されてあつた。譯者の序文によると、これは「作者の死の一年前に書かれたもので、アンドレーフの虚無思想厭世哲學の總決算をしたものだ」さうだ。

成ほどうまい。モルナーやショウの戯曲を讀む時のやうに退屈しないで、しまひまで作中へ引込まれた。對話にゆるみがなくつて、打てば響がしさうだ。いろ〳〵な露西亞の小說で馴染になつてゐるやうな人間が、かういふ日本譯で讀んでさへ眼前に浮上つて來る。上演したら、大抵の見物に面白く思はれるだらう。「人の一生」や「星の世界へ」などよりも劇的技巧の進んだものだ。

かう感心してゐると、評語を挾む餘地はない譯であるが、私は、この傑作を讀んだのを機緣として、文學といふものについて考へたのである。

前に引用した序文の一節の、「アンドレーフの虚無思想厭世哲學の總決算をしたもの」といふ評語は、いづれ外國の批評家の鑑定に基づいてゐるのであらうが、私は、アンドレーフの所謂虚無厭世の思想も、此處では徹底してゐないことを感じた。むしろ初期の短篇などにはもつと徹底してゐるらしいものがあつた。が、この作者も、歳をとつて人生の經驗

に富み、且つ生活も豐かになるつれて、人類通有の所謂「人間性なる」ものに心を置いて、甘味のある安らかさを喜んでゐたのであらう。

無智で虛僞に滿ちた社會から逃れて、曲馬團の道化役者となつて自己を忘却すると同時に、仲間の道化役者からの頰打ちに依つて受ける群集の笑聲で、彼等自身の無教養と虛僞と卑劣とを嘲笑しようと企てた彼れは、陽氣な假面を被つた虛無厭世の權化とも云ふべきものであらうが、さういふ彼れは、曲馬團へ入ると間もなく、仲間うちのコンスエルラといふ少女によつてヤキモキしだして、それを天女の如く觀じ、その少女が下劣の男に誘惑されるのを、何かと理窟をつけて苦に病んで、其等男女を死に導き、自分も毒を飮んで死ぬるのである。そして、「貴樣はそんなにあの娘を愛してゐたのか。男爵、貴樣はそんなに愛してゐたのか、おれのコンスエルラを。貴樣はあの世でもおれを追越さうといふのか。いや、おれも行くぞ。あの娘が永久にどちらのものか。――あの世へ行つてもお前と戰はう」と、强く怒つて云つてゐる。

死ぬ死ぬなど、舞臺の現はれは、作者の心の働きの象徵と云つていゝのであるが、この作者の心は厭世でも虛無でもないのである。自分の妻を人に取られたゝめ自暴自棄となり、世に對して復讐をも企てたのであつたが、小奇麗な少女を見ると、文學青年見たいに、直ぐに感傷的になつて、それを尊い美の權化だなどと思つて、死を賭してまで、その美を守つてやらうと、勇猛な決心をするこの「彼」に、徹底した虛無厭世觀のあらう筈はない。むしろ娑婆つ氣に富んでゐると云つていゝ。歪曲に流れてゐる厭世の色調はむしろ皮相と云ふべく、根柢は人類を通じての常識である。ある意味では、フローベルの小說が、表面藝術美に輝いてゐながら、根柢には虛無厭世の感じの潛んでゐるのと正反對である。

しかし、そのために「毆られるあいつ」の文學的價値を低めようと、私は思つてゐるのではない。徹底しないところに人生が存在し、文學が存在するのではないかと、私はこの傑作を讀んだあとで感じたのである。この主人公も、徹底

しなければこそ、妻の不仕末に心を惱まし、世を憤り、少女を美化し、氣の利いた厭世語を吐きちらしてゐられたのだ。多數の讀者多數の見物の同感をも得られたのだ。不徹底な思想をすぐれた技巧によつて現はしたのが、この一篇である。技巧を度外視して、「毆れるあいつ」が批評し得られるであらうか。上田敏氏の譯した「心」は、原名は「思想」と云つたものださうだが、その作中の人物が人の見てゐる前で平氣で人を殺して見ようと企てゝ、うまくそれを實行したものゝ、後で、そんな變なことを企てた自分の心理を疑つて、自分は精神病者ではないかと疑ひだしたことが細かに書かれてあつた。私は今、この小說も、奇拔な思付き上手な叙述、すなはち技巧に於いて感動すべきもので、思想に於て感服すべきものとは思はれない。トルストイがアンドレーフの作品を評して、「こんなものはちつとも凄くはない」と云つたと、昔、何かで讀んだことがあつたが、私も、「毆られるあいつ」に含まれてゐる思想によつて、少しも凄さを感じない。

青年時代のアンドレーフは、生活の不如意に苦んだためか、自殺を企てたのであつた。その瞬間の厭世虛無の感じは切實なものだつたに違ひない。しかも、幸か不幸か、若き死を免れたあとの彼れの生涯は、文學に於いていかに深刻らしい厭世調を發揮しようとも、一面不徹底であつたに違ひあるまい。そして、晩年、革命後の社會組織の變遷に會つて、窮死するに至るまでの彼れの心的苦痛は、多年說來つた厭世虛無の主觀によつて緩和されたと思はれない。その思想に全心を托して、死を見ること歸するが如くなつてゐたとは思はれない。死する一年前の作だと云ふ「毆られるあいつ」の思想のいかに不徹底で、老婆つ氣に富んでゐるかを見てそれが察せられる。

私は及び難しとして、アンドレーフの戲曲に感心するのは、その技巧についてゞある。トルストイについて何時になつても感心するのはその技巧である。

由來西洋の虛無思想なんて云ふものは娑婆つ氣に富んでゐる。死生を超脫した漂渺としたところがない。その點は東洋の方がいくらか徹底してゐる。室伏高信氏の「亞細亞主義の勝利」（改造五月號所載）の所說には、私も多少の同感が寄せられる。しかし、氏が、「無爲的無欲的無知的亞細亞主義が、（西洋文明に代つて）勝利の聲を揚げる時が來たのだ」と云つてゐるのに對しては、果してさうであらうかと、私は疑つてゐる。我々、すなはち文明國の人類は、最早、無爲無欲無知の聖境に安んぜられなくなりきつてゐるのではあるまいか。

「毆られるあいつ」の中のいろいろな人物――コンスエルラの父や、曲馬團の支配人のブリケや、その妻のジニイダなどは、ゴルキイやチエホフの作などにも出てゐる我々にも親しみのある露西亞型の人物であるが、日本人とは違つてゐるために、この種の人物に興味を感じ、それにつれて作家その人をも買ひかぶる傾きがある。露西亞の作家が露西亞人らしい人物を描くのは當然であるのに、それを作家獨特の手腕であるやうに思ふことが多い。……アンドレーフなどは、何と云つても傑れた作家であるが左樣でもない作家が渡來して、何でもない日本印象記などを書いても、それに對して隨喜の涙をこぼし、（雜誌、「實生活」の所說などその一例）その御機嫌取りに汲々たるは、阿呆らしさの限りであるが盲目的歐米崇拜は、舊日本の支那崇拜と同樣で、末長く續くことであらう。これに反して五月號の「解放」に、在米の吉岡靑村といふ人の寄稿した「日本文學は何時歐米に紹介せらるゝか」は外人が、日本に對し、日本文學に對し、ことに日本現代の美術文學に對して、いかに侮蔑的態度を取つてゐるかを、我々に知らせてゐる。菊池寬氏の戲曲が英國の文壇で持囃されてゐると聞いてゐるが、それは氣まぐれの沙汰で、吉岡氏の所說が一般の眞相であるやうに、私には思はれてならない。

トルラアの「ヒンケマン」にだつて、私は、あの思想よりもまづその技巧に感心した。「ヒンケマン」だつて、「毆られるあいつ」だつて、ある場景をハッキリ描きだし、人物や事件を最後まで押進めて行く創作力はえらいものである。日本現代の多くの戯曲は概してその點で甚だまづい。當然の順路ではあるが、日本の新しい劇作家の多くは、築地小劇場で演ぜられる飜譯劇や、新潮社などから出版される西洋近代戯曲の飜譯本を、お手本として、新作を試みてゐる趣きがあるので、獨自の創作といふ感じが乏しい。製作上の思ひつきから云つても、かの二篇の如き奇拔なものは見あたらない。乾燥無味な文句で粗雜な社會觀を述べたり、西洋劇中の人物の口眞似をした文句を述べた三角關係を仕組んだりした新脚本は、讀んでもたまらない感じがする。劇場で新作を上演しないのも無理がない。

雜誌の五月號

「婦人之友」所載の、楠山正雄氏の長篇歴史小說「御堂殿の子」を、今月の分を讀んで、ちよつと面白く思つたので、前に遡つて二三回讀んだ。これは讀み續けたいと思つてゐる。以前芥川氏の書いた歴史小說のやうに趣向を凝らし文章に骨を折つたものではないが、ノンビリしてゐていゝ。田山氏のよりももつと客觀的で、時代の空氣がよく出てゐて、しかも、作者の批判の目は可成りに行屆いてゐる。楠山氏は何時の間にかういふものを書き得るやうになつたか。侮り難い作家である。

　里見弴氏の長篇「大道無門」（婦人公論所載）も、うまいことはうまい。田山花袋氏の「兄弟」は、氏の近時の作品中では、最も藝術味に富んでゐるものである。以前の氏の作品に比べても、かういふものゝ方が却つて氏の本領として傑れてゐるのではないかと思はれる。さき頃、私は「現代小說全集」の花袋集をところ／＼讀んだが、卷頭の「一握りの

の類」如きは今から見ると生硬で、人生觀察も甚しく淺いやうに思はれた。

「改造」に連載されてゐる佐藤春夫氏の「この三つのもの」も力の入つたものである。これに對する批評は差控へて置くが、この長篇と云ひ、里見弴氏の長篇と云ひ、この頃、讀應へのする長篇小說が、あちらこちらに出かゝつてゐるのはいゝことである。長篇と云へば通俗小說ときまつてゐるやうな弊風も次第に打破されるであらうと思はれる。

谷崎潤一郎氏の「金を借りに來た男」は、會話に血が通つてゐるから、讀んでゐて退屈をしない。「女性」に出てゐる「上海交游記」を讀んで、支那にも新しい文學が起りかけてゐることを知つて面白く感じた。谷崎氏が支那の文學青年に取圍まれて氣焰を吐いてゐる光景は、露佛の文學者が日本の文學者に歡待されてゐる有樣と似通つてゐるやうに思はれて面白かつた。

德田秋聲氏の「貨物」(文藝春秋所載)は、いろ〳〵なことを考へさゝれる作物である。これを讀んだあとでは、「毆られるあいつ」を讀んだあとで考へたと同樣に、私は人生と文學とを考へたのである。それは決して樂屋落ちの興味だけではない。滾々として盡きざる人情の泉をそこに汲み得られさうに感じた。淺はかな身邊雜記とは違つてゐる。

「太陽」所載の、ピリニヤーク氏作、平佐一郎氏譯の「ペロコンスキー莊園」を讀んだ。露國革命當時、大地主の公爵が貧民委員會から立退きを命ぜられて、孤影悄然として去つて行くことを書いたもので、革命史の一片として見ると多少の興味がないとはない。步疲れて、汚ない百姓家に秘密に泊めて貰ふところなど、日本戰國時代の落武士を連想される。しかし、心理描寫などは極めて平凡である。露國舊文學の傑作と比ぶべくもない。何處に藝術的價値があるのかと疑はれる。……作中に、公爵が百姓家で南京蟲に責立てられて寢返りを打ちながら考へてゐるところに、「今後、數百年を過ぎた時代の人々が、今の世の有樣を必ず書物に載せるに相違ない。――最も高尚なる人類の精神の發露せる偉大なる時

代の現象として、同情撫恤の優美なる筆を走らせるに相違ない」とあるのを讀んで、私は唖然としたのである。この大地主は勞農政府によつて所領の莊園を奪はれたのである。それが乞食同様に成下りながら、最も高尚なる人類の精神の發露として、時代を讃美してゐるのだ。石田三成の殘黨がおたづね者となつて逃隱れしながら、德川家を讃美してゐるやうなものだ。……よくも、こんな空々しいことが書けたものだと、私には思はれる。關ケ原の役や大阪陣について德川時代の歴史家の書いたものは、德川を憚つた諛史となるのを免れなかつたが、勞農政府治下の文人は、小說に於てさへ筆の自由を許されてゐないのであるか。

「改造」に出てゐる成瀨無極氏の「喜劇詩人カアル、シュテルンハイム」を讀んで、私はこの生面の作家に興味を感じ、斬新な戯曲に接するつもりで、その傑作「腰卷」を出來立ての日本譯で讀みかけたが、詰らなかつたので、中途で卷を投じた。思ふに、かういふ喜劇は原語を充分に味ふ力がなければ妙味を感得することが出來ないので文字の意味だけを譯した譯本によつて、その眞價を云々するのは間違つてゐるのであらう。成瀨氏の論文で、この戯曲の筋を讀んだ時には、滑稽味も社會相も心に浮んで、感動したのであつたが、作品その者に接すると倦怠を覺えて、讀む前の感動が次第に薄らぐのは不思議である。しかし、外國の作品についてはたび／＼さういふ目に會ふのである。

坪内博士の近譯で、沙翁の「戀の骨折損」を讀んだが、博士の巧妙なる飜譯によつてさへ、この喜劇の面白味は感じられなかつた。讀んでゐて退屈で、腦力の骨折損をしてゐるやうに思はれた。喜劇と云へば、日本の「狂言」のうちには簡素で含蓄があつて、社會相も人間味も現はれてゐて、日本特有の喜劇として價値のあるものが多少は存在してゐる。しかしいづれも小咄的小品喜劇で、此等の者が演劇に取入れられても、元の小咄のまゝで、そこから發展してゐるところがない。日本の喜劇には喜劇らしい喜劇はなかつた。

郷土生活の見聞を材料とした相馬御風の氏の論文は、中にはわざと御風式意味を附けてゐるのでいやに思はれるものもあるが、概じて面白い。都會の文壇に沒頭してゐる人々からは得られない味ひ深い人間生活の種々相がそこに出てゐることがある。今月の「不同調」の閑談や、「文藝行動」の春宵雜話などにも面白い話が出てゐる。氏が文壇的生活を棄てゝ、十年も地方に腰を据ゑてゐたのは無意味ではなかつた。洋行なんかして上つ面だけを見て來るよりも、田舍にじつとしてゐて周圍の老若男女の生活をよく見てゐる方が、眞の人生を知るためには却つてよかつたのかも知れない。……しかし、私自身は田舍生活はきらひだ。とても相馬氏のやうな心持で地方人に接することは出來ない

「書生氣質」以來

花時のある日に、坪内先生を熱海の別邸双柿舍に訪問した。その時の雜談のうちに、「以前は何か書かうとすると、先づ文體をどうしようかと苦心した。今はそれがちやんと極つてゐるから、無駄骨折をしなくていゝ」「精神的の煩悶は一葉獨歩あたりからはじまつたので、その以前の文學者はみんな呑氣で、さういふ方面の苦しみはなかつた」と、先生は云はれた。

その時、私は「當世書生氣質」を、新刊の「明治文學名著全集」本ではじめて讀んでゐたのであつた。駄洒落が多くつて浮はついてゐるところ、沙翁の處女作「戀の骨折損」が思出された。しかし、當時の時世の一面を此處に見ることが出來るので面白かつた。その頃の青年が、文明開化の新時代に浮れてゐるところが現はれてゐる。日常の會話に頻りに變則の英語を亂用し、「モネーをペイする」だの「セブン（七）へボウン（典）したか、セル（賣）したか」といふやうなことを口にして得意がつてゐるなど、今から見ると淺薄に思はれるが、彼等はさういふ新來の言葉にも新日本の

暇の喜びを感じてゐたのであらう。

明治から今日まで、偉大な作家はなかつたやうであるが、しかし、二葉亭紅葉一葉子規樗牛から、漱石獨歩などに至るまで作家はそれ〴〵に時代の影をおのれの作に映してゐるのである。日本の文學者は時代に對して盲目であるとか、現代の文學者は自分の小さな殼に潜んでゐるとか云ふことは、この頃の批評家によつてはじめて觀破されたのではないので、昔からいろ〳〵な批評家が絶えず唱えて來た陳腐な常套語であるが、しかし、明治以來の日本人の内的生命を知るにも時代々々の趣味好尙思想などを知るにも、用語や服裝の變遷を知るにも、文學による外はないではないか。時代の陰影は、時代に盲目だと云はれ〳〵したいろ〳〵な作家の作品にも微かながらも現はれてゐる。いかなる作家もその國のその時代から超越することは出來ないのである。今日活動してゐる作家の作品にも後世から顧みると、其處に時代の影が現はれてゐるのが分るであらう。

「書生氣質」以來、多くの作家がおの〳〵獨自の藝術に力を盡したのであつたが、後から見ると、共同して新日本の藝術を作上げようと努力したやうなものである。深淺大小如何は別問題として、その努力に對しては、後進の我々は感謝しなければならぬ。（四月二十九日、大磯にて）

批評について

私は「文藝行動」誌上で、吉江孤雁氏の「個性描寫と類型描寫」論を讀んだが、論旨がよく分らなかつた。それから青野季吉氏の「現代文學の十大欠陷」を「女性」誌上で讀んだ。これは堂々たる大論文である。一通り理屈が立つてゐる。多くの評家が首肯しさうなことが云はれてゐる。この批評家は頭のいゝ眞面目な人らしく見える。

しかし、青野氏や、その他堂々たる論文を發表する批評家の論文の多くは學究的であるのが、私には飽足らない。青野氏の今度のものでも隨分堅苦しい。潑剌たる生命も藝術味もない乾涸びたものである。何時の世にも通じさうな空疎な批評學といふやうなものから割出されたところがある。

小說では、身邊小說とか私小說とかいふものが發達して弊害を釀すほどになり、戯曲の方でも、「私」戯曲を要求するほどになつてゐるのに、批評では、なぜ私批評といふやうなものが現はれないのであらうか。片々たる雜感を筆にした時には、自己の感じをスラ〱と述べる人も、評論となると、變にしやちこ張つて他所行のことを言出すのが不思議である。藝術の批評に、裁判所に立つた檢事や判事の態度を取つて、威嚴を保つたつもりでゐるのは可笑しい。私は作家として、さういふ評家の態度を見ると、滑稽感を通越して、「公等の面憎むべし」と思ふことがある。

高山樗牛の評論は、今から顧みると、論旨は甚だ幼稚であつたが、自己の心をそこにぶちまけた私批評であつた。本當の評論はその批評家の實感の現はれであり、批評家の體驗に基くべきものではないだらうか。所有慾を排し萬人の共有を是とする議論をするにしても、自己の心に所有慾がいかに根深く据つてゐるかゐないかをよく見詰めたあとで、それに打勝つ力を養つてからでなければ、その所論は空疎である。賣淫を非難し飲酒を非難し勝負事を非難したつて、さういふ慾望が人類に根深く潜んでゐることをよく考へたなら、道德家や警察の取締りによつて、それ等の者が根絶しようとは思はれないが、所有慾の根絶が人爲の改革によつて果して出來るであらうか。……社會問題の批評だつて文學の批評だつて同じことだ……。批評家はよく現實に立脚せよとか、現今の世相を見よとか云つて、それは尤もなことであるが、評家自身は作家以上に現實離れしてゐるのである。たとへば、青野氏は、「世界を變更せよ」と云つてゐるが、これなどは一見甚だえらさうであるが、隨分空疎な言葉ではないか。「今の小說に思想がない」と云つたゞけでは、

教育家や政治家や軍人の文學評らしくて、いかにも素人くさく思はれる恐れがあるので、「社會的の現象なり、現實なりを批判し考究して得た一個の生きた觀念」がないのを云ふのだと、ひねくつて説明してゐるが、生きた觀念とはどういふことであるか。現實の人間を生き〳〵と表はせよと云ふのなら、それを現はすのが、文學の技巧である。氏自身の嫌つてゐる技巧である。繪に於ても同じことであるが、技巧が下手だと、書いたものに生命がないし、技巧が上手だと、書いたものが生々として來るのだ。トルストヰがどうのかうのと云つてゐるが、彼れの描いたアンナの描寫は、思想を云々しなくつても、古今無類にすぐれてゐるではないか。レヴインよりも傑れてゐる。文學は思想の繪解きではあるまい。ロマンローランはどうとか、バルビユツスはどうとか云つてゐるが、私はこれ等の作家を好まないから問題外として、トルラーでもアンドレーフでも、さま〴〵に流轉する浮世の人間を巧みに描いたからこそ感心するので、彼等をある主義の宣傳者として感心するのではない。賴山陽の日本外史は作者自身の考へはとに角、維新前後の志士によつて勤王の宣傳書の如く取扱はれた。今日の志士的批評家は、我々の文學をある主義やある思想の宣傳書たらしめようと強要するのであるか。かういふ批評家は、馬琴を讀んで、その勸善懲惡主義に感心すると同じである。馬琴の作中に勸懲的批判が露骨に現はれてゐるところを見ると、思想ありとして感嘆するのと心理狀態が同じである。坪内博士の「小説眞髓」以前の感じがする。

私など、文學に思想を現はすくらゐ樂なことはないと思つてゐる。文學に筆を採りはじめた頃から、自分の耳目に觸れ心に映じた人生世相を描き、自分の喜怒哀樂の感情を寫さんとしても、才分と訓練を缺いでゐるため、筆が萎けて書了せなくつて絶えずもどかしい思ひをしてゐた。端的に思想――たとへその思想が幼稚であつても――を現はしていゝものなら、こんなに苦勞しなくつてよかつた。私は人生世相を巧みに描くことを藝術の第一歩とし、且つ歩み盡せない

道を進んでゐるつもりである。思想はその描かんとする人生世相のうちにおのづから含まれるべきもので、思想を現はす手段として藝術品を作り出さうとするのではない。思想や主義のために奮鬪する人間を題材とするにしても、政權爭奪や資本家勞働者の爭鬪を題材としても、社會の一現象として、その眞相を書きたいと思ふ。八犬士の主人里見家と關東の兩管領との大合戰を描くに當り馬琴の取つたやうな成心ある態度で、世相の眞味が描けるものか。

ある主義の宣傳のために詩や小説をつくり、ある思想の説明のために繪畫を描くのも、作家の自由であるし、昔からさういふ作品は東西に渡つて無數に存在してゐて、決して珍らしくはないのだが、それ等を偏愛する批評家が、違つた藝術の道を歩んでゐる者をも、強いてそちらへ引張込まうとするのは愚かである。

トルストイの思想は古くなつても、その藝術は古くならず、イブセンの取扱つた問題は時代におくれても、彼れの描いた人間は今尚昔の如くである。馬琴でさへ、彼れの封建的思想は古くなつても、作中の所々に散亂してゐる人間の心情の描寫やある世相の描寫には、今日なほ我々の胸を打つところがある。

昨日と今日（四月二十九、三十）の時事新報を讀むと、田山花袋氏は、「作者の心の火」と題し、「作者は常に内部に燃えた火を持つてゐなければならぬ」と云つたりしてゐる。そして所謂、「私小説」「心境小説」の果しなき流行に不滿らしい口吻を洩らし、「もう少し小説らしい小説が出ても好くはないか」と云つてゐる。

田山氏でさへこんなことを云ふやうになつたのかと、私は世の推移について考へた。「私小説」の元祖は田山氏であつて、「蒲團」出現後、殆んど二十年、原稿生活者の雜多紛々の日常生活を描くことが、小説家の取るべき正路のやうに極つてゐた。私なども田山氏の所説に刺戟され、時代の流風に化せられて、「私小説」風のものを書いて今日に至つた。歐

洲の近代文學を絶えず讀んで來た私は、小說が自分の日記だけでいゝのか知らんと絶えず疑ひながら、日本文壇の常識になつてゐる流風に對して反抗する氣にはなれなかつた。

今日、田山氏でさへ「私小說」「樂屋落小說」に欠伸を洩らすやうになつたことは、文壇の風潮の一變化の徵候と見るべきであらう。しかし、私はこの頃になつて、小說でも戲曲でも、批評でも、自己發見自己表現のための小說であり戲曲であり批評であり、その他の何でもないと思つてゐる。たゞ、瑣末な皮相な日記風の小說が詰らないので、本當の自己を發揮するためには、人生と世上から、もつと効果のある材料を捕へて來ればいゝのである。空想を逞しうするのも私に於ては自己の心を鍜錬し自己に潛んでゐるものを表現するに役立つたと思つてゐる。世上萬般の材料を藝術に取つて來るのは、世間の讀者を面白がらせ喜ばせるためばかりではないので、自分の心を廣くし深くするためなのである。

斷片錄

△「演劇、映畫」の五月號に小山內薰氏は「安土の春」と「役の行者」との場合を例として、「作者と演出者との問題」を論じてゐる。後者についての氏の所說の當否は私には分らないが、前者についての氏の感想は、殆んどすべて理にかなつてゐる。舞臺の實際的知識に乏しい私は、さういはれゝば成程さうだらうと思ふばかりである。私が不滿らしく云つたのは、私の空想裡の者と違つてゐると感じたから、それを打開けただけで、實際に出來ないものを、さうしろと云つたのではなかつた。あの芝居が左程面白くなかつた責任は、演出者や俳優に背負はせるよりも、むしろ作者が反省すべきものであらう。

△私は今月の本誌に寄せた拙作をもつて、私の劇作に一區切りをつけて、當分戲曲を書くまいと思つてゐる。今までのは習作に過ぎなかつた感じがするので、こゝで一休みして、暫く考へてゐた方がいゝと思つてゐる。自分に劇才がないから一生その方を斷念したと云ふのではない。……畑中氏や左團治氏によつて上演されたことや、いろ／＼な劇評家に批評されたことは、何と云つても、私の參考になつてゐる。

△私は歴史に興味を感じてゐる。歴史小說歴史劇に興味を感じてゐる。史上の事實に熟通しながら、それに拘束されないで、人生の歸趨をそこに見たいと思つてゐる。過去を知ることは今日を知ることであり、史上の人物を知ることは今日の自己を見ることであると思つてゐる。しかし、そこまで行くのは容易なことではなささうだ。

△「新潮」の水守龜之助氏の感想錄のうちに、S氏の說として、私の「勝賴の最後」は、人物の境遇やその時代をよく知らないで書いたもので、あれでは史劇でも新解釋でもないと云つてゐるのは、當つてゐるかも知れない。あれでも、手に入る限りの書物を讀み餘程考へた結果なのだが、わが眼力鈍く才氣乏しく、あんな平凡なものしか出來なかつた。

△私ははじめて創作の筆を執つてから二十年になる。今から顧みても、詰らないものばかり書いて來たやうに感じる。物を書いて痒い所に手の屆いた氣持のしたことは一度もなかつた。

△この年になつても、本當は何も分らないのだ。しかし、今に何か分りさうな感じが、心の中にまだかすかに殘つてゐる。だから徹底的に絕望はしないで、まだ愚圖々々と生きてゐられる。………人間の生存慾の强さは、他人に於て見るよりも、自分自身の上に最もよく見てゐる。………不思議なものだ。(四月末日深夜、丸ノ内ホテルにて)

活力素

病魔に苦しむ人
虚弱を歎ずる人

工學博士坪井仙太郎氏發見の新酵母活力素は藥種に非ず人体に最も必要なる細胞中のプラスマを補給し白血球の働きを旺盛に血液の新陳代謝を盛ならしむる積極的滋養強壯劑なり故に如何なる藥種と併用あるも決して副作用等起す事なし。速に病の回復を希ふ人直に試みられよ

神經衰弱、胃腸病、心臓、脚氣、ヒステリー、肺結核
産前産後、其凡て病中の營養補給食慾増進に最適す

（十ヾ年活力素服用實驗集贈呈ス）

三〇瓦（約一ケ月分）二圓
一二〇瓦 七圓
二二九瓦 十三圓
四五〇瓦 廿五圓

東京京橋五郎兵衛町五
活力商會
電話京橋五八一七番
振替東京二三〇八六

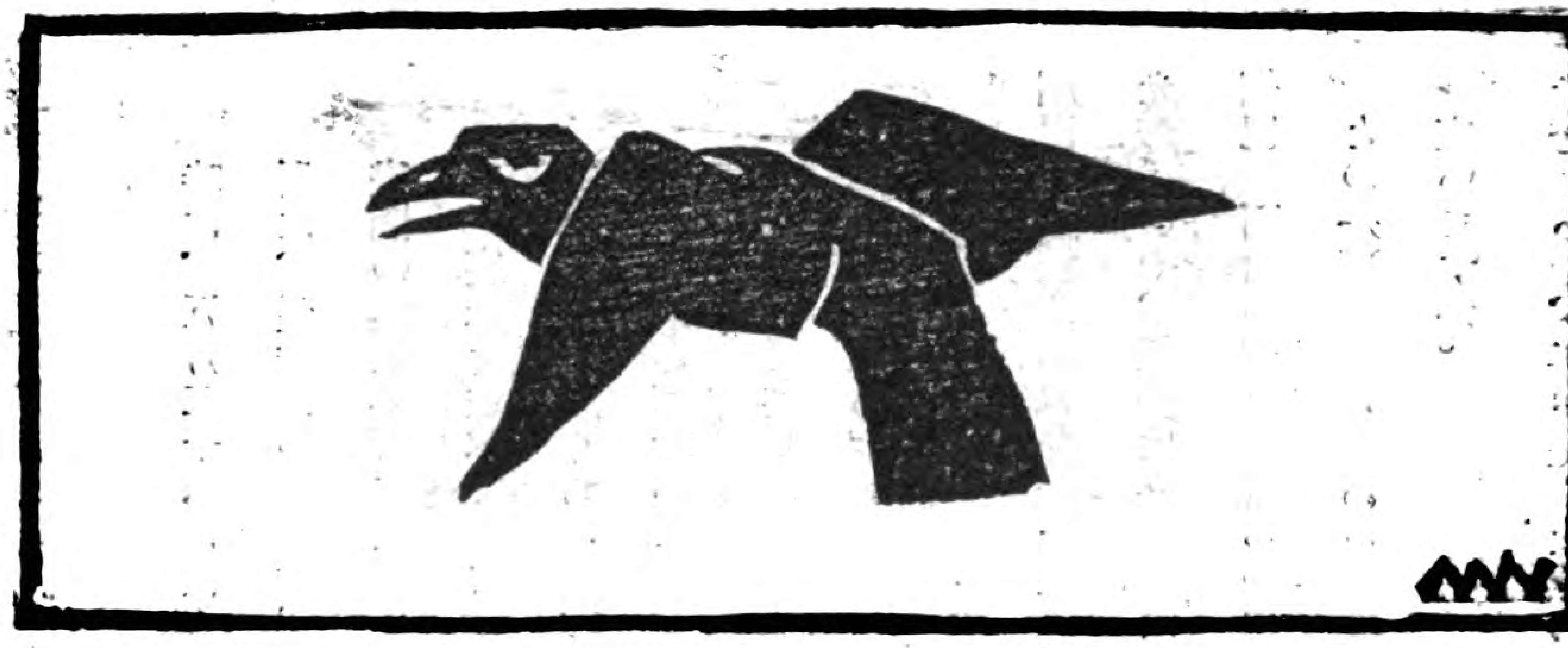
活力素

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき「カロット」の効力

昨年三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角、煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ様になるので、不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものでない所が、茲に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に溫雅な香氣と忘れ難き清涼な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて漸じて二度と吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する効力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸めも出來ない。何故なら再び煙草がまずくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此効力に驚いてゐるのでわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら乾度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵の大阪朝日の村山社長との禁煙の約束など面白い一例である。



光秀と紹巴

正宗白鳥

人物

明智光秀

紹巴

明智左馬助

同次右衞門尉

齋藤內藏助

藤田傳五

溝尾勝兵衞

野武士三人

侍者、飛脚など。

（一）ノ一

時は、五月二十八日夜。

所は、愛宕山の西の坊。

晝間の連歌興行に用ひた文臺が、書類筆硯などを載せたまゝ置かれてある。その側にほの暗い燈火が置かれてあつて、寢床を並べて寢てゐる二人の姿をかすかに照らしてゐる。一人は明智光秀（五十五歳）で、一人は連歌師里村紹巴（五十歳くらゐ）である。

光秀、ふと何者かに脅かされたやうに起上つて、室内を見廻し、やがて窓を開けて外を見る。紹巴も頭を持上げて、迂散くさい目で光秀の方を見る。光秀、何か考へながら寢床へ戻つたが、横になるのを忘れてゐるやうに、蒲團の上に坐る。

紹巴、起上る。

紹巴　殿樣は御氣分がお惡いので御座いますか。

光秀　いや、氣分は惡くはない。（慌てゝ打消して）おれは面白い句を考へてゐたのだ。

紹巴　面白い句と仰有るのは？（光秀の顏を見守つて）今日の百韻の連歌のうちでも、殿樣のお作りなされた發句はことの外凜然としてゐるのに驚きましたが、それに飽足りないで、もつと奇拔な面白い句をお考へ遊ばしてゐるので御座いますか。

光秀　いや、年甲斐もなくあんな血氣に早つたやうな句を作つたことを、おれは後悔してゐる。古格に通じた其方など

の氣にも入らないに違ひない。

紹巴（感慨を籠めて）わたくしどもの守つてゐる連歌の道はもう末で御座います。誰れも彼れも、前人の模倣ばかりをして、千篇一律無味乾燥になりましたから、近年ます〱連歌の衰へるのも無理は御座いますまい。山崎宗鑑や荒木田守武の開いた俳諧の道に志す者を、一概に下賤な好みとして嘲る譯にはまゐりません。

光秀　其方がそんなことを云ふのは不思議だよ。應安の新式目とか、宗祇や兼良卿の新式追加とか、舊來の連歌道の講釋を後生大事に聽かせて呉れてゐた紹巴先生が、今日の卑俗な流行を是認するのは可笑しいぢやないか。

紹巴　さう仰有せられると一言も御座いません。……わたくしも今夜は眠つてゐながら、いろ〱と物を考へて居りました。

光秀　其方はさつきまでよく鼾を搔いてゐたよ。

紹巴　でも、あなた様がをり〱溜息をお吐き遊ばすのを、夢のうちに耳に入れて居りました。

光秀　おれが溜息を吐いたか知ら。それは其方の夢ぢやないか。……おれは今日、連歌を終へたあとで、直ぐに丹波へ歸城すればよかつたのに、皆んなの風流な話に引込まれて愚圖々々してゐるうちに歸りそこねてしまつた。こんな靜かな所で考へ事をしてゐると、却つて頭の疲れるものだな。其方などは氣樂で羨ましいよ。

紹巴　それはあなた様は中國筋御出陣の日が迫つて居りますから、何かとお心遣ひをしていらつしやるので御座いませう。

光秀　おれも長い年月、戰場では艱難辛苦をして來たのだ。今度の門出に格別に心を惱ます譯はないのだがこの頃の蒸暑い鬱陶しい空模樣がおれの頭を壓しつけるやうで爲樣がないよ。今も外の爽かな夜風に吹かれて頭を冷すつもりだつ

たが、今夜は外の風もじめ〳〵してゐていけない。……かういふ時には氣持のいゝ晴々とした句は思浮ばないものだな

紹巴　左樣で御座いませうか。でも、「時は今天が下知る五月哉」……御元氣過ぎるほどのいき〳〵とした名句では御座いませんか。

光秀　あんな句が何で名句なことがあるものか。徒らに文字を並べただけのものだ。西の坊の脇も平凡であつたが、其方の附けた第三の句だけは、何だか譯がありさうだ。意味深長に思はれるよ。おれは、さつきも、獨りでその句の意味を考へてゐた。………「花落つる流れの末を關とめて」

紹巴（慌てて打消すやうに）わたくしの句には何の意味も御座いません。

光秀　いや、さうであるまい。連歌興行の折から、其方の目がおれに何か云つてるやうに思はれてならなかつた。不斷は瓢輕な風流人の其方の顏がおれには眩しくつてならないのだ。

紹巴　どうか左樣なことを仰せられないやうに（恐怖に打たれたやうに）わたくしには、今日はあなた樣のお眼力が胸に響いて怖う御座います。

光秀　いや、其方の眼力が恐ろしいよ、耳を留めて聞いて見ろ。何處かで梟が鳴いてるだらう。

紹巴（耳を澄まして）なるほど鳴いて居ります。それに一時止んでゐた雨の音がまた微かに聞えだしました。

光秀　外は眞暗だ。おれが生れてから見たことのないほどに氣味の惡い眞暗な闇の夜だ。その闇の中に梟が鳴いてゐるが、其方の目が梟の目のやうにおれには見えるよ。

紹巴　どうか左樣なことは仰せられないで、お心を鎭めておやすみ遊ばしませ。夏の短か夜は明けるに間も御座いますまいから。

光秀　おれはさつきは、夜の明けるのを待焦れて、窓の外を覗いて見たのだが、今其方の顔を見てゐると、もつと夜が續けばいゝと思はれるのだ。

紹巴　あなた樣の仰有ることが、わたくしにはどうも合點がまゐりません。

光秀　おれも合點が行かない。（燈火の方を見て）そこの弱々しい燈火を、おれの溜息で吹消したら、部屋の中も眞暗だ。外の暗さにまけない闇の夜になるのだ。おれと其方との二人きり、闇の世の中に差向ひでゐることになるのだ。

紹巴　どうか燈火はお消しなさらないやうにお願ひ申します。

ふと、窓から洩れ來る風で燈火が消る。舞臺眞暗になる。

紹巴（震え聲で）殿樣どうなされました？

光秀　おれはどうもしない。燈火は自から消えたのだ。……其方とおれとは暗闇の中に向ひ合つてゐるのだが、梟のやうな其方の目では光秀の心の中が見えるのか。

紹巴　わたくしはあなた樣の御最負に預つてゐる平凡な連歌師で御座います。どうしてあなた樣のお心の中が分りませう。……わたくしは燈火を持つてまゐりませう。

光秀　まあ待て。……其方は嘗聞、連歌興行の最中に、おれが本能寺の溝の深さ淺さを訊ねたら、勿體ないお訊ねだとおれを咎めたではないか。この頃降りつゞく五月雨に、何處の溝も水量が増したであらうのに、それを訊ねたのが何故いけないのだ？

紹巴答へず。

光秀　オイ、紹巴、返事をしろ。……おれの心に疑ひを掛けてゐる者は、天下に其方一人だ……。おれが創作に心を取

られて、粽を包葉（かは）のまゝ嚙つたのを、其方はうろんな月付で見てゐた。……おれの溜息の數までも數へてゐたのだらう。

紹巴答へず。直ぐ側で梟が鳴く。

光秀　貴樣は聲までも梟の眞似をしておれを脅かすつもりか。

そこへ、ふと、小姓吉之丞が手燭を持つて入つて來る。光秀一人が端座してゐて、紹巴の姿は見えない。

光秀　紹巴は何處へ行つた？

小姓　わたくしどもの臥所（ふしど）へまゐつて居ります。

光秀　紹巴を此處へ呼べ。それから、夜明け前に出立するから、其方どもゝ今から仕度に取掛れ。

小姓　はい。……まだ眞夜中で御座いますが。

小姓は燈火を點ける。

光秀　暗ければ松明（たいまつ）の用意をさせろ。闇にも雨にもかまはないで急いで丹波へ歸るとおれは決心した。

小姓　お供の衆に左樣申傳へます。

小姓、次の間に入る。

光秀、文臺を引寄せて、連歌用の懷紙に向つて、發句を書きつける。

紹巴は恐る〳〵入つて來る。

光秀　これを讀め。

紹巴、懷紙を受取つて讀みながら、光秀の顏色をぬすみ見する。

光秀「時は今天が下知る五月哉」（凛然と言放つて）……おれは闇を冒し雨を冒して歸城する決心をしたよ。それで、其方をも一しよに連れて行かうと思つてゐる。

紹巴（當惑して）わたしに龜山までお伴しろと仰有るので御座いますか。

光秀　いやとは云ふまいな。

紹巴　御仰せ付けは有難う御座いますが、旅の用意はいたして居りませんので、一度歸宅いたしました上で。

光秀　それはいかんよ。用意も何も入るものか。……其方の目付顏つき言葉つきの一つ〲が、おれの心を動かしてゐるのだ。梟のやうな其方の口がおれの心を突つゝいてゐる。おれは其方を離す譯けには行かない。龜山へも連れて行く。戰場へも連れて行く。おれの發句の意味が實際にどう働くか、其方のその目でよく見るやうにしろ。

紹巴　臆病者のわたくしは、戰場は恐ろしう御座います。

光秀　今日のおれの心の動きをいろ〲に監視してゐた其方だ。これから先きも、おれの側に附添つてゐて、よく見てゐるといゝ。（脇差を手に執つて）おれはお前と寢床を並べて、連歌の話をしてゐる間に、いく度この刀に手を掛けようとしたか知れなかつたのだが、今は其方に對して毛頭害意を持つてゐないから安心してゐろ。

紹巴（おど〱しながら）お殿樣は何故今日に限つてわたくしをお憎み遊ばすので御座いませうか。

光秀　安心しろ。只今は決して其方を憎んではゐないよ。躊躇逡巡してゐたおれを其方は刺戟して、行くところまで行くやうに決心させて呉れたやうなものだ。今書いた發句と、昔間書いて神前に收めた連歌の發句と、同じ文字でも、おれの心の現はれが違ふのが、其方に分らないことはあるまい。……昔間はまだ文字に遊びがあつた。

紹巴　何の御決心で御座いますか。

光秀　空呆けるな。……其の方の首を出陣の血祭りに備へるかはりに、其方を召連れて、闇の夜を驅廻るのだ。おれの發句がおれの出陣の旗じるしだ。……さつき其方の云つたやうに、人眞似ばかりして古くさい文字の並べつこをしてゐる連歌師も、生命懸けの戰場を往來したなら、少しは活氣のある句が作れるやうになるだらう。

紹巴　いえ、わたくしどもは、師匠讓りの連歌の眞似事さへいたして居ればよろしいので御座います。大それた望みを持つては居りません。

光秀　自分で望まなくつても、其方はおれと一しよに行くところまで行かなければなるまい。其方をおれの目の屆くところから放す譯には行かないよ。覺悟をしろ

紹巴（やうやく決心したやうに）ハイ。……では、何處までゝもお伴いたしませう。

光秀　おれは馴染の深い其方を決して苦しめようとは思つてゐないよ。たゞおれの心に最初に疑ひを挾んだ其方を打やる譯に行かないのだ。だから其方も覺悟をして、行く先々で面白い句でもつくつて、おれを慰めて呉れ。

そこへ、小姓入つて來る。

小姓　御出立の用意が調ひました。

光秀　さうか。……紹巴先生も丹波へ御同行なさるのだ。（紹巴に向ひ）さあ、行かう。一しよに闇の中をつゝ走らう。

光秀、紹巴の腕を取つて引立てる。

（二）ノ二

闇の中を松明で道を照らして、四五騎が駛せてゐる。そのうちの一人は光秀で、一人は紹巴である。紹巴は半死人

の如く喘ぎ〳〵隨いて行く。

光秀　鬱陶しかつたおれの頭も次第に晴々しくなりかけたよ。東の空もいくらか白んで來たではないか。今日は久振りで五月晴のうらゝかな空が見られさうだな。

紹巴　御意に御座います（苦しげに云ふ）

光秀　光秀はもう、昨夕のやうに溜息ばかり吐いてはゐないぜ。（ふと、向うを見つけて馬を留める）みんな馬を留めろ。向うから怪しい奴がやつて來る。……紹巴。其方の目ではあれが何だと思はれる？

紹巴　さあ、何で御座いませうか。

光秀　吉か凶か。先見の明のある其方にも分らないのか。……燈火を持つて夜道を急いで此方へまゐる奴は、おれの前途の運に關はりがありさうだ。

紹巴　お殿樣の御運に關はりのあるかないかは分りませんが、今時こんな淋しい野道を通つてゐる人間は、たゞ者では御座いますまい。……さう云へば、わたくしも、何のために殿樣にお隨き申して、こんな夜道を通つてゐるか、われとわが身が分らなくなりました。（泣言のやうに云ふ）

光秀　歌讀みといふ者はよく〳〵意氣地がないものだ。（笑ふ）

そこへ、飛脚某が急足で入つて來て、ふと、光秀の一行を見て驚く。會釋して道を避けようとする。

光秀　オイ、待て。其方は何者だ？

飛脚　龜山のお城へまゐる者で御座います。

光秀　龜山の城へ？……おれはさつきからさうだらうと思つて見てゐた。……其方はいゝところでおれに會つたの

だ。龜山まで行くに及ばん。用事を云へ。聞いてやらう。

飛脚 (相手の顏を注視して) あなた樣は龜山のお殿樣でいらつしやいますか。

光秀 おれが光秀だ。おれの顏も知らないやうな雜兵を使者に寄越したのか。……そんなことは兎に角、早く用事を云へ。

飛脚 森お亂所樣からの御書狀を持參いたしました。

光秀 何。蘭丸からの手紙? (昂奮して云つて) 見せろ。

飛脚、脊負つた包の中から文箱を取出す。從者の一人、それを光秀に捧ぐ。光秀それを開けて、從者の差出した松明の光にて讀む。

光秀 承知した。

讀終るとさう云つて、ふと、手紙を松明の火にて燃す。

飛脚 (それに驚きながら) お亂所樣への御返事は承はらせて頂く譯にはまゐりますまいか。お殿樣へ確かにお屆申上げた證據を頂きたう存じます。

光秀 おれの返事が欲しいと云ふのか。欲しければ返事をしてやらう。

光秀、咄嗟に飛脚を斬殺す。紹巴、その他の從者驚く。

光秀 信長公の御上意に、中國出陣の用意が出來たなら、人數のたきつき、家中の馬などの樣子を見たいから、早速引連れて京へ上れと仰せられたと、蘭丸からおれに知らせて來たのだ。主君の御寵愛を笠に着て、權柄づくでおれに物を云ふ森の小悴の手紙を燒いて、使者を斬つた (泰然として云つて) 紹巴にはおれの心が分つてゐるだらうな。

紹巴　虚弱なわたくしは、疲勞して夢のやうでございます。

光秀　もう一走りだ。みんな急げ。

光秀馬を走らす。

（一）ノ三

龜山城外の廣場。六月朔日の夕暮。

明智光秀、小姓吉之丞を連れて出て來る。

光秀　紹巴は城内の何處にもゐないと云ふのだな。

小姓　午の刻までは、あの方は死人のやうな顏して寢てばかり居りましたが、暫く立つて部屋を覗くと、何處へか行つて姿が見つかりません。

光秀　出陣の準備に取りまぎれて、あの男のことは忘れてゐたのだ。……あの臆病者、逃げたつてどうもしないだらうが、念のため、も一度搜して見ろ。

小姓出て行く。光秀床几に腰を掛けて、五月晴れの夕空を仰ぐ。そこへ、明智左馬助、同次右衛門尉、齋藤内藏助、藤田傳五、溝尾勝兵衛が入つて來る。

左馬助　皆んなを召連れてまゐりました。

光秀（ふと元氣づいて）かうして五人の揃つたのを見ると、おれも非常に心丈夫だよ。

左馬助　殿には人拂ひをなされて、我々五人の者に、火急な御談合があると云ふのだ（他の仲間に向つて云ふと

光秀　おれ一人でくよ〳〵物を思つてゐるよりも、早く其方だちに相談すればよかつた。長い間おれと艱難を共にして吳れた其方だちに、おれの心中を打明けるのを躊躇したのは愚かなことであつた。

內藏助　殿には先日來、ひどく物を案じていらせられたやうに思はれました。愛宕山御參籠を終へて御歸城なされた時には、殿の御顏色はひどくお窶れなされたやうに拜察いたしました。

光秀　愛宕山中の一夜は、おれも氣が狂つたかと思はれるほどの苦勞をしたよ。一夜のうちに頭の髮も白くなつたかと思はれる。（苦笑を洩らして、ふと調子を變へて）さつきこの廣場で人數調べをした時に、內藏助は、大丈夫一萬三千人は揃つてゐると斷言したが、間違ひはあるまいな。

內藏助　それに相違は御座いません。皆んなよく食つて充分に休息してゐる元氣者ばかりで御座いますから、中國へ押出しても、戰場の稼ぎは、羽柴殿の軍勢に勝るとも劣る氣遣ひは御座いますまい。

光秀　それは賴もしいな。（喜色を浮べて向うを見る）

次右衞門尉（もどかしさうに）我々五人の者への內密の御談合は何事で御座いませうか。出陣の手配りはすでに出來上つてゐるので御座いますが。

光秀　……まあ、おれの申すことを心を落着けてよく聞いて吳れ。……おれも上樣のお取立てゞ、三千石の小身から、俄かに二十五萬石も拜領いたすやうになつたのだが、岐阜表で三月三日の節句には、大名高家列座の前で、面の皮を剝がれるやうな目に會はされたし、その後、信州上諏訪の御本陣では、欄干に頭を押付けられて毆り飛ばれて、衆人稠座の中で恥を掻かされた。今度は今度で、德川殿御饗應のことから、無殘なお叱りを受けて、俄かな西國出陣を仰せつけられた。こんな有樣では、この次には、どんな我身の大事に及ぶかも知れないと、おれは案ぜられるよ。

次右衛門尉　殿の御胸中は御推察申上げて居ります。
傳五　わたくしども、人知れず無念の涙を呑んだことも御座いました。
光秀　この年齢になつて、子供か何ぞのやうに、打擲されてゐるのを見た者は、さぞ腑甲斐ない奴だとおれを嘲るだらうな。
勝兵衛　上様はかやうな御氣象だとお思ひになつて、御忍耐遊ばしたらよろしからうと存ぜられます。上様は特別に殿に對しておにくしみを持つていらせられるのでは御座いますまい。
光秀　勝兵衛はおれを忍耐力の薄弱な男とでも思つてゐるのか。
勝兵衛　決して左様のことは。……
光秀　いや、今はくど〳〵と愚痴をこぼすために、其方どもを寄集めたのではないよ。おれは非常な決心をしてゐる。
五人は目を凝らして光秀を見上げる。光秀は床几を下りて、敷皮の上に居直り、五人の者に近く接す。五人は光秀の言葉を待設けてゐる。
光秀　……老後の思出に、一夜なりとも天下をおれの者にしたいと決心をしてゐる（獨言のやうに云ふ）
五人の者驚いて言葉を發せず。
光秀　有爲轉變、榮枯盛衰の世の習ひだ。一日たりとも望みを遂げればそれでいゝと覺悟を極めた。……其方だちが同意して呉れなければ、おれ一人で本能寺へ斬込んで、腹を掻切るまでのことだ。……其方たちは何と思ふ。
少時沈默の後。
左馬助　殿御一人の御胸中で左様思召された上は、天知る地知る我知ると申すたとへの通り、そのまゝでは濟みますま

い。まして、五人の者にお打明けなされたのだから、御實行遊ばす外はあるまいと思はれます。
内藏助　これほどの大事をよくも御決心遊ばしました。
次右衛門尉　お目出たう存じます。私ども、多年の胸のつかへが下つたやうに存ぜられます。
傳五　わたくしも双手を擧げて御同意申上げます。
光秀（勝兵衛を見て）其方は何と思ふ。おれにもつと忍耐しろと申すか。
勝兵衛　どういたしまして。……明日から、わが殿を上樣として仰ぎ奉られるやうに相成りました。こんな喜ばしいことは御座いません。……この上の御談合は御無用かと存ぜられます。
光秀　五人が五人とも同意して呉れて、おれも滿足だ。こんな時には、一人や二人は、唐人の古い言葉など持出して諫言立てをしたがるものだが、皆んなが符節を合はせたやうに意見が一致したのは愉快だ。
左馬助　この頃は夜が短かう御座いますから、これから直ぐに發足いたしませう。ほの〲と夜の明ける頃に本能寺をひた〲と取卷いて、成べくなら、五つより前に本能寺を片付けて、それから妙覺寺の若大將を討果すやうに手順をつけることにいたしたう御座います。
光秀　おれもさう思つてゐた。……人數の少い本能寺を片付けるに手間暇は入らないが、何よりも味方の士卒に二心を起させぬやうに注意するのが肝心だよ。
左馬助　その御心配は御無用で御座います。右へ向はふと左へ向はふと、士卒どもの出陣の氣持にかはりは御座いません。毛利の軍勢へ斬込むのも、本能寺へ矢を向けるのも、彼等の氣持に差別は御座いません。……京近くなつてから、殿が天下樣にお成り遊ばすと觸れ廻らせませう。下々の者草履取り以下にいたるまで、手柄次第で知行を與へると

觸れましたら、皆んな揃つて喜び勇むに相違御座いません。

内藏助　かう極つたら一刻も時を遲らせてはならない。速刻出陣のお觸れを廻さなければならん。

皆々立上る。

光秀　氣おくれをするな。

あとから立上る。

（二）ノ一

六月十日の日暮れ頃。

下鳥羽の陣屋。

光秀、入浴後の輕裝にて、例の陰欝な顔して獨酌でチビ〳〵やつてゐる。

そこへ、侍者が入つて來る。

侍者　紹巴どのがお目通りを願つて居りますが、いかゞいたしませうか。

光秀　紹巴が來ようとは思ひも掛けぬことだ。

侍者　上樣は御多用でお疲れ遊ばしてゐるからと、一應は斷はりましたが、たつてお目通りいたしたいと申しますので。

光秀　會つてやるから直ぐに此方へ通せ。

侍者　ハイ

出て行くと、光秀また、物を考へながら盃を甜める。をり〳〵團扇をも使ふ。

紹巴、恐る〳〵入つて來て、恭しく平伏する。

光秀　其方にまた會へるとは思はなかつたが、あの後何處で何をしてゐた？

紹巴　戰場を見せてやらうとの仰せに背きまして、お許をも乞はないで、龜山のお城を退去しまして、申譯のいたしやうも御座いません。

光秀　それはもうすんだことだよ。……しかし、今度の事には其方も關係があるのだから、時々は其方のことを思出してゐたよ。

紹巴　恐れ入ります。（やゝ安心して）上樣がわたくしを惜んでいらつしやるやうに思はれましたので、お城を拔出して、丹波の山中に二三日潜んで居りました。路用の金は持つてゐませんので、喰ふや喰はずのひどい思ひをいたしました。

光秀　馬鹿な奴だ。其方には骨折賃を與へようと思つてゐたのに。

紹巴　上樣の御大業に何一つお役に立たなかつたわたくしにまで、御勝利のお裾分けをして下さるので御座いますか。天下樣におなり遊ばしたお噂を、山中で承りまして、それでは、お祝ひに上らなければならないと思ひまして、急いで京へ戻つてまゐりますと、洛中の地子御免恕の有難い御高札を拜見いたしまして、御仁政に感涙を催しました。

光秀　梟のやうな目をした其方も、おれの側に隨いてゐなかつたから、眞相はなんにも分らないのだな。……まあ一杯やれ。……愛宕山の西ノ坊の一夜のことが、おれには遠い昔の夢のやうに思はれるよ。

光秀の差す盃を紹巴は受ける。

紹巴　上様お手づからのお酌は勿體なう御座います。それに、あまり御酒をお嗜みにならない上様が、今夜はお一人で召上るのは不思議に思はれますが。

光秀　成程さう思ふだらう。おれもこの頃は連歌をつくる氣持にはなれず、外に鬱憤晴らしの手段がないから、酒でも飲むことにしたのだよ。

紹巴　さすがは風雅の道を辨へていらせられるので、尊い御身分で、お手酌を樂んでいらせられるのは恐入ります。

光秀　ところが、かうしてゐても、なか／＼風流な氣持にはなれないのさ。酒といふものは人の心を浮立たせるものと極つてゐるので、その名前に惚れて無理に飲んではゐるものゝ、ちつともうまくはないよ。心が浮立ちもしない。……酒と云へば、おれは七杯入りの大杯を内府殿に押付けられたことがあつたのだ。御辭退すると、酒を呑まんのなら、これを呑めと、鼻先へ白刃を指しつけられたので、おれは夢心地で大杯を呑干したが、内府殿は、さては生命は惜しいものなんだなと冷笑なされたよ。

紹巴　内府様は殘忍な方で御座いました。

光秀　最早おれに、飲めない大杯を押付けるものは、天下に一人もなくなつた譯なんだが、それがおれに取つていゝことだか惡いことだか、おれにはサツパリ分らなくなつた。

紹巴　それはお身分が尊くお成り遊ばすほど、お心遣ひも多う御座いませう。わたくしどもは、上様御仁政の下に安穩に日が過されますれば、それで滿足いたすので御座います。

光秀　其方はおれの力で天下がおさまると思つて訪ねて來たのか。愛宕の山を闇の中で突拔けて來たおれの名が天下に

輝きだしたのを慕つてやつて來たのか。

紹巴　もはやわたくしに對するお疑ひは解けたことゝ存じまして。

光秀　其方があの時おれのことを本能寺へ注進するか知れないと氣遣つてゐたのだが、それはもう濟んだことだ。……これからおれの側にゐて呉れ。決して無慈悲な取扱ひはしないよ。……たとへ、まだ連歌の遊びをする氣にはなれなくつても、其方のやうな男が側にゐて呉れると、おれは好きでもない酒をチビ〳〵飲むよりは、氣晴らしになつていいのだ。

紹巴　上樣のお側に置いて頂ければ、これほど仕合せなことは御座いませんが、戰場のお役に立たないわたくしが、お側でまご〳〵してゐましては、却つてお目障りになりさうに思はれます。

光秀　いや、其方も知つてる通り、おれは、內府殿や以前の朋輩とは好みが違つて、女子供を側に置いて酒宴を催すことには、あんまり興味をもつてゐないのだよ。其方のやうな男と、とぼけた話でもしてゐる方が、おれの柄に合つてゐるのだらうな。……ところで、紹巴、おれはひどく人氣の惡い男だよ。大望を遂げた今日、しみ〴〵それに氣がついたよ。松永彈正でもおれほどには世間から毛嫌ひされてはゐなかつたらうな。

紹巴　わたくしには左樣に存ぜられませんが。……

光秀　其方は愛宕の山でおれの心を見破つた最初の男だが、今日以後のおれの運勢をどう思つてゐる？（相手を注視する。）

紹巴　わたくしはたゞの連歌師で御座います。上樣の御運勢のよろしいやうにと願つて居りますばかりで、世上の事は何事も分りません。

光秀　今まで神隱しに隱されてゐたやうな其方が、今日だし抜けにやつて來たのは、何か深い譯がありさうにおれには思はれるのだが。……兎に角、今夜から、おれの陣所へ留めて置くから、その覺悟をしてゐて吳れ。荒武者ばかりに取りまかれてゐるので、おれの息が詰りさうなのだ。

紹巴當惑してゐる。そこへ、內藏助が入つて來る。

內藏助　紹巴殿か。悠長らしく酒のお相手などして。……早くお立ちなさい。

光秀　さう六ケ敷云ふな。この男は陣屋に留めて置いて吳れ。この男はおれの運を左右する魔力を持つてゐさうに思はれてならないのだから。……今日だし抜けに訪ねて來たのが、おれの仕事に關係がありさうに思はれてならないのだよ。この男を歸さないで留めて置いて吳れ。……紹巴、其方は暫く次の間に控へてゐろ。

紹巴、おど〱して入つて行く。

內藏助　あんな坊主をなぜお相手になさいます。(不機嫌に云つて)……只今、郡山から使の者が歸りましたが、筒井順慶はお味方に加はる望みは全くなくなりました。郡山の城內に兵糧を貯へて、我々に敵たふ準備をしてゐるさうで御座います。此方から持出した有利な條件さへ受入れる見込みはなさゝうで御座います。

光秀　あの打算的の男がさう思つたのは、いよ〱わが軍勢に勝目がないと見込んだのだな。

內藏助　どうせ他人は賴みになりません。われ〱だけでやれる所までやるより外爲樣が御座いますまい。

光秀　婿の忠興にさへ悄まれたおれだが、かうまで四方八方から愛想を盡かされようとは思はなかつた。……しかし、內藏助、其方だちはまだおれに背かうとはしないか。

內藏助　何を仰せられます。衣服に火のついたやうな只今の場合に、無用な口を利いてはゐられません。

光秀　これもさうだ。速刻皆んなを集めて置け。今後の方針を極めよう。……どうせ、龜山出立の際のやうに、衆議一決といふ譯には行くまいな。

内藏助　しかし、仲間内は主君と生死を一つにする覺悟がついて居りますから、それだけは御安心遊ばしませ。

光秀　ウ、ン（氣乘りのしない返事をする）

内藏助出て行く。光秀はなほ盃を甜めてゐる。顏には憂鬱の色が加はる。ふと側の團扇を取つて煽ぐ。やがて、隣室から唸り聲が聞える。光秀不思議さうに耳を傾けて座を立ちかける。

光秀　誰れだ？。唸つてゐるのは。

紹巴　わたくしで御座います。紹巴で御座います。

光秀　どうしたのだ。腹痛でも起したのか。

紹巴　只今内藏助樣に手足を縛られました。

光秀　（微笑して）内藏助に縛られたのか。なぜそんな目に會はされた？

紹巴　生死（いきしに）の騷ぎの場合に邪魔つけだ、不吉な奴だとお怒りになつて、あの榮螺（さざえ）のやうな拳（こぶし）でわたくしの頰骨をお毆りになりました。それでわたくしを柱に縛りつけて、此處を動くなと仰有つて行かれました。

光秀　内藏助は素早い奴だ。……龜山ではおれが其方の身體を自由にさせて置いたから逃げられたが、さうして置けば大丈夫なんだな。

紹巴　どうかお揶揄（からか）ひ遊ばさないで、お小姓衆でもお呼びになつて、わたくしの縛めをお解きなすつて下さいまし。

光秀　連歌興行の折、おれの旗上げの心を最初に讀んだ其方だ。おれが、ドン詰りまで行つて腹でも切る時には、辭世

の發句を讀むから、其方が脇をつけて呉れ。……連歌師は花見月見の句は讀めても、死生の境にはそれどころでないと云ふのか。……しかし、無意味に苦しめては可愛さうだ。おれが縛めを解いてやらう。

光秀、座を立たうとしてゐるところへ、侍者某アタフタと入つて來て、跪くや否や、

侍者　羽柴筑前殿の數萬の人數が、攝州境に近づいたとの御注進が御座いました。」

光秀　なに、秀吉が、……秀吉がもう此方へ向つたのか。

光秀慌たゞしく立上る。

他の侍者某入つて來る。平伏して、

侍者　上樣には速刻御評定の席にいらせられるやうにと、内藏助樣がお願ひ申して居ります。

光秀　只今出掛けるところだ。

光秀出て行く。

「どうぞ、わたくしの縛めをお解きなすつて下さいまし」と、紹巴の聲。

「それどころではないのだ」と、光秀の聲。

（二）ノ二

陣屋の一室。あたりは薄暗い。

紹巴紐で縛られてゐる。

齋藤内藏助、溝尾勝兵衛と一しよに評定の室から出て來る。

内藏助　（昂奮して）此方が堅まつてゐないところへ、から早く秀吉に乘込んで來られちや、味方に勝ち目はないよ。一先づ坂本へ退却して籠城して工夫を凝らすのが差當つての良策だが、おれの說を用ひないと、大將もあとになつて思當るだらう。

勝兵衛　しかし、秀吉に恐れて退却したやうで、味方の意氣が沮喪するかも知れないよ。どうせ此方には世間の人望がないのだから、破れかぶれでやつゝけるより外爲方があるまい。上樣も腹の中はさうなんだらう。お前も我慢して、多數の意見に從つて、やれるまでやつて見て吳れ。

内藏助　どうせ、おれ一人で退却する譯には行かないからな。

二人はさう話しながら、ふと、紹巴の方を見る。

紹巴　内藏助樣。お慈悲で御座います。この縛めをお解きなすつて下さいまし。

内藏助　坊主まだそこにゐたのか。

勝兵衛　紹巴どのぢやないか。何をして縛られたのだ。

内藏助　こいつ、大將のところへ胡麻を摺りに來やがつた。それで忌々しいからおれが縛つたのだ。

勝兵衛　可愛さうに。

内藏助　連歌師だの繪師だの禪坊主だの。今日の時世に煩い奴だ。大將もこんな奴に取合つてゐるから、勇氣が減つて氣が迷つていけないのだ。

勝兵衛　しかし可愛さうだな。風流といふ名前は立派だが、贔負の旦那がなければ生きてゐられないのだから。

内藏助　此處の大將が天下を取つたから御機嫌伺ひに來たのだらうが、今に、秀吉の軍が勝ちでもしたら、今度は猿奴

のお将の座を拂ひに出掛けることだらう。

さう云ひながら行過ぎる。勝兵衞も一しよに出て行く。紹巴恕めしさうに見送つて、自分で縛めを解からうとして藻掻く。

そこへ光秀が考へ事をしながら入つて來て、紹巴に氣づかないで行過ぎようとする。

紹巴　上樣、お慈悲で御座います。

光秀、ふとその方に氣がつく。

光秀　其方はまだそこにゐたのか。

紹巴　どなたにお願ひしても紐をほどいては呉れません。

光秀　其方がもう少し辛抱してゐれば、戰場へ連れて行つてやらう。

紹巴　さつき、上樣は縛めをほどいてやらうと仰有つてお忘れになつたのです。……さつきお手づから酌をして下すつたやうに、恐れながら、お手づから縛めをほどいて下さいまし。

光秀　さつきと今との間に、光秀の胸には槍の穗先きが突きつけられたのだ。其方の縛られた身體はおれの身體見たいだ。

紹巴　わたくしの目の前にも白刄が突きつけられてゐるやうに見えます。どうぞお許しなされて下さいまし。

光秀　なに、おれは其方を斬りも突きもしないよ。お前が秀吉の間者になつておれの軍の準備を索りに來たのぢやあるまいし。

紹巴　わたくしは上樣の御勝利をお祝ひに上つたので御座います。

光秀　上様だの、御勝利だのといふ其方の言葉は、冷かしのやうにおれには聞えるよ。……其處に坐つてゐて、おれのために辭世の句の用意でもしてゐろ。

光秀行過ぎる。紹巴怨めしさうに見送つてゐる。

鎧武者幾人も通過ぎる。怪訝、輕蔑、さま〴〵な表情をして紹巴を見ながら行く。

紹巴　わたくしも戰場へお伴いたします。縛めを解いて下さい。

皆んな默つて行く。あたりは暗くなる。暫くして、覆面した野武士三人忍んで來る。

甲　大丈夫、この陣屋は空つぽだ。(次の室へ入つて行く)

乙　オイ、誰れか縛られてゐるぜ(紹巴の方を見る)

紹巴　助けて呉れ。

乙　お前は罪人か。

紹巴　お前だちは野伏か。それなら、この紐をほどいて呉れ。おれが案內して一儲けさせてやらう。

丙　そんなことを云つて、この男を信用出來るだらうか。

乙　刄物を持つてゐないから大丈夫だらう。古ぼけた弱さうな奴だ。

紹巴　おれは歌讀みだ。安心して縛めを解いて呉れ。

甲　待て〳〵。今の時世に人間の云ふことが信用出來るか。此處の大將は大恩のある信長公を暗打ちに會はせたのだ。

さういふ世の中に迂闊に他人の云ふことが信用出來るか。

紹巴　なに、羽柴筑前どのが其處まで攻寄せてゐるのだから、此處の大將の壽命はもう知れたものだよ。

甲　どちらが勝たうと、おれ達の知つたことぢやないよ。負け軍の落武者どもの物の具を剝取るのが目つけどころだ。
丙　全體お前は何をして縛られたのだ？
紹巴（氣取つた口調で）此處の大將を打取るつもりで、頭を剃つて連歌師になつて入込んだのだ。
乙　それがばれて縛られたのか。誰れに賴まれてそんな危いことをやる氣になつたのだ？
紹巴　信長公のお身内の方のお吩咐だよ。
甲　お前は見掛けによらない太い奴だな。信長公の仇討を一人でやらうとしたのか。
紹巴　おれを助けて呉れ。あとで御主君に御褒美を貰つてやらう。
乙　そんな方なら、兎に角お助け申さう。
　乙は手早く紹巴の縛めを解く。
甲　さあ、おれだちを案內しろ。
紹巴　おれに隨いて來い。
　紹巴あはたゞしく駈出す。

（二）ノ三

十三日の夜、深更。
小栗柄の田舍道。
野武士三人。紹巴、疲勞した様子で一しよに步いて來る。

甲　おれだちの目を忍んで逃げようたつて駄目だ。信長公のお身内の家來だと云つたのが、嘘でもまことでも、光秀公の御陣所へ突出すことにしよう。大罪人を引捕へたのだから、いくらかの御褒美が貰へるだらうよ。

乙　いくらの御褒美になるもんぢやあるまいが、二三日騙されてゐた腹癒せに突出してやらう。此處でぶち殺したところで一文にもなるもんぢやなしさ。

丙　何か由緒のありさうな男だが、おれだちの仲間に入らせる譯には行かないし。

紹巴　お仲間にでも何にでも入りますから、どうぞ生命はお助けなすつて下さいまし。

甲　天下樣を暗打に會はさうとした奴が弱い音を吐きあがる。

紹巴　本當はわたくしは、詰らない連歌師で御座います。

甲　さう云つて、おれだちを誤魔化さうとするのか。お陣所へ連れて行つて調べて貰つたら分ることだ。……おれだちもこの頃はいゝ目に會はなかつた。

乙　何處かへ御奉公しようとしたつて、今日の時世ぢや、何處の大名が勝つか負けるか分らんのだから。

丙　いや、強い方を撰つて行つたつて、戰場へ出されて殺されちや三文にもならないからな。どうせ生命がけなら、追ひつかはれないで、隙間を見て野稼ぎをした方が氣が利いてゐる。

乙　それにしても、この頃のやうに不漁が續いちや爲樣がない。

甲　まあ、こんな坊主でも飯の種にして見るか。

丙　しかし、此奴は本當に、磔刑になるほどの大罪人だらうか。空巣ねらひのコソ／＼泥棒だつたら、陣所へ連れて行つたつて、三文にもなりやしない。

乙　この面魂はどうしてもたゞの者ぢやないよ。……さあ、行かう。

紹巴を引立てて行かうとしてゐるところへ、馬の音聞ゆ。

甲　オイ。こんな夜更けに馬の音のするのは變ぢやないか。

乙　落武者だな。………占めた。隱れろ。（紹巴を引連れて、皆んなが藪陰に隱れる。）

光秀、二三の從者と、疲れた馬に乘つて、トボ〳〵とやつて來る。藪の中から槍の穗先が現はれて、グサと光秀の脇腹を突く。紹巴月光にて藪の隙間から苦悶してゐる光秀の顏を見て驚く。光秀もそちらを見て驚きながら、トボ〳〵と行過ぎる。

その行過ぎたあとで、野武士と紹巴現はれる。

甲　たしかに一人だけはやつつけた筈だが（と、あたりを見まはす）

乙　血が垂れてゐるぢやないか。おれが見て來よう（入つて行く）

紹巴　今のはたしかに日向守どのだ。

丙　お前が暗討に會はさうとした光秀公か。いゝ加減なことを云ふな。

紹巴　たしかにさうだ。おれは、あの方の謀反のはじめからしまひまで見せつけられた。おれだけが見たやうなものだ。おれも恐ろしい世を見せつけられたものだ。あの方もおれの方を見てゐられた（震えてゐる）

甲　あれが大將なら、占めた。……さあ行つて見よう。

丙　用心しろ。あれが天下樣なら、お供の者も相當の腕利きだらうぜ。

甲　なに、落武士に大將も草履取りも差別があるものか。へと〳〵になつて、半死人も同樣だ。おれが行つて見る。お

前。この男の番をしてゐろ。

丙　あれが天下様なら、天下様を暗討にしかけたこの男なぞ何處へ連れて行つたつて、もう賞物にならないぢやないか。召取つても御褒美の種になりやしない。

甲　成程さうだ。………この坊主、三文の値打もなくなつた。どこへでも行きあがれ。

紹巴　悲しいやうな悦しいやうな顏して、トボ〳〵と出て行く。（幕）

生きて居る

谷崎精二

一

『いかん。あゝ云ふ事を子供に話すのは實にいかん。』

水原は夜の街を歩きながらさう呟いた。呟いたと云ふよりももう少し大聲だつた。通りかゝつた人に聞きつけられて、嗤はれても構はない氣だつた。いや寧ろお喋りの醉漢にでも捉まつて、『君、何がそんなにいかんのです？』と問ひかけて貰ひたかつた。（昔俺は決して不平を云はない男だつて云はれて居たんだが。）彼はさう思つて、心がぽきつと折れた様な此の頃の自分の氣持を憐れんだ。

其の晩彼が晩食を濟ませて二階の居間へ上ると、後から二人の子供が梯子段を登つて來た。九つと五つになる女の兒だつた。

『お父さん、直き死ぬの？死にやしないわね。』

姉が彼の側へ寄り添つてさう云つた。

『死ぬのよ。屹度死んでしまふのよ。』

妹は涙を一杯浮べた眼で父の顔を覗き込みながら呟いた。

其の日の晝間、彼が勤めに出て居た留守に、彼の妻が二人の兒に『お父さんは惡い人だから神樣の罰が當つて早く死んでしまふ。お父さんが死んだら、もうお母さんはお前たちを家へ置かない。何處かへ放り出してしまふ。』と云つたので、二人の兒は其れを心配して彼の處へ聞きに來たのだつた。

『大丈夫だよ。お父さんは死ぬもんか。百迄も、二百迄も生きる。』

水原は膝を割つて、兩方の股の上へ一人づゝ子供を腰掛けさせ、優しく頭を撫でゝやつた。其れから子供を快活にしようと思つて、脇の下を指先で擽ぐつてやつたり、『德、福、幸ひ、貧乏、金持、』と着物の數を數へたりした。それは彼が子供の時分はやつた遊びで、つまり着物が三枚ならば幸ひ、四枚ならば貧乏と數へるのだつた。子供たちは襦袢と綿入と、羽織と、都合三枚着て居たが、彼は『とーく、ふーく、幸ひ。』と數へて、其の上に襟元の皮膚を引張り、『此處にもう一枚あるから貧乏だ。』と叫んだ。子供の時分、彼自身が父か、母かにさう云つてからかはれた事を思ひ出したのだつた。

子供は直ぐに機嫌が直つた。

『お父さん、本當にそんなに生きるの？百？二百？。天から下迄？』

妹娘が笑ひながら云つた。『天から下迄』と云ふのは、子供の言葉で無限を意味するのだつた。

一時間ばかり子供は二階で元氣に遊んだ。水原は二人の子供を轉がして蒲團を被せたり、抱き上げて天井へ頭を押しつけ、其れから高い本箱の上へ載せてしまつたり、滅茶苦茶にふざけ廻つた。彼の眼からは屢々涙が流れたけれども、子供たちは父が笑つて居るのだと思つて、彼の悲しみに氣がつかなかつた。

やがて子供が下へ降りて寢床へはいつてしまふと、彼は戸外へ飛出した。妻は茶の間で雜誌を讀み續けて、外套を着込んだ彼の姿に見向きもしなかつた。そして水原は夜の街をぶら〳〵獨語を云ひながら歩き出したのだつた。——H區の榮子が住んで居た家の方へと彼の足はひとりでに向つた。彼が榮子の爲めに借りた家と云はうか、其れとも榮子が彼の爲めに持つた家と云はうか、とにかく榮子が住んで、彼がつい二月程前迄毎日通つたその家は、彼の住居から歩いて二十五六分の處にあつた。電車に乘つても時間はいくらも違はない樣な便利の悪い場處にあつたので、彼は大概歩いて行く事が多かつた。

『いかん。子供にあゝ云ふ事を云ふのは實にいかん。』

彼は又さう呟いた。だがあながち妻を非難する氣ばかりではなかつた。道德的に責めらるべきは寧ろ彼の方である事はよくわかつて居た。然し彼の妻が結婚して子供を生みさへすれば其れで女の役目が濟むとでも思つて居るらしいのが、彼には甚だしく不滿だつた。夫婦生活を襲つて來る危機をどう切り拔けやうかと云ふ問題に對して彼の女の心がまるで働かないのが何よりも情無かつた。

盜賊にも三分の理ありと云ふのと同じで、彼としてはみす〳〵自分の家庭へ大きなひゞを入らせた事に就ては自分だけの辯疏を相當に持つて居た。だから理窟で責めて來れば此方でも理窟で應戰が出來た。理窟以上の物を持つて來て責められゝば彼は防ぎかねるのだつた。そして女性は其の理窟以上の物を多分に持つて居る筈なのに、不幸にして彼の妻は其れを備へて居なかつた。彼の女は唯理論で夫を攻撃した。子供たちにも理論で父を非難する事を教へた。其の結果、彼は一層妻を反撥する樣になり、子供たちも母に對する愛情を、母から注ぎ込まれる譯のわからない理論で次第に蝕ばまれて行くだけだつた。父を家庭へ引留める筈の子供が、其の意味でちつとも有効に使はれなくつて、却つて夫婦

の間に取り交される彈丸になつた。惡い父を母と一緒になつて憎まないが故に、彼の女は反對に子供たちを憎み出した。

『お父さんを馬鹿と云つておやり。』

彼の女は始終子供たちにさう敎へた。馬鹿であつても生みの親であるが故に父を愛さうとする子供たちの氣持が、彼の女の理論からは許せないものらしかつた。

『子供に俺の惡口を敎へ込んで何になるのだ？』

彼が妻を詰ぢると、彼の女はやはりいつもの樣に理屈を持ち出すのだつた。

『でも私、惡い行ひと善い行ひとは、子供の時分からよく敎へて置いてやらなければならないと思ひます。』

『子供に惡口を云はせるのは善い行ひかね？』

『えゝ。あなたが惡い行ひをして居る以上、子供に其れを惡い事だと思はせるのは差支へ無い筈です。』

『だが子供の世界と、大人の世界とは違ふ物だよ。子供は大人の世界の事を强いて敎つても何の約に立たない場合がある。五つや六つの子に一番必要な物は親の愛情だ。』

『愛情でばかり育てゝ、善い事と惡い事との差別がつかない人間が出來たら大變です。』

『善い事と惡い事との差別がつくだけでは此の世の中で何もならないんだ。其れだけの事しか出來ない人間が出來たら尙大變だ。』

そして二人のどつちも不機嫌になつて默り込んでしまふのだつた。

所詮二人の氣質が違つて居る以上、夫妻の不和は仕樣が無い物だつた。妻から見れば彼の女の理屈で動かし得る範圍

内に行動して居ない夫は全く手に餘る存在かも知れなかつた。そして水原の氣持は、否生活全體は、妻を離れて榮子の方へと次第に牽きつけられて行つた。彼の女と離れた今になつても、依然として榮子が彼の感情と生活との中心だつた。彼の家庭では妻が元のまゝに其の理窟を振り廻して居た。古い廢屋の中に蔓る蜘蛛の巣の樣に、其の理窟は彼の家の中の到る處に張り廻されてあつた。後から後からと網は繰り出された。そして可憐な子供たちは蛾の樣に其の網に引掛つてもがいて居た。

曾て現實の榮子の爲めに費された毎日の幾時間かが、今思ひ出の彼の女の爲めに過される事になつた。水原は毎晩の樣に家を出てぶら〳〵街を歩き廻つた。一分でも早く榮子の許へ行き着かうとあせつた往來を、彼は今ゆつくり〳〵歩き續けるのだつた。

『あの家には今どんな人が住つて居るだらう？』

榮子の元の家の近くへ來ると水原の足は悚んだ。其れは古い屋敷か、墓地の跡を地均しをして二十軒ばかりずらりと貸家が建てられた一廓で、新道の一番奥の家に彼の女は住んで居た。子供好きの榮子は近處の子供を可愛がつて、殊に隣の家の女の兒が始終遊びに來て居たので、水原は其の兒に顏を知られて居た。其れは西洋人風に髮の毛がちゞれて、白い頰がふつくら脹れた愛らしい兒で、どう云ふ素性だかよくわからなかつたが、母の連兒で、繼父は母より年が若かつた。家では餘り構はないらしく、始終戸外で泥いぢりをして遊んで居るので、綺麗好きの榮子は座敷へ上げる前に手足を拭いてやつた。だが其れで居て、なか〳〵行儀の正しい兒で、お菓子を與へても決して其の場では食べなかつた。

『若しひよつとしてあの兒に見つかつて、をぢさんと聲を掛けられでもしたら？』

さう思ふと、水原は榮子の寓居の前迄思ひ切つて足を運ぶ勇氣が無かつた。新道の角の大きな榎の樹の下にある井戸

——一度榮子が家を拔け出して、其の井戸へ飛込まうとしたのを、彼が追ひ縋つて辛うじて抱き留めた事があつた——の側で、彼は足を留めて煙草を一本吸つてから引返して來るのだつた。前の晩に吸つた煙草の吸殼がまだ傍の根本に落ちて居るのが見出されたりすると、昨夜吸つた煙草と、今吸つて居る煙草との間に挾まつた一晝夜の時が、何の爲めに過されたかわからない氣がして、ひどく心が佗しくなつた。

其の椶の木の横手は墓地で、古びた低い石垣が續いて居た。井戸の水が打ち撒けられるので其の邊は始終じめ／＼と濕つて、石垣にはぬる／＼した青黑い苔が生えて居た。あの苔でさへ、一晝夜の中には、一分の何千分の一かの長さだけ成長するか知れない。だのに自分はまるで生活の機關が停つた樣に、何の爲す事も無く、今日も、昨日も、一昨日も、過してしまつたのだ——そんな事を思つてみる時もあつた。

二

『今夜は一つ久しぶりで恩田を訪ねてみよう。』

煙草をゆつくり吸ひ終つて井戸端を離れた時、水原はさう思つた。其處迄往復一時間程の散歩をしたゞけで、彼の佗びしい心がしつとりと潤ほつて來る日があつた。だが又何か心に蟠りのある日は其れだけでは淋しさが慰められず、誰かと會つてしみ／＼語りたい氣が募つて來た。

榮子の爲めにすつかり生活が掻き亂されてしまつた爲め、永い間彼は舊い、親しい友達にも會はなかつた。恩田も其の一人で、一二度彼の家を訪ねてくれた事があつたがいつも不在だつたので、半歳以上も會ふ機會が無かつた。

畫家の恩田は細君が暫く郷里へ歸つた後で、モデル女と關係して下宿の一室に同棲して居た。下宿は榮子の元の家と

同じ區内にあつて、十町と隔たつて居なかつた。

『おゝ、水原か。よく來た。よく來た。』

久しぶりなのでいろ〳〵の事を聞かれるだらう――さう思ふと極りが悪さに薄笑ひを浮べて彼の部屋へはいつて行つた水原の姿を見て、恩田は懐しさうに聲を揚げた。大酒家の彼は毎日夕方からちび〳〵と一升近い酒を飲むのがきまりで其の夜ももう五六合飲んだところらしかつた。きた子と云ふ其の同棲者が安物の瀬戸火鉢を挾んで彼にお酌をして居た。

『暫くだつたな。まあ、一杯。』

恩田は直ぐ水原に盃をさした。

『うん。』

水原は頷いて盃を受けた。

『其の後どうした？』

水原は恩田の顔を見揚げた。酒で赤くたゞれた彼の眼がぴかりと光つた。

『かれこれ一年も會はなかつたかな。』

『いや、半歳位だ。』

水原は首を振つた。

『さうか。いろ〳〵噂を聞いて居るぞ。身體が悪いつて聞いたがどうだ？……年を取ると涙脆くなつてのう。久しぶりで舊い友達の顔を見ると、俺は悲しくなる。』

恩田はさう云つて鐵縁の眼鏡を押し上げ、二本の指で二つの眼頭を抑へた。

『涙脆いのは君より俺だよ。』

水原はさう答へて同じ様に眼を潤ませた。ひどく單純な悲しさが胸に迫つて來た。酒癖が惡くつて、醉へば怒鳴り散らす恩田が、一言二言の言葉の後で彼の爲めに泣いてくれた厚意が彼には辛かつた。

『皆が心配して居るぞ。まあ無事で何よりだ。どうだ、人生の辛さがわかつたか。』

『うん。』

水原は苦笑して彼に盃を返した。

『はゝゝゝ。其れでいゝ。其れでいゝ。』

恩田が豪放な笑聲を發したので、水原もほつと氣が樂になつた。

酒がなくなつた。恩田は財布から金を出してきた子に酒を買ひにやらせた。

『子供はどうだ、可愛いか？』

恩田が突然さう聞いた。

『うん。とても可愛い。』

水原は頷いた。

『さうだらう。俺なんかかうした變則な生活をして居るだけに、國許の女房の實家へ預けてある子供の事が時々たまらなく思ひ出されて來る。

ふしだらな生活をして居る親は、人一倍子供の事を氣にするものだ。どうだ、わかるか。』

『わかるよ。俺にはよくわかる。其處なんだ、其の氣持がわからなくつちや――』

水原は善と惡との理窟で固つた妻の事を思ひ出して、再び憂欝になつた。

二時間ばかり水原は恩田の酒の相手をした。久しぶりで會ふ舊い友達は實際無條件で懐しかつた。(さうだ。明日から友達を片つ端から訪ねて廻らう。Kや、Sや、Nや。)さう考へた彼は、其れが現在の唯一の慰めである自分が今更に悲しかつた。

十二時近くなつて彼は恩田に別れを告げた。

『さうか。ぢやあ其の邊迄で送つて行かう。』

大分醉ひが廻つた恩田はさう云つてひよろ〳〵立ち上つた。

『いゝか、子供を大事にするんだぞ。』戸外へ出ると恩田はもう一度子供の事を云ひ出した。『君の處の子供はまだ若いからな。餘計大事にしなければいけない。其處へ行くと俺は安心だ。何しろ俺は早婚で、二十二の時にもう長男を生んだんだ。もう二三年たてば長男は嫁が貰へる。長女は婿が取れる。田舎に置けば金もかゝらない。――そら嫁入ぢや、そら、婿取りぢや。』

恩田は手を打つてよろけながら往來で踊り出した。格別樂しいのでも何んでもないのだが、久しぶりで水原が訪れた事が、彼をふとはしやぎ立たせたのであつた。

もう電車は無いかも知れない――さう思ひながら水原は恩田と並んで靜かな屋敷町を電車通りへと拔けた。彼もひよく醉つて、足許がふら〳〵した。

『はてな、何處か此の邊の横町を曲ると、停留場の側へ出られるんだつたが。』

恩田は高い石の塀が直角に折れて居る處で足を留めて、あたりを見廻した。

『もう一つ先きだつたかな？』

『先きには横町なんか無さゝうだぜ。』

水原は二三間一人で先きの方へ歩いてみた。西洋館が並んだ中に、古びた、だゝっ廣い、日本家屋が見出された。彼は何氣なく其の家の門に掛けられた標札を見た。樞密顧問官N子爵の名が記されてあつた。

N子爵は榮子が先の夫の山名と結婚した時、表面上の媒酌人になつた人だつた。藝者だつた榮子は山名に愛されて彼の妻となる際、山名が相當の家柄なので、其れに釣合ふ樣な假親と媒酌人を立てなければならなかつた。N子爵が山名の父親と親交があつた爲め、其の媒酌人に選ばれたのだつた。

凡そ榮子の前半生に關係のある物は皆水原には懷しかつた。榮子の先の夫の山名と偶然彼が榮子と連立つて散歩して居る時に出會つた事があつたが、其の山名に對してさへ、彼は一種の懷しさを感じた。出來るなら互に名乘り合つて話をしてみたくさへ思つた。其の懷しさは一種の嫉妬の變形かも知らないと彼は時々疑つてみたが、さうではないらしかつた。つまり山名も、N子爵も、山名の前に藝者だつた榮子を世話して居たSと云ふ旦那も、一切の人と物とが榮子を導いて彼に引合せてくれたのだ。其等の人と物とのどれかゞ缺けて居たら、彼は彼の女と一生會へなかつたかも知れない――そんな氣持から或る懷しさが湧いて來るのだつた。

『どうしたんだ？』

彼がぼんやりN子爵の門前に佇んで居ると、後から恩田が近づいて來た。

『うん、偶然今N子爵の家を見つけたんだ。俺はちよいと此の男を知つて居る。』

水原はさう答へた。だがさすがに彼は委しい事情を恩田に話して聞かせるのを耻ぢた。

『何だ、N子爵か。――俺も此の男なら知つて居る。俺は昔雜誌記者をして居る時分に一度此奴の處へ訪問に來た事があ

るんだ。此奴、ずるくつて、感じの極く悪い奴だぜ。』

恩田は酒臭い息をぷつと吐きながら答へた。

『さうだ、實際いやな奴なんだ。こんな古ぼけた、大きな家へ住みやがつて。』

水原はつか〳〵と門の側へ進んだ。其の癖彼はN子爵に一度も會つた事はなく、いやな奴どころか、彼は今心の中で榮子の爲めにN子爵に不思議な懐しさを感じて居るのだつた。

『こん畜生、生意氣だぞ。Nの馬鹿！』

彼は大聲でさう叫んで、ステッキの先で閉つた門の扉をこつ〳〵叩いた。其れから後で、痩せた肩を骨がきしむ程どしんと打つけた。

『やい、門番、起きろ、起きないか。』

彼は怒つて居るのでもなかつた。醉つて無意味にふざけて居るのでもなかつた。何處かで榮子が彼のさうした様子をちつと眺めて笑つてくれたら、と云ふあり得ない空想が彼を喜ばせたのだつた。

何も知らない恩田は其の様子を見て、機嫌好く、だが少しばかり腑に落ちない様に、にや〳〵笑つて居た。

三

彼が思ひ立つた舊友の訪問は一亘り済んでしまつた。依然として氣持は落着かなくつて、日夜榮子の事が思ひ出された。

或る晩彼は散歩に出て、寄席へはいつた。かなり名の知れた或る講談師が河井繼之助の傳記を讀んで居た。子供の時

分、少年史談と云ふ小さな本で河井繼之助の傳記を讀んだきり、水原は此の幕末志士の事蹟に就ては知るところが無かつた。越後長岡藩の重臣で、經濟學者で、藩の弊政を改革し、其の上に武將として名を揚げた勇士——そして彼は其の夜河井繼之助の傳記を聞いて居る中に、榮子の夫の山名の家が代々長岡藩の儒者であつた事を思ひ出した。若しかしたら榮子の夫の山名の祖父か、親戚に當る人が、河井繼之助と親交があつたかも知れない。

『同じ長岡の藩中に、山名××之助と云ふ儒者あり、此の人河井繼之助の同志の一人にて——』

突然講談師が扇を叩いて、そんな事を云ひ出すかも知れない——山名の名が一言講談師の口から聞けたら、其れを其の日一日の樂しみとして滿足に受容れたい——さうした程愚かしい空想から、彼は其の翌晩も、翌々晩も、三晩續けて寄席へ通つた。（だが不幸にして山名の先祖は河井繼之助の傳記に關係が無かつたと見えて、彼等の名は到頭出て來なかつた。）

S市に居る榮子の兄から或る日水原の許へ手紙が屆いた。

『其の後榮子の病狀依然としてよろしからず、二階の一間に籠りきりにて眠たり、起きたりして居ります。一昨夜は家人の隙を覗ひ戶外へ飛出したので、私と愚妻と、店の者と、三人にて早速手分をして探索しましたところ、町端れの鐵道線路に佇み居るを發見し、大いに驚愕いたし、やつと連れ戾りました。其の後は家人一同殆ど寢ずに見張りやら、看病やらを致して居ります。但しあなたがお出で下さる事は却つて本人の心を昂奮させますから、暫くお控へ下さい。』

さうした文面だつた。

今榮子に會つても何の役に立たない、さう思つたが、やつぱり彼は一眼榮子に會はずには居られない氣がした。彼の

女が此のまゝ氣が狂つて死ぬのだとしたら、今の中にもう一度會ひたかつた。若し幸ひに病氣が直つて健康な身體になるのだとしても、やつぱり一度見舞に行つて置きたかつた。栄子と云ふ女はかうした場合、みす〳〵彼の女の病氣を募らせるとしても、尙一眼會ひに行かずには居られない様な男の心の動き方を望むのだつた。

『あの時あなたは兄さんが留めるのを好い事にして、見舞にも來て下さらなかつたのね。』

病氣が直つてからの栄子にさう云はれるかも知れないと云ふ豫想が、彼の女の死を想像するより尙辛かつた。

手紙を受取つた翌朝、水原は直ぐ旅裝を準へて、上野驛から午后一時發の青森行急行列車に乘り込んだ。

汽車が栄子が居る東北のS市へ着く迄、九時間近い間を彼は込合つた坐席に窮屈さうに身を落着けて居た。二ヶ月前、氣が狂つた栄子を伴つて、夜の急行でS市へ行つた時の事が思ひ出された。栄子が彼の監視の眼を窃んで坐席を摺り抜け、車外へ飛び降りたりする事があつてはと云ふ危惧から、彼は二人づつ仕切つた二等車の坐席の窓際の方へ彼女を腰掛けさせ、兩足をぐつと伸ばして彼の女の通路を塞いだまゝ、S市へ着く迄一睡もしなかつた。出立の前夜も栄子は頭が痛むと云つて寢床で頻りにもがいて居たので、彼は栄子の頭を揉んでやつて夜を明かした。

『何か面白い話は無くつて？　どんな話でもいゝわ。』

頭痛が薄らぐと栄子は時々ぼかんとした顏つきをして水原を見上げた

枕許に夕刊が置いてあつた。彼は其れを取り上げて、相馬大作誠忠錄と云ふ講談を讀んで聞かせた。大作が渡守になつて、津輕の藩主を水死させるところだつた

『それからどうするの？　後はどうなるんです？』

栄子は子供の樣に單純な興味から後を聞きたがつた。水原はうろ覺えに覺えて居る相馬大作の一代記を栄子に語つて

聞かせた。

『面白かつたわ。ありがと、ありがと。』

彼の女は素直に頷いた。そして其の翌晩水原は榮子を連れてS市へと立つたのだつた

藝者だつた榮子は水原と戀に落ちて自分から身を引き、家を構へた。だが生來强い神經質の彼の女は、水原が心變りをしたと云ふ根も無い疑ひからヒステリーが募つて狂人に近い狀態になつた。ちよいとでも眼を離すと彼の女は自殺を謀るので、水原は殆ど附きつきりで榮子の介抱をしなければならなかつた。心身が疲勞し盡して、彼も同じ樣に物を考へる力が無くなつた。S市に住んで居る榮子の姉夫婦を呼び、家を疊んで彼の女を一時二人に托するより外に仕樣が無くなつた。

一月程たつて水原は又榮子を連れ戾した。病氣はまだ直らなかつたが、彼の女は東京へ出たがつたし、彼も別れて居るのが辛かつた。だが一緒に暫く旅館で暮してみると、榮子の病狀が益々惡化されたのが見出された。彼の女はもう自殺を謀らうとしない代りに、今度は始終誰かゞ自分を殺さうとして附け狙つて居ると云ふ脅迫觀念に襲はれた。或る晩、遲く旅館の表戶を叩く者があつた時、彼の女は其れが自分を殺しに來た者だと云つて、あわてゝ押入の中へ隱れてしまつた。部屋の前の廊下に紙片が落ちて居たりすると、其れを拾ひ上げて、新聞紙であらうが、廣告であらうが、必ず擴げて讀んでみた。彼の女の命を狙ふ者の秘密な暗號が其の中に認めてあると云ふ疑ひからだつた。

『昨夜殺されるのかと思つて居たら、又一日延びたわ。』

朝起きると、彼の女はよくさう呟いて薄氣味の惡い微笑を洩らした。水原が氣晴らしに散步を誘つても、榮子は旅館の外へは一步も出ようとしなかつた。

さう云ふ日が幾日か續いた後、水原は思案に餘つて再びS市の姉の許へ彼の女を送り屆けた。

『離れて居ても病氣がよくならないのなら、いつそ側に居てやつた方がいゝかも知れない。直るにしても、直らないにしても――』

彼は今さう考へた。

午後九時過ぎ、列車はS市に近づいた。水原は窓の外の闇の中に散らばつたS市の外廓の電燈の光を眼に着けると、立ち上つて降車の支度を始めた。突然汽笛が鳴つて、速力を緩めた列車ががたんと搖れた。彼ははつとして窓枠に捉つた。胸がどき〳〵鳴つた。若しかしたら又榮子が家を脫け出して、今度は誰にも見つからずに到頭鐵道線路へ飛び込んだのではあるまいか……此の列車が丁度今彼の女の纖弱い肉體を重い車輪で押し潰して居るのではあるまいか……そんな恐怖に襲はれたのだつた。彼の友人で、家庭の不和から妻が子供を背負つて家出をしたと云ふ知らせに驚いて、夜汽車で東京の近くの避暑地の住居へ歸つて行つた男が、其の避暑地の停車場の近くで突然汽笛が鳴つて、列車が速力を緩めたので、てつきり自分の妻子が其の列車を眼がけて線路へ飛び込んだのだと思つて、顏色を變へて飛上つたと云ふ話が思ひ出された。

『死んでもいゝ。此の列車に轢かれて死んでもいゝ。』

彼は强ひてさう思つた。血塗れになつた、だがまだ何處か溫かみの殘つた榮子の肉體の一部分を線路の上から彼が第一に拾ひ上げる事が出來たなら、せめて其れを彼の女と自分との緣の淺からぬ證據として滿足に思ひたかつた。そして轢き殺された指一本、爪一つで、彼は榮子の身體を間違ひ無く見分ける事が出來ると信じた。彼はくるめく眼を無理に見張つて車外の闇を見廻した。だが列車はS市の停車場の端れのシグナルの前で速力を緩めたゞけの事らしく、ほつと

した水原の氣持と調子を合せる樣に、吐息の樣な湯氣を汽罐車の釜から吐きながら靜かにプラットフォームへ辷り込んだ。

四

汽車を降りると水原は直ぐ榮子の義兄の家へと車を走らせた。

もう十時近かつた。停車場前の大通りはさすがに賑かで、街も明るかつたが、車が左へ曲つて市の中心を外れると、次第にあたりは人通りが稀になつて、光の乏しい往來には薄寒い北國の秋風が吹いて居た。やがて車は市の西寄りの町で手堅い商賣を營んで居る榮子の義兄の家の前で停つた。

店には誰も居なかつた。水原が硝子戸を開けた音に、奥から榮子の姉が出て來た。

『まあ！』

水原の姿を見るとさう云つて彼女は直ぐ奥へ引込んだ。入れ替つて義兄が店先へ姿を現した。

『突然伺ひまして。』

水原は極りが惡るさうに笑ひながらお辭儀をした。

『さあ、どうぞ。』

義兄は彼を奥へ導かうとしたが、水原は店先へ腰を下した。病人を昂奮させるだけだから來てくれない方がいゝと云ふ義兄からの手紙を押切つて來た事に對する辯解もしなければならなかつたし、榮子の病狀も坐敷へ上らない中によく聞いて置きたかつた。

『どうも困りますんで。私たち迄氣が變になつてしまひさうで。』
義兄は水原と向ひ合つて店へ坐り込み、小聲で榮子の病狀を語り出した。
水原と二月別れて居た間に榮子の病氣はちつともよくならなかつた。相變らず二階の一間に閉ぢ籠つたきりで、一歩も外へ出ようとせず、醫者の藥も毒がはいつて居ると云つて、姉に一杯づつ毒見をさせた後でなければ飲まなかつた。一週間程前、演習があつて軍隊が多勢市内に入り込んだが、榮子は銃を擔いで家の前を通る兵士を見ると、自分を殺しに來たのだと顫へ上つた。
『あの日は朝からまるでふさぎ込んで、御飯も食べないんです。夕方でしたか、ふと兄さん、東京へ手紙を出せば水原が來てくれるだらうかなどと私に云ふんでせう。其れは無論來て下さるさ。だが病氣が直らなければ、水原さんに來て頂いても何もならないから、養生して早く身體を丈夫にしなければいけないと私が申しますと、其れは大違ひだ、水原は私が早く死ぬ事を望んで居るんですよなんて云ふんです。餘りくど〱云ふと又病氣にさはるといけないと思つて、私は病氣が直れば水原さんの氣持もよくわかるだらうから、まあ氣を落着けなさいと云つて置いたんですが、それから家内が台所で働いて居まして、私がちよいと風呂へ出かけた間に、榮子さんはそつと家を拔け出してしまつたんです。晩御飯の支度が出きてから、榮子は朝も、お晝も、御飯を食べなかつたんだから、晩御飯はどうしても食べさせなければいけないと申しまして、家内が二階へ上つてみますと、姿が見えませんので大騒ぎになりまして、家中で手分をして搜索に出たのですが、やつと近くの踏切の側の鐵道線路にしよんぼり立つて居るのを見つけて、連れ戻つたんです。それからは二階へ一人置いても心配なんで、時々誰かがそつと二階へ上つてみるんです。其れも本人の氣を損ねまいとして、わざと用がある振りをして二階の押入を開け、いりもしない道具を持出したり、又其れを納ひに行つたり、夜は、

ですから家内が梯子段の直ぐ下へ寢る樣にして居ましてね。梯子段を降りて來ればどうしても蒲團を踏むので眼が醒める樣にしたんです。いつ迄こんな事が續くか、いや、全く閉口してしまひました。』

義兄のさうした說明を聞いて、水原もひどく憂鬱になつた。命はないで、此のまゝ歸つた方がいゝかも知れないと思つた。

『折角いらしつたんですから、まあお會ひになるのはいゝでせうが、どうぞ餘り込み入つた話などをなさらない樣に。ちよいと見舞に來たのだから直ぐ歸ると云ふ樣にお話しなすつて下さい。』

義兄は氣の毒さうにさう云つた。

其れから奥へ上つて水原は榮子の姉や、中學へ行つて居る長男に挨拶した。彼の聲が二階の榮子の耳へ聞えて居る筈だと思つたが、榮子が降りて來る氣勢も見えないのが、水原には淋しかつた。

暫くして彼は姉に伴はれて二階へ上つた。夜具を掛けずに敷蒲團の上に背を丸くして横になつて居た榮子は、きよとんとした、妙によそ／＼しい眼で水原の姿を見上げた。

『病氣はどう？ちよいと……見舞に來たんだ。』

水原は枕許に坐つて、榮子の顏を覗き込んだ。別れて二個月の間、片時も忘れなかつた彼の女だつた。氣が狂つて居ても、どんなによそ／＼しい眼つきを彼に見せても烈しい愛慕の慾望を唯の一眼で水原の胸に込み上げさせずには置かない彼の女だつた。結び髮で顏色は蒼ざめ、肉が落ちた爲めに頰や顎の骨の線が堅く浮き出て居たが、彼の女の美しさは少しも變らない樣に思はれた。

『さあ、お起きよ。水原さんがわざ／＼お見舞にいらつしつたんだよ。九時半の急行でお着きになつたんだつて。』

姉もさう口を添へた。

榮子はやつと上半身を蒲團の上へ起したが、ひどく不機嫌な樣子らしく、敵意に近い鋭どさの籠つた眼で水原を見返した。

『知つてゐるわ。あなたが何しにいらしつたんだか、私ちやんと知つて居るわ。』

彼の女は空ろな聲でさう呟いた。

『何しにつて、今云つた通り見舞に來たのさ。』

水原は悲しさうに答へた。

『私がまだ死なゝいかどうか、樣子を探りにいらしつたんでせう。――本當に結構なお見舞だわ。』

『又そんな馬鹿な事を云つて。』

姉はさう云つて水原と顰めた顔を互に見合せた。

『困るね。そんな譯のわからない事ばかり云つちや。早く病氣を直したいと思つて、皆がどんなに心配して居るか、君にはわからないかね。』

氣の狂つた者を相手に凡そ馬鹿げた論爭だつたが、水原は彼の女の命を狙つたり、不幸を願つたりする者があり得ないと云ふ事を諄々と說き諭さなければならなかつた。だが榮子はまるで彼の云ふ事に耳を藉さなかつた。

『何とごまかしたつて駄目よ。いくら私が馬鹿だつて人の氣持位よくわかるんですから。此の頃では姉さんや兄さん迄あなたとぐるになつて居るんです。――お歸んなさい。さあ、早く歸つておしまひなさい。』

そして榮子は枕の上へぴつたり顔を伏せてしまつた。

仕方が無くつて水原は一人先きへ下へ降りて行つた。

『どうでした？やつぱり駄目でござんせう。まあ、氣長く養生させて、心が落着くのを待たなくつちや。』

義兄は氣の毒さうに水原を慰めてくれた。

姉はまだ二階に殘つて、いろ〳〵榮子を諭して居るらしかつた。水原は一兩日前から少し風邪氣味だつた上、汽車で九時間揺られて來たので、ひどく身體が大儀だつた。直ぐ停車場前の旅館へ引き揚げようとすると、義兄は無理に押し留めて、是非一泊してくれる樣にと勸めた。折角の厚意を斷りかねて、彼は茶の間の次ぎの部屋へ退いた。其處には寢床が敷かれ、東京の家で榮子が彼の爲めに縫つた溫袍が出されてあつた。

疲れて居たが、ひどく神經が昂奮して彼はなか〳〵寢つかれなかつた。一時過ぎになつてやつとうと〳〵しかゝつたと思ふと、直ぐ唐紙の外の階段を誰かゞあわたゞしく馳け上つて行く足音で眼を醒された。間も無く二階で何か壁に打つける樣な鈍い物音が三つ、四つ、五つと、續けさまに聞えた。二階には榮子が寢て居る筈なので、水原は思はず枕から頭を擡げて耳を澄ました。榮子が姉と云ひ爭つて居るらしい聲が暫く洩れて來たが、やがて其れも靜まつた。二度目の眠りに入る前、彼は再び二階で壁に物を打つける樣な音を聞きつけたが、彼はもう其れが何の物音であるかを推測するのも物憂い樣な、弛緩した氣持に浸つて居た。

翌朝、水原は八時前に床を出て台所へ顏を洗ひに行つた。流し許で姉が朝飯の仕度をして居た。

『もうお眼覺めですか、昨夜はおやすみになれましたか？』

姉はちよいと頭を下げて、さう問ふた

『えゝ。疲れて居たものですから、よく眠られました。――勝手ですが、朝の汽車で立ちますから。』

彼は顔を洗つて直ぐ洋服を着込んだ。姉夫妻は是非朝飯を飯べて行く様にと勸めたが、汽車の時間が迫つて居るし、食慾も無かつたので、彼は其れを辭退した。榮子は曉方になつて、姉が無理に睡眠劑を飲ませてやつと眠らせたとかで、まだぐつすり眠込んで居た。水原は彼の女に顔を合さずに義兄の家を出た。親切な義兄は彼が斷るのも聞かず、停車場迄送つて來てくれた。

朝の靜かな街を水原は義兄と並んで歩き續けた。何の爲めにわざ／＼こんな遠い土地へやつて來たのか、さう思ふと彼はひどく侘びしくなつた。榮子があのまゝ一生狂人になつてしまふのではないかと思ふと、彼の心は一層滅入つた。榮子が彼と戀に落ちて家を持つ前、ある占者に身の上を見て貰つた時、水原と彼女との縁は所詮永く續かないと語つたと云ふ事などが、再び來る機會が無いかも知れない此の東北の街の一隅を歩いて居る彼の淋しい心にふと思ひ浮んだ。

『昨夜はどうも家内がすつかり閉口した樣です。』

家を出て一町ばかり行くと、義兄は突然口を開いた。

『何です？どうしたんです？』

水原は直ぐ夜更けに二階で榮子が何か騒いでゐた事を思ひ出した。

『どうもあの病人はむちやばかり云つて――』

そして義兄の話し續けるところに據ると、榮子は姉に水原を直ぐ追ひ歸せと云つてきかなかつたさうだが、姉はやつと其れを宥めた。（水原さんがお前を殺さうと思つて居るなんて、そんな馬鹿な事があるものか。あんなにお前を好いて居るし、お前だつて好きで一緒になつたんだらう。お前の方から一緒に家を持ちたいと云ひ出したんださうぢやないか。其れともお前、嫌ひになつたのかい？）と姉が問ふと、榮子ははつきり（えゝ、私あんな人嫌ひになりました。）と

述べた。(其れぢやお前からは義兄水原さんに、榮子はもうあなたを嫌ひになりましたつて云つてやらう。)姉はそう云つて下へ降りた。

ところが暫らくすると二階で何だか異樣な物音がするので姉が急いで梯子段を馳け上つてみると、寢床へはいつた筈の榮子が寢間着のまゝ起き上つて枕許の壁へ頭をどしん〱打つけて居た。

「あきらめてしまへ。えゝ、あきらめてしまへ。」

さう叫びながら彼の女は齒を食ひ縛り、白眼に赤い筋を絡ませた血走つた眼つきをして、髮をばら〱に振り亂した頭の頂點を壁に投げ續けて居るのだつた。姉はびつくりして榮子を抱き留めた。姉に身體を抱へられながらも、彼の女は狂ほしく頭を振り立てゝ「あきらめるんだ。あきらめるんだ。」と叫び續けた——

「あなたを怖がる樣な事を云ひながら、本當はやつぱり好きなんですな。だから口では追ひ歸せと云ひながら、正氣に歸へると、なかなか諦めかねるんです。考へれば氣の毒で。」

義兄はちよいと笑ひ出した。

だが水原は笑ふにも笑へない氣持だつた。天井の低い、粗末な普請の家で、昨夜二階から聞えて來た、どしんどしんと壁を打つ鈍い音が、今遠くからこだまの樣に彼の耳に歸つて來た。朝の輕やかな大氣の中で、彼も力一杯何か應へのある物に打つけて見たい樣に、苛立たしく頭を振つてみた。

五

歸りの汽車は晝頃から雨になつた。閉められた窓硝子はすつかり曇つて、外の眺望を妨げた。込み合つた車室の中に

も水原の眼を慰める物が一つも無かつた。彼の氣分は往きより一層沈んだ。榮子を思ひ出す事がもう彼を樂しませなくなつて、却つて犯した罪の追憶の樣に彼の心を絞めつけた。罪人は良心を呼び醒し、自らの失行を責める事によつて慰められる。惡人を捨てれば善人が身方になつてくれる。だが彼は今、何處にも賴る處が無かつた。彼を勞り、溫めてくれる唯一の存在であるべき榮子の心がもう榮子自身にさへ支配出來ない物になつてしまつた。彼を捨てゝも、裏切つても彼の悲しみを、彼の存在を、榮子が正氣で『感じ』てさへくれたなら、まだ彼は自らを慰めるに足りたのであつた。雨は根氣よく降り續けた。毎年此の季節、都會に、村落に、落ちて來るしつとりした秋雨と違つて、夏の末に襲つて來る暴風雨の樣な凄じい雨勢だつた。風も大分吹き荒んで居るらしく、東京に近づくに連れて風と雨は愈々勢ひを增して來た。

夕方汽車は上野へ着いた。改札口を出た旅客の群は車で、自動車で、それ〴〵降り頻る雨を冒して出て行つた。だが水原は見知らぬ土地へ着いた樣に、何處へ行つたらいゝか見當が着かず、ぼんやり停車場の庇の下に佇んだ。豪雨が往來と空を同じ樣にどす黑い色に染めた。そして其の中で街路樹や、家屋が、今にも崩れ落ちさうにぐにやぐにやに濡れそぼつた形を浮べて居た。

我が家へは歸りたくなかつた。彼の歸宅を待ち佗びて居る二人の子供の姿がいぢらしく思ひ浮ばないではなかつたが、今のまゝの氣持で强ひて家へ戻る事は、彼の家庭を一層憂欝にする事に終りさうだつた。

『M町へ行かう。』

彼はさう思ひ着いてタクシイを命じた。M町へ行けば榮子の事をしみ〴〵語り合ふ相手が求められた。榮子と別れて淋しく都へ歸つた彼を慰める物は其れより外に無かつた。

M町のSと云ふ料理屋へは凡そ一年程通ひ詰めて、彼は其の家の人たちは無論の事、繁々足を運ぶお客の中にも顏を見知つて挨拶をし合ふ人が出來る樣になつた。S家の主人と云ふのが、少年時代彼の家の近所に住んで居て顏馴染であつた關係から、水原はよく帳場で主人夫妻と話合つた。同じ樣に帳場へ顏を出して、二言三言主人や水原と話しかける人もあつた。

其處で水原はいろ〳〵のお客の噂を聞いた。蕩兒のありふれた情事――さう云つてばかり濟まされない樣な、かなり心を牽かれる事實も中にはあつた。火の樣に烈しい戀の情熱に眼が眩んだ男女の愚かしい行ひが夜毎に其處で繰返されるのだつた。ひどく快活で、ひどくのんきさうに見えるお客が、皆それ〴〵一度や二度は心に痛手を負つた人たちで、其の古傷が癒えると、彼等は再び戀を漁りにかうした場處へ姿を現すのだつた。

Kと云ふ會社員があつた。四年程前、彼はM町の美しい女と戀に落ちて結婚した。二年程たつて女は肺病で死んだ。Kは身も世もあられぬ思ひに嘆き悲しんで、丸二晝夜愛人の死體に添寢をした。親兄弟がいくら宥めても、彼は死體を放さうとしなかつた。やつと葬式を濟ませた後で、彼は悲觀の極自殺を謀つた。だがさうした苦しみを經、さうした深い愛着に囚へられた彼が、四年ぶりで又ひよつこりS家へ現れて、『どうだね、誰か綺麗な人を見つけてくれないかね？』と笑ひながら主人に頼むのだつた。

Tと云ふ女は其れと反對に、愛し合つた男と同棲して間も無く男が病氣になつた。四年の間彼女は忠實に病夫に仕へたが、遂に夫は死んだ。其れから彼女は獨身生活を續けて、夫の先妻が遺して行つた一人の娘を育てゝ居たが、最近其の娘も死んだ爲め、世の中が賴りなくなつて再びM町へ勤めに出た。たつた一月の中にもう卅過ぎた彼の女は若いお客と戀に落ちて浮名を立てた。そして昨日迄の事はすつかり忘れ、始めて生きて行く歡びを知つた樣に、何と彼の女の顏の晴

やかに輝いてゐる事だらう。

さう云ふ人たちの噂を耳にするにつけ、戀愛は結局機會である事、そしてどんなに熾烈な愛情でも、時がたてばいつかは淡い追憶を殘すだけで消えて行く物である事は水原にもよくわかつた。戀の墳墓であり、戀の産所であるM町の人人は、水原の榮子に對する愛情がやがて薄らいで行くのを待つて居るのかも知れないと思ふと、彼はふと淋しくなつた。

泥濘を蹴立てゝ自動車はM町へはいつた。彼はS家の前で車を降りた。

『まあ、お珍らしい。』

馴染の女中が玄關に彼を迎へ出て、かうした場所に特有の元氣の好い調子で聲をかけた。彼はすぐ二階の、よく榮子と話し合つた坐敷へ導かれた。

『何てひどい降りでございませう。――まあ、薄暗くつて。』

お増と云ふ女中がさう云ひながら、雨が吹き込まない樣に閉め切つた片側の窓の戸を開けた。水原は床の間の前にどつかと腰を下して疲れた身體を柱に凭せた。

やがてお増がお銚子を運んで來た。

『降るのによくお出かけでございましたね。何處かのお歸りですの？』

水原はS市へ榮子を見舞に行つた歸りだと云ふ事を語つた。

荒模樣なのでさつぱりお客が無く、帳場に居ても退屈なので、主人が二階へ上つて來た。主人とお增を相手にしてちびちび酒を飲みながら、水原は榮子の病狀を語り續けた。

暫くすると自動車が十臺家の前へ着いた。

『お客様だ。』

さう云つてお増も主人も降りて行つた。

『峰さんがいらしつたのよ。あの方は變り者だから、こんなお天氣の惡い日にお出かけなさるのね。』

お増は再び水原の坐敷へ戻つてさう報告した。

峰と云ふのは下町の商店の息子で、此の家へちよい〳〵來るお客の中で水原は一番好いて居た。『其の中に二人で一緒に一杯やらうぢやありませんか。』帳場で顔を合せると、二人はよくそんな事を云つたが、まだ一坐をする機會が無かつた。

峰は今年廿八で、まだ獨身であつた。下町の良家の娘に許嫁があつたが、三年程前に其の女が病死したので、其れから彼は許嫁の寫眞を常に懷中にして、方々の花柳街を歩き廻り、どうかして其の死んだ愛人に面影の似通つた女を探したいと努めて居た。

『これだ、此の女にそつくりの女を探してくれ。』

彼はさう云つて、料理屋や、待合のかみさんや、女中の前に懷中から寫眞を取出して見せるのださうである。

此の家のかみさんとどう云ふ關係からか、以前から懇意なので、峰は此の家へも月に六七回は必ずやつて來た。度々寫眞を見せられるので、かみさんの方でもすつかり心得て、其れに似た樣な藝者をいろ〳〵探して來ては見せるのださうだが、峰には皆氣に入らないらしかつた。彼はいつも一人か、二人始めての藝者を呼び、氣に入らないと直ぐ眼顔で女中のお増に知らせて歸してしまふのだつた。そしてそれから此の家のかみさんに三味線をひかせて、彼は尺八で合奏

して、其れで氣が濟んだ樣に歸つて行つた。彼は尺八が得意でいつも尺八を携へて居た。死んだ許嫁と云ふのと、屢々合奏をした事があるので、氣に入つた女に出會はない時は、せめて尺八を吹いて心を慰めようとするのだつた。

ずつと以前、始めて峰のさうした逸話を聞いた時、水原は此の古風なセンチイメンタリストの氣持に多少の同感を寄せないではなかつたが、おそらく資産家の若息子にありがちの、單純で、低脳に近い善良さを持つた好人物だらうと峰を想像した。だが其の後帳場で顔を合し、二三度物を云ふ樣になつてから、峰がなか／＼敏感な、近代的な青年である事を見出して、彼は意外の感に打たれた。應對なども落着いて、品が良かつたし、まだ童貞かも知れないと此の家の人たちに噂される程、彼は女に對して一種の羞ぢらひを持つて居た。

『どうだね、一つ峰さんに今夜は一緒に飲みませんかつて勸めてくれないか。』

水原は急に今夜しみ／＼峰と語り合ひたくなつた。かうした豪雨の晩、家にぢつとして居られなくなつて、せめて一杯の酒と明るい灯に憂鬱を紛らはさうと飛んで來た彼だとすれば、峰のさうした氣持には、此の家の主人や女中の職的なお世辭や媚り以外の深い共鳴を見出し得るかも知れないと水原は考へた。

お增が水原の言葉を傳へると、峰は直ぐ彼の坐敷へやつて來た。

『さあどうぞ。降るのによく出ておいででしたね。』

水原は彼を强ひて上坐に招じた。

『家に居ても晝間から陰氣で仕樣が無いので、思ひ切つて飛び出して來ました。一度あなたとゆつくりお話をしたいと思つて居ましたが、丁度今夜は好い機會でした。』

峰は慇懃な語調で挨拶した。（[illegible]）

『どちらも、こちらも、お互にお誂なさる事は随分おありなさるわ。』

お増は二人の客の顔を眺めて笑ひながら口を押んだ。

峰は氣持好く盃を重ねた。いつも一人で來る彼は、其の育つた雰圍氣の中に氣の合ふ友達が無いらしく、酒を飲みながらかう云ふ場處で打ち解けて話をすると云ふ事が嬉しさうだつた。だが彼は決して其の死別れた戀人の事を話し出さなかつた。

『あの懐中に寫眞がしまつてあるのだな。』

きちんと結んだ角帯の上に心持ち膨れ出た結城の袷の胸元を眺めながら、水原はさう思つたが、さすがに無遠慮に其れを聞き出しかねた。

二人の若い藝者が呼ばれた。水原にも、峰にも、初めての人たちだつた。

彼の女たちが坐敷へはいつて來た時、お増は『どう？お氣に召して？』と問ふ様にちらと峰の顔を見返つた。二人の藝者はどちらも痩せぎすだつたが、一人は赤ら顔で、男の様に大きな鼻と太い眉を持つて居た。一人は又病後の様に蒼ざめた色をして、だがきら〳〵する眼を眉と共に神經質さうに動かして居た。快活と憂欝、健康と病弱、赤と靑、少くとも顔の感じから云へば二人はまるで反對の性質らしかつた。どつちが峰の愛人に似て居るのだか、水原には想像がつかなかつた。

『皆さん、今夜はこんな天氣だからどうせ暇でせう。ゆつくりして行きなさい。』

峰は女學校の先生の様な丁寧な語調でさう云ひながら彼の女たちに盃をさした。ちよいと氣心のわからない、だが結局いやみの無い客――さう思つたらしく、彼の女たちも遠慮無く酒を飲み合つた。

いつもせい／＼一時間位で藝者を歸してしまつて、『やつぱりあんなのは氣に入らないね。』と云ひながら、後は尺八を吹いて歸つて行く峰が、三時間も腰を据ゑて酒も大分飲んだ。お増はひどく珍らしい事の樣に思つて居たが、今宵は水原と云ふ相手がある爲めか、其れとも呼んだ二人の女のどつちかゞ彼の氣に入つたか、見當がつかないらしかつた。

『どうです、水原さん、これから何處かへ皆で出かけようぢやありませんか。』

十一時頃になつて峰はさう云ひ出した。

『少し遠いけれど、鶴見に私の知つて居る料理屋があります。自動車なら譯ありませんから、其處へつきあつてくれませんか。』

水原は直ぐ其の勸誘に應じた。此の家のかみさんも一緒に行くと云ふので、三人の女も快諾した。

『あの葉子さんと云ふのが峰さんの寫眞に似て居るんですつて。』

水原が下へ降りる時、お増が階段の途中でから囁いた。葉子と云ふのは眼だけが美しく、活氣があつて、蒼白い顏全體が其の眼の特徴を生かす爲めか、殆ど無表情な女だつた。

六

峰と、水原、それから三人の女を乘せて自動車は走り出した。雨はどうやら小降りになり、夜の空を一面に蔽つた雲が裂け始めた。びしよ／＼に濡れた路傍の板塀や電柱の根元が、ヘツドライトに照されて鱗の樣な冷たい光を投げ返した。

車の中で飲む樣にと、峰はお燗をした四合壜を運び込ませたので、五人は其れを飲み始めた。かみさんと、もう一人

の赤ら顔の女が頻りに喋つた。峰は女たちの世間話に耳を籍しながら、時々ぽつり／＼と水原に話を向けた。

自働車はやがて品川へ出て、新しく擴げられた國道を一散に走り續けた。鶴見の町へはいつてから鐵道の踏切を越えて、崖に沿うた狹い道へはいつたが、暫くすると車はぴつたりと停つて、車から降りた運轉手の姿は前方の闇の中に消えた。

『どうしたの？運轉手さん。』

直きに引返して來た運轉手にかみさんは問ひかけた。

『ひどい崖崩れでしてもうこれから先きへ車が參りません。』

五人の男女はやがてがや／＼喚きながら外へ出てみた。成程片側崖が崩れて、往來は土砂で埋つて居た。そして其の邊は足駄を沒する程に水が溜つて居た。

『今向ふ迄様子を調べに行つたのですが、二十間ばかり先きの處がもう一個所崩れて居るのです。其の間は一杯水が出て、私の膝位迄あります。』

運轉手の説明を聞いて、女たちは『まあ！』と叫びながら、心細さうに顔を見合せた。

今更引返す譯にも行かず、其れに目指すHと云ふ料理屋迄はもう五六町しかないので、一同其處まで歩いて行く事に話が決つた。

『其れにしても水溜りの處は大變ですから、女のお方は私たちが背負つて參りませう。』

運轉手と若い助手は長靴を脱いで跣足になつて、先づかみさんと、もう一人の女を背負つた。

『こわいわ、こわいわ。』

男の背中で彼女たちは悲鳴を揚げた。

水原は自分も靴を脱ぎ、ズボンを外して、水溜りを渡る用意をした。二人の運轉手はなかなか戻つて來なかつた。

『僕もぶら／＼歩いて行きますよ。』

彼はさう云つて峰を見返つた。峰と彼が好いて居るらしい葉子と云ふ藝者とを、此の崖崩れのした田舍道に殘して、二人だけで好きな話をする短かい時を與へてやる事が水原には何となく興味があつた。だが峰は直ぐ彼を引き留めた。

『お待ちなさい。僕も一緒に行きます。』そして彼は葉子の方へ振向いて、『君、僕が背負つて行つてあげよう。』

峰は直ぐ外套を脫いで尻を端折つた。和服だから支度は造作無かつた。葉子が着物の裾をからげて羞づかしさうに彼の肩に凭れると、峰は彼の女を背負つて水溜りの中へ足を踏み入れた。

『轉ぶと大變ですよ。——此處は少し深いから氣を付けて。』

水原は先きへ立つて注意しながら步き續けた。深さは一二尺位だつたが、崖から崩れ落ちた赤土が溶け込んで居るので妙に泥深い感じがした。底がぬる／＼してうつかりすると辷りさうだつた。彼も、峰も、幾度か轉げさうになつた。葉子は他の女たちの樣に『こわい！』などゝ仰山な聲を出さず、默つて峰の背にしがみ着いて居た。時々二人の口から洩れる吐息に纒はられた峰と葉子の顏が、暗闇の中で薄白く重なり合つて浮んだ。

五六間さうして進んだ。水は次第に深くなり、崩れた土砂は往來の半分以上も埋めて居た。峰も、葉子も、一言も物を云はなかつた。默つて峰の背に凭れて居る女の心を水原はいとほしく思つた。今宵始めて會つた二人は話す事も無いのかも知れなかつた。始めて會つて、かうした處へ來て、背負ひ、背負はれながら水に浸つた田舍道を辿つて行く二人の氣持を考へると、水原の心は靜かに搖れた。彼も亦口を噤んだ。

不意に話聲が聞えて、前方の暗がりから運轉手の姿が現れた。

『今お迎へに行くところでした。よくおいでになられましたね。』

『此の邊が一番深い處です。もう二三間行くと水はずつと少なくなります。さあ、私が背負ひませう。』

二人の運轉手はさう云つて峰の背から葉子を受取らうとしたが、峰はもう後は道が樂だと聞いて、其のまゝ背負ひ續けると云ひ張つた。運轉手たちは水原と峰が自動車の中へ置いて來た外套やズボンを取りに又戻つて行つた。

直ぐに水は引いて、安全な場處へ來た。二人の女が其處で淋しさうに待受けて居た。

『どうも恐れ入りました。』

葉子は峰の背から降されると、慇懃に頭を下げて禮を云つた。

Ｈ園と云ふ料理屋は其から歩いても大した事はなかつた。運轉手が再び引返して來ると、彼等を先きに立て、一同はＨ園へと向つた。

かなり急な坂道の麓に設けられてあるＨ園の門はもうぴつたり閉されてあつた。運轉手は扉を叩いて案内を求めた。

やがて女中が提灯を手にして母屋の方から坂道を降りて來た。

峰が門の外から名を告げると、直ぐ扉は開かれた。運轉手をねぎらつて歸してから、峰や水原たちは井戸端で足を洗つて坐敷へ上つた。

『まあゝこんなに遲くいらしつて。――皆さんお尻を端折つて跣足になつていらつしやるので、私どうしたのかと思つてびつくりしました。』

女中が有合せの酒肴を運んで來てさう云つた。歩いた途中が氣味が惡かつた話が一頻り一座に續けられた。

自動車が長かつたので、醉ひが醒めかゝつて來た。盃が又盛に廻された。二度目の重苦しい酩酊が峰にも、水原にも見舞つて來た。

『峰さんがこんなにお醉ひなさるなんて始めてよ。本當にお珍らしい。一體どうなすつたんです?』

S家のかみさんが驚きの眼を見張つた。『水原さん、寫眞を見せませうか。僕の死んだ戀人の寫眞を。』

突然峰はさう云つて、大きな絽刺の紙入を懷中から取出し、中から懷中鏡程の大きさの枠に納めた寫眞を掴み出したが、急に思ひ直して其れを掌に堅く握つたまゝ、醉ひ潰れて食卓の上へ顏を伏せてしまつた。

酩酊が齎す異樣な昂奮に襲はれて、水原もふら〳〵と立ち上つた。

『あきらめるんだ、あきらめるんだ。』

彼はさう呼んで頭をどしん〳〵坐敷の壁へ打つけた。昨夜S市で一眼會つて來た、氣が狂つた榮子の眞似だつた。彼の眼は急に熱くなつた。かみさんがあわてゝ彼を抱き留めた。

『どうなすつたんです?』

『大丈夫だ、そんなに醉つて居やしない。これには譯がある。』

涙ぐんだ眼をかみさんから反らせながら水原は答へた。醉つた勢いで其の譯をちよいと喋りたくなつて、だが直ぐ彼は口を噤んだ。死んだ戀人の寫眞を懷中から出して、だが掌に包んでしまつた峰のやうに、彼も榮子の思ひ出を一人胸の中に庇ひたかつた。

夜が更けた。女中が次の間へ寢具を敷いてくれたので、一同は五つの蒲團へ並んではいつた。水原、峰、榮子、かみさん、と云ふ順序だつた。

飲み過ぎた峰は寢床の中で苦しがつた。葉子がコップへ水を注いで彼に飲ましてやつた。

『有難う。——君は幾つになるの？』

峰は水を飲み干してから葉子に話しかけた。低い嬌かしい女の聲が水原の耳許へもきれ〳〵に聞えて來た。水原はぢつと眼をつぶりながら、峰が女の手を執つて優しく其の顏を覗き込んで居る樣子を、微かな感動を受けながら想像した。

二人の話聲は暫く續いた。

『違ふ、違ふ。』突然峰は醉ひがすつかり醒めた樣にはつきりした語調で叫び出だした。『君はやつぱり違ふ。何處か顏が違ふ。いや、何もかも違ふ。——僕の好きな人は死んでしまつた！』

水原がそつと振り返ると、峰は葉子の手を振り放ち、夜具の襟で二つの眼を抑へて居た。

『さうだ、生きて居る。葉子はまだ生きて居る。そして生きて居る間は——』

彼は寢床の中で淋しい慰めを抱きながら頷いた。

（完）



戲曲 伊豆の頼朝

近松秋江

人物

伊東入道祐親（六十餘歳）

多賀の方（祐親の後妻四十歳くらゐ）

祐　　清（祐親の次男三十歳前後）

八重姫（祐親の三女二十歳位）

源頼朝（二十九歳）

千鶴丸（頼朝と八重姫との間に生まれし子三歳）

安達藤九郎盛長（頼朝の家臣四十七八歳）

春　　日（盛長の妻三十五六歳）

佐々木三郎盛綱（同上三十歳位）

鬼　　武（同上廿歳位）

其他　乳母、侍女、雜色、郎黨、小童多勢

時代

安元元年春の頃

（一）

伊豆國伊東庄、伊東入道祐親の館。舞台上手に本緣附の二重家體。刀架など厳しく飾り置く。上手より下手にかけて大きく取りまはしたる高塀の前庭には、さま〴〵な春の花草が咲き亂れてゐる。上手の遠景には雲煙に包まれたる天城山の一角を望み、下手前方には暖い伊豆の春の海を眺む。

四五歳から五六歳の小童四五人。手々に玩具の竹馬又は弓矢などを持ちて戯れてゐる者もあり、若木の枝や花の枝を持つて、樹間を追つ驅けこなどして活潑に嬉戯してゐるもある。中に最も年少の千鶴丸は眉目形も優れて凜々しく年若き乳母その他の侍女に手を曳かれて侍かれながらも、動もすれば、その手を振り拂つて他の小童と同じやうに驅け出さうとしたりしてゐる。

乳母。あれ又、危なうございます。丸樣は此處にから靜つとして見ておいでなされませ。

乳母はよち〳〵走り出す千鶴丸を追ひかけて懷き留めながら

さあ〳〵又王殿、もう一度その弓を射て見や、見ごと的に中つたら、好い蜜柑の枝を折つて進ぜようぞ。

それで又王と呼ばれた一番年長の小童、玩具の弓矢を取り直し、狙ひを定め瓢と放せば、過たず、向うの樟の

根元に立てた的に射中てる。小童達多勢双手を擧げて悦ぶ。千鶴丸も皆なの悦るのを眞似て小さい兩手を擧げて喜ぶ。

乳母。おう、見ごとに當りました。今からそのやうでは、大きうなつたら、立派な武士になられようぞ。そんなら褒美に約束の蜜柑の枝をとつて進ぜう。

他の侍女下手庭の奥の方に行つて蜜柑の實つた枝を折つて來て又王に與へる。

侍女甲。又王殿、お前はほんに弓取りの名人ぢやのう。今に好い武士衆に立身しやるぞ

又王。おう、立身するとも、するとも。俺は早う大きうなつて、父様の狩のお供をして、あの天城のお山に猪や鹿を打ちに行きたいのぢや。

侍女甲。おう、それは樂みぢやなあ。お前のその上手な弓矢に打たれては、澤山の鹿や猪が獲られませう。

乳母。その狩と申せば、北の御所様は、今日も朝まだきから、又天城のお山へ御出獵。夕刻には、さぞ多い獲物をもつてお歸館なされませう。

侍女乙。又王殿、お前の父様も今日はお供であらうがの。

又王。さうじや〳〵。俺も一緒に御所様のお供がしたかつた。

侍女甲。その狩のお供の人の話では、北の御所様は獵師も及ばぬ弓矢の上手でござりますさうな。

侍女乙。いつぞや人の噂には、御所様は、天城の狩場で、お手づから走る大鹿の角を掴んで手捕りになされたといふて皆なの衆が舌を捲いて畏れてござりました。

乳母。あゝ、さうでござりませうとも。ほんに系圖は爭はれぬ。十四の御時から十五六年この方、たとひ悲しい流人の

身となつて都離れた此の伊豆の國にお住ひなされてゐても、元をたゞせば歴れある武門の御嫡流。この千鶴様とても、世が世であつたら、源家の御世繼ぎ。乳母のわたくしまでがお陰で世に出ませうものを。

侍女乙。悲しいことには、平家の世盛り。何でも人のいふのを聞けば、今、都では清盛入道殿が仕たい三昧の我意専横。勿體なや法皇様を押籠めまゐらすやら、關白殿を流罪にするやら。ほんに憎らしいではござりませぬか。

侍女甲。北の御所様のお父上左馬頭様のお果てなされたのも、やつぱりその清盛の仕業。わたしが若し男であつたなら、何とかして、その數々の怨みを晴してやりませうものを。

乳母。（慌てた手つきでそれを制し、四邊を見廻はしながら）あゝ、これ、聲が高い。此の伊東様のお館は、假ひ以前は源氏の重代の御家人筋であつても、今の大殿様は専ら全盛の平家に心を寄せられまする。それに今日は、丁度京洛の大番はて、御歸館の御日取り、もう程なう無事御歸着の時刻でござりませう。お前様達も、もうあちらにいて、お出迎への支度なされませい。

侍女甲乙、輕く會釋して庭から奥に入る。乳母も又小童達について走る千鶴丸の後を追ふて下手奥に入る。

舞臺少時空。

少時して伊東祐親入道、六十餘歳。恰も平清盛入道の如き法體にて正面の襖を開かせて立ち出づ。後妻多賀の方その他多勢の近侍あとにつゞく。

祐親。（打ち寛いだる態にて庭の遠近を眺めながら、多賀の方を顧み）比叡、愛宕、加茂、東山、都の名所舊蹟は數限りもないが、何時に變らぬ、あの天城の雲のたゞずまひといひ、常春の伊豆の海の眺めは又格別ぢやのう。この景色を見てゐると、遙々の都から、自分の所領へ歸つたやうで、はじめて安堵の思ひを致す。いや、なにほど花の

都が美しうても、自分の國に勝る處は世界にないわい。

多賀の方。左樣でござりませうなあ。住めば都と譬に申すとほり、自分の生れた故郷ほどよい處はござりませぬ。それにしても皆なの人が、花の都花の都といふて、見た者も、まだ見ぬ者も一樣に憧れ慕ふて居りますのを聞けば、都は餘程よい所と思はれます。わたくしも一度いて見たうござります。なう、そち達もさう思やらぬか。

多賀の方左右の侍女達を顧る。

侍女。（互に顏を見合せて）わたくし共もその考は同じことでござりまする。一生に一度は美しい都の樣が見たいものでござります。

祐親。そち達がそれほど見たいと思ふなら、一度は連れていつて見せてやつてもよいが、その都をよう知つて居る俺には、この伊豆の國ほどよい處は、又とない。あれ見い。なんぼ日本の王城の地でも、京では、あの眼の覺めるやうな美しい紺青の色をした廣い海は見られぬぞ。

祐親はさういひつゝ、つと起上りて緣先より庭の方に下り立ち、そちこちの景色を珍しさうに見廻はし、庭の木石の布置などにも眼を留める。

そこへ先刻の小童が二三人戲れながら驅けて出る。つゞいて千鶴丸も覺束ない步調で、現はれる。乳母又その後から附いて出る。

乳母。あゝ、これ、もつとお靜にお步きなされませ。そのやうに急いでお步きなされたら、危うござります。

頑是のない千鶴丸は前庭の中程まで步んで來て、そこに突立つてゐる祐親に近づく。乳母も爲方なく傍に寄つて來て、恭しく祐親に會釋をする。祐親不思議さうに千鶴丸に眼を留めて見て居りしが、今まで屋形には見知

らぬ召使女の居るを見て、半身をそちらに向け換へて、遠平と乳母を見る。乳母面伏さうにして居る

祐親。はて、屋敷には見馴れぬ女中。（つかつかと二三歩歩み寄り、やゝ顔を和げて）俺も年齢の加減か大分物覚えが悪うなつた。おゝ、そちは土肥の孫であつたかな。祖父の知らぬ間に、又可愛い孫を産みおつた。あゝこれ〳〵、もつと近う寄れ、どうぢや祖父が抱いてやらう。（乳母の方を見ながら）これ乳母、この稚児は遠平の倅であらうがの。

乳母、返答に窮してゐる。

何ぢや、返事をせぬとは。うゝ、分つた。餘り孫が多勢あるので、つひ忘れて居つた。三浦の孫であつたか。義連に遣はした娘が産んだ孫であつたか。

といひつゝ、笑顔で千鶴丸を抱かうとする。千鶴丸、人見知りをして逃げる。

はて、何をそのやうに逃げることがある。お前の祖父ぢやぞよ。これ乳母、何とかいふて聞かしてやれ。俺が祖父であることを知らぬと見える。無理もないことぢや。喃、乳母、義連の倅であるか、遠平の方の孫であるか。

乳母いよ〳〵窮して答ふる所を知らず。千鶴の祐親の傍を離れてよちよち彼方に駆け出すを好機に、その後を追つて、遁げるがごとく下手奥に入る。

祐親。（愈々合點のゆかぬ面持ちにて不興げにづか〳〵立ち戻りて二重に上りつゝ、多賀の方を顧み）今、あれにて見受けし乳母を連れた稚き者は祐親の孫であらうと思ふが、あれは、いづれの娘が生んだ孫であるか。乳母に訊いても返事もし居らぬ。一體誰れが産んだ子ぢや。遠平か、義連か。

心に一癖ありげな多賀の方、少時無言のまゝ思案の體。やがて獨りで肯づき侍女を顧み一々目で退出を命ず。

一同退場。

多賀の方。入道様が御上洛のその間。お留守をあづかる妾の不行屆。何卒お許しなされて下さりませ。(畏れ入つた體に平伏す)

祐親。(氣短かに急き込みつゝ)何ぢや、留守の間の不行屆。いかなる事が出來致したぞ。

多賀の方。(少しく躊躇ふ樣子にて)その不行屆と申しまするは……

祐親。何事ぢや。

多賀の方。他でもござりませぬ。あれなる稚兒は字を千鶴樣と申して、三年以前、入道樣御寵愛の八重姫が、いつしか妾の眼を忍んで設けました男子でござります。若き男女には間々ある習ひ、何事も妾の不行屆と思召して、どうぞ平に御見許しをおねがひ申上げまする。(さういひつゝ再び低頭する)

祐親。なに、八重姫が親の許しを受けぬ男と通じて子まで設けた。不屆千萬の奴ぢや。して、その對手の男といふは何者であるか。(祐親倍々急き込む)

多賀の方そこで返事に窮したる體にて暫時無言。

祐親。さあ、早く言はぬか、對手の男は何者ぢや

多賀の方。お詫びの申樣もござりませぬ。その對手といひますは、さるやんごとなき御方樣でござります。

祐親。なに、やんごとなき御方……。そんな詫び言、いつまでも、くどい。さあ、早う云へ。對手の男は誰れぢやといふに。

多賀の方。(やう〳〵面を上げる)その對手の御方は、只今當館に御滯留ましします兵衛の佐殿でござります。

祐親。（自分の耳を疑ふやうに、初め少時は、呆氣に取られた顔をしてゐたりしが、吾れに返るとともに次第に怒氣を浮べ）なに、何といふ。八重姫が、あの、兵衛の佐に……それでは先程の小倅は、その間に儲けし子なるか。

多賀の方。左樣でござりまする。（また面を伏せて、上目づかひに祐親の顔色を窺ふ）

祐親。（怒氣を含み、はたと向うを睨めながら）たとひ往昔はどうあらうとも、今は只管謹愼を守りてあるべき流人の分際をも顧みず、放埒至極の奴ぢや。多賀、そちは、姫の不義致すをば知らずに居つたか、不束者めが。（今度は妻の方を睨む）

多賀の方。（畏縮の體にて更に低頭を續け）その御立腹は重々御道理でござりまする。父上樣御不在の折柄とて、妾とてもそのことにつきましては一入心を痛め、初めのうちはかれこれと、色々諭しつ賺しつ致しましたれど、何をいふにも、あのとほり、心まかせにして育ちさしたる乙娘。一旦かうと思ひ詰めましては、前後の辨へもなく、なさぬ仲なる妾などの申聞かしますることには、少しも聞分けもござりませねば。

祐親。おゝ、定めしさうであらう。さうであらう。（祐親うなづきつゝ）姫には後程更めて父がいふて聽かする事もある。……同じく不義いたづらをするにも、まだしも商人托鉢の比を男にしたといふならば、次第に依つては、そのまゝにも差許すべきに、人もあらうに源氏の流人を此の祐親が婿に取つたと、人づてに、都に聞えて、もし六波羅殿の耳に入り、お咎めあらんその折は、いかにして申開くべき、祐親が一族は明日の日の目を見ることも叶はぬわ。何はともあれ、あの小倅め、一時も生かして置くこと相成らぬ。者共呼んで縛りつけ、直ちに白瀧の淵に沈めてしまへ。

多賀の方。えツ。（驚いて顔を上げる）

祐親。後ともいはず、さゝ急げいそげ。……（彼は獨りで猛り立ち、奥に向つて聲高に）やあ、誰かある、雜式どもは居らぬか。

主人の聲に應じて、上手と下手とより雜式三人、郎黨二人急いで立ち出で庭前に平伏す。

雜式甲乙丙。お呼びになりましたは。

郎黨甲乙。何の御用でござりまする。

祐親。おゝ、その用事といふは他でもない。先刻この庭前にて認めし千鶴とやらいふ小倅めは、片時も生かして置けぬ奴ぢや。其方達早速捉へて石に縛り、松川の奥に沈めてしまへ。

雜式郎黨驚いて互に顏を見合せ躊躇する。

祐親。何をぐづ／＼致す。一刻も猶豫いたすこと相ならぬ。……このまゝ生かして置いては、祐親の一家をほろぼす、恐ろしい奴ぢや。

雜式郎黨。はあッ。（口を揃へて低頭しながらも、容易に起たうとせぬ）

祐親。（居丈高になり）なぜ早く致さぬ。主人の命に背くか。

雜式郎黨。どう仕りまして。飛んでもないことを仰せられます。

祐親。然らば急いで申しつけた通りにいたせ。

多賀の方。（耐りかねたといふ體にて）あゝ、これ入道殿。まあ、その樣に一徹短慮なことを仰せらるゝものではござりませぬ。佐殿こそ假ひ平家を憚る流人の身であつても、八重姫は、あなた樣にとりては誰れよりもいつち愛しい娘ではござりませぬか、その現在の娘の腹から産れた子ならば、あなた樣にも血を分けた孫。可愛うは思召されま

ぬか。

理詰めをいはれて祐親少時沈默。

多賀の方。（雜式郎黨共の方に、そつと目配せして）のう、そち達は……

雜式郎黨、その意をくみ、そうつと退場せんとする。

祐親。待て。

雜式郎黨。はつ。（驚いて再び平伏する）

祐親。この入道とて親子の情を解せぬではないが、今よしなき婦女の情けにひかれては悔ゐを千載に遺さん。……汝の

辭に。その方共の知つたことではない。……

多賀の方。ぢやと申して。

祐親。えゝ、うるさい。……下郎共早くいたせ。

雜式郎黨。はゝツ。

祐親。早くせぬと許さぬぞ。

雜式郎黨。はツ、畏まりました。

さういひながら、不承不承に腰を上げ、互に他に先を讓りつゝ下手奥に入る。

祐親、心急きたる體にて、じつと彼方の樣子に聞入る。

多賀の方も流石に心落ちかず體をうかして彼方のけはひをうかがふ。

短かき間。

突然下手奥より千鶴のけたゝましき泣き聲、雜式郎黨等の罵しる聲、乳母の遮ぎる聲等入り亂れて聞え、やがて千鶴丸泣き叫びながら、よちよちと逃げ出して來る。乳母その後についてばた〳〵と驅け出る。

千鶴。父さまのう、……母さまのう……

雜式郎黨共も乳母の後から追ふて出る。

乳母、千鶴丸を庇ふて、彼等と千鶴との中に割つて入りながら、下手よき處に立ち塞がり、きつとなり、

乳母。これお前達、たとひ大殿樣の仰せとはいひながら、滅多なことをして後悔しやるまいぞ。折も折とて御父上樣には御出獵にて留守の間。もしものお負傷でもあつたら、稚兒をあづかる此の乳母が申開きが相立たぬ。さあ、わたしが命にかけても千鶴さまには、お前達の指一本もさゝしはしませぬぞ。(乳母懐劍に手をつける)

祐親二重にてじつとその樣子を見てゐる。

雜式郎黨共も、固より己が氣の進まぬこととて、乳母の權幕の凄じきを見て、一歩二歩後に退りつゝ、躊躇ふてゐる。

祐親、氣を焦立てゝ、つと起ち上り、つか〳〵二重から庭に下りて來る。

乳母、背後より祐親の怒罵する聲に驚いて、そちらを振顧り、急いで身を交はして千鶴を自分の背後に隱す。

祐親。女郎、ほざくな。

祐親。(尚ほ、傍近く進み寄り)主命に逆ふ、この女郎め。邪魔ひろぐと、手は見せぬぞ。

いひつゝ、突如足を上げて乳母を蹴飛ばす。

乳母よろ〳〵と地に倒れて、そのまゝ泣き伏す。

祐親、泣き悶えて逃げようとする千鶴を手荒く鷲掴みにして、下手の方に尻込みしてゐる雜式等に向ひ、

祐親。何をそのやうにぐづ〳〵致して居る。さあ、こいつを殺してしまへといふに。

雜式郎黨。へい〳〵。といひつゝ、段々後に寄る)

祐親。さあ、早ういたせといふに。……それとも。その方共に二心あるか……。

雜式郎黨共「ひえッ。」と仰天する。やがて恐る〳〵

雜式甲。それぢやと申しまして、このやうに見目美しうお生れつきなされた御方さまを。

雜式乙。どうして、そのやうな無慈悲なことが。……

祐親。出來ぬと申すか。……可し、それならば、小倅めよりも、貴樣達の方から先きに頸を斬つてつかはさう。(祐親刀に手をかけつゝ、近寄る)

雜式郎黨。(慄え上り)あゝ、いや〳〵仰せに從ひまする。どうぞそれだけはお赦しなされて下さりませ。

一同又互に顏を見合せつゝ爲方なささうに、手の甲で涙を振り拂ひながら、泣き叫び、逃げ狂ふ千鶴を抱きとつて、下手に入る。

乳母、又わつと聲を上げて正體もなく泣き崩れる。

多賀の方、始終無言にて、緣近くにじり出て、そうつと眼を拭く。

千鶴の泣き聲次第に遠のく。

祐親、凝乎とそちらを睨んで突立つこと少時。

靜かに幕。

(二)

伊東館内の一隅、頼朝の寓處、北の小御所と呼びなせり。上手の方に二重家體。上下に通ずるやう本緣にて取り廻はす。凡てやゝ佛間めいたる飾り附け。正面の上手寄りに簡素なる佛壇あり、中央に觀音の立像を安置し、その前に父義朝、忠臣正家などの位牌を祀る。中に小さき白木の位牌は千鶴丸の靈位なり。左右には三島明神、伊豆山權現、鎌倉八幡宮などを祀れり。壇前の經机には法華經數卷を重ねてあり、香煙縷々として、蠟燭の灯影微かに搖れてゐる。

下手は凡て庭。よき處に入口の木戸あり。奥は深き木立なり。

前の場より二日ばかり過ぎたる夜。

前の兵衛の佐源頼朝、總髮の髻(もとどり)を紫の紐にて束ね、淺黃色笹龍膽の散らし模様のある白羽二重の着附け、無地淡黃色の袴。

幕明くと頼朝佛前に向つて靜に默禱を凝してゐること暫時なり。

やがて下手の奥、植込みの間より八重姫、その時代の年若き女風俗にて、薄物にて面を蔽ひながら、忍びやかに出で來りて、四邊に心を配りつゝ、そろつと木戸に近づいて、家内の樣子を伺ひ、扉を開いて内に入る。

頼朝一心に祈禱をこめて居り、それと氣の付かぬ體。

八重姫、緣側より二重に上り來りて、はじめて被衣(かつぎ)を脱し、正面よき處に坐し、無言のまゝはふり落つる涙を拭ひつゝ、佛壇の方に向つて合掌すること少時。

八重姫。（靜かなる聲にて、頼朝の背後より一と口呼び掛く）殿。……佐殿。

頼朝。（はじめて、人の傍近く居るに氣附きたる體にて、振り顧りて、無言のまゝ靜に座を直す）おゝ、八重どの。

八重姫。（言葉よりも先きに兩袖で涙に咽び入りながら）會ひたうござりました。……

頼朝。して、御身は此處へは、どうして。

八重姫。少しも早う御眼にかゝり、……一伍一什のことども申上げたうぞんじましたなれど、父上の仰せにて、附添ふ者の監視嚴しく、この二月ばかりの間は牢獄に囚はれてゐる身も同然。………只今目附けの者の一寸の隙を窺ひ、やう／＼ここへ………。

頼朝。（獨りごとのやうに）入道殿は餘程御立腹と見える……

八重姫。餘りといへば父上の、慈悲も情けも知らぬ慘たらしい爲されやう。……このやうな淺間しい憂目を見るほどなら、いつそ、妾も共に稚兒の後を追ふてあの松川の淵へ身を投げて死たうござります。（さういひつゝ又さめざめと泣き入る）

頼朝。（少時無言）……短慮ぢや。

八重姫。いえ、短慮ではござりませぬ。……この初春の頃から、やう／＼物をいふ術も聞きおぼえ、一日ごとに智惠のつくことが眼に立ちて見えました。……病み患ふて死んだといふなら、又諦めの爲樣もござりませう。たつた二日前の朝まで、そのやうなこととは露知らず、父樣とゝさまと、御獵にお出ましの後を慕ふた、あのあどけない姿がまだあり／＼と眼に遺つて、忘れようとて忘れられるものではござりませぬ。……（さういつて、じつと顏を擡げて涙の眼に頼朝を見る）まあ、殿には妾が斯の樣に申して居りますのに、……稚兒を可哀うは思召されませぬ

か。

頼朝。(極度に悲痛なる面持ちにて顔をそ向けて涙を呑み居る。稍々あつて)いや、それがしとて悲しみは御身と同じこと。……さりながら何をいふにも甲斐なき流人の此の頼朝。……たか〳〵、いはぬはいふに彌勝る某が心中。この胸を八つ裂きにして苛まされる苦痛なるぞ。……(語尾次第に男涙に震へる)

少時間を置く。

八重姫。たとひ都の平家に憚りあればとて、手中の玉と寵愛みし稚兒の生命を亡きものにし、愛ばかりかあなた様に此の悲みを見せまする、生きながら地獄の苦み。神も佛もおはさぬ世か、非道な父上が怨めしうござります。……(暫時泣き入る)それにつけても懐しいは實の母上、その母上さへ今日まで無事でおはしたなら、この悲しい目も見ずに濟みませうものを。……(八重姫口說きながら愁歎する)

頼朝。(眉を顰め)その悲みは道理ながら、最早いはれな八重どの、何ほどいふても詮ないこと。……(八重姫を慰めながら、已れの言葉も自然に涙に濕める)さりながら、斯る慨きを見る上は、せめてと思ひし頼朝の武運も最早これにて盡きおつたわい……(男泣きに眼をしばたゝきながら思入れ)

稍々あつて八重姫は兩袖に涙を拭ひつゝ。

八重姫。まだその上に父上や母上の情けない仰せには、かねてより薄々話のあつた、江間の小次郎殿のところへ、直ぐにも嫁に行けと昨日から無理無體なる切諫……。

頼朝その一言を聞くより、腹立しげに一膝躙り寄りながら

頼朝。何といはるる。

八重姫。（面伏さうに）はい、慈悲人情の辨へといふものの聊かとても無き父上のことなれば……

頼朝。うむ……（憤恨に堪えざるものの體よろしくあり）……して、八重殿には異存なく、それに承諾ありしか。

八重姫。いゑ〳〵、何の異存のないことがござりませう。……（再び面を伏せ）……したが、一旦斯うといひ出したが最期、誰れが理を盡してお諫め申してもついぞ聽入れた例なきあの父上の一徹ゆゑ……。

頼朝。（憤然の面にて）據ろなく父入道の言葉に從ふと申さるるか……

八重姫。（返辭なく、唯泣く）

頼朝名狀し難き孤獨と絕望との感を凝乎と胸に抑包みつゝ、稍々暫らく思入れあつて、八重姫をはたと睨み付けつゝ

頼朝。うゝ（と、ひとりで肯づき）……二人が仲に生れし子の不幸を悲む、その涙の未だ乾かぬ内に。……頼朝よりも千鶴よりも、やつぱり父入道の一言が重いと見える……。

八重姫。（泣顏を擡げて）さら〳〵その樣な……

頼朝。このうつけ者めが。…………うむ、かくなる上は是非に及ばぬ。

いひつゝ、頼朝刀架の刀を捉み取つてつと立ち上る。

八重姫。（驚いて、伸び上り）あれッ…………何となされます。

頼朝。いふな。…………いであの祐親法師め………

此の時彼の心中には、一と思ひに不貞の女を斬り殺し、直ちに祐親入道の寢所に討入つて法師の素つ首を切り落さんとまで思ひ込んだるなり。

その時、正面中央の襖を押開いて安達藤九郎盛長妻春日慌てゝ駈け出でて頼朝と八重姫との中に割つて入る。

盛長。あゝこれ、佐殿には早まつたことをなされまするな。その御立腹は御尤も至極なれども……

春日。まあ〳〵お氣をお靜めなされませ。

頼朝つと立ち上つて、尚ほも前に進まうとするを、盛長夫妻膝を突きながら、伸び腰になつて諸手を上げ、懸命に頼朝を宥む。

頼朝。(彼は盛長夫妻を見るより前に八重姫に對したる時よりも一層涙を含みたる體にて)藤九郎、留めずに置け。

盛長。(手の甲で急いで男涙を振り拂ひながら、聲を絞つて)御道理でござります。その御心中、藤九郎お察し申上げまする。

春日。その御歎き、御憤りは妾共にもよう解つて居りますれば、まあ〳〵下に……。

頼朝やゝ心を鎭めたる體にて、少時の間齒嚙みをなしてきつと祐親の館の方を睨みながら思入れ。やがて少し氣を取り直したやうに、

頼朝。藤九郎、察してくれ、無念なわい。(と、どうと下に居る)

盛長。(少しく後に退がつて、兩手を突き、)は……よう御聽き容れ下されました。……それでこそ毎時に變らぬ我が君の御宏量……。

頼朝尚ほ憤恨に堪えざるものゝ如く、齒を喰ひしばりながら、

頼朝。いふに甲斐なき罪流の身なればとて、いかなる過去の報ひにて此の頼朝は斯かる淺間しき恥辱を忍ばねばならぬか。……

盛長。その御無念は御尤もとも、御道理とも。……君、當國にお下りありしより十八年の春秋を一日も御側離れず共に送りまゐらせし此の藤九郎にも、ほと〴〵お慰めの言葉もござりませぬ。……盛長とても入道の所業慮外千萬に存じまする。……さりながら（と、稍々聲を低めながら、傍に泣き伏したる八重姫の方に少しく氣を配り、暗語のやうに）大なる志有る者は小しの怨を忘ると申すこともござります。君には大事を心に懸けさせらるゝ貴重の御身體。

頼朝。うゝ（と肯づく）

盛長。其事を成就せずして、今私の仇を報いんとて、無慘々々身を亡ぼし、命を失ふこと愚かの至り。今一旦の御憤りから輕擧な事をなされては、結局、あれにおはします（と、佛壇の義朝の位牌を眼で指しながら）尾張內海の御危難と同じこと。

頼朝。（又無言のまゝ肯づく）

盛長。さりとは好んで死地に入るに異らず、後悔臍を嚙むといへども及ぶべからず。只今の場合、何事も御勘辨が第一でござります。

頼朝稍々久しく沈默。

頼朝。（やがて解込むやうに肯づき）盛長、ようい ふてくれた。何事も其方に任かすぞ。

盛長。はゝ。（頭を下げる）

藤九郎頭を上げて今度妻の方を顧み、低い聲にて、棄てぜりふ。

盛長。常に變らぬ我が君の御寛量感じ入る。

その時、盛長の妻は泣き伏す八重姫を痛はつてゐたが、

春日。（頼朝の方に向つて一禮し）それでわたくしもやうやうにこの胸が落着きした。（盛長に向つて云ふ。）

そこへ下手の緣側づたひに誰か入つて來る人の足音。一同氣を張りながら、耳を澄ます。

盛長。誰やら人の足音。…………姫には少しも早う彼方へ。（妻に眼で指圖す）

春日。（八重姫を扶け起し）さゝ早う〳〵。

八重姫盛長の妻に扶けられつゝ上手の緣側から奥に入る。その後へ祐親の二男十郎祐清下手緣側より立ち出る。

盛長。おゝ、誰れかと思ひしに祐清殿。

祐清。（一禮しつゝ盛長に向ひ）兵衛の佐殿には御機嫌いかゞでござりまするな。（といひつゝつと入り來る）

盛長。いや、格別のこともござらぬが……。

その間に祐清よき處に座を占む。

祐清。（容を改めて頼朝の方に向ひ）もはや、おほかた御寢に間もあるまじと存じながら、斯かる深夜に押して推參の儀、平に御容赦願ひ奉りまする………さて、此度、父入道老狂の餘りとは申しながら、便なき事をのみ振舞ひて、殿には定めし、祐親を始め一家の者共を御憎しみおはすことゝ存じまする。その御心中はそれがし私かにお察し申し上げまする。祐清、父に代つて幾重にもお詫び申し上げまする。（低頭する）……尚ほ甚だ恐れ入つたる次第ではござりまするが、父入道の胸中を察しまするところ、猶ほその上に或は殿の御一命にも、惡意を企てん所存と相見えまする。勿論、祐清に於きましては力の及ぶかぎり制止いたしますれど、萬一慮外のことゞも出來いたしては御申譯相成たぬ次第にござりますれば何卒當館をば、一刻も御猶豫なく、今宵の内に直ちに御立ち忍ばせらる

るやう存じまする。

頼朝、祐清が始終の言葉をじつと聴き、おはり、大きく肯づきつゝ、

頼朝。よくも申し聞かされたり。和殿が年來の芳心、頼朝心から嬉しく存じ申す。………今、われ一命を入道に思ひ懸けられては、袋の鼠も同然、いづくにか遁れんよしもなし。もとより身に過なければ、故なく自害すべきにもあらず。只運を天に任せて遁がれ出でらるるだけ遁がれ申さん。………(盛長に向ひ)藤九郎急いで用意をしてくれ。

盛長。はつ。(下手縁側より急ぎ退出す)

祐清。然らば御免。………御身恙なきやう、祐清蔭ながら祈り居りまする。

頼朝。おゝ、和殿も堅固に。………機もあらば又會はうぞ。

祐清下手より退く。正面の入口より盛長の妻春日立ち出で、

春日。火急の御出で立ち、さぞかし……。

頼朝。おう、心が急けば、……

春日、頼朝の身のまわりの世話をする。頼朝烏帽子を冠り、出立の裝束を附ける。

盛長武裝して下手縁より又立ち出る。つゞいて佐々木三郎盛綱同じ裝束にて出る。

頼朝。祐親法師め、肉を噛むといへども倚ほ飽き足らぬ奴ぢや。………が、この無勢にて生半事を起さば犬死は知れて居る。匹夫の勇に逸り、是れにて故なく入道の爲に命を果たさんこと、いひ甲斐なし。……今は頼朝たゞ一人にて竊に遁がれ出でんと思ふなり。其方達暫く此處に留まり居れば、館の者共、頼朝遁れ出でしと知る者なし。

盛長　はゝつ委細承知仕りました。

盛綱　君には疾く落ちさせたまへ。それがし盛長と兩人にて後に踏留まり、館の奴ばら討ち入り參らば、斬りまくつて、相果て申さん。

頼朝。うむ賴むぞ。やい、鬼武。……

鬼武下手庭より出づ。

頼朝。急いで大鹿毛を引け。

鬼武。はゝつ。

鬼武下手に入る。

雨の音聞ゆ。盛長暗き空を仰いで見る。

盛長。折柄雨中といひ、かゝる深夜に……

盛綱。君御一人にては……

頼朝。心元ないといふか……（はゝゝゝ、と笑ひ）氣づかひ無用。鬼武一人を具して行くぞ。

鬼武、下手奥より馬を引いて出る。馬は植込みの間より頭の方を半分見せてゐる。頼朝緣先より直ちにそれに乘り跨ぎ、一と足入れながら舞台正面中央に馬を進め鞭を揚げて天の一方を望みながら、

頼朝。南無歸命頂禮八幡大菩薩、義家朝臣が由緒を忽ちに捨て給はずば、征夷將軍に至つて朝家を守り神祇を崇め奉るべし。それすら猶ほ叶ふべからずば、伊豆一國が主となり、祐親法師を召捕り、今日の怨みを報ひ申さん。いづれも宿運拙うして、神恩に與かるべからずば、速に頼朝の命を召して、我が後世を救はせ給へ。……（鞍上に頭を下げて少時祈願を籠める。やがて頭を揚げ）……鬼武、引け……

鬼武轡を捉へる。盛綱盛長兩人一重を下りて膝を突きながら見え。

（靜に幕）

正續完成特價提供

國學院大學教授　松下大三郎先生編纂

正續 國歌大觀

歌集　索引　全部　既成

▼六月一日より申込順に配本

特價期限七月十五日

體裁

國歌大觀　二册二千百頁
續國歌大觀　二册千九百頁
兩書トモ四六倍版同形
背革角革天金箔入堅牢美本

特價

（書名）	定價	特價即拂	特價月拂	（送料）
國歌大觀	卅八圓	三十三圓	十七圓二回	一圓八錢
續國歌大觀	卅二圓	二十五圓	十三圓二回	九十九錢
兩書共	七十圓	五十八圓	十五圓四回	二圓七錢

此の兩書は何れも歌集索引の二部より成り歌集は古歌を網羅せる叢書たり索引は古歌の一句を知りて全歌出典作者等を索ね得る辭書にして國文學の研究上必要至便の一大寶典なり。其の內容は

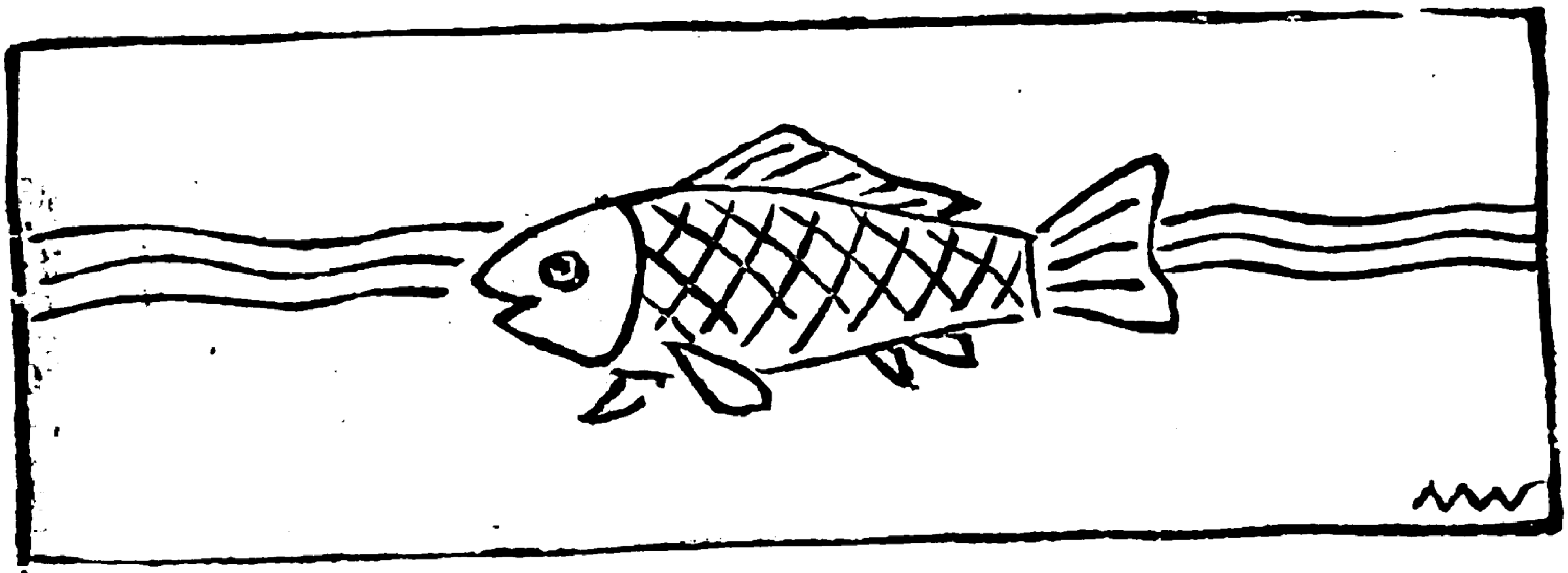
國歌大觀（古今集以下廿一代集、萬葉集、新葉集を校訂縮刻し別に物語日記草紙史書等に散在せる諸歌を集錄す。收容原本五十三部、歌數五萬首、古歌を縱と網羅す。

續國歌大觀（六家集、西行定家等六家）、卅六歌仙家集（人麿貫之等卅六家）、諸家集、大小歌人七十餘家）、古今和歌六帖、千五百番歌合、六百番歌合、其他諸種歌合等を收容す。原本百十三部歌數四萬一千、古歌を橫に網羅す。

今回續國歌大觀の完成を機とし國歌大觀にも大訂正を加へ壯麗無比の美本を作り正續完成記念として特價を以て江湖に見ゆ。國歌大觀の久しく絕版たりしは世の周知に屬す。此際御申込無くんば他日復好機無からむ。幸に此の憾を貽すと勿れ。

內容見本　御申越次第送呈

發行所　東京市小石川區大原町二〇　振替東京五九二二二番　**紀元社**



おみち

久保田万太郎

一

『だつて、お前……』

おみちは遮ぎるやうに『可笑しいぢやアないか、それは？』

『へえ。』

『變るわけはないぢやアないか、そこで？』

『ですから、わたくしも。――それを、わたくしも、不思議だと思ふんでございます。』

お仲は眼をみ張るやうにした。

『違ふと、で、はつきりその妹さんといふ人はいつたのかい？』

『さうなんでございます。――嫂(ねえ)さん、違つてゐるわ、櫛が。――いきなり頭髪(おたま)をみていつたんださうでございます。』

『でも、自分で……』

『それが、いゝえ、内氣な、音無しい。――近所でもそれで評判のお嫁さんでございますから。』

『…………』

『いはれてさうかと思つたんでございませうね。――それには、さういはれて、姑さんのところへその櫛を持つて行くと、違はアね、わたしの上げたのはそんな斑ちやアなかつた。――押してゐて自分に分らないだらうか。――さういはれましたんでは……』

『それは、まア、立つ瀨はないけれど。』

『嫁でも髪結さんへ聞きに行く外はございません。――聞きに行くと、それが、いま申した通りのけんもほろゝ。――うちで、いまゝでに、そんな間違ひのあつた例は一度もありません。――外さまへもしそんなことが聞えたら、堅いといつていたゞいてゐる自分の顔にかゝはる。――何を證據にそんな……』

『どうして、また、髪結さんが。――何もそんなふうにいはなくつたつていゝちやアないか。』

『それが、また、名代のいつこくな……』

『幾らいつこくだつて。――お客さまちやアないか、片つ方は。』

『へえ。』

『そんな、お前。――そのお嫁さんの方になつて御覽……』

『へえ。』

『必と、さういふ音無しい人なら、さきの氣を兼ねて、それこそ遠慮しい／＼さういつたに違ひない。』

『それだけなら。――そのさきがまだあるんでございます。』

『さきが？』
『わざ〳〵、そのため、占ひをみに行つたんでございます。』
『さうでもしなければ。——その場合ならわたしでもさうするよ。』
『いゝえ、それが、お嫁さんがぢやアないんでございます。——違ふんでございます。』
『違ふつて、お前？』
『髪結さんのはうが行つたんでございます。』
『どうして？』
『いゝえ、ほんたうに間違つたか間違はないか？——おたがひ同士いひ合ふより、みてもらつて、はつきり白いか黒いかを決めよう。——もし、それで、自分のはうが悪ければ。——間違つたといはれゝばどんな辨償でもする……』
『それぢやア、お前、まるで喧嘩ぢやアないか？』
『さうでございます。——で、みてもらふと、違つちやアゐない……』
『決つてゐらアね。』
『で、それを麗々と、うらない者にみてもらつてもそんなことはないといひます。——これでわたくしのはうの明りは立ちました。——そのおつもりで。——さういつて、わざ〳〵、下梳きを……』
『…………』
『それを、また、正直にそのお嫁さんが妹さんに話したんでございます。——髪結さんからかういつて來た、うらない者にみてもらつても違つてゐないといつた……』

『…………』

『駄目よ、嫂さん、そんなことといつたつて。――いつでも相手は聞きません。――幾らうらなひ者がさういつたつて違つてゐるものは仕様がないぢやアありませんか。それが何よりの證據ぢやァありませんか。――嫂さん、人が好いから、そんなことで直ぐごまかされる……』

『…………』

『それがまたおつ母さんの耳へ入ると、永年わたしがつかつてゐたんだよ。――それに、あれは、おばァさんの形見なんだよ。――どんな似たものをもつて來たつて一ト眼みれば分る。――おやまりでもすることか、さきがさう車を横に押すんぢやァ勘辨出來ない。髮櫛一枚だからつて打捨つちやア置けない。――すつかりもう腹を立てゝ……』

『けど、その髮結さんは。――始終そこのうちへ出入つてゐるんぢやアないのかい?』

『さうぢやアないんでございます。――古く出入つてゐる髮結さんが病氣になつて、梳き手ぢやアいけないんでそれでお嫁さんだけ近所のその髮結さんへ行くことになつたんでございます。――ですから昨今といへば昨今なんでございます。』

『でも、それにしても……』

『それは、髮結さんも、それまでにしなくつても。――もつと穩にしても事はすんだと思ひます。――けど、いくら髮結さんがさうしたからつて、側で妹さんやおつ母さんがそんな。――それぢやアお嫁さんの立つ瀨がなくなるぢやァございませんか?』

『…………』

『氣の毒でみてゐられなかつた。——しみ〴〵そのお狭さんといふ人がいつてをりましたが。——さうなんでございませうか？——そんなにも憎いもんでございませうか、お嫁さんが？』
『憎いと、さア、いふわけでも……』
『でも、あたりまへでそんな。——無理にいぢめるもんぢやアございませんか、それぢやア……』
『さうだけど。——いふと、でも、行懸り……といふのも可笑しいけれど……』
『お嫁さんにすると、もう泣く精もたくぼんやり……』
『姑といふものはね。』
と、いつて、遮ぎるやうにまた『小姑でもさうだけれど……』
いひかけて、そのまゝ、歎息するやうにおみちは口を閉ぢた。ついしてその話のなかに落込むのをはつきり感じた。——そのおつ母さんといふ人がお直の冷めたいまなざしをもつて自分のまへに立つた。
『三年……』
おみちには、しかし、もつと遠い昔のやうにしかこのごろ思へなくなつた。——去年まではつい昨日のやうにしか思へなかつたのだが……
しばらくしておみちはいつた。
『何時だらう、もう？』
『彼是もう十一時でございませう。』
『そろ〳〵、ぢやア、お晝の仕度にかゝらうかね。』

『へえ。』

お仲は針さしに針をさした。おみちは絲屑を拂ひながら、いつかまた淺い茂りに青い日のさして來た庭のはうへ眼を遣つた。

『降らないんでございますね、矢つ張……』

立ちながらお仲はいつた。

『空梅雨にきまつたね、いよ〳〵。』

『いつの間にか、あんな、青い空が出てまゐりました。』

『これで照込んだら……』

おみちは眉を顰めるやうにして『ざつといつもより、十日早い。』

『何がでございます？』

『いゝえ、熱さの來るのが……』

『嫌でございますね、ほんたうに。』

お仲もそれを思ひ遣るやうに『わたくしはもう、夏は……』

『お前のやうにふとつてゐてもさうだらうけど、わたしのやうに痩せてゐても。――痩せてゐればゐるで矢つ張こたへるよ、熱いのは……』

『さうでございますか？』

『去年はすつかりやられてしまつた。――思ひだすよ、だから……』

『お弱いんでございますね、お内儀さんは……』
『以前はそんなぢやアなかつたんだけれど。——年だよ、これも。』
『そんな、お内儀さん……』
　お仲はわらつた。
『さうだよ、いゝえ。』
おみちは誘はれないで『去年は熱いうち中まるで寢て暮した。——お前はまだゐなかつたけど……』
『まア、さうでございますか？』
　いひながらお仲は袂から襷を出した。『何にいたしませう、それより？』
『お惣菜かい？』
『へえ。』
『今日は、店の人たちのはうは、お肴のつもりだつたんだけれど。——遲くなるといけない、煮たりかへしたりする手間でお汁にして置かう。』
『何の？』
『お豆腐がいゝだらう。——葛をかけてね。』
『へえ。』
　水のやうに風がながれた。堀切のはうから來る下職の今朝もつて來てくれた白いあやめ。——假に手桶へ入れて椽さきに出して置いた、新鮮な、やゝ艶めいた、——匂はしく露を含んださまのその色どりが一しほあたりの空氣をあか

るく染めた。

『お店の御飯にしたら、わたし、山谷まで一寸お寺詣りに行つて來る。――とう〳〵先月は行かずにしまつたから……』

さういひながらおみちも立上つた。

二三時間あと、おみちは、山谷の寺の花屋の店に腰をかけて、向島の川のさきから廻つて來るはずの夫の濱吉を待つてゐた。

『お喜美さん……』

急におみちは體を延して。『こゝよ。――こゝ……』

呼ばれたお喜美は眩しい日ざしに眼をすくめた。

『あら。』

『分つた？』

『分りましたわ。』

わらつてそのまゝ涼傘をたゝんだ。『けど、ちつとも知らないで……』

『何をそんなうか〳〵……？』

『いゝえ、さうぢやアないんですけれど。』

いひながらおみちのそばへ寄つた。涼傘を立てかけて、お喜美は、ハンケチを出しながら『何て蒸すんでせう。――いまツからこんなぢやア……』

『ほんとうよ。』

『お一人、姉さん？』

お喜美はあたりをみ廻した。

『一人。』

『兄さんは今日は？』

『來るの、いま……』

『嫌な姉さん。』

『どうして？』

『一人かつていへば一人、兄さんはつていへば、いま來る……』

『だつてさうなんだもの。』

おみちは押へて『外から、いま、廻つて來ることに……』

『なら、はじめからさういへば。――人が惡い。』

お喜美は、もう一度、ハンケチを取つて額際を拭つた。

『けど、忙しいのにいつも。――すまないわね。』

おみちはいつた。

『そんなこと、姉さん。――月にわづか一度のことぢやありませんか。』

『その月にわづか一度がたいへんよ。――よく〱心にかけてでなければ。――わたしでも、お喜美さん、先月なんぞとう〱來損つて……』

『いゝえ、あたしのは半分は横着。――毎月、今日ときめて、一日はう〱のお寺の義理を足してあるくんですもの。』

『でも、日が？』

『だつておばアさんは十八日の、うちのおつ母さんは二十日。――二日の出入ですもの。――それと、森田のうちにも、その近所の佛さまがあります。――だから、みんな、おばアさんとこみで……』

『こみ？』

『いゝんですもの、それで。』

お喜美はわらつて『おつ母さんだつて、森田のうちの佛さまだつて、あたしにお詣りされたからつて何とも思ふんぢやアありません。――よく來た、といつてくれるのはそれこそおばアさんだけですわ。』

『わたしが死んだら、お喜美さん、お前だけはお詣りに來てくれるだらうね。――どうせ外のものは來やアしない。――始終おばアさんはさういつて……』

『えゝ。』

『そのたんびに、わたし。――辛かつたわ、側で……』

『でも。』

『どうしてかうなんだらう？　こんなにしてゐるのにどうしてこれが分らないだらう？　こつちのこの心もちがどうし

ておばアさんに通じないだらう？――性分だ、それがおばアさんのやまひだと斷念めても、どうしても矢つ張それが愚痴になつてね。――よくわたし、お喜美さんはうらやましい。――どうしたらあんなにして貰へるだらう。――ほんたうにしみ〴〵さう思つたわ。』

おみちは、笑つて、お喜美の顏をみた。

『いゝえ、それだけ姉さんには遠慮がなかつたんですわ。』

お喜美はそれに對へた。

『さうも思つたけど。――けど、さうばかりもいへないところがあつたわ。――憎かつたのよ、矢つ張……』

『それは姉さん。』

『いゝえ、憎くないまでも嫉ひだつたのよ、わたしが。――でなければ、幾ら義理ある仲だつて七つの年から手鹽にかけられたのに。――わたしにすれば生んでくれたおつ母さんのことなんぞ毛ほども思やアしない。――どうしたつて、普通なら、自然そこに情合がうつツて來なけりやアならない道理なんだわ。』

『それはさういへば……』

『いまだからいふけれど、お喜美さん、ほんたうにわたし、十六七の時分には何度川のそばまで行つたか知れないわ。――何の因果でこんな無理ばかりいはれる。――さう思ふといくら涙を禁めようと思つてもぼろ〴〵……』

『それはね、あたしでも。』お喜美は引取つて『いまだからいひますけど、隨分みてゐてはら〳〵したことがありましたわ。――あんなにもつけ〳〵いはなくつてもいゝだらう。――どうして、おばアさん、姉さんにあゝ……』

『わたしのそれは氣のきかなかつたこともいけなかつた。――それには、また、わたしの繼つ子根性。――知らないう

ち大きにそれが……』

『それはありませんわ。』

お喜美は遮ぎるやうに『そんなことは、姉さん……』

『いゝえ、おばアさんからみて。――あつたと思ふわ、たしかに。』

『けど、ちつともそんな僻んだ……』

『いゝえ、それが證據には。』

おみちはかぶせて『うちと一しよになつてから、わたしの、おばアさんのゐる間たゞの一度も二人で外へ出たことのなかつたのは、お前さんでも……』

『えゝ。』

『決してあれ、おばアさんがどうかういふんでさうしたんぢやアなかつたのよ。――外のことはどうでもそんなことをとやかういふおばアさんぢやアなくつて。――勝手にわたしたちのはうから、そんなことをしたら機嫌を悪くするだらう、餘計いけないだらう。――入らざる勘ぐりをして出なかつたのよ。――どちかすると、だから、ほんたうにお前はいくぢがない、たまには亭主に喰ツついて花見ぐらゐには行くものだ。――いまの若さでうちにばかりくすぶつてゐる莫迦がどこにある……』

『さうですかねえ。』

お喜美は吐息をつくやうにいつた。

『いはれると、それを。――なほそれを逆に……』

『これは姉さん……』
『それが、いゝえ、そも〳〵わたしのはうも間違つてゐたのよ。――何でも御無理御尤も。――さうばかり取つて眞つ直にみればいゝものを――みす〳〵さうしなければいけないものまで歪めて、わたし……』
『でも、姉さんはさう思ひなすつても。』
『僻みよ。――繼つ子の僻み。――つまりはそれよ。』
『けど。』
『だん〳〵、いゝえ、このごろになつてそれが分つて來たの。――すまないやうな、キマリの惡いやうな……』
『…………』
『何だつて、わたし。』
急に晴やかにおみちは笑つた。『どうしてわたしこんな話をし出したんだらう?』
『さうですわね。』
ともにお喜美も笑つた。
『戯談ぢやアない、こんなところで。』
おみちは外のはうに眼を遣つて『いゝえね、先刻うちで、近所のむづかしい姑さんをもつたお嫁さんの話をお仲に聞いてね。――いろ〳〵そんなことをいつてゐたんだから、それで必と……』
『よくありますわ、さういふこと。』
『けどね。』

『え〻?』

『時計もつてゐる、これより?』

おみちは氣をかへていつた。

『え〻。』

お喜榮は袖口をづらして『二時……七分ばかりまへ。』

『遲いわね。――何をしてゐるんだらう?』

『兄さん、どこから?』

『い〻え、向島の弔問のそばから。――疾うにもう行かなければならない病氣見舞、でね。――外へ行くなら、ぢやア、かへりに俺もそつちへ廻る。――さういつてわたしよりもさきへうちを出たの。』

『ぢやア、直ぐにもうみえるでせう。――弔問なら渡しをわたれば……』

『お喜榮さん、お靜さん……』

と、さぐるやうにおみちは顔をみて『これから、ぢやア、外のお寺へまだ……?』

『い〻え、いつもはて〻がふり出しなんですけど、今日は、朝、下谷まで用に行つたついでに菊屋橋で電車を下り、うちのお寺へさきに行つて、それから森田のうちのお寺へ廻り、一度うちへかへつて改めてまた出直したんですの。――ですから、今日は、おばアさんところが一番あと。――それで、時間も、いつも朝と決つてゐるのがこんな遲くなつて……』

『道理で、今日は、いつも上つてゐる花が上つてゐないと思つた。』

『さうでせう。』

『と、今日は、あとはもう何にも？――それともまだどこかへ……？』

『あたしですか？』

『あゝ。』

『いゝえ、今日はもう綺麗に用なし。――あたしの今日は公休日ですもの。』

お喜美はわらつた。

『ぢやア附合はない、わたしに？』

改めて、また、さ云ふやうにおみちは相手をみた。

『どこへです？』

『どこだかそれはまだ分らないの。――うちがまだ來なくつちやア……』

おみちは浮いた感じに『久しぶりで、今日、出たつひでにどこかへ連れてつてくれるといふの。』

『ぢやア、あたしは……』

『姉？』

『だつて、姉さん、折角……』

『折角？』

『えゝ、兄さんの折角さうといふのに……』

『だから行くのよ。――行くから一しよに……』

『お邪魔ですわ、あたしが行くと。』

ヅケリと、わざと、お喜美はさういつて笑つた。

『お邪魔よ。――それはさうよ。』

おみちは怯まないで『けど、いゝの。――お前さんならいゝの。』

『姉さんはよくつても……』

『うちだつて大丈夫。』

『いゝえ、あたしが……』

『どうして？』

『獨身ものでごいます、わたくしは。』

『だから？』

『…………』

ついとお喜美は立つて『お詣りして來ますあたし……』

『戯談退けて……』

背後からおみちはいつた。『行つてくれない、ほんたうに？』

『えゝ……』

『そんな煮え切らないんでなく。――いふと、實は、うちと二人ぢやアどこへ行つたつて面白くも何ともない。――氣に入らなければ貴らこつちから話しかけたつて返事一つするんぢやアなし……』

『さうですかしら、兄さん？』

『たのむわ。だから。』

『それは行つてよければ……』

『必と喜ぶわ、うちも。――好きなんだから、お前さんが。』

『とんだでも飛入……』

お喜美はわらつて『それにしてもお詣りして來なければ。』

『早くして來ればいゝ。』

『けど、どこへ行つたんでせう、花屋のお内儀さんは？』

土間の外へお喜美は出た。

『先刻までそこにゐたんだけど、掃除して……』

とも〴〵立つておみちも外へ出た。朝、あんなにも深くかぶさつてゐた雲はさういつてもどこへ消えたのだらう？澁く、明るく、したゝるばかり眞つ青に擴つた空のいろ。――そのカツとした照返しが、白け切つたあたりに、いつそそれが淋しかつた。――日の光もともに身じろがない……

『……いゝでせうか、默つてもらつても？』

『いゝとも、お前さん。――始終來るんだもの。』

『空巣覗ひ……』

お喜美は並べてある線香の束をとつて火をつけた。

『持つてあげる、それは……』

さういつておみちは涼傘に手を出した。

『でも、姉さんは？』

『行くわ、わたしも。』

で、お喜美と一しよに、おみちは、もう一度お直の墓のまへに立つた。――お喜美の額くうしろで、自分の先刻上げた濃いろのまだ乾かない樒に、お喜美のいま上げた線香のしづかに尾を曳いて烟るのをみまもるとなしみ守つた。始終は自分もこゝへ來る。――さうした感じ。――ついぞ思つたこともないことがおみちの胸を掠めた。――といふのも草の匂のいたづらに濃く、あたり近所、どこにも墓の間に人かげがなかつたから。――どこかに車井戸の軋る音がした。

『すみません。――お待遠さま……』

お喜美は墓のまへを離れた。

『……けどね。』

ふいとおみちはお喜美をふり返つた。――寺を出てまた二三時間、おみちは、お喜美と喜吉と三人、いつにもみたことのない活動寫眞を出來ごゝろにみに入つたが、根つから寫眞の冴えないのと濕氣の強いのとに飽いて、半分でそこを出た。そのあと、池のまはりだの、茶店の中だのをあてもなくぶら〳〵した。――おみちにしても、お喜美にしても、また喜吉にしても、「土地つ子」として必要では始終往來しつけてゐるそのあたりながら、改めて、さて、年に一度

でもさうした遊山あるきをしてみると、眼に觸れ、耳にふれるものすべてがいまさらのやうに珍らしかつた。ことにおみちにすると、子供の時分からみ馴れたなじみの光景。——いへば憂いこと辛いことの思ひ出にばかり滿ちたそれらの光景を、夫といしよに、以前にかはるいまの仕合さでみ直すことの出來るのがわけもなく嬉しかつた。

『わたしは、まア、よくこの橋から落ツこちた夢をみたものよ。』

蓮池の上をとほるときおみちはいつた。『その時分は、まだ、こんな石のぢやアなく、木の……』

『覺えてゐますわ、あたしも……』

お喜美もいつた。『低い橋ですぐ下が水。——手をのばすと屆くツ位の……』

『さうよ。』

おみちはうなづいて『春藤さんといふ鍼醫さんがゐてね、宮戸座のそばに。——その人を呼びに行くのに始終とほつたもの、こゝを……』

……お直の癪はその人の鍼でなければいけなかつた。が、名人かたぎといふか、幾ら使を出しても、その人、氣に向かなければ決して出て來なかつた。——不思議とそれがおみちだと好かつた。

『お前が來たのなら行つてやる。』

どんな無理なときでも來てくれた。——從つてそこへ行く使は、いかに店の人たちの手の空いてゐるときでも、おみちの役と決つてしまつた。——十四五から丁度二十一二まで。——滋吉といふ養子が來てからもなほそれはつゞいた——。そのうち春藤さんが死んでくれた……

藤棚の下を拔けて仁王門のはうへ主人は道をとつた。無口な滋吉は構はず二人よりもさきへあるいた。——日ざしは

まだ怯げないが、栗ざくらの暗い梢に、さすがにもう空は先刻のやうな艶を失ひかけてゐた。――雨の日だからそれほど人は出てゐなかつた。

『……けどね。』

植込の、袖にさはる八ツ手の、冷めたい、しつとりとした感じ――ふいと、おみちは、そこでお喜美をふり返つた

『え〻?』

お喜美は顔を上げた。

『あ〻いふことの。――先刻のやうなあ〻いつたことのいへるのもね。』

『………………?』

『い〻え、おばアさんのこと……』

『え〻……』

お喜美はうなづいた。

『わづか一月か二月半だつたけど、どつと寝ついてからすつかりあ〻おばアさんの氣が解けて、片時ゐなくつても、おみちは何うした、呼んどくれ、おみちを。――行くと、額むからそばにゐておくれ、お前がゐてくれないと心細くつていけない……』

『さうでしたつてね。』

お喜美はしみ〴〵と『ほんたうに、そのとき、ゐなくつてあたし……』

『お喜美は可哀想だ、悪い亭主をもつたばかりに苦勞する。――死ぬ前の日までそれはいつてゐたわ。――死んだら知

らせてだけはやつておくれ。神戸なんぞにゐるんぢやアとても來られやアしまいけれど。――さういつてね。』

『電報をみたとき、ほんたうにあたし、夢のやうな氣がしました。――眞逆と思つて。――でも、そのとき、無理をして出て來たばかりに、かうしてまた東京にゐられるやうになつて……』

『おばアさんがさうさせたのよ。』

『あたし、もう、さう思つてゐます。――でなかつたら、あたし、いま時分どこにどうなつてゐるか分りやアしません。』

『でね……』

おみちは話をもとへもどした。『無理ばかりいつていまゝではすまつた。――お前だから我慢して聞いてくれたんだ。――しみ〴〵わたしは禮をいふよ。――呼吸を引取る朝、看護婦を階下へ下して、わたしだけ枕許へ呼んで、何をいふかと思ふとおばアさん、泪をもう一杯眼に溜めて……』

『…………』

『さういはれたときのわたしの心もち……』

『…………』

お喜美は默つてうなづいた。

『丈夫にしてもう一度孝行がしたい。――さう思つたわ、わたし。――ほんたうに、わたし……』

實際、その一瞬に、三十年にあまる艱苦は夢のやうに消えた。――思ふと、どうかした拍子にそれを思ふと、いまでもおみちは目蓋のうらの熱くなるのを感じる……

『金田へ行つて飯をくふことにしよう。』

濱吉は後れた二人のために立留つた。

『えゝ。』

おみちはこたへた。――どつちかといへば元氣よく……

淺草での、古い、名代なその鳥屋は仲見世を横に切れたところにしづかな店構へをもつてゐた。手入のよく屆いた、しつとりした、下草の淸々しい庭に小さな座敷が幾つも離れて立つてゐる。――間もなく、三人は、三疊ほどの廣さのその一つに落着いた。

『綺麗ですわね、いつも……』

感嘆するやうにお喜美はいつた。

『何が？』

『いゝえ、このうち。――いつ來ても塵つ葉一つ落ツこちてゐないで。』

『大へんだよ、掃除が……』

おみちはさういつて光線を漉す簾に眼をとめた。『それより、もう、すつかり夏の趣向で……』

『ほんたうに。』

『どうしたらう、あの老人は？』

急に濱吉はいつた。『店さきにすわつて、いつも子供に有難うございます。――歸つて行くお客にいろ〳〵心づけの禮をいつてゐたあの……？』

『あの人はもう疾うに亡りました。』

――おみち――

お喜美はいつた。

『死んだ?』

『えゝ。』

『尤も、こつちは、よつぽど以前に來たつきりだから。』

濱吉は笑つて羽織を脫いだ。

『あれ、御主人だつたんでせう、こゝの。』

『さうだつたらうね。』

『いま帳場にゐた、あの、ハイカラに結つた女の人。――あれが娘さんなんでせう、こゝの……』

『よく知つてるわね、お喜美さん?』

濱吉の羽織を手許にとりながらおみちはいつた。

『えゝ、せんによく、森田がこのうちが好きで來たもんですから。』

お喜美は流石にさびしく笑つた。

『どこにゐるんだね、いま?』

それを救ふやうに濱吉はいつた。

『森田ですか?』

『うむ、市蔵さん。』

『何ですか、いまは上海とかに。』

『上海？』

『えゝ。――けど、それも人の噂で、去年からまるで消息がないんですから……』

小女が炭の香のする鍋臺を運んで來た。つゞいて銚子だの洗だのをともに載せた誂へものを持つて來た。

『あとをもつと持つて來てくれ。』

かへつて行く小女に濱吉はいつた。――その間に、手早くお喜美は、火の上に鍋を懸けた。

『やるわ、わたしが……』

おみちはいつた。

『いゝえ。』

お喜美は箸を割つてかしわの皿を手許にとつた。

『ぢやア、わたしはお酌。』

おみちは銚子を取上げた。『すこし熱いかも知れませんわ。』

『頃合だ。』

濱吉は一トロ飲んで猪口を下に置いた。

『さア、お喜美さん。』

『あら、あたしは……』

『飲めるんぢやアないの、お前さん。』

『でも、このごろは……』

『聲を出すのにいけないかね、矢つ張？』

濱吉はいつた。

『いゝえ、そんなことはありませんけれど。』

『ぢやア飲むさ。』

『では、一つだけ……』

『つまらない遠慮してゐる。』

おみちはいひながらお喜美の猪口を滿した。

『今度は姉さん……』

猪口を置くと、お喜美は、おみちから銚子をうばつた。

『戯談……』

突ッ放すやうにおみちはいつた。

『あら、そんなこと、姉さん……』

『だつて飲めないんだもの、わたしは。』

『でも一杯ぐらゐ。――ねえ、兄さん。』

『すこしは飲んだはうがいゝんだ、お前なんかは。』

うなづくやうに濱吉はいつた。

『さうかしら？』

おみちは素直に『ちやア、お喜美さん、すこオし……』

『大丈夫ですわ、』

『あら、こんなに一杯。』口をつけておみちは眉を顰めた『苦い……』

お喜美も、濱吉も、それをみてわらつた。

『けど、どうしてわたし、去年からこんなに弱くなつたでせう。』

おみちは猪口を置いて『今日でも、もう、あれツくらゐしか歩かないのに……』

『くたびれました?』

『くたびれたつていふより、元氣にかはりないんだけれど、へんに體がぐた〳〵して……』

『重石がなくなつたからだ。』

濱吉は猪口を取上げた。

『重石?』

『湯治にでも行くこつた、いまのうちに。——去年のやうに寢られちやア事だ。』

『好ございますわね、青葉で。』

お喜美は口を挾んだ。『いまですわ、湯治に行くんなら。』

『でも一人ぢやア?……』

おみちはいつた。

『行くさ、わたしも。——一週間や十日なら店のさしくりのつかないこともない。』

『でも、何年にも汽車に乘つたことがないから……』
『だから行つてやるんだ、一しよに。』
『でもね。』
『行つてらつしやいな、姉さん、新婚旅行に。』
『新婚旅行……』
濱吉は笑つた。『口が惡いね、お喜美さんも。』
が、おみちには笑へなかつた。夫婦になつて十年。——いまゝでにまだ二人きりの旅に出たことのないおたがひだつた。……『煮えて來たよ、そろ〳〵』
濱吉はさういつて鍋に箸を入れた。

三人の「金田」を出たとき外は星のあきらかに晴れた晩だつた。——仲見世の灯影のなかをあるきながら、おみちは、湯治行きの決心を固く決めた。（十五年五月）

「木から下りて來い」

宇野浩二

「わたしにね、死んだら是非とも骨を拾つてほしいといふ人があるのよ。物好きな人があるもんでせう？………」

道を歩いてゐる時に、突然女がこんなことをいひ出した。その調子に、この女の不斷のはき／＼した物の言ひ振と違つた、何か言ひ澁るやうな、持つて廻つたやうなところがあつた。つまり差向ひになつてゐる時には言へないやうなことで、それをわざとこんな暮れ方の混雜した町を歩いてゐる時を選んで、いひ出したやうにも思はれるのであつた。

「なに？」と男はわざと輕い調子で聞きかへした。「骨を拾ふつて、死んだ時のことかい？　それで君の骨を拾つてやらうといふのかい、それとも君に骨を拾つてくれといふのかい？　何にしても、君に骨を拾つてもらふ約束なんか……實にたよりない話だね。」

「さうよ。わたしだつてさう思ふわ、」と女は先づ男の笑談に報いておいてから、又

先の言ひにくさうな、てれたやうな調子に戻つて、「だけど、本當なの、それが。わたしに、何が何でも、死んだら骨だけは拾つてほしいといつてる男があるの。……」

「どういふんだい、それは？　あんまり色つぽくない話だな。しかし、どうせ君のことだから、何か色つぽいことに關係してゐる話なんだらう？」

「まア、いや。君のことだからはひどいわ。相變らず口が惡いのね。しかし、まあさういふことなのよ。つまり、わたしをそれ程に思つてくれてゐる人があるといふ譯なの、」と女はそこで又幾分かきまり惡さうな口調になつた。

「それにしてもをかしいな、」と男は女になるべく極り惡がらせないように、話を輕く運ばせようとして、輕い調子で、「惚れてゐるといふのと、骨を拾ふといふのと、どういふ關係があるの？　一體どういふんだよ、分らないなア。そして誰なの、その骨を拾つてくれといふ男は？　まさか君のハズバンドぢやないんだらう？」

「いやよ。そんな人ぢやないわ。そのね、相手の人といふのが面白いの。……知つてる？　不二の家十三郎といふ役者……？」

「不二の家つて、あの不二の家——喜劇の？」と男は今までのからかふやうな態度を改めて、急に何か思ひ當つたことがあるらしく、「不二の家十三郎……君はどうして十三郎を知つてゐるの？」と聞きとがめるやうにいつた。

「えゝ、知つてゐるわよ、隨分前から、」と女は男の聞きとがめたやうな調子には頓着なしに、「あんたよりもずつと古くから知つてゐるわ。」

「それやをかしい。君は今一體幾歳だい？」男は女が何かいはうとするのを抑えて、「知つてるよ知つてるよ、二十二だらう。ところで、十三郎なら……十三郎は幾歳だと思ふ……？　かうッと……」と彼はちよつと胸算用をするらしかつた。

「えゝ、さうね。もう四十五六よ、」と女は男の先を越していつた。

「いや、さうはならない。僕より七八歳しか上ぢやないから、」と男はいつた。「……なる程、よく知つてるね。さうだよ、四十四――五六にはならないかも知れないが、四十三四だね。」

「さうよ。」

「それ見給へ。僕はあの十三郎といふ男とは、僕の十歳位の時の友達、といふと何だが、その時分から知つてゐるんだよ。僕の十歳の時だもの、君なんか未だ生れてなかつた時分ぢやないか？」

「それがとうしたの？」

「だつて、君は僕より古くから十三郎を知つてるといつたぢやないか。」

「あら、いやだ。そんなことをいつたんぢやないのよ。わたしがあんたよりも十三郎の方を先から知つてゐるといつたのよ。」

「さうオか。……それにしても、をかしいな。どうして君はあんな男を知つてゐるんだい、どこで？　やつぱりあの男にしぼられたんだな？」

「ところが、その反對よ、今話をするわ、」と女は調子づいて、辮で、並んで歩いてゐる男を次第に押し加減になつて、歩きつゞけながら、「しかし、わたしより、あんたがどうしてあの人を知つてゐるの？　その方が餘つ程變だわ。それから話してよ。」

「僕の方は何でもない。子供の頃の、まあ友達といつた位のところだよ。いや、その外にも、あの男のことに就いては、ちよい／＼耳にしたり何かすることがあるんだが、それよりも、言ひ出しべの君から話して見ろよ。」

二人ともこの會話の間にまだ一度も顏を見は合はなかつた。もつとも、道を歩きながらの話だつたから、顏を見合つて物を言ひ合ふことが出來ないのでもあつた。が、それと共に、さういふ顏を見合はさないで話をする機會をつかまへて、女がそんな話を持出したとも見ることが出來た。彼等の短くない交際の間に、その身の上の秘密（は大袈裟だが、面と向つて言ひにくいことで、そして言ひたいことや、言つておかねばならぬこと）は、大抵この道を歩きながらになされた場合が多かつた。男も女も當世風に背が高くて、大路で、並んで歩くのに恰好がよかつた。が、彼等の會話の内容が迫つたものでないやうに、彼等が大路で歩いて行く先も、別に迫つた用向がある譯ではなかつた。恐らくカフエーにでも行くか、食事にでも行くか、歸つて行く女を男が途中まで送つて行くか位の用事に違ひなかつた。男も眼鏡をかけ、女も眼鏡をかけてゐた。恐らく戀人同志といふよりは、氣の合つた一對の夫婦か、もつと皮肉に見るものには、兄妹かとも思はれたかも知れない。さツさツと風を切るやうにして夕暮時の、電車通に間もなく出る裏町の雜踏の中を、彼等は前を歩いて行く往來の人々を、順々に少しづゝ追ひ越して行く程の早さで歩いてゐた。

「話すわよ、」と女はいつた。「しかし、これはハズも誰も知らないのよ。」

「ハズ以前のことか。しかし、ハズは僕のことは知つてるんだらう。もつとも知られたつて何でもないが。何しろ、ハズよりは僕の方が君とは古い親友だからね。早いものだ、君と知つてから、もう五六年にもなるかね。」

「さうねえ。」

「それでまアよくお互に無事だつたね。」

「感心々々。」

ふと、男は今かうして二人が歩いてゐるのと同じ要領で、この女が別の男と歩いてゐたのを、自分が傍観者として

たことがあつたのを思ひ出した。それは東京でなく、大阪の土地で、一年餘り前のことだつた、男が偶然その町へ旅行した時、或夕方或町角で連れを待合はす爲に立つてゐると、そこへこの女が見知らぬ男と、彼の立つてゐるすぐ目の前を、今彼等が歩いてゐるのと同じ恰好で、何か頻りに話しながら通り過ぎて行くのを見たのだ。この女と歩くには、誰も皆大跨に歩かなければならない。考へて見ると、その時だつて、第三者に見えたやうに、彼等は重要な話をしてゐた譯ではなく、又火急な用事で歩いてゐたのでもなかつたのだらう。しかし話に夢中になつた時の癖で、矢張り女の方が連れの男を押し氣味で寄り添つて歩いてゐた。後で聞いたところに依ると、その時の男が彼女の約婚者で、それから半年程後に夫となつた男なのだから、或は何か重要な相談でもしながら歩いてゐたのだつたかも知れない。

が、その一週間ほど前に、彼は東京でこの女の訪問を受けたことがあつた。無論、彼女はいつも別に用事があつて來る譯ではない。その時の話の、矢張り互に不注意に聞き逃す程の言葉の中に、近いうちに神戸の「をぢさん」のところへ行くといつてゐたことがあつた。だから、考へて見ると、彼がそれと同じ頃に不意に用事が出來て大阪へ來合はしただけのことで、そこで彼女と會ふのに不思議はないのであるが、それにしても彼と彼女とのやうな變則な交際の間には、よくもそんな偶然な、突飛なことが起るものだと思はない譯に行かなかつた。彼のすぐ目の前を、女が彼に近い側で、連れの男が彼から遠い側で、二人の男女がさつさと歩いて行くのである。熱心に話し合つてゐるものだから、近い方の女の視線は幾分連れの方に向つてゐるので、却つて傍に立つてゐる彼に氣がつかなくて、向側を歩いてゐる連れの男の方の視線が、女の方を越して、こちらに立つてゐる彼の方に氣がついたらしかつた。が、彼はその男とは顔馴染ではなかつたので、そ知らぬ顔をして目を反らさうとした。が、向うの男の方は、ふと彼の顔に覺えのあるやうな表情をして、通りすがりに、彼の方に注目して行つたので、彼は急に狼狽を感じた。

「はて？」と彼はあべこべに注目される位置に立つたので、くるりと彼等の方に背を向けながら、「變だな。もしかすると、あの女はあの男に——さうだ、あの男が此頃時々彼女が一所に町を散歩などする時に話に上す、あの女に求婚してゐるといふ男なんだな。さうだ、神戸にゐるとかいつた、何でも神戸のをぢさんが彼女とその男とを結婚させようと望んでゐるとかいつた、あの男だな。何だ、神戸へ行くといふのはあの男に會ひに來るためか。あまりその結婚に氣が進まないやうなことをいつてたが、この樣子で見ると、さうらしくもないな。しかし、中々立派な男だ、俺よりも若くて、そして美男だ、あれなら似合ひの夫婦だ。さうだ、あの女のことだから、あの男に何といふことなしに俺のことを話してあるんだな。ついでに俺の寫眞なども見せたのだらう。見せない迄も、誰にも見つかるやうな所にしまつて置くだらうからな、あの女のことなら。俺のやうに、顏に特長のあるのはよし惡しだ。あの目付で察しると、あの男はたしかに俺が誰だといふことを知つてゐるぞ。しまつた。」

彼はかう思ふと、後から彼等に見られてゐるやうな氣がして、首筋がむづ／＼するのを感じた。わざと口笛などを吹いて、ステツキをおもちやにしてゐると、果して、ぱた／＼と女の近づいて來る氣配がした。女は行き過ぎてから連れの男に敎へられたらしいのだ。驅足で彼の目の前に現れて？

「まア、ひどい人ね、」といきなりいつた。自分のきまりの惡さを隱さうともして、わざと快活な調子を用ひてゐるのでもあつたらう。「あんた、わたしが前を通つたのに知らん顏してるなんて。知つてたんでせう？」

「知つてたさ。しかし、つひ此間東京で會つたばかしで、一週間も經たないうちにこんなとこでだらう。君らしいとは思つたが……それに連れがあるやうだし……」といつて、彼はちらと目を放つて、彼女の連れが彼女に置いてきぼりにされて、どこかゝら嫉妬の目でこちらを睥んでゐるだらうと氣になつたので、その方角を物色して見たが、彼と似たり

寄つたりの氣の弱い人と見えて、どこかの目につかぬ軒の下にでも立つてゐるのだらう、見當らなかつた。

「あんたいつ東京へ歸るの？」と女も氣が急ぐらしい樣子であつた。

「もう明日か明後日のうちに歸るつもりだよ。」

「さう。わたしもその時分には歸るわ。そしたら行きますわ。ぢやア、ね？　さよなら。」といひ捨てゝ、女はそわそわと元の方へ駈足で歸つて行つた。

が、それから五分と經たないうちに、男も今會つた女のことを、女も亦今會つた男のことを、忘れたといふ譯ではないが、忘れるべく餘儀なくされた。といふのは、女には今一所に歩いてゐた連れの男が待つてゐたし、男にも先からその町角で待ち合はしてゐた連れが歸つて來たからだつた。男の連れといふのは別の女で、彼の現在の情人なのだ。

しかし又、兩方ともそれ切り忘れてしまはなかつた證據に、それから一週間ほど後、果して女は、大阪の町角での約束通り、東京の男の下宿を尋ねて來た。男は仕事の都合で、二三年前から、自分の妻子のある家の外に、或下宿屋の一室を借りて、毎日そこへ通つて來る習慣になつてゐたのだ。

「この間は失禮しちやつたわね。」と女は男の部屋に入つて來るなり、持前のがらがらした調子でいつた。

「こつちこそ大いに失禮しちやつたよ。」と男の方でも女に負けない快活な調子で應じた。

男は元來そんな快活な性質ではないのだが、この女と面と向ふと、いつもそんな風になるのが常だつた。さういへば、女の方にしても、この男に會つてゐる間は、殊更快活を裝ふところがあつた。さういふ風にでもしなかつたら、二人はもうとつくに、泣いたり笑つたり氣むづかしくなつたりするところの、普通の戀仲になつてゐたかも知れないのだ。もつとも、この時の會話は殊に普通の調子で進めるには、兩方とも少し氣まづい材料であつたからだ。何故といつて、女

には男に對して可成りばつの悪い事件だし、男の方からすると、餘り眞面目に持出すと嫉妬するやうにとられるのが厭だつたからだ。で、出來るだけ輕く、女の顏を見ないようにして、

「あの人かい、此頃君が時々いつてた、君に結婚を求めてゐる人といふのは？　中々立派な紳士ぢやないか？」

「まアね。」

「まアね、ぢやない。中肉中背の――あれなら申分ない好男子だよ。あの男を振つたら、女冥利に盡きるよ。」

「ぢやア、あなたは男冥利に盡きないの？」女はついかういつてしまつて、眞赤になつた。が、殆ど一所に男も眞赤になつた。

こんなことがあるから、この二人のかういふ際どい會話は歩きながらすることに限るのだつた。

それといふのは、以前――つまり五年前に彼等が初めて知り合つた當座に、女が本眞劍にこの男に惚れたことがあつた。その頃、女は東京の或山手町で藝者をしてゐたのだ。それを男が女の戀を受けそこなつたのだといふことが出來る。それには、最初女が男に惚れた程、男が女に惚れなかつたといふことも、一つの理由だつたに違ひない。それに、彼等の會つた期間が短かつたといふことも、その理由のうちに數へられるだらう。女は男と初めて會つた時に一ケ月ばかりゐて、急に遠方へ行くことになつたのだつた。そこで彼女が藝者をしてゐる間に、男と二人切りで會つたことは一度もなかつた。或晩、いつもの通り二三人の友達と一所に來てゐた男を、女が廊下に呼び出して、

「わたし、もしかすると近いうちに遠い所へ行かなければならないの。」といつた。この時男は初めてこの女の眞面目の一面を見たやうに思つた。「といふのは、多くの藝者たちの中でもこの女はおしやべりで、快活で、どこか女學生らしい、お轉婆なところを賣り物にしてゐた。それでゐて、何とかいふ角力取の後を追駈けてゐるといふ評判さへ持つてゐ

な。現に、男は四五日前、この女がちよん髷を結つた、黒紋付の羽織を着た大男と歩いてゐたのを見たことがある。そんな一面ばかりしか見てゐなかつた女が、この時は子供々した、悲しさうな、又恥かしさうな表情をしたので、

「遠い所へなんか行かない方がいゝな」と彼も一寸恥かしさうな表情になつてからいつた。「遠い所つて、どこ？　藝者を止めて？　いゝ人とでもかい？」

「そんなぢやないの。それについてあなたと二人切で一度話しをしたいことがあるの、」と女は眞面目な表情でいつた。眞面目な顔をすると、十八歳で、美人だつたから、一層可愛らしく見えた。「あなたと話したら、行かないですむかも知れないの。ね、だから、一人で明日でも來てくれない？」

が、男は矢張り一人で女に會ひに行く勇氣も興味もなかつたので、つひそのまゝになつてしまつた。そして、行く時は相變らず友達と一所に出かけた。すると、四五日後に、女は又男を廊下へ呼び出して、

「いよ〳〵わたし近いうちにお別れだわ、」とこの前よりも一層悲しさうにいつた。

「僕、一人で來よう來ようと思ひながら、いつも連れが出來るもんだから、」と男は辯解しながら、「ぢやア、もう一人で君に會ひに來ても駄目かい！」

「えゝ、もうどうしても行かなければならないことになつたの。初め神戸のをぢさんのところへいつて、それからをぢさんと一所に行くの、青島へ。」

「青島はなる程遠いね。」

「もう明後日か、明後々日位よ、あたしのゐなくなるのは、」と女はいつた。「ね、だから、是非一ぺん來て下さいな。」

「さうなると愈々極りが惡いな、」と男はてれ隱しに、わざと笑談らしくいつた。

それで、男は一度一人で行つてやらうといふつもりになつたり、又何か後目たいやうな氣がしたりして、結局いつものやうに友達と行くことになつたりするうちに、或晩、到頭女がその町から消えてしまつた。一時、その女の行方に就いて、男に疑ひが懸つた位だつた。といふのは、女は抱え主の家でも始終男の名をいひ暮してゐたからである。その時、女の一番仲のよい朋輩藝者があつて、その女が男の潔白を證明してくれていふのには、實はこの十日程前から、彼女が彼に手紙を出すのだといつて、一日に一度づつ手紙を書いて、切手を貼つて、いつでも出せるやうになつてゐるのを、その女のところへ持つて來ては、出さうか出すまいかと相談したり、思案したりした末に、結局出さずに預けて行つたのが、八本もたまつてゐるといふ事實に依つて、彼等の間に手紙のやりとりさへなかつたといふことが知れて、彼の嫌疑が晴れたのであつた。

ところが、女がその町に見えなくなつて翌日、男のところへ、初めて女から手紙が來て、いふのには、到頭あの家を出た。後始末をする迄、どうか自分の在所を誰にもいはずにおいてほしい、ところで、愈々出發する迄四五日間があるから、その間に是非どこかでお目にかゝりたいといふのだつた。

そこで、男は二三度女と會つた。それも、今のやうに家の外に下宿の部屋を借りてゐるといふやうな便利がなかつたので、幸ひ友達に一人者で婆を置いて家を持つてゐたものがあるに情を明かして賴んで、そこで會つた位のものだつた。そんな所で會ふと、女はすつかり面目が變つて、いつも娘らしく手を膝の上においてゐた。そして別に話といふ程の話もしなかつた。だから、男はいつも困つて、友達に一所になつてもらつて、三人で町のカフエーなどに行つて、そして別れたものである。

女は二年したら乾度歸つて來るといつて出發した。が、それから三年歸つて來なかつた。この間が少し長過ぎた。初

の一年程の間、女は月にどんなに少なくても二度は手紙をよこした。その手紙には彼女の剽軽な一面と、眞面目な一面とがよく出てゐた。どれ程の教養のある女だか分らないが、字より繪が巧くて、手紙はいつでも字と繪とで書かれてゐた。それに依ると、彼女は青島に着いて間もなく病氣になつたり、入院したり、をぢさんと喧嘩したり、母親も一所に行つてたものと見えて、をぢさんと母さんとが喧嘩して、母さんが怒つて一人で歸つてしまつたり、「わたし若しかしたら、をぢさんの家を出て、藝者になつてやらうか」と思つたりすることなどが傳へられた。

が、さういふ手紙に依つても、略々彼の女の動靜らしいものは察しられたが、彼女がどんな境遇にゐるものだかは少しも分らなかつた。青島へ何しに行つたのだか、どうしてをぢさんとそこへ行つたのだか、元々青島あたりまで身を落して行つたのだか、青島でをぢさんがどういふ會社に關係してゐるのだか。——そして、「彼女はそれ等の手紙の度に、男に戀を訴へて來た。彼に會つてゐた頃は、いつも間接にだつたが、離れて手紙をやりとりする頃には、字と繪とで、出來るだけの直接な表現をした。男のそれに對する返事が、いつも中途半端なものだつたので、終には、幾ら男の心がどつちを向いてゐようとも、彼女が彼を思ふ心はどうにもならないといふやうな文句まで書くやうになつた。その間がざつと一年ばかり、その一年ばかりの間は少しも熱度にむらがなくつゞいた。が、その後はつたり手紙が來なくなつた。たつた一度だけ、或日青島の本屋で、男の著した小説を見つけたので、買つて讀んだと知らして來たことがあつた。或男が或女に戀をしたが、女に他の男があつて、女が男の心に報いないのだが、男の戀はいつ迄も變らないといふやうな筋のものだ。女は手紙にその小說の男と女と入れかへたら、丁度「わたしとあなた」になる、「わたしの心はいつ迄も變らない、」と書いてあつた。三月も四月もたよりがなく絕えた後の手紙なので、男はそれを見た時、可成りの感激を覺えた。女が東京で會つてゐた頃に、座敷で會つてゐる間は、人々の手前剽輕な仕打ばかり装ひながら、內所で女

が朋華の家へ、男に宛てた手紙を毎日書いて持つて行つて、到頭一度も出さなかつたといふ話を聞いた時と、同じ位に感激した。が、その手紙を最後にして、一年近く、女の消息は絶えた。その頃、彼地で女に今の彼女の夫である男が現れたのだらうと思ふ。

それから二年近く經つて、大方男が女のことを思ひ出さなくなつた時分に、突然東京の住所になつてゐる女からの手紙が來た。手紙の言葉の調子は以前の通りで、一週間ほど前こちらに來た、もつとも青島からは一ケ月ほど前に神戸まで歸つて來て來てゐた、しばらく振りで會ひたい、いろ〱話があるから、この手紙が着き次第に、時日と場所とを知らしてくれといふのだつた。又、三年前の火が燃え出したかなといふ程の思ひで、男はこの時は先にいつたやうに、自分の家の外に、仕事をするための下宿屋の一室を借りてゐたので、そこを會ふ場所に定めて、早速女に返事を出した。

「やあ、どうしてたの。死んでたんぢやないのかい？　ひどいね、君の御無沙汰も、」と男は彼女と三年ぶりで會つた時にいつた。二人とも妙に極りが悪かつたので、長い間顔の見ないで話し合つた。彼等がわざと磊落に話し會ふ習慣は以前から多少はあつたが、この時からのが最も顯著になつた。

「あんたゞつてひどいわよ。わたしから出さなけや、一度だつて手紙をくれたことがないぢやないの？」

「それや僕の方には遠慮があるさ。君のやうな人のところへ、うつかり手紙を出したら差支へるやうなことが起るか分らないぢやないか。それに君なんか、どこに飛んでゐるか分らないしさ。」

「飛んでゐるはひどいのね、」と女は奇麗な齒を見せながらいつた。

その時分に、やつと男は茶を汲んで女に出しながら、ちらつと女と顔を見合はした。女の容色が衰へてゐないのに感心した。たゞ、風采はすつかり變つてゐた。髪を當世流の束髪に結つて、度の近い近眼鏡をかけてゐるのを見ると、昔

何とかいふ角力取と歩いてゐた女と同じ女であるとは、想像さへ出來なかつた。さういふと、東京で藝者をしてゐた頃は、可成り縹緻のいゝ女だつたのに、どこか不細工に見えたやうに思へたのは、この女が藝者の扮裝してゐたのが身についてゐなかつたのだと思へた。少し婚期を過ぎた、學問好きの令孃か、勝氣な、新らしい細君型に見えて、それがしつくりと似合つてゐた。そればかりでなく、彼地で何をしてゐたか分らぬが、今はよい人と結婚したか、結婚しない迄も餘程おさまつた生活をしてゐるなと男には思へた。が、女は手紙の前觸れにも拘らず、少しもこれといふ纏つた話はしなかつたから、相變らず彼女が青島でどんな生活をしてゐたか、「をぢさん」がどうして神戸に歸つて來て、彼女が彼と一所に歸つて來たか、そんな事に就いての詳しい樣子も少しも知られなかつた。男も强ひて聞かうとはしなかつた。

女が歸る時、男は送つて行つて、別れる時、

「ぢやァ、當分こつちにゐるんなら、又やつて來ないか?」といふと、

「明日、差支へない?」と女が聞くので、彼は內心驚いた。これぢや、三年前彼女が藝者町を出て、青島へ行く迄のその一週間程、友達の家で會つた時分と同じ調子だと思つた。が、押されて、

「あゝ、ゐるよ。」と答へると、

「ぢやァ、明日の十時頃に行くわ。」と女はいつて、或山手町の、中流の勤人の住んでゐるやうな家の門に入つて行つた。女の姓と同じ名が出てゐたから、彼女のいふ通り、彼女の兄の家であるに違ひなかつた。

その翌日、女は約束通りやつて來た。それから三四日か一週間おきかに二三度やつて來て、また暫く來なくなつた。三四度會つてゐるうちにも、どうして彼女が近いうちに神戸の「をぢさん」の家に歸らなければならないのか、そしてそこに二週間か三週間したら東京へ歸つて來るか、當分そんな風にして暮してゐるから、東京に來てゐる時は始終彼の

下宿へ遊びに來るといふやうな暇があるのか、彼女は少しも說明しなかつた。彼も聞き正さうともしなかつた。初めのうちが、以前の時と違つて、何しろ三年の年月の經過と共に、二人の感情が大分變つてゐたのは事實だつた。初めのうちこそ、女は男に對して果されなかつた戀の實を結びに來たのかと思はれたが、そんな風でもなかつた。男の方でもさうして會つて見ると、以前しそこなつた戀を燃やさうといふ氣になつた譯でもなく、樣子の變つた彼女を見直して、戀するやうになつたかといふと、さうでもなかつた。しかし、二人は會つてゐる間は、外のどんな異性の友達や兄妹の間柄でも眞似の出來ないやうな、快話な、遠慮のない調子で物がいへるだけでも愉快だつた。前には色氣があるのを、双方で隱すやうにして、わざと快話にしてゐたのが、今はそれが自然に出來るやうになつた。一度二人で、それも女のいひ出しべで、郊外の鑛泉旅館へ夕飯を食ひに行つたことがあつた。表へ二人で散歩に行つてる間に、さういふ旅館の習慣通り、歸つて來ると部屋の中に夫婦の床がこしらへてあつた。

「おゝ、やつてあるな、」と男が輕くいつた。

「さては、」と女は昔ながらの剽輕な表情をして、芝居の白のやうな言ひ方でいつた。「二人の仲を怪しいと見たね。」

そんなことをいひながら、二人でその蒲團の上に、掛蒲團をまくらないで、子供のやうに身體を投げ出して、腕角力をしたりして遊んだ。無論、無事に歸つた。

そのうち、彼女は東京より神戸へ行つてゐる時の方が多くなつた。そんな時、神戸から手紙をよこして、いつ頃東京に行くから、そしたら又お邪魔に上ると書いて來た。間違ふこともあるが、大抵その手紙の通り、女は相變らず男のところへ遊びに來た。それが、今いつたやうな譯で、二ケ月位間があつたり、どうかすると、三ケ月以上東京に姿を見せなかつたりするやうになつた。その頃に、初めて、女は今の夫になつた男のことを、彼に洩らしたのである。それも一

度にではなく、二三度に切れ切れに話したところに依ると、その男といふのは、靑島で彼女の「をぢさん」と同じ會社に勤めてゐるもので、「をぢさん」の家で彼女を見初めたといふのである。もつとも、彼女のいひ方が、嘘をつくつもりでなくても曖昧だつたり、彼の聞き方が熱心でなかつたり、時々彼女がその場切りの嘘を混ぜたりするので、よくは分らないのだが、彼女は三年間の靑島の滯在中に、少なくとも半年か一年やはり藝者に出てゐたことがあるらしいのだ。「をぢさん」と喧嘩したから、いつそのこと、家を飛び出して、藝者に出てやらうかと思つてるなどといふ手紙を彼によこした時分に、本當にそれを實行したらしいのだ。

一番間違ひの少ない想像をすると、彼女の「をぢさん」は東京で藝者してゐた彼女を、逃亡さしておいて、所謂親元身受といふ方法で彼女を身受したのではないかと思はれる。そして、自分の勤め先である靑島へ連れて行つて、そこで自分の娘として彼女を相當の者に緣づけようと考へたらしいのだ。彼女が彼のところへ靑島から一年近い間、始終手紙をよこした頃は、「そのをぢさん」の家にゐた間のことだつた。それからぱつたり手紙をよこさなくなつたのは、彼女がそこで又藝者になつてからではないかと思はれる。そして、彼女は今の夫である男に、「をぢさん」の家で會つたといふのは嘘で、藝者として會つたのだらうと思はれる。そして、その男はすぐに彼女の「をぢさん」に談判をして、彼女の身受けをして、彼女を「をぢさん」の家に預けたといふやうなことが考へられるのである。

けれども又、彼女は彼にその男の話をした時に、

「えゝ、それや結婚してもいゝんですけど、妙に疑り深いのが厭なの。今は私とつまり交際をして、私を見てゐるといふ譯なの。えゝ、神戸にゐるの。それで、土曜から日曜にかけて、『をぢさん』の家へやつて來て、その時は一所によく諏訪山とか布引とかへ散步をするんだけど、時々妙なことをいふの。誰かに聞いて來るのね、あなたは以前派手な

世界にゐたでせう、なんて、そんな言ひ方で、遠廻しに聞くの？」

「派手な世界つて、藝者をしてゐたことをいふの？」

「さうよ、そんなことといつたつて仕樣がないぢやないの。それを取消せといつたつて、それぢや生れ變つて來るより仕樣がないぢやないの、ね？」

「だつて、君は彼地で半年位は出てたことがあるんぢやないの？」と男はちよつと探りを入れて見た。

「えゝ。いえ、彼地のことぢやないの、東京のことをいふのよ。東京でも出てたゞらうつて、誰からか、友達か何かで知つてる人があつて、聞いて來ると見えるんだわ。」

「それで藝者をしてたから結婚しないといふのかい？」

「さあ、しないならしないときつぱり斷つてくれるといゝんだけど、それで斷りもしないの。」

「よつ程君に惚れてるんだね。」

「さうらしいの。」

大阪の町角で　女がその求婚者と歩いてゐるのを　彼が見たのは丁度その頃のことだつた。その樣子を見た時、これは女が話してゐるよりは、餘程交渉が進んでゐるに違ひないと彼は思つた。といつて、それも男の友達に結婚談が持ち上つてゐる程にも、彼には氣にかゝることではなかつた。唯、その頃から、段々女のやつて來る度數が少なくなつて、それから半年程後に會つた時、女から到頭例の男と結婚することになつたと聞いた。が、結婚してからも交際しようとか、結婚したら交際を遠慮しようといふやうな話は無論出なかつた。何でも夏前のことで、彼女の夫になる人の故郷は中州なので、そこで結婚式をして、それから夏の間信州邊の温泉廻りで暮して、秋には又青島へ行くことになつてゐ

旅行から歸つて靑島へ行く迄に東京にしばらくゐるから、その時に又遊びに來るといつて、女は歸つて行つた。

ところが、秋も餘程經つてから、女は或日靑島から手紙をよこした。もう此頃は、以前の靑島時代のやうに綺の入つた手紙でなく、普通の文字ばかりのもので、それも結婚前後からの手紙は、時間がないと見えて、忙しい走り書きのものが多かつた。その手紙もさういふ走り書きのものであつたが、切手を二枚貼つた長文のもので、いきなり「わたしはあの時ほどがつかりした思ひをしたことがありません」と始められてあつた。「初はがつかりして、それから腹が立つて、それから悔やしいやら、悲しいやらで、もうあなたとはこれ切りの緣かとあきらめました、」とつゞいてゐた。「そしてからいつたら、もうあなたの胸にすつかり響くでせう、」とあつたが、男には次を讀むまで、それが何のことだか分らなかつた。

が、讀んで驚いたことには、丁度その夏、男は自分の情人の女と一所に、信州邊の溫泉廻りの旅をしたことがあつたのだが、その時或溫泉場で、彼女が新婚の夫と矢張り同じ溫泉場に來てゐて、彼等を見たといふのである。「わたしも男と一所でしたが、しかし、あなたがあんな陋におけない人だとは思ひませんでした、」と彼女は我儘な憤慨を洩らしてゐた。もつとも、彼女の憤慨に一つだけ無理のないことは、男が一所に連れてゐた女といふのが、彼女が東京にゐた頃、同じ土地に藝者をしてゐた、彼女も顏馴染の女だつたことである。が、その手紙を讀んで、その溫泉場にゐた間の、どういふ場合を想像しても、彼女がどこで自分たちの姿を見かけたのだらうと、男には當りがつかなかつた。しかし、女の手紙の終りの方に、前の恨みの文句はけろりと忘れたやうに、一ケ月ばかりしたら東京に歸るから、その時は是非お尋ねする、と結んであつた。

しかし、これも少し前に、彼が例の大阪の町角で、女が男と步いてゐるのを見た時と同じ程の出來事としての影響しか與へなかつた。女は約束通り一ケ月程後に、靑島から歸つたといつて男を尋ねて來た。

「よく青島へ出かけるね、」と男はそんな風に口をきつた。

「えゝ、今年はこれで終ひ。だけど、來年は又早々行かなければならないわ、」と女もいつもと同じ蟠りのない調子でいつた。「わたしだけ東京に家でも借りておいといてくれるといゝんだけど、煮え切らない人でね。」

「心配なんだらう?」

「さうなの。それで、一寸一週間ばかり自分の用事で彼地へ行く時だつて、やれ別府で溫泉に入つて待つてゝくれだの、神戸か須磨で待つてゝ、下の關まで迎へに來てくれなんていふんですもの、やり切れないわ。」

大阪の町角で見た時から、殊に結婚の白狀をした時から、一層女はこんな風に、彼の前で夫の話を樂にするやうになつた。この折だと思つたので、男は

「ところで、信州は驚いたね。ちつともこつちは氣がつかなかつたが、どこで見たんだい?」

「あら、いやだ。知るも知らないも、同じ乘合の中に乘つてたんぢやないの?」

「えゝ?」

「さうよ、××から停車場へ行く乘合自動車で、滿員だつたもんだから、あんたとあの人と乘つて來て、別々のとこへ割込んで腰かけたぢやないの。おまけにあんたはわたしの眞ん前によ。そして知らん顏をしてるのよ、五十分の間。わたし一寸お辭儀をしたのに、それでも知らん顏してるからさ、極りは惡いし、ハズはわたしとあんたとが知つてることを知つてるでせう。だから、變に思つてたらしいわ。」

「それや驚いた、」と男もいつた。「あそこで乘合自動車に乘つたことは覺えてゐるが、君の向ひに腰かけたことなどは全く知らなかつたね。どんな人が乘つてゐたかさへまるで覺えてゐない。後から、而も女連れで大勢の客のゐる中へ乘り込

んだものだから、何だか極りが悪くて、誰の顔も見ないで、僕は始終窓の外ばかり見てゐたからだらう。」
「さうよ。窓の外ばかり見てゐたわ。だけど、わたしがゐたのに氣がつかなかつたなんて、ないわ。」
「いや、本當に知らなかつたよ。しかし知らなかつた方がよかつたね。知つたらまごついたよ。」
「まア、しかしそんなことどうでもいゝわ。」
「さうだ、どうでもいゝよ。」と男はいつた。「ところで、君の方はどうだ、圓滿かい？」
「あんまり圓滿でもないわ。燒餅やきで困るのよ。」
「まあ、燒餅をやく御亭主の方が無難でいゝぢやないか？」
「それが無難過ぎるのよ。」

此頃になつて、やつと彼女の夫の職業に就いても彼は大略知ることが出來た。多分彼女の「をぢさん」といふ人と、彼女の夫とが同じ會社に勤めてゐることは事實らしかつたが、彼女の夫の方が年若ながら、よい役をしてゐるのではないかと思はれた。會社といふのは、鹽とか、煙草とかを扱ふものらしかつた。だから、彼女の夫は月給よりも、それ等の商品の思惑の賣買で、相當の收入があるらしかつた。

「神戸によく行くのは、それぢやハズの會社の支店が神戸にあるのかい？」と聞くと、
「さうなの。だから、神戸へ歸つてゐる間はあつちへ行つてなければならないの。それや退屈だわ。此頃は「をぢさん」の家でなく、宿屋住居でせう。だから、あの人が朝出て、夕方歸つて來る迄の間は退屈で仕樣がないの。それで、宿を大阪にとつて、あの人は電車で毎日神戸へ通つてるの。わたしは退屈だからお晝の御飯はいつも三越とか高島屋とかへ散歩に行つて食べて來るの。あんたが大阪にこんな風にしてゐるんだつたら、其の間毎日邪魔に來るわ。」

「あぶない、あぶない、」と男はわざと茶化すやうにいつて、「相變らず君は呑氣だね。『惡童よ』ぢやない、女だから、『惡童女よ』だね。相變らずバッドボーイ、ぢやない、バッドガールだね。」

「さうさう、」と女はその時突然手を打つて何か思ひ出したやうに、「あれを今でも持つてるわよ。すつかり忘れてたらね、此間行李に入つてゐる荷物を整理してたら出て來たの、あのバッドボーイが。そら、あんたが書いてくれたのさ、青島へ行く時……」

といふのは、この女が五年前、愈々青島へ行くことになつた時、或日書箋紙のやうなものを持つて來て、男に何か記念に書いてほしいといつたことがあつた。彼はそんなものを書いた經驗がないし、小說家でありながら、歌や俳句の心得もなかつたし、それに惡筆でもあつたので、困つてゐると、

「何でもいゝから書いてよ、」と女はどうしても聞き入れさうにないので、その時ふと思ひついて、

「よし、何でもよければ、僕は日本字は下手だから、一つ英語で書いてやらう。」

かういつて、「Bad boy, bad boy, come down from tree.」と子供の時分に習つた英語讀本の文句の中で、妙なことから覺えてゐる一句を、出された紙に書いた。ところが、それが餘り上の方に片寄つてしまつて、下の方が空いたので持て餘してゐると、女が傍から、

「英語だけぢや分らないから、その下の方に日本語で譯を書いといて下さいよ、」といつた。

「しまつた、君は女の子だから、bad girl にしたらよかつたね。まアいゝや、男の子見たいな人だから、いゝや、」といひながらその下に、「惡童よ、惡童よ、木から下りて來い」とその下に日本字で附け足した。

女は、さうだその時から近眼だつたのだ、目を紙の面に近づけて、その文句を讀みながら、

「なアに、これは?」と頓狂な聲で尋ねた。

「これか……」と彼はその時は唯ふと思ひ出した、昔習つた英語讀本の文句を書いただけのつもりだつたのだが、考へて見ると、この女にも自分にも打つてつけの文句だつたと氣がついた。しかし何氣なささうに、「なアに、何でもないよ。これはナショナル・リイダーの一の卷といつて、英語の尋常一年生の本の中にある文句なんだよ。いたづらな子供が、高い木の枝に上つてゐるのを、下から賢い子供が誡めてゐる言葉なんだ。」

が、男はその時、次のやうなことを思ひ出さなかつた。それは彼が初めてこの言葉を習つた時分のことだ。彼は大阪の生れで、少年の頃をそこで過ごした。丁度尋常科から高等科へ行つて間もなくの頃、同じ大阪のうちで一家が山手町から下町の、而も色町と呼ばれる區域に引越したのだつた。これ迄ゐた官吏と軍人の多い山手町と違つて、引越した先の町は、その町の外觀といひ、そこに住んでゐる人たちといひ、まるで別の世界へ來たかと思はれる程違つてゐた。十歲でしかなかつた少年の目には、それが殊更に不思議に思はれた。表通りにしても、これ迄ゐた屋敷町とは違つて、煙草屋とか、小間物屋とか、湯屋とか、宿屋とかいふ商賣屋が軒並にならんでゐた。が、もつと變つてゐるのは、彼の家もそれ等の一軒であるところの、十軒なり、八軒なり兩側に規則正しく並んでゐる格子造りの路地の家々の住人だつた。それ等は彼の家を除くと、役者とか、幇間とか、藝者とか、博奕打とか、旦那持とか、ことごとくそんな風な變り種の人たちばかりだつた。彼は少年の特權で、どこの家にも大抵一人位子供友達がゐたので、それ等の家を片つ端から覗いたり、入つて行つたりすることが出來た。彼は自分の家のある路地の十軒だけでなく、表通へ出て五六軒行つたところの先にある、彼の路次に並行した別の路地の家々の方へも遠征して行つた。そこは六軒路地だつた。無論、その路地の家々にも同じ年頃の子供が大抵はゐたのである。

その六軒路地の一軒に、一番子供たちの集りいゝ家があつた。そこの家には、子供としては「せアちやん」と呼ばれ

る女の子しかゐなかつたが、無論男女の區別はなかつた。男の子でも、女の子でも、その家を最も多く遊び場にした。多分藝者の家形であつたと思ふが、いつも無人で、子供に禁物な恐いおぢさんや、口喧ましい年寄などがゐなかつた。それに、路地の中の家は殆ど相似形の建物なので、自分の家で遊ぶ程勝手が分つてゐた。晝間行くと、三間程ある階下の部屋には、奥の間の隅で、飯たき婆のやうなのが一人ゐる切りで、誰も叱るものがなかつたが、どうかすると、稀に二階から「ヤアちやん」が姉さんと呼んでゐる若い藝者が下りて來て、

「まア、相變らず大勢やこと！　こない大勢の子がどこから寄つて來るねやろ？」と彼女は階下の部屋に用事があつて下りて來たらしいのだが、それをあきらめて、梯子段の入口の間から、いつもこめかみに頭痛膏を貼つてゐる顔だけをのぞかしながら、子供等に向つていふのだつた。「みんなこない家の中ばつかりで喧ましい言はんと、表で遊びなはれえな。うちのやあちやん、どこへ行つたんやな？」

が、子供たちは誰もこの若い藝者を恐れなかつた。彼女の方でも大抵の場合はさういつた切りで、すぐにぴしやりと唐紙を締めて、二階へ引返してしまふのが常だつた。唯五度に一度ぐらゐの割合で、子供たちがいふことを聞かないと、二尺さしを持つて來て、目をつるし上げながら、甲高い聲で子供たちを追ひ散らすことがあつた。「氣ちがひ、氣ちがひ！」と叫んで子供たちは、その時だけは雀のやうに散つて、又すぐに集まるのだつた。

が、この若い藝者のゐる二階に、彼女が二尺さしを振り廻さない時は、大抵役者の團子が來てゐるのだといふことを、それ等の十歳前後の子供たちは皆知つてゐた。役者といつても十七八歳の男だつた。それに、役者は役者だが、道頓堀の芝居に出るのではなく、千日前の團十郎一派の二輪加の役者だといふことまで、子供たちは知つてゐた。現に彼の家のある路地の方には、團十郎一派の人氣役者で、「すき鍋」といふ父の名ある團九郎が住んでゐた。團子といふのは二

の團九郎の弟子だといふことも、子供たちは知つてゐた。そして、同じ役者でも、二輪加役者であるのと、生白い顔をしてゐて、年が若いのとで、子供たちは彼を輕蔑してゐた。その團子が「やあちやん」の姉の藝者に惚れてゐたといふことも、それ等の色町の子供たちは知つてゐた。もつとも、惚れるといふことはどんなことだか、さすがにそれに就いて確なことは知つてゐるものは少なかつた。

彼は音無しいのか、内氣なのか、氣むづかしいのか、熟せてゐたからか分らなかつたが、決して子供たちにからかふやうなことはなかつた。彼はこの家へ來る時、階下の間の上り口の邊に子供たちがゐても、何も聲をかけないで、子供たちの間を通り抜けて、二階へさつさと上つて行つた。そのまゝ中々下りて來なかつた。

或時、子供達二三人で相談して、一度二階の樣子をのぞいて見ようといふことになつた。何でもその時は、今日はまだ役者は來てゐないといふ説だつた。幾ら輕蔑してゐても、女の藝者よりも、男の團子の方が子供たちには氣味が惡かつたのだ。よし、そんなら、そつと探檢して見ようといふことになつて、一番年長だつた彼が、先づ二階の樣子を斥候に行くことになつて、中の間の左手の二階へ通じる唐紙をそつと開けた。藝者が多分一人で晝寢してゐるだらう、あいつは始終頭痛膏を貼つてゐる位だから、よく寢てよる、といふ子供等の推測で、彼は足音を忍ばして、選ばれた英雄のやうな氣持で、一段一段と上つて行つた。二階の部屋はどんな風になつてゐるのだらう、その部屋のどの邊であの鼻の低い藝妓の娘が晝寢してゐるのだらうと思ひながら、彼はやつと階段の頂上の三つばかり手前に着いた。そこ迄行くと、辛うじて月だけが二階の一部をのぞくことが出來るのだつた。上り口の右側には半間ほどの手摺がついてゐるので、その手摺の下の棧の間からそつと覗いて見ると、上つたところの部屋とその奥の部屋との境の敷居のところに、夏のことだから唐紙がはづしてあるので、角の柱にもたれて、案外にも藝妓の娘が斜め向う向きに坐つてゐるのが見えた。「おや、起

きてゐるな、」と子供の彼は一寸不安に思つたが、勇氣を出して、いつの間にかもう一段上つたところで、はつとした。向う向きの娘はどうやら泣いてゐるやうな風だつた。そして、その娘の膝を枕にして、役者の團子が、眞直に天井の方を見ながら、生意氣に（と子供心に思つた）卷煙草をくわえてゐるのだつた。寢そべつてゐるので、團子の身體はもう一つ下の段の時には見えなかつたのだが、彼の方は天井に向つて眞上を見てゐたので、突然梯子段の入口にのぞいた子供の顏がちらと目に映つたらしかつた。ふと、此方を見て少年の彼を見ると、彼よりも驚いたらしく、

「こら！」とあわてた聲で叫んで立上つた。

彼も驚いた。恐らく團子の聲といふものをこの時初めて聞いたのだつた。その上、彼も亦二十歳に近い青年らしい勇氣があるのを初めて知つた。そこで、彼は夢中で梯子段を驅け下りて、階下に待つてゐた子供友達と一とかたまりになつて、表へ飛び出した。實際、彼の後から梯子段を大きな音を立てゝつゞいて來る足音が聞えた。「子供や思うてだまつてると、つけ上りやがつて……」といふやうな聲も聞えたやうに思つた。

が、團子は表までは追つて來なかつた。しかし、驚いた彼等子供たちは一ぺんに路地の外まで逃げ出して、やつと息を切らしながら立止まつた。彼は友達の子供たちに今見たことを報告した。その報告を聞き終ると、子供たちの群で、無意味に「萬ざーい」と叫んだので、彼も元氣を回復して、まだ息切れのする聲で「萬歳」と合はした。

この萬歳で氣を直して、彼等は冒險心を滿足させる爲に、もう一度あの家の前まで行つて見ようといふことに決めた。そして、今度はあの役者が出て來たら、何かいつてからかつてやらう、何といつてからかつてやらうと首を傾けた。その時、彼は早速、その二三日前學校（高等一年生だつた）で習つたばかりの「Bad boy, bad boy」といふ英語を思ひ出したのである。あそこの所を先生から暗誦するようにさらへて來いといはれてある部分だ。

「え〻事がある。英語で惡口いふたろ、」と彼はその思ひつきに自分で滿足しながら、「あんな役者屹度英語なんて知りよれへんさかい、口惜しがりよるやろ。え〻か、みんな覺えろ、バッドボーイ、バッドボーイといふんや。阿呆め、阿呆めといふことや。」

「おもろい、おもろい！」と他の尋常四年や三年の子供たちは贊成した。「バットボーイ、バットボーイ！」

「バッドが本當やが、いひにくかつたらそれでえゝ。その次にカム・ダウン・フロム・ツリイといふのがあるんやが、むつかしいか。いへるやろ。これは「木から下りて來い」といふこつちやさかい、木やないけど、二階も木見たいなもんや、丁度えゝねやがな、」と彼はいつた。

「カン！ダン！タロ、やないフロ！」と子供たちは口々にいつたが、まち〳〵で、うまく行きさうになかつたので、それは止めることにした。

そして、彼等は口々に「バットボーイ」だけをくり返した。「しッ、しッ！」とそれを小さな聲で練習するやうに彼はたしなめながら拔足で元の路地の中へ入つて行つた。が、目指す家の眞ん前まではさすがに行けなかつた。それでも言ひ出しべの彼は、一番前に出て、その家の半間程手前のところに立ち止まると、「一二三」の合圖で、「バットボーイ、バットボーイ！」と威勢よく五六度まで合唱して、後は「バットボーイ、團子」とか「二輪加のバットボーイ」とか、まち〳〵なことをいつて、大急ぎで又路地の入口まで駈け戻つて來た。——

彼女にこの文句を書いてやつた時、彼はその文句の出てゐるナショナル・リーダーの挿畫に、惡童が木の枝に上つて下を見下ろしてゐると、賢い子供たちが下から手を上げて、「下りて來い」といつてゐる、子供の目には如何にもエキゾテイツクに見えたその繪を思ひ出しただけで、その時覺えた文句を早速二輪加役者の團子に向つて應用したことには少しも思

ひ出さなかつた。

ところが、今から十年ばかり前、彼が大學を出たばかりの時で、勤めもせず、といつてこれといふ勉強もしないでごろ〳〵遊んでゐた頃、彼の矢張り同じやうな怠け友達が、その頃無暗にはやり出した素人劇團をこしらへたことがあつた。退屈してゐた彼は始終その劇團の稽古場や事務所へ遊びに行くうちに、何人かの素人俳優と知合ひになつた。間もなくその友人の劇團は一回か二回劇場を借りて飜譯劇を公演した切りで、つぶれてしまつたが、その時知り合つた俳優の一人で、彼と同じ大阪の出だつたので多少親しくしてゐた者が、或日淺草の活動寫眞街を歩いてゐると、とある一軒の劇場で、大きな別看板の俳優になつてゐるのを發見した。それは有名な不二の家の喜劇の一座なのである。彼はふら〳〵とその男に會つて見る氣になつて、樂屋を訪問した。その時、不二の家十三郎といふ俳優に、

「この人も大阪の人です」といつて紹介されたことがあつた。が、十分程しか一所に話をしなかつたので、彼はその不二の家十三郎の印象を持つ暇がなかつた。が、劇場を出てから、も一度看板を見直した時だつたか、それともずつと後にだつたか、十三郎といふ俳優はその座で可成りいゝ位置にゐるばかりでなく、不二の家一派でも相當の俳優であることを知つた。ところが、それから二年程後、彼は例の友人の俳優と、ひよつくり町で會つた時、聞くと、その友人はもうあの劇場を止めて、當時は或活動會社の專屬になつてゐるといつた。二人で近くのカフエーに入つて、そんな話をしてゐた時、ふとかの不二の家十三郎の噂が出て、その友人がいふには、

「あいつは藝はちよつと踏めるが、何しろ元が二輪加役者やからな。知つてるでせう。君も大阪やから、あの千日前にあつた團十郎一派の二輪加を？　あいつはあそこにゐよつたんだからな。」

「へえ……」と彼は好奇心を動かしながらいつた。「『すき鍋』といふ役者がゐたところだらう、僕は子供の時分、あの『す

き鍋」の團九郎といふ役者と一軒おいて隣に住んでゐたことがある。」

「その「すき鍋」の弟子だつたんだよ、あの十三郎といふやつは、」と相手は膝を乘り出していつた。

「「すき鍋」の弟子？」と彼の方でも膝を乘り出して、「團子といふんぢやないか？」

「團子、團子、その團子や、あいつが。よう知つてるな、」と相手は叫んだ。

「團子なら、僕、子供の時分知つてたよ、厭な奴だつた。あれが團子か。」

「あいつが仕樣のない奴でね、」と友人の俳優は憎らしさうに、「女にかけるとむごいことをしよるんだ。あいつの爲に死にかゝつた女が何人あるか分らん位や。それで、あいつのはたゞの金取り主義で、あいつが惚れたといふことは一ぺんもないんやから驚くよ。」

その時、彼はこの「バッドボーイ」の話を思ひ出して、友人の役者に話したことがある。友人の俳優はそれを聞くと、

「そやそや、そんな奴や、子供の時分からそんな奴やつたに違ひない、」と相手は會心らしい笑を洩らしていつた。――

それ切り、彼はその後しばらく不二の家十三郎の噂を聞くことはないし、又別に興味を持つてゐる譯でもないので、全然知らぬ人として過ごして來たのであるが、一年ばかり前ふとNといふ下町の待合で、久しぶりで十三郎の噂を聞いたことがあつた。それは彼の馴染の待合のすぐ向ひの待合のお上――といつても二十歳餘りの藝者上りの女だつたが、それが十三郎にすつかり入れ上げて、今では十三郎がその家に入りびたつてゐるばかりでなく、彼の番頭や弟子たちまでが入り込んでごろごろして食ひつぶしてゐる。それだけならいゝが、十三郎が來ると、彼自身が客になつて、大勢の藝者を上げて散財するので、その家では今では家も何も抵當へ入れてしまつて、借金で首が廻らない、今に破産するだ

らう、とかういふ話なのである。夏のことで、彼が十三郎の噂を餘り熱心に耳傾けるので、女中が「今もあの騒いでゐるのは屹度あの人のお座敷です、この頃は毎日ですから」といひながら、向うの座敷の見える方へ立つて行つた。「御覽、こゝからだと、向うから見られずに見えますから。」

彼が女中の後について行つて、こちらの灯のない座敷から向うの家の座敷を見ると、四五人の藝者に、半玉を二人ばかり入れて、客は二三人ゐる模樣だつた。

「どれ？　どれが十三郎だい？」と聞くと、

「こゝからは……」と、女中は手摺の上に腹をのせるやうにして、左手で柱を掴みながら、向うの座敷の床の間の方をのぞき込むやうにした。そして元に戻つて、「のぞいて御覽」といふので、彼がその通りにすると、そこに二十五年振りに見るたしかに團子がゐるのだつた。といふのは、この前友人の俳優に十三郎として紹介された時には、彼は相手の名前に馴染がなかつたし、そんなに名のある俳優とも思はなかつたので、殆ど注意しなかつたと見えて、彼は今こそ久しぶりで團子を見るやうな氣がしたのだ。前に見た時には、團子の面影が殘つてゐなかつたのか、それともそれに氣がつかなかつたのか、それは分らない。

團子の十三郎は挾息を左腕にかゝえるにやうにして、横に長く足を延ばしてゐた。時々他の人々の笑つたり騒いだりするのに、答へ返したり笑ひ返したりしてゐるらしいのだが、表情が微弱な爲か、光線の具合かでよく見えなかつた。そして、初めちらと見た時は團子だつたが、さうして目を凝らして見てゐると、年はとつてゐるし、本當の年より變に老けて見える上に、その顏色の青黑さと、どうかすると何本か額に深く刻まれる皺と、頂邊の禿げ上つた頭とか、ひどく慘めに、寂しげに見えた。座敷の中の外の男たちは、女中の說明を待つ迄もなく、彼の番頭とか弟子分に當るものらしか

つた。彼が横そべつた姿で、ひどく悠然と大盡のやうな恰好をしてゐるのが、見てゐる者に多少反感を抱かせたが、彼は何か寂しい、醜いものを見たやうな氣がした。

その後も二三度、同じ待合の二階から、向ひ座敷にゐる十三郎を見たことがあつたが、それは大抵友人筋か客筋かの人を招待した座敷らしく、別に特徴のある印象は殘らなかつた。間もなく、その待合は果して賣物に出て、噂では、十三郎はその待合のお上よりもつと古い關係である、A町で矢張り待合を開いてゐる女の家へ戻つて行つたといふことだつた。――

が、彼はさういふ彼の知つてゐる不二の家十三郎の話をする暇がなかつたといふのは、連れの女は相變らず雜沓の往來を、時々縞飛びをしてゐる子供の爲に道を隔てられたり、自動車に邪魔されたりしながら、

「わたしが十三郎を知つたのは、十四だつたか」と一寸首をひねつて、「十五ぢやない、たしか十四の時だわ、甲府でおしやくをしてた時だから……」と、男から十三郎の話を聞かうとしたことを忘れてしまつて、自分の話を話し出した。

「え、甲府で？」と男は聞き返した。先にもいつた通り、彼は彼女との長い交際にも拘らず、彼女が誰の子で、どこで生れたかも聞いたことがなかつた。唯、五年前初めて會つた時彼女は下町のSといふところから、山手町の彼等が知つた町へ住み變へて來たといふことと、そのSにさへ彼女は二ケ月位しかゐなかつたといふことだけで、その以前のことは少しも知らなかつたが、今は女もう大のあることとさへ知られてゐる男のことであるし、話の調子に乘ると、幾らでも口のすべる質だつたから、一寸はつとしたらしかつたが、すぐ話しつゞけた。

「えゝ、甲府に、今東京にゐるをばあさんがゐたの。甲府にゐたのは二年近くだけど、おしやくしてたのは二ケ月位だつたわ。その時ね、甲府に不二の家が來たの、不二の家一郎が未だ生きてゐた時分よ。その時、あの人――十三郎が道成寺の芝居で、こんな小つちやな、可愛らしい小坊さんになつて出たのを見て、わたし吃驚したのよ」

「おかしいね。君の十四の時だつて、十三郎はそんな子供ぢやない筈だよ、」と男が疑問を挾むと、

「さうよ、」と女は引取つて、「わたし、その翌晩だつたか、お座敷で素顔を見てびつくりしたわ、もういゝ加減お爺さんなんだもの。」

「お爺さんでもないだらう。」

「それが、こつちが子供でせう、それにあの人、その時分から頭のまん中が禿げてたでせう、だから、馬鹿にお爺さんに見えたのよ。」

「それでも惚れたのかい？」

「いゝえ、その時はそれ切りだつたの。そしたら、」と女は胸の中で指を繰るらしく、「それから東京へ歸つて、Yでおしやくに出て、……さう、その翌々年だわ、Sで未だ矢張りおしやくの時分よ、偶然あの人に呼ばれたの。いや、あの人のお客、といふより旦那だわね、Fといふ實業家があるでせう、その人にあの人が連れられて來て、その人が毎晩ほど來たもんだから、わたしも毎晩呼ばれて、……つまり、わたしあの人に買はれた譯ね、つまりあの人があの人の旦那のFといふ人に、わたしを買つてもらつたのよ。」

「君もやつぱり好きだつたのか？」

「えゝ、さうかも知れないわ。しかしわたしよりあの人がわたしを好き、といふより何だか子供のやうに可愛がつてくれたわ。實際わたしまだ子供見たいな氣だつたんですもの。……あんまり子供でもなかつたかな？」

「無論さうだらう、」と男は少し岡燒的な氣持になつて、半疊を入れた。

「もう止すわ……」

「止さなくつてもいゝよ。」と男はいつて、丁度電車通の四角に來てゐたので、「タクシイを止めよう。まだ時間はいゝんだらう。飯を食つて別れよう。」
「えゝ。それやわたしも嫌ひぢやなかつたけど、向うのわたしを好きつたら大變なの。――止すわ、止すわ、こんな話……」
「いゝよ、聞いてるよ。」
「そしてね、どうしてもわたしをお上さんにしたいといふの。うちのをばさんや母さんにも會つたのよ。母さんも大方承知してたの。それが、矢張りいろんな都合でね。それから、一本になつてから、あそこへ行つたでせう、あんたに會つたところさ。」
「あの時分角力取に騒いでたぢやないか？」とそこで男は思ひ切つていふと、
「あれはたゞの浮氣よ。」と女は事もなげにいつてのけた。
その時分に二人は自動車に乘つた。
「だつて、十三郎には女が何人もあるよ。」と男が多少厭がらせのつもりでいふと、
「それは役者だからさ。」と女はいつた。「だけど、あの人は今でも定つたお上さんはないのよ。」
「あの僕が知つてゐる待合の向ひに、女があつて始終そこを家見たいにしてたことがあるよ。」
「知つてゐるわよ。今はYの女の家にゐるのも知つてゐるわよ。わたしが青島にゐる時分に、Nに待合をする氣なら、いつでもさしてやるから歸つて來いといつて來たことがあるんですもの。そして、いつでもわたしが歸つて行くといつたら、吃度わたしをお上さんにするといつて待つてゐるのよ。」
「驚いたね。」
やがて、自動車を止めて、男は行きつけのレストランに女を連れて入つた。男はこの同じレストランに以前から時々二三人の他の女たちと來ることがあつた。が、この前初めてこの女と一所に來た後で、或時一人で食事に行つた時、ここにゐる女給たちが代り代り彼のそばに來て、これ迄彼が幾度も連れて行つた女たちを無視したやうに、「あの方がもな

たの本當の奥さんなんでせう。逢ふわ。奇麗な方ですわね。そして、本當によくお似合ですわ。」といはれたことを思ひ出した。そして、今では俺の方がこの女に惚れてはしないかな、と一寸思つた。

「いつか一度來たことがあつたね？」

「えゝ」と女は答へて、席につくと、先のつゞきをつゞけた。「わたし、それにSの時代でも、それからあそこにゐる時にも、青島にゐた時分にちよつと困つたことがあつたの。その時もあの人に無心をいつてやると、吃度都合して送つてくれたわ。あの人にだけは本當に世話になつたわ。」

「ぢやア、君が結婚したりしたことを聞いたら怒るだらう？」

「それは、結婚といはずに、譯があつてかういふ人の世話になつてゐる、といつてあるの。」

「ぢやア、時々今でも會ふのかい？」

「彼地から歸つて來てから一度切り、」と彼女は答へた。「今の人がむつかしいから、どうしても身體が自由にならないといつてあるの。そしたら、ぢやあ、いつ迄もお前の好きなようにして、俺のところへ來たくなつたら、いつでも歸つてお出で。俺はいつ迄も待つてゐるから。それで、若し俺に萬一のことがあつたら、その時だけどこからでも來て、俺の骨だけはお前が拾つてくれ、とかういふのよ。」

「ふーむ。」男はいつの間にか彼女の話に感心して聞き入つてしまつた。そして、彼自身の知つてゐる同じ不二の家十三郎の話をしそびれてしまつた。又、することは入らないとも考へた。女の方でも彼が不二の家を知つてゐるといつたことを忘れたやうに、聞かうとはしなかつた。そしていつた。

「どう、感心したでせう？」

「うむ、感心した。それで、どうなんだ、君は十三郎を？」

「わたしの方は何でもないわ、」と女は答へた。

「相變らず惡童だな！」と男はいふ言葉がないので、かういつた。

「あんただつて惡童ぢやないか？」と女はいつた。

定價	送料
一册八十錢	參錢
六册四圓八十錢	送料共
十二册九圓六十錢	同

毎月一回一日發行

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます
△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます
△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事
△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料
△御照會次第詳細御回答申上ます

大正十五年五月二十日印刷
大正十五年六月一日發行

編輯兼發行人　高野敬錄
印刷人　高木鳥三
印刷所　株式會社秀英舍　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話牛込五〇八九番
振替東京三四番
同　長野三二〇五番



滋強飲料
カルピス
アナタモ孫ト競争シテオノミナサイ
コノ子ニカルピスヲノマセナハルヨッテ急ニ大キウナッテワシニハヨウオブエマヘン
一平案
酒店・食料品店・薬店にあり

GHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.